レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

③

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

No. 5
1971. 1. 20
大月書店

レーニン10巻選集

第三巻（第五回配本）について

藤本正利

一

この三巻に収録されている論文は、一九〇五年一月三日、ペテルブルグ最大のプチロフ工場の労働者のストライキが他の工場に波及し、一月八日のゼネスト・一月九日の血の日曜日という歴史的な闘争から始まる帝国主義時代初の革命・第一次ロシア革命（一九〇五―一九〇七年）のきびしい革命闘争の嵐のなかでのレーニンの著作です。この時代がどんな時代であったか？　レーニンは次のように特徴づけています。

「革命の時代（一九〇五―一九〇七年）。すべての階級が公然と登場する。すべての綱領上・戦術上の見解が、大衆の行動によって点検される。ストライキ闘争は、世界にかつてなかったほど広範で、激しいものとなる。経済的ストライキは発展して政治ストライキとなり、政治的ストライキは発展して蜂起となる。指導するプロレタリアートと、指導される、動揺し、ぐらついている農民との相互関係が実践によって点検される。闘争の自然発生的な発展のうちにソヴェトという組織形態が生まれる。ソヴェトの意義についての当時の論争は、一九一七―一九二〇年の偉大な闘争のさきがけをなしている。議会的闘争形態と議会的でない闘争形態との交替、議会活動をボイコットする戦術と議会活動に参加する戦術との交替、合法的な闘争形態と非合法的な闘争形態との交替ならびに両者の相互関係と関連――これらはすべて、その内容が驚くべく豊かなことを特色としている。政治科学の基礎を、大衆にも、指導者にも、階級にも、党にも、教えこんだという点で、この時期のひと月は、「平和な」「立憲的」発展の一年に等しかった。一九〇五年の「総稽古」がなかったならば、一九一七年の十月革命の勝利は、不可能であったろう。」（『共産主義内の「左翼主義」小児病』全集、三一巻、一一―一二ページ）。

そしてレーニンは、このロシア革命の世界史的意義について、「きたるべきヨーロッパ革命におけるあるべき闘争の形態、またそのきっかけは、たしかに、ロシア革命のそれとは多くの点で違っているであろう。しかし、それにもかかわらず、やはりロシア革命は、ほかならぬそれの――私がすでに述べた特殊な意味での――プロレタリア的な性格のために、きたるべきヨーロッパ革命の

序曲である」（『一九〇五年の革命についての講演』、本選集、第七巻、一四九一一五〇ページ）と述べています。
まさに、この時代にかかれ本書に収録されたレーニンの著作の内容は戦闘性と科学性のみごとな結合であり、無数の革命的教訓が生きいきと刻印されています。
まず大まかに見ていきますと『ロシアのプロレタリアートに訴える』（一九〇四年二月）『専制とプロレタリアート』（一九〇五年一月）『労働者民主主義とブルジョア民主主義』（一九〇五年一月）は、一九〇五年の前夜のロシア革命運動を高揚させた帝国主義戦争・日露戦争のさなかに書かれたものです。
発展するロシアの革命運動の勝利のために召集（ボリシェヴィキによって）されたロシア社会民主党の第三回大会は一九〇五年四月にロンドンでひらかれました。この大会で当面する革命の根本問題を検討し、革命の指導者としてのプロレタリアートの任務、武装蜂起の問題、変革前夜のツァーリ専制にたいする態度の問題、臨時革命政府の問題、農民運動にたいする態度の問題、党の離脱部分（メンシェヴィキ）の問題、ロシア社会民主労働党の公然たる政治活動の問題などが討議されました。この決議の実践として具体化された理論と戦術にかんする著作で本巻に収録されているものを列挙すると次のようになります。
『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』（一九〇五年六一七月）、『ブルィギン国会のボイコットと蜂起』（一九〇五年八月）、『農民運動にたいする社会民主党の態度』（一九〇五年九月）、『小ブルジョア社会主義とプロレタリア社会主義』（一九〇五年一一月）、『われわれの任務と労働者代表ソヴェト』（一九〇五年一一月）、『党の再組織について』（一九〇五年一一月）、『党の組織と党の文学』（一九〇五年一一月）、『社会主義と無政府主義』（一九〇五年一一月）、『社会主義政党と無党派的革命運動』（一九〇五年一一月）『革命の諸段階、方向および見とおし』（一九〇五年末）。
一九〇五年、モスクワの十二月蜂起は、九日間にわたってツァーリ政府に抵抗しましたがメンシェヴィキの裏切りなどで絞殺されました。このため専制が強化され、革命運動は一時後退しました。しかし一九〇六年の春にはふたたび労働運動も高揚しはじめ、農業労働者のストライキなど農民運動の高まりが見られるようになりました。こうした情勢のもとでレーニンは農業綱領について研究をし、党大会の準備をしました。社会民主労働党の第四回大会は一九〇六年四月一〇日から二五日まで、ストックホルムでひらかれました。この大会ではじめて党規約第一条についてのレーニンの定式が採択されました。またロシア諸民族の社会民主主義政党がロシア社会民主労働党に合同しました。この大会では、土地問題、現在の情勢とプロレタリアートの階級的任務の問題、国会にたいする態度の問題についてのメンシェヴィキの誤った理論との激しい論争がおこなわれました。レーニンは、

農業革命と政治革命が不可分なことを強調し、メンシェヴィキの日和見主義的農業綱領を批判し、土地国有化の理論を展開しました。このレーニンの農業綱領は、大会にメンシェヴィキが多数を占めていたため（ボリシェヴィキは十二月蜂起で弾圧されて参加ができなかった）採択されませんでしたが、その後の実践でレーニンの主張の正しさは実証されました。この時期の著作として『労働者党の農業綱領の改訂』（一九〇六年三月）『モスクワ蜂起の教訓』（一九〇六年八月）、『パルチザン戦争』（一九〇六年九月）があります。

なお、一九〇五年一二月の武装蜂起ののちツァーリ専制は、抑圧を強めながら、同時に政治的術策として国会の召集をしました。すなわちツァーリは、武装蜂起のときの一九〇五年一二月一一日にヴィッテが準備した国会選挙法を公布しました。これは革命が専制から奪い取った譲歩でした。これをレーニンは、「人民代議機関の偽造」とよんでいます。この「国会」は真に議会制度といえるものではありませんでした。しかも、この選挙制度は、階級差別の強い、きわめて不平等な間接選挙でした。このときボリシェヴィキは、この国会選挙をボイコットしましたが選挙はおこなわれ、一九〇六年四月二七日に第一国会が召集されました。それ以後、第二国会（一九〇七年一―二月選挙、同年七月解散）がありました。

この第一国会と第二国会にたいするボリシェヴィキ党の理論と戦術を明らかにした著作が『国会の解散とプロレタリアートの任務』（一九〇六年七月）『社会民主党と選挙協定』（一九〇六年一〇月）『国会にだれをえらぶか？』（一九〇六年一一月）『国会選挙とロシア社会民主党の戦術』（一九〇七年三月）です。

一九〇七年四月三〇日から五月一九日にかけて、ロンドンでロシア社会民主労働党の第五回大会がひらかれました。この大会の主要問題は、ブルジョア諸政党にたいする態度の問題でした。メンシェヴィキは、国会内でカデット（自由主義的立憲君主主義的ブルジョアジーの党）とブロックを結ぶことを提案し、ボリシェヴィキはトルドヴィキ（自由主義者のヘゲモニーへの服従と地主的土地所有および農奴制国家にたいする断固たる闘争とのあいだを動揺していた農民）と一定の条件で協定を結ぶことが適切であるとしていました。この問題でボリシェヴィキの決議案が採択されました。同様、国会における戦術の問題、党と労働組合との関係の問題についても、ボリシェヴィキが勝利しました。この第五回大会の決議を具体化した著作に『全国民的革命の問題について』（一九〇七年五月）『ボイコットに反対する』（一九〇七年六月）があります（第三国会にむけて）。

最後に、第一次ロシア革命の一時的な後退のなかで、労働運動と革命運動を切りはなす日和見主義、ツァーリ専制の弾圧を恐れ革命から逃亡しようとするインテリ・マルクス主義者が立ちあらわれました。レーニンは、マルクス、エンゲルスの国際労働運動にたいする態度や革

命闘争における不屈の精神からいかに学ぶべきかの教訓を汲みだしています。その著作として『マルクスのクーゲルマンへの手紙のロシア語版序文』（一九〇七年）『「J・Fベッカーその他からF・A・ゾルゲその他への手紙」のロシア語版序文』（一九〇七年）があります。

二

ではつぎに年代順に各論文を簡単に紹介いたしましょう。

まず『**ロシアのプロレタリアートに訴える**』（一九〇四年）は、第一次ロシア革命の前夜となった日露戦争に際してのプロレタリアートへの訴えです。一九〇〇―一九〇三年に爆発した世界恐慌はロシアにとくに大きな影響をあたえ、工場は閉鎖され、労働者は街頭に投げだされました。それにくわえて、一九〇一年には飢饉が農村をおおい、勤労者の苦しみは極限にたっしていましたが、一九〇四年一月に始まった日露戦争は、それにいっそうの拍車をかけ、国内の革命的危機は一段と成熟をはやめていました。レーニンは、この犯罪的戦争は、利潤追求のためには、自分の祖国を売り渡し、荒廃させることを辞さない貪欲なブルジョアジーの利害・資本の利害から引きおこされたものであり、自覚した社会民主主義的プロレタリアートは数倍のエネルギーをもって、「専制政治を倒せ！」「憲法制定人民議会を召集せよ！」という要求をかかげて決起するよう訴え、日露戦争でツァーリズムが敗北するであろうこと、また敗北させるべきことを主張し、このツァーリズムの敗北が、人民の無知と無権利、抑圧と暴力に基礎をおく統治体制全体の崩壊にみちびくことを明らかにしています。最後に、国際資本のくびきからの完全解放のためにたたかいつつある万国のプロレタリアートと、戦争に抗議した日本の社会民主主義者への連帯のことばで結んでいます。ここにわれわれはレーニンの真の愛国的でまた国際主義的な立場を学ぶことができます。

『**専制とプロレタリアート**』（一九〇五年一月四日）は、専制が突入した困難で望みのない日露戦争のなかで、政府の動揺をブルジョア階級は自分に有利なように利用しようとしたのですが、レーニンはこの専制の打倒いかんは、プロレタリアートの組織性、その革命的攻撃力にかかっていることを明らかにし、この有利な政治情勢を利用しなければならないこと、プロレタリアートの世界史的任務とブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートの指導権について述べています。そしてロシアの政治的危機の発展が日露戦争の成りゆきにかかっていること、すでにロシアの軍事的崩壊は避けられなくなっており、それと同時に、不満・動揺・憤激が十倍に強まることも避けられないことを予見し、その瞬間にそなえなければならないことを訴えています。

また『**労働者民主主義とブルジョア民主主義**』（一九〇五年一月二四日）でもメンシェヴィキのブルジョア民

主主義との「協定」政策を批判し、それが、ブルジョア・インテリゲンツィアの美化にほかならないことを示し、民主主義革命にあたって労働者階級がブルジョア民主主義勢力を支持する場合の原則とプロレタリアートのヘゲモニーについて述べています。すなわちレーニンは、「……ブルジョア民主主義者が実際に専制とたたかう場合に、そのかぎりにおいて、これを支持するであろう。このような支持は、プロレタリアートが独自の社会革命の目標を達成するために必要なのである。」と言っています。

『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』（一九〇五年六―七月）

第一次ロシア革命が開始されているのにロシアの社会民主主義組織は、ロシア社会民主労働党の第二回大会以後メンシェヴィキの分裂活動の結果、組織が三つに分裂していました。レーニンは革命における党の戦術をつくりあげ、ロシア社会民主労働党の綱領にもとづいて党を結集するために第三回大会を召集するよう努力しました。

第三回大会はボリシェヴィキの召集によって一九〇五年四月一二―二七日のあいだロンドンでひらかれました。この大会には、メンシェヴィキは参加を拒否して、別個にジュネーヴで会合をひらきました。大会は、発展してきた革命の根本問題を検討し、革命の指導者としてのプロレタリアートの任務を確認しました。この大会後、レーニンは、大会の戦術方針の宣伝とメンシェヴィキの協議会の諸決議の批判とによって、民主主義革命における社会民主主義的プロレタリアートの具体的任務とはっきり理解させることを最も重要な任務と考えていました。『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』は、この仕事にあてられたものです。

レーニンは、第一次ロシア革命が日に日に進展をみせているまっ最中に、この著作でマルクス主義の歴史上はじめて、帝国主義時代におけるブルジョア民主主義革命の特殊性、その推進力と見とおしの問題を究明しました。かれは、革命における党の理論や戦略戦術の問題についてメンシェヴィキがとっていた反マルクス主義的な日和見主義方針や、さらにメンシェヴィキに支持をあたえていた第二インタナショナルの指導者たちの改良主義的方針に、壊滅的な批判をくわえました。すなわちレーニンは、ロシアに始まった革命はその性格と任務からいってブルジョア革命であることを明確にし、この革命は、西欧のブルジョア革命とは異なって、プロレタリアートが主要な推進力・指導者として現われる特殊な性格を明らかにしました。

こうしてレーニンは、ロシア革命の基本的な特徴と特殊性の科学的・マルクス主義的な分析にもとづいて、次の諸問題を展開し、究明しています。

第一に、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニー（指導権）の問題です。当時のロシアでは、労働者階級がブルジョア民主主義革命の指導者

の役割を果たすか、それともブルジョアジーの助手の役割を果たすかに、革命の運命がかかっていました。当時のロシア革命の当面していた問題は、この革命が決定的な勝利をおさめて、民主共和制をつくるか、それともみじめな専制との取引に終わるかにあり、ボリシェヴィキとメンシェヴィキの「原則的意見の不一致」の根源もこの問題をどう解決するかということにありました。

第二にブルジョア民主主義革命における労働者階級と農民の同盟の問題、および社会主義革命におけるプロレタリアートと貧農との、都市農村のすべての半プロレタリア大衆との同盟の問題です。メンシェヴィキが農民は反動的だとして農民の革命性を否定するのと反対に、レーニンは「民主主義のための首尾一貫した闘士になれるのは、プロレタリアートだけである。プロレタリアートが民主主義のための勝利の闘士になれるのは、農民大衆がプロレタリアートの革命闘争に合流する場合だけである」と労農同盟の理論を定式化しました。

第三には、労働者階級と農民の革命的民主主義的独裁の問題、および独裁の政治機関としての臨時革命政府の問題です。プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁の政治機関となるべきものは、武装した人民をよりどころとする臨時革命政府でした。臨時革命政府は、革命の獲得物を確保し、反革命の抵抗を鎮圧し、ロシア社会民主労働党の最小限綱領を実現する政府です。この政府には有利な条件で労働者階級の党代表者が参加することが必要です。

なおレーニンは、この論文で改良主義的な闘争方法にしがみついたメンシェヴィキとは反対に、ツァーリ専制を打倒し、革命を勝利させる戦術として武装蜂起の問題を明らかにしています。この戦術は、当時のロシアの情勢に合致したものでした。当時のロシアとはまったく異なる今日の日本の歴史的条件に機械的にこれをそのまま適用することができないことはいうまでもありません。

第四に、レーニンは、民主主義革命の社会主義革命への成長転化の理論を展開しています。「プロレタリアートは、実力で専制の抵抗をおしつぶし、ブルジョアジーの動揺性を麻痺させるために、農民大衆を味方につけて民主主義的変革を最後まで遂行しなければならない。プロレタリアートは、実力でブルジョアジーの抵抗を打破し、農民と小ブルジョアジーの動揺性を麻痺させるために、住民中の半プロレタリア分子の大衆を味方につけて社会主義的変革をやりとげなければならない」とレーニンは永続革命についてのマルクスの思想を発展させたブルジョア革命の社会主義革命への成長転化についての学説を基礎づけ、ロシアの社会経済制度のなかには、このための客観的条件が存在していることを示しました。

第五は、プロレタリアートが人民革命の指導者の役割を果たすための決定的な条件としてのプロレタリアートの政党の問題についてです。レーニンは、革命闘争の指導者・組織者となる使命をもつ、労働者階級の独自の政

党の存在が、ブルジョア民主主義革命の勝利と、それにひきつづく社会主義革命に成長転化するための主要な条件の一つであると考えていました。またプロレタリアートがこの革命で指導者の役割を果たすことができるのは、プロレタリアートが思想的にも実践的にもかれらの闘争を指導する革命的マルクス主義党の旗のもとに統一した独自の政治勢力に結集する場合だけであると指摘しています。

このレーニンの社会主義革命理論は、ロシアのメンシェヴィキと第二インタナショナルの改良主義者との理論をくつがえしただけでなく、プロレタリアートのヘゲモニーと農民の革命的役割を否定し、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁を否定したトロツキーの「永続革命」の理論をくつがえしました。

『ブルィギン国会のボイコットと蜂起』（一九〇五年八月一六日）でレーニンは、ブルィギン「憲法」の本質と根本的意義が、ツァーリズムと地主および大ブルジョアジーとの取引であり、専制にとってまったく無害な、たわいもない、えせ憲法の施し物によって革命運動をおさえようとするものであるとして、この国会をボイコットせよと訴え、武装蜂起の勝利とツァーリ権力の転覆による臨時革命政府の樹立を呼びかけています。

『農民運動にたいする社会民主党の態度』（一九〇五年九月一四日）と**『小ブルジョア社会主義とプロレタリア社会主義』**（一九〇五年一一月七日）は、第一次ロシア革命の全期間をつうじて農民運動が最高潮に達し、専制・地主制度にたいする公然たる闘争の段階に突入したころの論文であり、いづれもレーニンの「二つの戦術」の思想が簡潔明確に具体的なたたかいとの関連で書かれているものです。前者は、「われわれは中途で立ちどまりはしないであろう」と民主主義革命の社会主義革命への成長転化という戦略計画を基礎づけ、「農民の革命的民主主義委員会」と「党」との違いと関連を明らかにしています。後者では、現在の農民運動を社会主義的性質のものであるかのように考えてナロードニキ的幻想のとりこになっている社会革命派の小ブルジョア的社会主義を批判し、農民運動は資本の権力に反対しているのでなく、農奴制の残りかすに反対しているのであり、したがって、その勝利は民主主義革命の勝利となる、その勝利ののちはじめて資本主義にたいするプロレタリアートと貧農の闘争が展開されることを実証し、未来のロシアをになう人間は農民でなく労働者であると、プロレタリアートの指導性を強調しています。

『われわれの任務と労働者代表ソヴェト』（一九〇五年一一月二―四日）は、労働者代表ソヴェトの革命的意義を明らかにしたものです。レーニンはこの論文ではじめて、第一次ロシア革命のなかで闘争の自然成長的な発展のなかで出現したソヴェトが革命権力の萌芽であることを明らかにしました。それは、「社会民主主義者と革命

的民主主義者の戦闘的同盟」であり、その任務は、革命勢力を統合する全国的政治的中心（臨時革命政府）の萌芽になることにあったのです。レーニンは、そのためには純プロレタリア的中核を強めながら、農民・兵士・革命的インテリゲンツィアの代表者をソヴェトに入れなければならないことを指摘しています。そしてプロレタリアートの党がこれに参加し、党の独自性を守り、労働者階級の政治意識を高めることを要求しています。またレーニンは、ソヴェトを自治的組織とみるメンシェヴィキに反対し、無政府主義者がこれに参加することに反対し、また党組織の公然と非公然の原則についても解明しています。この論文から今日なお党の独自性と統一戦線の関係を学ぶことができます。

『**党の再組織について**』（一九〇五年一一月一五、一六日）『**党の組織と党の文学**』（一九〇五年一一月一三日）は、いずれもロシア革命の発展が最高潮に達し、集会・結社・出版の自由をいちおう奪取したなかで書かれた論文で、新しい情勢に適応した党の組織建設と、イデオロギー活動・出版活動を展開させる問題が解明されています。

『**社会主義と無政府主義**』（一九〇五年一一月二四日）、『**社会主義政党と無党派的革命運動**』（一九〇五年一一月二六日―一二月二日）は、無政府主義と無党派活動にたいする原則を述べたものです。前者では、無政府主義者の労働者代表ソヴェトに加入したいという要請を拒否し、その理由として、無政府主義は政党でもなく、かれらの世界観の裏返しはブルジョア世界観であり、戦術は分裂主義であることを明らかにし、プロレタリアートを組織し、労働者階級を政治的に訓練し教育するプロレタリアート党の任務を明らかにしています。

後者の論文では、ブルジョア民主主義革命のもとで無党派的な組織の発生する必然性を明らかにするとともに、無党派主義はブルジョア思想であり、党派性は社会主義の思想であるとし無党派的組織が参加する原則として、「社会主義的プロレタリアートを準備し、組織するという基本的任務に完全に従属しなければならない」ことを明らかにしています。

『**革命の諸段階、方向および見とおし**』（一九〇五年末または一九〇六年はじめ）はロシア革命の到達点を簡潔に示し、ロシアのプロレタリアートの第二の勝利の展望を示しています。

『**労働者党の農業綱領の改訂**』（一九〇六年四月）は、第四回党大会でレーニンがおこなった農業問題についての報告の基本思想が述べられています。まずロシア社会民主党の農業問題についての見解の歴史的発展が概観され、いまや農業綱領改訂の機が熟していることを明らかにし、つぎに党の農業綱領にたいする四つの潮流を的確に批判し、農民蜂起の完全勝利、その勝利を保障する政治制度の民主化、すなわち農民的土地革命の勝利後には土地国有化にすすみ、これによって社会主義革命への移

行を容易にすることを政策的に示しています。これはいうまでもなく農民運動にたいする労働者階級の二重の任務、民主主義革命から社会主義革命の成長転化の思想を基礎に提出されたものです。

『**国会の解散とプロレタリアートの任務**』（一九〇六年七月）で、レーニンは、ツァーリズムの国会解散によってカデット的国会のような機関は「役に立たない」ことが明確になり、「ロシア憲法が幻想であること、わが祖国の議会制度が虚構である」ことが人民のまえに公然となった事実を述べ、専制を打倒してソヴェトによる人民の代議機関の萌芽の問題、その権力の樹立の問題を明らかにしています。そして権力のための闘争、政府打倒のための闘争に全力をそそぐよう訴えています。

『**モスクワ蜂起の教訓**』（一九〇六年八月二九日）は、十二月武装蜂起が敗北したのち、革命は終わった、「プロレタリアートは武器をとる必要がなかった」というメンシェヴィキの裏切りに抗議し、それどころかもっと決然と、精力的に、攻撃的に武器をとる必要があったと、この論文で敗北の原因を明らかにし、蜂起にいたるまでの闘争形態の推移・発展・革命の軍事問題について明らかにしています。

『**パルチザン戦争**』（一九〇六年九月三〇日）では、闘争形態の問題にたいするマルクス主義的態度を明らかにしています。それは、第一に、マルクス主義は、運動をなにか一つの特定の闘争形態にしばりつけないこと、第二に、闘争形態の問題を、かならず歴史的に考察することを要求することにあるとしています。この原則的な立場でロシア革命の闘争形態を科学的に分析しています。

『**社会民主党と選挙協定**』（一九〇六年一〇月末）は、選挙協定と選挙ブロック、部分協定の内容をどうあるべきかを、「プロレタリアートを啓蒙し教育して自主的な階級政党に組織する一手段、労働者の解放をめざす政治闘争の一手段」とみる基本的な立場から明らかにしています。

『**国会にだれをえらぶか？**』（一九〇六年一一月二三日）は、国会選挙にあたってロシアの主要政党の基本政策を明確に、しかも簡潔に、図式的に解明しています。

また、『**国会選挙とロシア社会民主党の戦術**』（一九〇七年三月二七日）では、革命運動における選挙闘争の意義および社会の階級構成と一致した諸党派の階級分析をみごとに展開しています。

『**全国民的革命の問題について**』（一九〇七年五月二日）は、「ある意味では全国民的な革命だけが勝利するものとなることができる」しかし、「革命の過程における階級闘争の研究をぼかしたり、忘れさせるのに役だつようなものであってはならない」ことを具体的に示し、ロシアにおける国民運動はいかにあるべきかを解明しています。

『**ボイコットに反対する**』（一九〇七年六月二六日）は、ブルィギン国会のボイコット戦術の歴史的根拠をくわし

く分析し、第三国会選挙にたいしてボイコット戦術を適用する条件はすでにないことを明らかにし、結論的にレーニンは「日常の選挙準備活動をつづけながら、また最も反動的な代議機関さえ参加することをあらかじめこばんだりせずに、一二月の敗北と、それにつづく自由の衰退、憲法にたいする侮辱との結びつきを人民に説明することに、われわれの宣伝・扇動全体をむけなければならない」ことと同時に、労働運動のあらゆる高揚を、全般的な・広範な・革命的な攻撃運動に転化することをめざさなければならないと言っています。

『マルクスのクーゲルマンへの手紙のロシア語版序文』（一九〇七年二月）でレーニンは、革命期のロシアで、労働運動と国際政治のすべての問題にマルクスがどのように対応したかを研究することがどんなに教訓になるかを述べ、革命情勢、労働者階級の革命的任務、労働者と農民の歴史的創意の評価、蜂起の正しさなどについてのマルクスの教訓をロシアの現実にてらして明らかにしています。

『「J・F・ベッカーその他からF・A・ゾルゲその他への手紙」のロシア語版序文』（一九〇七年四月六日）でレーニンは、マルクスとエンゲルスのイギリスとアメリカの社会主義者のブルジョア的性格の指摘、ドイツ社会民主主義者の日和見主義の批判から教訓を引きだして、ロシアの日和見主義者の痛烈な批判をしています。

そして最後に、マルクス、エンゲルスは革命の近さを定める点で、多くの誤りをおかしたが、この誤りは、「革命的虚栄のむなしさや、革命的闘争の無益なことや、反革命的な「立憲的」妄想の魅力をうたい、叫び、呼びかけ、語っている官許自由主義の低俗な知恵よりも、千倍も気高く、壮大で、歴史的に価値多く、真実である」と革命行動を労働者階級に呼びかけています。

三

レーニンは「この時期のひと月は『平和な』『立憲的』発展の一年に等しかった」と述べていますが、この時期のレーニンの著作から豊富な教訓を汲みとることができます。

今日、対米従属下の軍国主義・帝国主義復活政策と日本人民との矛盾は激化し、労働運動・農民運動をはじめ各層の多面的な闘争が発展しつつあります。とくに公害・物価問題などの闘争のひろがりは、いまだかつてない大衆的規模で発展しつつあります。これらの諸闘争に正しく対応し、確実に勝利し、七〇年代に民主連合政府を樹立するうえで、これらのレーニンの著作は無限の教訓をあたえてくれるでしょう。

レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

第３巻

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

はしがき

このヴェ・イ・レーニン10巻選集は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一九世紀の四〇年代、マルクスとエンゲルスによってつくりあげられた科学的社会主義の学説のもつ不滅の真理性と豊かな創造性は、一世紀余にわたる世界史の発展と国際労働者階級が示したすべての闘争によって、あますところなく実証されている。

レーニンは、マルクスとエンゲルスの学説を正しく継承し、一九世紀末から二〇世紀の初めにかけて、帝国主義とプロレタリア革命の時代の新しい歴史的条件のもとで、哲学、経済学、社会主義というマルクス主義の三つの構成部分全体にわたって、マルクス主義を創造的に発展させた。レーニンは、社会主義革命とプロレタリアートの執権(ダイクタツーラ)の理論と戦術を仕上げ、労働者階級の前衛部隊としての党の建設、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化、労働者階級と農民の同盟、帝国主義の理論的分析、一国における社会主義革命の勝利の可能性、社会主義革命と民族解放運動の結合、社会主義建設の道と方法等々の問題について、マルクス主義を新しい段階に発展させた。

マルクスによって創始され、レーニンによって発展させられたマルクス・レーニン主義は、現代の国際プロレタリアートのまえに提起されたすべての根本問題について原則的な解答をあたえている。マルクス・レーニン主義は、今日、全世界のほとんどすべての国で労働者階級の前衛党の行動の指針となり、社会主義世界体制、資本主義諸国の革命運動、民族解放運動を三つの原動力とする現代の巨大な人民運動を指導する偉大な物質的力となっている。

日本の労働者階級と人民の闘争を勝利にみちびく最も重要な保障は、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を、

現代の複雑な諸条件や、わが国の特殊性に応じて具体的に適用し、発展させる創造性と、マルクス・レーニン主義の原則を厳密に擁護する原則性とを正しく統一することである。

この選集の発刊の目的、編集の基本的観点も、この要求にこたえることにある。

編集にあたっては、(1)レーニンの全労作をつらぬく思想と基本命題を全体として理解できるようにすること、(2)わが国の歴史的条件、特殊性を考慮し、日本の労働者階級と人民の実践的課題にこたえること、(3)今日、国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義の直面している重要な試練を正しくのりこえ、マルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の歴史的発展をかちとる課題にこたえることに主眼をおいた。これらの点は、この選集のすぐれた特徴となっていると確信している。

このような選集は、日本の民主運動や革命運動の発展に貢献し、わが国におけるマルクス・レーニン主義の発展を願う多くの人々から、久しく求められていたものである。

この選集は、日本の独立、民主、平和、中立、生活向上をめざしてたたかっているすべての人々に、喜びむかえられるものと確信する。

この選集が、祖国を愛し、平和と民主主義を求めるすべての人々、さらに社会主義、共産主義日本の実現を願う人人にひろく読まれ、民主運動と革命運動の実践のなかで生きいきと活用されることを心から期待してやまない。

* * *

選集の刊行にあたって、より正確で、より立派な翻訳に仕上げるために努力してくださった方がた、発行、発売にあたって全面的な協力をいただいた大月書店の方がたにたいして、あらためて謝意を表するものである。

一九六九年一一月

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

凡　例

一　本巻は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一　編集にあたっては、邦訳『レーニン全集』(第四版）および『レーニン選集』、国民文庫などの訳文を原則として使用し、全集第五版にもとづいて手をくわえた。

一　原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所には傍点を付し、イタリック体で隔字体の箇所には白丸を付した。ただし見出しのところなど、この方針によらなかった場合もある。

一　レーニンの原注は*をもって示し、本文の段落末にかかげた。

一　事項注は、本文中の該当箇所に通し番号(一)(二)……をつけて巻末に一括してかかげた。この注は全集第四版および第五版の注を参考にして多少簡略にした。そのなかに出てくるレーニンの著作のページ数は邦訳『レーニン全集』のものであり、マルクス、エンゲルスの著作のページ数は邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』、同『選集』(全八冊）のものである。版によってレーニンの原文のちがうところは(1)(2)……をつけて本文の段落末にかかげた。また、訳文については、若干手をくわえた。また簡単な注は〔　〕に入れて本文中に示した。

一　人名注は、全集第五版の注を参考にしてごく簡略にして作成し、アイウエオ順に配列して巻末に一括してかかげた。

一　人名、地名は現地読みに近く表記することを原則にしたが、慣用に従ったものもある。

目　次

ロシアのプロレタリアートに訴える(一)

戦争が始まった。日本軍はすでにロシア軍に一連の敗北をなめさせるのに成功し、いまやツァーリ政府は、この敗北の報復に全力をあげている。つぎつぎと軍管区が動員され、数万の兵士が急いで極東に派遣され、国外では新しい借款を結ぶ必死の努力がおこなわれ、軍当局に必要な仕事の促進にたいしては一日数千ルーブリの奨励金が請負業者に約束されている。国民のあらゆる力は最大の緊張をしいられている。なぜなら、開始された闘争は、すばらしくよく武装され、戦争の準備をよくととのえ、自由な民族的発展に切実に必要と認められる諸条件のためにたたかっている五千万国民との、容易ならぬ重大な闘争だからである。これは、専制的な遅れた政府と、政治的に自由で文化的に急速に進歩しつつある国民との闘争となるだろう。一八七七―一八七八年の脆弱(ぜいじゃく)なトルコとの戦争は、ロシア国民にとってあれほど高くついたが、いま開始された戦争にくらべるととるにたりないものであった。

ロシアの労働者と農民は、いまいったいなんのために日本人と必死に戦っているのか? 満州と朝鮮のため、ロシア政府が奪取したこの新しい領土のため、「黄色ロシア」のためにである。ロシア政府は他のすべての強国に中国の不可侵を維持することを約束し、一九〇三年一〇月八日までに満州を中国に引き渡すことを約束したが、この約束を履行しなかった。ツァーリ政府は、すでに軍事的冒険と近隣諸国強奪の政策に深入りしていたので、もはや引きかえすことはできなかった。「黄色ロシア」には要塞や港湾が建設され、鉄道が敷かれ、数万の軍隊が集結された。

しかし、それを手に入れるのにあれほどの血と犠牲を要し、今後はさらにはるかに多くを要するこれらの新しい領土が、ロシア国民にとっていったいどんな利益になるのか? 戦争はロシアの労働者と農民に、新しい苦難、莫大な人命の喪失、大量の家族の零落、新たな重荷と税金を約束している。ロシアの軍首脳とツァーリ政府には、戦争は軍事的栄光を約束しているようにみえる。ロシアの商人と百万長者の工業家にとっては、戦争は、商品の新たな販売市場を守り、ロシアの貿易発展のための自由な不凍海の新

しい港湾を守るために、必要なことに思える。自国の飢えた百姓や失業労働者には多くの商品は売れないから、他国に販路を求める必要がある！ ロシア・ブルジョアジーの富は、ロシアの労働者の窮乏と零落によってつくりだされたものである、――そしてまさに、この富をいっそうふやすために、労働者はいま自分の血をもって、ロシアのブルジョアジーが中国と朝鮮の勤労者を自由に征服し隷属させることができるよう努力しなければならないのである。

利潤追求のためには自分の祖国を売り渡し荒廃させることも辞さない貪欲なブルジョアジーの利害、資本の利害――これこそが、労働人民にはかりしれない災厄をもたらす、この犯罪的戦争を引きおこしたのである。あらゆる人権を蹂躙し、自国民を奴隷にしている専制政府の政策――これこそが、ロシア市民の血と財産をかけたこの一六勝負にみちびいたのである。そこで、凶暴な軍閥に答え、金持の奴隷と警察の鞭の従僕の「愛国的」示威行進に答えて、自覚した社会民主主義的プロレタリアートは、数倍のエネルギーをもって、「専制政治を倒せ！」、「憲法制定人民議会を召集せよ！」という要求をかかげて立ち上がらなければならない。

ツァーリ政府は、軍事的冒険の一六勝負に深入りしすぎて、あまりに、あまりに多くを賭けすぎてしまった。これが成功した場合でさえ、日本との戦争は国民の力を完全に消耗しつくすおそれがある――しかも勝利の結果はまったくとるにたりないものなのだ。なぜなら、他の列強は、一八九五年に日本にこれを許さなかったように、ロシアが勝利の成果を楽しむことを許さないだろうからである。ところで敗北した場合には、戦争はまず第一に、人民の無知と無権利、抑圧と暴力に基礎をおく統治体制全体の崩壊にみちびくだろう。

風を種まくものは嵐を刈りとるのだ！

国際資本のくびきからの完全な解放のためたたかいつつある万国のプロレタリアの同胞的団結万歳！ 戦争に抗議した日本の社会民主主義者万歳！ 恥さらしな強盗的ツァーリ専制政治を倒せ！

ロシア社会民主労働党中央委員会

一九〇四年二月三（一六）日に執筆
一九〇四年二月に単独のビラとして発表
全集、第五版、第八巻、一七〇―一七四ページ所収
邦訳全集、第四一巻、一〇五―一〇七ページ所収

専制とプロレタリアート

ロシアに立憲運動の新しい波が打ちよせている。いまの世代の人々は、現在ほどの政治的活気をかつて見たことがなかった。合法新聞は官僚制度をさんざんに攻撃し、人民代表の国政参加を要求し、自由主義的な改革の必要を執拗に声明している。ゼムストヴォ[3]議員、医師、法律家、技師、農場主、市会議員などのありとあらゆる集会が、多かれ少なかれ明瞭に、憲法を要求する意見を表明した決議をおこなっている。ロシアの俗物の見地からみるとなみはずれて大胆な政治的暴露や、自由についての熱烈な演説が、いたるところで聞かれる。自由主義的な集会は、労働者や急進的な青年の圧力をうけて、公然の人民集会や街頭デモンストレーションに発展している。プロレタリアートの広範な諸層や都市農村の貧民のあいだでは、口に出さない動揺がはっきりと強まっている。そしてプロレタリアートは、自由主義運動の殺もおもだった、儀式ばった現われには比較的わずかしか参加していないし、堅実な公衆の上品な会議をいくらか敬遠しているようにみえるが、しかし、労働者がこの運動に非常に深い関心をもっていることは、あらゆる点からみて明らかであり、労働者が広範な人民集会や公然の街頭デモンストレーションを熱望していることは、あらゆる点からみて明らかである。プロレタリアートは、いわば自制し、周囲の情勢を注視し、自分の力を結集し、自由のための断固たる闘争の時機が到来しているかまだいないかを見きわめようとしている。

みたところ、自由主義的な興奮の波は、すでにいくぶん減退しはじめているようである。最も勢力ある宮廷側近筋のあいだで反動派が勝利したという外国新聞の風評や報道は、正しかったことが[3]確証されている。数日まえに発布されたニコライ二世の勅令は、自由主義者にたいするまったくの平手打ちである。ツァーリは、専制を維持し固守する意向である。ツァーリは、統治の形態を変えることを望んでおらず、憲法をあたえようとは考えていない。彼は、まったく第二義的な性質のありとあらゆる改革を約束している、——だが、約束だけである。これらの改革が実現されるという保障は、もちろんなにもあたえられていない。自由主義的出版物にたいする警察の取締は、日ごとにどころ

ではなく、一時間ごとにつよまっている。いっさいの公然のデモンストレーションは、ふたたび、従来以上でないまでも、従来と同じように残酷に弾圧されはじめている。ゼムストヴォや市会の自由主義的議員たちは、ふたたび目にみえて圧迫されはじめており、自由主義者ばりの役人はいっそうそうである。自由主義的な新聞は意気沮喪した調子に落ちこんでいき、通信員の手紙を掲載する勇気がなくて、彼らに許しを願っている。

スヴャトポルク＝ミルスキーの許可(3)ののちに急速に高まった自由主義的な興奮の波が、新しい禁止ののちに急速にしずまることは、なにもありえないことではない。われわれは専制にたいする反対と闘争とを不可避的に必然的に――しかも、時がたてばたつほどますます多く――生みだす深い原因と、一時の自由主義的な活気の小さなきっかけとを区別しなければならない。深い原因は、深い、強大な、ねばりづよい人民運動を生みだす。小さなきっかけとなるのは、ときには内閣の閣員の入れかえであったり、なにかのテロル行為のあとで一時欺瞞の政策に移行しようとする、政府のありふれた企てであったりする。プレーヴェの暗殺(2)は、明らかに、テロリスト組織に、非常に大きな努力と長期にわたる準備活動とを費やさせた。そして、このテロリスト的な企てがうまくいけばいっただけ、それは、テロルのような闘争方法をとらないようにわれわれに警告しているロシアの革命運動の歴史全体の経験を、ますますはっきりと確証している。ロシアのテロルは、インテリゲンツィア特有の闘争方法であったし、いまもそうである。そして、人民運動のかわりとしてのテロルではなくて、それと同時におこなうテロルが重要だといって、人々がどんなことをわれわれに言ってきかせようとも、もろもろの事実は、わが国の個人的な政治的暗殺が人民革命の強力的行動とはなんの共通点ももっていないことを、反論の余地なく立証している。資本主義社会における大衆運動は、階級的な労働者の運動としてのみ可能である。この運動は、ロシアではその独自の法則にしたがって発展している。それは、ますます深さと幅をまし、一時的な鎮静から新しい高揚へとうつりつつ、独自の道をすすんでいる。そして、自由主義の波だけが、爆弾によって更迭を速められ、いろいろな大臣の気分と緊密に結びついて高まったり減退したりしている。だから、わが国で、ブルジョア的反政府派の急進主義的な(もしくは急進主義者ぶっている)代表者のあいだにテロルへの共感が非常にしばしばみられるのも、ふしぎなことではない。また、革命的インテリゲンツィアのうちでとくにテロルに心酔している(長いあいだにせよ一瞬間にせよ)のが、まさにプロレタリアートおよびプロレタリア的

階級闘争の生命力と力とを信じない人々であるのも、ふしぎなことではない。

あれこれのきっかけで起こった自由主義的興奮が短命で長もちしないとしても、このことは、もちろん、専制と、発展しつつあるブルジョア社会の諸要求とのあいだに存在する取りのぞきがたい矛盾を、われわれに忘れさせることはできない。専制は社会の発展を阻止しないではおかない。時がすすめばすすむほど、階級としてのブルジョアジーの利益や、現代の資本主義的生産をおこなうのになくてはならないインテリゲンツィアの利益は、ますます専制と衝突するようになる。たとえいろいろな自由主義的言明の動機が表面的なものであろうとも、また自由主義者の優柔不断で二面的な立場がちっぽけな性格のものであろうとも、専制にとって、ほんとうに平和的な関係をもつことができるのは、地主・商人階級のうちのひとにぎりのとくに特権的な権勢家とのあいだだけで、この階級全体とはけっしてできない。ヨーロッパ的な国となりたがっており、またその地位からして、そうならなければ政治的経済的に敗北する恐れがあるため、ぜひともヨーロッパ的な国にならなければならない国、そういう国にとっては、憲法という形で支配階級の利益を直接代表する制度が必要である。だから、自覚したプロレタリアートにとっては、専制にたいする自由主義者の抗議が不可避であることをも、これらの抗議が実際にブルジョア的なものであることをも、はっきりと理解することがきわめて重要である。

労働者階級は、人類を、あらゆる形態の、人間による人間の抑圧および搾取から解放するという、きわめて偉大な世界史的目標をかかげている。労働者階級は、自己の闘争をたえず拡大し、数百万人を擁する党にみずからを組織しつつ、個々の敗北や一時の失敗に気をおとすことなく、全世界で頑強に、幾十年の長きにわたってこの目標の実現をめざして努力している。このような真に革命的な階級にとっては、いっさいの自己欺瞞、いっさいの空中楼閣や幻想からのがれること以上に重要なことはありえない。わがロシアで、最もひろまっている、最も根づよい幻想の一つは、わが国の自由主義運動がブルジョア運動でなく、ロシアの当面する革命がブルジョア革命でないかのようにみる幻想である。最も穏健なオスヴォボジデーニエ派〔三〕から最も極端な社会革命党〔エス・エル〕〔二〕にいたるまでロシアのインテリゲンツィアは、わが国の革命をブルジョア革命と認めることは革命を精彩のないものとし、革命をひくめ、卑俗化することだとつねに思っている。ロシアの自覚したプロレタリアは、この革命をブルジョア革命と認めることは、現実の事態の唯一の正しい階級的な特徴づけだとみている。プロレタリアにと

っては、ブルジョア社会における政治的自由と民主共和制のための闘争はブルジョア制度を打倒する社会革命のための闘争における不可欠の一段階にすぎない。その本性の異なるいろいろの段階を厳密に区別し、これらの段階が経過する条件を冷静に研究することは、けっして終局目標をずるずるとさきに延ばすことではなく、またけっして自分の足どりをまえもってゆるやかにすることではない。それどころか、足どりを速めるためにこそ、終局目標をできるだけ急速にかつ確実に実現するためにこそ、現代社会における諸階級の関係を理解しなければならないのである。階級的見地を一面的だと称して回避する人や、社会主義者になりたいが、それと同時に、ロシアでわれわれが当面し、わがロシアで始まった革命を率直にブルジョア革命とよぶことを恐れている人の行手には、ただ幻滅と、一方から他方への動揺だけが待っている。

現在の立憲運動が最高潮にあるちょうどそのときに、最も民主主義的な合法出版物が、異例の自由を利用して、「官僚制度」にたいしてばかりでなく、いわゆる「科学的に」「成りたちえない」、「排他的な、したがってまた誤った階級闘争理論」(『ナーシャ・ジーズニ』第一八号)にたいしても攻撃をくわえたことは、特徴的な事実である。つまり、こういうのだ。――インテリゲンツィアを大衆に接近させる任務を「これまで提起してきた仕方は、人民大衆と、インテリゲンツィアの大部分……が属する社会層とのあいだに存在する階級矛盾をもっぱら強調するというやり方であった」と。事態をこのように描くことが現実に直接に矛盾していることはいうまでもない。実情はまさにその反対である。文化活動に従うロシアの合法的なインテリゲンツィア大衆の全体、古いロシアの社会主義者の全部、オスヴォボジデーニエ派型の活動家の全部は、一般にロシアにおける、とくにロシアの農村における階級矛盾の深さを無視していたし、いまも無視している。ロシアの急進的インテリゲンツィアの最左翼である社会革命党でさえ、なによりもこの点を無視することで誤りをおかした。「勤労農民」についての、あるいはわれわれが当面しているのは「ブルジョア革命ではなくて民主主義革命」であるということについての、この党のおきまりの議論を思いだしてみさえすればよい。

そうではないのだ。革命の時機が近づけば近づくほど、立憲運動が激しくなればなるほど、プロレタリアートの党は、その階級的独自性をますます厳格に保持すべきであり、その階級的要求を一般民主主義的な空文句の洪水におぼれさせてはならない。いわゆる社会〔「教養ある社会」、すなわちインテリゲンツィアの意〕の代表者がいっそう頻繁に、

いっそう断固として、全人民的要求と称するものをかかげて進出すればするほど、社会民主党はますます容赦なくこの「社会」の階級的性格を暴露しなければならない。一一月六―八日の「秘密」のゼムストヴォ大会(一〇)の、あの評判の決議をとってみたまえ。諸君は、後景にひっこめられ、故意に不明瞭にされた内気な立憲的願望をそのなかに見るであろう。諸君は、人民と社会が引合いにだされていること、そして、人民よりもはるかに頻繁に社会が引合いにだされていることを、見るであろう。諸君は、ゼムストヴォと都市の諸機関、すなわち、地主と資本家の利益を代表する諸機関の改革について、とくに詳細に、また最も詳細に述べてあるのを、見るであろう。諸君は、農民の日常生活における改革、後見からの農民の解放、適正な裁判形態の確保について述べているのを、見るであろう。諸君のまえにいるのが、専制から譲歩をかちとろうとしているだけで、経済体制の基礎の変更などということはなにも考えていない有産階級の代表者であることは、まったく明瞭である。もしこのような人々が「農民の今日の、完全な権利をもたない、屈辱的な状態の根本的な」(根本的な、といわれる)「変更」を希望しているのだとすれば、このことは、社会民主党の見解――農民の生活様式と生活条件がブルジョア体制の一般的な条件から立ちおくれていることを、倦むことなく強調してきた社会民主党の見解――の正当性を、なおもういちど示すものである。社会民主党は、つねに次のことを要求してきた。すなわち、自覚したプロレタリアートは、全農民の運動のうちで、農民ブルジョアジーの支配欲にもとづく利益や要求を厳重に区別しなければならない、――これらの要求がどんなにぼんやりした霞でおおいかくされていようとも、また、農民的イデオロギー(および「社会革命派」流の空文句)が「均等化」のどんなユートピアにこれらの要求をつつんでいようとも、そうしなければならない、と。一二月四日のペテルブルグでの技師たちの懇親会の決議をとってみたまえ。諸君は、五九〇名の懇親会参加者が、そして彼らにつづいて、技師たちの決議に署名した六、〇〇〇名が、「それなしにはロシアの産業を首尾よく擁護することのできない」憲法に賛意を表明し、ついでにはやくも政府の注文を外国の企業家に発注することに抗議しているのを見るであろう。

地主的ブルジョアジー、商工ブルジョアジーおよび農民ブルジョアジーのあらゆる層の利益こそ、表面に現われでた立憲的志向の基礎をなしているということを、いまでもまだ見ないでいることができるだろうか？　ヨーロッパのブルジョアジーのすべての革命で、つねに、いたるところで、評論家、演説家、政治的指導者の役割を引きうけた民

主主義的インテリゲンツィアがこれらの利益を代表しているということが、はたしてわれわれを迷わすことができようか？

ロシアのプロレタリアートにはきわめて重大な任務が課されている。専制は動揺している。専制が突入した困難で望みのない戦争〔日露戦争〕は、専制の権力と支配の基礎を根底から破壊した。いまや専制は、諸支配階級に訴えることなしには、そしてインテリゲンツィアの支持を得ることなしには、もちこたえることができない。だが、このような訴えとこのような支持は、かならず立憲的な要求を伴わずにはおかない。ブルジョア階級は、政府の窮状を自分に有利となるように利用しようと努めている。政府は、安価な譲歩や、非政治的な改革や、ツァーリの新しい勅令のなかにふんだんにある、なんの義務も負わない約束によって、この場を切りぬけ、のがれようと、死にものぐるいの賭博をやっている。このような賭博が一時的、部分的にでもうまくいくかどうかは、けっきょくはロシアのプロレタリアート、その組織性、その革命的攻撃力のいかんにかかっている。プロレタリアートは彼らにとってめったにない有利な政治情勢を利用しなければならない。プロレタリアートはブルジョアジーの立憲運動を支持し、被搾取人民大衆のできるだけ広範な層をゆりうごかして自分のまわりに結集し、自分の全勢力を集め、政府が最も絶望的な状態にある瞬間、人民が最も沸きたった瞬間に、蜂起をおこさなければならない。

プロレタリアートが立憲主義者を支持するということは、どういう点にすぐさま現われなければならないだろうか？それはなによりも、一般の激昂を利用して、労働者階級と農民のうちの最も手のついていない、最も遅れた諸層を扇動し組織することに、現われなければならない。もちろん、組織されたプロレタリアート、すなわち社会民主党は、自分の部隊を住民のあらゆる階級のなかへ送りこまなければならないが、しかし、これらの階級がすでに自主的に行動すればするほど、闘争がより鋭くなり、決戦の瞬間が近づいてくればくるほど、それだけますますわれわれの活動の重心を、プロレタリアと半プロレタリア自身を自由のための直接の闘争へ準備することにうつさなければならない。日和見主義者だけが、このような瞬間に、個々の労働者演説家がゼムストヴォ議会やその他の公共の集会で演説することを、とくに積極的な闘争方法だとか、新しい闘争方法だとか、より高度の型のデモンストレーションだとか、よぶことができるのである。このような示威行動は、まったく従属的な意義しかもつことができない。今日はるかに重要なことは、プロレタリアートの注意を、有名なロストフのデ

モンストレーションや一連の南部の大衆的デモンストレーションのような、真に高度の積極的な闘争形態に向けること(一二)とである。今日はるかに重要なことは、われわれの幹部を拡大し、勢力を組織し、よりいっそう直接的で公然たる大衆闘争にそなえることである。

もちろん、ここで言っていることは、社会民主主義者の日々の日常活動をなおざりにするなどということではない。社会民主主義者はけっして日常活動を放棄しはしないであろう。彼らは、まさに日常活動をこそ、決戦のための真実の準備とみるのである。なぜなら、彼らは、プロレタリアートの積極性、自覚、組織性に、また、勤労・被搾取大衆のなかでのプロレタリアートの影響力に、完全に、そしてそれのみに期待をかけるからである。ここで問題にしているのは、正しい道を指示すること、前進の必要に注意を向けることであり、また、戦術の動揺が有害であるということである。日常活動は、自覚したプロレタリアートがけっしてどんな事情のもとでも忘れてはならないものであるが、組織活動もこの日常活動のうちにはいる。広範で多面的な労働者組織がなく、それらの組織と革命的な社会民主党との接近がなければ、専制との闘争の成功は不可能である。ところでまた、組織活動の仕事は、組織攪乱的な傾向——他のあらゆる国の場合と同様に、わが国でも、無定見で、自分のスローガンを手袋かなにかのようにとりかえる、わが党のインテリゲンツィア的部分が発揮している傾向——に、断固たる反撃をくわえることなしには不可能である。また、組織活動の仕事は、あらゆる離散状態をおおいかくそうとする、愚かな、反動的な、過程としての組織の「理論(一三)」と闘争することなしには、不可能である。

ロシアの政治的危機の発展は、いまやなによりも日本との戦争の成りゆきにかかっている。この戦争は、なにもまして専制の腐敗を暴露したし、いまも暴露しており、なににもまして専制を財政と軍事の点で無力化しており、苦しみぬいてきた人民大衆をだれよりも苦しめて蜂起へと駆りたてている。この犯罪的な恥ずべき戦争は、これらの大衆にはてしない犠牲を要求しているのである。専制国ロシアは立憲国日本にすでに打ちやぶられている。そして戦争が長びけば長びくほど、それだけ敗北はひどく、激しくなるだけであろう。ロシア海軍の最良の部分はすでに全滅し、旅順の状態も絶望的である。旅順の救援に向かっている艦隊は、成功はおろか、目的地に行きつく見こみさえまったくない。クロパトキンの率いる主力軍は、二〇万人以上を失って無力となり、敵のまえで孤立無援の状態にあり、敵は、旅順の占領後にはかならずこの主力軍を粉砕するであろう。軍事的崩壊は避けられない。それと同時に、不満、

動揺、憤激が一〇倍に強まることも避けられない。
われわれは全精力を傾けてこの瞬間にそなえなければならない。この瞬間には、ときにはここ、ときにはあそこと、ますます頻繁にくりかえし起こっている燃えあがりの一つが、巨大な人民運動にみちびくであろう。その瞬間には、プロレタリアートは、全人民に自由をたたかいとるため、公然の、広範な、そしてヨーロッパの全経験によって豊富にされた、社会主義のための闘争の可能性を労働者階級に保障するために、蜂起の先頭に立ちあがるであろう。

一九〇五年一月四日（一九〇四年一二月二二日）に新聞『フペリョード』第一号に社説として発表〔三〕
新聞『フペリョード』のテキストによって印刷
全集、第五版、第九巻、一二六―一三六ページ所収
邦訳全集、第八巻、三―一一ページ所収

労働者民主主義とブルジョア民主主義

ブルジョア民主主義者にたいする社会民主主義者すなわち労働者民主主義者の態度の問題は、古くて同時につねに新しい問題である。古い、というのは、この問題は社会民主主義が発生したそのときから提起されているからである。この問題の理論的基礎は、マルクス主義文献の最も初期の著作である『共産党宣言』や『資本論』のなかで、すでに解明されている。つねに新しい、というのは、おのおのの資本主義国の発展の一歩一歩につれて、種々の色合いのブルジョア民主主義と、社会主義運動の種々の潮流との関係の特殊な、特異な組合せが現われているからである。

わがロシアでも、この古い問題が現在とくに新しいものになっている。今日の問題提起をはっきり知るために、ち

ようとした歴史的考察から始めよう。古いロシアの革命的ナロードニキ(一四)は、空想的な、なかば無政府主義的な見地に立っていた。共同体の百姓はそのままで社会主義者であるものとみなされた。ロシアの教養ある社会の自由主義の背後には、ロシアのブルジョアジーの渇望がはっきりと読みとれた。そこで、政治的自由のための闘争は、ブルジョアジーに有利な諸制度のための闘争だとして、否定された。人民の意志派(一五)は一歩前進して政治闘争にうつったが、それを社会主義に結びつけることはできなかった。そして、わが国の共同体の社会主義的性格にたいする失われつつある信仰が、ロシアの民主主義的インテリゲンツィアは非階級的、非ブルジョア的な性格をもつというヴェ・ヴェ氏流の諸理論によって更新されはじめたとき、明白な社会主義的な問題提起はあいまいにされさえした。このことによって、以前はブルジョア自由主義を無条件に否認していたナロードニキ主義が、しだいにこのブルジョア自由主義と融合して、単一の自由主義的ナロードニキ主義の流派になっていく端緒が開かれた。最も穏健な文化主義的なものから最左翼の革命的＝テロリスト的なものにいたるまでの、ロシアのインテリゲンツィアの運動のブルジョア民主主義的本質は、プロレタリアのイデオロギー（社会民主主義）と大衆的労働運動とが発生し発展すると同時に、しだいしだいに明白になりはじめた。だが、この大衆的労働運動の成長にともなって、社会民主主義者のあいだに分裂が起こった。社会民主主義の革命的な一翼と日和見主義的な一翼とがはっきりと現われ、前者はわれわれの運動のプロレタリア的傾向を表現し、後者はインテリゲンツィア的傾向を表現した。合法マルクス主義(一六)はまもなく実際には「ブルジョア文献におけるマルクス主義の反映」〔レーニン『ナロードニキ主義の経済学的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判』、全集、第一巻所収〕(一七)であることがわかり、ベルンシュタイン的日和見主義を経て、まっすぐに自由主義に到達した。一方では、社会民主主義運動内の経済主義者は、純労働運動というなかば無政府主義的な考えに心酔して、社会主義者がブルジョア的反政府派を支持するのは階級的見地を裏切ることだと考え、ロシアにブルジョア民主主義派があるなどというのは幻影であると言明した。* 他方では、他の色合いの経済主義者は、同じ純労働運動に心酔して、わが国の自由主義者やゼムストヴォ議員や文化主義者のおこなっている専制との社会的闘争を革命的社会主義者が無視しているといって、これを非難した。**

* 『イスクラ』に反対したラボーチェエ・デーロ派の小冊子『二つの大会』（三二ページ）(一八)を参照。

** 『ラボーチャヤ・ムィスリ』一八九九年九月号の別冊付録

を参照。

旧『イスクラ』(一六)は、多くの人がまだそれに気づいていなかったときに、ロシアにおけるブルジョア民主主義の諸要素を示した。旧『イスクラ』は、プロレタリアートがこの民主主義を支持するように要求した（学生運動の支持について述べた『イスクラ』第二号〔『一八三人の学生の兵籍編入』〕、第四巻、四五三—四五九ページ〕、非合法のゼムストヴォ大会について述べた第八号、自由主義的な貴族会長について述べた第一六号〔『政治的扇動と「階級的見地」』〕、第五巻、三五一—三五八ページ〕、ゼムストヴォ内の動揺について述べた第一八号*〔『ゼムストヴォ議員への手紙』〕、第六巻、一四六—一五七ページ〕、その他を参照）。旧『イスクラ』は、自由主義的および急進主義的運動の階級的、ブルジョア的な性格をたえず指摘し、態度をはっきりさせないオスヴォボジデーニエ派にむかって次のように述べた。「共通の敵にたいする真の（口先だけのではない）共同闘争は、政治的策謀によってではなく、故ステプニャクがかつて自己抑制、自己隠蔽と名づけたものによってではなく、また、外交的な相互承認というお定まりの嘘によってではなくて、闘争への実際の参加によって、闘争の実際の統一によって保障されるという、簡単な真理を理解すべきときではなかろうか。軍事的＝警察的、封建的＝教権的反動にたいするドイツの社会民主主義者の闘争が、国民のある階級（たとえば、自由主義的ブルジョアジー）に立脚するなんらかの真の政党の闘争との真に共同の闘争となったときには、共同行動は相互承認という空文句なしに打ちたてられた」（第二六号）と〔同、二六一ページ〕）。

* 旧『イスクラ』の無署名論文の筆者を明らかにするというきわめて有益な仕事を始めたスタロヴェルとプレハーノフに私はこの機会に心からの感謝を表明したい。彼らがこの仕事を徹底的にやりぬくことを期待する。——ラボーチェエ・デーロ派への新『イスクラ』の転換を評価するのにこのうえなく特徴的な材料が、得られるであろう。

旧『イスクラ』によるこういう問題提起は、社会民主主義者の自由主義者にたいする関係についての今日の論争のまぎわにまで、われわれをみちびく。周知のように、この論争は、多数派の見地に合致する決議（プレハーノフの決議）と少数派の見地に合致する決議（スタロヴェルの決議）(二三)との、二つの決議をおこなった第二回大会から始まった。第一の決議は、ブルジョアジーの運動としての自由主義の階級的性格を正確に指摘し、主要な自由主義的流派（オスヴォボジデーニエ派）の反革命的で反プロレタリア的な性格をプロレタリアートにむかって明らかにするという任務を前面におしだしている。この決議は、プロレタリ

アートがブルジョア民主主義派を支持する必要を認めながらも、政治策謀的な相互承認におちいることなく、旧『イスクラ』の精神で、問題を闘争における共同性に帰着させている。「ブルジョアジーがツァーリズムとの彼らの闘争で革命的であるか、あるいはすくなくとも反政府的であるかぎりで」、そのかぎりで社会民主主義者はこれを「支持しなければならない」と。

これに反して、スタロヴェルの決議は自由主義と民主主義との階級的分析をあたえていない。この決議は善意にみちたものであり、このうえなく高度でりっぱな、だが残念ながら仮空の、口先だけの協定の条件を作文している。すなわち、自由主義者あるいは民主主義者はこれこれのことを声明すべきであり、これこれの要求をかかげてはならず、これこれのことをそのスローガンとすべきである、と！　ブルジョア民主主義の歴史がいたるところで労働者にたいして、声明や要求やスローガンを信じてはならないと警告していないかのように！　ブルジョア民主主義者が完全な自由のスローガンだけでなく、平等のスローガンや社会主義のスローガンまでもかかげながら、しかもブルジョア民主主義者であることをやめず、またそうすることによってプロレタリアートの意識をさらに「くもらせた」実例を、歴史がわれわれに何百も示していないかのように！　社会民主党のインテリゲンツィア的一翼は、このように意識をくもらせることに反対してたたかうにあたって、くもらせないようにという条件をブルジョア民主主義者につきつけることによってたたかおうとしているのだ！　だが、プロレタリア的一翼は、民主主義の階級的内容を分析することによってたたかうのである。インテリゲンツィア的一翼は口先だけの協定条件を追いもとめている。だが、プロレタリア的一翼は、実際の共同闘争を要求している。インテリゲンツィア的一翼は、すぐれた善良な、そして協定するに値いするブルジョアジーの基準をあみだしている。だが、プロレタリア的一翼は、ブルジョアジーからどんな好意をも期待せず、ブルジョアジーが実際にツァーリズムとたたかうかぎりで、どんなブルジョアジーをでも、たとえ最悪のブルジョアジーをでも、支持する。インテリゲンツィア的一翼は小商人の見地に迷いこんでいる。すなわち、もし君が社会革命党の側にでなく社会民主主義者の側に立つなら、われわれは共通の敵にたいする協定を結ぶことに同意する、そうでなければ同意しない、というのである。だが、プロレタリア的一翼は目的にかなっているかどうかという見地にたつ。すなわち、われわれが諸君を支持するかどうかは、もっぱら、われわれの敵にたいしてどんな打撃にせよよりたくみに打撃をくわえることができるかどうかにか

かっている、と。

スタロヴェルの決議は、現実と接触するとたちまちそのあらゆる欠陥を明るみにだしてしまった。こういう接触となったのは、新『イスクラ』編集局の有名な計画、(三)「より高度の型の動員」の計画と、それに関連する新『イスクラ』第七七号（主張〔ネゴレフの論文〕『岐路にたつ民主主義』）と第七八号（スタロヴェルの小論〔『われわれの不幸、自由主義とヘゲモニーについて』〕）との原則上の議論であった。この計画についてはすでにレーニンの小冊子で述べてあるが〔『ゼムストヴォ・カンパニアと「イスクラ」の計画』、全集、第七巻、五三三—五五六ページ〕、右の議論についてはここで論じなければならない。

新『イスクラ』の上記の議論の基本思想（あるいは、より正しくいえば基本的無思慮）は、ゼムストヴォ議員とブルジョア民主主義派との区別だてである。この区別だてはこの二つの論文を赤い糸のように貫いているが、なおそのさい注意ぶかい読者は、ブルジョア民主主義という用語のかわりに、またそれとならんで、同義語として民主主義、急進的インテリゲンツィア（原文のまま！）、生まれつつある民主主義、インテリゲンツィア的民主主義という用語が用いられているのに気がつく。この区別だては、特有の謙虚さをもつ新『イスクラ』によって、一大発見に高められ、哀れなレーニンが「理解する能力のなかった」独創的な概念に高められている。この区別だては、われわれがトロツキーからもたびたび聞かされている新しい闘争方法と、じかに結びついている。すなわち、ゼムストヴォ自由主義は「さそり鞭〔鉤つきの鞭、旧訳聖書、列王紀略、一、第二章〕で打つよりほかはない」が、インテリゲンツィア的民主主義はわれわれと協定を結ぶのに適している、というのである。民主主義派は独自の勢力として自主的に行動すべきである。「ロシアの自由主義は、それからその歴史的に不可欠の部分、その運動神経（謹聴！）、そのブルジョア民主主義的半身を取りされば、さそり鞭で打つよりほかはない」。「ロシアの自由主義」にかんするレーニンの考えのなかには、「社会民主党が民主主義の前衛としていつか（！）影響を及ぼしうるような、そういう社会的要素の存在する余地はない」。

これが新しい理論なのである。最近の『イスクラ』のすべての新しい理論と同じく、この理論も、まったくの混乱を表わしている。第一に、インテリゲンツィア的民主主義をだれよりもさきに発見したという主張は、根拠がなく、こっけいである。第二に、ゼムストヴォ自由主義とブルジョア民主主義との区別だてはまちがっている。第三に、インテリゲンツィアが独自の勢力になりうるという意見はな

りたちえない。第四に、ゼムストヴォ自由主義が（「ブルジョア民主主義的」半身なしには）、さそり鞭で打つよりほかはないうんぬんの主張は、正当でない。これらすべての点を検討しよう。

まず、レーニンがインテリゲンツィア的民主主義と第三要素[三]との発生を無視したかのようにいう点。『ザリャー』[四]の第二―三号をひらいてみよう。スタロヴェルの小論に引用されているその『国内評論』〔全集、第五巻、二五五―三一一ページ〕をとりあげてみよう。第三章の表題は、「第三要素」となっている。この章をくってみると、「ゼムストヴォに、医師、技術家等としてつとめる人々の数や勢力の増大」〔二八六ページ〕について述べているし、「意のままにならない経済的発展が、〔……〕インテリゲンツィアにたいする需要を呼びおこし、彼らの数がますますふえている」〔二八七ページ〕ことについて述べており、「これらのインテリゲンツィアと官僚や参事会の首脳者との紛争の不可避性」について、「最近では、この衝突はまさしく流行病的性格」〔二八九ページ〕をおびるにいたったことについて、「専制が一般にインテリゲンツィアの利益と和解しえないものであること」〔二九二ページ〕について述べており、また社会民主主義の「旗のもとへ」これらの要素を直接に招集すること〔二九三ページ〕が述べてある。……

すてきではないか？　新発見のインテリゲンツィア的民主主義と、それを社会民主党の旗のもとに招集する必要とは、邪悪なレーニンによって三年もまえに「発見されている」のだ！

もちろん、そのときには、ゼムストヴォ議員とブルジョア民主主義派との対置はまだ発見されていなかった。だが、この対置の賢さは、モスクワ県とロシア帝国の領土との対置というのと同じくらいのものである。制限選挙にもとづくゼムストヴォ議員と貴族会長は、彼らが専制と農奴制に反対するかぎりでは、民主主義者である。ありとあらゆるブルジョア民主主義が程度こそまちまちであれ、いずれも制限され、狭小で、首尾一貫していないように、彼らの民主主義も制限され、狭小で、首尾一貫していない。『イスクラ』第七七号の主張はわが国の自由主義者を分析して、それを次の諸グループに分けている。（一）農奴主的地主、（二）自由主義的地主、（三）制限選挙制憲法を支持する自由主義的インテリゲンツィア、（四）最左翼の民主主義的インテリゲンツィア。この分析は不完全で混乱している。なぜなら、インテリゲンツィアの区分が、そのインテリゲンツィアによって利益を表現されている種々の階級やグループの区分とごっちゃになっているからである。ロシアの

ブルジョア民主主義は、広範な地主層の利益のほかに多数の商人や工業家、おもに中小の商人や工業家の利益と、それから（これがとくに重要なのだが）農民のうちの多数の大小の経営主の利益を反映している。ロシアのブルジョア民主主義のこの最も広範な層を無視しているのが、『イスクラ』の分析の第一の欠陥である。第二の欠陥は、ロシアの民主主義的インテリゲンツィアがその政治的立場の点で三つの流派に――すなわち、オスヴォボジデーニエ派〔解放同盟〕と社会革命党と社会民主党に――分かれているのが、偶然ではなく必然であることを、忘れている点である。これらの流派はいずれも長い歴史をもっていて、それぞれが（専制国家で可能なかぎりの明確さで）、ブルジョア民主主義の穏健なイデオローグの見地と、その革命的なイデオローグの見地と、プロレタリアートの見地とを反映している。「民主主義は独自の勢力として行動すべきである」という新『イスクラ』の無邪気な願望ほど、珍妙なものはない。しかもそれとならんで、民主主義派は急進的インテリゲンツィアと同一視されているのだ！　新『イスクラ』は、「独自の勢力」になった急進的インテリゲンツィアあるいはインテリゲンツィア的民主主義派とは、まさしくわが国の「社会革命党」であることを、忘れてしまったのだ！　それ以外には、わが国の民主主義的インテリゲンツィアの「最左翼」は存在しえなかった。だが、もちろん、このようなインテリゲンツィアの独自の勢力ということは、皮肉な意味でしか、あるいは爆弾主義的な意味でしか、言えない。ブルジョア民主主義の基盤のうえで『オスヴォボジデーニエ』から左にすすむというのは、つまり社会革命党にむかってすすむことであって、それ以外ではない。

最後に、新『イスクラ』の最近の新発見、すなわち、「ブルジョア民主主義的半身なしの自由主義」はさそり鞭で打つよりほかはなく、もしゼムストヴォ議員以外には呼びかけるべき相手がいないとすれば、「ヘゲモニーの思想は捨てさったほうが賢明だ」という発見は、なおいっそう批判に耐えない。あらゆる自由主義者は、まさに実際に専制にたいする闘士として立ちあらわれるかぎりで、社会民主党の支持をえるのに適している。ヘゲモニーの思想は、唯一の最後まで首尾一貫した民主主義者であるプロレタリアートが、すべての首尾一貫しない（つまりブルジョア的な）民主主義者を支持するというまさにそのことによって、実現されるのである。ヘゲモニーにたいする小ブルジョア的な、小商人的な理解だけが、協定や相互承認や口先の条件をヘゲモニーの核心だとみるのである。プロレタリアの見地からみれば、闘争におけるヘゲモニーは、だれよりも

精力的にたたかうもの、敵に打撃をあたえるあらゆる機会を利用するもの、言行が背離しないもの、したがってあらゆる中途半端性を批判する、民主主義の思想的指導者であるものに属する。* 新『イスクラ』が、中途半端性はブルジョア民主主義の政治＝経済的特性ではなくて道徳的な特性であると考え、また、自由主義者がそれに達しない場合にはさそり鞭で打つよりほかはなく、それをこえる場合には協定するのに値いするというような、中途半端性の基準をさがしもとめることができるし、またさがしもとめるべきであると考えているのは、ひどい誤りである。これはつまり、「許しうる卑劣さの程度をまえもってきめる」ことである。実際、次のことばをよく考えてみたまえ。――反政府的諸グループが普通・平等・直接・秘密の選挙権を承認することを、彼らとの協定の条件として提出することは、「彼らをその要求をためす確かな試薬、民主主義のリトマス試験紙にかけ、プロレタリアの協力の全価値を彼らの政治的打算の秤りにのせること」（第七八号）を意味する、と。なんとこれは美しく書かれていることだろう！ そして、この美しいことばの筆者スタロヴェルにむかって、なんとこう言いたくなることか、――わが友アルカーヂー・ニコラーエヴィチ〔スタロヴェル＝ポトレソフの名と父称〕よ、美辞麗句を弄するな！ と。ストルーヴェ氏は、「解放同盟」の綱領に普通選挙権を書きいれたとき、スタロヴェルの確かな試薬にただの一筆で反応した。そして、この当のストルーヴェが、これらすべての綱領は自由主義者にとってはたんなる紙片であり、リトマス試験紙ではなくただの紙片であるということを、すでに幾度となく実際に証明してくれた。というのは、ブルジョア民主主義者にとっては、きょうあることを書き、あすはまた別のことを書くのは、わけないことだからである。社会民主主義へうつりつつある多くのブルジョア・インテリゲンツィアでさえ、このような特性をもっている。ヨーロッパとロシアの自由主義の歴史全体は、言行不一致の例を何百となく示しており、だからこそ確かな試験紙を工夫しようとするスタロヴェルの志向はおめでたいのである。

* 明敏な新イスクラ派のための注。なんの条件もつけずにプロレタリアートが精力的に闘争すると、勝利の成果をブルジョアジーに利用されることになる、と言う人がおそらくあるだろう。われわれは答えとしてこう質問しよう。プロレタリアートの独自の力以外に、プロレタリアートの条件が実施されるどんな保障がありうるか？ と。

このおめでたい志向はスタロヴェルをまた次のような偉大な思想にみちびいている。すなわち、普通選挙権に同意しないブルジョアをツァーリズムにたいする彼らの闘争で

支持するのは、「普通選挙権の思想を反古にする」ことを意味する！と。ひょっとすると、スタロヴェルは、われわれのためにもう一つの美しい小論を書いて、専制との闘争で君主主義者を支持すると、われわれは共和制の「思想」を反古にすることになるということを、証明してくれるのであろうか？　不幸なことは、スタロヴェルの思想がるぐるまわっていて、唯一の現実的な基準である、闘争への実際の参加の程度ということを見うしなっていることである。そのため、実践においては不可避的に、急進的インテリゲンツィアを美化することになり、それとの「協定」が可能であると公言されることになるのである。マルクス主義を嘲笑して、インテリゲンツィアが自由主義の「運動神経」（口達者の召使ではないのか？）だと公言される。フランスとイタリアの急進主義者が、反民主主義的あるいは反プロレタリア的要求に無縁な人々という称号をおくられる。だが、これらの急進主義者がかぞえきれないほどたびたび彼らの綱領を裏切り、プロレタリアートの意識をくもらせたことは、だれもが知っていることだし、また、『イスクラ』の同じ号（第七八号）の次のページ（七ページ）では、イタリアの君主主義者と共和主義者が「社会主義との闘争において一致」したしだいを諸君は読むことができる。全人民の代表を立法に参加させることが必要だというサラトフのインテリゲンツィアの決議（衛生協会の）が、「真の民主主義の声（!!）」だと公言される（第七七号）。プロレタリアがゼムストヴォ・カンパニアに参加する実際的な計画には、「反政府的ブルジョアジーの左翼の代表者とある種の協定」（大恐慌をおこさせないという有名な協定）「を結ぶ」ようにという忠告がともなっている。そして、音にきこえたスタロヴェルの協定条件はどこにいってしまったのか、というレーニンの問いにたいして、新『イスクラ』編集局はこう答えたのだ。

「この条件はいつも党員に記憶されていなければならないし、党員は、どんな条件のもとでのみ党は民主主義的政党と政治協定を正式に結ぶことに同意するかということをわきまえていて、手紙で問題にされている部分的協定の場合にも、ブルジョア的反政府派の信頼できる代表者——真の民主主義者——と、他人の骨おりでうまい汁をすう自由主義者とを、厳重に区別する道徳的義務がある[**]」。

[*] わがアルカーヂー・ニコラーエヴィチの散文のちょっとした見本をもう一つ。「この数年間ロシアの社会生活をあとづけるおりのあった人はだれでも、疑いもなく、あらゆるイデオロギー的表層をはぎとられ、歴史的過去のあらゆる遺物を

はぎとられた立憲的自由のかざらない思想への民主主義的欲求が強まったことに、注目しないわけにはいかなかった。この欲求は、民主主義層の内部における長期にわたる分子的変化の過程、二〇年にわたってあいつづく幾多の世代の注意と関心を万花鏡のような雑多さで満たしてきた、民主主義のオヴィディウス的変態[三四]の過程の、一種の実現である」。残念ながら、これは正しくない。なぜなら、自由の思想はあらわにされたどころか、まさにブルジョア民主主義の最新の哲学者たちの観念論によって飾られているからである（ブルガコフ、ベルチャーエフ、ノヴゴロドツェフ、その他。『観念論の諸問題』[三五]と『ノーヴイ・プーチ』（『新しい道』）[三六]を見よ）。また、スタロヴェル、トロツキー、マルトフの万花鏡のように雑多なオヴィディウス的変態の全体は、残念ながら、空文句へのあらわな欲求によって貫かれている。

** 編集局の第二の『党組織への手紙』を見よ。これも、秘密な点などまったくないのに、秘密に出版されている（「党員だけのために」）。編集局全体のこの回答を、プレハーノフの「秘密の」小冊子『ツァーリズムとの自由主義的ブルジョアジーの闘争にかんするわれわれの戦術について』（ジュネーヴ、一九〇五年、中央委員会への手紙。党員だけのために）と比較することは、非常に教訓的である。われわれはのちにまた、この二つの著作に立ちかえりたいと思っている。

一段、また一段。党の協定（スタロヴェルの決議にもとづけば、唯一の許しうる協定であるところの）とならんで、個々の都市における部分的協定が現われた。正式の協定とならんで、道徳的協定が現われた。「条件」と、その条件が負わせる「道徳的」義務とを口先だけで承認することが、「信頼できる」「真の民主主義者」という称号をあたえることがわかった。だが、何十人、何百人というゼムストヴォのおしゃべり屋が、社会民主主義者をなだめるためでさえあれば、口先では、どんな言明でもし、自分は社会主義者であると、急進主義者の名誉にかけての誓言さえするであろうことを、どんな幼児でも知っている。

いや、プロレタリアートはこのようなスローガンや声明や協定の遊戯に応じはしないだろう。プロレタリアートはブルジョア民主主義者が信頼できる民主主義者ではありえないことをけっして忘れないであろう。プロレタリアートは、大恐慌を起こさせないというブルジョア民主主義派との協定にもとづいてこれを支持するのでもなければ、彼らが信頼すべきものだという信念にもとづいてそうするのでもなくて、ブルジョア民主主義者が実際に専制とたたかう場合に、そのかぎりにおいてこれを支持するであろう。このような支持は、プロレタリアートが独自の社会革命の目標を達成するために必要なのである。

『フペリョード』第三号、一九〇五年一月二四（一一）日

全集、第五版、第九巻、一七九―一八九ページ所収
邦訳全集、第八巻、六〇―七〇ページ所収

民主主義革命における社会民主党の二つの戦術(二七)

まえがき

革命的時期には、いろいろな事件が起こって、情勢においつかないようについていくのは、非常にむずかしい。これらの事件は、革命諸党の戦術的スローガンを評価するための新しい材料を驚くほどたくさん提供してくれる。この小冊子は、オデッサ事件以前に書いたものである。われわれがすでに『プロレタリー』(二八)(第九号、『革命は教える』〔全集、第九巻、一四五―一四六ページ〕)で指摘しておいたように、オデッサ事件*は、過程としての蜂起(二九)の理論をつくりだして臨時革命政府を宣伝するのを否認していた社会民主主義者までも、事実上彼らの論敵の立場に移らせたか、あるいは移らせはじめた。疑いもなく、革命は、平穏な政治的発展の時代にはありそうもないと思われるほどすみやかに、また徹底的に、人々を教育する。しかも革命は――これがとくにたいせつなことだが――指導者を教育するだけでなく、大衆をも教育する。

＊ 戦艦「ポチョムキン」号の反乱(三〇)のこと〔一九〇七年版への原注〕。

革命がロシアの労働者大衆に社会民主主義を教えこむだろうということは、すこしも疑う余地がない。革命は、いろいろの社会階級の真の性格を示し、わが国の民主主義のブルジョア的性格と、農民――ブルジョア民主主義的な意味で革命的だが、しかし「社会化」の思想をいだいているわけではなく、農民ブルジョアジーと農村プロレタリアートとの新しい階級闘争をはらんでいる農民――のほんとうの欲求を示すことによって、社会民主党の綱領と戦術を事実のうえで確証してくれるだろう。たとえば「社会革命党」の綱領草案(三一)のなかでは、ロシアにおける資本主義の発展の問題についても、わが「社会」の民主主義の問題についても、また農民蜂起の完全な勝利の意義の問題についても、昔のナロードニキ派の古い幻想がはっきりとうかがわ

れるが、これらの古い幻想は、すべて革命によって容赦なくすっかり吹きとばされてしまうだろう。革命は、いろいろな階級にはじめて真の政治的洗礼を施すであろう。これらの階級は、そのイデオローグの綱領や戦術的スローガンのなかだけでなく、大衆の公然たる政治行動のなかでもその本性を示し、革命の終わるころには明確な政治的相貌をそなえるようになるだろう。

疑いもなく、革命はわれわれを教え、人民大衆を教えるであろう。しかし、たたかっている政党にとっていま問題となっていることは、われわれが革命になにかを教えることができるかどうかであり、またわれわれがわれわれの社会民主主義学説の正しさや、またただ一つ最後まで革命的な階級であるプロレタリアートとわれわれとの結びつきを利用して、革命にプロレタリア的な刻印を押し、口先ではなく、実際に革命を真の決定的勝利にみちびき、民主主義的ブルジョアジーの動揺性と中途半端性と裏切りとが作用する余地のないようにすることができるかどうか、ということである。

われわれが、全力をそそがなければならないのはこの目標である。ところで、われわれがこの目標を達成できるかどうかは、一方では、われわれの政治情勢の判断が正しいかどうか、われわれの戦術的スローガンがまちがっていないかどうかにかかっているし、他方では、これらのスローガンが労働者大衆の現実の闘争力によって支持されるかどうかにかかっている。わが党のすべての組織やグループの通常の、正規の、日常の活動、すなわち宣伝、扇動、組織の活動はすべて、大衆との結びつきを強化し拡大することに向けられている。この活動はいつでも必要であるが、これだけで十分とみなすことはできない。とくに革命的時期には、これだけではまったく不十分である。このような時期には、労働者階級は本能的に公然たる革命的行動にむかって突きすすむものであるから、われわれは、この革命的行動の任務を正しく定め、ついで、この任務についての知識と理解をできるだけひろく普及させる能力をもたなければならない。われわれの大衆との結びつきについて一般におこなわれている悲観論が、革命におけるプロレタリアートの役割についてのブルジョア的見解を隠している場合がいまはとくに多いことを忘れてはならない。われわれが労働者階級の教育と組織のために、さらにさらに多くの活動をしなければならないことは疑いないが、しかし、いまおよそ問題は、この教育とこの組織との主要な政治的重点をどこにおくか、ということである。労働組合や合法団体におくか、それとも武装蜂起や、革命軍と革命政府を創設する仕事におくか？　このどちらによっても、労働者階級は

教育され組織される。もちろん、このどちらも欠くことができないものである。だが、いま、当面の革命では、およそ問題は、労働者階級の教育と組織の重点はどちらにあるのか、前者にかそれとも後者にか、という点に帰着する。

革命の結末は、労働者階級が、専制にたいする攻撃力は強くても政治的には無力な、ブルジョアジーの助手の役割を果たすか、それとも人民革命の指導者の役割を果たすか、そのどちらであるかにかかっている。ブルジョアジーの自覚した代表者たちは、このことにりっぱに気づいている。だからこそ『オスヴォボジデーニエ』[30]は、いま労働組合や合法団体を前面に押しだしている、社会民主党内のアキモフ主義[31]、「経済主義」を、ほめたたえているのである。だからこそストルーヴェ氏は、新イスクラ派内のアキモフ主義の原則上の諸傾向を歓迎しているのである（『オスヴォボジデーニエ』第七二号）。だからこそ彼は、ロシア社会民主労働党第三回大会[32]の諸決定の憎むべき革命的狭量にくってかかるのである。

社会民主党が正しい戦術的スローガンをもつことは、いま、大衆の指導にとってとくに重要な意義をもっている。革命時に原則の一貫した戦術的スローガンの意義を低く[33]見ることほど危険なことはない。たとえば、『イスクラ』は第一〇四号で、社会民主党内の論敵の立場に事実上移りつつあるが、しかも同時に、一連の失敗や誤りなどをともないながら運動がすすんでゆく道をさし示す、実生活にさきんじたスローガンや戦術的決定のもつ意義をかろんずる意見を吐いている。これに反して、ただ事件のあとからよちよちついていくのではなく、マルクス主義の一貫した原則の精神にしたがってプロレタリアートを指導しようと望んでいる党にとっては、正しい戦術的決定をつくりあげることは、きわめて重大な意義をもっている。ロシア社会民主労働党第三回大会の諸決議と党の離脱部分の協議会*[34]の諸決議は、個々の評論家たちがたまたま述べた見解ではなく、社会民主主義的プロレタリアートの責任ある代表者たちが採択した戦術上の見解の、最も正確で、最も考えぬいた、最も完全な表明である。わが党は全党員によって採択された正確な綱領をもっている点で、他のどの党よりもすすんでいる。わが党は、『オスヴォボジデーニエ』の民主主義的ブルジョアジーの日和見主義とは反対に、また社会革命派の革命的空文句とは反対に、自党の戦術的決議に厳格な態度をとる点でも他の諸政党に模範を示すべきである。その社会革命派は、綱領「草案」を提出し、自分の目のまえで起こっている革命がブルジョア革命かどうかという問題の究明にとりかかることに、革命の時期になってはじめて気がついたのである。

＊ ロシア社会民主労働党第三回大会（ロンドン、一九〇五年五月）には、ボリシェヴィキだけが参加した。「協議会」（ジュネーヴ、同じころ）には、メンシェヴィキだけが参加した。メンシェヴィキは、この小冊子では、しばしば「新イスクラ派」とよばれている。というのは、彼らは、『イスクラ』の発行をつづけてはいたが、彼らの当時の同志であるトロツキーの口をつうじて、旧『イスクラ』と新『イスクラ』のあいだには深淵がある、と声明したからである。〔一九〇七年版への原注〕

まさにこの理由から、われわれは、ロシア社会民主労働党第三回大会の戦術的諸決議と「協議会」の戦術的諸決議とを綿密に研究し、後者にあるマルクス主義の原則からの逸脱を明示し、民主主義革命における社会民主主義的プロレタリアートの具体的任務をはっきり理解することを、革命的社会民主主義の最も緊要な仕事であると考える。この本はまさにこの仕事にあてられている。マルクス主義の原則と革命の教訓という見地からわれわれの戦術を検討することは、口先で説教するだけにとどまらずロシア社会民主労働党全体の将来の完全な統合の基礎としての戦術の統一を現実に準備しようと望んでいる人々にとっても必要なことである。

エヌ・レーニン

一九〇五年七月

一　緊要な政治問題

現在の革命的時期に日程にのぼっているのは、全人民的憲法制定議会を召集する問題である。この問題をどう解決するかについて、意見が分かれている。三つの政治的流派が見られる。ツァーリ政府は、人民代表を召集する必要があることを認めてはいるが、しかし、その議会が全人民的なものに、また憲法を制定する議会になるのを絶対に認めるつもりはない。ブルィギン委員会(三六)の活動についての新聞報道を信じるなら、ツァーリ政府は、扇動の自由をあたえないでおいて、狭い制限選挙制または狭い身分別選挙制によって選挙される諮問議会に同意しているようである。だが、革命的プロレタリアートは、社会民主党の指導を受けているかぎりでは、権力を憲法制定議会に完全に移すことを要求し、そのために普通選挙権を求め、扇動の完全な自由を求めるだけでなく、さらにツァーリ政府を即時打倒しこれを臨時革命政府に代えようと努力している。最後に、いわゆる「立憲民主党」(三七)の指導者たちの口をつうじて自分たちの希望を表明している自由主義的ブルジョアジーは、ツァーリ政府の打倒を要求せず、臨時政府のスローガンをかかげず、したがって選挙が完全に自由で公正なものとな

り、代表議会が真に全人民的で真に憲法を制定する議会となりうるような現実の保障を設けることを主張していない。「オスヴォボジデーニエ派」の唯一の重要な社会的支柱である自由主義的ブルジョアジーは、実際は、ツァーリと革命的人民とのできるだけ平穏な取引を、しかも彼らブルジョアジーには最大の権力があたえられ、革命的人民、すなわちプロレタリアートと農民には最小の権力しかあたえられないような取引を求めているのである。

これが現在の政治情勢である。これが、今日のロシアの三つの主要な社会勢力に対応する、三つの主要な政治的流派である。「オスヴォボジデーニエ派」が、革命にたいする彼らの中途半端な政策、すなわち、もっと率直簡明にいえば変節的、裏切り的な政策を、えせ民主主義的な空文句でおおいかくしていることについては、われわれはすでに一度ならず『プロレタリー』（第三・第四・第五号）で述べておいた〔全集、第八巻、四九〇—四九九、五一七—五三二ページ〕。ここでは、社会民主主義者が当面の任務をどのように考えているかを見てみよう。この点についての絶好の材料は、つい最近ロシア社会民主労働党第三回大会と党の離脱部分の「協議会」とが採択した二つの決議である。この二つの決議のうち、どちらが当面の政治情勢をより正しく考慮し、革命的プロレタリアートの戦術をより正しく規定しているか、という問題は非常に重要である。だから、宣伝者、扇動者および組織者としての自分の義務を意識的に果たそうとする社会民主主義者ならだれでも、事の本質にかかわりのないことはまったく度外視して、入念にこの問題を究明しなければならない。

政党の戦術というのは、その党の政治的態度、言いかえればその党の政治活動の性格、方向、方法のことである。戦術上の決議は、新しい任務に関連して、あるいは新しい政治情勢に直面して、党の政治的態度を全体として厳密に定めるために党大会によって採択されるものである。ロシアに始まった革命は、こうした新しい情勢を生みだした。人民の圧倒的多数がツァーリ政府から完全に、断固として、公然と離脱したことがそれである。新しい問題は、真に全人民的で、真に憲法を制定する議会を召集する実際的方法はどのようなものか、という点にある（理論的には、このような議会の問題は、すでに早くから社会民主党が、他のすべての政党に先んじて正式に党綱領のなかで解決している）。もしも人民が政府からすでに離反しており、新しい秩序を打ち立てなければならないということが大衆に意識されているとすれば、政府を転覆することを自分の目標とした党は、転覆される古い政府のかわりにどのような政府をつくるかを考えてみなければならない。臨時革命政府と

いう新しい問題が生まれてくる。この問題に十分な解答をあたえるためには、自覚したプロレタリアートの党は、第一に、いま進行中の革命における、また一般にプロレタリアートの全闘争における臨時革命政府の意義、第二に、臨時革命政府にたいする党の態度、第三に、この政府に社会民主党が参加する場合の正確な条件、第四に、下から、すなわち社会民主党がこの政府にくわわっていない場合に、この政府に圧力をくわえる条件を、明らかにしなければならない。これらの問題がすべて明らかにされる場合にはじめて、これについての党の政治的態度は、原則的な、明瞭な、確固たるものとなるであろう。

ロシア社会民主労働党第三回大会の決議が、この問題をどう解決しているかを見よう。以下がその全文である。

「臨時革命政府についての決議。

(一) プロレタリアートの直接の利益も、社会主義の終極目標をめざすプロレタリアートの闘争の利益も、できるだけ完全な政治的自由を要求しており、したがって、専制的統治形態を民主的共和制に代えることを要求している。

(二) ロシアにおける民主的共和制の実現は、勝利した人民蜂起の結果としてのみ可能である。この勝利した人民蜂起の機関が臨時革命政府であり、これだけが選挙運動の完全な自由を保障することができ、また秘密投票による普通・平等・直接の選挙権にもとづいて、人民の意志を真に表明する憲法制定議会を召集することができる。

(三) ロシアにおけるこの民主主義的変革は、ロシアの現在の社会経済制度のもとでは、ブルジョアジーの支配を弱めずに、これを強めるであろうし、ブルジョアジーは、ある時機には、すこしもためらうことなく、ロシアのプロレタリアートから革命期の獲得物のできるだけ多くの部分を奪いとろうと、かならず試みるであろう。

以上の点を考慮して、ロシア社会民主労働党第三回大会は、次のように決定する。

(イ) 最も予想される革命の経過について、また、臨時革命政府が革命のある時機に出現する必然性について、具体的な観念を労働者階級のあいだにひろめることが必要である。プロレタリアートはわれわれの綱領(最小限綱領)の当面の政治的経済的諸要求のすべてを実現するようにこの政府に要求するであろう。

(ロ) 力関係、その他あらかじめ正確に規定できない要因のいかんによっては、すべての反革命的企図と容赦なく闘争し、労働者階級の独自の利益を守るために、わが党の全権代表が臨時革命政府に参加することは許される。

(ハ) このような参加の必須条件としては、党がその全権代表を厳重に統制すること、完全な社会主義的変革をめ

ざしていて、そのかぎりではすべてのブルジョア政党に非妥協的に敵対する社会民主党の独立性を確固として守ることがあげられる。

（三）臨時革命政府に社会民主党が参加できるかどうかにかかわらず、革命の獲得物を守り、うちかため、拡大するために、社会民主党に指導される武装したプロレタリアートが臨時革命政府にたえず圧力をくわえる必要があるという考えを、プロレタリアートの最も広範な諸層のあいだに宣伝すべきである」。

二　臨時革命政府についてのロシア社会民主労働党第三回大会の決議はなにをわれわれに示しているか？

ロシア社会民主労働党第三回大会の決議は、その表題からわかるように、全体がもっぱら臨時革命政府の問題にあてられている。このことは、社会民主党の臨時革命政府参加の問題が、問題の一部として、それにふくまれていることを意味する。他方では、そこで論じられているのは、臨時革命政府のことだけであって、ほかのことではない。たとえば「権力奪取」一般などの問題は、そこにはまったくふくまれていない。大会がこの「権力奪取」の問題やこれに類する諸問題を取りのぞいたのは、正しいやり方であっただろうか？　疑いもなく正しかった。なぜなら、ロシアの政治情勢は、このような問題を全然日程にのぼせていないからである。その反対に、全人民が日程にのぼせているのは、専制の転覆と憲法制定議会の召集である。党大会が提起し解決しなければならない問題は、あれこれの評論家が時機や情勢にかかわりなく折りにふれてとりあげるような問題ではなく、当面の情勢からして、また社会発展の客観的過程の結果として、重大な政治的意義をもっている問題でなければならない。

現在の革命で、また一般にプロレタリアートの闘争で、臨時革命政府はどういう意義をもっているか？　大会決議は、プロレタリアートの利益の見地からしても、また「社会主義の終極目標」の見地からしても、「できるだけ完全な政治的自由」が必要だということをまずはじめに指摘して、それを説明している。ところで、完全な政治的自由のためには、すでにわが党の綱領が認めているように、ツァーリー専制を民主的共和制に代えることが必要である。大会決議のなかで民主的共和制のスローガンを強調することは、論理的にも原則的にも必要である。なぜなら、民主主義のための先進闘士としてのプロレタリアートは、まさに完全な自由を求めているからである。そのうえ、現在ではいわ

大会決議は、選挙運動の完全な自由を保障することができ、また人民の意志を真に表明する議会を召集することができるのは臨時革命政府だけであり、しかも勝利した人民蜂起の機関であるような臨時革命政府だけである、と述べている。この命題は正しいか？　これを論駁しようと思うものは、ツァーリ政府が、反動に手をさしのべずにおれるとか、選挙のさいに中立的でありうるとか、人民の意志が真に表明されるように配慮することができるとか、主張しなければならない。このような主張はまったくばかげたものであるから、だれもそれを公然と弁護しようとするものはあるまい。しかし、自由主義の旗をかかげてそうした主張を密輸入しているものこそ、わがオスヴォボジデーニエ派である。憲法制定議会は、だれかがこれを召集しなければならない。選挙の自由と公正は、だれかがこれを保障しなければならない。だれかが、この議会に完全な実力と権力を託さなければならない。そして、こういうことをほんとうに心からやる気があり、それを実現するためにあらゆる手をつくすことができるのは、蜂起の機関である革命政府だけである。ツァーリ政府は、かならずこれを妨げるであろう。ツァーリと取引した自由主義的政府、全幅的に人民蜂起に依拠してはいない自由主義的政府は、心からそれをやる気にもなれないし、またどんなに心からそうしようゆる立憲「民主」党、あるいは「オスヴォボジデーニエ」党といった君主主義者が、ちょうどいま「民主主義」の旗をかかげてわが国で活動しているだけに、このスローガンを強調することは、ますます適切なことである。共和制を樹立するためには、人民代表議会、しかもかならず全人民的な（秘密投票による普通・平等・直接選挙権にもとづいた）、憲法を制定する議会が絶対に必要である。だが、決議は、さらにこの点をも認めている。大会決議はそれだけにとどまっていない。「人民の意志を真に表明する」新しい制度を樹立するためには、代表議会を憲法制定議会と名づけるだけでは不十分である。この議会が「憲法を制定する」権力と実力とをもつことが必要である。大会決議は、この点を認めて、「憲法制定議会」という形式的なスローガンにとどまらずに、さらに、この議会が自分の任務をほんとうに果たすことができるためには、どうしても、なくてはならない物質的諸条件をもつけくわえて述べている。このように、名目上の憲法制定議会が実際の憲法制定議会となることができる諸条件を示すことは、ぜひとも必要である。というのは、立憲君主党に代表される自由主義的ブルジョアジーは、すでにわれわれが一度ならず指摘したように、全人民的憲法制定議会のスローガンを意識的にゆがめ、これを空文句にしているからである。

と思ったところで、それを実現することもできない。したがって、大会決議は、唯一の正しい、完全に一貫した民主主義的スローガンをかかげているわけである。

しかし、臨時革命政府の意義の評価は、もし民主主義的変革の階級的性格を見おとすなら、不完全な、誤ったものとなるだろう。だから、決議は、変革はブルジョアジーの支配を強めるだろう、とつけくわえている。このことは、今日の、すなわち資本主義的な社会経済制度のもとでは避けられないことである。だが、いくらかでも政治的に自由になったプロレタリアートにたいしてブルジョアジーの支配が強められる結果として、不可避的に両者のあいだには権力をめぐる死にものぐるいの闘争が起こらざるをえないし、ブルジョアジーは「プロレタリアートから革命期の獲得物を奪いとろう」と死にものぐるいの企てをやらざるをえない。だから、すべてのものにさきがけて、またすべてのものの先頭にたって民主主義のためにたたかうプロレタリアートは、ブルジョア民主主義の内部にひそんでいる新しい矛盾と、新しい闘争のことを一瞬も忘れてはならないのである。

こうして、決議の以上に検討した部分で、臨時革命政府の意義は、——自由と共和制のための闘争にたいする臨時革命政府の関係という点でも、憲法制定議会にたいするその関係という点でも、新しい階級闘争の地盤をきよめる民主主義的変革にたいするその関係という点でも——十分に評価されているのである。

次に、臨時革命政府にたいするプロレタリアートの立場は、一般的にいって、どういうものでなければならないか、ということが問題になる。大会決議は、なによりもまず、臨時革命政府が必要であるという信念を労働者階級のあいだにひろめよ、と党に直接勧告することで、この問題にこたえている。労働者階級は、この必要をさとらなければならない。「民主主義的」ブルジョアジーがツァーリ政府を打倒する問題をかげに押しやっておくのに反して、われわれはこの問題を第一位に押しだし、臨時革命政府の必要をつよく主張しなければならない。それだけでなく、われわれは、現在の歴史的時機の客観的諸条件とプロレタリア民主主義派の諸任務とに合致した、この政府の行動綱領を示さなければならない。この綱領は、わが党の最小限綱領そのものである。すなわち、一方では、現在の社会＝経済関係を基盤として十分に実現できるし、他方では、さらに一歩前進するため、社会主義を実現するために必要であるような、当面の政治的、経済的改革の綱領である。

こういうわけで、決議は、臨時革命政府の性格と目的とを十分明らかにしている。この政府は、その起原と基本的

性格からいえば、人民蜂起の機関でなければならない。その形式的な使命からいえば、全人民的憲法制定議会を召集する道具でなければならない。その活動の内容からいえば、専制に反対して蜂起した人民の利益を確保できる唯一の綱領であるプロレタリア民主主義の最小限綱領を実現するものでなければならない。

臨時政府は臨時的なものであるから、まだ全人民の承認を得ていない積極的な綱領を実行することはできない、といって反論するものがあるかもしれない。こういう反論は、反動派や「専制派」の詭弁にすぎまい。どんな積極的綱領も実行しないというのは、今日では腐敗しきった専制の農奴制的秩序の存続にあまんじることである。そうした秩序にあまんじることができるのは、革命の事業にたいする裏切者の政府だけであって、人民蜂起の機関である政府ではなかろう。憲法制定議会がまだ集会の自由を認めないこともありうる(!)という口実のもとに、憲法制定議会がこの自由を認めるまでは集会の自由を実際に実現することを断念せよと提議するものがあるなら、それは物笑いのたねであろう。臨時革命政府が最小限綱領を即時実現することに異議をとなえることも、同じく物笑いのたねである。

最後に、決議は、最小限綱領の実現を臨時革命政府の任務とすることによって、最大限綱領の即時実現とか、社会主義的変革のための権力獲得とかいう、ばかげた、なかば無政府主義的な思想を排除していることを注意しておこう。ロシアの経済的発展の程度(客観的条件)とプロレタリアートの広範な大衆の自覚と組織の程度(客観的条件と不可分に結びついた主体的条件)では、労働者階級を即時完全に解放することは不可能である。いま進行している民主主義的変革がブルジョア的性格のものであることを無視していられるのは、まったく無知な人々だけである。社会主義の目標と、それを実現する方法について、労働者大衆がいまのところろすこししか知らないことを忘れていられるのは、最も素朴な楽天家だけである。だが、われわれはみな確信している――労働者の解放は労働者自身の事業でしかありえない、大衆の自覚と組織がなくては、また全ブルジョアジーとの公然たる階級闘争によって大衆を訓練し教育せずには、社会主義革命は問題になりえない、と。だから、われわれがまるで社会主義的変革を延期しているように言う無政府主義的反対論にこたえて、われわれはこう言おう。われわれは社会主義的変革を延期しているのではなく、唯一の可能な方法によって、唯一の正しい道をとおって、すなわち民主的共和制という道をとおって、社会主義的変革への第一歩を踏みだすのである、と。政治的民主主義の道をとおらずに別の道をとおって社会主義にすすもうとする

ものは、かならず、経済的な意味でも、政治的な意味でも、愚劣で反動的な結論に達する。もし、こういう時機に労働者のだれかがわれわれに向かって、なぜわれわれは最大限綱領を実現してはならないのか、とたずねるなら、われわれは、民主主義とは無縁であるか、階級矛盾がまだどんなに社会主義的気分をもっている人民大衆がまだどんなに発展していないか、プロレタリアがまだどんなに未組織であるか、を指摘することで、彼らにたいする回答としよう。まあ、ロシア全土の数十万の労働者を組織してみたまえ！　数百万人のあいだに諸君の綱領への共鳴をひろめてみたまえ！　威勢はいいが、からっぽな、無政府主義的空文句にとどまらずに、それがやれるかどうか、ためしてみたまえ。そうすれば諸君は、この組織化を実現するのも、この社会主義的啓蒙をひろげるのも、民主主義的改革をできるだけ完全に実現することにかかっていることに、即座に気がつくだろう。

さきへすすもう。臨時革命政府の意義と、それにたいするプロレタリアートの態度とが明らかになったなら、こんどは次の問題が起こってくる。この政府にわれわれが参加すること（上からの行動）は許されるか、またそれはどういう条件のもとで許されるのか？　われわれの下からの行動は、どんなものでなければならないか？　と。決議は、この二つの問題のいずれにも的確な答をあたえている。決議は、臨時革命政府に社会民主党が参加することは（民主主義的変革の時代、共和制をめざす闘争の時代に）原則上許される、ときっぱり言明している。われわれはこう言明することによって、この問題に原則上否定的な答えをする無政府主義者からも、またわれわれがそういう参加をしなければならないような事態がくるという見とおしでわれわれをおどかしてきた社会民主党の追随主義者（マルトィノフや新イスクラ派）からも、決定的に分離するのである。こう言明することによって、ロシア社会民主労働党第三回大会は、臨時革命政府に社会民主主義者が参加するのはミルラン主義の一変種であるとか、この参加はブルジョア制度を神聖化するものだから原則的に許しえないとかいう、新『イスクラ』の思想を決定的に否認したのである。

しかし、原則的に許されるということは、いうまでもなく、実践的に適切かどうかという問題を解決するものではない。党大会によって承認された、「上からの」闘争というこの新しい闘争形態は、どんな条件のもとで適切なものになるのか？　力関係などのような具体的条件については、いまそれを論じることができないことは、いうまでもない。だから、決議は、当然のことだが、これらの条件をあらかじめ規定するようなことはやっていない。分別のある人な

らだれも、この問題についていまなにかを予言しようとはしないだろう。できること、また、しなければならないことは、われわれの参加の性格と目的を規定することである。決議はまさにそうしており、参加の二つの目的――(一)反革命的企図と容赦なくたたかうこと、(二)労働者階級の独自の利益を守ること――を示している。自由主義的ブルジョアが革命的人民をおどかし、彼らの心に専制に譲歩する気分をおこさせようとして、反動の心理について熱心に語りはじめているこのさい(『オスヴォボジデーニエ』第七一号に掲載されたストルーヴェ氏のきわめて教訓にみちた『公開状』を見よ)、プロレタリアートの党が反革命との真のたたかいの任務に注意をうながすのは、とくに時宜に適したことである。政治的自由や階級闘争の大問題を解決するのは、結局は力だけである。だから、われわれはこの力を準備し、組織することに、またその力を積極的に――防御的にだけでなく攻撃的にも――行使する(完)ことに、心をくばらなければならない。パリ・コミューン以来ほとんどたえまなくヨーロッパを支配してきた政治的反動の長い時代は、われわれを「下から」だけの行動という思想になじませ、闘争といえば防御的闘争しか見ないくせをわれわれにつけてしまった。いまやわれわれは、疑いもなく新しい時代にはいった。政治的動揺と革命の時期が始まった。いまロシアが際会しているような時期には、古い紋切型のやり方にとどまることは許されない。上からの行動という思想を宣伝しなければならない。最も精力的な攻撃的な行動の準備をしなければならない。そうした行動の条件と形態を研究しなければならない。大会決議は、これらの条件のうちの二つを前面に押しだしている。一つは、社会民主党の臨時革命政府への参加の形式的な側面(党が全権代表を厳重に統制すること)にかんし、もう一つは、この参加の性格そのもの(一瞬も完全な社会主義的変革の目標を見うしなわないこと)にかんするものである。

決議は、「上からの」行動――これまでほとんど類例のないこの新しい闘争方法――にあたっての党の政策を、このようにあらゆる側面から明らかにしているが、われわれが上から行動することに成功しない場合をも予想している。臨時革命政府に下からはたらきかけることは、どんな場合にもわれわれの義務である。そういう下からの圧力をくわえるためには、プロレタリアートは武装していなければならないし――なぜなら、革命の時機には、事態はとくに急速に、本格的な内乱に発展するからである――、また社会民主党に指導されていなければならない。プロレタリアートの武力による圧力の目的は、「革命の獲得物」――それは、プロレタリアートの利益の見地からいえば、われわれ

の最小限綱領全体を実現することでなければならないが――「を守り、うちかため、拡大する」ことである。

以上で、臨時革命政府についての第三回大会の決議の簡単な検討を終わることにする。読者諸君が見られるように、この決議は、新しい問題の意義も、この問題にたいするプロレタリアートの党の態度も、また臨時革命政府の内部での党の政策も、臨時政府の外部での党の政策も、すべて明らかにしている。

次に、「協議会」のこれについての決議を見てみよう。

三 「ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利」とはなにか？

「協議会」の決議は「権力の獲得と臨時政府への参加」の問題にあてられている。* われわれが指摘したように、問題のこういう出し方そのもののうちに混乱がふくまれている。一方では、問題の出し方が狭く、臨時政府へのわれわれの参加を問題にしているだけで、一般的に臨時革命政府にかんする党の任務を問題にしていない。他方では、二つのまったく別な種類の問題、すなわち、民主主義的変革の一つの段階にわれわれが参加する問題と、社会主義的変革の問題とを混同している。実際、社会民主党による「権力獲得」ということは、このことばをその直接の普通の意味でつかうとすれば、まさに社会主義的変革であって、それ以外のなにものでもありえない。もしまたこのことばを社会主義的変革のためではなく民主主義的変革のために権力を獲得するという意味にとるとすれば、臨時革命政府への参加を論じるだけでなく、「権力の獲得」一般をも論じることに、どういう意味があるのか？　明らかに、わが「協議会」派は、そもそもなにを問題にしなければならないのか、民主主義的変革か、それとも社会主義的変革かを、自分でよくわかっていなかったのである。この問題について の文献に注意してきた人は、この混乱の発端をひらいたのが同志マルトィノフの有名な『二つの執権（ディクタツーラ）』であったことを知っている。新イスクラ派の連中は、この追随主義の見本ともいうべき著作のなかであたえられている（早くも一月九日以前に）問題提起を思いだすことを好まないが、この著作が協議会に思想的影響をあたえていることは、疑う余地がない。

＊ 読者は、この決議の全文を、本小冊子の四〇〇、四〇三、四〇七、四三一、四三三ページにあげた引用から復原することができる。〔一九〇七年版への原注。本書、四四、四九、五二―五四、八六、八九―九〇ページ〕

しかし、決議の表題のことはさておくとしよう。決議の

内容は、さらに比較にならないほど深刻で重大な誤りをわれわれに示している。以下が、決議の最初の部分である。

「ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利は、勝利した人民蜂起のなかから出現した臨時革命政府の樹立となって現われるか、あるいは、なんらかの代議機関が人民の直接の革命的圧力を受けて全人民的憲法制定議会を設けることを決定して革命的イニシアチヴをとることとなって現われるか、そのどちらでもありうる」。

つまり、ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利は、蜂起の勝利でもありうるし、また……憲法制定議会を設けるという代議機関の決定でもありうる、とわれわれは言いきかされるのである。これはなんなのか？　どうしてそうなのか？　決定的勝利が、憲法制定議会を設けるという「決定」となって現われることもあるのだと??　しかも、このような「勝利」が、「人民蜂起の勝利のなかから出現した」臨時政府の樹立と同列におかれているのだ!!　人民蜂起の勝利と臨時政府の樹立は革命の事実上の勝利を意味するものであるが、憲法制定議会を設けるという「決定」はことばのうえだけの革命の勝利を意味するにすぎないということに、協議会は気づかなかったのである。

メンシェヴィキ＝新イスクラ派の協議会は、自由主義者やオスヴォボジデーニエ派が絶えずおちいっているのと同じ誤りにおちいったのである。オスヴォボジデーニエ派は、力と権力がツァーリの手に保持されていることには、恥ずかしげに目をとじ、「憲法を制定する」には憲法を制定する力をもっていなければならないということを忘れて、「憲法制定」議会について空文句をしゃべっている。協議会はまた、どんな代表が採択したものにせよ、「決定」とこの決定の実行とのあいだには大きなへだたりがあるということも、忘れてしまった。協議会はまた、権力がツァーリの手中に残っているかぎり、どんな代表のどういう決定も、ちょうど一八四八年のドイツ革命史上に有名なフランクフルト議会[二]の「決定」と同じように、からっぽの、くだらないおしゃべりを出ないものになってしまうということも、忘れてしまった。革命的プロレタリアートの代表者であるマルクスは、彼の『新ライン新聞』[三]紙上でフランクフルトの自由主義的「オスヴォボジデーニエ派」を、容赦ない皮肉でやっつけた。それはまさに、彼らが美辞麗句を口にし、あらゆる種類の民主主義的「決定」を採択し、あらゆる種類の自由を「制定」しながらも、実際には権力を国王の手に残し、国王の支配下にある軍隊との武装闘争を組織しなかったからである。そして、フランクフルトのオスヴォボジデーニエ派がおしゃべりをしているあいだに、国王は時をかせぎ、兵力を固め、反革命勢力は、現実の力を

よりどころにして、この民主主義者らをそのみごとな「決定」もろとも徹底的に粉砕してしまったのである。

協議会は、まさに勝利の決定的条件が欠けているものを、決定的勝利と同列においた。わが党の共和主義的綱領を承認する社会民主主義者がこういう誤りにおちいるようなことになったのは、どういうわけか？　この奇妙な現象を理解するためには、党の離脱部分についての第三回大会の決議*を参照しなければならない。この決議には、わが党内に「〃経済主義〃に類似した」さまざまな潮流が生きのこっていることが指摘されている。わが協議会派（まことに、彼らがマルトィノフの思想的指導下にあるのは理由のないことではない）は、「経済主義者」が政治闘争あるいは八時間労働日を論じたのとまったく同じ趣旨で革命を論じている。「経済主義者」は、（一）権利獲得の闘争、（二）政治扇動、（三）政治闘争という順序でか、あるいは、（一）一〇時間労働日、（二）九時間労働日、（三）八時間労働日、という順序でか、すぐさま「段階論」をやりだしたものである。こういう「過程としての戦術」からどういう結果が得られたかは、だれでも十分知っている。ところがいまわれわれに向かって、革命もあらかじめきちんと段階に分けよ、と提案する人がいるのである。すなわち、（一）ツァーリが代議機関を召集する、（二）この代議機関が「人民」の圧力を受けて憲法制定議会を設けることを「決定」する、（三）……第三の段階については、メンシェヴィキのあいだでまだ話合いがついていない。彼らは、人民の革命的圧力がツァーリズムの反革命的圧力につきあたるということ、したがって、「決定」は実現されずに終わるか、それともここでもまた人民蜂起の勝敗が事を決するか、いずれかであるということを忘れてしまった。協議会の決議は、「経済主義者」の次のような考え方とそっくりである。それは、労働者の決定的勝利は八時間労働日の革命的実現となって現われることもあれば、あるいは、一〇時間労働日の下賜と九時間労働日へ移るという「決定」となって現われることもありうる、というのである。……まさに寸分たがわず同じものである。

＊　この決議の全文を次に引用する。「大会は、党が〃経済主義〃とたたかったときから今日にいたるまで、いろいろの点で〃経済主義〃に類似したいろいろな色合い、プロレタリアの闘争における意識性の要素の意義をひくめ、それを自然成長性の要素に従属させようとする一般的傾向をもった色合いが存続していることを、確認する。これらの色合いの代表者たちは、組織問題では、理論的には、計画的にととのえられた党活動にふさわしくない、過程としての組織の原則をかかげ、実践的には、多くの場合に、党規律から系統的に逸脱し、また、

ある場合には党内の最も意識の低い部分に向かって、ロシアの現実の客観的条件を考えずに、選挙制の原則をひろく適用するという思想を説いて、党的結びつきにとっていまのところただ一つの可能な基礎を掘りくずそうと試みている。戦術問題では、彼らは、自由主義的ブルジョア諸政党とは完全に独立した党戦術に反対し、わが党が人民蜂起の組織者の役割を引きうけることができ、またそうすることが望ましいという立場に反対し、どんな条件にもせよ臨時民主革命政府に党が参加することに反対することによって、党活動の規模をせばめようという志向をさらけだしている。

大会は、全党員に、革命的社会民主主義の原則からのこの種の部分的な偏向と、いたるところで精力的な思想闘争を遂行するように提案する。だがそれと同時に大会は、程度の差はあれこの種の見解にくみする人々が党組織に参加することは——彼らが党大会と党規約を承認して党規律に完全に服することを必要条件として——、許されると考える。」〔一九〇七年版への原注〕

あるいはわれわれに次のように反論するものがいるかもしれない。決議の起草者たちは、蜂起の勝利をツァーリの召集する代議機関の「決定」と同列におくつもりはなかった。彼らはたんに、両方の場合にとる党の戦術をあらかじめ規定しようとしただけである、と。われわれは、これにたいして次のようにこたえよう。(一)決議の本文はまっこうから、はっきりと、代議機関の決定を「ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利」とよんでいる。ひょっとすると、これは作文上の不注意の結果かもしれない。ひょっとすると、議事録にもとづいてこれを訂正することができるかもしれない。しかし、それが訂正されていないかぎり、この文面の意味はただ一つしかありえない。そして、その意味はまったくオスヴォボジデーニエ的である。(二)決議の起草者たちがおちいった「オスヴォボジデーニエ」的な考え方は、新イスクラ派の他の著作のうちに、はるかにあざやかに現われている。たとえば、チフリス委員会の機関紙『ソツィアル－デモクラート』[22](グルジア語の新聞で、『イスクラ』第一〇〇号で大いに賞賛されている)にのった『ゼムスキー・ソボール[23]とわれわれの戦術』という論文は、「ゼムスキー・ソボール」(われわれとしてつけくわえておくが、われわれはこれの召集についてはまだなにも確実なことを知らないのだ!)「をわれわれの行動の中心に選ぶ」「戦術」が、武装蜂起や臨時革命政府樹立の「戦術」よりも「われわれにとって有利である」、と主張するまでになっている。われわれは、あとでこの論文にいま一度たちもどることにする。(三)革命が勝利する場合についても、敗北する場合についても、蜂起が成功する場合についても、また蜂起が重大な力に燃えあがることができない場合についても、党の戦術をあらかじめ審議するという

ことに、なにも反対するわけではない。ツァーリ政府が、自由主義的ブルジョアジーと取引するために代議機関の召集に成功することも、ありうる。――第三回大会の決議*は、このことを予想して、端的に「偽善政策」、「えせ民主主義」、「いわゆるゼムスキー・ソボールに類する人民代議制の戯画的形態」と述べている。だが、だいじな点は、これが述べられているのが、臨時革命政府にかんする決議のなかではないことである。なぜなら、それは臨時革命政府とは関係のないことだからである。この場合〔ツァーリ政府が代議機関を召集する場合〕には、蜂起と臨時革命政府樹立の問題は遠のき、形を変え、等々する。だが、いま問題になっているのは、あらゆる組合せが可能であるとか、勝利も敗北も、まっすぐな道もまわり道も可能であるとかということではなくて、真に革命的な道についての労働者の考えに混乱をもちこむことは社会民主主義者として許されない、ということであり、勝利の基本的条件を欠いているものをオスヴォボジデーニエ流に決定的勝利とよぶことは許されない、ということである。八時間労働日にしても、われわれがそれを一挙に手に入れるのではなく、長いまわり道をしてやっと手に入れるということもありうる。しかし、引きのばしや、遷延や、駆引や、裏切りや、反動を妨げることができない場合のプロレタリアートの無力や弱さを、労働者の勝利とよぶ人のことを、諸君はなんと言うだろうか？　ロシア革命は、かつて『フペリョード』**が言ったように、「立憲的流産」に終わるかもしれない。しかし、それだからといって、決定的闘争の前夜にこの流産を「ツァーリズムにたいする決定的勝利」とよぼうとするような社会民主主義者を正当化することができるだろうか？　最悪の場合には、われわれは共和制を獲得できないばかりか、憲法そのものが幻影的な「シポフ的」(三四)憲法になるかもしれない。だが、それだからといって、社会民主主義者がわれわれの共和制のスローガンをごまかすことがはたして許されるだろうか？

* 変革前夜の政府の戦術にたいする態度についての、この決議の全文は次のとおりである。
「政府が、現在の革命期に、自己保存の目的で、主としてプロレタリアートの自覚した分子にたいするいつもの弾圧を強めると同時に、(一) 譲歩と改良の約束とで労働者階級を政治的に堕落させ、それによって労働者階級を革命闘争からそらせようと試み、(二) 同じ目的から委員会や会議に自分らの代表を選出するように労働者にすすめることから始まって、いわゆるゼムスキー・ソボールに類する人民代議制の戯画的形態をつくりだすことにいたるまで、その偽善的な譲歩政策(三六)をえせ民主主義的形態でよそおい、(三) いわゆる黒百人組を組織し、人民中のおよそあらゆる反動分子、無自覚な分子、

あるいは人種的憎悪や宗教的憎悪に目がくらんでいる分子を革命に抗して立ちあがらせていることを考慮して、――

ロシア社会民主労働党第三回大会は、次のことをすべての党組織に指令することを決定する。

(イ) 政府の譲歩の反動的な目的を暴露するにあたっては、一方では、その譲歩が余儀なくされたものであること、他方では、専制はプロレタリアートを満足させるような改良を絶対にあたえることができないことを、宣伝・扇動で強調すること。

(ロ) 選挙運動を利用して、政府のこのような方策の真意を労働者に明らかにし、プロレタリアートにとっては、秘密投票による普通・平等・直接選挙権にもとづく憲法制定議会を革命的方法で召集することが必要なことを証明すること。

(ハ) 八時間労働日その他労働者階級の当面の要求を革命的方法で即時実現するために、プロレタリアートを組織すること。

(ニ) 黒百人組および一般に政府によって指導されているあらゆる反動分子の行動にたいして武装反撃を組織すること。」〔一九〇七年版への原注〕

** ジュネーヴの新聞『フペリョード』[三]〔『前進』〕は、一九〇五年一月に、党内のボリシェヴィキ派の機関紙として刊行されはじめた。一月から五月までのあいだに、一八号発行された。五月からは、ロシア社会民主労働党第三回大会の決定によって、ロシア社会民主労働党の中央機関紙として『プロレタリー』が『フペリョード』に代わって発行されはじめた。(第三回大会は、五月にロンドンでひらかれた。メンシェヴィキは、この大会に出席せず、自分たちの「協議会」をジュネーヴでひらいた。)〔一九〇七年版への原注〕

もちろん、新イスクラ派は、まだこういうごまかしをやるまでにはなっていない。しかし、革命精神がどれほど彼らから消えさってしまったか、生気のない屁理屈が現在の時機の闘争任務をどれほど彼らの目からさえぎってしまったかは、彼らがその決議のなかで、まさに共和制に言及するのを忘れてしまったことから、とくにはっきりとうかがわれる! これはありそうもないことだが、しかし事実である。社会民主党のすべてのスローガンは、協議会のいろいろの決議のなかで、確認され、反復され、説明され、詳論されている。労働者が工場ごとに総代と代表委員とを選挙するということさえ、忘れられてはいない。――ただ、臨時革命政府についての決議のなかで、共和制に言及する機会だけはなかったのである。人民蜂起の「勝利」や、臨時革命政府の樹立を論じながら、これらの「措置」と行為が共和制の獲得とどういう関係があるかを示さないのは、プロレタリアートの闘争を指導するためではなく、プロレタリア運動のうしろからよちよちついていくために決議を書くことを意味する。

総括。決議の最初の部分は、(一) 共和制のためにたたかい、真に全人民的な真に憲法を制定する議会を保障する

という見地から見た臨時革命政府の意義を、全然明らかにしていない。(二) まさに真の勝利の基本的条件がまだ欠けているような事態を、ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利と同列におくことによって、プロレタリアートの民主主義的意識のなかに、まったくの混乱をもちこんだ。

四　君主制の廃止と共和制

決議の次の部分に移ろう。

「……いずれの場合にも、このような勝利は、革命期の新しい段階の発端となるであろう。

社会発展の客観的条件がこの新しい段階にたいして自然発生的に提起する任務は、政治的に解放されたブルジョア社会の諸要素が、自分の社会的利益を実現し、権力を直接掌握するためにたがいに闘争する過程で、身分制的君主政体全体を最後的に一掃することである。

だから、歴史的性格から見ればブルジョア革命であるこの革命の諸任務を実現する仕事を引きうけることになる臨時政府も、解放されつつある国民のなかの相対立する階級相互の闘争を規制することによって、革命的発展を押しすすめるだけでなく、資本主義体制の基礎をおびやかすこの発展の諸要因とも闘争しなければならなくなるであろう。」

決議の独立した一節であるこの部分にたちいってみよう。ここに抜書きした議論の基本思想は、大会決議の第三項に述べてある思想と一致している。しかし、二つの決議のこの部分を対照してみると、次のような両者の根本的相違が目につく。大会決議は、革命の社会＝経済的基礎を一言で特徴づけながら、すべての注意を、特定の獲得物をめぐるもろもろの階級の、はっきりした特定の闘争に移し、プロレタリアートの戦闘的任務を前面に押しだしている。協議会の決議は、革命の社会＝経済的基礎をだらだらと、あいまいに、ごたごたと記述し、一定の獲得物をめざす闘争については非常に不明瞭にしか述べておらず、プロレタリアートの戦闘的任務をまったくかげに押しやっている。協議会の決議は、社会の諸要素がたがいに闘争する過程で旧秩序が一掃される、と述べている。大会決議は言っている。――われわれプロレタリアートの党がこの一掃をおこなわなければならない。真の一掃はただ民主的共和制の樹立だけである。われわれはこの共和制をたたかいとらなければならない。われわれは共和制と完全な自由のために専制と闘争するだけでなく、ブルジョアジーがわれわれの獲得物を奪いとろうと企てるときには（彼らはかならずそうするだろうが）、ブルジョアジーともたたかうであろう、と。

大会決議は、特定の階級に、厳密に特定の当面の目標をめざしてたたかうよう呼びかけている。協議会の決議は、いろいろの勢力の相互の闘争を論じている。一方の決議は積極的闘争の心理を表現し、もう一つの決議は消極的傍観の心理を表現している。一方は生きた活動への呼びかけに貫かれているが、他方は死んだ屁理屈に貫かれている。二つの決議は、いずれも、進行中の変革はわれわれにとっては第一歩にすぎず、第二歩がそれにつづくだろうと言明しているが、一方の決議は、このことから、それだけいっそうすみやかにこの第一歩を通過し、それだけいっそうすみやかにそれを清算し、共和制をたたかいとり、反革命を容赦なく粉砕し、第二歩の地盤をつくりださなければならない、という結論を引きだしている。ところが、もう一つの決議は、この第一歩について、だらだらと冗漫に記述し、この第一歩についての考えを（卑俗な表現だが）くりかえししゃぶっているだけである。大会決議は、民主主義的変革のためにも社会主義的変革のためにもたたかう先進的任務について結論をだすための序論または大前提として、古くてしかも永遠に新しいマルクス主義の思想（民主主義的変革のブルジョア的性格についての）をとりあげている。協議会の決議はまったく序論だけにとどまり序論をくどくどと繰りかえし、それについての小理屈をならべている。

この相違こそ、ずっとまえからロシアのマルクス主義者を二つの翼に――すなわち、昔の合法マルクス主義[三]の時代には屁理屈を事とする一翼と戦闘的な一翼とに、大衆運動が始まりつつあった時代には経済主義的一翼と政治主義的一翼とに――分けているほかならぬあの相違である。一般に階級闘争の、とくに政治闘争の深い経済的根源についてのマルクス主義の正しい前提から、「経済主義者」は、政治闘争に背を向けなければならないとか、その発展をおさえ、その規模をせばめ、その任務を低めなければならないとかいう、独特の結論を引きだした。これに反して、政治主義的一翼は、同じ前提からこれと違った結論を引きだした。すなわち、われわれの現在の闘争の根源が深ければ深いほど、われわれは、それだけいっそう広く、いっそう大胆に、いっそう決然と、いっそう多くの創意を発揮して、この闘争を遂行しなければならない、と。情勢は違い、形態は変化しているが、いまもこれと同じ論争がおこなわれている。民主主義的変革はまだけっして社会主義的変革ではない。それはけっして無産者にだけ「利害関係のある」ものではない。民主主義的変革の最も深い根源はブルジョア社会全体の避けられない必要と要求のうちにある。――この前提から、われわれは次の結論を引きだす。すなわち、先進的階級は、それだけいっそう大胆に自己の民主主義的

任務をかかげ、それだけいっそう鋭くこの任務を最後まで述べつくし、共和制という直接のスローガンをかかげ、臨時革命政府が必要であり、反革命勢力を容赦なく粉砕することが必要であるという思想を宣伝しなければならない、と。ところが、われわれの論敵である新イスクラ派は、この同じ前提から、次の結論を引きだしている。すなわち、民主主義の結論を最後まで述べつくすべきではない。実践的スローガンのなかに共和制をかかげなくてもよい。臨時革命政府が必要だという思想を宣伝しなくてもさしつかえない。憲法制定議会を召集するというたんなる決定を決定的勝利とよんでよい。反革命との闘争の任務をわれわれの積極的任務として押しださずに、漠然と「たがいに闘争する過程」（しかも、あとですぐ見るとおり、まちがった形に定式化して）という表現をもちだして、この任務をそのなかに埋没させてもよい、と。これは、政治的指導者のことばではなく、記録係かなにかのことばだ！

新イスクラ派の決議の個々の定式を注意ぶかく見ればみるほど、ここに指摘したその基本的特質がますますはっきりしてくる。たとえば、「政治的に解放されたブルジョア社会の諸要素がたがいに闘争する過程」などということを言っている。われわれは、決議がそのために書かれた主題（臨時革命政府）を記憶しているので、当惑して、次のように質問する。いやしくもたがいに闘争する過程を問題にするなら、どうしてブルジョア社会を政治的に隷属させている諸要素について沈黙していられるのか、と。協議会派は、革命の勝利をいったん前提した以上は、そういう要素はもはや消滅してしまったとでも考えているのだろうか？こういう考えは、一般的にいってナンセンスであり、とくに最大の政治的幼稚、政治的近視眼であろう。革命が反革命に勝利したのち、反革命は消滅するどころか、逆に、新しい、いっそう死にものぐるいの闘争をかならず始めるであろう。決議は、革命が勝利した場合の任務の究明にあてられているのであるから、われわれは、反革命の攻撃を撃退する任務にきわめて大きな注意をはらうべきであって（大会決議でなされているように）、戦闘的な党のこの当面の緊要な、焦眉の政治的任務を、現在の革命期ののちにはどうなるか、「政治的に解放された社会」がすでに存在するようになったときにはどうなるか、といった一般論のなかに埋没させてしまってはならない。「経済主義者」が、政治は経済に従属するという一般的真理をよりどころにして、焦眉の政治的任務にたいする彼らの無理解を隠していたように、新イスクラ派は、政治的に解放された社会の内部の闘争という一般的真理をよりどころにして、この社会を政治的に解放するという、焦眉の革命的任務にたいする

自分たちの無理解を隠しているのである。

「身分制的君主政体全体の最後的一掃」という表現をとってみたまえ。ロシア語では、君主制の最後的一掃といえば、民主的共和制の樹立のことである。ところが、わがマルトィノフ先生とその崇拝者たちには、こういう表現は単純かつ明瞭すぎるように思われるのである。彼らは、かならず「ふかめ」たがり、もっと「賢明な」言い方をしたがる。その結果、一方では、深遠ぶろうとしてこっけいなむだ骨おりをすることになり、他方では、スローガンのかわりに記述が、前進せよという勇敢な呼びかけのかわりに、一種の陰気な回顧が生じることになる。われわれは、まさしく、共和制のためにいまただちに闘争しようとする生きた人間というよりはむしろ plusquamperfectum〔遠い過去〕の見地から sub specie aeternitatis〔現実の諸条件を離れて永遠の相のもとに〕問題を考察する、一種の硬直したミイラを見ているような気がする。

次にすすもう。「……臨時政府は……この……ブルジョア革命の諸任務を実現する仕事を引きうけることになろう」……まさにここで、わが協議会派が、プロレタリアートの政治的指導者のまえに現われた具体的な問題を見おとしたことが、一挙に暴露された。臨時革命政府という具体的な問題は、ブルジョア革命の任務一般を実現する将来の一系列の政治の問題に席を譲って、彼らの視野から消えうせてしまった。もし諸君が問題を「歴史的に」観察したいなら、ヨーロッパのどの国の実例をとってみても、ほかならぬ、けっして「臨時」ではない一系列の政府が、ブルジョア革命の歴史的任務を実現したこと、革命を打ちやぶった政府すら、やはりこの敗北した革命の歴史的任務を実現しないわけにはいかなかったことを、諸君に示すであろう。しかし、「臨時革命政府」とよばれるのは、断じて諸君が言うようなものではない。そうよばれるのは、転覆された政府に直接にとって代わる革命期の政府であり、人民のなかから出てきたなんらかの代議機関に依拠するのではなく、人民の蜂起に依拠する政府である。臨時革命政府は、革命をすみやかに勝利させ反革命的企図をすみやかに撃退するための闘争の機関であって、けっしてブルジョア革命の歴史的任務一般を実現する機関ではない。諸君よ、われわれが諸君とともに、あるいはあれこれの政府が、ブルジョア革命のどのような任務を実現するかということの判定は、未来の『ルースカヤ・スタリナ』[注]の未来の歴史家にまかせようではないか。この仕事をするのは、三〇年後でもまだ間に合うだろう。だが、いまわれわれがやらなければならないことは、共和制をめざして闘争するため、プロレタリアートがこの闘争に最も精力的に参加するために、スロー

ガンと実践的指示をあたえることとなのである。

上述の理由からして、決議から抜書きした部分の最後の諸命題もまた、不満足なものである。臨時政府が相対立する諸階級のあいだの闘争を「規制」しなければならないという表現は、まったくの失敗であるか、すくなくとも拙劣である。マルクス主義者は、階級闘争の機関ではなしに、階級闘争の「規制者」となる政府がありうるなどと考えさせるような、自由主義的・オスヴォボジデーニエ的な表現を用いるべきではなかろう。政府は、「革命的発展を押しすすめるだけでなく、資本主義体制の基礎をおびやかすこの発展の諸要因とも闘争し」なければならないであろう、という。この「要因」というのは、ほかならぬプロレタリアートであり、決議はこのプロレタリアートの名において語っているのである！　プロレタリアートが現在まさにどうやって「革命的発展を押しすすめる」(立憲主義的ブルジョアジーがすすもうと思っているよりもさきのほうへ押しすすめる)べきかを示さず、またブルジョアジーが革命の獲得物に刃むかってくる場合には、これとたたかうために一定の方法で準備せよという忠告もあたえず、そのかわりに、われわれの活動の具体的任務についてはなにごとも語らない過程の一般的記述をわれわれにあたえているのである。新イスクラ派が自分の考えを述べるやり方は、弁証法の観念とは無縁であった旧唯物論についてマルクスがあたえた批評（彼の有名なフォイエルバッハについての『テーゼ』で）を思いださせる。哲学者は世界をいろいろに解釈してきただけである。しかし、肝心なことはこの世界を変えることである、とマルクスは言った〔全集、第三巻、五ページ〕。これと同じように、新イスクラ派も、彼らの眼前に進行している闘争の過程をなんとか記述し説明することはできるが、この闘争の正しいスローガンをあたえることはまったくできないのである。熱心に進軍はするけれども、指揮をとることはまずい彼らは、変革の物質的諸条件を認識して先進的諸階級の先頭に立った政党が歴史上で演じることのできる、また演じなければならない能動的、指導的な、方向を決定する役割を無視することによって、唯物史観を低めているのである。

五　どうやって「革命を前進させる」べきか？

決議のそのさきの部分を引用しよう。

「このような条件のもとでは、社会民主党は、革命を前進させる可能性を最もよく党に保障し、ブルジョア諸政党の不徹底で利己的な政策と闘争するさいに党の手を

しばることとのない、また党がブルジョア民主主義派に解消するのを未然に防ぐような立場を、革命の全期間にわたって維持するように、努めなければならない。

だから、社会民主党は、臨時政府内で権力を奪取したり、分有することを目標とすべきではなく、最左翼の革命的反政府党にとどまらなければならない。」

革命を前進させる可能性を最もよく保障する立場をとれという忠告は、非常にわれわれの気にいる。ただ、われわれは、このけっこうな忠告のほかになお、ほかならぬ現在、当面の政治情勢のもとで、人民代表召集の風評や臆測や議論や計画がもちだされているときに、社会民主党はどうやって革命を前進させるべきか、直接の指示があってほしいと思う。人民とツァーリとの「協定」というオスヴォボジデーニエ派の理論の危険性を理解せず、憲法制定議会を召集するというたんなる「決定」を勝利とよび、臨時革命政府が必要だという思想の積極的宣伝を任務とせず、民主的共和制のスローガンをかげに押しやるような人々が、いま、革命を前進させることができるだろうか？　こういう人々は、実践的、政治的にはオスヴォボジデーニエ派の立場の水準にとどまったのであるから、実際には革命を後退させるものである。専制を共和制に代えよと要求する綱領を彼らが承認したとしても、革命的時機における党の当面の諸任務を規定する戦術的決議のなかに共和制をめざす闘争のスローガンが欠けているとしたら、それになんの意味があろう？　現在、ほかならぬオスヴォボジデーニエ派の立場、すなわち立憲主義的ブルジョアジーの立場の特徴は、全人民的憲法制定議会を召集するという決定を決定的勝利とみ、臨時革命政府や共和制については分別ぶかくも沈黙を守っているという点にあるではないか！　革命を前進させるためには、すなわち、君主主義的ブルジョアジーが革命を押しすすめる限界をこえてそれを押しすすめるためには、ブルジョア民主主義派の「不徹底」を取りのぞくようなスローガンを積極的にかかげ、強調し、前面に押しださなければならない。現在、そのようなスローガンは二つしかない、すなわち、（一）臨時革命政府、（二）共和制である。なぜなら、全人民的憲法制定議会というスローガンは、君主主義的ブルジョアジーがとりあげており（「解放同盟」の綱領を見よ）、しかも、手品をつかって革命を消えうせさせるため、革命を完全に勝利させないため、大ブルジョアジーとツァーリズムの小商人的取引のためにこそ、とりあげているからである。ところがなんと、協議会は、それだけが革命を前進させることのできるこの二つのスローガンのうち、共和制のスローガンはまったく忘れてしまい、臨時革命政府のスローガンは、これを全人民的憲法制定議会

というオスヴォボジデーニエ的スローガンとまったく同列におき、両者を「革命の決定的勝利」とよんでいるのである!!

そうだ、これは疑う余地のない事実であって、われわれの信じるところでは、将来ロシア社会民主党の歴史を書く人にとって一つの道しるべとなるものである。一九〇五年五月に社会民主主義者の一協議会が、民主主義革命を前進させる必要について美辞麗句をならべはしたが、実際には革命を後退させ、実際には君主主義的ブルジョアジーの民主主義的スローガン以上に出ない決議を採択した、と。

新イスクラ派は、プロレタリアートがブルジョア民主主義派に解消してしまう危険を君たちは無視している、と言ってわれわれを非難するのがお好きである。ロシア社会民主労働党第三回大会が採択した諸決議のテキストにもとづいてこの非難を論証しようとする人があるなら、お目にかかりたいものである。われわれはわが論敵たちに、次のように答えよう。ブルジョア社会を基盤として行動している社会民主党は、あれこれの個々の場合に、ブルジョア民主主義派と肩をならべてすすむことなしには、政治に参加することができない。その場合、われわれと諸君との相違は、われわれが融合することなく肩をならべてすすむ相手は革命的・共和主義的ブルジョアジーであるが、諸君がやはり融合することなく肩をならべてすすむ相手は自由主義的・君主主義的ブルジョアジーだ、という点にある、事実はまさにこうなのだ、と。

協議会の名で出された諸君の戦術的スローガンは、「立憲民主」党、すなわち君主主義的ブルジョアジーの党のスローガンと一致している。諸君は、この一致に気づかず、それを意識せず、こうして実際にはオスヴォボジデーニエ派に追随することになってしまったのである。

ロシア社会民主労働党第三回大会の名でだされているわれわれの戦術的スローガンは、革命的・民主主義的な共和主義的ブルジョアジーのスローガンと一致している。この種のブルジョアジーと小ブルジョアジーとは、ロシアではまだ一つの大きな国民的政党を結成してはいない。*しかし、そういう党の諸要素が存在することを疑ったりするのは、いまロシアで起こっている事柄を理解しえないものだけである。われわれは(ロシア大革命が成功裏に進行する場合にそなえて)、社会民主党によって組織されたプロレタリアートを指導するだけでなく、われわれと肩をならべてすすむことのできるこの小ブルジョアジーをも指導するつもりである。

* 「社会革命派」は、このような政党の芽ばえというよりも、むしろインテリゲンツィアのテロリスト・グループである。

もっとも、このグループの活動の客観的意義は、結局、まさに革命的・共和主義的ブルジョアジーの任務を実現することにあるが。

協議会はその決議によって、無意識のうちに、自由主義的・君主主義的ブルジョアジーの水準におりてゆく。党大会はその決議によって、ブローカー商売をやる能力ではなく闘争する能力をもっている革命的民主主義分子を、意識的に自分の水準に引き上げる。

こういう分子は、農民のなかに最も多い。われわれは、大きな社会的集団をその政治的傾向にしたがって区分する場合には、革命的・共和主義的民主主義派と農民大衆とを同一視してもたいして誤りではない。——もちろんそれは、労働者階級と社会民主党とを同一視する場合と同じ意味であり、同じことわり書き、同じ暗黙の条件をつけての話であるが。以上のわれわれの結論は、これを言いかえて、次のような表現で定式化することもできる。すなわち、協議会は、革命的時期にその全国民的政治的スローガン*によって、無意識のうちに地主大衆の水準におりてゆく。党大会は、その全国民的政治的スローガンによって、農民大衆を革命的水準に引き上げる、と。われわれがこういう結論を引きだしたことを、逆説が好きだといって非難する人には、われわれは、次の命題を反駁してみよ、といって挑戦しよう。すなわち、もしわれわれが革命を最後まで遂行する力がないとすれば、もし革命が、憲法制定議会とよぶのもばかばかしいような、ツァーリの召集した代表議会にすぎない形で、オスヴォボジデーニエ流の「決定的勝利」に終わるとすれば、それは地主的・大ブルジョア的要素の優勢な革命となるだろう。反対に、もしわれわれが真の大革命を経験するめぐりあわせにあるとすれば、もし歴史がこんどは「流産」を許さないとすれば、もしわれわれが革命を最後まで遂行し、オスヴォボジデーニエ派や新イスクラ派の言うのとは違う意味での決定的勝利を得るまで遂行する力があるとすれば、それは、農民的・プロレタリア的要素の優勢な革命となるだろう、と。

* これは、特別の諸決議のうちで扱っている、農民のための特別のスローガンのことではない。

ことによると、われわれが農民的・プロレタリア的要素の優勢という思想を認めているのは、きたるべき革命のブルジョア的性格についての確信を放棄したものではないか、と一部の人は見るかもしれない。『イスクラ』紙上で見られるように、この概念を濫用するなら、それは大いにありうることである。だから、この問題にたちいることは、けっしてよけいなことではない。

六　プロレタリアートが不徹底なブルジョアジーと闘争するさいに手をしばられる危険はどの方面からせまってくるか？

マルクス主義者は、ロシア革命のブルジョア的性格を無条件に信じている。これはなにを意味するか？　それは、ロシアにとって必須になっている、政治制度の民主主義的改革と社会＝経済上の改革が、それ自体としては、資本主義を掘りくずし、ブルジョアジーの支配を掘りくずすことを意味しないばかりでなく、逆に、資本主義の広範で急速な発展、アジア的でなくヨーロッパ的な発展の基盤をはじめてほんとうに掃ききよめ、階級としてのブルジョアジーの支配をはじめて可能にすることを意味している。社会革命党は、この思想を理解することができない。なぜなら彼らは、商品生産および資本主義的生産の発展法則のイロハを知らないからであり、また彼らは、農民蜂起が完全に勝利し、農民の利益のために、農民の希望におうじてすべての土地が再分配される（「黒い割替」(三〇)またはなにかそれに類する措置）場合ですら、それは資本主義をけっして廃絶するものではなく、むしろ反対に資本主義の発展を促進し、農民自身の階級分化を速めることを、見ないからである。この真理を理解しないことが、社会革命党を小ブルジョアジーの無意識的なイデオローグにしているのである。この真理をあくまで主張することは、社会民主党にとって、理論的にだけでなく、実践的・政治的にも、大きな意義をもっている。というのは、現在の「一般民主主義」運動でプロレタリアートの党が完全な階級的独自性を守らなければならないという義務が、そこから生まれてくるからである。

しかし、このことから、民主主義的変革（その社会＝経済的内容からいえばブルジョア的な変革）は、プロレタリアートにとって非常に大きな利益にならない、という結論はけっして出てこない。このことから、民主主義的変革は、主として大資本家や大金融業者や「啓発された」地主に有利な形態でも起こりうるし、また農民と労働者に有利な形態でも起こりうることを否定するような結論はけっして出てこない。

新イスクラ派は、「ブルジョア革命」というカテゴリーの意味と意義とを、根本的に誤って理解している。彼らの議論からつねにうかがわれるのは、ブルジョア革命とは、ブルジョアジーに有利なものだけしかもたらしえない革命である、という思想である。ところがこのような思想ほど誤ったものはない。ブルジョア革命とは、ブルジョア的な、

すなわち資本主義的な社会＝経済体制の枠をこえない革命である。ブルジョア革命は、資本主義の基礎を廃絶しないどころか、反対に、それをひろげ、ふかめるものである。だから、この革命は、労働者階級の利益だけでなく、全ブルジョアジーの利益をもあらわしている。資本主義のもとでは労働者階級にたいするブルジョアジーの支配は避けられないから、ブルジョア革命はプロレタリアートの利益よりもむしろブルジョアジーの利益をあらわしている、と言うのはまったく正当である。しかし、ブルジョア革命はプロレタリアートの利益を全然あらわさないという思想は、まったくばかげたものである。このばかげた思想は、結局、ブルジョア革命はプロレタリアートの利益に反するものであり、だからブルジョア的な政治的自由はわれわれには必要でない、という大昔のナロードニキ理論に帰着するか、それとも、ブルジョア政治、ブルジョア革命、ブルジョア議会制度にプロレタリアートが参加することをいっさい否定する無政府主義に帰着する。この思想は、理論的には、商品生産の基盤のうえでは資本主義の発展は避けられない、というマルクス主義のイロハともいうべき命題を忘れることである。マルクス主義は、商品生産を基礎とし、資本主義的文明諸国民と交換関係にある社会は、一定の発展段階で、それ自身も、不可避的に資本主義の道にはいる、と教えている。ナロードニキや無政府主義者は、たとえば、ロシアは資本主義的発展を避けることができるとか、この資本主義そのものを基盤とし、またその枠内でおこなわれる階級闘争の道以外のなにか別の道をとおって、資本主義から飛びだしたり資本主義を飛びこえたりすることができるようなことを言うが、マルクス主義は、このようなナロードニキや無政府主義者のたわごととときっぱり手をきっているのである。

マルクス主義のこれらの命題はみな、一般的にも、またとくにロシアについても、きわめてくわしく証明され、嚙んでふくめるように述べられている。ところで、これらの命題からは、いやしくも資本主義のいっそうの発展以外のものに労働者階級の救いを求めようとする思想は反動的である、という結論がでてくる。ロシアのような国では、労働者階級は、資本主義のために苦しんでいるよりも、むしろ資本主義の発展が不十分なために苦しんでいる。だから労働者階級は、資本主義の最も広範な、最も自由な、最も急速な発展を、無条件に利益としている。資本主義の広範な、自由な、急速な発展を妨げている、旧時代のすべての残存物を取りのぞくことは、労働者階級に無条件に有利である。ブルジョア革命とは、旧時代の残存物、農奴制の残

存物（専制だけでなく君主制もこうした残存物の一つである）を最も断固として一掃するような、資本主義のきわめて広範な、自由な、急速な発展を最も完全に保障するような、まさにそういう変革なのである。

だから、ブルジョア革命は、プロレタリアートにこのうえなく有利である。ブルジョア革命は、プロレタリアートのために無条件に必要である。ブルジョア革命が、完全で、断固たるものであればあるほど、それが徹底したものであればあるほど、社会主義をめざすプロレタリアートのブルジョアジーとの闘争は、それだけ確実になるだろう。この結論を目あたらしく思ったり、奇妙な、逆説的なもののように思うのは、科学的社会主義のイロハを知らないものだけである。ところで、この結論から、とりわけまた次の命題がでてくる。それは、ブルジョア革命は、ある意味では、ブルジョアジーよりもプロレタリアートに有利である、という命題である。この命題は、まさに次のような意味で、すなわち、ブルジョアジーにはプロレタリアートに対抗するために旧時代の若干の残存物、たとえば君主制や常備軍などを支柱とすることが有利である、という意味で、疑う余地のないものである。ブルジョアジーには、ブルジョア革命があまりにもきっぱりと旧時代のすべての残存物を一掃してしまわずに、その若干のものを残しておくほうが、すなわち、この革命が完全に徹底したものでなく、最後までは遂行されず、断固とした無慈悲なものでないほうが、有利である。社会民主主義者は、この思想をしばしば違った言い方で表現して、ブルジョアジーは自分で自分を裏切るとか、ブルジョアジーは自由の大業を裏切るとか、ブルジョアジーは徹底した民主主義をおこなう能力がないとか、言っている。ブルジョアジーには、ブルジョア民主主義的な方向での必要な改革が、より緩慢に、徐々に、慎重に、決断を欠いたやり方で、革命の道をとおらずに改良の道をとおっておこなわれるほうが、有利である。これらの改革が、農奴制の「尊ぶべき」諸制度（君主制のような）にできるだけ慎重な態度をとるほうが、有利である。これらの改革が庶民の、すなわち農民、とくに労働者の革命的な自主活動と創意と精力をできるだけ発揮させないほうが、有利である。というのは、そうでない場合には、フランス人の言うように、「銃を一方の肩から他方の肩ににないかえる」こと、すなわちブルジョア革命が彼らに供給する武器を、この革命があたえる自由を、農奴制が一掃された基盤のうえに生まれる民主主義的諸制度を、ブルジョアジー自身にさし向けることが、労働者には、それだけ容易になるからである。

これに反して、労働者階級には、ブルジョア民主主義的

な方向での必要な改革が、まさに改良の道をとおらず革命の道をとおっておこなわれるほうが、有利である。なぜなら、改良の道は、長たらしい、ぐずぐずした道であり、国民という有機体の腐った部分が苦痛をともないながら徐々に死滅してゆく道だからである。この部分が腐ってゆくためにまっさきに、だれよりもひどく苦しむものは、プロレタリアートと農民である。革命の道は、プロレタリアートにとって苦痛の最も少ない、手ばやい手術の道であり、腐った部分をずばりと切りとる道であり、君主制とそれに対応する、いとわしく、不快な、腐った、腐臭を放つ諸制度とにたいして、譲歩や心づかいをすることの最も少ない道である。

だからこそ、わが国のブルジョア自由主義的な出版物が、革命の道が可能なことを嘆き、革命を恐れ、革命が起こるぞとツァーリをおどかし、革命を避けようと心をつかい、改良の道の基礎とするため、みすぼらしい改良を手にいれようと奴僕のようにふるまい、おべっかをつかっているのは、検閲上の考慮からだけでもなければ、権力者が恐ろしいためだけでもないのである。この立場にたっているのは、『ルースキエ・ヴェードモスチ』(二九)、『スィン・オテーチェストヴァ』(三〇)、『ナーシャ・ジーズニ』(三一)、『ナーシ・ドニー』(三二)だけではなく、非合法で自由な『オスヴォボジデーニエ』(三三)もまたそうである。資本主義社会における階級としてのブルジョアジーの地位そのものが、不可避的に民主主義的変革におけるブルジョアジーの不徹底さを生みだす。階級としてのプロレタリアートの地位そのものが、プロレタリアートを徹底した民主主義者にする。ブルジョアジーは、プロレタリアートを強くする恐れのある民主主義的進歩を恐れて、うしろをふりむく。プロレタリアートが失うものは鉄鎖だけである。しかも、民主主義のたすけをかりて全世界を獲得する(三四)であろう。だから、ブルジョア革命が民主主義的改革の点で徹底したものであればあるほど、それがブルジョアジーだけに有利なものにとどまることはそれだけ少なくなる。ブルジョア革命が徹底したものであればあるほど、革命は、民主主義的変革におけるプロレタリアートと農民の利益をそれだけ多く保障する。

マルクス主義は、プロレタリアに、ブルジョア革命から遠ざかれとも、これに参加するなとも、その指導権をブルジョアジーにあたえよとも、教えていない。反対に、マルクス主義は、ブルジョア革命に最も精力的に参加せよ、徹底したプロレタリア民主主義のために、革命を最後まで遂行するために、断固としてたたかえ、と教えている。われわれは、ロシア革命のブルジョア民主主義的な枠から飛びだすことができないが、この枠を大いに押しひろげること

はできる。われわれは、この枠のなかで、プロレタリアートの利益のため、その直接の必要のため、また将来の完全な勝利にそなえてプロレタリアートの勢力を訓練する条件をつくるために、たたかうことができるし、またたたかわなければならない。ブルジョア民主主義にもいろいろある。普通選挙権を「吹きかけ」てはいるが、かげでこっそり、制限憲法についてツァーリズムと協定を結ぼうとしている君主主義者のゼムストヴォ議員[13]、上院の支持者も、ブルジョア民主主義者である。武器を手にして地主と官吏に立ちむかい、「素朴な共和主義者ふうに」「ツァーリを追いはらおう」[*]と提議する農民も、やはりブルジョア民主主義者である。ブルジョア民主主義制度には、ドイツのようなものもあれば、イギリスのようなものもあり、オーストリアのようなものもあれば、アメリカまたはスイスのようなものもある。だから、民主主義的変革の時代に、民主主義のいろいろな度合いのこの差異、民主主義のあれこれの形態のいろいろな性格のこの差異を見おとして、ともかくこれは「ブルジョア革命」であり、「ブルジョア革命」の成果である、と「利口ぶる」だけにとどまるマルクス主義者は、たいしたマルクス主義者だ。

＊『オスヴォボジデーニエ』第七一号、三三七ページ、注2を見よ。

ところで、わが新イスクラ派の諸君は、まさしくこういう自分の近視眼を得意がる才人である。彼らは、不徹底なブルジョア民主主義と徹底したプロレタリア民主主義とを区別することは言うにおよばず、共和主義的・革命的なブルジョア民主主義と君主主義的・自由主義的なブルジョア民主主義とを区別すべき時と所で、ほかならぬ革命のブルジョア的性格について論じるにとどまっているのである。彼らは――まるで、実際に「箱のなかの男」[14]になったように――現在の革命に民主主義的指導をあたえ、ストルーヴェ氏一派の裏切り的スローガンとは違った先進的な民主主義的スローガンを強調し、地主や工場主の自由主義的ブローカー商売とは違ったプロレタリアートと農民の真の革命的な闘争の当面の諸任務を端的に鋭く示すことが問題になっているときに、「相対立する諸階級がたがいに闘争する過程」についての陰気なおしゃべりで満足しているのである。諸君、諸君が見おとした問題の核心は、現在では、まさに次のことにある。すなわち、われわれの革命が真に壮大な勝利に終わるか、それともみじめな取引に終わるか、この革命がプロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）に到達するか、それとも自由主義的・シポフ的憲法で「力尽きてしまう」か、という点にあるのだ！

われわれがこういう問題を提起するのは、一見したとこ

ろでは、主題からまったくわき道にはいるように思えるかもしれない。しかし、それは一見そう思えるだけである。実際には、この問題のうちにこそ、ロシア社会民主労働党第三回大会の社会民主主義的戦術と、新イスクラ派の協議会できまった戦術との、いまではもう完全にはっきり現われている原則的な意見の不一致の根源がひそんでいるのである。新イスクラ派は、はるかに複雑で、重要で、労働者党にとって切実な、革命時の党の戦術の諸問題を解決するにあたって、「経済主義」の誤りを復活させて、いまではもう二歩どころか三歩も後退してしまった。だからこそ、われわれは、ここに提起した問題を入念に検討しなければならないのである。

新イスクラ派の決議からわれわれが抜書きした部分には、社会民主主党がブルジョアジーの不徹底な政策と闘争するさいに自分の手をしばる危険、社会民主党がブルジョア民主主義派に解消してしまう危険についての指摘がふくまれている。この危険があるという考えは、くっきりと新イスクラ派特有の文献全体を貫いている。この思想は、(党の分裂における泥仕合の要素がまったく後景にしりぞいて、「経済主義」への転換の要素といれかわって以来)わが党の分裂における原則的立場全体のほんとうの眼目である。われわれもまた、この危険が現実に存在していること、ロシア革命がたけなわな今こそ、この危険はとくに重大なものとなっていることを、率直に認める。われわれ社会民主党の理論家、または――私は自分のことをそう言ったほうがよいと思うが――政論家のすべてに、この危険が現実にどの方面からせまっているかを究明する緊急の、きわめて責任重大な任務が課せられている。というのは、われわれの意見の相違の原因は、こうした危険が存在するかどうか、という論争にあるのではなく、こうした危険を生みだしているのは、「少数派」のいわゆる追随主義なのか、「多数派」のいわゆる革命主義なのか、という論争にあるからである。

曲解や誤解を取りのぞくために、まず注意しておきたいことは、ここで論じている危険が、問題の主観的側面にあるのではなく、その客観的側面にあるのだということ、社会民主主党が闘争のさいに占める形式的地位にあるのではなくて、現在の革命闘争全体の物質的結末にあるのだということである。あれこれの社会民主主義グループが、自分でブルジョア民主主義派に解消することを望むかどうか、また自分が実際にそれに解消しつつあることを自覚するかどうか、ということが問題なのではない。そういうことを論じているのではない。われわれは、社会民主主義者のうちのだれひとりそういう願望をいだくとは考えないし、ここでは願望などはまったくかかわりがない。また、あれこれ

の社会民主主義グループが革命の全期間にわたってブルジョア民主主義派からの形式的自主性、独自性、独立性をたもつだろうかどうか、という点に問題があるのでもない。これらのグループは、この「自主性」を宣言するばかりか、形式上それをたもっていくかもしれないが、それにもかかわらず、ブルジョアジーの不徹底さとたたかうさいに彼らが手をしばられるようなことになるかもしれない。社会民主党が形式的には「自主性」をたもっているにもかかわらず、党として組織上は完全な独自性をもっているにもかかわらず、事実のうえでは非自主的であり、事件の進行に自分のプロレタリア的自主性の刻印を押す力がなく、だいたいにおいて、結局のところ、最後の結末として、やはり党のブルジョア民主主義派への「解消」が歴史的事実になるほど微力であったことになるような、そういう革命の最後の政治的結末が生じるかもしれないのである。

ここにこそ現実の危険がある。そこで、いまこの危険がどの方面からせまってくるのか、われわれの考えるように、新『イスクラ』に代表される社会民主党の右偏向からか、それとも、新イスクラ派の考えるように、「多数派」や『フペリョード』などに代表される党の左偏向からか、それを見ることにしよう。

この問題の解決は、われわれが指摘したように、いろいろな社会勢力の行動の客観的な組合せによって規定される。これらの勢力の性格は、理論的にはロシアの現実のマルクス主義的分析によって規定されたが、いまやそれは、諸グループや諸階級が革命の過程でとる公然たる行動によって実践的に規定されつつある。ところで、現在の時期よりもずっとまえにマルクス主義者がおこなった理論的分析全体と、革命的諸事件の発展のあらゆる実際の観察とが示すところによれば、客観的諸条件の見地から見て、ロシアにおける革命の進行と結末には二通りのものが可能である。ロシアの経済制度と政治制度がブルジョア民主主義的方向に改革されることは、避けられないことであり、まぬかれないことである。このような改革を妨げうる力は地上にはない。しかし、この改革をおこなう現存諸勢力の行動の組合せしだいで、この改革には、二通りの結果、または二通りの形態が生じうる。すなわち、(一)「ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利」に終わるか、それとも(二)決定的勝利をかちとるには力がたりず、ブルジョアジーのうち最も「不徹底」で最も「利己的な」分子とツァーリズムとの取引に終わるか、二つに一つである。細目や組合せは限りなく多様であり、だれもそれを予見することができないにもかかわらず、その多様性も、だいたいにおいて、ほかならぬこの二つの結末のどちらかに帰着するのである。

さて、次に、この二つの結末を、第一に、その社会的意義の見地から、第二に、それぞれの結末の場合の社会民主党の状態（「解消」したり「手をしばられる」という）の見地から検討しよう。

「ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利」とは、どういうことか？　すでに見たように、新イスクラ派はこの表現をもちいながら、それの最も直接の政治的意義さえも理解していない。彼らが、この概念の階級的内容を理解しているとはなおさら認められない。われわれマルクス主義者は、いま多くの革命的民主主義者（ガポンのような）がまどわされているように、「革命」とか「ロシア大革命」とかいうことばに、断じてまどわされてはならない。われわれは、どのような現実の社会勢力が「ツァーリズム」（これはまったく現実的な、だれにもまったくよくわかる勢力である）に対抗しており、またツァーリズムにたいして「決定的勝利」をおさめる能力をもっているかを、正確に理解しなければならない。大ブルジョアジー、地主、工場主、オスヴォボジデーニエ派に追随する「社会」（貴族、ブルジョア出身の上流知識人層）は、そういう勢力ではありえない。われわれは、彼らが決定的勝利を望んでさえいないと見ている。われわれは、彼らがその階級的地位からいって、ツァーリズムと断固としてたたかう能力のないことを知っている。私的所有が、資本や土地が重すぎる足かせとなっているので、彼らは断固たる闘争をやることができない。プロレタリアートと農民に対抗する警察＝官僚勢力と軍事力をもつツァーリズムは、彼らにとってひどく必要なので、彼らはツァーリズムの一掃をめざすわけにはいかない。いな、「ツァーリズムにたいして決定的勝利」をおさめる能力をもつ勢力でありうるのは、人民、すなわちプロレタリアートと農民だけ――農村や都市の小ブルジョアジー（これもやはり「人民」である）をこの双方に配属させて、基本的な大きな勢力をとりあげるなら――である。「ツァーリズムにたいする決定的勝利」とは、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタトゥーラ）である。わが新イスクラ派は、『フペリョード』がずっと以前に指摘したこの結論から、どこへも逃げるわけにはいかない。プロレタリアートと農民以外に、ツァーリズムにたいする決定的勝利をおさめうるものはないのである。

そして、このような勝利は、まさしく執権（ディクタトゥーラ）をもたらすであろう。すなわち、その勝利は、「合法的な」「平和的な方法で」つくりだされたなんらかの機関に立脚するのではなくて、かならず武力に、大衆の武装に、蜂起に立脚しないわけにはいかないであろう。それは、執権（ディクタトゥーラ）でしかありえない。なぜなら、プロレタリアートと農民にただちに、ぜひ

とも必要な改革の実現は、地主からも、大ブルジョアからも、ツァーリズムからも死に物狂いの抵抗を呼びおこすからである。執権なしにはこの抵抗を粉砕することも、反革命的企図を撃退することもできない。しかし、それは、もちろん社会主義的執権ではなく民主主義的執権であろう。この執権は、（革命的発展の幾多の中間的な段階を経ずに）資本主義の基礎に手をふれることはできないだろう。それは、いちばんうまくいった場合には、農民の利益になるように土地財産を根本的に再分配し、共和制をもふくめて徹底した完全な民主主義を実行し、農村生活からだけでなく工場生活からもいっさいのアジア的・債務奴隷的なものを根こそぎにし、労働者の状態のいちじるしい改善と彼らの生活水準の向上との礎をおき、最後に、last but not least〔最後ではあるがいちばん重要でないというわけではない〕革命の火事をヨーロッパに飛火させることができるだろう。だが、こういう勝利は、まだすこしも、わが国のブルジョア革命を社会主義革命にするものではないであろう。民主主義的変革は、直接にはブルジョア的な社会＝経済諸関係の枠をこえないだろう。しかし、それにもかかわらず、こういう勝利の意義は、ロシアだけでなく、全世界の将来の発展にとって、巨大なものとなるだろう。ロシアで始まった革命のこの決定的勝利ほど、世界プロレタリアートの革命的エネルギーを高めるものはないだろうし、世界プロレタリアートの完全な勝利への道をこれほどいちじるしく縮めるものもないであろう。

　こういう勝利がどの程度予想されるか、これは別問題である。われわれは、この点について、けっして軽はずみな楽観論に傾いているものではなく、この任務が非常に困難なものだということを忘れてはいない。しかし、闘争を始める以上、われわれは、勝利を望まざるをえないし、勝利をかちとるまちがいのない道を示すことができなければならない。この勝利をもたらしうる諸傾向が存在していることは、あらそう余地がない。なるほど、プロレタリアートの大衆にたいするわれわれ社会民主党の影響は、まだ大いに不十分である。農民大衆にたいする革命的なはたらきかけは、まったく微々たるものである。プロレタリアートの、とくに農民の分散性、未熟、無知は、なおひどく大きい。しかし、革命は大衆を急速に団結させ、急速に啓蒙する。革命が発展していく一歩一歩は、大衆をめざめさせ、大衆の真の、切実な利益を首尾一貫して、あますところなく表明している唯一の綱領である、ほかならぬ革命的綱領の側へ、押えがたい力で大衆を引きよせる。

　力学の法則によれば、作用と反作用とはつねに等しい力をもつ。歴史上では、革命の破壊力もやはり、自由への熱

望にたいする抑圧がどのくらい強くまた長かったか、時代おくれの「上部構造」と現代の生きた勢力との矛盾がどれほど深刻であるかによるところが多い。国際政治情勢も、多くの点でロシア革命にこのうえなく有利なものとなっている。労働者・農民の蜂起はすでに始まっている。それはばらばらで、自然発生的で、弱いものであるが、しかし、断固として闘争する能力をもち、決定的勝利へ向かってすすんでいる勢力が現に存在していることを、あらそう余地なく、無条件に証明している。

もしこれらの勢力が十分でなければ、ツァーリズムは取引することに成功するだろう。すでにそうした取引をブルィギン氏一派とストルーヴェ氏一派の双方が準備している。そうなれば、事態は制限憲法に終わるか、あるいは――最悪の場合には――憲法のパロディー〔似て非なる戯画的模倣〕に終わることさえあろう。これもまた「ブルジョア革命」ではあろう。ただし、流産児であり、早産児であり、混血児である。社会民主党は幻想をいだかない。社会民主党はブルジョアジーの裏切り的な本性を知っている。だから、社会民主党は意気沮喪することはないであろうし、「シポフ的」ブルジョア立憲主義の泰平の世の暗鬱な日々にも、プロレタリアートを階級的に教育する執拗な、我慢づよい、堅忍不抜の活動を捨てはしないであろう。このような結末は、多かれ少なかれ、一九世紀のヨーロッパのほとんどすべての民主主義革命の結末と似ているであろうし、そうなれば、わが党の発展は、困難な、苦しい、長い、だがおなじみの踏みならした道をすすむことになろう。

そこで問題になるのは、これら二つのありうべき結末のどちらの場合に、社会民主党は不徹底で利己的なブルジョアジーにたいして事実上手をしばられていることになるか、事実上ブルジョア民主主義派に「解消」したこと、またほとんど解消したことになるか、ということである。

この問題に一瞬もためらわずに答えるためには、問題を明瞭に提起しさえすればよい。

ブルジョアジーが、ツァーリズムとの取引によってロシア革命を失敗させることに成功するなら――そのときには、社会民主党は不徹底なブルジョアジーにたいして事実上まさしく手をしばられることになろうし、――そのときには、プロレタリアートがはっきりと革命に自分の痕跡を残すことができないという意味で、またツァーリズムをプロレタリア的なやり方、あるいはマルクスがかつて言ったように「平民的なやり方で」かたづけてしまうことができないという意味で、社会民主党はブルジョア民主主義派に「解消」したことになろう。

革命の決定的勝利が成功するならば――そのときには、

われわれは、ツァーリズムをジャコバン流に、そう言いたければ、平民的なやり方で、かたづけてしまうだろう。マルクスは、一八四八年に有名な『新ライン新聞』で次のように書いている。「あのフランスの恐怖政治の全体は、ブルジョアジーの敵である絶対主義や、封建制度や、素町人どもをかたづける、平民的なやり方にほかならなかった」と（メーリング版、マルクス『遺稿集』第三巻、二一一ページを見よ）〔全集、第六巻、一〇三ページ〕。民主主義革命の時代に、ロシアの社会民主主義的労働者を「ジャコバン主義」のお化けでおどしている連中は、いつかマルクスのこのことばの意味を考えてみたことがあるのだろうか？

今日のロシア社会民主党のジロンド派である新イスクラ派は、オスヴォボジデーニエ派と融合してはいないが、しかし、そのスローガンの性格からして、事実上オスヴォボジデーニエ派に追随している。ところで、オスヴォボジデーニエ派、すなわち自由主義的ブルジョアジーの代表者は、おだやかに、改良によって——卑下しながら、貴族や名門や宮廷の気を悪くさせないで、——慎重に、全然破壊をせずに、——愛想よく、ていねいに、旦那ふうに、白手袋（血帝ニコライが「人民代表」（？）を引見したとき、ペトルンケヴィチ氏が一バシバズークの手からとってはめた手袋のような——『プロレタリー』第五号を見よ〔全集、第八巻、五三三—五三八ページ〕）をはめて、専制を始末しようと望んでいるのである。

今日の社会民主党のジャコバン派は——ボリシェヴィキというか、フペリョード派というか、大会派というか、プロレタリー派というか、どういったらよいかわからないが——そのスローガンによって、革命的・共和主義的小ブルジョアジー、とくに農民を、自分の完全な階級的独自性を保っているプロレタリアートの徹底した民主主義の水準に引き上げようと望んでいる。彼らは、人民すなわちプロレタリアートと農民が、自由の敵を容赦なく絶滅し、彼らの反抗を実力で鎮圧し、農奴制、アジア的野蛮、人間蔑視のいまわしい遺産にいささかも譲歩せずに、君主制と貴族とを「平民的なやり方で」始末することを望んでいる。

これは、もちろん、われわれがぜひとも一七九三年のジャコバン派をまねたり、ジャコバン派の見解や綱領やスローガンや行動方法を踏襲しようと望んでいるという意味ではない。けっしてそんなことはない。われわれは、古い綱領ではなくて新しい綱領を、ロシア社会民主労働党の最小限綱領をもっている。われわれは、新しいスローガンを、すなわち、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタトゥーラ）というスローガンをもっている。もし革命が真に勝利するまで生きのびるなら、われわれは、完全な社会主義的変

革をめざす、労働者階級の党の性格や目的にふさわしい新しい行動方法をもつようになるだろう。われわれがこの類比によって明らかにしようとしているのは、ちょうど一八世紀の先進的階級であるブルジョアジーの代表者がジロンド派とジャコバン派との二つに分かれていたのと同じように、二〇世紀の先進的階級であるプロレタリアートの代表者、すなわち社会民主主義者も、二つの翼に（日和見主義的一翼と革命的一翼とに）分かれているということにすぎない。

　民主主義革命が完全に勝利する場合にだけ、プロレタリアートは、不徹底なブルジョアジーと闘争するさいに手をしばられることがないであろう。この場合にだけ、プロレタリアートは、ブルジョア民主主義に解消することなく、革命全体に自分のプロレタリア的な、より正しくいえばプロレタリア＝農民的な痕跡を残すであろう。

　一言でいえば、不徹底なブルジョア民主主義とたたかうさいに手をしばられないためには、プロレタリアートは、農民を革命的自覚に達するように高め、農民の攻撃を指導し、こうして徹底したプロレタリア民主主義を独自に遂行するにたる自覚と実力をもたなければならないのである。

　新イスクラ派がひどく不出来なやり方で解決した、不徹底なブルジョアジーとたたかうさいに手をしばられてしまう危険の問題は、以上のようである。ブルジョアジーは、いつでも不徹底であるだろう。それをみたせばブルジョア民主主義派を偽善的でない人民の友とみなしてよいという条件とか項目とかをならべたてようとする試み*くらい、幼稚でむだなものはない。民主主義のための徹底した闘士になれるのは、プロレタリアートだけである。プロレタリアートが民主主義のための闘士として勝利しうるのは、農民大衆がプロレタリアートの革命闘争に合流する場合だけである。プロレタリアートにそうする力がたりなければ、ブルジョアジーは、民主主義革命の先頭にたって、この革命に不徹底な利己的な性格をあたえるだろう。それを防ぐには、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）以外に手段はない。

　＊　スタロヴェルが第三回党大会で取り消された彼の決議[三]でやろうと試みたように、また協議会が、同じように不出来な決議でやろうと試みているように。

　こういうわけで、われわれは、新イスクラ派の戦術は、客観的意義からすれば、まさにブルジョア民主主義派を利するものだという、疑う余地のない結論に達する。ついに[五]は一般投票や、協定の原則や、党出版物の党からの分離にまでおよぶ組織上のあいまいさを説教すること――武装蜂起の任務を低めること、――革命的プロレタリアートの全

人民的な政治的スローガンと君主主義的ブルジョアジーのスローガンとを混同すること、――「ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利」の条件を歪曲すること――これらすべてを一つにあわせると、まさしく革命的時機における追随主義の政策になる。それは、勝利への唯一の道を示し、人民のうちの革命的・共和主義的分子をことごとくプロレタリアートのスローガンに合流させるのではなくて、プロレタリアートを迷わせ、解体させ、その意識に混乱をもちこみ、社会民主党の戦術を低めるものである。

決議の検討にもとづいて到達したこの結論を裏づけるために、他のいろいろの側面からこの同じ問題をとりあげてみよう。第一に、グルジアの『ソツィアル－デモクラート』で、ひとりの単純で、率直なメンシェヴィキが新イスクラ派の戦術をどんなふうに例解しているかを見よう。第二に、現在の政治情勢のもとで、だれが新『イスクラ』のスローガンを実際に利用しているかを見よう。

七　「政府から保守派を遠ざける」戦術

われわれがまえにあげたメンシェヴィキのチフリス「委員会」の機関紙（『ソツィアル－デモクラート』第一号）所載の一論文は、『ゼムスキー・ソボールとわれわれの戦術』と名づけられている。論文の筆者は、われわれの綱領をまだすっかり忘れたわけではなく、共和制のスローガンをかかげてはいるが、しかし戦術について次のように論じている。

「この目標（共和制）を達成する道としては、次の二つのものを指摘することができる。すなわち、政府によって召集されようとしているゼムスキー・ソボールをまったく度外視し、武器を手にして政府を打倒し、革命政府をつくって、憲法制定議会を召集するか、それとも、ゼムスキー・ソボールをわれわれの行動の中心であると宣言し、武器を手にしてその構成とその活動とにはたらきかけ、実力をもってゼムスキー・ソボールに自分を憲法制定議会であると宣言させるか、あるいはゼムスキー・ソボールを介して憲法制定議会を召集するか、この二つである。この二つの戦術は、たがいに非常にはっきり違っている。そのどちらがわれわれにとって、より有利であるかを見よう。」

ロシアの新イスクラ派は、われわれが検討した〔協議会の〕決議でその具体化された考えを、こういうふうに述べている。これは、ブルィギンの「草案」[三六]がまだまったくこ

の世に現われていなかった対馬〔日本海海戦〕以前に書かれたものであることを注意してほしい。自由主義者までが我慢しきれなくなって合法出版物の紙上で自分の不信の念を表明していたのに、新イスクラ派に属するこの社会民主主義者は、自由主義者よりもさらに軽信的であった。彼は、ゼムスキー・ソボールは「召集されようとしている」と宣言し、まだ存在していないこのゼムスキー・ソボール（もしかすると、「国会」あるいは「立法諮問会議」？）をわれわれの行動の中心としてとりあげることを提案するほど、ツァーリを信用している。協議会で採択された決議の起草者たちよりあけすけで一本調子なわがチフリス人は、両方の「戦術」（彼はそれを無類の幼稚さで叙述している）を同列におかず、第二の戦術が「より有利である」と宣言している。彼の言うところを聞きたまえ。

「第一の戦術。諸君も知っておられるように、きたるべき革命はブルジョア革命である。すなわちそれはプロレタリアートばかりでなく全ブルジョア社会もそれを利益とするような現制度の変更をめざしている。すべての階級、資本家そのものまで、野党の立場にある。たたかうプロレタリアートとたたかうブルジョアジーとは、ある意味ではともにすすみ、違った方面からともに専制を攻撃する。政府は、ここでは、まったく孤立していて、社会の同情を失っている。だからこれを壊滅させること[1]は、はなはだ容易である。ロシアの全プロレタリアートは、まだ単独で革命を遂行しうるほど自覚してもいなければ、組織されてもいない。それに、プロレタリアートは、もし単独で革命を遂行できるようであれば、ブルジョア革命ではなく、プロレタリア（社会主義）革命を遂行するだろう。したがって、政府が引きつづき同盟者をもたず、野党を分裂させることができず、ブルジョアジーを味方につけてプロレタリアートを孤立におとしいれることができないことが、われわれにとって有利である」……

（1） 手稿では、レーニンは、「壊滅させる」のあとに（??）と書き入れたのち、抹消している。

つまり、ツァーリ政府がブルジョアジーとプロレタリアートとを分裂させることができないということが、プロレタリアートにとって有利だというのだ！　グルジアの機関紙が、『オスヴォボジデーニエ』と名づけられずに、『ソツィアル－デモクラート』と名づけられているのは、なにかのまちがいではあるまいか？　見たまえ、なんという比類のない民主主義革命の哲学であることか！　われわれはここに、かわいそうに、チフリス人が「ブルジョア革命」という概念の屁理屈屋的・追随主義的解釈によってすっかり

分別を失ったありさまを、まざまざと見るではないか？　彼は、民主主義的変革においてプロレタリアートが孤立する可能性があるという問題を論じながら、――忘れている、ちょっとしたことを……農民のことを……忘れている！　彼は、プロレタリアートの同盟者になりうるもののうち、ゼムストヴォ議員である地主を知っており、それが気にいっているが、農民を知らないのである。しかも、それがカフカーズでのことなのだ！　してみれば、われわれが、新『イスクラ』は、革命的農民を引き上げて自分の同盟者にするかわりに、その議論によって、君主主義的ブルジョアジーの水準におりてゆく、と言ったのは、はたしてまちがっていただろうか？

「……逆の場合には、プロレタリアートの敗北と政府の勝利は避けられない。しかも、専制は、まさしくこのことをめざしているのである。専制は、疑いもなく、そのゼムスキー・ソボールで、貴族、ゼムストヴォ、都市、大学、その他のブルジョア機関の代表者を味方に引きよせるであろう。[1]専制は、小さな譲歩で彼らをまるめこみ、こうして彼らを専制と和解させようと努力するだろう。こうして補強された専制は、孤立におちいった労働人民にその全打撃を集中するだろう。われわれの義務は、こうした不幸な結末を未然に防ぐことである。しかし、はたして第一の道によってそれを防ぐことができるだろうか？　われわれがゼムスキー・ソボールになんの注意もはらわず、ひとりで蜂起の準備を始め、そのうちある日闘争のために武装して街頭に進出する、と仮定しよう。そうするとわれわれは、ひとりの敵でなくて、政府とゼムスキー・ソボールというふたりの敵に直面することになろう。われわれが準備しているあいだに、彼らはうまく話合いをつけ、[2]協定を結び、彼らに有利な憲法をつくることに成功し、権力を分けあってしまったのである。これはまったく政府に有利な戦術であって、われわれは最も精力的にこれを捨てなければならないのである」……

(1) 手稿では、レーニンは、このあとに次のように書き入れたのち、抹消している。「貴族、大学、その他のブルジョア機関だと！　これほど純粋無垢の俗流『マルクス主義』にお目にかかるには、『ルースカヤ・ムィスリ』まで戻らなければならない！」

(2) 手稿では、レーニンは、このあとに次のように書き入れたのち、抹消している。「なんたるジャコバン主義だ！　蜂起を『準備する』とは！」

これはまたなんとあけすけなことだろう！　蜂起を準備する「戦術」を断固として捨てなければならない、なぜなら、「そうしているあいだに」政府はブルジョアジーと取

引をしてしまうからだ、というのである！　最も猛烈な「経済主義」の古い文献にも、これほど革命的社会民主主義の体面をけがすようなものを、なにか発見できるだろうか？　あちらこちらで、労働者や農民の蜂起や一揆が起こっている——これは事実である。ゼムスキー・ソボール——これはブルィギンの約束である。それなのに、チフリス市の『ソツィアル－デモクラート』は、蜂起を準備する戦術を捨て、「はたらきかけの中心」であるゼムスキー・ソボールのひらかれるのを待つことにきめている……

「……第二の戦術は、これに反して、ゼムスキー・ソボールをわれわれの監視のもとにおき、ゼムスキー・ソボールが自分の意のままに行動して政府と協定を結んだりする可能性を、これにあたえない点にある。[*]

われわれは、ゼムスキー・ソボールが専制とたたかうかぎり、それを支持し、ゼムスキー・ソボールが専制と和解する場合には、それとたたかう。われわれは、精力的な干渉と実力によって、議員をたがいに分裂させ、[**]急進派をわれわれの味方につけ、[(2)]保守派を政府から遠ざけ、[(3)]こうしてゼムスキー・ソボール全体を革命の道にたたせる。このような戦術のおかげで、政府はつねに孤立したままであり、野党は終始強力であろう、[(4)]そして、それによって民主主義制度の樹立は容易になるだろう。」

＊　ゼムストヴォ議員からその意志を奪う手段は、どのようなものなのか？　特殊のリトマス試験紙ではないのか？

＊＊　これはどうだ！　これが「深遠な」戦術だというのだ！　街頭で格闘する実力はないが、「実力によって」「議員を分裂させる」ことができる、というのだ。チフリスの同志よ、聞きたまえ、ばか話もいいが、ほどを知らなければいけない……

(1)　手稿では、このあとに次のように書き入れたのち、抹消している。「おっ！　なんとカ、カ、カクメイ的なことか！」

(2)　手稿では、レーニンは、このあと次のように書き入れたのち、抹消している。「あわれなストルーヴェ！　彼は急進派でとおっているのだ！　なんたる悲運か——実力をもって新イスクラ派の味方にされるとは……」

(3)　手稿では、レーニンは、このあとに次のように書き入れたのち、抹消している。「さあ、謹聴！　謹聴！」

(4)　手稿では、レーニンは、このあとに次のように書き入れたのち、抹消している。「『遠ざけられた』保守派をぬきにしてか？」

そうとも、そうとも！　新イスクラ派が卑俗このうえない「経済主義」の同類に転向したというのがわれわれの誇張だと言うのなら、いまこそ言ってみるがよい。これはまるで、まず蠅をつかまえておいてふりかけると死ぬという、あの有名な蠅取り粉にそっくりではないか。つまり、ゼム

スキー・ソボールの議員を実力で分裂させ、「政府から保守派を遠ざける」、――そうすればゼムスキー・ソボール全体が革命の道に立つだろう……というのだ。どのような「ジャコバン的」武装蜂起もなしに、どうかこうか、お上品に、ほとんど議会主義的に、ゼムスキー・ソボールの議員に「はたらきかける」というのだ。

かわいそうなロシアよ！　ロシアは、いつも流行おくれの、ヨーロッパが投げすてた帽子をかぶっている、と言われてきた。わが国にはまだ議会はない。ブルィギンでさえ[五]それを約束していない。だが、議会主義的クレチン病はいくらでもある。

「……この干渉はどんなふうにやるべきであろうか？まず第一に、われわれは、ゼムスキー・ソボールを秘密投票による普通・平等・直接選挙権にもとづいて召集するように要求しよう。このような選挙手続の公示*と同時に、選挙運動の完全な自由、すなわち集会・言論・出版の自由、選挙人と被選挙人の不可侵、ならびにすべての政治犯の釈放が法律で定められなければならない**。選挙そのものについては、われわれが人民にそれを知らせ、その準備をさせる時間が十分にあるように、できるだけおそい日取りを指定しなければならない。そして、ソボール召集規定の作成は内務大臣ブルィギンの特別委員会にゆだねられているから、われわれは、この委員会にも、またその委員にも、はたらきかけなければならない***。もしブルィギン委員会がわれわれの要求をかなえることを拒絶し****、議員選挙権を有産者にしかあたえないなら、われわれはこの選挙に干渉し、革命的方法で、選挙人に進歩的候補者を選挙させ、ゼムスキー・ソボールで憲法制定議会の召集を要求させなければならない[1]。最後に、ありとあらゆる方策によって、デモンストレーション、ストライキにより、必要ならば蜂起によって、ゼムスキー・ソボールに憲法制定議会を召集させるか、あるいは、自分を憲法制定議会であると宣言させなければならない。武装したプロレタリアートは、憲法制定議会の擁護者でなければならない。そして、両者はあいたずさえて†、民主共和制に向かってすすむであろう。

以上が社会民主党の戦術であり、これだけがわれわれに勝利を保障するであろう。」

* 『イスクラ』でか？

** ニコライによってか？

*** 「政府から保守派を遠ざける」戦術というのは、こういうことなのだ！

**** われわれがこういう正しい深遠な戦術をとっている場合に、それが拒絶されるはずがない！

† 武装したプロレタリアートと「政府から遠ざけられた」保守派とがか？

(1) 手稿では、レーニンは、このあとに次のように書き入れたのち、抹消している。「『選挙させる』——『革命的方法で』！こういう革命の予行演習もあるというわけだ！」

読者は、このとんでもないたわごとを、新イスクラ派のなかのだれか責任のない、有力でない一員の、たんなる筆ならしだと考えないでほしい。いや、これは、新イスクラ派のれっきとした委員会、チフリス委員会の機関紙に述べてあることである。それだけではない。このたわごとは『イスクラ』によって直接に是認されているのである。『イスクラ』の第一〇〇号には、この『ソツィアルーデモクラート』について次のように述べられている。

「第一号は、生きいきと、才能にとんだやり方で、編集されている。編集者＝著作者の熟練した、たくみな手腕がうかがわれる。……この新聞は課せられた任務をみごとに果たすであろう、と確信をもって言うことができる。」

そのとおり！　もしもその任務が新イスクラ主義の完全な思想的腐敗をあらゆる人に明瞭に示すことにあるのなら、その任務はじつに「みごとに」遂行されている。新イスクラ派の自由主義ブルジョア的日和見主義への堕落を、これ以上に「生きいきと、才能にとんだやり方で、たくみに」表現することは、だれにもやれないだろう。

八　オスヴォボジデーニエ主義と新イスクラ主義

次に、新イスクラ主義の政治的意義を明瞭に確証しているもう一つの事実に移ろう。

注目すべき、すぐれた、教えられるところのきわめて多い論文『どのようにして自己を発見すべきか』（『オスヴォボジデーニエ』第七一号）で、ストルーヴェ氏は、われわれ最左翼の諸政党の「綱領上の革命主義」にたたかいをいどんでいる。ストルーヴェ氏は私個人にとくに不満をいだいている。[*] 私はどうかといえば、私は、このうえもなくストルーヴェ氏に満足している。新イスクラ派の復活しつつある「経済主義」や「社会革命派」の完全な無原則性とたたかううえに、こんなよい同盟者は願ってもないだろうからだ。ストルーヴェ氏と『オスヴォボジデーニエ』が、社会革命派の綱領草案でなされたマルクス主義「修正」のまったくの反動性を、どのように実践的に証明したか、これについては、いつか別の機会に述べることにしよう。ストルーヴェ氏が新イスクラ派を原則的に是認するたびに、彼

がどんなに誠実な、良心的な、真の奉仕を私にしてくれたか、それについてわれわれはすでにたびたび述べてきたが、**いまもう一度述べることにしよう。

* 「レーニン氏とその同志諸君の革命主義に比較すれば、ベーベルの西ヨーロッパ的社会民主主義の革命主義、いなカウツキーのそれでさえ、日和見主義である。しかしすでに和らげられたこの革命主義の基礎でさえ、歴史によって洗いくずされ、洗いながされているのである。」まことに怒りにみちた攻撃である。ただストルーヴェ氏が私を死人扱いにして、なんでも私になすりつけることができると考えているのなら、それはまちがいである。私としてはストルーヴェ氏に挑戦さえすれば十分であって、彼はけっしてこの挑戦に応じえないだろう。いつ、どこで、私が「ベーベルやカウツキーの革命主義」を日和見主義とよんだか？　国際社会民主主義のうちに、ベーベルやカウツキーの傾向と同一でない、なにか特別な流派をつくりだそうとする大それた望みを、いつ、どこで私がいだいたか？　たとえばブレスラウで農業問題についてベーベルとカウツキーのあいだに起こった意見の相違(三〇)にいくらかなりと近いような重大な意見の相違が一方の私と、他方のベーベルおよびカウツキーとのあいだに、いつ、どこで現われたか？　ストルーヴェ氏は、試みにこの三つの質問に答えてみるがよい。

　ところで、読者諸君には次のように言おう。自由主義的ブルジョアジーは、自国の社会民主主義者はひどく分別がないが、その同志である隣国の社会民主主義者は「お利口さん」であると、その国の自分の仲間に向かって断言するという手口を、いつ、どこでも、つかっている。ドイツのブルジョアジーは、ベーベルやカウツキーのような人たちへの教訓として、「お利口さん」であるフランスの社会主義者を何百回となく引合いにだした。フランスのブルジョアジーはつい最近、フランスの社会主義者への教訓として、「お利口さんである」ベーベルを引合いにだした。ストルーヴェ氏よ、古い手口だ！　君の釣針にひっかかるのは、子どもか無学者ぐらいのものだ。綱領と戦術のあらゆる重大問題における革命的国際社会民主主義の完全な連帯性は、断じてあらそうことのできない事実である。

** 『オスヴォボジデーニエ』が、論文『なにをなすべきでないか？』（『イスクラ』第五二号）を、日和見主義者にたいする譲歩精神への「意味ふかい転換」として鳴りもののいりで歓迎したことを、読者に思いだしていただこう。『オスヴォボジデーニエ』は、ロシアの社会民主主義者のあいだの分裂を述べた記事のなかで、新イスクラ主義の原則的諸傾向をとくに是認していた。『われわれの政治的任務』というトロツキーの小冊子について、『オスヴォボジデーニエ』は、この思想が、かつてラボーチェエ・デーロ派のクリチェフスキー、マルトィノフ、アキモフが書いたり話したりしたことと同じ性質のものであることを、指摘していた（『フペリョード』発行のリーフレット『世話やきの自由主義者』を見よ〔全集、第七巻、五二三ページ〕）。『オスヴォボジデーニエ』は、二つの独裁についてのマルトィノフの小冊子を歓迎していた（『フペリョード』第九号の記事を見よ〔全集、第八巻、二一

五ページ〕)。最後に、「まず分界線を画し、そうしてのち統合せよ」という旧イスクラの古いスローガンについてのスタロヴェルのおくればせの不平は、『オスヴォボジデーニエ』の特別な共鳴を得た。

ストルーヴェ氏の論文には非常に興味のある言明がたくさんあるが、ここではそれについては、ただことのついでに指摘することしかできない。彼は、「闘争にもとづいてでなく、諸階級の協力にもとづいて、ロシアの民主主義をつくりだす」つもりでいるのだが、そのさい、「社会的特権をもっているインテリゲンツィア」(ストルーヴェ氏が真に上流社会の……従僕にふさわしい優雅さで敬礼している「文化的貴族」のような)はその「社会的地位の重み」(財布の重み)をこの「非階級的」政党にもちこむであろう、という。ストルーヴェ氏は、「ブルジョアジーはおびえて、プロレタリアートと自由の事業とを裏切ってしまった、という急進主義者のきまり文句」が役に立たないことを青年に知らせたいという願望を表明している(われわれは心からこの願望を歓迎する。マルクス主義者のこの「きまり文句」にたいするストルーヴェ氏のたたかいほど、この「きまり文句」の正しさを裏書きするものはあるまい。ストルーヴェ氏よ、どうぞ、そのすばらしい計画を棚上げしないでくれたまえ!)。

われわれの論題にとって重要なことは、政治的に敏感で、天候のちょっとした変化にも反応を示す、ロシアのブルジョアジーのこの代表者が、現在どのような実践的スローガンとたたかっているかを、指摘することである。第一に、彼は共和主義のスローガンとたたかっている。ストルーヴェ氏は、このスローガンが「人民大衆にはわからないし、縁がない」とかたく信じている(彼は、ブルジョアジーにはよくわかるが不利益である、とつけくわえるのを忘れている!)。ストルーヴェ氏が、われわれのサークルや大衆集会で労働者からどんな答えを受けとるか、見たいものである! それとも、労働者は人民でないというのか? では、農民はどうか? ストルーヴェ氏のことばによれば、農民がしばしばもちあわせているのは「素朴な共和主義」(「ツァーリを追いだせ」)である。――だが、自由主義的ブルジョアジーは、将来、素朴な共和主義に代わって、意識的な、共和主義ではなく、意識的な君主主義が現われるものと、信じているのだ! Ça dépend〔様子を見よう〕、ストルーヴェ氏よ、それは事情しだいだ。ツァーリズムもブルジョアジーも、地主の土地を犠牲にして農民の状態を根本的に改善することに反対しないわけにはいかないが、労働者階級は、この点で農民を援助しないわけにはいかないのだ。

第二に、ストルーヴェ氏は、「内乱では非はつねに攻撃者の側にある」と断言している。この思想は、上述した新イスクラ主義の諸傾向にきわめて近いものである。われわれは、もちろん、内乱ではいつでも攻撃が有利である、とは言わない。いな、時として、一時ぜひとも防御戦術をとらなければならないこともある。だが、ストルーヴェ氏がだしたこのような命題を一九〇五年のロシアに適用することとは、まさに、「急進主義者のきまり文句」(「ブルジョアジーはおびえて自由の事業を裏切る」)の一片を示すことを意味する。いま専制、反動を攻撃することを望まないもの、この攻撃の準備をしないもの、それを宣伝しないものは、革命の味方と自称しようとしてもむだである。

ストルーヴェ氏は、「秘密活動」や「一揆」(これは「蜂起の縮図」であるといって)というスローガンを非難している。ストルーヴェ氏は、「大衆に接近する」見地からこのどちらをも軽蔑する！　われわれは、ストルーヴェ氏におたずねしたい。貴下は、貴下の見解によると常軌を逸した革命主義者の著作、たとえば『なにをなすべきか？』のなかに、一揆の宣伝があるのを指摘できるか、と。また、「秘密活動」については、たとえば、われわれとストルーヴェ氏との差異は大きなものなのか、と。われわれ二人はいずれも、「秘密に」ロシアにもちこまれ、「解放同盟」またはロシア社会民主労働党という「秘密の」グループに奉仕している「非合法」新聞ではたらいていはしないか？　われわれの労働者集会はしばしば「秘密」にひらかれている。――われわれはたしかにそういう罪を犯している。だが、オスヴォボジデーニエ派の諸君の集会はどうか？　ストルーヴェ氏よ、貴下は、軽蔑すべき秘密活動の軽蔑すべき支持者にくらべて、なにか自慢するようなものをもっているのか？

なるほど、労働者に武器を供給するにはとくべつ厳重な秘密活動が必要である。この問題になると、ストルーヴェ氏の発言はもっと率直である。彼の言うことを聞きたまえ。「武装蜂起すなわち技術的な意味での革命についていえば[1]、民主主義的綱領を大衆的に宣伝することによってのみ、全般的武装蜂起の社会的＝心理的諸条件をつくりだすことができる。こういうわけで、武装蜂起を現在の解放闘争の不可避的な完成と考える見地、私の同意しえないこの見地から見てさえ、民主主義的改革の思想を大衆のなかに浸透させることが、最も基本的な、最も必要な仕事である。」

(1)　手稿では、レーニンは、このあとに次のように書き入れたのち、抹消している。「新『イスクラ』からの剽窃が始まる。」

ストルーヴェ氏は問題を避けようと努めている。彼は、革命の勝利のために蜂起が必要だと言うかわりに、蜂起の不可避性をうんぬんしている。準備の不十分な、自然発生的な、ばらばらな蜂起はすでに始まっている。これが完全無欠な武装人民蜂起になると、無条件にうけあうことはだれにもできないだろう。なぜなら、それは、革命勢力（これは闘争そのものによってのみ完全にはかられる）の状態にも、政府とブルジョアジーのふるまいにも、正確に計算することのできないその他多くの事情にも、左右されるからである。ストルーヴェ氏は、具体的な事件が起こることが絶対に確実であるという意味での不可避性のほうに話をそらしているが、そういう意味での不可避性について論じてもなんの役にも立たない。もし諸君が革命の味方になりたいのなら、革命の勝利のためには蜂起が必要であるかどうか、積極的に蜂起を提唱し、宣伝し、ただちに精力的に準備することが必要であるかどうかを、論じなければならない。ストルーヴェ氏が、この差異を理解していないはずはない。たとえば、民主主義者にとって議論の余地のない、普通選挙権が必要かどうかという問題の場合には、彼は現在の革命のあいだにそれが獲得されることが不可避かどうかという、議論の余地ある、政治家にとってそれほどさしせまっていない問題でおおいかくしたりはしていないではないか。ストルーヴェ氏は、蜂起が必要であるかどうかという問題を避けて、自由主義的ブルジョアジーの政治的立場の奥ふかい内幕を言いあらわしている。ブルジョアジーは、第一に、専制を押しつぶすよりも、それと取引することを望んでいる。ブルジョアジーは、いずれにしても、武器を手にした闘争は労働者に押しつける（これが第二である）。ストルーヴェ氏の回避的態度には、こういう現実的意義がある。だからこそ、彼は、蜂起の不可避性の問題から、蜂起の「社会的＝心理的」諸条件の問題に、それをあらかじめ「宣伝」する問題にあともどりするのである。一八四八年に、政府の武力にたいする反撃が当面の問題になっていたとき、運動が武装闘争を「必要とするようになり」、たんにことばだけではたらきかけること（これは準備期には百倍も必要だ）が俗悪なブルジョア的な無為と臆病を意味するようになっていたときに、フランクフルト議会でブルジョアのおしゃべり屋たちが、決議・宣言・決定の作成や、「大衆的宣伝」や、「社会的＝心理的諸条件」の準備やにうき身をやつしていたのとまったく同じように、ストルーヴェ氏も、空文句に隠れて、蜂起の問題をごまかしている。ストルーヴェ氏は、多くの社会民主主義者が頑強に見ようとしない次の点を、はっきりとわれわれに示してくれる。それは、革命的時機は、大衆の気分、興奮、確

信が行動になって現われざるをえないし、また実際に現われるという点で、通常の、日常の、準備的な歴史的時機とは異なるということである。

俗流的な革命主義は、ことばもまた一個の行為であることを理解しない。この命題は、歴史一般にあてはめてみれば、あるいは、大衆の公然たる政治行動がなく、どのような一揆もそれに代わることができず、また、人為的にそうした政治行動を引きおこすこともないような歴史的時機にあてはめてみれば、議論の余地のないものである。ところが、革命家の追随主義は次のことを理解しない。すなわち、革命的時機が始まり、古い「上部構造」がずたずたになってしまい、自分のために新しい上部構造を創出する諸階級と大衆の公然たる政治行動が事実になり、内乱がすでに始まっているときになっても、「行為」に移れという直接のスローガンをかかげずに、従来どおり「ことば」だけにとどまっていたり、「心理的諸条件」や「宣伝」一般を口実として行為を避けようとするのは、生気のない、死んだも同然のふるまいか、屁理屈か、それでなければ革命への裏切り、革命への変節であることを、理解しない。フランクフルトの民主主義的ブルジョアジーのおしゃべり屋たちは、このような裏切りの、あるいはこのような屁理屈屋的愚鈍の、不滅の歴史的標本である。

諸君は、ロシアの社会民主主義運動史を例にとって、俗流的な革命主義と革命家の追随主義とのこの差異を、説明してもらいたいと思うだろうか？　われわれは諸君にそれを説明しよう。ついこのあいだ過ぎたばかりなのに、いまではもう遠い昔の伝説のようにわれわれには思われる、一九〇一―一九〇二年を思いおこしていただきたい。デモンストレーションが始まった。俗流的な革命主義が「突撃」という叫び声をあげ（『ラボーチェエ・デーロ』[31]）、「血なまぐさいリーフレット」（私の記憶に誤りがなければ、ベルリンで発行されたもの）がだされ、新聞をつうじて全国的扇動をおこなうといった考えが「文筆家気質」[32]であり書斎的であるといって攻撃された（ナデジヂン）。革命家の追随主義は、これに反して、その当時「経済闘争は政治扇動の最良の手段である」と説いていた。革命的社会民主主義は、どういう態度をとったか？　革命的社会民主主義は、この二つの潮流を両方とも攻撃した。革命的社会民主主義は一揆主義や突撃の叫びを非難した。というのは、公然たる大衆行動はあすの問題であることを、万人がはっきり見ていたか、あるいは見るにちがいなかったからである。革命的社会民主主義は、追随主義を非難し、全人民の武装蜂起のスローガンさえも公然とかかげたが、それは、直接の呼びかけの意味ではなくて（ストルーヴェ氏は当時の

われわれの主張のなかに「一揆」の呼びかけを見つけはしないだろう)、必然的な結論という意味での、「宣伝」の意味での(ストルーヴェ氏は、ようやくいまになってこれを思いだした。貴下はいつも数年おくれている。わが尊敬すべきストルーヴェ氏よ)、また現在、当惑した小商人的ブルジョアジーの代表者たちが「もの悲しげに、時機はずれに」弁じたてている、あのほかならぬ「社会的=心理的諸条件」を準備するという意味でのそれであった。その当時には、客観的な事態によって現実に前面に押しだされていたのは、宣伝と扇動、扇動と宣伝であった。その当時には、蜂起の準備活動の試金石としてもちだすことのできた(また『なにをなすべきか?』で実際にもちだされた)のは、週刊が理想であると思われていた全国的政治新聞のための活動であった。その当時には、直接的な武装行動というスローガンではなくて大衆的扇動というスローガンが、また一揆主義のスローガンではなくて蜂起の社会的=心理的諸条件の準備というスローガンが、革命的社会民主主義の唯一の正しいスローガンであった。いまでは、これらのスローガンは、事件に追いこされてしまい、運動はさきへすすんでしまった。これらのスローガンは、オスヴォボジデーニエ派の偽善や、新イスクラ派の追随主義を隠すのにしか役だたない、反古かぼろになってしまった!

それとも、もしかすると、私がまちがっているのだろうか? もしかすると、革命はまだ始まっていないのではあるまいか? 諸階級の公然たる政治行動の時機は、まだきていないのではあるまいか? 内乱はまだないのではあるまいか、そして武器の批判は、いまのところ、批判の武器の必然的で、義務的な継承者、相続者、遺言執行者、完成者であってはならないのではあるまいか?

これらの問題に答えるためには、自分の周囲を見まわすがよい。書斎から街頭に出てみるがよい。いたるところで、平和な、武器をもたない市民を大量に射殺することによって、政府自身が内乱をすでに開始しているではないか? 武装した黒百人組が、専制を「論証するもの」として行動しているではないか? ブルジョアジーは――ブルジョアジーでさえ――民兵の必要をさとっているではないか? 当のストルーヴェ氏、理想的に穏健で実直なストルーヴェ氏自身が、「革命的行動の公然たる性格は」(いまではここまできたのだ!)、「現在、人民大衆に教育的な影響をおよぼす最も重要な条件の一つである」と言っている(悲しいかな、言いのがれのために言っているだけだが!)ではないか?

いまでは、革命の支持者は武装蜂起の問題を提起しなければならないということについては、見る目をもっている

ものには疑問はありえない。大衆にいくらかでも影響をおよぼしうる自由な機関紙誌のうちであたえられている、この問題の三つの提起を見るがよい。

第一の提起。ロシア社会民主労働党第三回大会の決議。* 一般民主主義的な革命運動がすでに武装蜂起を必要とするにいたっていることを認め、公然とそれを宣言している。蜂起のためにプロレタリアートを組織することを、党の重要な、主要な、必須の任務の一つとして、日程にのぼせている。プロレタリアートを武装し、蜂起を直接に指導する可能性を保障するために、最も精力的な方策をとることを委任している。

* その全文は、次のとおり。

「(一) プロレタリアートは、その地位からして、最も先進的な、唯一の徹底した革命的階級であり、まさにそのためにロシアの一般民主主義的革命運動で指導的役割を果たす使命をになっている。

(二) この運動は、いまではすでに武装蜂起を必要とするにいたっている。

(三) プロレタリアートは、不可避的にこの蜂起に最も精力的に参加するであろうし、この参加はロシアにおける革命の運命を決定するであろう。

(四) プロレタリアートは、思想的にばかりでなく実践的にもプロレタリアートの闘争を指導する社会民主労働党の旗のもとに、単一の、独自な政治勢力に結集されてはじめて、この革命における指導的役割を果たすことができる。

(五) このような役割を果たすことだけが、ブルジョア民主主義的ロシアの有産諸階級に反対し、社会主義をめざす闘争のための、最も有利な諸条件をプロレタリアートに保障することができる。

以上の点を考慮して、ロシア社会民主労働党第三回大会は、武装蜂起によって専制と直接にたたかうために、プロレタリアートを組織する任務が、現在の革命的時機における党の最も主要かつ猶予ならない任務の一つであると認める。

そこで大会は、すべての党組織に次のことを委任する。

(イ) 宣伝と扇動によって、きたるべき武装蜂起の政治的意義ばかりでなく、その実践的＝組織的側面をもプロレタリアートに明らかにすること。

(ロ) この宣伝と扇動にあたっては、蜂起のはじめとその経過そのもので重要な意義をもちうる大衆的政治的ストライキの役割を明らかにすること。

(ハ) プロレタリアートを武装させるため、また武装蜂起をおこし、それを直接に指導する計画を作成するための、最も精力的な方策をとること。そのために必要に応じて党活動家の特別グループをつくること。」〔一九〇七年版への原注〕

第二の提起。『オスヴォボジデーニエ』にのった「ロシア立憲派の首領」[三三]（最近『フランクフルト新聞』のようなヨーロッパ・ブルジョアジーのきわめて有力な機関紙がストルーヴェ氏をこうよんだ）、すなわちロシアの進歩的ブ

ルジョアジーの首領の原則的な論文。彼は、蜂起が不可避だという意見に同意しない。秘密活動と一揆は、無分別な革命主義に特有のやり方である。共和主義は、どなりたてて人の耳をつんぼにする方法である。武装蜂起は、もともと技術的な問題にすぎず、「最も基本的な、最も必要な仕事」は、大衆的宣伝と社会的＝心理的諸条件の準備である。

第三の提起。新イスクラ派の協議会の決議。われわれの任務は蜂起を準備することである。計画的な蜂起の可能性はない。蜂起に有利な条件は、政府の混乱、われわれの扇動、われわれの組織によってつくりだされる。そのときにはじめて、「技術的戦闘準備が多少とも重要な意義をもちうるようになる」。

それだけか？　それだけなのだ。蜂起が必要になっているかどうか、プロレタリアートの新イスクラ的指導者はまだそれを知らない。直接にたたかうためにプロレタリアートを組織する任務は、猶予ならないものだろうか、――彼らには、それはまだ不明である。最も精力的な方策をとるように呼びかける必要はなく、どのような条件のもとでこれらの方策は「多少とも重要な」意義をもち「うる」かをあらまし説明することのほうが、はるかに重要だ（一九〇二年にではなくて一九〇五年にだ）、……というわけである。

新イスクラ派の同志諸君、マルトィノフ主義への方向転換が諸君をどこへつれていったか、もうおわかりだろうか？　諸君の政治哲学が、オスヴォボジデーニエ派哲学の焼きなおしだったこと、また諸君が（諸君の意志に反して、知らずしらずに）君主主義的ブルジョアジーのうしろにくっついてしまったことが、諸君にはおわかりだろうか？昔覚えたことをおさらいし、屁理屈に上達していくうちに、――ピョートル・ストルーヴェの忘れがたい論文の、忘れがたいことばをかりていえば――「革命的行動の公然たる性質は、現在、人民大衆に教育的な影響をおよぼす最も重要な条件の一つである」という事情を諸君が見おとしたことが、諸君にはもうはっきりしただろうか？

九　革命時に最左翼の野党であるということはなにを意味するか？

臨時政府についての決議にもどろう。われわれは、新イスクラ派の戦術が革命を前進させずに、――彼らはその決議によってこの前進の可能性を保障したいと思ったのだが――かえって後退させることを、示した。われわれは、この戦術こそ、不徹底なブルジョアジーとたたかうさいに社会民主党の手をしばるものであり、ブルジョア民主主義派

への解消を未然に防ぐものでないことを、示した。この決議の誤った前提から誤った結論が得られるのは当然である。その結論というのは、「だから、社会民主党は、臨時政府内で権力を奪取したり、それを分有することを目標とすべきではなく、最左翼の革命的野党にとどまらなければならない」というのである。目標の設定について述べている、この結論の前半を見たまえ。新イスクラ派は、ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利を社会民主党の活動の目標としているだろうか？――している。彼らは、決定的勝利の条件を正しく定式化することができず、『オスヴォボジデーニエ』的定式に迷いこんでいるが、ともかくそういう目標をたてている。次に、彼らは、臨時政府と蜂起とを結びつけているだろうか？――そのとおり。彼らは、臨時政府は「勝利した人民蜂起のなかから出現する」と言って両者を直接に結びつけている。最後に、彼らは、蜂起を指導することを目標にしているだろうか？――そのとおり。彼らは、ストルーヴェ氏と同じように、蜂起を必要で猶予ならないものと認めることを避けてはいるが、しかし同時に、ストルーヴェ氏とは違って、「社会民主党はそれ（蜂起）を自党の指導に服させ、蜂起を労働者階級のために利用することに努める」と言っている。

これはなんと筋のとおったことではないか？　われわれは、プロレタリア大衆の蜂起も非プロレタリア大衆の蜂起も、ともにわれわれの影響下、われわれの指導下におき、蜂起をわれわれのために利用することを目標としている。したがって、われわれは、蜂起にあたって、プロレタリアートをも、革命的ブルジョアジーをも、また小ブルジョアジー（「非プロレタリア的グループ」）をも指導すること、すなわち社会民主党と革命的ブルジョアジーとのあいだで蜂起の指導権を「分有する」ことを目標にしている。われわれは、当然に臨時政府（「勝利した人民蜂起のなかから出現した」）の樹立をもたらさざるをえないような、蜂起の勝利を目標としている。だから……だからわれわれは、臨時革命政府のなかで権力を奪取したり、分有することを目標としてはならないとは!!

われわれの友人たちは、どうしてもつじつまをあわせることができない。彼らは、蜂起を言いのがれようとするストルーヴェ氏の見地と、この猶予ならない任務にとりかかれと呼びかけている革命的社会民主主義の見地とのあいだを、動揺している。彼らは、臨時革命政府への参加はすべてプロレタリアートにたいする裏切りだとして原則的に非難する無政府主義と、蜂起に社会民主党が指導的影響を及ぼすことを条件として臨時革命政府への参加を要求するマルクス主義*とのあいだを、動揺している。彼らには、独自

の立場がなにもない。ツァーリズムと折合いをつけようと望み、そのため蜂起の問題を避け、言を左右にせざるをえないストルーヴェ氏の立場もなければ、「上から」の行動とブルジョア革命への参加とをすべて非難する無政府主義者の立場もない。新イスクラ派は、ツァーリズムとの取引とツァーリズムにたいする勝利とを混同している。彼らは、ブルジョア革命に参加したいと思っている。彼らは、マルトィノフの『二つの執権』よりはいくらかさきへすすんだ。彼らは、人民蜂起を指導することに同意さえしている。ただし、それは、勝利の直後に（あるいは、おそらく勝利の直前に？）この指導を放棄するためである。すなわち勝利の成果を利用するためではなくて、すべての成果をそっくりブルジョアジーにさしあげるためである。彼らは、それを「蜂起を労働者階級のために利用する」ことと名づけている……

＊『プロレタリー』第三号、『臨時革命政府について』第二論文を見よ〔全集、第八巻、四七五—四八三ページ〕。

この混乱にこれ以上たちいる必要はない。それよりも、「最左翼の革命的野党にとどまる」という定式について、この混乱の起原を検討するほうが有益である。

これは、革命的国際社会民主主義の旧知の命題の一つである。これは、まったく正しい命題である。これは、議会制度のある国々で修正主義または日和見主義に反対するすべての人々にとって、ありふれた考えになっている。これは、「議会主義的クレチン病」や、ミルラン主義や、ベルンシュタイン主義や、トゥラティ型のイタリア改良主義にたいする正当で必要な反撃として、市民権を獲得した。わが新イスクラ派の先生がたは、このりっぱな命題を覚えこみ、熱心に応用する、……ただし、まったく時機はずれに。議会闘争のカテゴリーが、議会が全然存在しないような事情を想定して書かれた決議のなかに、挿入されているのである。「反政府」という概念は、だれもまじめに蜂起のことを論じるもののいないような政治情勢の反映であり表現であるが、その概念が、蜂起がすでに始まっている情勢に、革命の支持者たちがみな蜂起の指導について考えたり論じたりしている情勢に、無意味にも転用されているのである。蜂起が勝利したさいには上から行動する必要があるという問題を革命が提出したまさにそのときに、以前と同じやり方に、すなわち「下から」だけの行動に「とどまろう」という願望が、鳴物入りで述べられているのである。

いやいや、わが新イスクラ派は、まったく運が悪い！彼らは、正しい社会民主主義的命題を定式化している場合にさえ、それを正しく適用する能力がない。彼らは、革命が始まっている時機、議会が存在せず、内乱が起こってお

り、蜂起が燃えあがっているさいには、議会闘争の概念や用語が、どのようにその対立物に転化し、変形するかということを、考えてみなかった。彼らは、いま言ったような情勢のもとでは、修正動議が街頭デモンストレーションによって提出され、質問が武装市民の攻撃的行動によって提出され、政府にたいする反対が政府の暴力的打倒によって実現されるということを、考えてもみなかったのである。

わが国の民話の有名な主人公[20]がよい助言をまったく見当ちがいのときに繰りかえしたように、わがマルトィノフの崇拝者たちも、彼ら自身、直接の軍事行動が始まったことを確認しているちょうどそのときに、平和な議会制度の教訓を繰りかえしている。「革命の決定的勝利」や「人民蜂起」を指摘することで始まっている決議のなかで、もったいぶったようすで「最左翼の野党」というスローガンをこういうふうにかかげることくらい、珍妙なものはない！ 諸君、蜂起の時期に「最左翼の野党」であるということがなにを意味するか、考えてみたまえ。それは、政府の暴露をやることなのか、それとも政府を転覆することなのか？ それは、政府に反対投票をすることなのか、それとも公然たる戦闘で政府の軍事力に敗北をなめさせることなのか？ それは、政府が国庫をみたすのを拒絶することなのか、それとも、蜂起に必要なものに、労働者と農民の武装、憲法制定議会の召集に利用するために、国庫を革命的に奪取することなのか？ 諸君、「最左翼の野党」という概念は、たんなる否定的な行動——暴露したり、反対投票したり、拒絶したりすること——を表現するものであることが、諸君にもわかりはじめるのではあるまいか？ なぜそうか？ なぜなら、この概念は、議会闘争にしか、しかも、だれも「決定的勝利」を直接の闘争目標としていない時機の議会闘争にしか、あてはまらないものだからである。政治的に抑圧されている人民が、勝利をめざす死にものぐるいの闘争のため全線にわたって断固たる攻撃を始める瞬間から、この点で事情が急角度に変化するということが、諸君にもわかりはじめるのではあるまいか？

労働者たちはわれわれにたずねる。猶予ならない蜂起の事業に精力的にとりかかるべきか？ 開始した蜂起を勝利させるにはどうしたらよいか？ 勝利をどういうふうに利用したらよいか？ そのときには、どういう綱領を実現することができるか、また実現しなければならないか？ と。マルクス主義をふかめている新イスクラ派は答える。最左翼の革命的野党にとどまれ、と。……してみれば、われわれがこれらの騎士諸君を俗物根性の達人とよんだのはまちがっていただろうか？

一〇 「革命的コミューン」およびプロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権(ディクタツーラ)

新イスクラ派の協議会は、新『イスクラ』がそこまで落ちこんでしまった無政府主義的立場(「下から」だけで、「下からと上からと」ではない)を堅持しはしなかった。蜂起は許されるが、勝利したり、臨時革命政府に参加することは許されない、という主張の愚劣さは、あまりにも明らかであった。だから、決議は、この問題についてのマルトィノフとマルトフの解答に、但し書と制限をつけたのである。決議のこれにつづく部分に述べられている、それらの但し書を考察しよう。

「もちろん、この戦術」(「最左翼の革命的野党にとどまる」という)「は、もっぱら蜂起の波及と政府の解体とを促進するために、あれこれの都市または地帯で、部分的に、挿話的(エピソード)に、権力を奪取し、もろもろの革命的コミューンをつくるのが適切である場合のあることを、けっして排除するものでない」と。

もしそうだとすれば、原則として、下からの行動だけでなく上からの行動も許されるということになる。つまり、『イスクラ』(第九三号)に掲載されたエリ・マルトフの周知の小論中に提出されている命題はくつがえされ、「下から」だけでなく「上から」もという新聞『フペリョード』の戦術が正しいと認められているわけである。

さらに、権力の奪取は(たとえ部分的、挿話的、等々のものであっても)、明らかに社会民主党だけ、またプロレタリアートだけが参加することを予想してはいない。それは、民主主義革命を利益とし、これに積極的に参加するのがプロレタリアートだけでないことから、当然にでてくることである。それは、われわれがここで検討している決議の冒頭に述べてあるとおり、蜂起が「人民蜂起」であるということから、蜂起には「非プロレタリア的グループ」(蜂起についての協議会派の決議の表現)も、すなわちブルジョアジーも参加するということから、当然にでてくることである。つまり、社会民主主義者が小ブルジョアジーといっしょに臨時革命政府に参加することはすべて労働者階級にたいする裏切りであるという原則は、『フペリョード』が求めていたように、協議会によって投げすてられてしまったわけである。「裏切り」は、それを構成する行為が部分的、挿話的、地方的、等々であろうとも、そのために裏切りでなくなるものではない。(22) つまり、臨時革命政府への参加を、卑俗なジョレス主義と同列におくやり方は、

『フペリョード』が求めていたように[六六]、協議会によって投げすてられてしまったわけである。政府は、その権力が多くの都市に及ばずに一つの都市だけに限られ、多くの地帯に及ばずに一つの地帯だけに限られようとも、またこの政府がどう名づけられようとも、そのために政府でなくなるわけのものではない。こういうわけで、新『イスクラ』があたえようとした原則的な問題提起は、協議会によって投げすてられてしまったのである。

いまでは原則的に許されるものとなった革命政府の樹立とそれへの参加に協議会がつけている制限条件が、はたして合理的であるかどうかを見よう。われわれは、「挿話的（エピゾード）」という概念と「臨時的」という概念がどう違うのか知らない。われわれは、この「新しい」外来語が、明瞭な思想の欠けているのを隠しているだけのことではないか、と懸念する。それは、「いっそう深遠」であるように見えるが、実際には、いっそうぼんやりしており、いっそう混乱しているだけである。一都市または一地帯における部分的な「権力奪取」が「適切である」ということは、全国的な臨時革命政府への参加とどう違うのか？　「都市」というなかには、一月九日事件の起こったペテルブルグのような都市ははいっていないのだろうか？　地帯というなかには、多くの国家よりも大きいカフカーズははいっていないのだろうか？　一地帯はさておき、一都市にあってさえも、「権力奪取」にあたって監獄や警察や国庫等々を処理するという任務（かつて新『イスクラ』を困惑させたこの任務）は、われわれのまえに生じてこないというのだろうか？　もちろん、力がたりない場合、蜂起が不完全にしか成功しない場合、蜂起の勝利が決定的でない場合には、部分的、都市的、その他の臨時革命政府が生じることがありうるということを、だれも否定しようとはしないだろう。だが諸君、それがいったいなんの関係があるのか？　諸君自身、決議の冒頭で、「革命の決定的勝利」とか「勝利した人民蜂起」とか言っているではないか？？　社会民主主義者は、プロレタリアートの注意と目標を細分させ、プロレタリアートの注意を全般的なもの、統一的なもの、全体的なもの、完全なものではなくて、「部分的なもの」に向けさせようとする無政府主義者の仕事を、いったいいつから引きうけるようになったのか？　一都市における「権力奪取」を予想しながら、諸君自身「蜂起の波及」をうんぬんしているではないか？——これは、他の都市への波及と、考えてもよいだろうか？　またすべての都市へ波及することを、希望してもさしつかえないだろうか？　諸君、諸君の結論は、諸君の前提と同じように、ぐらついた、いきあたりばったりのものであり、矛盾にみち、混乱している。ロシア社会民

主労働党第三回大会は、臨時革命政府一般の問題に、ゆきとどいた明瞭な答えをあたえている。その答えは、すべての部分的な臨時政府をもふくめている。ところが、協議会の答えは、人為的に、勝手に、問題の一部分を切り離すとで、全体としての問題を避けて(ただし、不手際に)、混迷をもちこんでいるのである。

「革命的コミューン」とはなんのことか? この概念は「臨時革命政府」とは違ったものか? もし違うのなら、どういう点でか? 協議会派の諸君自身、それを知らないのである。彼らの革命思想の混乱は、毎度のことながら、結局、革命的空文句にみちびいている。そうだ、社会民主党の代表者の決議のなかで「革命的コミューン」ということばをつかうのは、革命的空文句であって、それ以上のなにものでもない。マルクスは、すたれた過去の「魅力的な」用語のかげに将来の任務を隠す、このような空文句を一度ならず非難した。歴史上で一つの役割を果たした用語のもつ魅力は、このような場合には、空虚で有害な見かけだおしになり、子どもだましになってしまう。われわれは、なぜ臨時革命政府の樹立を望むのか、すでに始まっている人民蜂起が勝利に終わり、われわれがあすにでも権力に決定的な影響をあたえるようになるとすれば、われわれはいったいどのような改革を実現するのか、これについてわれわれは、労働者と全人民に明瞭な、明確な概念をあたえなければならない。これが、政治的指導者たちのまえにだされている問題である。

ロシア社会民主労働党第三回大会は、きわめてはっきりとこれらの問題にこたえ、この改革の完全な綱領を示している。わが党の最小限綱領がそれである。ところが、「コミューン」ということばは、なんの答えもあたえず、なにか深遠なおしゃべり……または空念仏で、頭をこんがらからせるだけである。たとえば一八七一年のパリ・コミューンがわれわれにとって貴重なものであればあるだけ、その誤謬と特殊な条件を検討することなしにそれを引合いにだすだけでお茶をにごすのは、ますます許しがたいことである。そうすることとは、(一八七四年の彼らの『宣言』で)コミューンのあらゆる行為を礼賛して、エンゲルスに嘲笑された(六八)ブランキ主義者の愚劣な前例を繰りかえすことを意味することになろう。もし労働者から、決議のなかで言及されているこの「革命的コミューン」のことをたずねられたなら、協議会派の人々は、労働者になんと言うのだろうか? 彼らは次のように言えるだけであろう。歴史上に「革命的コミューン」という名で知られているものは、その当時、民主主義的変革の要素と社会主義的変革の要素とを区別する道を知らず、またそれができず、共和制のための闘争の任

務と社会主義のための闘争の任務を混同し、ヴェルサイユ〔反革命政府〕にたいする精力的な武力攻撃の任務を解決するすべを知らず、フランス銀行を奪取しないという誤りをおかし、等々した労働者政府のことだ、と。一言でいえば——諸君が答えのなかでパリ・コミューンを引合いにだそうが、それとも他のどんなコミューンを引合いにだそうが、いずれにせよ諸君の答えは、コミューンはわれわれの政府がそのようなものであってはならないような政府であった、ということになるだろう。いやはや、けっこうな答えである！　党の実践的な綱領については黙してふれず、場ちがいにも決議のなかで歴史の講義を始めるということは、経文読みの屁理屈と革命家としての無力を証明するものではないか？　これこそまさに、彼らが、われわれにそういう罪があることを示そうとやってみてうまくいかなかったその誤り、すなわち、民主主義的変革と社会主義的変革との混同——「コミューン」でこの両者を区別したものは一つもなかった——を、示すものではないか？

臨時政府（場ちがいにもコミューンと名づけられた）の目的としてあげられているのは、「もっぱら」蜂起を波及させることと政府を解体させることとである。この「もっぱら」は、文字どおりの意味では、他のあらゆる任務を排除するということであり、「下からだけ」という愚劣な理論のぶりかえしである。このように他の諸任務を排除することは、またしても近視眼であり、あさはかな考えである。「革命的コミューン」すなわち革命権力は、たとえ一都市だけのものであっても、かならず（一時的、「部分的、挿話的」にであろうとも）すべての国事を遂行しなければならない。そして、ここで翼の下に頭をすくめてしまうのは、愚の骨頂である。この権力は、八時間労働日を決定し、労働者による工場監督制度を設け、無料の普通教育を実施し、裁判官の選挙制を定め、農民委員会を設けるなど、一言でいえば、一連の改良をかならず遂行しなければならないであろう。これらの改良を「蜂起の波及を促進する」という概念にふくめるのは、ことばをもてあそぶことであり、十分に明瞭にしなければならないところで、わざとあいまいさを強めることであろう。

新イスクラ派の決議の結びの部分は、わが党内に復活した「経済主義」の原則的諸傾向を批判するためになにも新しい材料を提供するものではないが、上述のことをいくらか別の側面から例解している。

その部分は、次のとおりである。

「ただ一つの場合にだけ——すなわち、社会主義を実

現する諸条件がすでにある程度（？）成熟している西ヨーロッパの先進諸国に革命が飛火する場合にだけ――社会民主党は、権力をにぎり、できるだけ長く権力をその手に維持することに、みずからすすんで努力をそそがなければならないであろう。この場合には、ロシア革命の限られた歴史的限界をいちじるしく押しひろげることができ、社会主義的改革の道にすすむ可能性が現われるであろう。

革命の全期間をつうじて社会民主党が、革命の過程でつぎつぎに交替する政府のすべてにたいして、最左翼の革命的野党の地位を保つことを意図した戦術をたてることによって、社会民主党は、その権力を利用する――自党の手に政府権力がはいってくるなら（？？）――ことにたいしても、最もよく準備をととのえることができる。」ここにある根本思想は、『フペリョード』が一度ならず定式化したものと同じである。『フペリョード』は言ってきた。われわれは、民主主義革命における社会民主党の完全な勝利、すなわちプロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）を、恐れてはならない（マルトィノフが恐れているように）。なぜなら、そうした勝利はヨーロッパを立ちあがらせる可能性をわれわれにあたえるであろうが、ヨーロッパの社会主義的プロレタリアートは、ブルジョアジーのくびきを投げすてたのち、こんどは逆にわれわれが社会主義的変革を遂行するのをたすけるであろうから、と。ところで、この思想が新イスクラ派の叙述のなかでどんなに改悪されているかを見ていただきたい。権力の奪取を有害な戦術と思っている意識的な党の手中に権力が「はいってくる」ことがありうるといったたわごととか、ヨーロッパでは社会主義のための諸条件がある程度成熟しているのではなく全般的に成熟しているのだということとか、われわれの党綱領はけっして社会主義的諸改革なるものを知らず、ただ社会主義的変革だけを知っているということとか、そういう細目にはたちいらないことにしよう。『フペリョード』の思想とこの決議との主要な、基本的な相違点をとってみよう。『フペリョード』は、ロシアの革命的プロレタリアートに、民主主義のための闘争に勝利し、ヨーロッパに革命をもちこむためにその勝利を利用するという積極的任務を指示してきた。決議は、われわれの「決定的勝利」（新イスクラのいう意味でではない）とヨーロッパの革命とのこの関連を理解しておらず、したがって、プロレタリアートの任務についても、プロレタリアートの勝利の見通しについても述べずに、およそありうるいろいろの場合の一つについて――「革命が飛火した場合」について――述べている。……『フペリョード』は、社会発展の現在の段

階でただちに実現できるものはなにか、また社会主義のための闘争の民主主義的前提としてまず実現しなければならないものはなにかを考えて、どうすればプロレタリアートの利益になるように「政府権力を利用」できるか、またどう利用すべきかを、率直に、明確に指示してきた。そして、この指示は、ロシア社会民主労働党第三回大会の決議にとりいれられた。ところが、〔協議会の〕決議は、「利用することにたいして準備をととのえることができる」と言っているが、しかし、どういうふうに利用するためのどういう準備をどのようにすればととのえることができるかを述べる能力がないので、ここでも手のつけようがないほどうしろからよちよちついていくだけである。われわれは、たとえば、新イスクラ派が党内の指導的地位を「利用することにたいして準備をととのえることができる」ことを疑わない。だが、問題は、この利用についての彼らの経験、彼らの準備なるものが、これまでのところ、可能性が現実に転化するという希望をすこしもあたえない、というところにあるのだ。……

『プペリョード』は、「権力をその手に維持する」現実的「可能性」がまさにどこにあるかを的確に述べてきた。――それは、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁に、すべての反革命勢力を圧倒することのできるプロレタリアートと農民の共同の大衆的な力に、そして民主主義的改革にかんする彼らの利害が不可避的に一致することにある、と。ところが、協議会の決議は、この点でも明確なものを示さず、言を左右にして問題を避けているだけである。だが、ロシアで権力維持をする可能性は、かならずやロシアそのものの社会的諸勢力の構成と、わが国でいま進行している民主主義的変革の諸条件によって、条件づけられるはずである。ヨーロッパにおけるプロレタリアートの勝利（革命のヨーロッパへのもちこみとプロレタリアートの勝利とのあいだには、なお若干のへだたりがあるが）は、ロシアのブルジョアジーの死にものぐるいの反革命的闘争を引きおこすにきまっている。――新イスクラ派の決議は、ロシア社会民主労働党第三回大会の決議でその意義を評価されているこの反革命勢力については、一言も述べていない。もしわれわれが、共和制と民主主義のための闘争で、プロレタリアートのほかに農民にも依拠することができないとすれば、「権力を維持する」ことは絶望的であろう。また、もしそれが絶望的でないとするなら、もし「ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利」がそのような可能性をひらくとするなら、それならわれわれは、その可能性を指摘し、その可能性を現実に転化するように積極的に呼びかけ、たんに革命がヨーロッパにもちこまれる場合にそな

えてだけでなく、またそういうふうにもちこむための、実践的なスローガンをあたえなければならない。社会民主主義の追随主義者らは「ロシア革命の限られた歴史的限界」を引合いにだしているが、これは、この民主主義革命の諸任務と、この革命におけるプロレタリアートの先進的役割とについての理解が限られていることを隠しているにすぎない！

「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）」というスローガンにたいする反対論の一つは、執権（ディクタツーラ）は「一致した意志」（『イスクラ』第九五号）を前提とするが、プロレタリアートと小ブルジョアジーのあいだには一致した意志はありえない、という点にある。この反対論はなりたたない。なぜなら、この反対論は、「一致した意志」という概念の抽象的・「形而上学的な」解釈に基礎をおいているからである。ある点では一致した意志があるし、他の点では一致しないのだ。社会主義の諸問題と社会主義のための闘争で一致がないからといって、民主主義の諸問題と共和制のための闘争でも意志の一致がありえないということにはならない。これを忘れるのは、民主主義的変革と社会主義的変革との論理的および歴史的な差異を忘れることである。これを忘れるのは、民主主義的変革の全人民的性格を忘れることである。もしそれが「全人民的な」ものだとすれば、つまり、この変革が全人民の必要と要求を実現するという、まさにそのかぎりでは、「意志の一致」があることになる。民主主義の限界をこえれば、プロレタリアートと農民ブルジョアジーとの意志の一致は問題にならない。両者のあいだの階級闘争は避けられないが、しかし、民主的共和制を基盤とするこの闘争は、社会主義をめざす最も深刻な、最も広範な人民闘争になるだろう。プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）には、世の中のすべてのものと同じように、過去と未来がある。その過去は、専制、農奴制、君主制、特権である。この過去との闘争、すなわち、反革命との闘争では、プロレタリアートと農民の「意志の一致」は可能である。というのは、両者の利害の一致があるからである。

その未来は、私的所有にたいする闘争、賃金労働者と雇主との闘争、社会主義のための闘争である。ここでは意志の一致はありえない。* この場合に、われわれのまえにあるのは、専制から共和制への道ではなくて、小ブルジョア的な民主的共和制から社会主義への道である。

* 自由がある場合には資本主義の発展はますます広範で急速なものとなるが、この発展はかならず、意志の一致を急速に――反革命と反動の粉砕が速ければ速いほど、それだけ急速に――終わらせるであろう。

もちろん、具体的な歴史的環境のもとでは、過去の要素と未来の要素はからみあい、一方の道は他方の道とたがいにまじわる。賃労働と、私的所有にたいする賃労働の闘争とは、専制のもとにもある。賃労働は、農奴制度のもとでさえ生まれる。しかし、それだからといって、われわれが大きな発展段階を論理的、歴史的に区分できないということには、けっしてならない。われわれはみな、ブルジョア革命と社会主義革命とを対置しているではないか。われわれはみな、両者を峻別する必要を無条件に主張しているではないか。だが、いったい、歴史のうえでは、二つの変革の個々の部分的な要素がたがいにからみあうということを、否定できるだろうか？　ヨーロッパの民主主義諸革命の時代に、いくつかの社会主義運動や社会主義的な企てがなかっただろうか？　また、ヨーロッパの将来の社会主義革命には、民主主義の点でまだ非常に多くの仕事が残されているのではあるまいか？

社会民主主義者は、どんなに民主主義的で共和主義的なブルジョアジーや小ブルジョアジーであっても、彼らにたいするプロレタリアートの社会主義をめざす階級闘争が避けられないことを、けっして、片ときも忘れてはならない。これは疑いようのないことである。このことから結論されることは、別個の、独自の、厳密に階級的な社会民主主義政党がどうしても必要だということである。またこのことからは、われわれがブルジョアジーと「共同して打つ」のは一時的なことであり、「敵をも同盟者をも」厳重に監視しなければならないということが、結論される。こういうことも、みな、すこしも疑問の余地がない。しかし、だからといって、たとえ過渡的で一時的なものだとしても、現在にかんして緊要な諸任務を忘れたり、無視したり、あるいは軽視したりしてよいという結論をこれから引きだすなら、それは笑うべきことであり、反動的であろう。それが専制との闘争では社会主義者の一時的で過渡的な任務であっても、いやしくもこの任務を無視したり軽視したりすることは、社会主義を裏切り、反動に奉仕するに等しい。プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）は、無条件に社会主義者の過渡的で一時的な任務にすぎないが、しかし、民主主義革命の時代にこの任務を無視することは、まったく反動的である。

具体的な政治的任務は具体的な環境のもとで立てなければならない。すべては相対的であり、すべては流動し、すべては変化する。ドイツ社会民主党は、その綱領のなかに共和制の要求をかかげていない。ドイツでは、実践のうえで共和制の問題が社会主義の問題からほとんど分離できないような情勢にある（もっともそのドイツについても、エ

ンゲルスは、一八九一年にエルフルト綱領[六]草案の論評のなかで、共和制および共和制のための闘争の意義の過小評価をいましめた！）。ロシア社会民主党では、共和制の要求を綱領や扇動から取りのぞくという問題さえ起こらなかった。なぜなら、わが国では、共和制の問題が社会主義の問題と切り離せないように結びついているなどということは、問題にすらなりえないからである。一八九八年のドイツの社会民主主義者が特別に共和制の問題を前面にかかげることをしなかったのは当然の現象であって、驚くことも非難することもない。だが、ドイツの社会民主主義者が一八四八年に共和制の問題をかげにひっこめておいたとしたら、彼らは革命にたいするまったくの裏切者となったであろう。抽象的な真理はない。真理はつねに具体的である。

　時がくれば、ロシアの専制との闘争は終わり、ロシアにとって民主主義革命の時代は過ぎさるだろう。そのときには、プロレタリアートと農民の「意志の一致」や民主主義的独裁等々を口にするのは笑うべきことであろう。そのときには、われわれは直接に、プロレタリアートの社会主義的独裁のことを考えるだろうし、もっとくわしくそれを論じるだろう。だが、いまは、先進的階級の党は、最も精力的に、ツァーリズムにたいする民主主義革命の決定的勝利をめざさないわけにはいかない。そして、その決定的勝利とは、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）にほかならない。

備　考[七]

（1）『イスクラ』と『フペリョード』の論戦で、『イスクラ』が、とりわけ、トゥラティあてのエンゲルスの手紙を引合いにだしたことを、読者に思いだしていただこう。エンゲルスはこの手紙のなかで、イタリアの改良主義者の（将来の）指導者に、民主主義革命と社会主義革命とを混同しないように警告した。エンゲルスは、一八九四年のイタリアの政治情勢について、イタリアのきたるべき革命は小ブルジョア的民主主義革命であって、社会主義革命ではあるまい、と書いている〔二三巻選集、第一七巻、四九八―五〇三ページ。全集、第二二巻所収〕。『イスクラ』は、エンゲルスの確立した原則からはずれたと言って『フペリョード』を非難した。この非難は誤っている。なぜなら、『フペリョード』（第一四号）は、一九世紀の諸革命の三つの主要勢力の区別にかんするマルクスの理論が全体的にいって正しいことを、十分に認めていたからである〔レーニン全集、第八巻、二七三―二九〇ページ〕。この理論によると、旧制度、専制、封建制、農奴制に反対するのは、（一）自由主義的大ブルジョアジー、（二）急進的小ブルジョアジー、（三）プロレタリアート、である。第一のもの

は、せいぜい立憲君主制のためにたたかうだけであり、第二のものは、民主的共和制のために、第三のものは、社会主義的変革のためにたたかう。完全な民主主義的変革をめざす小ブルジョアジーの闘争を社会主義革命をめざすプロレタリアートの闘争と混同するなら、社会主義者は政治的破産におちいる恐れがある。マルクスのこの警告は、まったく正しい。だが、まさにこの理由からして、ほかならぬ「革命的コミューン」のスローガンは誤っているのである。なぜなら、歴史上知られているいろいろのコミューンは、民主主義的変革と社会主義的変革とをまさに混同したからである。これに反して、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）というわれわれのスローガンは、この誤りから完全に守ってくれる。われわれのスローガンは、革命が無条件にブルジョア的な性格のものであり、もっぱら民主主義的な変革の枠を直接にはこえることができないことを認めながらも、この、当面の変革を押しすすめ、この変革にプロレタリアートに最も有利な形態をあたえることをめざしており、したがって、社会主義のためのプロレタリアートのこんごの闘争に最大の成功をおさめるために民主主義的変革を最大限に利用することをめざしているのである。

二　ロシア社会民主労働党第三回大会の決議と「協議会」の決議との簡単な比較

臨時革命政府の問題は、現在、社会民主党の戦術上の諸問題の中心点である。協議会の他の決議にこれほどくわしく立ちいる余裕はないし、その必要もない。われわれは、右に検討した、ロシア社会民主労働党第三回大会の決議と協議会の決議との戦術的傾向の原則的な差異を裏づけるいくつかの点を、簡単に指摘するだけにとどめよう。

変革前夜の政府の戦術にたいする態度の問題をとりあげてみたまえ。諸君はやはり、ロシア社会民主労働党第三回大会の決議のなかに、この問題のまとまった答えを見いだすだろう。この決議は、特殊な時機のさまざまな条件と任務をすべて考慮にいれている。すなわち、政府の譲歩の偽善性の暴露も、「人民代議制の戯画的諸形態」の利用も、労働者階級の切実な諸要求（八時間労働日をはじめとする）の革命的実現も、最後に、黒百人組にたいする反撃も、考慮にいれている。協議会の諸決議では、問題がいくつかの部分に分散させられている。すなわち、「反動の暗黒勢力にたいする反撃」は、他の諸政党にたいする態度につい

ての決議の趣旨説明のなかでふれられているにすぎない。代議機関の選挙への参加は、ツァーリズムのブルジョアジーとの「妥協」とは切り離して考察されている。革命的方法による八時間労働日の実現を呼びかけるのではなくて、「経済闘争について」という大げさな表題をつけた特別決議が（「ロシアの社会生活で労働問題が占めている中心的地位」という大仰な、はなはだ愚かしいことばをならべたのちに）「八時間労働日の法律による制定」のための扇動という古いスローガンを繰りかえしているだけである。現在ではこのスローガンが不十分で、おくれていることは、あまりにも明瞭であるから、その証明にたちいる必要もないだろう。

公然たる政治的進出の問題。第三回党大会は、われわれの活動が近く根本的に変化することを考慮している。秘密活動と秘密機構の発展とを断じて放棄してはならない。そうすることは、警察を利することであり、政府にこのうえもなく有利なことである。しかし、いまではもう、公然たる進出のことも考えないわけにはいかない。そうした進出の合目的な形態と、したがってこの目的にかなった——より秘密的でない——特別な機構とを、ただちに準備しなければならない。合法的および半合法的な団体を利用して、できるだけそれらを、ロシアにおける将来の公然たる社会民主労働党の拠点に変えなければならない。

協議会は、ここでもまとまったスローガンはなにもあたえないで、問題を細分させている。とくに、合法的評論家の「配置」について配慮せよという、組織委員会にたいするこっけいな委任までとびだしている。「労働運動に協力することを目的とする民主主義的諸新聞を党の影響に服させる」という決定にいたっては、まったくばかげている。ほとんどいつでも「オスヴォボジデーニエ」的傾向をもっている、わが国の合法的な自由主義新聞は、みな、そういう目的をかかげているのだ。なぜ『イスクラ』の編集局は、自分で自分の助言の実行にとりかかって、『オスヴォボジデーニエ』を社会民主党の影響に服させるにはどうすればいいか、われわれに模範を示してくれないのか？ われわれにあたえられているのは、党の拠点をつくるために合法団体を利用するというスローガンではなくて、第一に、「労働」組合だけについての部分的な忠言（それへの党員の義務的参加）と、第二に、「労働者の革命的組織」＝「はっきりした形をもたない組織」＝「革命的労働者クラブ」を指導せよという忠言である。どうして「クラブ」がはっきりした形をもたない組織のなかにまぎれこんできたのか、いったい「クラブ」というのはどういうものなのか、いっこうわからない。われわれがここに見るのは、党の最高機

関の正確で明瞭な指令ではなく、評論家の思想のあらすじか下書きのたぐいである。党がその全活動においてまったく別の基盤に移りはじめていることの、まとまった概観は、なにもあたえられていない。

「農民問題」は、党大会と協議会とではまったく違った仕方で提起されている。大会は、『農民運動にたいする態度』という決議を作成した。協議会は、『農民のあいだの活動』という決議を作成した。前者の場合、前面に押しだされているのは、ツァーリズムとの闘争という全国民的利益のために広範な革命的民主主義運動全体を指導するうえでの諸任務である。後者の場合、問題は、もっぱら特別な層のあいだの「活動」に帰着させられている。前者の場合は、あらゆる民主主義的改革を実行するためただちに革命的農民委員会を組織せよという中心的な実践的扇動スローガンが提出されている。後者の場合、「委員会をつくれという要求」は憲法制定議会に突きつけなければならないことになっている。なぜわれわれは、ぜひともこの憲法制定議会を待たなければならないのだろうか？　それは実際に憲法を制定するものになるだろうか？　革命的農民委員会をあらかじめ同時につくらなくとも、この議会は強固なものになるだろうか？　協議会は、これらの問題をまったく見おとしている。協議会のあらゆる決定に強く現われているのは、ブルジョア革命では、われわれは民主主義運動全体の指導やその自主的な遂行を目的とせずに、自分の専門的な活動だけをやるべきだという、われわれが以上に跡づけてきた一般的思想である。「経済主義者」は、社会民主主義者は経済闘争を、自由主義者は政治闘争をやるべきだという立場にたえず迷いこんだものであるが、新イスクラ派もまた、その議論の筋みち全体をつうじて、われわれはなるべくつつましくブルジョア革命からわきにどいて片すみにひかえるべきであり、ブルジョアジーはこの革命を積極的に遂行すべきである、という立場に迷いこんでいる。

最後に、他の諸政党にたいする態度についての決議にも注意しないわけにはいかない。ロシア社会民主労働党第三回大会の決議は、ブルジョアジーの解放運動の限界性と不十分さをあますところなく暴露せよ、と述べているが、しかし、大会から大会までずっと通してこの限界性のありとあらゆる場合をかぞえあげたり、よくないブルジョアとよいブルジョアとを区別する一線を引いたりするような、素朴な考えにふけってはいない。協議会は、スタロヴェルの誤りを繰りかえして、このような一線を根気づよくさがしもとめ、有名な「リトマス試験紙」の理論を展開している。スタロヴェルは、ブルジョアジーになるべく厳格な条件をだすという非常によい考えから出発した。ただ彼は、是認

し、協定等々する値うちのあるブルジョア民主主義者と、そうする値うちのないブルジョア民主主義者とをあらかじめ区別しようとする試みは、すべて結局「公式」になってしまい、そうした「公式」は、諸事件の発展によってたちまち投げすてられてしまうものであり、またプロレタリアの階級意識のなかに混乱をもちこむものであるということを、忘れていた。重点が、闘争のなかでの現実的な統一から、声明や約束やスローガンに移されている。スタロヴェルがそうした根本的なスローガンと見たのは、「普通・平等・直接・秘密選挙権」であった。だが、二年もたたないうちに、この「リトマス試験紙」は役に立たないことが証明され、普通選挙権のスローガンはオスヴォボジデーニエ派にとりいれられたが、彼らはそれだからといって社会民主党に接近しなかったばかりか、逆に、まさにこのスローガンで労働者を迷わせ、彼らを社会主義から引き離そうと試みたのである。

いま新イスクラ派は、さらに「いっそう厳格に」「条件」をもちだし、「人民の自己武装への積極的参加」をもふくむ、「組織されたプロレタリアートのあらゆる断固たる行動にたいする精力的な明確な(!?)支持」、等々を、ツァーリズムの敵に「要求」している。一線は、かなりすすんだところに引かれている。だが、それにもかかわらず、この一線は、またしてもはや古くさくなり、たちまち役に立たなくなった。なぜ、たとえば共和制のスローガンが欠けているのか? 社会民主主義者が、「身分制的＝君主制的秩序のあらゆる基礎に反対する容赦ない革命戦」のためにありとあらゆることをブルジョア民主主義者に「要求」しながら、共和制のための闘争だけは要求しないというのは、どうしたことか?

この質問が言いがかりでないということ、新イスクラ派の誤りが最も切実な政治的意義をもっているということ、——それを証明するのは「ロシア解放同盟」である(『プロレタリー』第四号を見よ)。* この「ツァーリズムの敵」は、新イスクラ派のあらゆる「要求」に完全に合致するだろう。ところで、この「ロシア解放同盟」の綱領(あるいは無綱領性)のうちには、オスヴォボジデーニエ派の精神が支配しており、オスヴォボジデーニエ派はこの同盟をたやすく引っぱっていけるということを、われわれは示しておいた。ところが、協議会は、決議の終りで次のように声明している。「社会民主党は、これまでと同じように、偽善的な人民の友、すなわち、自由主義的および民主主義的な旗じるしをかかげながら、プロレタリアートの革命闘争を実際に支持することを拒否するあらゆる政党に、反対するであろう」。「ロシア解放同盟」は、そういう支持を拒否

しないばかりでなく、熱心に支持を申しいれている。これは、ロシア解放同盟の指導者たちが、たとえオスヴォボジデーニエ派であろうとも、「偽善的な人民の友」ではない、という保証になるだろうか？

＊　一九〇五年六月四日発行の『プロレタリー』第四号に、『新しい革命的労働者同盟』という題の、長い論文がのっている〔全集、第八巻、五〇四―五一六ページ〕。この論文に、「ロシア解放同盟」と名のり、武装蜂起によって憲法制定議会を召集させるという目的をたてたこの同盟のアピールの内容が紹介されている。さらに、この論文で、このような党外の同盟にたいする社会民主党の態度が規定されている。この同盟が、どの程度に現実のものであったか、革命のなかでそれがどのような運命をたどったか、われわれにはまったく不明である。〔一九〇七年版への原注〕

ごらんのとおり、新イスクラ派は、あらかじめ「条件」を考えだし、こっけいなくらい空威張りの「要求」を突きつけることによって、たちまち笑うべき羽目におちいってしまう。彼らの条件や要求は、生きた現実を考慮する段になると、たちまち不十分なものであることがわかる。彼らが公式を追いもとめても、それはむだなことである。なぜなら、どんな公式をつかっても、ブルジョア民主主義派の偽善、不徹底、限界性のありとあらゆる現われを、とらえるわけにはいかないからである。問題は、「リトマス試験紙」や、公式や、書いたり印刷したりした要求や、偽善的な「人民の友」と偽善的でない「人民の友」とをあらかじめ区分することにあるのではなく、闘争の現実的な統一にあり、ブルジョア民主主義派の「腰の弱い」行動の一つひとつに、社会民主主義者がたゆみない批判をくわえることにある。「民主主義的改造を利益とするすべての社会勢力を真に結束させる」のに必要なのは、協議会があれほど熱心に、あれほどむだ骨をおってとりくんできた「諸条項」ではなくて、真に革命的なスローガンを提出する能力である。そのために必要なのは、革命的・共和主義的ブルジョアジーをプロレタリアートの水準に引き上げるスローガンであって、プロレタリアートの任務を君主主義的ブルジョアジーの水準に引き下げるスローガンではない。そのために必要なのは、蜂起への最も精力的な参加であって、屁理屈をこねて武装蜂起の緊急任務を言いのがれることではないのである。

一二　ブルジョアジーが尻ごみすれば民主主義革命の勢いは弱まるか？

以上の文章を書きおわったのちになって、われわれは、

『イスクラ』の出版した新イスクラ派のカフカーズ協議会の諸決議を手に入れた。Pour la bonne bouche（最後をかざるものとしては）、これ以上によい材料を考えだすことはできないだろう。

『イスクラ』編集局は、正当にも次のように述べている。「戦術の基本問題では、カフカーズ協議会も、全国協議会」（すなわち新イスクラ派の協議会）「で採択されたものと同じような」（まさに、そのとおり！）「決定に達した」。「臨時革命政府にたいする社会民主党の態度の問題については、カフカーズの同志たちは、『フペリョード』グループやそれに同調したいわゆる大会の代議員らが宣伝している新しい方法にきわめて否定的な態度をとるという趣旨で、これを解決している」。「この協議会のあたえたブルジョア革命におけるプロレタリア党の戦術の定式化は、じつに適切なものと認めなければならない。」

ほんとうのことは、やはりほんとうだ。新イスクラ派の根本的な誤りを、だれもこれ以上「適切に」定式化することはできまい。われわれは、この定式を全文引用する。まず括弧づきの花を示し、それから、終りに果実をも示すことにしよう。

臨時政府についての新イスクラ派のカフカーズ協議会の決議は、次のとおりである。

「協議会は、プロレタリアートの社会民主主義的意識をふかめる」（いや、ごもっとも！　なおそれにつけくわえて、マルトィノフ流にふかめる、と言うべきだろう！）「ために」（意識をふかめるためだけで、共和制をたたかいとるためではないのか？　なんという革命の「深い」理解だろう！）「革命的時機を利用することを党の任務とみなすとともに、生まれはじめているブルジョア国家制度を批判する最も完全な自由を党に確保するために」（共和制を確保することはわれわれのやるべき仕事でないというのだ！　われわれのやるべき仕事は、批判の自由を確保することだけだという。無政府主義的な思想は、「ブルジョア国家制度という無政府主義的なことばをも生みだしている！）、「社会民主主義的臨時政府の樹立とそれへの参加とに反対し」（エンゲルスが引用した、スペイン革命の一〇ヵ月前にバクーニン主義者がおこなった決議を想起せよ！　『プロレタリー』第三号を見よ）[三]、「国家制度を力におうじて（?!）民主化するため、ブルジョア臨時政府に外部から」（下からであって、上からではない）「圧力をくわえることが、目的に最もよくかなっていると考える。協議会は、もし社会民主主義者が臨時政府をつくるか、臨時政府にはいるなら、一方では、社会民主党が権力を奪取したにもかかわらず、社会主義の実現をもふくめて労働者階級の切実な

必要を満足させえないので、社会民主党に失望したプロレタリアートの広範な大衆を党から離反させることになり」（共和制は切実な必要ではないというのだ！　起草者たちは、ブルジョア革命への参加を否定すると言わんばかりの、純無政府主義的なことばを自分たちがつかっていることに、無邪気のあまり気がつかないのだ！）、「他方では、**ブルジョア諸階級を革命の事業から尻ごみさせ、それによって革命の勢いを弱めることになる**と考える」。

ここが肝心なところだ。ここには、無政府主義的な思想ときっすいの日和見主義とがからみあっている（西ヨーロッパのベルンシュタイン主義者のところでも、いつもそうである）。ちょっと考えてみたまえ。ブルジョアジーを革命の事業から尻ごみさせることになり、それによって革命の勢いを弱めるから、臨時政府にはいってはならないというのだ！　ここには、革命はブルジョア革命だから、われわれはブルジョア的俗悪さのまえに頭をさげ、それに道をゆずらなければならない、という新イスクラ派の哲学が、純粋な一貫した形で完全に現われている。もしわれわれが、たとえ部分的にでも、たとえ一分間でも、われわれが参加するとブルジョアジーを尻ごみさせるかもしれないという考えを指針とするなら、われわれは、それによって、革命の主導権を完全にブルジョア諸階級にゆずりわたすことになるではないか。われわれはまた、それによって、プロレタリアートをブルジョアジーが尻ごみしないようにと、プロレタリアートをしいておとなしく、おだやかにし、完全に彼らをブルジョアジーの後見にゆだねることになる（完全な「批判の自由」を保持しながら!!）。われわれは、プロレタリアートの最も切実な必要、「経済主義者」とその亜流が一度もよく理解しなかったプロレタリアートのほかならぬ政治的必要を骨ぬきにしてしまう、ブルジョアジーを尻ごみさせまいとしてこれを骨ぬきにしてしまうことになる。われわれは、プロレタリアートに必要な限界内で民主主義を実現しようとする革命的闘争の基盤から、ブルジョアジーとの駆引の基盤に完全に移ってしまい、原則を裏切り、革命を裏切ることで、彼らブルジョアジーの自発的同意（「尻ごみしない」という）をあがなうことになる。

カフカーズの新イスクラ派は、革命を裏切る戦術、プロレタリアートをブルジョア諸階級のあわれむべき腰ぎんちゃくに変える戦術の全核心をわずか二行で書きあらわすことができた。われわれがまえに新イスクラ主義の誤りから一つの傾向として引きだしたものが、いまここでは、君主主義的ブルジョアジーに追随するという、はっきりした明確な原則に高められているのである。共和制を実現すればブルジョアジーを尻ごみさせることになるだろうから（ま

たすでに尻ごみさせているから——ストルーヴェ氏がその例だ)、共和制のための闘争を捨てよ。プロレタリアートが精力的な、徹底的な民主主義的要求をだせば、いつでも、世界中のどこででも、ブルジョアジーを尻ごみさせるのだから、労働者諸君よ、穴の中にもぐりこんでしまえ、外からだけ行動したまえ、「ブルジョア国家」制度の道具や手段を革命のために利用することなど考えるな、そして「批判の自由」を保持したまえ、と。

「ブルジョア革命」という用語の理解そのものにおける基本的なまちがいが、ここにはっきりと現われている。この用語をマルトィノフ的、または新イスクラ派的に「理解」すると、まっすぐに、プロレタリアートの事業をブルジョアジーの手に売り渡すことになる。

昔の「経済主義」を忘れた人、それを研究もしなければ思いだしもしない人には、「経済主義」の現在のぶりかえしを理解することはむずかしい。ベルンシュタイン主義(一一)的な『クレード』(一二)を思いおこしたまえ！　この連中は、「純プロレタリア的な」見解と綱領から、次のような結論を引きだした。われわれ社会民主主義者には経済を、ほんとうの労働者の事業を、あらゆる政治術策にたいする批判の自由を、社会民主主義的活動のほんとうの深化をあたえよ。彼ら自由主義者には政治をあたえよ。神よ、「革命主義」におちいらないように、守りたまえ、これにおちいると、ブルジョアジーを尻ごみさせることになるから(一三)、と。『クレード』あるいは『ラボーチャヤ・ムィスリ』第九号別冊付録(一八九九年九月)の全文を読みかえすと、このような議論のすすめ方がそっくりそのまま見つかるだろう。

いまもこれと同じことが起こっている。ただ、それは大規模に、ロシア「大」革命——悲しいかな、正統派俗物主義の理論家たちによって、すでにまえもって卑俗化されて、戯画に引き下げられているところの——全体の評価に適用されているのだ！　われわれ社会民主主義者には、批判の自由を、意識の深化を、外からの行動を。彼らブルジョア諸階級には、行動の自由を、革命的(自由主義的と読め)指導の自由な活動舞台を、上からの「改革」実施の自由を、というわけである。

マルクス主義を俗流化するこの連中は、批判の武器(一四)を武器の批判に代える必要があるというマルクスのことばを、一度も考えてみたことがないのである。彼らは、いたずらにマルクスの名を口にするが、実際には、フランクフルトのブルジョア的おしゃべり屋——絶対主義を自由に批判し、民主主義的意識をふかめたが、しかし革命の時機は行動の時機であり、しかも下からも上からも行動する時機であることを理解しなかった——とまったく同じ趣旨の戦術的決

議をつくっている。彼らはマルクス主義を屁理屈に変えてしまい、先進的な、断固たる、精力的な革命的階級のイデオロギーを、この階級の最もおくれた層、すなわち困難な革命的民主主義的任務から身を隠し、この民主主義的任務をストルーヴェ氏らにまかせている層のイデオロギーにしてしまった。

社会民主党が革命政府に参加する結果、ブルジョア諸階級が革命の事業から尻ごみすると、それによってブルジョア諸階級は「革命の勢いを弱めることになる」という。

聞きたまえ、ロシアの労働者諸君。ツァーリズムにたいする勝利ではなくて、それとの取引を望むスルトーヴェ氏らが、社会民主主義者におびえないで、革命を遂行するなら、革命の勢いはもっと強くなるだろう、というのだ。まえに略述しておいた革命の可能な二つの結末のうち、第一の結末が実現するなら、すなわち、君主主義的ブルジョアジーがシポフ流の「憲法」にもとづいて専制と折りあいをつけるなら、革命の勢いはもっと強くなるだろう、というのだ！

全党の指針とする決議のなかでこういう恥しらずなことを書いたり、またこういう「適切な」決議を是認したりする社会民主主義者は、マルクス主義からその生きた精神をことごとく追いだした屁理屈でひどく目をくらまされているので、これらの決議が彼らのそのほかのりっぱなことばまで、みな空文句に変えてしまうことに、気がつかないのである。『イスクラ』にのった彼らの論文をどれでもよいからとりあげてみたまえ。わが有名なマルティノフの悪評たかい小冊子でもよいからとりあげてみたまえ。——諸君は、人民蜂起とか、革命の最後までの遂行とか、不徹底なブルジョアジーと闘争するさい下層人民に依拠するように努めることとかが、弁じられているのを聞くだろう。しかし、こういうりっぱなことも、ブルジョアジーをのけものにすれば「革命の勢いが弱められる」という思想を諸君が受けいれたり是認したりする瞬間から、すべてあわれむべき空文句になってしまうではないか。諸君、二つに一つだ。われわれは、人民とともに革命の遂行をめざし、不徹底な、利己的な、臆病なブルジョアジーの意に反して、ツァーリズムにたいする完全な勝利を獲得しなければならないか、それとも、われわれは、こういう「意に反した」ことを許さず、ブルジョアジーが「尻ごみ」しはしないかと恐れるか——この場合には、われわれは、プロレタリアートと人民をブルジョアジーに、不徹底な、利己的な、臆病なブルジョアジーに売り渡すことになる——どちらかである。

私のことばを曲解しないでもらいたい。諸君は意識して裏切ったと言って非難されているなどと、わめきたてない

でほしい。そうではない。昔の「経済主義者」が、無意識のうちにマルクス主義の「深化」の斜面をとめどもなく、とりかえしようもなくころげ落ちて、反革命的な、魂のない、生命のない「小理屈」におちいったように、諸君もまた無意識のうちに、いつも泥沼に這いよっていたのであり、いまではそれに這いこんでしまったのだ。

諸君、「革命の勢い」がどういう現実の社会勢力にかかっているか、諸君はそれを考えてみたことがあるのか？対外政策、国際的組合せの力は度外視することにしよう。それらはいまわれわれに非常に有利になっているが、しかし、そうしたことはみな考察から除外しよう。ここで問題にしているのがロシアの国内勢力であるかぎり、除外するのは正当である。この国内の社会勢力を見てみたまえ。革命に反対しているのは、専制、宮廷、警察、官吏、軍隊、ひとにぎりの高位貴族である。人民のあいだの憤激が深くなればなるほど、軍隊はそれだけたよりにならなくなり、官吏のあいだの動揺はそれだけ大きくなる。次に、ブルジョアジーは、だいたいにおいて、いまのところは革命の味方であり、熱心に自由を論じ、ますます頻繁に人民の名において発言している。それどころか、革命の名において発言さえしている。*だが、われわれマルクス主義者はみな、ブルジョアジーが不徹底に、利己的に、臆病に革命に賛成であることを、理論のうえから知っているし、またわが自由主義者やゼムストヴォ議員やオスヴォボジデーニエ派の実例で、毎日毎時観察している。ブルジョアジーは、その狭い利己的な利益が満足されるやいなや、徹底した民主主義から「尻ごみしはじめる」やいなや（しかも彼らはいまではもうそれから尻ごみしつつある！）、かならず、その大部分は反革命の側、専制の側に寝がえって、革命に反対し、人民に反対するであろう。あと残っているのは、「人民」、すなわちプロレタリアートと農民である。プロレタリアートだけが確実に最後まですすむことができる。なぜなら、プロレタリアートは、民主主義的変革よりもはるかに先のほうへすすんでいくからである。だからこそプロレタリアートは、共和制のために最前列に立ってたたかっているのであり、ブルジョアジーが尻ごみしないように考慮をはらえという、愚劣な、とるにたりない助言などは、侮蔑の念をもってしりぞけるのである。農民のなかには、多数の半プロレタリア分子とならんで小ブルジョア分子がふくまれている。このことが農民をも動揺的にし、プロレタリアートが厳密に階級的な党に結束しなければならないようにする。しかし、農民の動揺性はブルジョアジーの動揺性とは根本的に違っている。というのは、農民は、現在では、私的所有を無条件に擁護することよりも、むしろこの所有の主要

な形態の一つである、地主の土地をとりあげることに利益を感じているからである。農民は、それだからといって社会主義的になりはしないし、小ブルジョア的でなくなりはしないが、民主主義革命の完全な、きわめて急進的な味方になることができる。農民は、もし彼らを啓蒙する革命的事件の進行が、ブルジョアジーの裏切りとプロレタリアートの敗北によって、あまりにはやく中絶するようなことさえなければ、かならずそうなるだろう。農民は、以上のような条件があるなら、かならず革命と共和制の砦（とりで）になるだろう。なぜなら、完全に勝利した革命だけが、土地改革の面ですべてのものを農民にあたえることができるだろうし、農民が望んでおり、夢みているもの、また半農奴制の泥沼から、屈従と隷属の暗やみからぬけだし、商品経済の限界内で許されるかぎりで生活条件を改善するために（「社会革命派」(八)が想像しているように、資本主義を廃絶するためにではなく）、農民がほんとうに必要としているもののすべてを、農民にあたえることができるだろうからである。

＊　この点で興味があるのは、ジョレスあてのストルーヴェ氏の公開状である。それは、ジョレスが最近新聞『ユマニテ』(七四)に、ストルーヴェ氏が『オスヴォボジデーニエ』第七二号に、発表している。

それだけではない。徹底的な土地改革だけでなく農民のいっさいの一般的・恒常的な利害もまた、農民を革命に結びつける。農民はプロレタリアートと闘争するのにさえ民主主義を必要とする。なぜなら、民主主義体制だけが、農民の利害を正確にあらわし、大衆としての、多数者としての農民に優位をあたえることができるからである。農民は、啓蒙されればされるほど（そして、日本との戦争以来、農民は、学校の尺度だけで啓蒙の度をはかるくせのついた多くの人々にはまったく思いもよらないような速さで啓蒙されつつある）、それだけ一貫して、断固として、完全な民主主義的変革を支持するようになるだろう。なぜなら、農民はブルジョアジーと違って人民の主権を恐れない。それは農民に有利だからである。農民が素朴な君主主義から解放されはじめるやいなや、民主的共和制が彼らの理想となるだろう。なぜなら、ブローカーのように（上院その他と）取引をするブルジョアジーの意識的な君主主義は、農民にとっては、ヨーロッパふうの憲法ですこしばかり上塗りをしただけの、以前のままの無権利状態、以前のままの屈従と無知を意味するからである。

　だからこそ、ブルジョアジーは、階級としては、当然かつ不可避的に、自由主義的君主主義政党の翼の下にはいろうとし、農民は、大衆としては、革命的・共和主義的政党の指導下にはいろうとするのである。だからこそ、ブルジ

ョアジーは民主主義革命を最後まで遂行することができないが、農民は革命を最後まで遂行できるのであって、われわれはこの点で、全力をあげて農民を援助しなければならないのである。

そんなことを証明するにはおよばない、そんなことはイロハだ、そんなことは社会民主主義者ならだれでもよくわかっている、と言って反論する者があるかもしれない。そうではない。ブルジョアジーが革命から脱落すると革命の「勢いが弱まる」などという人間は、それがわかっていないのだ。こういう人々は、われわれの農業綱領の文句を暗記して繰りかえしてはいても、その意義がわかっていないのである。というのは、もしわかっていれば、彼らは、マルクス主義的世界観全体とわれわれの綱領とから不可避的に生まれてくる、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）の概念を恐れないだろうし、またロシア大革命の勢いをブルジョアジーの勢いに限るようなことはしないだろうからである。こういう人々は、自分の抽象的なマルクス主義的で革命的な空文句を、自分の具体的な反マルクス主義的で反革命的な決議でぶちこわしているのである。

ロシア革命の勝利における農民の役割をほんとうに理解しているものは、ブルジョアジーが尻ごみすると革命の勢い〔展開力〕が弱まる、などと言えるはずがない。なぜなら、実際には、ブルジョアジーが尻ごみしてしまい、農民大衆がプロレタリアートとともに積極的な革命家として進出するときにはじめて、ロシア革命のほんとうの展開が始まるだろうからであり、そのときにはじめて、それはブルジョア民主主義的変革の時代に可能な、真に最大の革命的展開となるだろうからである。わが国の民主主義革命を徹底して最後まで遂行するためには、この革命は、ブルジョアジーの不徹底さが避けられなくてもそれに災いされないような、（すなわち、「ブルジョアジーを尻ごみさせる」ことのできるような）勢力に依拠しなければならないのである（カフカーズの「イスクラ」派は思慮のたりないためにそうすることを恐れているのだが）。

プロレタリアートは、力で専制の抵抗を押しつぶし、ブルジョアジーの動揺を克服するために、農民大衆を味方に引きつけて民主主義的変革を最後まで遂行しなければならない。プロレタリアートは、力でブルジョアジーの抵抗を打破し、農民と小ブルジョアジーの動揺を克服するために、半プロレタリア分子の大衆を味方に引きつけて社会主義的変革をやりとげなければならない。これがプロレタリアートの任務であるが、これらの任務を、新イスクラ派は、革命の勢いにかんする彼らのあらゆる論議や決議のなかで、非常に狭く言いあらわしているのである。

この「勢い」について論じるさいにしばしば見おとされていることであるが、一つの事情だけは忘れてはならない。任務の困難なことが問題なのではなく、任務の解決をどの道に求め、どうやってその解決を達成しようとするかが問題なのだ、ということを忘れてはならない。革命の勢いを強力不敗なものにすることが容易であるか困難であるか、ということが問題なのではなくて、この勢いを強めるためにどう行動すべきかが、問題なのである。意見の不一致は、ほかならぬ活動の基本的性格に、活動の方向そのものに関係している。われわれがこのことを強調するのは、不注意で不誠実な人が、二つの違った問題――道の方向の問題、すなわち二つの違った道の一つを選ぶ問題と、ある決まった道をとおって目的を実現することが容易であるかどうか、あるいはその実現がまぢかいかどうか、という問題と――を混同する場合があまりにも多いからである。

われわれは、以上の叙述のなかで、このあとの問題にはまったくふれなかった。というのは、この問題は、わが党内で意見の相違も不一致も呼びおこさなかったからである。だが、いうまでもないことだが、この問題は、それ自体としてはきわめて重要な問題であり、すべての社会民主主義者がきわめて真剣に考えてみなければならない問題である。労働者階級の大衆だけでなく農民の大衆をも運動に引きいれることにからまっているいろいろの困難を忘れるのは、許しがたい楽観論であろう。民主主義革命を最後まで遂行しようとする努力は、ほかならぬこの困難に突きあたって、いくたびかくじけさった。そのさいに最も多く勝利をおさめたのは、不徹底で利己的なブルジョアジーであった。彼らは、人民から彼らを守ってくれる君主制の防壁という「資本を獲得」もしたし、また自由主義……あるいは「オスヴォボジデーニエ主義」の「純潔を守り」もした。しかし、困難だということは遂行不可能だということではない。たいせつなのは、道を正しく選んだという確信である。この確信は革命的エネルギーと革命的情熱を百倍にも強めるが、これらのものこそ奇跡をなしとげることができるものである。

道を選ぶ問題をめぐって今日の社会民主主義者たちの意見の不一致がどれほど深くなっているかは、新イスクラ派のカフカーズ決議とロシア社会民主労働党第三回大会の決議とを比較すれば、すぐわかる。大会の決議はこう言っている。ブルジョアジーは不徹底であり、彼らはかならずわれわれから革命の獲得物を奪いとろうと努めるだろう。だから、労働者諸君、もっと精力的に闘争の準備をせよ、武装せよ、農民を諸君の味方に引きつけよ。われわれは、われわれの革命の獲得物を、たたかいもしないで利己的なブ

ルジョアジーに譲りわたすようなことはしない、と。新イスクラ派のカフカーズ決議は、こう言っている。ブルジョアジーは不徹底であり、彼らは革命から尻ごみする恐れがある。だから、労働者諸君、どうか、臨時政府への参加など考えないでくれたまえ。そんなことをすると、ブルジョアジーは、きっと尻ごみし、革命の勢いがそのために弱まるだろうから、と。

一方は言う。不徹底なブルジョアジーの抵抗または消極的態度にさからって、革命を最後まで前進させよ、と。

他方は言う。革命を独自に最後まで遂行しようと考えるな、そんなことをすると不徹底なブルジョアジーは革命から尻ごみしてしまうから、と。

ここにあるものは、まっこうから対立する二つの道ではないだろうか？　一方の戦術が他方の戦術とまったくあいいれないことは、明白ではなかろうか？　第一の戦術が革命的社会民主主義の唯一の正しい戦術であり、第二の戦術が本質的にいって純オスヴォボジデーニエ的な戦術であることは、明白ではなかろうか？

一三　結論。われわれは勝利してもよいか？

ロシア社会民主党内の事情を表面的にしか知らないか、あるいはわきから判断している人、「経済主義」時代以来のわが党内闘争の全歴史を知らない人は、いま、とくに第三回大会後に明確になった戦術上の意見の相違についても、ただたんに、あらゆる社会民主主義運動に当然起こる、避けられない、だが十分和解させうる二つの傾向を指摘するだけでかたづけてしまう場合が非常に多い。彼らは言う。一方の側では、通常の、当面の、日常的な活動を力をこめて強調し、宣伝と扇動を発展させ、勢力を準備し、運動をふかめ等々する必要を力をこめて強調する。もう一方の側では、運動の戦闘的・一般政治的・革命的な諸任務を強調し、武装蜂起の必要を指摘し、革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）や臨時革命政府などのスローガンを提起する。だが、どちらの面も過大に見てはならず、どちらの場合にも（一般に世の中のことはみなそうだが）極端に走ってはよろしくない、うんぬん、と。

このような議論にふくまれているのは、疑いもなく、処世上の（そして括弧づきで「政治上の」）分別の安っぽい真理であるが、しかしそれは、党がさしせまって痛切に必要としている事柄にたいする無理解をおおいかくしている場合があまりにも多い。ロシアの社会民主主義者のあいだの現在の戦術上の意見の相違をとってみたまえ。いうまで

もないことだが、戦術についての新イスクラ派の議論のなかに見られる、活動の平常的、日常的な側面の力をこめた強調は、それ自体としては、まだなにも危険なものではありえないし、戦術的スローガンのうえでどんな意見の不一致も引きおこすことはないはずである。ところが、ロシア社会民主労働党第三回大会の諸決議と協議会の諸決議とを比較してみるだけで、そういう意見の不一致が目につくのである。

問題はどこにあるのか？　それは、第一に、運動における二つの流れとか極端に走る害とかを一般的・抽象的に指摘するだけではたりない、ということにある。当該の運動が当面の時機にどういう欠陥をもっているか、いま党にとって現実の政治的危険はどこにあるのかを、具体的に知らなければならない。第二に、あれこれの戦術的スローガンが、――もしかすると、あれこれのスローガンがないことが――どのような現実の政治勢力を利しているかを知らなければならない。もし諸君が新イスクラ派の言うことを聞くなら、諸君は、宣伝と扇動、経済闘争とブルジョア民主主義批判を放棄して、軍事的準備、武装攻撃、権力奪取などに度はずれに熱中する危険が社会民主党を脅かしている、という結論に達するであろう。ところが実際には、現実の危険は、まったく他の方面から党を脅かしているのである。運動の状態をいくぶんでも身ぢかに知っている人、それを注意ぶかく、また考えぶかく見まもっている人は、新イスクラ派の懸念のこっけいな側面を見ずにはいられない。ロシア社会民主労働党の活動は、すでに宣伝と扇動、経済闘争への協力と経済闘争のスローガンのとりあげに重点を集中することを無条件に保障する、強固な不変の枠にすっかり鋳こまれている。すでに〔一八〕九〇年代の後半以来確立しているこれらすべての機能にいつでもたえず注意と力と時間の九九％をそそいでいないような、党委員会や、地区委員会や、中央の会合や、工場グループは、一つもない。これを知らないのは、運動に全然通じていない人たちだけである。新イスクラ派がとくにもったいぶったようすで昔おぼえたことをおさらいしているのをほんものだと考えることができるのは、非常に素朴な人たちか、それとも事情に通じていない人たちだけである。

事実はこうである。わが国では、蜂起の諸任務や、一般的な政治的スローガンや、人民革命全体の指導やに、法外に熱中しているというようなことはないばかりか、むしろ逆に、まさにこの点での立ちおくれが目だっているし、それが運動の最大の弱点をなし、運動の現実の危険をあらわしているのであって、運動は、事実上の革命運動から口さ

きの革命運動に変質してしまう恐れがあり、ここかしこではすでに変質しかかっているのである。諸君は、党活動を遂行している幾百、幾千の組織やグループやサークルのうち、新『イスクラ』の賢者たちが新しい真理を発見したような顔をして説いている例の日常活動を、その成立以来遂行してこなかったようなものは、ただの一つも発見できないだろう。逆に諸君は、武装蜂起の諸任務を自覚し、その任務の遂行に着手し、ツァーリズムに反対する人民革命全体を指導する必要と、そのために、ほかでもないそういう先進的スローガンをかかげる必要とを理解しているグループやサークルを、ほんのわずかしか発見できないだろう。

　われわれは、先進的な、真に革命的な任務から信じられないほど立ちおくれている。われわれは、多くの場合、まだそれらの任務を自覚していない。われわれは、この点でのわれわれの立ちおくれのために革命的ブルジョア民主主義派が強くなったことを、しばしば見おとした。しかし、新『イスクラ』の著作者たちは、事件の進行と時代の要求とに背を向けて頑固に繰りかえしている。古いものを忘れるな！ 新しいものに夢中になるな！ と。これが、協議会のすべての重要決議の基本的な、いつにかかわらぬ思想である。それに反して、大会の諸決議で諸君が同じくいつにかわらず読みとるのは、こうである。われわれは、古いものを確認するとともに（また、それが、すでに解決され、文献や決議や経験によって認証されている古いものであるからといって、いつまでもそれをむし返すだけにとどまらずに）、新しい任務を提起し、それに注意を向け、新しいスローガンをかかげ、それを実行に移す活動にただちにとりかかることを、真に革命的な社会民主主義者に要求する、と。

　社会民主党の戦術上の二潮流の問題は、実際には、以上のようである。革命の時代は新しい任務を提起した。それが見えないのは完全なめくらだけである。一部の社会民主主義者は、これらの任務をきっぱりと承認し、それを日程にのぼせている。武装蜂起は猶予ならないものとなっている、ただちに、精力的に武装蜂起を準備せよ、それが決定的勝利にとって欠くことのできないものだということを銘記せよ、共和制、臨時政府、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）のスローガンをかかげよ、と。ところが、他の社会民主主義者は、あともどりをし、足ぶみをし、スローガンをだすかわりに前置きを述べ、古いものの確認とならんで新しいものを示すかわりに、この古いものをながながと退屈にむし返し、新しいものを避ける逃げ口上をでっちあげ、決定的勝利の条件を規定することもできなければ、またただそれだけが完全な勝利をかちとろうとする

志向に合致するようなスローガンをかかげることもできないのである。

この追随主義の政治的結果は、われわれのあいだに現われている。ロシア社会民主労働党の「多数派」が革命的ブルジョア民主主義派に接近したという つくり話は、ついにつくり話の範囲をでず、ただ一つの政治的事実によっても、「ボリシェヴィキ」のただ一つの有力な決議によっても、ロシア社会民主労働党第三回大会のただ一つの文書によっても裏づけられていない。ところが、『オスヴォボジデーニエ』に代表される日和見主義的・君主主義的ブルジョアジーは、ずっとまえから新イスクラ主義の「原則的」諸傾向を歓迎してきたが、いまではもうすっかり彼らの水で自分の水車をまわして〔彼らを自分の利益のために利用して〕おり、「陰謀」や「一揆」に反対し、革命の「技術的」側面の誇張に反対し、武装蜂起のスローガンを直接にかかげることに反対し、極端な要求の「革命主義」等々に反対する彼らのことばや「思想」をとりいれている。カフカーズの「メンシェヴィキ」派社会民主主義者の一協議会の決議と、新『イスクラ』編集局がこの決議を是認したことは、右に述べたことすべてに明確な政治的しめくくりをあたえている。プロレタリアートが革命的民主主義的執権に参加したりしてブルジョアジーを尻ごみさせないように、というのである！　これですべてが言いつくされている。これで、プロレタリアートを君主主義的ブルジョアジーの腰ぎんちゃくに変えることが最終的に確認されている。これで、新イスクラ派の追随主義の政治的意義が、一個人の偶然の声明によってではなく、一流派がわざわざ是認した決議によって、実際に証明されたわけである。

これらの事実を深く考えれば、社会民主主義運動の二側面と二傾向について世上におこなわれている指摘の真の意義が理解できるであろう。これらの傾向を全面的に研究するため、ベルンシュタイン主義をとりあげてみたまえ。ベルンシュタイン主義者は、新イスクラ派とそっくり同じに、自分らこそプロレタリアートの真の必要を、すなわち、プロレタリアートの勢力を成長させ、全活動をふかめ、新しい社会の諸要素を準備し、宣伝と扇動をおこなう任務を理解している、とくりかえし言ってきたし、いまも言っている。われわれは、あるがままのものをあからさまに認めることを要求する！　――ベルンシュタインは、こう言って「終局目標」のない「運動」を神聖化し、防御戦術だけを神聖化し「ブルジョアジーが尻ごみしないように」と恐れる戦術を説く。ベルンシュタイン主義者もまた、革命的社会民主主義者の「ジャコバン主義」(五六)とか、労働者の自主活動を理解しない「評論家」とか、その他等々とわめきちら

した。実際には、だれでも知っているように、革命的社会民主主義者は、日常の小さな活動、力の蓄積、その他等々を放棄しようなどと考えたことはなかった。彼らはただ、終極目標を明瞭に自覚し、革命的任務を明瞭に提起することを要求しただけであった。彼らは、半プロレタリア・半小ブルジョア層をプロレタリアートの革命性にまで高めようと望んだのであって、「ブルジョアジーが尻ごみしないように」という日和見主義的な考えにこの革命性を引き下げようとは思わなかったのである。党のインテリゲンツィア的＝日和見主義的一翼とプロレタリア的＝革命的一翼とのこの反目を、おそらく最もあざやかに表現したのは、dürfen wir siegen?「われわれはあえて勝利すべきだろうか？」、われわれは勝利してさしつかえないのか？ 勝利することはわれわれにとって危険ではなかろうか？ われわれは勝利すべきだろうか？ といった質問であった。この質問は、一見したところ奇異に感じられるが、実際に提出されたし、また提出されざるをえなかった。なぜなら、日和見主義者たちは勝利を恐れ、プロレタリアートをおどして勝利をひかえさせ、勝利すると困ったことになると予言し、はっきりと勝利を呼びかけているスローガンをあざわらったからである。

これと同じインテリゲンツィア的＝日和見主義的傾向とプロレタリア的＝革命的傾向との基本的な区分はわれわれのあいだにも存在している。ただきわめて重要な違いは、われわれの場合問題になっているのは社会主義的変革ではなくて民主主義的変革だという点である。われわれの場合にもまた、「われわれはあえて勝利すべきだろうか？」という、一見ばかげた質問がだされている。この質問は、マルトィノフによって、その著書『二つの執権』のなかで提起されている。この著書は、われわれが蜂起を非常にりっぱに準備し、まったく成功裏にそれを遂行する場合には困ったことになる、と予言した。この質問は、臨時革命政府の問題についての新イスクラ派の全文献によって提出されている。彼らはそのさい、ブルジョア的日和見主義的政府へのミルランの参加を、小ブルジョア的革命的政府へのヴァルランの参加[32]とごっちゃにしようとして、たえず熱心に、しかし効果のない試みをした。この質問は、「ブルジョアジーが尻ごみしないように」という決議で確認されている。そして、たとえばカウツキーは、いま、臨時革命政府についてのわれわれの論争を、とらぬ狸の皮算用に似ていると言って皮肉ろうとしているが、しかし、この皮肉は、賢明で革命的な社会民主主義者でさえ、うわさだけで聞きかじっていることについてものを言うとへまをやるものだ、ということを示すにすぎない。ドイツ社会民主党は、まだま

だ狸をとる（社会主義的変革をなしとげる）にはほど遠いが、しかし、「狸をとってもよいか」どうかという論争は、きわめて大きな原則的ならびに実践的＝政治的意義をもっていた。ロシアの社会民主主義者は、まだ「自分の狸をとる」（民主主義的変革をなしとげる）力をもつにはほど遠いが、しかし、「狸をとってもよいか」どうかという問題は、ロシアの将来全体にとり、ロシア社会民主党の将来にとって、きわめて重大な意義をもっている。われわれが「勝利してもよい」と確信しないならば、軍隊を精力的に、首尾よく結集し指揮することは問題にもならない。

昔のわが国の「経済主義者」をとってみたまえ。彼らもまた、自分たちの反対者は陰謀家やジャコバン派であるとか（『ラボーチェエ・デーロ』、とくにその第一〇号、および第二回大会における綱領についての討論のさいのマルトィノフの演説を見よ！）、政治に没頭して大衆から離れているとか、労働運動の原則を忘れ、労働者の自主活動を無視しているとか、等々とわめきちらした。だが実際には、これら「労働者の自主活動」の支持者は、プロレタリアートの諸任務についての自らの狭い俗物的理解を労働者に押しつけたインテリゲンツィアの日和見主義者であった。実際には、だれでも旧『イスクラ』を見ればわかるように、「経済主義」の反対者は、社会民主主義的活動のいろいろの側面のどれ一つも放棄したり、背後に押しやったりはしなかったし、経済闘争をすこしも忘れずに、しかも同時に、緊要な当面の政治的任務を全幅的に提起する道を知っており、労働者党を自由主義的ブルジョアジーの「経済的」付属物にすることに反対したのである。

「経済主義者」は、政治の基礎には経済があるということを暗記していて、このことを、政治闘争を経済闘争に引き下げなければならない、というふうに「理解」した。新イスクラ派は、民主主義的変革がブルジョア革命を経済的基礎としていることを暗記していて、このことを、プロレタリアートの民主主義的諸任務をブルジョア的穏健の水準に、すなわち「ブルジョアジーが尻ごみ」しない限界に、引き下げなければならない、というふうに「理解」した。「経済主義者」は、活動をふかめるとか、労働者の自主活動と純階級的な政策とかいう口実のもとに、実際には、労働者階級を自由主義的ブルジョア政治家の手に引き渡した。すなわち、まさにそのような客観的意義をもつ道に党をみちびいたのである。新イスクラ派は、同じ口実のもとに、実際には、民主主義革命におけるプロレタリアートの利益をブルジョアジーに売り渡している。すなわち、まさにそのような客観的意義をもつ道に党をみちびいているのである。「経済主義者」には、政治闘争で主導権をもつことは

社会民主主義者の仕事ではなく、本来自由主義者の仕事であるように思われた。新イスクラ派には、プロレタリアートの指導権と主導的参加は革命の「勢いを弱める」から、民主主義革命の積極的遂行は、社会民主主義者の仕事ではなく、本来民主主義的ブルジョアジーの仕事であるように思われるのである。

一言でいえば、新イスクラ派は「経済主義」の亜流である。それは、第二回党大会で新イスクラ派が発生した事情からいってそうだというだけでなく、彼らが民主主義革命におけるプロレタリアートの戦術的任務をいま提起している仕方からいってもそうである。これもまた、党のインテリゲンツィア的＝日和見主義的一翼である。この一翼は、組織の点では、インテリゲンツィアの無政府主義的個人主義をもってデビューし、協議会の採択した「規約(三六)」のなかで党組織からの出版物の分離、直接選挙でなく四段階制にちかい選挙、民主的代表制でなくボナパルト主義(三七)的一般投票制、最後に、部分と全体との「協定」の原則を確認することによって「過程としての組織解体(三八)」をもって終わっているのである。彼らは、党の戦術の点でも同じ斜面をすべり落ちた。彼らは「ゼムストヴォ・カンパニア計画」のなかで、ゼムストヴォ議員のまえで演説することを、「より高度の型のデモンストレーション」だと言明したし、また政治的舞台にただ二つの能動的勢力（一月九日の前夜に！）——すなわち、政府とブルジョア民主主義派——しか見いださなかった。彼らは、武装という緊要な任務を「ふかめて」、この直接的な実践的スローガンを、自己武装の燃えるような欲求で武装せよ、という呼びかけとすりかえた。武装蜂起や、臨時政府や、革命的民主主義的執権(ディクタツーラ)といった任務は、いまや彼らの正式な決議のなかで、ゆがめられ、鈍いものにされている。「ブルジョアジーが尻ごみしないように」——という、彼らの最近の決議のこの結びの和音は彼らの道が党をどこへつれていくかという問題を、完全に明らかにしている。

ロシアの民主主義的変革は、その社会＝経済的本質からいえばブルジョア革命である。この正しいマルクス主義的命題をただ繰りかえすだけではたりない。それを理解する能力をもち、それを政治的スローガンに適用する能力をもたなければならない。現代の、すなわち資本主義的な生産関係を基盤とする、およそあらゆる政治的自由は、ブルジョア的自由である。自由の要求は、なによりも、ブルジョアジーの利益をあらわしている。この要求をはじめて提出したのはブルジョアジーの代表者であった。ブルジョアジーの支持者は、手にいれた自由を穏健で精確なブルジョア的尺度にはめこみながら、またその自由とならんで、平和

な時代には最も洗練されたやり方で、嵐の時代には凶暴で残忍なやり方で、革命的プロレタリアートを弾圧しながら、いたるところで主人としてこの自由を利用した。

しかし、このことからの結論として、自由のための闘争を否定したり軽視したりすることができるのは、一揆派のナロードニキや無政府主義者、それに「経済主義者」だけである。このインテリゲンツィア的＝俗物的な教えをプロレタリアートに押しつけるのに成功した場合があっても、それはいつもただ一時的に、しかもプロレタリアートの反抗にさからって成功したにすぎない。プロレタリアートは、政治的自由が自分たちに必要なこと、それが直接にはブルジョアジーを強化し組織するにもかかわらず、だれよりも自分たちに必要なことを、本能的に理解していた。プロレタリアートは、階級闘争を避けることに自分たちの救いを期待せず、階級闘争の発展に、その幅、意識性、組織性、断固さの増大にそれを期待している。政治闘争の諸任務を引き下げるものは、社会民主主義者を、人民の護民官から労働組合(トレード・ユニオン)の書記に変えてしまうものである。民主主義的ブルジョア革命におけるプロレタリアートの諸任務をひくめるものは、社会民主主義者を、人民革命の指導者から、自由な労働者団体の首領に変えてしまうものである。

しかり、人民革命なのだ。社会民主党は、人民ということばのブルジョア民主主義的濫用に反対してきたし、いまも反対しているが、それはまったく正しい。社会民主党は、このことばで人民の内部の階級対立にたいする無理解がおおいかくされないように、要求する。社会民主党は、プロレタリアートの党の完全な階級的独自性が必要なことを無条件に主張する。しかし、社会民主党が「人民」を「階級」に分けるのは、先進的階級が自分のなかに閉じこもってしまい、狭い尺度で自分の限度をさだめ、世界の経済的支配者が尻ごみしないようにという考えによって自分の活動を骨ぬきにするためではなく、先進的階級が中間的な階級の中途半端な立場、動揺性、不決断にわずらわされずに、それだけ大きな精力、それだけ大きな熱情をもって、全人民の事業のために、全人民の先頭に立ってたたかうためである。

民主主義革命における積極的な政治的スローガンをかかげるかわりに、屁理屈をこねながら、「階級的」ということばをあらゆる性と格に変化させて繰りかえすだけの、現在の新イスクラ派は、しばしばまさにこのことを理解していないのである！

民主主義的変革は、ブルジョア的なものである。黒い割替、または、土地と自由というスローガン——うちのめされ無知ではあるが、熱烈に光明と幸福を求めている農民大

衆の、この最もひろくゆきわたっているスローガンは、ブルジョア的なものである。しかし、われわれマルクス主義者は、ブルジョア的自由とブルジョア的進歩の道以外には、プロレタリアートと農民を真の自由へみちびく道はないし、またありえないことを、知らなければならない。われわれは、現在のところ、完全な政治的自由、民主的共和制、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）以外には、社会主義に近づく手段はないし、またありえないことを、忘れてはならない。われわれは、先進的な、唯一の革命的な階級、なんの保留もせず、なんの疑いもいだかず、うしろをふりかえることのない革命的階級の代表者として、民主主義的変革の諸任務を、できるだけひろく、大胆に、また率先して、全人民のまえに提起しなければならない。この諸任務をひくめることは、理論的には、マルクス主義の戯画であり、その俗物的歪曲であり、また実践的＝政治的には、革命の徹底した遂行にかならず尻ごみするブルジョアジーの手に革命の事業を引き渡すことである。革命の完全な勝利への道に立ちはだかっている困難はきわめて大きい。プロレタリアートの代表者が、その力のおよぶかぎりのことをしたにもかかわらず、彼らのあらゆる努力が反動の抵抗、ブルジョアジーの裏切り、大衆の無知のために砕けてしまうとしても、だれも彼らを非難することはできないだろう。だが、もし社会民主党が勝利することを恐れ、ブルジョアジーに尻ごみさせまいという考えで、民主主義的変革の革命的エネルギーをそぎ、革命的情熱をそぐなら、あらゆる人々が——なによりもまず、自覚したプロレタリアートが——社会民主党を非難するであろう。

革命は歴史の機関車である、とマルクスは言った〔全集、第七巻、八二ページ〕。革命は、抑圧され搾取されているものの祝祭である。革命の時機ほど、人民大衆が新しい社会制度の積極的創造者として立ち現われることのできる時はけっしてない。革命の時機には、人民は、漸進的進歩という狭い素町人的尺度からすれば奇跡と見えることをやってのけることができる。だが、革命的諸政党の指導者も、そういう時機には、自分の任務を、よりひろく、より大胆に提起することが必要であり、彼らのスローガンが、つねに大衆の革命的な自主活動にさきんじ、その燈台となり、われわれの民主主義的理想と社会主義的理想が偉大ですばらしいものであることをあますところなく示し、完全な、無条件の、決定的な勝利への最も近い、まっすぐな道を示すことが必要である。革命を恐れ、まっすぐな道を恐れるあまり、迂回路や、回り道や、妥協の道を考えだすことは、「オスヴォボジデーニエ」派のブルジョアジーの日和見主義者たちにまかせよう。もしわれわれが、力ずくでそうい

う道を歩かせられることになったとしても、われわれは日常のこまごましい活動のうえでも、自分の義務を遂行することができよう。だが、まず容赦ない闘争によって、どの道を選ぶか、という問題を解決しようではないか。もしわれわれが、大衆のこの祝祭の精力と革命的熱情を、まっすぐな断固たる道のための、容赦ない献身的な闘争に活用しないなら、われわれは、革命の変節者、裏切者になるだろう。ブルジョアジーの日和見主義者たちは、将来の反動のことをびくびくしながら考えるがよい。反動が恐ろしいものになろうとしているという考えも、ブルジョアジーが尻ごみしているという考えも、労働者をびくつかせはしない。労働者は、取引を待たず、施し物を願わない。彼らは、反動勢力を容赦なく押しつぶすことを、すなわちプロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権を、めざしているのである。

労働者階級の搾取者が耐えられないほどじりじりと労働者階級の膏血をしぼりとることを意味する、自由主義的進歩の静かな「航海」の時機にくらべて、暴風雨のときには、いっそう多くの危険がわが党の船をおびやかすことは、いうまでもない。革命的民主主義的執権の諸任務が、「最左翼の野党」の任務や、たんなる議会闘争の任務よりも、千倍も困難であり複雑であることは、いうまでもない。だが、現在の革命的時機に、おだやかな航海や危険のない「野党」の道のほうを、意識して選ぶことのできる者は、一時、社会民主主義的活動から遠ざかるがよい。そして、祝祭の日々が過ぎさって、ふたたび平日の生活が始まる革命の終りを待つがよい。そのときには、こういう連中の平日的な狭い尺度もこれほどいやな不協和音でなくなり、先進的階級の任務のこれほどみにくい歪曲でなくなるだろう。

完全な自由のために、徹底した民主主義的変革のために、共和制のために、全人民、とくに農民の先頭に立て！　社会主義のために、すべての勤労・被搾取者の先頭に立て！　これこそ、実際に革命的プロレタリアートの政策でなければならない。これこそ、革命時に、労働者党のあらゆる戦術問題の解決、あらゆる実践行動をつらぬき、これを規定すべき階級的スローガンである。

あとがき

いま一度オスヴォボジデーニエ主義について、いま一度新イスクラ主義について

『オスヴォボジデーニエ』第七一―七二号と『イスクラ』第一〇二―一〇三号は、本書の第八章で取り扱った問題について、新しい非常に豊富な材料を提供している。ここではこの豊富な材料を全部利用することはとうていできないので、われわれは、最も主要な点だけにたちいることにしよう。第一には、『オスヴォボジデーニエ』がほめちぎっている社会民主党内の「現実主義」とは、どういう種類の「現実主義」なのか、また、なぜ同誌はこれをほめちぎらなければならないのか、についてであり、第二には、革命の概念と執権（ディクタツーラ）の概念の相互関係についてである。

I　ブルジョア自由主義的現実主義者はなぜ社会民主主義的「現実主義者」を賞賛するのか？

『ロシア社会民主党内の分裂』と『良識の勝利』という論文（『オスヴォボジデーニエ』第七二号）は、社会民主党について自由主義的ブルジョアジーの代表者たちがくだした判断として、自覚したプロレタリアにとってすこぶる貴重なものである。すべての社会民主主義者に、これらの論文の全文を読んで、その一句一句をよく考えるようにどんなに強くすすめても、すすめすぎることはない(1)。われわれはまず、両論文の主要な命題を再録しよう。

(1) 手稿では、レーニンは、このあとに次のように書いたのち、抹消している。「社会民主主義の最も不倶戴天の、最も強力な（現代社会で）、最も頭のよい敵（現代のあらゆる社会民主主義の敵のなかで）のこの判断は、社会民主主義者自身の政治的啓蒙のためにまことにこのうえもなく貴重な資料である」。

『オスヴォボジデーニエ』はこう言っている。「社会民主党を二つの分派に分裂させた意見の相違の現実的な政治的意味をとらえることは、わきから観察するものにはかなり困難である。事業のためにはいくらかの妥協をも許す『少数派』とは違って、『多数派』はより急進的で一本調子な分派であると規定することは、かならずしも正確ではなく、いずれにしてもあますところのない特徴づけをあたえるものではない。すくなくとも、マルクス主義正統派の伝統的教条は、おそらくレーニンの分派よ

りも、少数派の分派のほうがいっそう熱心にこれを守っている。次の特徴づけは、われわれにはより正確だと思われる。『多数派』の基本的な政治的気分は、抽象的な革命主義、一揆主義、手段を選ばず人民大衆のなかで蜂起をおこし、人民大衆の名において権力を即時奪取しようとする志向である。これが、『レーニン派』をある程度社会革命派に近づけ、彼らの意識のなかで、階級闘争の思想を全人民的ロシア革命の思想でおおいかくしている。『レーニン派』は、実践のうえでは社会民主主義学説の多くの偏狭性を捨てているが、他方から見れば、革命主義の偏狭性に骨の髄までみたされていて、即時の蜂起を準備すること以外は実践活動をすべて放棄し、合法的および半合法的な扇動形態や他の反政府的諸潮流との実践的に有益な妥協の形態を、ことごとく原則的に無視している。これに反して、少数派は、マルクス主義の教条をかたく守りながらも、同時にマルクス主義的世界観の現実主義的要素をも保持している。この分派の基本思想は、『プロレタリアート』の利益をブルジョアジーの利益に対置することである。しかしながら、他面では、プロレタリアートの闘争は、——もちろん社会民主主義の不動の教条が命じるある限界内でではあるが——現実主義的に冷静に、この闘争のすべての具体的条件と任務を明瞭に意識しながら考えられている。両分派は、それぞれの基本的立場をかならずしも首尾一貫して主張してはいないが、それは、両分派がその思想的＝政治的活動において社会民主主義的教義問答書の厳格な公式にしばられているからである。これらの公式は、『レーニン派』が、すくなくとも社会革命派の若干のものにならって、一本調子な一揆主義者となるのを妨げているし、また『イスクラ』派が、労働者階級の現実の政治運動の実践的指導者となるのを妨げている。」

それから、次に主要な諸決議の内容をあげて、『オスヴォボジデーニエ』の筆者は、これらの決議についていくつかの具体的意見を述べ、自分の一般的な「考え」を明らかにしている。彼は言う。第三回大会にくらべると、「少数派の協議会は、武装蜂起にまったく違った態度をとっている」。臨時政府にかんする両決議の相違点は、「武装蜂起にたいする態度と関連」がある。「同じ意見の相違は、労働組合にたいする態度にも現われている。『レーニン派』は、その決議で、労働者階級の政治教育と組織化とのこの最も重要な出発点について一言もいわなかった。これに反して、少数派は、非常にまじめな決議を作成した」。自由主義者にたいしては、両分派は一致している、とこの筆者は言う。しかし、第三回大会は、

「自由主義者にたいする態度について、第二回大会が採択したプレハーノフの決議をほとんど文字どおり繰りかえしており、同じ大会が採択した、自由主義者により好意的なスタロヴェルの決議をしりぞけている」。農民運動にかんする大会と協議会の決議は、だいたい同じ性質のものであるが、『多数派』は、地主その他のものの土地の革命的没収という思想をより多く強調しているのに、『少数派』は、国家と行政機関の民主主義的改革という要求をその扇動の基礎とすることを望んでいる」。

最後に、『オスヴォボジデーニエ』は、『イスクラ』第一〇〇号から、少数派の一決議を引用しているが、その主要点は、次のとおりである。「現在、地下活動だけでは、大衆が党生活に十分に参加することを保障せず、ある程度、非合法組織としての党に大衆そのものを対立させる結果となることを考慮して、合法的基盤のうえでおこなわれる労働者の労働組合闘争の遂行を党がその手にとりあげ、この闘争を、社会民主主義的諸任務と厳重に結びつける必要がある」。この決議にかんして、『オスヴォボジデーニエ』は叫んでいる。「われわれはこの決議を、良識の勝利として、社会民主党のある一部が戦術上正気にかえったものとして、熱烈に歓迎する」。

これで読者の前には、『オスヴォボジデーニエ』の重要な判断がすっかりそろっているわけである。これらの判断が客観的真理に合致しているという意味で正しいと考えるなら、それはもとより非常な誤りであろう。社会民主主義者ならだれでも、これらの判断のいたるところに容易に誤りを発見するであろう。これらすべての判断は、まったく自由主義的ブルジョアジーの利益と見地につらぬかれており、そういう意味で徹頭徹尾偏頗でかたよっていることを忘れるのは、幼稚というものであろう。これらの判断は、凹面鏡や凸面鏡が対象を反映するようなぐあいに社会民主党の見解を反映している。だが、ブルジョア的に歪曲されたこれらの判断は、社会民主党内のどういう傾向が彼らブルジョアジーに有利で、身ぢかで、同類で、共感を呼ぶものであるか、またどういう傾向が有害で、疎遠で、無縁で、反感をそそるものであるかを、階級として、疑いもなく正しく理解しているブルジョアジーの現実的利害を、結局は反映していることを忘れるのは、さらに大きな誤りであろう。ブルジョア哲学者やブルジョア評論家は、メンシェヴィキ的社会民主主義派にしろ、ボリシェヴィキ的社会民主主義派にしろ、社会民主主義派なるものをけっして正しく理解しはしないだろう。しかし、いくぶんでも分別のある評論家であれば、彼の階級的本能は彼をあざむかないであろうし、ブルジョアジーにとって社会民主党内のあれこれ

の潮流のもつ意義を、彼はいつでもだいたい正しく把握する——たとえそれをゆがめて描きあらわしはしても——ことであろう。だから、われわれの敵の階級的本能、その階級的判断には、あらゆる自覚したプロレタリアはつねに最も真剣な注意をはらうべきなのである。

では、ロシア・ブルジョアジーの階級的本能は、オスヴォボジデーニエ派の口をかりて、われわれになにを語っているか？

それは、新イスクラ主義の諸傾向にたいする満足感をまったく明確に表明して、新イスクラ主義を、現実主義的だ、冷静だ、良識の勝利だ、決議がまじめだ、戦術が正気にかえっている、実際的だなどといって賞賛しており、第三回大会の諸傾向については不満を表明して、それを、偏狭だ、革命主義だ、一揆主義だ、実践的に有益な妥協を否定しているなどといって非難している。ブルジョアジーの階級的本能は、われわれの文献で最も正確な資料によって再三立証されたこと——すなわち、新イスクラ派は今日のロシア社会民主党の日和見主義的一翼であり、その反対者は革命的一翼であるということ——、まさにこのことをブルジョアジーに告げている。自由主義者は、前者の諸傾向に同感しないわけにいかないし、後者の諸傾向を非難しないわけにいかない。自由主義者は、ブルジョアジーのイデオローグとして、労働者階級の「実際性、冷静さ、まじめさ」が、すなわち、資本主義や、改良や、労働組合的闘争などの枠によって労働者階級の活動分野が事実上制限されることが、ブルジョアジーに有利であるということを、よく理解している。プロレタリアートの「革命主義的偏狭」と、プロレタリアートの階級的任務の名において全人民的なロシア革命における指導的役割をかちとろうとするプロレタリアートの志向とは、ブルジョアジーには危険で恐ろしいことである。

オスヴォボジデーニエ的な意味での「現実主義」ということばの意味が現実にはこうしたものであるということは、とりわけ、『オスヴォボジデーニエ』やストルーヴェ氏が従来このことばをつかってきた用法からして明らかである。『イスクラ』自身、オスヴォボジデーニエ的「現実主義」のそうした意味を認めないわけにはいかなかった。たとえば、『イスクラ』第七三—七四号の付録にある論文『時はいまだ！』を思いだしていただきたい。この論文の筆者(六)（ロシア社会民主労働党第二回大会における「沼地」派の見解の一貫した表明者）は、「アキーモフは大会で、日和見主義の真の代表者というよりも、むしろその幽霊の役割を演じた」という、自分の意見を率直に表明した。そこで、『イスクラ』編集局は、注で次のように声明して、論文『時

はいまだ！』の筆者の誤りをすぐに訂正しないわけにいかなかった。

「この意見には同意できない。同志アキーモフの綱領的見解には、日和見主義の明白な刻印がある。このことを、『オスヴォボジデーニエ』の批判者もその最近号の一つで認めて、同志アキーモフは『現実主義的』――修正主義的と読め――傾向に組みしている、と指摘した[1]」。

(1) 手稿では、次のようにつづけている。「(リーフレット『世話やきの自由主義者』、「フペリョード」出版所、を参照)」〔全集第七巻、五二一―五二六ページ〕。

このとおり、オスヴォボジデーニエ的「現実主義」がまさしく日和見主義にほかならないことは、『イスクラ』自身がよく知っているのである。『イスクラ』は、いま「自由主義的現実主義」を攻撃しながらも（『イスクラ』第一〇二号）、自由主義者が同紙のことを現実主義的だといって賞賛したことについては、沈黙を守っているが、この沈黙は、こうした賞賛がどんな非難よりもつらいものであるということで説明がつく。こうした賞賛は（これは、『オスヴォボジデーニエ』が偶然に言ったことでも、はじめて言ったことでもない）、自由主義的現実主義と社会民主主義的「現実主義」（日和見主義と読め）の諸傾向――それらは、新イスクラ派の戦術的立場全体が誤っているため、彼らの決議の一つひとつに現われている――との、血縁関係を実際に証明するものである。

まことに、ロシアのブルジョアジーは、「全人民的」革命における自分の不徹底さと利己主義をすでにあますところなくさらけだしてしまった。――ストルーヴェ氏の議論によっても、多くの自由主義的諸新聞の全論調と全内容によっても、多くのゼムストヴォ議員や、多くのインテリゲンツィアや、一般にトルベツコーイ、ペトルンケヴィチ、ローヂチェフ諸氏一派のすべての味方の政治的発言の性格によっても、それをさらけだしてしまったのである。一方では、プロレタリアートと「人民」は、専制にたいする肉弾、破城槌〔昔城壁などを破壊するのに用いた攻め道具〕としてブルジョアジーの革命に有益であるが、他方では、プロレタリアートと革命的農民が、「ツァーリズムにたいする決定的勝利」をおさめ、民主主義革命を最後まで遂行する場合には、彼らはブルジョアジーに恐ろしく危険であるということ、――このことをブルジョアジーは、もちろんいつも明確に理解しているとはかぎらないが、しかし、だいたいにおいて、階級的な本能でみごとに把握している。だから、ブルジョアジーは、プロレタリアートが革命で「つつましい」役割を演じることで満足するように、より

冷静で、より実際的で、より現実主義的であるように、「ブルジョアジーが尻ごみしないように」という原則でプロレタリアートの活動が規定されるように、全力を尽くして努力するのである。

ブルジョア・インテリゲンツィアは、労働運動を厄介ばらいすることができないということをよく知っている。だから、彼らは、けっして労働運動に反対せず、けっしてプロレタリアートの階級闘争に反対しない。――いや、彼らは、労働運動と階級闘争を、ブレンターノ的な、あるいはヒルシュ＝ドゥンカー的な意味に解して、ストライキの自由や文化的な階級闘争にさかんに敬意を表しさえする。言いかえれば、彼らは、労働者が「一揆主義」や、「偏狭な革命主義」や、「実践的に有益な妥協」にたいする敵意などを捨て、「全人民的なロシア革命」に自己の階級闘争の刻印を、プロレタリア的一貫性、プロレタリア的断固さ、「平民的ジャコバン主義」の刻印を押そうとする野望と志向を捨てさえすれば、労働者に「譲歩して」、ストライキや結社の自由（労働者自身によって事実上すでにほとんどたたかいとられている自由）をあたえるつもりは十分にあるのだ。だから、全ロシアのブルジョア・インテリゲンツィアは、何千という手段や方法で、――書物*や、講義や、演説や、対談などで――（ブルジョア的）冷静さ、（自由主義的）実際性、（日和見主義的）現実主義、（ブレンターノ的）階級闘争、（ヒルシュ＝ドゥンカー的）労働組合[32]などの思想を労働者に吹きこむのに全力を尽くして努力している。最後の二つのスローガンは、「立憲民主」党すなわち「オスヴォボジデーニエ」党のブルジョアにとくに好都合である。なぜなら、これらのスローガンは、外見上マルクス主義のスローガンに一致していて、すこしばかり黙っているか、わずかにねじまげれば、容易に社会民主党のスローガンにまぎれこますことができるし、時としては、社会民主党のスローガンだと見せかけることさえできるからである。だから、たとえば、合法的な自由主義新聞『ラススヴェート』[33]（この新聞については、われわれはそのうち、『プロレタリー』の読者となんらかの形でもっとくわしく語りあうようにしたい）は、階級闘争や、プロレタリアートがブルジョアジーにだまされる可能性や、労働運動や、プロレタリアートの自主活動などについて、不注意な読者やおくれた労働者が同紙の「社会民主主義」をともすればほんものとまちがえるほど「大胆な」ことをしばしば言っている。だが実際には、それは、社会民主主義のブルジョア的にせものであり、階級闘争の概念の日和見主義的な曲解であり歪曲である。

* プロコポーヴィチ『ロシアにおける労働問題』を参照。

この大がかりな（大衆にたいする働きかけのひろさの点で）ブルジョア的すりかえの基礎には、労働運動を主として労働組合運動に引き下げ、独自の（すなわち、革命的で民主主義的執権（ディクタツーラ）への方向をもつ）政策から労働運動をなるべく遠ざけ、「彼ら労働者の意識のなかで、全人民的ロシア革命の思想を階級闘争の思想でおおいかくそう」とする傾向がある。

読者が見られるとおり、われわれは、『オスヴォボジデーニエ』の定式を逆にひっくりかえした。これは、民主主義革命におけるプロレタリアートの役割についての二つの見解、ブルジョア的見解と社会民主主義的見解をみごとに表現するすぐれた定式である。ブルジョアジーは、プロレタリアートを労働組合運動だけに押しこめ、それによって――労働者の意識のなかで、政治闘争の思想を「純労働」運動の思想でおおいかくした『クレード』のベルンシュタイン主義的筆者たちとまったく同じ精神で――「プロレタリアートの意識のなかで、全人民的ロシア革命の思想を（ブレンターノ的）階級闘争の思想でおおいかくそう」と望んでいる。これに反して、社会民主党は、全人民的ロシア革命にプロレタリアートが指導的に参加するようにプロレタリアートの階級闘争を発展させること、すなわち、この革命をプロレタリアートと農民の民主主義的執権（ディクタツーラ）にみちびくことを、望んでいるのである。

ブルジョアジーは、プロレタリアートに向かって言う。わが国の革命は全人民的な革命である。だから諸君は、特別の一階級として、自分の階級闘争にとどまらなければならない。「良識」の名において、おもな注意を労働組合とその合法化に向けなければならない。ほかならぬこの労働組合を「自己の政治教育と組織化の最も重要な出発点」と考えなければならない。革命的時機に、新イスクラ派のそれのような、すぐれて「まじめな」決議をつくらなければならない。「自由主義者により好意的な」決議をたいせつに取り扱わなければならない。「労働者階級の現実の政治運動の実践的指導者」となろうとする傾向をもつ指導者のほうを選ばなければならない。「マルクス主義的世界観の」（もし、諸君が、残念ながら、この「非科学的な」教義問答書の「厳格な公式」にすでに感染しているなら）「現実主義的諸要素を保持」しなければならない、と。

社会民主党はプロレタリアートに向かって言う。わが国の革命は全人民的な革命である。だから諸君は、最も先進的で、最後まで革命的な唯一の階級として、革命に最も精力的に参加するだけでなく、また指導的に参加するように努めなければならない。だから諸君は、主として労働組合運動の意味に狭く理解された階級闘争の枠のなかに閉じこ

もるのではなく、反対に、自分の階級闘争の枠と内容をひろげて、現在の民主主義的・全人民的なロシア革命のすべての任務だけでなく、将来における社会主義革命の諸任務もこの枠に包括されるようになるまで努力しなければならない。だから諸君は、労働組合運動を無視せず、合法活動のどんな小さな余地も利用することを断念しないとともに、革命の時代には、ツァーリズムにたいする人民の完全な勝利、民主的共和制と真の政治的自由との獲得にいたる唯一の道として、武装蜂起、革命軍と革命政府の樹立という任務を前面に押しださなければならない、と。

新イスクラ派の決議が、その誤った「方針」のために、どれほど中途半端な、不徹底な、そして当然ブルジョアジーの共感を呼ぶ立場をとったかについて語るのは、よけいなことである。

Ⅱ　同志マルトィノフがこの問題を新しく「ふかめた」こと

『イスクラ』第一〇二号および第一〇三号にのったマルトィノフの論文〔『マルクス主義的意識とたたかいつつ』〕に移ろう。もちろん、われわれは、エンゲルスとマルクスからのいくつかの引用文の解釈ではわれわれが誤っていて彼が正しいのだ、ということを証明しようとするマルトィノフの試みには、こたえないであろう。この試みははなはだふまじめなもので、マルトィノフの遁辞はまったく明白であり、問題はきわめて明瞭なので、いま一度われわれがこの問題にたちいるのは興味のないことであろう。ものを考える読者ならだれでも、とくに『プロレタリー』寄稿家のグループが準備しているエンゲルスの小冊子『バクーニン主義者の活動』とマルクスの一八五〇年三月付の『共産主義者同盟中央委員会の呼びかけ』の全訳が出版されれば[一]、マルトィノフが全線にわたって退却したさいにつかった簡単な策略を、自分で容易に見わけることだろう。マルトィノフの退却を読者にはっきりさせるには、彼の論文から一節を引用するだけで十分である。

マルトィノフは第一〇三号でこう言っている。『イスクラ』は、「革命発展の可能で適切な道の一つとして、臨時政府の樹立を」「承認している」のだが、「社会民主主義者がブルジョア的臨時政府に参加するのが適切だということを否定する。それはつまり、社会主義的変革のために将来国家機構を完全に掌握できるようにするためである」。言いかえれば、『イスクラ』は、革命政府が国庫と銀行に責任をもつことについて同紙のいだいていた恐怖感、また「監獄」その他を奪取するのは危険で不可能だという同紙の恐怖感がすべてばかばかしいことを、いまでは認めてい

るのである。ただ『イスクラ』は、民主主義的独裁と社会主義的独裁とを混同して、あいかわらず混乱している。退却を援護するのであってみれば、混乱は避けられない。

しかし、新『イスクラ』の混乱家のなかでも、マルトィノフは第一級の混乱家として、――もしこういってもよければ――有能な混乱家として、ひときわすぐれている。問題を「ふかめ」ようとするむだ骨おりで問題を混乱させながら、彼はたいていいつも新しい定式を「考えつく」が、その新しい定式は、彼のとった立場がすっかりまちがっていることをものみごとに明らかにする。「経済主義」の時代に、彼がプレハーノフを「ふかめ」、「雇い主と政府とにたいする経済闘争」という定式を創造的につくりだしたことを思いおこしてほしい。「経済主義者」の全文献中でも、この傾向のまちがい全体をこれ以上うまく言いあらわしているものを指摘するのはむずかしい。こんどもやはりそうである。マルトィノフは、熱心に新『イスクラ』に奉仕していて、口を開くたびに、たいていいつでも新イスクラ派のまちがった立場を評価するための、新しい、すばらしい材料をわれわれに提供してくれる。第一〇二号で彼は言っている。レーニンは「革命の概念と独裁の概念をこっそりすりかえた」と(三ページ、第二欄)。

われわれにたいする新イスクラ派の非難はすべて、だいたいのところ、この非難に帰着する。そして、われわれは、この非難を、どんなにマルトィノフに感謝していることか! 彼は、非難のこうした定式をあたえることによって、われわれが新イスクラ主義と闘争するうえでどれほどはかりしれない貴重な奉仕をしてくれていることか! たしかに『プロレタリー』にたいする攻撃を「ふかめ」、この攻撃を「真に原則的に」定式化するため、もっとしばしばマルトィノフをわれわれに立ち向かわせるよう、『イスクラ』編集局にお願いしなければならない。というのは、マルトィノフは、原則的に論じようと努力すればするほど、ますますまずいことになり、新イスクラ主義の欠陥をますますはっきりと示し、自分で自分と自分の友人たちにたいしてreductio ad absurdum(新『イスクラ』の諸原則をばかげたものにする)という有益な教育的手術を、ますます手ぎわよく施すようになるからである。

『フペリョード』と『プロレタリー』は、革命の概念と独裁の概念を「すりかえる」。『イスクラ』はこうした「すりかえ」を望まない。まさしくそのとおり、尊敬する同志マルトィノフよ! 貴下は、思わず知らず偉大な真実を語ったのだ。貴下は、われわれの命題――『イスクラ』はよちよちと革命のうしろについていき、革命の諸任務のオスヴォボジデーニエ的定式に迷いこんでいるが、『フペリョ

ード』と『プロレタリー』は、民主主義革命を前進させるスローガンをあたえている、という――を新しい定式で裏づけたのだ。

同志マルトィノフよ、君にはこれがわからないのか？問題が重要だから、くわしく説明してさしあげよう。

民主主義革命のブルジョア的性格はどこに現われるかといえば、もっぱら私的所有と商品経済との承認を基盤とし、その枠をこえることのできない、幾多の社会階級、グループ、階層が事態の力に押されて、専制が、また一般に農奴制度全体が、役に立たないということを承認するようになり、自由の要求に合流するようになる点に、とりわけ現われる。そのさい「社会」が要求し、地主と資本家が滔々たることばで（しかもことばだけで！）擁護するこの自由のブルジョア的性格は、しだいにますますはっきり現われてくる。それとともに、自由のための労働者の闘争とブルジョアジーの闘争との、プロレタリア民主主義と自由主義的民主主義との根本的相違も、ますます明瞭になってくる。労働者階級とその自覚した代表者は、この闘争を最後まで遂行することを恐れないだけでなく、民主主義革命のはるかな終点よりはるかに先のほうまですすもうと努めて、この闘争の先頭にたち、それを押しすすめる。ブルジョアジーは不徹底で利己的であるから、自由のスローガンを不完全に偽善的に受けいれるにすぎない。そこをこえるとブルジョア的な自由の友のこの偽善――あるいは、ブルジョア的な自由の友による自由のこの裏切りといってもよいが――が始まるという限界を、特別の一線なり、特別につくりあげた「条項」（スタロヴェルまたは協議会派の決議の諸条項のような）で規定しようとするあらゆる試みは、かならず失敗する運命にある。なぜなら、両面（専制とプロレタリアート）からの砲火にさらされているブルジョアジーは左に一尺、右に一尺と順応し、たえず駆引し、ブローカー商売をやりながら、無数の方法や手段で、自分の立場とスローガンを変えていく能力をもっているからである。プロレタリア民主主義の任務は、こうした死んだ「条項」を考えだすことにあるのではなく、発展する政治情勢をうまずたゆまず批判し、あらかじめ予見できないブルジョアジーの不徹底な行動や裏切り行為があらたに現われるたびにそれを暴露することにある。

非合法文献でのストルーヴェ氏の政治的発言の歴史、社会民主党の彼にたいするたたかいの歴史を思いおこしていただきたい。そうすれば、諸君は、プロレタリア民主主義の闘士である社会民主党がこれらの任務を実行しているのをまざまざと見ることだろう。ストルーヴェ氏は、純シポフ的な「権利と権限のあるゼムストヴォとを」というスロ

ーガンから始めた（『ザリャー』[三]所載の私の論文『ゼムストヴォの迫害者と自由主義のハンニバルたち』〔全集、第五巻、二一一—七二ページ〕を見よ）。社会民主党は彼を暴露して、明確に立憲主義的な綱領のほうに彼を押しやった。この「押しやり」が革命的事件のとくに急速な推移によって功を奏すると、闘争は民主主義の次の問題に向けられた。それは、たんに憲法一般ではなく、かならず秘密投票による普通・直接・平等選挙権でなければならない、ということであった。われわれがこの新しい陣地をも「敵」から「占領」すると（「解放同盟」による普通選挙権の採択）、われわれは、二院制が偽善的で偽りのものであること、オスヴォボジデーニエ派による普通選挙権の認め方は不完全であることを示し、また、彼らの君主主義をとりあげて、彼らの民主主義のブローカー的性格を、言いかえれば、オスヴォボジデーニエ派に属するこれらの財布の英雄たちがロシア大革命の利益を安売りしていることを示して、さらに強襲をくわえはじめた。

最後に、専制のはなはだしい頑固さ、内乱の大規模な進展、君主主義者のためにロシアがおとしいれられた絶体絶命の状態は、どんな血のめぐりの悪い頭にもわかりはじめた。革命は事実となった。革命を認めるには、もはや革命家であることを要しなかった。専制政府は、事実上解体しつづけてきたし、万人の眼前で解体しつつある。合法出版物上で一自由主義者（グレデスクール氏）が正しく指摘したとおり、この政府にたいする事実上の不服従が生まれた。専制は見かけはきわめて強そうでも、無力であることがわかり、発展する革命の生んだ諸事件は、この生きたまま腐ってゆく寄生虫をあっさりと押しのけはじめた。あたえられた、事実上生じつつある諸関係を自分の活動（より正しくは、自分の政治商売）の基礎にしないわけにはいかないので、自由主義的ブルジョアは、革命を承認しなければならなくなりはじめた。彼らがそうするのは、革命家だからではなく、革命家でないにもかかわらずそうするのである。彼らは、必要に迫られ、いやいやながらそうするのである。彼らは革命の成功を敵意をもってながめながらも、専制が革命と取引を望まないで、死にものぐるいの闘争をやろうとするのを、革命的立場において非難する。生まれつきの小商人である彼らは闘争と革命を憎んでいるが、事情にせまられて、革命を足場にする。というのは、それ以外の足場はないからである。

われわれは、ひどく教訓的でひどく喜劇的な光景を目撃している。ブルジョア自由主義の売春婦が革命性のトーガ〔古代ローマ市民のまとった長い上着〕を身にまとおうとする。オスヴォボジデーニエ派が——risum teneatis, amici!

〔諸君、これが笑わずにいられようか〕——あのオスヴォボジデーニエ派が、革命の名において語りはじめる！「革命を恐れない」と断言しはじめる（『オスヴォボジデーニエ』第七二号のストルーヴェ氏）！！「革命の先頭に立とう」という野望を表明する、とは!!!

これは、ブルジョア自由主義の進歩を特徴づけているだけでなく、それ以上にいやおうなしに革命を認めさせた革命運動の現実の成功の進歩を特徴づけている、きわめて意味深長な現象である。ブルジョアジーでさえも、革命を足場にするほうが有利であることを感じはじめている。——専制はそれほどぐらついたのである。しかしながら、全運動が新しい、より高い段階へ高揚したことを証拠だてるこの現象は、他方では、同じように新しい、同じようにより高い任務をわれわれに提起する。ブルジョアジーが革命を認めたとしても、それは、本心からのものではありえない。ブルジョアジーのあれこれのイデオローグがたとえ個人的には誠実であろうと、それにはかかわりがない。ブルジョアジーは、運動のこのより高い段階にも、利己主義と不徹底、小商人根性と反動的な小細工をもちこまないわけにはいかない。われわれはいま、われわれの綱領の名において、またわれわれの綱領の発展のために、革命の当面する具体的な諸任務をこれとは違ったふうに定式化しなければならない。きのうは十分であったことも、きょうは不十分である。革命を認めよという要求は、すすんだ民主主義的スローガンとして、きのうはおそらく十分であったろう。いまでは、それでは不十分である。革命は、ストルーヴェ氏にさえ自分を認めさせた。いまでは先進的階級には、この革命の緊要な、猶予ならない諸任務の内容そのものを厳密に規定することが必要である。ストルーヴェ氏らは、革命を認めるという口の下から、またもやそのろばの耳を突きだして、平和な結末が可能だとか、ニコライ〔皇帝〕がオスヴォボジデーニエ派の諸君を召しだして政権につけるだろうとか、古いお題目を、またしても唱えている。オスヴォボジデーニエ派の諸君が革命を認めるのは、できるだけ自分たちに危険がかからないように、この革命を手品でどこかへしまいこみ、この革命を裏切るためである。いま、われわれのなすべきことは、革命というスローガンの不十分さをプロレタリアートと全人民に教え、革命の内容そのものの明瞭で、明確な、一貫した、決定的な規定の必要を示すことである。ところで、こうした規定は、革命の「決定的勝利」を正しく表現できる唯一のスローガンである、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタトゥーラ）というスローガンなのである。(三)

ことばの濫用は、政治ではごくありふれた現象である。

たとえば、イギリスのブルジョア自由主義の味方も、たびたび「社会主義者」と自称したし(「いまではわれわれはみな社会主義者だ」――《We all are socialists now》とハーコートは言った)、ビスマルクの味方も法王レオ一三世の友もまたそうだった。「革命」ということばもまた濫用するのにまったく適したものであって、運動のある発展段階ではこうした濫用は避けられない。ストルーヴェ氏が革命の名で語りはじめたとき、われわれは思わず知らずティエールを思いだした。二月革命の数日前に、このグロテスクな一寸法師、ブルジョアジーの政治的腐敗を典型的にあらわしているこの人物は、人民の嵐がせまっていることをかぎつけた。そこで彼は議会の壇上から、私は革命党に属する、と声明した!(マルクス『フランスの内乱』を見よ〔全集、第一七巻、四八四ページ〕)。オスヴォボジデーニエ派が革命党のほうに移行したこととの政治的意義は、ティエールのこの「移行」と完全に同一である。ロシアのティエールらが革命党に属すると言いはじめたとすれば、それは、革命というスローガンが、なんの中味もなく、なんの任務も規定しない、不十分なスローガンになったことを意味している。というのは、革命が事実となり、種々さまざまの分子が革命の側になだれこんできたからである。

実際、マルクス主義の見地からみれば、革命とはなにか? それは、老朽した政治的上部構造の強力的破壊であって、新しい生産関係とこの上部構造との矛盾がある瞬間に後者の崩壊を引きおこしたのである。資本主義的ロシアの全体制と専制との矛盾、ロシアのブルジョア民主主義的発展のすべての要求と専制との矛盾は、この矛盾が人為的に抑えられてきた期間が長かっただけに、いまそれだけいっそう強力な崩壊を呼びおこしたのである。上部構造は、ずたずたになり、圧力に屈し、弱まっていく。人民は種々さまざまの階級とグループの代表者をつうじて、みずから新しい上部構造をつくりださなければならない。発展のある時機には、古い上部構造が役に立たないことは万人に明らかになる。万人が革命を認める。いまや任務は、いったいどの階級がどういうふうにして新しい上部構造を建設すべきかを規定することにある。それを規定しなければ、革命というスローガンは、現在では空虚で無内容である。なぜなら、専制の弱体性は大公たちをも『モスコフスキエ・ヴェードモスチ』(二三)をも、「革命家」にしているからである! それを規定することなしには、先進的階級の先進的な民主主義的諸任務などは問題にならない。ところで、それを規定したものこそ、プロレタリアートと農民の民主主義的執権(ディクタトゥーラ)のスローガンなのである。このスローガンは新しい上部構造の新しい「建設者」が依拠することのでき、また依

拠しなければならない諸階級をも規定し、この上部構造の性格（社会主義的執権とは違う「民主主義的」執権）とその建設方法（執権、すなわち暴力的反抗の強力的弾圧、人民のなかの革命的諸階級の武装）をも規定している。革命的民主主義的執権というこのスローガン、革命軍、革命政府、革命的農民委員会というスローガンをいま認めないものは、手のつけようのないほど革命の諸任務を理解せず、現情勢の提出する革命の新しい、より高度の諸任務を規定するすべを知らないものか、でなければ、「革命」のスローガンを悪用して、人民をあざむき、革命を裏切るものである。

第一の場合は、同志マルトィノフとその友人たちである。第二の場合は、ストルーヴェ氏とゼムストヴォ的「立憲民主」党全体である。

同志マルトィノフは、革命が発展して、執権のスローガンによって革命の任務を規定することが必要になった折りもおり、革命の概念と執権の概念を「すりかえた」という非難をはなつほど、抜け目がなく、才気があった！同志マルトィノフは、事実上、またしても不運なことに、後尾に残り、おしまいから二つ目の段階にひっかかり、オスヴォボジデーニエ主義の水準にとどまることになった。なぜなら、いま「革命」を認めながら（口さきで）、プロレタリアートと農民の民主主義的執権（すなわち、実際上の革命）を認めたがらないのは、まさしくオスヴォボジデーニエ派の政治的立場に、すなわち、自由主義的・君主主義的ブルジョアジーの利益に合致するからである。自由主義的ブルジョアジーは、いまストルーヴェ氏の口をかりて革命に賛意を表している。自覚したプロレタリアートは、革命的社会民主主義者の口をかりてプロレタリアートと農民の執権を要求している。ところが、そこへ『新イスクラ』の物知りが、革命の概念と執権の概念を「すりかえる」なと叫びながら、論争にくちばしをいれる！どうだ、新イスクラ派の立場の偽りが、彼らをいつでもオスヴォボジデーニエ主義に追随する運命におとしいれるというのは、ほんとうではないだろうか？

われわれは、オスヴォボジデーニエ派が、民主主義の承認という点で一段一段と上にのぼってゆきつつある（これには、彼らを刺激してふるいたたせた社会民主党の影響がないわけではない）ことを示した。最初、われわれと彼らとの論争問題は、シポフ主義（諸権利と、権限のあるゼムストヴォ）か立憲主義か、という形でだされていた。次には、制限選挙か普通選挙か、という形で。さらに、革命の承認か専制とのブローカー的取引か、という形で。最後に、いまは、プロレタリアートと農民の執権をぬきにした

革命を認めるか、民主主義革命におけるこれら両階級の執権の要求を認めるか、という形でだされている。オスヴォボジデーニエ派の諸君（今日のオスヴォボジデーニエ派か、ブルジョア民主主義派の左翼に属する彼らの後継者かは、どうでもよい）がもう一段上にあがること、すなわち、早晩（おそらく同志マルティノフがさらにもう一段あがるときまでに）執権のスローガンをも認めることは、ありうることであり、ありそうなことである。もしロシア革命が成功裏に前進し、決定的勝利に達するなら、かならずそうなるとさえいえる。そのときには社会民主党の立場はどういうものになるだろうか？　今日の革命が完全に勝利すれば、民主主義的変革は終わって、社会主義的変革のための断固たる闘争が始まるだろう。今日の農民の諸要求が実現され、反動が完全に壊滅し、民主的共和制がたたかいとられれば、ブルジョアジーの革命性はすっかりおしまいになり、小ブルジョアジーの革命性さえおしまいになるだろう。そして、社会主義のためのプロレタリアートのほんとうの闘争が始まるだろう。民主主義的変革が完全であればあるほど、この新しい闘争は、それだけはやく、ひろく、純粋に、断固として展開されるであろう。「民主主義的」執権というスローガンこそ、現在の革命の歴史的に限定された性格と、あらゆる圧制、あらゆる搾取からの労働者階級の完全な解放をめざす新しい闘争が新しい制度を基礎として起こる必然性とを言いあらわしている。言いかえれば、民主主義的ブルジョアジーあるいは小ブルジョアジーがもう一段上にのぼるとき、革命が事実となるだけではなく、革命の完全な勝利が事実となるときには、――そのときには、われわれは民主主義的執権のスローガンを、プロレタリアートの社会主義的執権、すなわち、完全な社会主義的変革のスローガンで「すりかえる」であろう（おそらく新しい将来のマルティノフらのものすごい悲鳴を聞きながら）。

III　執権の俗流的・ブルジョア的な説明とマルクスの執権にたいする見解

メーリングが、彼の刊行した一八四八年の『新ライン新聞』所載のマルクスの諸論文への編者注のなかで述べているところによると、ブルジョア出版物は、『新ライン新聞』を非難するにあたって、とりわけ同紙が、「民主主義を実現する唯一の手段として執権の即時実施」を要求した点を非難した、という（『マルクス遺稿集』、第三巻、五三ページ）[(四)]。俗流的なブルジョア的見地からすれば、執権の概念と民主主義の概念とはあいいれないものである。ブルジョアは、階級闘争の理論を理解せず、政治の舞台で見

なれているのは、ブルジョアジーのいろいろなサークルや徒党のこせこせした争いであるから、執権といえば、いっさいの自由と民主主義の保障とを廃止することであり、あらゆる専横をほしいままにし、執権者の個人的利益のために権力をあらゆる形で濫用することである、と解している。わがマルトィノフの所論にうかがわれるものも、だいたいにおいてまさにこういう俗流的なブルジョア的見地であって、彼は新『イスクラ』紙上でのその「新戦役」を終わるにあたって、『フペリョード』や『プロレタリー』が執権のスローガンを偏愛するのは、レーニンが「恐ろしく運だめしをやりたがっている」からだ、と説明している（『イスクラ』、第一〇三号、第三面、第二欄）。このすばらしい説明は、『新ライン新聞』が執権を説いたことにたいするブルジョア的非難とまったく同じ水準のものである。したがって、マルクスもまた、革命の概念と執権の概念とを「すりかえる」罪を問われていたわけである――「社会民主主義者」からではなく、ブルジョア自由主義者から！　個人の執権とは違った階級の執権の概念、また社会主義的執権とは違った民主主義的執権の諸任務をマルトィノフに説明するために、『新ライン新聞』の見解にたちいることは無用ではあるまい。

一八四八年九月一四日に『新ライン新聞』はこう書いた。

「すべて革命のあとにつづく臨時的な国家秩序は、執権を、しかも精力的な執権を必要とする。われわれがはじめからカンプハウゼン」（一八四八年三月一八日以後の内閣首班）「を非難してきたのは、彼が執権者的に行動せず、古い諸制度の遺物をすぐに粉砕し、取りのぞくことをしなかったからであった。そこで、カンプハウゼン氏が立憲的な夢想にふけっていたあいだに、打ちやぶられた党派」（すなわち反動党）「は、官僚と軍隊のなかに足場を強め、あちこちであえて公然たるたたかいをさえいどむまでになった」〔全集、第五巻、四〇三ページ〕。

メーリングは正しくも言っている。このことばには、『新ライン新聞』がカンプハウゼン内閣についての長い諸論文のなかでくわしく解明してきたことが、二、三の命題に要約されている、と。マルクスのこのことばは、なにをわれわれに告げているか？　臨時革命政府は執権者的に行動しなければならないということ（執権のスローガンを避けてきた『イスクラ』には、この命題はどうしても理解できなかった）、この執権は、古い諸制度の遺物を一掃することを任務としていること（まさに反革命との闘争についてのロシア社会民主労働党第三回大会の決議に明白に指摘されていることであり、まさきに示したように、協議会の決議には抜けていることである）、これである。最後に、第三

の点として、このことばからわかることは、マルクスがブルジョア民主主義者を、革命と公然たる内乱の時機に「立憲的幻想」にふけっているといって叱責したことである。このことばがどういう意味をもっているかは、『新ライン新聞』の一八四八年六月六日付の論文から、とりわけ明瞭に知られる。マルクスはこう書いている。「憲法制定国民議会はなによりもまず、行動的な、革命的に行動する議会でなければならない。フランクフルト議会は議会改組の学課作文にふけって、行動は諸政府にまかせている。たとえこの博学な公会議が、熟慮をかさねたあげく最良の議事日程と最良の憲法とをうまくひねりだしたとしても、そのあいだに諸政府が銃剣を日程にのぼせたならば、最良の議事日程と最良の憲法もなんの役に立つだろうか？」〔全集、第五巻、三六―三七ページ〕

これこそ、執権（ディクタツーラ）のスローガンの意味である。これからして、「憲法制定議会を組織するという決定」を決定的な勝利と名づけたり、「最左翼の革命的野党にとどまれ」とすすめたりしている決議にたいして、マルクスはどんな態度をとったであろうかをうかがうことができる！

諸国民の生活における大問題はただ力によってのみ決せられる。ふつう、まっさきに暴力に、内乱にうったえ、「銃剣を日程にのぼせる」のは、反動的諸階級自身であって、ロシアの専制もこうした行動をとったし、また一月九日[28]以来いたるところで、系統的に、一貫して、こうした行動をとりつづけている。そして、いったんこのような情勢が生まれたなら、いったん銃剣が実際に政治的日程のまっさきにのぼせられ、蜂起が必要で猶予ならないものになったなら、立憲的幻想と議会制度の学課作文は、ブルジョアジーが革命を裏切ったことを隠す目かくし、ブルジョアジーが革命に「尻ごみしている」ことを隠す目かくしにすぎなくなる。真に革命的な階級がそのときに押しださなければならないのは、まさに執権（ディクタツーラ）のスローガンである。

マルクスは、この執権（ディクタツーラ）の任務の問題について、『新ライン新聞』でさらに次のように書いている。「国民議会は、老朽した諸政府の反動的な侵害にたいして、どこでも執権者（ディクタトル）として対抗しさえすればよかったのだ。そうすれば議会は、人民の世論のなかにどんな銃剣も打ちくだく力を獲得しただろう。……国民議会は、ドイツ国民を熱中させることも、またドイツ国民に熱中させられることもなく、逆にドイツ国民を退屈させてしまった」〔全集、第五巻、三七ページ〕。マルクスの意見では、国民議会がしなければならなかったのは、「人民主権の原理に反するもののすべてを、ドイツに事実上現存する状態のうちから除去し」、ついで、「国民議会の立っている革命的基盤を維持し、革命

の成果である人民主権をあらゆる侵害から守る」(23)〔全集、第五巻、一二ページ〕ことであった。

したがって、一八四八年にマルクスが革命政府または執権(ディクタトゥーラ)に提起した任務は、その内容からすれば、なによりもまず民主主義的変革に帰着するものであった。すなわち、人民主権を反革命から守り、人民主権に反するあらゆるものを実際に排除することであった。これはすなわち革命的民主主義的執権(ディクタトゥーラ)にほかならない。

さて、次にすすもう。マルクスの意見によれば、どの階級がこの任務(人民主権の原則を実際に最後まで実行すること、そして反革命の攻撃を撃退すること)を実現することができたか、また実現しなければならなかったであろうか? マルクスは「人民」と言っている。しかし、われわれが知っているとおり、彼は、「人民」が統一されているとか、人民の内部に階級闘争がないとかいった小ブルジョア的な幻想と、いつでも容赦なくたたかったのである。マルクスは「人民」ということばをつかったが、このことばで階級の差別をぼかしたのではなく、革命を最後まで遂行する能力をもつ、特定の諸要素をまとめて言ったのである。

『新ライン新聞』は書いた。〔一八四八年〕三月一八日のベルリン・プロレタリアートの勝利ののち、革命の結果は二重のものとなった。「一方には、人民の武装、結社の権利、事実上たたかいとられた人民主権、他方には、君主制が維持されたこと、とカンプハウゼン＝ハンゼマン内閣、すなわち大ブルジョアジーの代表者の政府。こうして、革命は二系列の結果を生んだが、それは必然的にたがいに背馳せざるをえないものであった。人民は勝利した。彼らは、断然民主主義的な諸自由を獲得した。しかし、直接の支配権は人民の手に移らないで、大ブルジョアジーの手に移った。一言でいえば、革命は完成されなかった。人民は、大ブルジョアの内閣がつくられるのをだまって見のがした。ところが、大ブルジョアは、旧プロイセン貴族や官僚に同盟を申し入れることで、すぐさま自分の傾向を実証した。アルニム、カーニッツ、シュヴェーリンが内閣にはいった。上層ブルジョアジーは、まえから革命に反対であったが、いまや人民、すなわち労働者と民主主義的ブルジョアジーを恐れて、反動派と攻守同盟を結んだのである」(24)(傍点は引用者)〔全集、第五巻、六〇―六一ページ〕。

だから、「憲法制定議会を組織するという決定」どころか、この議会を実際に召集することさえ、革命の決定的な勝利のためには、なお不十分なのだ! 武装闘争に部分的勝利をおさめたあとでさえ(一八四八年三月一八日の軍隊にたいするベルリンの労働者の勝利)、「完成されない」、「最後まで遂行されない」革命がありうる。それでは、革

命の最後までの遂行は、なにによかかっているのか？　直接の支配権がだれの手に移るかに、すなわち、ペトルンケヴィチ、ローヂチェフ一派、つまりカンプハウゼン、ハンゼマン一派の手に移るか、それとも人民、すなわち労働者と民主主義的ブルジョアジーの手に移るか、にかかっているのである。まえの場合には、ブルジョアジーが権力をにぎり、プロレタリアートは「批判の自由」、「最左翼の革命的野党にとどまる」自由を得るだろう。ブルジョアジーは、勝利の直後に反動派と同盟を結ぶであろう（ロシアでも、たとえばペテルブルグの労働者が軍隊との市街戦で部分的な勝利しかおさめず、政府の組織をペトルンケヴィチ氏のような一派にまかせるとすれば、かならずこれと同じことが起こるだろう）。あとの場合には、革命的民主主義的執権（ディクタトゥーラ）が、すなわち革命の完全な勝利が可能となろう。

残る問題は、マルクス[87]が、大ブルジョアジーに対立させて、労働者とあわせて人民をなすものとよんでいる「民主主義的ブルジョアジー」(demokratische Bürgerschaft) ということばで、彼は本来なにを意味したのかを、もっと正確に規定することである。

この問題にたいする明瞭な回答は、『新ライン新聞』の一八四八年七月二九日付の論文の次の一節にあたえられている。「……一八四八年のドイツ革命は、一七八九年のフランス革命のパロディーにすぎない……

一七八九年八月四日、つまりバスティーユ牢獄襲撃の三週間後に、フランスの人民は一日で封建的負担をかたづけた。

一八四八年、七月一一日、つまり三月のバリケード戦から四ヵ月後、封建的諸負担がドイツ人民をやっつける。* Teste Gierke cum Hansemanno.

* 「ギールケとハンゼマンを証人として」。ハンゼマンは大ブルジョアジーの党の大臣である（ロシアでいえば、トルベツコーイまたはローヂチェフ、などというところ）。ギールケは、ハンゼマン内閣の農業大臣で、「無償で」「封建的諸負担を廃止する」と称する計画、「大胆な」計画を作成したのであったが、そのじつこれは、瑣末な、重要でない負担を廃止して、より重要な負担は存続させておくか、または買い取らせる計画であった。ギールケは、ロシアのカブルコーフ、マヌイロフ、ゲルツェンシュテイン氏一派や、これに類する──「農民の土地所有の拡大」を望みはするが、しかし地主の機嫌をそこねるのはいやだという──ブルジョア自由主義的農民の友のような人物であった。

一七八九年のフランスのブルジョアジーは、彼らの同盟者である農民たちを一瞬たりとも見すてなかった。彼らは、自分たちの支配の基礎が農村における封建制の破壊であり、土地を所有する (grundbesitzenden) 自由な農民階級をつ

くりだすことである、ということを知っていた。

一八四八年のドイツのブルジョアジーは、自分の骨肉を分けた最も自然な同盟者である農民たちを、なんのためらいもなしに裏切る。農民なしにはブルジョアジー自身が貴族にたいして無力であるのに。

（欺瞞的な）鎖却の形式での封建的諸権利の存続とその是認、これこそが、だから、一八四八年のドイツ革命の成果なのである。泰山鳴動鼠一匹とはこのことだ！」〔全集、第五巻、二八〇―二八一ページ〕。

これはきわめて教訓に富む一節であって、四つの重要な命題をわれわれに示している。（一）未完成のドイツ革命が、完成されたフランス革命と違う点は、ブルジョアジーが、民主主義一般を裏切っただけでなく、とりわけ農民をも裏切ったことである。（二）民主主義的変革の完全な実現の基礎は、自由な農民階級がつくりだされることである。（三）このような階級がつくりだされることは、封建的諸負担の廃止、封建制の破壊を意味するが、まだけっして社会主義的変革ではない。（四）農民は、ブルジョアジーの、すなわち民主主義的ブルジョアジーの「最も自然な」同盟者であって、これと結ばずにはブルジョアジーは反動派にたいして「無力」である。

具体的な国民的特性という必要な変更をくわえ、封建制のかわりに農奴制をおけば、これらの命題はみなそっくり一九〇五年のロシアにもあてはまる。マルクスが解明したドイツの経験から教訓を引きだすなら、われわれは、革命の決定的勝利のスローガンとして、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタトゥーラ）以外のどんなスローガンにも到達できないことは、疑いない。マルクスが一八四八年に、抵抗していた反動派と裏切り的なブルジョアジーとに対立させた「人民」の主要な構成部分がプロレタリアートと農民であることは、疑いない。わがロシアでも、自由主義的ブルジョアジーとオスヴォボジデーニエ派の諸君が、農民を裏切りつつあり、またこんご裏切るであろうということ、すなわち、にせものの改良でお茶をにごし、地主と農民の決定的闘争のさいには地主の味方をするであろうということは、疑いない。プロレタリアートだけが、この闘争で、最後まで農民を支持することができる。最後に、わがロシアでも、農民闘争の成功、すなわちいっさいの土地の農民への引渡しは、最後まで遂行された革命の社会的支柱であって、完全な民主主義的変革を意味するであろうが、けっして社会主義的変革ではなく、また小ブルジョアジーのイデオローグである社会革命派の言う「社会化」でもないことは、疑いない。農民蜂起の成功、民主主義革命の勝利は、民主的共和制を基礎としてたたかわれる社会主義のための、

真の、断固たる闘争への道をひらくにすぎないであろう。この闘争では、土地所有階級としての農民は、今日民主主義のための闘争でブルジョアジーが演じているのと同一の裏切り的、動揺的な役割を演じるだろう。このことを忘れるのは、社会主義を忘れることであり、プロレタリアートの真の利益と任務とについて自他をあざむくことである。

一八四八年におけるマルクスの見解の説明に遺漏のないように、当時のドイツの社会民主党（または当時の用語でいえば、プロレタリアートの共産党）と現在のロシア社会民主党との本質的な一相違点を指摘しておく必要がある。メーリングの言うところを聞こう。

『新ライン新聞』は、『民主主義の機関紙』として政治の舞台に登場した。そして、同紙の諸論文をつらぬく基調はどんなに見あやまりようのないものであったにせよ、さしあたってそれは、ブルジョアジーにたいしてプロレタリアートの利益を代表していたというよりは、むしろ絶対主義と封建制度にたいしてブルジョア革命の利益を代表していたのである。この革命期の労働運動をとくに論じたものは、同紙の紙面にはあまり見あたらない。もっとも、この場合に見おとしてならない[8]ことは、同紙とならんでケルン労働者協会の独立の機関紙が、モルとシャッパーの主宰で週二回発行されていたことである。それにしても、今日の読者に意外に感じられるのは、労働運動のきわめて有能な人材であったシュテファン・ボルンが、かつてパリとブリュッセルでマルクスとエンゲルスに教えを受けたことがあり、一八四八年にベルリンから彼らの新聞に通信を送っていたのに、『新ライン新聞』が、当時のドイツの労働運動にいかにもわずかな関心しか示さなかったことである。ボルンはその回想録のなかで、彼が労働者のあいだでおこなっていた扇動についてマルクスとエンゲルスは一言も不同意をとなえたことはなかったと、述べている。それにもかかわらず、後年のエンゲルスの言明によってみれば、すくなくともこの扇動のやり方に彼ら両人は不満であったらしく思われる。この不満は、ボルンが、ドイツの大部分ではまだまったく遅れていたプロレタリアートの階級意識に多くの譲歩――『共産党宣言』に照らしてみれば、弁護の余地のないような譲歩――をおこなわざるをえなかったかぎりでは正当であったし、また、それにもかかわらずボルンが彼の指導する扇動をどうにか比較的相当高い水準に保つことができたかぎりでは、不当であった。……マルクスとエンゲルスが、さしあたっては、ブルジョア革命をできるかぎり押しすすめることが労働者階級の最も大きな利益であると考えたことも、たしかに歴史的、政治的には正当で

あった。……だが、それにもかかわらず、彼らが一八四九年四月に独自の労働者組織をもつことに賛成し、そしてとくに東エルベ」（東プロイセン）「のプロレタリアートが準備した労働者大会に代表を送ることに決めたのは、労働運動の自然にそなわった本能が、最も天才的な思想家たちの考えをも訂正することができるという事実の、顕著な証明である」(二)〔『マルクス遺稿集』第三巻、八一―八二ページ〕。

つまり、マルクスとエンゲルスは、革命的新聞をほとんど一年近くも発行してから（『新ライン新聞』は一八四八年五月一日に発行されだした）、一八四九年四月になってはじめて独立の労働者組織をもつことに賛成したのである！　それまで彼らは、独自の労働者党とはどんな組織上のきずなによっても結ばれていない「民主主義の機関紙」を発行していたのにすぎないのだ！　この事実――現代のわれわれの立場からすれば、奇怪な、信じられないような事実――は、当時のドイツ社会民主労働党と今日のロシアのそれとのあいだにどれほど大きな相違があったかを、われわれに明瞭に示している。この事実は、ドイツの民主主義革命では、（一八四八年にはドイツが経済的にも政治的にも――国家的細分状態――おくれていたために）運動のプロレタリア的特徴、運動内のプロレタリア的な流れが、今日にくらべていかにわずかしか現われていなかったかを、われわれに示している。プロレタリアートの党を独自に組織する必要について、マルクスがこの時期や、これよりややのちの時期に繰りかえしておこなった言明を評価するにあたっては、このことを忘れてはならない（たとえばプレハーノフは、このことを忘れているが(1)）。マルクスは、もっぱら民主主義革命の経験から、その後一年近くたってから、実践的にこの結論を引きだしたのであった。それほど、当時のドイツの全雰囲気は、素町人的・小ブルジョア的だったのである。われわれにとってこの結論は、国際社会民主主義の半世紀の経験から引きだされた、すでに年ひさしい、ゆるぎのない獲得物であって、この獲得物にもとづいてわれわれは、ロシア社会民主労働党を組織しは
じめたのである。われわれの場合には、たとえばプロレタリアートの革命的新聞が、プロレタリアートの社会民主党の外にあったり、たとえ一瞬間でもたんなる「民主主義の機関紙」として現われるなどということは、とうてい問題にならない。

(1) この……の中の文章は、出版のさいには省略されていた。

しかし、マルクスとシュテファン・ボルンとのあいだにようやく現われはじめたあの対立は、われわれの場合には、わが国の民主主義的奔流内のプロレタリア的な流れが強力

に現われていればいるだけ、それだけ発達した形で存在している。メーリングが、マルクスとエンゲルスはシュテファン・ボルンの扇動に不満だったらしい、と言っているのは、あまりにも穏やかな、あやふやな言い方である。次にかかげるのは、エンゲルスが一八八五年に、ボルンについて書いたことばである（『ケルン共産党裁判の真相』〔第三版〕、チューリヒ、一八八五年、の序文のなかで）。

「共産主義者同盟」(三)の同盟員は、いたるところで最左翼の民主主義運動の先頭に立ち、こうして同盟が革命的活動のすぐれた学校であったことを証明した。「ベルリンでは、かつてブリュッセルとパリで活動的な同盟員として働いた植字工のシュテファン・ボルンが、『労働者親睦会』（《Arbeiterverbriderung》）なるものをつくった。これはかなりひろがって、一八五〇年までもつづいた。ボルンは、きわめて有能な青年であったが、政治的名士になろうとすこしあせりすぎ、人数をかき集めることだけのために、種種さまざまながらくた（Kreti und Plethi）と『親睦』を結んだ。彼は、あい争う諸傾向に統一をあたえ、混沌のなかに光をもたらすことのできる人物ではけっしてなかった。だから、この会の公式の出版物のなかにも、『共産党宣言』中に主張されている見解が、ツンフト〔同業組合、ギルド〕の名ごりやツンフト的願望、ルイ・ブランやプルードンの思想の落ちこぼれ、保護関税主義などとごっちゃに入りみだれていた。要するに、この連中は、みなに好かれ（allen alles sein）たかったのだ。とくに彼らはストライキをおこし、労働組合や生産協同組合をつくったが、なによりも肝心なのは、政治的な勝利によって、そういうことを継続的に遂行するためになくてはならない活動分野をまず獲得することだということは、忘れていた（傍点は引用者）。その後反動派が勝利したため、親睦会の指導者たちが直接に革命闘争に参加する必要を感じたとき、彼らは、自分のまわりによせ集めた混乱した大衆から見殺しにされたことは、いうまでもない。ボルンは一八四九年五月のドレスデン蜂起に参加したが、運よくものがれた。しかし、この『労働者親睦会』は、プロレタリアートの偉大な政治運動にたいしてまったくの分離同盟であったことを暴露した。それは、大部分は紙上の存在にすぎず、またごく副次的な役割しか演じなかったので、反動派はやっと一八五〇年に、またその後も残存した会の分枝については、それから数年たってやっと、弾圧する必要を感じたほどであった。ボルンは、本名をブッターミルヒ*というが、彼は、政治家の名士にはならないで、一介のスイスの教授となり、もうマルクスをツンフトのことばに翻訳するのではなく、穏健なルナンを彼独特のあまったるいドイツ語に翻訳している。(三)」

* エンゲルスを翻訳するにあたって私は、初版では、ブッターミルヒという語を固有名詞ではなくて普通名詞〔脱脂乳という意味になる〕だと考えて、この箇所で誤りをおかした。いうまでもなくこの誤りは、メンシェヴィキをなみなみならず喜ばせた。コリツォフは、私が「エンゲルスをふかめた」と書いたし（論文集『二年間』に再録されている）、プレハーノフはいまでも、『タヴァーリシチ』紙のなかでこの誤りをあげている。[九三]――一言でいえば、一八四八年のドイツの労働運動における二つの潮流、すなわち、ボルンの潮流（わが国の「経済主義者」に近い）とマルクス主義的潮流の問題をもみ消すすてきな口実が見つかったわけである。たとえそれがボルンの名字の問題にすぎなかろうと、論敵の誤りを利用するのは当然しごくのことである。しかし、翻訳を訂正するという手段で二つの戦術の問題の核心をもみ消すのは、論争の本質を回避することである。〔一九〇七年版への原注〕

このようにエンゲルスは、民主主義革命における社会民主党の二つの戦術を評価したのである！　わが新イスクラ派もまた、「正気にかえった」といって君主主義的ブルジョアジーからおほめにあずかるほどの法外な熱心さで「経済主義」をめざしてすすんでいる。彼らもまた、「経済主義者」にお世辞をつかったり、デマゴーグ的に「自主活動」、「民主主義」、「自治」その他、等々のスローガンで、おくれた大衆を引きつけたりして、自分らのまわりに種々さまざまな公衆をかき集めている。彼らの労働者団体もまた、フレスタコーフぶり[九四]の新『イスクラ』の紙面にしばしば存在するだけである。彼らのスローガンと決議も、「プロレタリアートの偉大な政治運動」の任務にたいする同じ無理解を暴露しているのである。

一九〇五年六―七月に執筆

全集、第五版、第一一巻、一―一三一ページ所収

邦訳全集、第九巻、三―一三六ページ所収

ブルィギン国会のボイコットと蜂起

ロシアにおける現在の政治情勢は、次のとおりである。近くブルィギン国会(三六)が召集される可能性がある。これはすなわち、無遠慮に制限された、身分別の間接選挙権にもとづいて、専制政府の下僕どもの監督と協力のもとに選出された、地主と大ブルジョアジーの代表者の諮問議会で、人民代議制という思想をまっこうから嘲笑するものである。この国会にたいしてどのような態度をとるべきか？　自由主義的民主主義派は、この問題にたいして二つの答をあたえている。「職業別政治団体連盟」(三七)に、すなわち主としてブルジョア・インテリゲンツィアに代表されるその左翼は、この国会をボイコットすることに賛成している。つまり、選挙に参加しないで、普通選挙権にもとづく民主主義的憲法のための扇動を強化するためにこの機会を利用することに賛成している。ゼムストヴォ(三八)議員と市議会議員の七月大会に、あるいはもっと正確にいえば、この大会のある一部に代表されるその右翼は、ボイコットに反対しており、選挙に参加して国会に自分たちの候補者をできるだけ多数当選させることに賛成している。もっとも、大会は、この問題についてはまだなんの決定もおこなっておらず、ブルィギン「憲法」が公布されてから電報で招集されるはずの次の大会まで、問題を延期した。だが、自由主義的民主主義派の右翼の意見は、すでに十分きまっている。

革命的民主主義派、すなわち、主としてプロレタリアートとその自覚した代表者である社会民主党とは、無条件に、全体として、蜂起に賛成している。戦術のこの相違は、自由主義的＝民主主義的ブルジョアジーの機関紙『オスヴォボジデーニエ』(三九)もただしく把握していて、同紙の最近号（第七四号）では、一方では、「武装蜂起の公然たる宣伝」を「無謀で犯罪的な」ものとして断固として非難しており、他方では、ボイコットという考えを「実践的に実りのない」ものとして批判し、立憲「民主」（君主と読め）党(四〇)のゼムストヴォ議員団ばかりでなく、「団体連盟」も「国家試験に合格するであろう」、すなわち、ボイコットという考えを放棄するであろう、という確信を表明している。

そこで問題となるのは、自覚したプロレタリアートの党

は、ボイコットという考えにたいして、どんな態度をとらなければならないのか、そしてどういう戦術的スローガンを人民大衆のまえで前面におしださなければならないのか、ということである。この問題にこたえるためには、なによりもまず、ブルィギン「憲法」の本質と根本的意義がどういうものかを、思いおこしてみなければならない。それは、ツァーリズムと、地主および大ブルジョアとの取引ということである。専制にとってまったく無害な、たわいもない、えせ憲法の施し物によって、地主および大ブルジョアを革命から、すなわち闘争している人民から、しだいに切りはなし、専制と和解させようというのである。わが立憲「民主」党全体が君主制と上院を保持すること（すなわち、あらかじめ国の国家機構のうちに、「数万人の上層の」金持連中の政治的特権と政治的支配を確保しておくこと）を熱望しているのであるから、このような取引が可能なことは、疑う余地がない。それればかりでなく、すくなくともブルジョアジーの一部とのそうした取引は、なんらかの形で、おそかれはやかれ避けられない。なぜなら、それは、資本主義制度内でのブルジョアジーの階級的地位そのものの命ずるところだからである。問題は、この取引が、いつ、どのようにして成立するかということであり、プロレタリアートの党の全任務は、それがとりむすばれる時機をできるだけおくらせ、ブルジョアジーをできるだけ分裂させ、人民にたいするブルジョアジーの一時的な呼びかけから革命のために最大の利益を引きだし、このあいだに、専制の強力的転覆と、裏切的ブルジョアジーの排除、中立化とのために、革命的人民（プロレタリアートと農民）の勢力を準備することである。

実際、われわれがすでに一度ならず指摘してきたように、ブルジョアジーの政治的立場の本質は、ツァーリと人民のあいだに立って、正直なブローカーの役割を演じ、闘争している人民には内証で権力にしのびよろうと望んでいることにある。そこで、ブルジョアジーは、きょうはツァーリに呼びかけるかとおもえば、明日は人民に呼びかけ、前者にたいしては政治的商売についての「まじめな、実務的な」提案をもちかけ、後者には自由についての空文句をもちかけている（七月大会におけるイ・ペトルンケヴィチ氏の演説）。ブルジョアジーが人民に呼びかけるのは、われわれにとって有利である。なぜなら、こういう呼びかけによって、彼らは、社会民主党の扇動をおよぼそうとしても、いまのところむなしいユートピアでしかないほどおくれた、またそれほど広範な大衆を政治的にめざめさせ、政治的に啓発する材料をあたえてくれるからである。ブルジョアジーに、最もおくれた人々をゆすぶりおこさせるがよい。あ

ちこちで土壌を掘りおこさせるがよい。われわれは、この土壌に社会民主主義の種子を倦まずたゆまずまいていこう。西欧ではどこでも、ブルジョアジーは、専制にたいする闘争のためによぎなく人民の政治的自覚を呼びさましたが、それと同時に、労働者階級のなかにブルジョア的理論の種子をまこうと努力した。われわれのなすべき仕事は、専制にたいするブルジョアジーの破壊活動を利用して、労働者階級の社会主義的任務について、また彼らの利益とブルジョアジーの利益とが和解しえないように敵対していることについて、たゆみなく労働者階級を啓発することである。

以上のことから明らかなように、現在ではわれわれの戦術は、第一に、ボイコットという考えを支持することでなければならない。このボイコットという問題そのものは、ブルジョア民主主義の範囲内の問題である。労働者階級は、直接それに利害関係をもっていないが、しかしブルジョア民主主義派のうちでより革命的な部分を支持することは無条件に彼らの利益であり、政治的扇動を拡大し、それを激化させることは彼らの利益である。国会のボイコットは、人民にたいするブルジョアジーの呼びかけが強められ、彼らの扇動が発展して、われわれの扇動のきっかけの数がふえ、政治的危機、つまり革命運動の源泉がふかまることである。自由主義的ブルジョアジーが国会に参加することは、現在における彼らの扇動が弱められることであり、彼らが人民によりも、ツァーリにより多く呼びかけることであり、ツァーリとブルジョアジーのあいだの反革命的取引が近づくことである。

たとえブルィギン国会が「失敗させられ」ない場合でも、それ自身将来かならず政治的紛争を生みだすことは、争う余地がなく、プロレタリアートは、かならずこの紛争を利用しなければならないであろう。だが、これは将来の問題である。このブルジョア的＝官僚的国会を扇動と闘争のために利用「しないとちかう」ことは、おかしなことであろう。しかし、いま問題はそこにあるのではない。いまは、ブルジョア民主主義派自身の左翼が、ボイコットによって国会とまっこうから直接に闘争する問題を提起しているのであって、そこでわれわれは、このより断固たる攻撃をたすけるために、全力をそそがなければならないのである。われわれは、ブルジョア民主主義者、オスヴォボジデーニエ派の言質をとらなければならない。つまり、人民にむかって呼びかけよという彼らの「ペトルンケヴィチふうの」空文句をできるだけ広範にひろめなければならない。そして、国会をボイコットするか、すなわちそれに抗議して人民に呼びかけるか、それとも、国会を受けいれるか、すなわち、抗議するのを断念して、もういちどツァーリのとこ

ろにいき、人民代議制にたいする嘲笑でしかないものを受けいれるか、そのどちらにするかという問題こそ、これらの文句を実地にためす最初の、しかもきわめてささやかな機会であることを示して、人民のまえで彼らを暴露しなければならない。

さらに、第二には、われわれは、ボイコットを、たんに消極的に選挙から遠ざかっているということにとどまらないで、扇動を拡大しふかめるという意味で、現実の利益をもたらすものとならせるため、全力をつくさなければならない。この考えは、もしわれわれの思いちがいでないとすれば、ロシアで活動している同志のあいだでもうかなり広範にひろまっており、彼らは積極的なボイコットということばで、自分たちの考えを言いあらわしている。消極的に遠ざかっていることとは反対に、積極的なボイコットは、扇動を一〇倍にすること、いたるところに集会を組織すること、選挙集会に力ずくではいりこむという方法によってでもこれを利用すること、デモンストレーション、政治的ストライキその他、等々を組織することを意味するものでなければならない。革命的ブルジョア民主主義のあれこれのグループと一時的協定を結ぶことは、一般にわが党の一連の決議によって許されていることであるが、それはこの問題についての扇動と闘争のためには、とくに適切なことは、いうまでもない。その場合、われわれは、一方では、われわれのブルジョア的同盟者にたいする社会民主主義者としての批判をかたときもやめないで、プロレタリアートの党の階級的独自性をたゆみなく保持しなければならない。他方では、もしわれわれが、民主主義革命のこの時機に、扇動にさいして先進的な革命的スローガンをかかげることができないとしたら、われわれは先進的階級の党としての自己の義務を果たさないことになるであろう。

ここから、われわれの第三の、直接当面の政治的任務が出てくる。われわれがすでに述べたように、「積極的なボイコット」とは、いっそう大規模にエネルギーを倍加し、圧力を三倍にして扇動をおこない、革命勢力を徴募し組織することである。だが、このような活動は、はっきりした、正確な、率直なスローガンなしには、不可能である。このようなスローガンとなりうるものは、武装蜂起のスローガンだけである。乱暴に偽造された「人民」代議機関を政府が召集することは、真の人民代議機関のための扇動をおこなうためのすばらしいきっかけ、この真の代議機関を現在召集しうるのは（ツァーリが人民をこれだけあざむき、これだけ彼らを嘲弄してきたからには）臨時革命政府だけであり、そしてこの政府を樹立するには武装蜂起の勝利とツァーリ権力の実際の転覆が必要だということを、最も広範

な大衆に説明するためのすばらしいきっかけをあたえる。蜂起を広範に扇動するためにこれ以上の好機は考えられないが、このような扇動のためには、また臨時革命政府の綱領について完全に明瞭な理解をもつことも必要である。そういう綱領となるべきものは、われわれがすでに以前に示した（『プロレタリー』第七号、『革命軍と革命政府』〔全集、第八巻、五七五ページ〕）六条項である。すなわち、（一）全人民的憲法制定議会の召集。（二）人民の武装。（三）政治的自由――これに矛盾するいっさいの法律の即時廃止。（四）抑圧され、完全な権利をもっていないすべての民族にたいする完全な文化的および政治的自由。ロシアの人民は、他の諸民族の自由のためにたたかわないでは、自分のための自由をたたかいとることはできない。（五）八時間労働日。（六）地主の土地の没収にいたるまでの土地改革をふくむいっさいの民主的改革を支持し実行するための、農民委員会の設置。

そこで、ボイコットの考えを最も精力的に支持すること、それを拒否するブルジョア民主主義派の右翼の裏切行為を暴露すること、このボイコットを積極的なボイコットに、すなわち、最も広範な扇動の展開に変えること、武装蜂起を宣伝すること、専制の転覆と臨時革命政府樹立のための武装隊および革命軍部隊を即時組織するよう呼びかけること、この臨時革命政府の基本的な、無条件に義務的な綱領をひろめ、説明すること。この綱領は、今後オデッサ事件〔戦艦「ポチョームキン」号の反乱〕(三)のような事件が繰りかえされるさいにはいつでも、蜂起の旗印となり、手本とならなければならない。

以上が、自覚したプロレタリアートの党の戦術でなければならない。この戦術を完全に明らかにし、その統一を達成するために、われわれはなお『イスクラ』の戦術について述べておかなければならない。この戦術は、同紙第一〇六号『防御か攻撃か』という論文のなかで述べられている。実行にうつろうとすればたちまちひとりでに消えてしまうような、小さな、部分的な意見の相違にはたちいらないことにして、根本的な意見の相違点を指摘しよう。『イスクラ』は、正当にも消極的なボイコットを非難し、「蜂起のありうべき序曲」として即時「革命的自治を組織する」という考えを、それに対置している。『イスクラ』の意見によると、われわれは、「労働者の扇動委員会を設立して、選挙の扇動をおこなう権利を獲得」しなければならない。これらの委員会は、「内閣案によって設けられる『合法的な』枠のそとでの人民による人民の革命的全権代表の選挙を組織することを、その目的としなければならない」。われわれは、「全国を革命的自治機関でおおわ」なければな

らない、というのである。

このようなスローガンはなんの役にも立たない。それは、一般に政治的任務の見地からすれば混乱であり、当面の政治情勢の見地からすれば、オスヴォボジデーニエ主義の水車に水をそそぐものである。革命的自治を組織し、人民による人民の全権代表の選挙を組織することは、蜂起の序曲ではなくて、終曲である。この組織化を、現在、蜂起のまえに、蜂起をぬきにして実現しようという目的をたてることは、ばかげた目的をたて、革命的プロレタリアートの意識に混乱をもちこむことを意味する。まずはじめに蜂起に勝利し（たとえ一つの都市においてであろうと）、臨時革命政府を樹立し、こうしてこの後者が蜂起の機関として、革命的人民の自他ともに認める指導者として、革命的自治の組織化に着手できるようにしなければならない。蜂起のスローガンを、革命的自治を組織せよというスローガンでおおいかくすのは、またそれでおしのけるのでさえも、ハエをつかまえてから、ハエ取粉をふりかけよ、という忠告のようなものである。もし、あの有名なオデッサ事件のときに、オデッサの同志たちにむかって、蜂起の序曲として、革命軍を組織するのでなく、オデッサの人民による彼らの全権代表の選挙を組織するように忠告したとすれば、オデッサの同志たちは、もちろん、このような提案を一笑に付したであろう。『イスクラ』は、「諸権利のための闘争」を専制との闘争の序曲と見ようとした経済主義者の誤りを繰りかえしているのだ。『イスクラ』は、蜂起のスローガンを「より高度な型のデモンストレーション」の理論でおおいかくした、あの不運な「ゼムストヴォ・カンパニア計画」〔全集、第七巻、五三三―五五六ページ参照〕の災厄に逆もどりしているのだ。

だが、ここは、『イスクラ』のこの戦術上の誤りの源泉をくわしく述べるのにふさわしい場所ではない。これに興味をもつ人々には、エヌ・レーニンの小冊子『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』〔本書三一―一四一ページ〕の参照を願うことにする。ここでは、新イスクラ派のスローガンが、どのようにオスヴォボジデーニエ派のスローガンになりかわるかを示すことのほうが重要である。実際、蜂起が勝利しないうちに人民による人民の全権代表の選挙を組織しようとする試みは、まったくオスヴォボジデーニエ派を利するであろうし、社会民主主義者がオスヴォボジデーニエ派のうしろについてすすむという、ぶざまなことになるであろう。専制は、それが臨時革命政府にとって代わられないかぎり、労働者と人民に、いくらかでも人民選挙という名に値いする選挙をぜんぜんおこなわせないであろう（また専制のもとでの「人民」選挙という

喜劇には、社会民主主義者は応じないであろう)。ところが、オスヴォボジデーニエ派、ゼムストヴォ議員、市議会議員たちは選挙をおこない、ずうずうしくもそれを「人民選挙」であるとか、「革命的自治」であるとか、言いふらすであろう。現在のところ、自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの全立場は、蜂起を避けようと試み、人民がツァーリズムにたいして勝利してもいないのに、ゼムストヴォの選挙を人民選挙であると専制に認めさせ、真の革命が起こってもいないのにゼムストヴォと都市の自治を、「革命的」(ペトルンケヴィチ流の意味での)「自治」に仕立てあげようと試みるところにある。『オスヴォボジデーニエ』第七四号には、この立場がじつによくでている。臆病なブルジョアジーのこのイデオローグ(思想的代弁者)ほどいまわしいものは、容易に考えつかない。彼は、蜂起の宣伝が軍隊をも人民をも「退廃させる」と主張しているのだ！しかもこういうことが、ロシアの一般住民や兵士が自分自身を最後的な退廃から救いだし、市民であるという自分自身の権利を証明するには蜂起によるほかないことが、めくらにでもわかっているときに言われているのだ！ブルジョアジーのマニーロフ(22)は、次のような牧歌的な桃源境をえがきだしている。すなわち、たんに「世論」の圧力を受けただけで、「政府は、やむなく次から次へと新しい譲歩をおこない、ついにはそれ以上どうにもしようがなくなって、社会が要求しているような、普通・平等・直接・秘密投票にもとづいて選出される憲法制定議会」……(！上院をもった？)「に権力を引き渡さないわけにはいかなくなるであろう」というのである。「現在の政府から、新しい原則に立って国民および政府権力を組織する全人民的憲法制定議会へ、権力がこのように平和的に(!!)移行するということは、けっしてありえないことではない」と。そして、こびへつらうブルジョアジーのこの天才的な哲学は、なお次のような忠告によって補足されている。すなわち、軍隊、とくに将校を味方に引きつけ、「届出制」による民兵を設立し、「将来の臨時政府の要素」として、地方自治機関(地主および資本家の、と読め)を組織せよ、というのである。

この混乱のなかには、一つの意味がふくまれている。ブルジョアジーが望んでいるのは、権力が「平和的に」、人民の蜂起なしに、自分の手にうつることにほかならない。こういう蜂起は、おそらく、勝利して、共和制と真の自由とをたたかいとり、プロレタリアートを武装させ、幾百千万の農民を立ちあがらせることになりかねないからである。蜂起のスローガンをおおいかくし、それを自分でも断念し、またひとにも断念させ、「序曲」として自治(トルベツコ

ーイ、ペトルンケヴィチ、フョードロフの一派だけにしか門戸がひらかれていない）を即時組織するように忠告することー―これこそ、ブルジョアジーが革命を裏切るために、「庶民」に対抗してツァーリと取引する（君主制と上院を認めるということで）ために必要とするものなのである。だから、自由主義的マニーロフかたぎは、金持の最も内密の考えとその最も深い利益とを表現するものである。

『イスクラ』の社会民主主義的マニーロフかたぎは、一部の社会民主主義者の短見と、プロレタリアートの唯一の革命的戦術からの彼らの逸脱とを、表現しているにすぎない。その革命的戦術というのは、あたかもツァーリズムの平和的な譲歩がありうるかのような、専制を転覆しなくても自治が実現されうるかのような、蜂起の序曲として、人民による人民の全権代表の選挙が可能であるかのようなブルジョア的日和見主義的幻想を、仮借なく暴露することである。いや、われわれは、現在の事態のもとでは蜂起が必要であることをはっきりと、きっぱりと示し、蜂起を率直に呼びかけ（もちろん、あらかじめその時機を決定することなしに）、革命軍の即時編成を呼びかけなければならない。このような軍隊を最も大胆に、広範に組織することだけが、蜂起の序曲となりうるのである。革命の勝利を実際に保障しうるものは蜂起だけである。その場合、もちろん、時機尚早な蜂起の企てをやらないよう、地方の事情に通じているものがつねにいましめるであろう。ほんとうに人民的な、ほんとうの自治をほんとうに組織することは、勝利した蜂起の終曲としてしかありえないのである。

『プロレタリー』第一二号、一九〇五年八月一六（三）日
全集、第五版、第一一巻、一六六―一七四ページ所収
邦訳全集、第九巻、一五六―一六四ページ所収

農民運動にたいする社会民主党の態度

ロシアがいま際会している民主主義革命のなかで農民運動がもっている巨大な意義については、社会民主党のすべての出版物が、もういくたびとなく説明してきた。周知のとおり、ロシア社会民主労働党第三回大会は、ほかならぬ今日の農民運動にかんする自覚したプロレタリアートの党全体の活動を、もっと正確に規定し統一するために、この問題について特別の決議を採択した。この決議はまえもって準備されていたものであり（最初の草案は本年三月一〇（一三）日の『フペリョード』[三]第一一号に掲載された）[九六]、そして党大会が、ロシア社会民主党全体のすでに確立された見解を定式化することにつとめて、入念に作成したものであったにもかかわらず、この決議は、ロシア国内で活動している多くの同志のあいだに疑惑を呼びおこした。サラトフ委員会は満場一致で、この決議を受けいれえないものと認めた（『プロレタリー』第一〇号を見よ）[九七]。われわれはそのときこの評決についての説明を聞きたいという希望を述べておいたが、その希望は、残念ながら、いまのところまだかなえられていない。われわれが知っていることはただ、サラトフ委員会が、新イスクラ派の協議会の農業問題決議をも、やはり受けいれえないと認めたことだけである。――したがって、サラトフ委員会を満足させなかったのは、二つの決議に共通する点であって、二つの決議でたがいに違っている点なのではない。

この問題についての新しい材料は、モスクワの一同志がわれわれに送ってきた手紙（こんにゃく版のリーフレットとして出版された）である。次に、この手紙の全文をかかげよう。

中央委員会および農村で活動している同志諸君への公開状

同志諸君！　モスクワ委員会の周辺地域組織は、農民のあいだでの活動に真剣に着手した。この種の活動を組織する点で経験に不足していること、わが国中央部の農村には特殊な事情があること、さらにまた、この問題についての第三回党大会の決議の指令が十分に明瞭でない

こと、さらに、定期刊行物にせよ一般の出版物にせよ、農民のあいだでの活動にかんする文献がほとんどまったくないこと、これらの事情のため、われわれは中央委員会にたいして、原則的であるとともに実践的なくわしい指令をわれわれにあたえてくれるように、お願いしなければならないし、また同じ仕事にあたっている同志諸君にたいしては、諸君が経験からえた実践的資料をわれわれに知らしてくれるようにお願いする。

われわれは、第三回党大会の『農民運動にたいする態度について』の決議を読んださいに起こった疑惑と、われわれがすでに農村で適用しはじめている組織計画とについて、意見をかわすことが必要だと考える。

「(イ)社会民主党は、農民の状態を改善しうるものであれば、地主所有地、官有地、教会領地、修道院領地および帝室領地の没収までもふくめて、農民のあらゆる革命的措置を最も精力的に支持することを自分の任務としていることを、人民の広範な層のあいだに宣伝すること」(ロシア社会民主労働党第三回大会の決議から)。

この一節ではなによりもまず、党組織がこの宣伝をどのようにしてやるのか、またやらなければならないのか、ということが不明瞭である。宣伝をするには、まず第一に、宣伝しようとおもう相手の人々にごく密接した組織が必要である。そういう組織は、農村プロレタリアートからなる委員会なのか、それとも、口頭や文書による宣伝のために他の組織手段も可能なのか、——この問題は未解決のままである。

同じことは、精力的に支持するという約束についてもいえる。支持する、しかも精力的に支持するということは、これまた現地に組織があってはじめて可能である。「精力的に支持する」という問題は、われわれには一般的にきわめて混乱しているように思われる。社会民主党は、機械を使用したり高級作物を栽培したりなどしてきわめて集約的に耕作されている地主所有地の収奪を、支持することができるだろうか？　このような土地を小ブルジョア的所有者の手に移すことは、よし彼らの状態を改善することがどんなに重要なことだとしても、その経営の資本主義的発展という点では、一歩後退である。だから、われわれの考えでは、われわれが社会民主主義者である以上、「支持」にかんするこの項に、次のような保留条件をつけるべきであろう。「もしこれらの土地を収奪して農民的(小ブルジョア的)所有に移すことが、その土地でその経営を発展させるより高度の形態であるなら」と。

それから、つぎに、

「(ニ) 農村プロレタリアートを独自に組織し、社会民主党の旗のもとで彼らを都市プロレタリアートと融合させ、彼らの代表を農民委員会にいれるようにつとめること。」

疑問が起こるのは、この一節の最後の部分についてである。問題は、「農民同盟」(九〇)のようなブルジョア民主主義的組織や、社会革命党のような反動的=空想主義的組織が、農民中のブルジョア分子ばかりでなく、プロレタリア分子をも彼らの旗のもとに組織しているという点にある。農村プロレタリアートの諸組織にいるわれわれの代表をそのような「農民」委員会にはいらせるなら、われわれは自己矛盾におちいり、bloc〔ブロック〕についてのわれわれの見解に反することになるだろう。

ここでもまた、修正が、しかも非常に大きな修正が、必要だと思われる。

以上、第三回大会の決議についての一般的な意見をいくつか述べた。これらの意見をなるべく早く、なるべくくわしく検討してもらいたい。

わが周辺地域組織内の「農村」組織の計画についていえば、われわれは、第三回大会の決議が全然ふれていないような条件のもとで、活動しなければならない。まず第一に指摘しなければならないことは、われわれの活動する地域――モスクワ県および、隣接諸県のなかでモスクワ県に境を接する諸郡(九一)――は、主として工業に従事する地域であり、クスターリ営業の発展が比較的微弱で、住民中もっぱら農業に従事する部分はきわめてわずかである、ということである。一万―一万五千の労働者をつかっている巨大な製造工場が、人里はなれた村落や部落に散在する五百―一千人程度の小工場と、いりまじっている。このような条件のもとでは、社会民主党は、自分にとって非常に好適な地盤をここに見いだすように思われるだろうが、現実が示したところによると、このような大づかみな前提は批判に耐えないのである。いくつかの工場はできてから四〇―五〇年になるけれども、われわれの「プロレタリアート」の圧倒的多数は、いまにいたるまでまだ土地から分離していない。「農村」が実にしっかり彼らにつきまとっているので、「純粋の」プロレタリアートにあっては集団的労働の過程でつくりだされるような、そういう心理的前提その他のあらゆる前提は、われわれのプロレタリアートのうちには発展していない。われわれの「プロレタリア」の農業経営は、いわば混血的形態をなしている。工場の織物工が、自分の小地面を耕すために雇農をやとっている。この小地面では、彼の妻(もし彼女が工場に出ていなければ)や、子ども

や、年寄りや、病弱者などが働いているが、彼自身も、年をとったり、不具になったり、あるいは、乱暴だとか不穏なふるまいがあったとかいう理由で首になる場合には、ここで働くだろう。このような「プロレタリア」を、プロレタリアとよぶことはむずかしい。その経済状態からすれば、これは窮民である。そのイデオロギーからすれば、小ブルジョアである。彼らは無学であり、保守的である。彼らのなかから「黒百人組」的な分子がつのられるのである。しかし彼らのあいだにも、最近、自覚が呼びおこされはじめている。われわれは、「純粋の」プロレタリアートの手引きを介して、この無知な大衆を多年の眠りからめざめさせつつあり、そしてある程度の成功をおさめている。手掛りはふえ、方々で強くなっており、窮民はわれわれの影響下にはいり、工場でも農村でもわれわれのイデオロギーを受けいれつつある。そして「純」プロレタリア的でない環境に組織を植えつけてゆくことは、正統派的でなくはないと、われわれは考えている。われわれの地方にはこれ以外の環境はないし、もしわれわれが正統を固守して、農村「プロレタリアート」だけを組織するなら、われわれは、われわれの組織およびわれわれに隣接する地域の諸組織を解散させなければならないであろう。地主の放棄した耕地その他の用益地や、あるいは、僧衣僧帽をまとった神父たちがしかるべく経営できなかった土地を収奪したいという渇望にさからうのが困難であろうということは、われわれもよく知っている。「民主主義的＝君主主義的」分派（ルーザ郡にあるような）から「農民」同盟にいたるまでのブルジョア民主主義派が、「窮民」にたいする影響力をかちとるためにわれわれとたたかうであろうことを、われわれは知っている。だがわれわれは、ブルジョア民主主義派に反対して、窮民を武装させるであろう。われわれは、「窮民」からなるわれわれの社会民主主義的委員会を設立し強化するために、周辺地域内のあらゆる社会民主主義勢力を、インテリゲンツィア的勢力ばかりでなくプロレタリア的＝労働者的勢力をも、利用するであろう。そしてわれわれはそれを次のような計画にしたがって実行するであろう。すなわち、郡役所所在都市あるいは大きな工業中心地のおのおのに、周辺地域組織所属諸グループの郡委員会を設立する。郡委員会は、その地域内の工場のほかに、「農民」委員会を組織する。こういう委員会は、秘密保持の考慮から多人数であってはならず、その構成は最も革命的な気分をもった有能な窮乏農民によってきめられる。工場もあり農民もいるところでは、両者を一つの下級グループ委員会に組織することが必要である。

こういう委員会は、なによりもまず、次のような周囲の条件を明瞭かつ明確に究明しなければならない。(A)土地関係。(一)農民の分与地、借地、所有の形態(共同体的、個別的、等々)(二)周囲の土地、(イ)だれがもっているか、(ロ)広さはどれだけか、(ハ)農民はこれらの土地にたいしてどういう関係にあるか、(ニ)これらの土地はどういう条件で利用されているか、(1)雇役、(2)「切取地」[100]にたいする法外な小作料、等々、(ホ)クラークや地主その他にたいする負債。(B)公租、税金、農民所有地と地主所有地にたいする地租の高さ。(C)出稼ぎとクスターリ営業、旅券、冬期雇用の有無、その他。(D)その土地の工場、そこでの労働条件、(1)賃金、(2)労働時間、(3)経営者側の態度、(4)住宅事情、等々。(E)行政機関。農民司政長、[101]村・郷長、書記、郷判事、村巡査、僧侶。(F)ゼムストヴォ。[102]農民代表議員、ゼムストヴォ勤務者——教師、医師、図書館、学校、喫茶室。(G)郷議会。その構成と議事。(H)組織。「農民同盟」、社会革命派、社会民主主義者。

社会民主主義的農民委員会は、これらの資料を研究し、今後あれこれの変則的な事態から出てくるもろもろの決定を、集会でとおさなければならない。それと同時に、この委員会はまた大衆のあいだで社会民主主義の思想の宣伝と扇動を強化し、サークル、移動集会、大衆集会をひらき、ビラや文献をひろめ、党の資金をあつめ、郡グループをつうじて周辺地域組織と連絡をたもたなければならない。

もしわれわれがこのような委員会を数多く設立することができるなら、社会民主党の成功は保障されるであろう。

——周辺地域オルグ

いうまでもなく、われわれは、この同志が言っているようなくわしい実践的指令を作成する任務を引きうけはしない。これは現地の活動家の仕事であり、実践的指導にあたっているロシア国内の中央部の仕事である。われわれは、モスクワの一同志の内容ゆたかなこの手紙を利用して、第三回大会の決議および一般に党の緊要な諸任務を説明しようと思う。この手紙から明らかなように、第三回大会の諸決議が呼びおこした誤解のうち、理論上の疑問から生じたものは一部にすぎない。誤解のもう一つの源泉は、「革命的農民委員会」と、農民のなかで活動する「社会民主主義的委員会」との相互関係の問題という、以前には生じなかった新しい問題である。こういう問題が提起されたということ自体が、農民のあいだでの社会民主党の活動がいちじるしく前進したことを立証している。「農村」での扇動が

確立されはじめ、強固な恒常的な形態をとりはじめていて、その実践的必要から生まれた比較的細部にわたる問題が、すでに日程にのぼってきているのである。そして、この手紙の筆者は、大会の決議を不明瞭であると言って非難しているものの、彼が回答をもとめている問題は、もともと党大会が提起しなかったし、また提起できなかったような問題であるということを、その手紙で一度ならず忘れているのである。

たとえば、われわれの思想の宣伝も農民運動にたいする支持も、「ただ」現地に組織があるときにだけ可能だという筆者の意見は、かならずしも正しくない。もちろん、このような組織は望ましいものであり、活動が発展すれば、必要になってくるが、しかし上述の活動は、そのような組織のないところでさえも可能であり必要である。われわれは、都市プロレタリアートだけのあいだにいるときでも、われわれの活動の全体をつうじて農民問題を見うしなってはならず、第三回大会をつうじて自覚したプロレタリアートの党全体がおこなった声明――われわれは農民の蜂起を支持するという声明――を、ひろめなければならない。農民が、文献をつうじ、労働者をつうじ、また特別の組織、等々をつうじて、それを知るようにしなければならない。社会民主主義的プロレタリアートはこのように支持するにあたってどのような土地没収をも（すなわち、所有者にたいする補償なしの収奪をも）辞さないということを、農民が知るようにしなければならない。

手紙の筆者は、ここで一つの理論的な問題を提起している。すなわち、大領地を収奪して「農民の小ブルジョア的所有」に移すことを、特別な留保条件をつけて制限すべきではないか、ということである。だが、筆者がこの留保条件を提案しているのは、第三回大会の決議の意味を勝手に狭めたものである。決議では、社会民主党が、没収された土地をほかならぬ小ブルジョア的所有者の手に移すことを支持しなければならないなどとは、ただの一言も述べられていない。決議が述べているのは、「没収までもふくめて」、すなわち無償の収用までふくめて支持するということであって、取り上げたものをだれに引き渡すかという問題には、決議はまったく解答をあたえていないのである。この問題を未解決のままにしたのは、偶然ではない。新聞『フペリョード』[101]（第一一、一二、一五号）所載の諸論文からわかるように、この問題にあらかじめ解答をあたえることは賢明でないと認められたのである。そこで述べられているように、たとえば民主的共和制のもとで、社会民主党は土地国有化にかんして、それを絶対にやらないといって、自分の手をしばることはできない。

実際には、小ブルジョア的な社会革命派とは異なり、われわれにとっては、いま重点は、農民蜂起の革命的民主主義的な側面であり、農村プロレタリアートを階級政党に別個に組織することである。いま問題の核心は、「黒い割替」[80]または国有化の計画をつくることにあるのではなくて、旧制度を革命的に打ちくだくことを農民が自覚し実行することにある。だから、社会革命派は「社会化」等々を強調しているのに反し、われわれは革命的農民委員会を強調しているのである。これなしにはあらゆる改革は無意味である、とわれわれは言う。これがあってこそ、またこれに依拠してこそ、農民蜂起の勝利も可能なのである。

われわれは、土地の没収までもふくめて、農民蜂起をあらゆる手段で援助しなければならないが、――しかしけっして、あらゆる小ブルジョア的計画までもふくめて援助するのではない。われわれは、農民運動が革命的民主主義的であるかぎり、それを支持する。それが反動的で反プロレタリア的なものとなって現われるかぎりでは、われわれはそれとたたかう用意がある（いますぐ、ただちにたたかう用意がある）。マルクス主義の全核心はこの二重の任務にあるのであって、これを単一の単純な任務に簡単化あるいは平板化するのは、マルクス主義を理解しない人だけである。

具体的な例をあげよう。農民の蜂起が勝利したと仮定しよう。革命的農民委員会と臨時革命政府（一部はまさにこれらの農民委員会に依拠している）とは、大所有のどんな没収でもおこなうことができる。われわれは没収を支持する。このことはすでに声明したとおりである。しかしわれわれは、没収した土地をだれに引き渡すように勧告すべきか？　この点についてはわれわれは、手紙の筆者が不用意に提案しているような種類の声明で自分の手をしばったことはないし、また今後もけっしてしばらないであろう。手紙の筆者は次のことを忘れてしまったのである。すなわち、第三回大会のその同じ決議には、「農民運動の革命的民主主義的内容からあらゆる反動的な混ぜものを一掃すること」と述べてある。これが第一。そして第二に、「どういう場合にも、またどういう状況のもとでも、農村プロレタリアートを独自に組織すること」が必要である、と述べてある。これがわれわれの指令である。農民運動のなかには反動的な混ぜものはいつでも存在するであろうが、われわれはまえもってそれに宣戦を布告するのである。農村プロレタリアートと農民ブルジョアジーとの階級敵対は避けられないものであるが、われわれはまえもってそれを暴露し、解明し、それを基盤にして闘争する用意をするのである。没収した土地をだれに、どのようにして引き渡すかという

問題が、そういう闘争の一つのきっかけになることは、大いにありうる。そしてわれわれは、この問題をぼかしはしないし、平等な分配や「社会化」などを約束しはしない。われわれは次のように言う。われわれはその場合にはさらにたたかうだろう、ふたたびたたかうだろう、新しい活動舞台で、別の同盟者といっしょにたたかうだろう。また、その場合には、われわれは農民ブルジョアジーに反対して、無条件に農村プロレタリアートとともにすすみ、労働者階級全体とともにすすむであろう、と。実際には、これは、債務奴隷制的な、農奴制的な大土地所有が優勢で、大規模な社会主義的生産の物質的条件がまだないところでは、経営主である小農民の階級の手に土地を移すことを意味するものともなりうるし、民主主義革命が完全に勝利した場合には国有化を意味するものともなりうるし、また、大規模な資本主義的農場を労働者の協同組織に引き渡すことを意味するものともなりうる。なぜなら、われわれは、民主主義革命からただちに社会主義革命に移行しはじめる、しかもまさにわれわれの力におうじて、自覚した組織されたプロレタリアートの力におうじて、移行しはじめるだろうからである。われわれは連続革命を支持する。われわれは中途で立ちどまりはしないであろう。われわれがいますぐこの場でどのような「社会化」も約束しないのは、われわれがこの任務の現実の条件を知っていて、農民の内部に熟しつつある新しい階級闘争をぼかさずに、それを暴露するからである。

　われわれは、まず地主に反対して農民一般を、最後まで、あらゆる手段で、没収にいたるまで、支持する。ついで（ついで、というより、むしろそれと同時に）、われわれは、農民一般に反対してプロレタリアートを支持する。革命（民主主義的）の「翌日」における農民内部の勢力の組合せを、いま計算することは、空虚な空想である。冒険主義におちいることなく、われわれの科学的良心を裏切ることなく、安価な人気を追いもとめることなしに、われわれが言いうること、また実際に言うことは、ただ一つである。すなわち、われわれは、農民全体が民主主義革命をおこなうのを全力をあげて援助するが、これは、それだけ容易にわれわれプロレタリアートの党が、できるだけ早く新しい、より高度の任務――社会主義革命――に移ることができるようにするためである、と。われわれは、今日の農民蜂起の勝利からは、どのような調和も、どのような平等化も、どのような「社会化」も、約束しない。それどころか、われわれは、新しい闘争を、新しい不平等を、新しい革命――われわれはそれをめざしているのだ――を、「約束」する。われわれの学説は、社会革命派のむだ話ほど「甘く」

はないが、甘いものだけをなめさせてもらいたい人は、社会革命派のところへいくがよい。われわれはこのような人たちには、どこへでもおいでなさいと言おう。

われわれの見るところでは、このマルクス主義的見地によって委員会の問題も解決される。社会民主主義的農民委員会というようなものは、われわれの意見では、あるはずがない。社会民主主義的であるなら、農民的だけではないことになるし、農民的であるなら、純プロレタリア的でなく、社会民主主義的でないことになる。この二つのことを混同することは、多くの人がこのんでやることであるが、われわれはそういう人の仲間ではない。可能なところならどこにも、われわれはわれわれの委員会を、すなわち社会民主労働党の委員会を組織するようにつとめるであろう。これには、農民も、窮民も、インテリゲンツィアも、売笑婦も(さいきんある労働者が手紙で、なぜ売笑婦のあいだで扇動しないのか、とわれわれにたずねてきた)、兵士も、教師も、労働者も、一言でいえば、すべての社会民主主義者がはいるであろうが、社会民主主義者でないものはだれひとりはいらないであろう。これらの委員会は、社会民主主義的活動の全体をその全範囲にわたっておこないながらも、農村プロレタリアートを、特別に、独自に組織することに努力するであろう。なぜなら、社会民主党はプロレタリアートの階級政党だからである。旧時代のいろいろの遺物から完全にはきよめられていないプロレタリアートを組織することを「非正統的」なことと考えるのは、このうえもない思い違いであって、われわれは、手紙のこれにかんする箇所はたんなる誤解によるものと考えたい。都市の工業プロレタリアートは、不可避的にわが社会民主労働党の基本的中核となるであろうが、われわれはすべての勤労被搾取者、われわれの綱領も述べているように、例外なくすべての勤労被搾取者を――クスターリも、窮民も、乞食も、召使も、浮浪人も、売笑婦も――、党に引きよせ、啓発し、組織してゆかなければならない。ただし、いうまでもなく、彼らが社会民主党に同調するのであって、社会民主党が彼らに同調するのではなく、また彼らがプロレタリアートの立場に移るのであって、プロレタリアートが彼らの立場に移るのではないことが、欠くことのできない必須の条件である。

それなら、革命的農民委員会は、いったい、なにをするのか？　読者はこうたずねるであろう。つまり、それは必要でないことにはならないだろうか？　いや、必要である。われわれの理想は、農村のいたるところに純社会民主主義的な党の委員会があり、ついで、それらの委員会が、革命的農民委員会をつくるために農民のあらゆる革命的民主主

義的分子やグループやサークルと協定することである。これは、都市で社会民主労働党が独自性をたもちながら、蜂起のためにあらゆる革命的民主主義者と同盟するのに、まったく類似している。(一〇二) われわれは農民の蜂起を支持する。われわれは、異種の階級分子や異種の政党を混合し融合させることには、絶対に反対である。われわれは、蜂起のために社会民主党が革命的民主主義派全体をあと押しし、彼ら全体の組織化をたすけ、彼らと肩をならべながら、しかも彼らと融合することなしに、都市ではバリケードにむかって、農村では地主や官憲に対抗して、すすんでゆくことを、支持する。

専制に反対する都市と農村の蜂起、万歳！ 現在の革命における全革命的民主主義派の先進部隊としての革命的社会民主党、万歳！

一九〇五年九月一四日（一）日、新聞『プロレタリー』第一六号
全集、第五版、第一一巻、二一五―二二四ページ所収
邦訳全集、第九巻、二三五―二四六ページ所収

小ブルジョア社会主義とプロレタリア社会主義(一〇三)

ヨーロッパでは、種々の社会主義学説のあいだで、いまではマルクス主義が完全に支配するようになっていて、社会主義制度の実現のための闘争は、ほとんどまったく、社会民主主義政党の指導する労働者階級の闘争としておこなわれている。しかし、マルクス主義の学説に立脚するプロレタリア社会主義のこの完全な支配は、一挙に確立されたのではなく、あらゆるおくれた学説との、すなわち小ブルジョア社会主義や無政府主義等々との、長期にわたる闘争ののちに、はじめて確立されたのである。いまから三〇年ほどまえには、マルクス主義はドイツでさえまだ支配的ではなかった。そこでは、本来からいって、小ブルジョア社会主義とプロレタリア社会主義とのあいだの過渡的な、混合的な、折衷主義的な見解が支配していた。またフランス、

スペイン、ベルギーのラテン系の諸国では、プルードン主義、[19]ブランキ主義、[20]無政府主義が、先進的労働者のあいだに最も普及した学説であって、これらは、プロレタリアの見地ではなく小ブルジョアの見地をはっきりと表現しているのである。

いったいどういう理由から、ほかならぬここ数十年間に、マルクス主義はこのように急速に完全に勝利するにいたったのだろうか？　経済的ならびに政治的な点での近代社会の発展全体、被抑圧諸階級の革命運動と闘争との経験全体が、マルクス主義の見解の正しいことをますます確証してきたからである。小ブルジョアジーの没落は、おそかれはやかれ、あらゆる小ブルジョア的偏見の死滅を不可避的にともなったし、また資本主義の発達と資本主義社会の内部の階級闘争の激化とは、プロレタリア社会主義の思想のためのこのうえもない扇動として役だったからである。

ロシアはおくれているので、おのずから、わが国では種種のおくれた社会主義学説が非常に根づよく残っている。前世紀の最後の四半世紀のロシアの革命思想の歴史全体は、マルクス主義と小ブルジョア的なナロードニキ的[21]社会主義との闘争の歴史である。そして、ロシアの労働運動の急速な成長と驚くべき進歩とは、ロシアでもすでにマルクス主義に勝利をもたらしたが、他方では、疑いもなく革命的な農民運動の発展——とくに一九〇二年の小ロシアにおける有名な農民蜂起[22]以後の——は、老いぼれた、老衰したナロードニキ主義をある程度活気づけた。往時のナロードニキ主義を流行のヨーロッパ的日和見主義（修正主義、ベルンシュタイン主義、[23]マルクス批判[24]）で装いをあらたにしたものが、いわゆる社会革命派の独創的な思想的手持品の全部である。だから、農民問題は、マルクス主義者が純粋のナロードニキと論争する場合にも、社会革命派と論争する場合にも、中心の地位を占めている。

ナロードニキ主義は、ある程度まで、まとまりのある首尾一貫した学説であった。ロシアで資本主義が支配していることを否定し、全プロレタリアートの先進的な戦士としての工場労働者の役割を否定し、政治革命とブルジョア的な政治的自由との意義を否定し、農民共同体とその小規模農業とから一挙に社会主義的変革が生じることを説いていた。このまとまりのある学説のうち、いまではかけらしか残っていないが、しかし、現在の論争を意識的に究明するためには、またこの論争をののしりあいになりさがらせないためには、わが社会革命派の謬見の一般的、根本的なナロードニキ主義的基礎を、つねに念頭においていなければならない。

ロシアで未来をになう人間は百姓である——ナロードニ

キはこう考えた。そしてこの見解は、共同体を社会主義的なものと信じることから、資本主義の運命を信じないことから、不可避的に出てきたものであった。ロシアで未来をになう人間は労働者である——マルクス主義者はこう考える。そして、農業と工業とにおけるロシアの資本主義の発展は、彼らの見解をますます確証している。ロシアにおける労働運動は、いまではなんぴともそれを認めざるをえなくなっている。だが、農民運動にかんしては、ナロードニキ主義とマルクス主義とのあいだの深淵は、いまにいたるまで、この運動にたいする異なる理解として、そのまま現われている。ナロードニキにとっては、ほかならぬ農民運動こそ、マルクス主義を論破するものである。農民運動こそまさに直接の社会主義的変革のための運動であり、農民運動こそ、まさにブルジョア的な政治的自由をいっさい認めないものであり、農民運動こそ、まさに、大規模経営ではなく、小規模経営を出発点とするものである。要するに、ナロードニキにとっては、農民運動こそほんとうの、真に社会主義的な、直接に社会主義的な運動なのである。このような結論に達することが不可避なことは、ナロードニキが農民共同体を信じていることで、ナロードニキが無政府主義的であることで、十分に説明できる。

　マルクス主義者にとっては、農民運動はまさに社会主義運動ではなく民主主義運動なのである。それは、他の諸国でもそうであったように、ロシアでも、民主主義革命——その社会＝経済的内容からすればブルジョア革命たる——の必然的な随伴物である。それは、いささかも、ブルジョア制度の基礎にたいして、商品経済にたいして、資本にたいして、鋒先を向けてはいない。そうではなく、それは、農村における古い、農奴制的な、資本主義以前の関係にたいして、農奴制のあらゆる遺物の主要な支柱としての地主的土地所有にたいして、鋒先を向けている。だから、現在の農民運動の完全な勝利は、資本主義を除去するものではなくて、むしろ反対に、資本主義の発展のためにより広範な基盤をつくりだし、純粋に資本主義的な発展をはやめ、先鋭化するであろう。農民蜂起の完全な勝利は、民主主義的なブルジョア共和制の砦をつくりだすことしかできず、この共和制のもとで、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争がはじめてまったく純粋に展開されるのである。

　だから、ここには二つの対立した見解があるわけであって、社会革命派と社会民主主義者とのあいだの原則上の深淵を究明したいと思うものは、だれでもこれをはっきりと理解しなければならないのである。一方の見解によれば、農民運動は社会主義的な運動であり、他方の見解によれば、民主主義的＝ブルジョア的な運動である。正統マルクス主

義者がかつて農民問題を「無視していた」(知ろうとしなかった)ことがあるかのように、わが社会革命派が百回もくりかえして述べているのは(たとえば、『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』第七五号を参照)[103]、どんなに無知をさらけだしたものであるかは、右のことから明らかである。こういうまったくの無知にたいしてたたかうには、一つの方法しかありえない。それは、イロハを繰りかえすことであり、昔の首尾一貫したナロードニキ的見解を叙述することであり、また、ほんとうの相違点は、農民問題を考慮することを欲するとか欲しないとか、それを認めるとか無視するとかいうことにあるのではなく、ロシアにおける今日の農民運動と今日の農民問題にたいする評価の相違にあるのだということを、百回でも千回でも指摘することである。マルクス主義者がロシアにおける農民問題を「無視」したなどと言う人は、第一に、まったくの無学者である。というのは、プレハーノフの『われわれの意見の相違』(二〇年以上もまえに出版された)をはじめとして、ロシアのマルクス主義者の主要な著作はすべて、主として、ロシアの農民問題にたいするナロードニキの見解の誤りを解明することにあてられてきたからである。第二に、マルクス主義者は農民問題を「無視」していると言う人は、そのことによって、彼がほんとうの原則上の意見の相違――今日の農民運動は民主主義的〃ブルジョア的な運動か、それとも、そうでないのか? この農民運動は、その客観的意義からすれば、農奴制の残存物に鋒先を向けているのか、それとも、そうでないのか?――を十分に評価するのを回避しようとつとめていることを、みずから証明しているのである。社会革命派は、この問題にたいしてかつて一度も明白で正確な答えをあたえたことはないし、またけっしてあたえることができない。なぜなら、彼らは、ロシアの農民問題にたいする古いナロードニキ的見解と現代のマルクス主義的見解とのあいだで、どうしようもないほど混乱しているからである。マルクス主義者は、社会革命派が農民運動の評価で小ブルジョア的幻影を、ナロードニキ主義の幻想を捨てることができないからこそ、彼らを小ブルジョアジーの見地に立つもの(小ブルジョアジーの思想的代表者)とよぶのである。

だからこそわれわれは、またもやイ、ロ、ハ、と繰りかえさなければならないのである。ロシアの今日の農民運動は、なにを目ざしているのか? 土地と自由を、である。では、この運動の完全な勝利は、どういう意義をもつであろうか? この運動は、自由をかちとり、国家行政における地主と官吏の支配を取りのぞくであろう。それは、土地をかちとり、地主の土地を農民に引き渡すであろう。さ

て、最も完全な自由と地主の最も完全な収奪（地主の土地の取上げ）とは、商品経済を取りのぞくであろうか？　いや、取りのぞきはしないであろう。最も完全な自由と地主の最も完全な収奪とは、共同体の土地または「社会化された」土地での農家の個別経営を取りのぞくであろうか？　いや、取りのぞきはしないであろう。最も完全な自由と地主の最も完全な収奪とは、馬や牛をたくさんもっている富んだ農民と、雇農や日雇とのあいだの、すなわち、農民ブルジョアジーと農村プロレタリアートとのあいだの、深い深淵を取りのぞくであろうか？　いや、取りのぞきはしないであろう。むしろ反対に、上流身分（地主身分）の粉砕と絶滅とが完全であればあるほど、ブルジョアジーとプロレタリアートとのあいだの階級的反目はますます深くなるであろう。農民蜂起の完全な勝利は、その客観的な意義からみてどういう意義をもつであろうか？　この勝利は、農奴制のあらゆる残存物を徹底的に廃絶するであろうが、しかし、けっしてブルジョア的企業経営を廃絶しはしないであろうし、資本主義を廃絶しはしないであろうし、諸階級への、富者と貧者への、ブルジョアジーとプロレタリアートへの、社会の分裂を廃絶しはしないであろう。では、なぜ今日の農民運動は民主主義的ブルジョア的運動であるのか？　それは、この運動が、官吏と地主の権力を廃止して、民主主義的社会制度をつくりだしながら、しかもこの民主主義的社会のブルジョア的な基礎を変えず、資本の支配を廃絶しないからである。それでは、今日の農民運動にたいして、自覚した労働者、社会主義者は、どういう態度をとるべきか？　彼らはこの運動を支持し、最も精力的に農民を援助し、農民が官吏の権力をも地主の権力をも打ちたおすのを最後まで援助しなければならない。だが、それと同時に、彼らは、官吏と地主の権力を打ちたおすだけではまだ不十分であることを、農民に説明しなければならない。この権力を打ちたおすと同時に、資本の権力、ブルジョアジーの権力の絶滅を準備しなければならない。ところで、そうするためには、いまただちに社会主義学説を、すなわちマルクス主義学説を十分に説き、農民ブルジョアジーおよびロシアの全ブルジョアジーとの闘争のために農村プロレタリアを統合し、結束させ、組織しなければならない。——自覚した労働者は、社会主義的闘争のために民主主義的闘争を忘れたり、あるいは民主主義的闘争のために社会主義的闘争を忘れたりしてよいであろうか？　いや、自覚した労働者は、この二つの闘争の関係を理解したからこそ、みずから社会民主主義者と名のっているのである。彼らは、民主主義を経る以外には、政治的自由を経る以外には、社会主義へいたる道はほかにないことを、知っている。だか

ら彼らは、終極の目標である社会主義を達成するために、民主主義の完全な、徹底的な実現をめざして努力するのである。だが、なぜ民主主義的闘争の条件と、社会主義的闘争の条件とは、同じでないのか？　なぜなら、この二つの闘争では、労働者はかならず違った同盟者をもつことになるからである。民主主義的闘争を、労働者は、ブルジョアジー、とくに小ブルジョアジーの一部といっしょにおこなう。だが、社会主義的闘争を労働者は、ブルジョアジー全体に反対しておこなう。官吏や地主との闘争は、富裕な農民や中農さえもふくめて農民全体とともにおこなうことができるし、またおこなわなければならない。だが、ブルジョアジーとの、つまり、また富裕な農民との闘争は、ただ農村プロレタリアートと共同してだけ確実におこなうことができるのである。

もし、マルクス主義のこれらすべての初歩的な真理を思いおこすなら——社会革命派はつねにこれらの真理の検討を避けたがるのであるが、——マルクス主義に反対する彼らの次のような「最新の」反論を評価することは、われわれにとって、もはやたやすいことであろう。

『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』（第七五号）は次のようにわめいている。「なぜ一気に地主に反対してプロレタリアートを支持するようにしないで、はじめには地主に反対して農民一般を支持し、つぎに（すなわち同時に）農民一般に反対してプロレタリアートを支持することが必要なのか。いったいマルクス主義がこれになんの関係があるのか——アラーの神のみぞ知りたまうである」と。

これは、最も原始的な、子どものように素朴な無政府主義の見地である。ありとあらゆる搾取を「一気に」廃絶するということは、すでにとうの昔から、幾世紀ものあいだ、いや幾千年ものあいだ、人類が夢みてきたところである。しかし、こうした夢想は、幾百万の被搾取者が全世界にわたって団結して、資本主義社会を、この社会の本来の発展の方向にそって変えるために、持久的に、ねばりづよく、全面的に闘争するようになるまでは、依然として夢想の範囲を出なかった。社会主義の夢想は、マルクスの科学的社会主義が改造への志向を特定の一階級の闘争と結びつけたときにはじめて、幾百万の人々の社会主義的闘争に転化したのである。階級闘争をはなれては、社会主義は空虚な文句かおめでたい夢想かのどちらかである。ところで、わがロシアではわれわれは、二つの異なる社会勢力のおこなう二つの異なる闘争を見ている。プロレタリアートは、資本主義的生産関係が存在するところではどこででも、ブルジョアジーに反対してたたかっている（そして、わが社会革命派のご参考までに言っておけば、資本主義的生産関係は、

農民共同体の内部にも、すなわち、彼らの見地からすれば最も「社会化」された土地にも、存在している)。小土地所有者、すなわち小ブルジョアの層としての農民は、農奴制のあらゆる残存物に反対し、官吏と地主に反対してたたかっている。これらの二つの異なる、別種の社会戦争があることを見ずにいられるのは、経済学と全世界の革命史とをまったく知らない人々だけである。「一気に」ということばをつかってこれらの戦争の種類の異なることに眼を閉じることは、頭を翼のかげにかくして、現実にたいするいっさいの分析を拒否するということである。

古いナロードニキ主義の見解のまとまりをなくしてしまった社会革命派は、ナロードニキ自体の学説の多くのものすら忘れてしまった。同じ『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』は次のように書いている。「農民が地主を収奪するのを助けることによって、レーニン氏は無意識のうちに、すでに多かれすくなかれ発展した形態の資本主義的農業経営の廃墟のうえに小ブルジョア的経営をきずくのに助力しているのである。これは、正統マルクス主義の見地からの一歩後退ではなかろうか？」

恥を知りたまえ、紳士諸君！　諸君は、諸君のヴェ・ヴェ氏を忘れたのか！　彼の『資本主義の運命』や、ニコライ——オン氏の『〔改革後のわが国の社会経済〕概要』や、その他の、諸君の英知の典拠を参照してみたまえ。そうすれば諸君は、ロシアの地主経営が、資本主義的特色と農奴制的特色との両方を結合していることを思いだすであろう。そうすれば諸君は、賦役制度の直接の遺物である雇役経営制度が存在していることを知るであろう。もし諸君がそのうえになお、マルクスの『資本論』第三巻のような正統マルクス主義の本をのぞいてみるなら、そこから諸君は、賦役経営の発展とそれの資本主義的経営への転化とは、どこでも、小ブルジョア的農民経営をつうじる以外の仕方では、おこなわれなかったし、またおこなわれえなかったことを、知るであろう〔全集、第二五巻b、一〇〇三—一〇四二ページを参照〕。マルクス主義をこきおろすのに、諸君は、あまりにも単純な、あまりにもとうの昔に暴露された方法を用いている。すなわち、諸君は、資本主義的大規模経営が大規模な賦役経営に直接とって代わるという戯画的に単純化された見解を、マルクス主義になすりつけているのだ！　諸君はこう論じている。——地主の収穫は、農民の収穫よりも多い。だから地主を収奪するのは一歩後退である、と。この議論は、中学の四年生にふさわしいものだ。まあちょっと考えてみたまえ、紳士諸君。農奴制度の没落のさいに、収穫率の高い地主の土地から収穫率の低い農民の土地が分離したことは、「一歩後退」だったので

はあるまいか？

ロシアにおける今日の地主経営は、資本主義的特色と農奴制的特色との両方を結合している。地主にたいする農民の今日の闘争は、その客観的意義からすれば、農奴制の残存物との闘争である。しかし、あらゆる個々の場合をいちいちかぞえあげ、一つひとつの場合を秤りにかけ、農奴制がどこで終わり、純然たる資本主義がどこで始まっているかを薬局の秤りで精密に測定しようなどと試みることは、諸君自身のペダンティズムをマルクス主義者になすりつけるというものだ。われわれは、小商人から買う食料の価格のなかで、労働価値がどれだけの部分を占め、ごまかしがどれだけの部分を占めているか等々のことを、算出することはできない。だが紳士諸君、このことは、労働価値説を放棄すべきだということを意味するであろうか？

今日の地主経営は、資本主義的特色と農奴制的特色との両方を結合している。このことから、一つひとつの場合に一つひとつの小さい特色を、その特色のあれこれの社会的性格にしたがって秤量し、計算し、書きあげることがわれわれの義務だ、などという結論をくだしたりできるのは、ペダントだけである。またこのことから、われわれは二つの別種の社会戦争を区別する「必要はない」などという結論をくだしたりできるのは、空想主義者だけである。ここから実際にでてくるものは、われわれは自分の綱領のなかでも、戦術においても、資本主義にたいする純粋にプロレタリア的な闘争を、農奴制にたいする一般民主主義的な（そして全農民的な）闘争と結びつけなければならない、ということである。

今日の半農奴制的な地主経営における資本主義的な特色がつよく発展していればいるほど、農村プロレタリアートをいますぐ独自に組織する必要は、ますます緊急である。というのは、どんな没収にもかかわらず、純粋に資本主義的な、すなわち純粋にプロレタリア的な敵対関係がそれだけ急速に舞台に登場してくるだろうからである。地主経営における資本主義的特色が強ければ強いほど、民主主義的没収はそれだけ急速に、社会主義をめざす現実の闘争を促すであろう。——つまり、「社会化」ということばをつかって民主主義的変革を欺瞞的に理想化することが、それだけ危険なものとなるわけである。これが、地主経営における資本主義と農奴制との混合から生じる結論である。

だから、純粋にプロレタリア的な闘争を全農民的な闘争と結びつけるのであって、この両者を混同するのではない。一般民主主義的、全農民的な闘争を支持するのであって、けっしてこの非階級的闘争に融合するのではなく、けっし

て、社会化などといった欺瞞的なことばによってこの闘争を理想化してはならず、都市プロレタリアートをも農村プロレタリアートをもまったく独自な階級的な社会民主主義政党に組織することを、かたときもけっして忘れてはならないのである。この党は、最も断固たる民主主義を最後まで支持しながらも、商品経済のもとで「平等」をつくりだすというような反動的な夢想や試みによって革命の道からそらされはしないであろう。地主との農民の闘争は、いまは革命的であり、地主の土地の没収は、経済的および政治的進化のいまの時期にはあらゆる点で革命的である。だから、われわれはこの革命的民主主義的な措置を支持する。だが、この措置を「社会化」とよび、商品経済のもとで「平等の」土地用益が可能だなどと言って自分自身と人民をだますことは、これはもう反動的な小ブルジョア的空想であって、われわれはこんな空想は社会革命派におまかせしておく。

『プロレタリー』第二四号、一九〇五年一一月七日（一〇月二五日）
全集、第五版、第一二巻、三九―四八ページ所収
邦訳全集、第九巻、四六五―四七四ページ所収

われわれの任務と労働者代表ソヴェト[100]

（編集局への手紙）

同志諸君！　労働者代表ソヴェトの意義と役割の問題は、いま、ペテルブルグの社会民主党と首都の全プロレタリアートの日程にのぼっている。私は、この焦眉の問題について若干の考えを述べるためにペンをとるが、これを述べるまえに、私は、一つのきわめて重要な、ことわり書きをしておくことが、どうしても必要だと考える。私は、局外者として意見を述べる。私は、まだのろうべき遠方から、いとわしい亡命地の「外国」から手紙を出さなければならない。ところで、ペテルブルグに行ってみずに、労働者代表ソヴェトを一度も見ずに、ともに活動する同志諸君と意見を交換せずに、このような具体的な実践的問題について誤りのない意見をもつことは、ほとんど不可能である。した

がって私は、事情に通じていない人間の書いたこの手紙をのせるかのせないかは、編集局に一任する。「文書」だけによらずに問題に通じることがついにできるようになる場合には、自分の意見を変える権利を、私は保留しておく。

さて、本題にとりかかろう。ラーヂンが『ノーヴァヤ・ジーズニ』[102]の第五号で（私は、わが社会民主労働党の事実上の中央機関紙であるこの新聞を五号しか見ていないが）、労働者代表ソヴェトか、党か、という問題を出しているのは、私には正しくないように思われる。問題をこういうふうに提出してはならないし、解答は無条件に労働者代表ソヴェトも、党も、というのでなければならないと、私には思われる。問題――しかもきわめて重要な――問題は、ソヴェトの任務と、ロシア社会民主労働党の任務とを、どう区別し、またどう結合するかということに、あるにすぎない。

私は、ソヴェトが、どれか一つの政党に完全に同調してしまうのは、得策でないと考える。こういう意見は、おそらく読者を驚かすであろう。そこで私は（くどいようだが、これは局外者の意見であることを、もう一度強調しておく）、すぐ私見の説明に移ることにしよう。

労働者代表ソヴェトは、ゼネラル・ストライキから、このストライキをきっかけとして、このストライキのために生まれた。ストライキをおこない、勝利のうちにこれをやりとげたのは、だれであったか？　それは、プロレタリアート全体であり、そのなかには、さいわいなことに少数ではあるが、社会民主主義者でないものもいる。またストライキがもとめたのは、どのような目的であったか？　経済的なものもあれば、政治的なものもあった。経済的目的は、プロレタリアート全体に、すべての労働者と、幾分は、すべての勤労者にさえも関係があったので、賃労働者だけに関係していたのではなかった。政治的目的は、全人民に、より正確に言えば、ロシアのすべての民族に関係したものであった。政治的目的は、専制と、農奴制と、無権利状態と、警察の専横の軛から、ロシアのすべての民族を解放することにあった。

さきにすすもう。プロレタリアートは経済闘争を続行しなければならないであろうか？　無条件にそうである。この点については、社会民主主義者のあいだには二つの意見はないし、あるはずもない。このような闘争は、社会民主主義者だけが、あるいは社会民主主義の旗のもとでだけ、おこなうべきであろうか？　そうではないと、私は考える。私は、『なにをなすべきか？』のなかで述べた（まったく別の、すでに過去のものとなった事情のもとでではあったが）見解、すなわち、労働組合の構成員、したがってまた

職業的、経済的闘争の参加者の顔ぶれを、社会民主党の党員だけに限るのは、得策でないという意見（本選集、第二巻、一一〇―一一三ページを参照）を持ちつづけている。職業的組織としての労働者代表ソヴェトは、そのなかに、あらゆる労働者、勤務者、召使、雇農の代表、全勤労人民の生活改善のためにいっしょにたたかうことを望み、またたたかうことができさえすれば、基本的な政治的良心をもってさえいれば、そうしたすべての人、黒百人組以外のすべての人の代表を入れるように努力しなければならないと考える。ところで、われわれ社会民主主義者としては、第一には、すべてのわが党組織の全員（できれば）が、あらゆる労働組合に加入するように努力するであろうし、第二には、唯一の首尾一貫した、唯一の真にプロレタリア的な世界観であるマルクス主義を、うまずたゆまずひろめてゆくために、見解の相違をこえておこなわれるプロレタリアの同僚との共同闘争を利用するように努力するであろう。このようにマルクス主義をひろめてゆくために、このような宣伝・扇動活動のために、われわれは、自覚したプロレタリアートのまったく独立した、原則的に一貫したわが階級政党、すなわちロシア社会民主労働党を、無条件に維持し、強化し、発展させるであろう。わが社会民主党の計画的な、組織された活動と不可分に融合したプロレタリアの闘争の一歩一歩は、ロシアの労働者階級の大衆を、ますます社会民主党に近づけるであろう。

だが、経済闘争についての問題のこの一半は、比較的簡単なので、特別な意見の相違などおそらく引きおこしはすまい。政治的指導、政治闘争についての問題の他の一半となると、そうではない。読者をいっそう驚かせる危険をあえてするが、しかし私はここですぐ言っておかねばならない。労働者代表ソヴェトに社会民主主義の綱領を採用したり、ロシア社会民主労働党に加盟したりすることを要求するのは、この場合にも、得策でないように思われる、と。政治闘争の指導のためには、ソヴェト（私がつぎに述べようと思っている方向で改造された）も、党も、どちらも現在ひとしく無条件に必要であるように、私には思われる。

ひょっとすると、私がまちがっているかもわからないが、私には（私の手もとにある不完全な、「文書」だけから得られた情報から察すると）労働者代表ソヴェトは、政治的には臨時革命政府の萌芽と見るべきであろうと思われる。ソヴェトは、できるだけすみやかに、自分を全ロシアの臨時革命政府と宣言するか、または（形が違うだけでまったく同じことだが）臨時革命政府を樹立するかしなければならないように、私には思われる。

政治闘争は、いまやまさに、革命と反革命の力がほとん

ど均衡して、ツァーリ政府には革命をおしつぶす力がもう、ないが、革命には黒百人組の政府を一掃する力がまだ十分でないという発展段階に達している。ツァーリ政府の腐敗は完全である。だが生きながら腐敗していくこの政府は、自分の屍毒でロシアを毒している。ツァーリの反革命勢力の腐敗にたいしては、いますぐ、ただちに、一刻の猶予もなく、革命勢力の組織化を対置することが、無条件に必要である。この組織化は、ほかならぬ最近すばらしい速さですすんでいる。このことを証明しているのは、革命軍の諸部隊（防衛武装隊その他）の編成であり、プロレタリアートの大衆的な社会民主主義組織の急速な発展であり、革命的農民による農民委員会の創設であり、苦しく困難ではあるが、しかし正しく、光明にみちた道、自由と社会主義への道を切りひらいている、水兵と兵士の制服を着た、プロレタリア兄弟諸君の最初の自由な会合である。

いままさに欠けているのは、真に革命的な勢力のすべてを、すでに革命的に行動している勢力のすべてを統合することである。欠けているのは、大衆の無条件の信頼を得、わきたつような革命的エネルギーを持ち、組織された革命的社会主義諸政党と密接に結びついた、発剌とした、新鮮な、人民のなかに深い根をおろすことによって強力な、全国的な政治的中心である。このような中心をつくりだすことができるのは、政治的ストライキをみごとにおこない、いま全人民の武装蜂起を組織しており、ロシアのために自由をたたかいとったか、さらに完全な自由をたたかいとろうとしている革命的プロレタリアートだけである。

そこで問題が起こる。——労働者代表ソヴェトはこのような中心の萌芽となってはなぜいけないのか。ソヴェトに席をしめているのが、社会民主主義者だけでないからであろうか？　これはマイナスではなくて、プラスである。われわれは、社会民主主義者と革命的ブルジョア民主主義者との戦闘的統一が必要であることを、つねに述べてきた。われわれはこのことを述べてきたが、労働者諸君はこれをやりとげた。そして、それをやりとげたのは、すばらしいことである。社会革命党に属していて、ソヴェトを一政党に加盟させることに抗議している労働者の同志諸君の手紙を『ノーヴァヤ・ジーズニ』で読んだとき、私は、これらの労働者の同志諸君は非常に多くの点で実践的に正しいと、思わざるをえなかった。言うまでもなく、われわれは、彼らと見解を異にしている。社会民主党と社会革命党の合同が問題にならないこともまた、言うまでもない。しかしこのことが問題になっているのではないのである。われわれが深く確信していることであるが、社会革命党と見解をともにしながら、プロレタリアートの陣列でたたかっている

労働者は、首尾一貫していない。なぜなら、彼らは真にプロレタリア的な事業をおこないながら、非プロレタリア的な見解を持ちつづけているからである。われわれはこの不徹底さと、思想的に最も断固としてたたかう義務があるが、しかし、緊要な、さしせまった、生きいきとした、すべての人に認められ、すべての誠実な人々を結集した革命の事業が、このためにそこなわれないような仕方でたたかわなければならない。われわれは、これまでのように、社会革命党員の見解を、社会主義の見解ではなく、革命的民主主義の見解であると考えている。しかし戦闘的目的のためには、われわれは党の独立性を完全にたもちながら、ともにすすまねばならない。そして、ソヴェトこそ、戦闘的な組織であるし、またそうでなければならないのである。われわれがほかならぬ民主主義革命を遂行している現在、献身的な、誠実な革命的民主主義者を追放することは、ばかげたことであり、狂気のさたであろう。彼らの不徹底さをわれわれは容易に、片づけるであろう。なぜなら、歴史そのものが、現実の一歩一歩が、われわれの見解を支持するからである。われわれの出す小冊子が、彼らに社会民主主義を教えないとしても、わが革命が、彼らに社会民主主義を教えるであろう。もちろん、依然としてクリスチャンで、神を信じている労働者も、神秘主義の味方（チェッ、チェッ）であるインテリゲンツィアも、不徹底である。しかしわれわれは、彼らをソヴェトから追いださないばかりでなく、党からさえ追いだしたりはしないであろう。なぜなら、現実の闘争が、戦列内での活動が、すべての生育力のある分子にマルクス主義の真理を確信させるであろうし、生育力のないものをすべてふるいおとしてしまうであろうと、われわれはかたく確信しているからである。一方、自分の力、すなわちロシア社会民主労働党内のマルクス主義者の圧倒的な力については、われわれは一瞬も疑ったことはない。

私の見解では、政治上指導的立場にある革命的中心としては、労働者代表ソヴェトは、広すぎるどころか、狭すぎる組織である。ソヴェトは自分を臨時革命政府であると宣言するか、臨時革命政府を樹立するかしなければならないが、そのためには、どうしても、労働者の新しい代表ばかりでなく、第一には、すでにいたるところで自由をめざしている水兵と兵士の、第二には、革命的農民の、第三には、革命的ブルジョア・インテリゲンツィアの、新しい代表をも引きいれなければならない。ソヴェトは臨時革命政府の強力な中核をえらびだし、それをすべての革命的政党と、すべての革命的（もちろん、自由主義的ではなくて革命的なものにかぎるが）民主主義者との代表でみたさなければ

ならない。われわれは、顔ぶれがこのように広く、雑多であることを恐れず、むしろそれを望んでいる。なぜなら、プロレタリアートと農民の統合がなく、社会民主主義者と革命的民主主義者の戦闘的接近がなくては、ロシア大革命の完全な成功は、不可能だからである。これは、明白にきめられた、当面の、実践的任務のための一時的同盟であろう。そして社会主義的プロレタリアートのよりいっそう重要な、根本的な利益の守り手としては、その終極目標の守り手としては、独立した、原則的に一貫したロシア社会民主労働党が断固としてこれにあたるであろう。

顔ぶれが広範で、雑多であるにもかかわらず、実践的指導に十分な、結束した、単一の中心をつくりだすことができるだろうか、と私に反論する人がいるかもわからない。私は、次の質問でそれに答えよう。十月革命〔一九〇五年一〇月の全国的政治的ストライキ〕はなにを教えているか？　ストライキ委員会は、事実上、一般に認められた中心、真の政府ではなかったか？　そしてこの委員会は、自由のために容赦なくたたかうプロレタリアートを真に支持する、真に革命的な、「職業別政治団体」と「職業別政治団体連盟」[94]の一部からの代表をその戦列に喜んでむかえいれたではないか？と。ただ必要なことは、臨時革命政府の基本的な、純プロレタリア的中核が、強力であること、たとえば、何百人かの労働者、水兵、兵士、農民にたいして、インテリゲンツィアの革命的団体の代表は、何十人かになることだけである。そして、私は、プロレタリアが、実際に正しい割合をすぐ打ちたてることができるだろうと、思っている。

このような政府の綱領であって、革命の勝利を保障するにたるほど完全なもの、またあらゆる言いのこしや、あいまいさや、沈黙や、偽善をしらない戦闘的結合の可能性をつくりだすにたるほど広範なものを、提出することができるだろうかといって、私に反論する人がいるかもわからない。このような綱領は、すでに生活によって完全に提出されていると、私は答えよう。このような綱領は、すでに原則的には、正教の聖職者をもふくむ、国民の例外なくあらゆる階級と階層の、すべての自覚した分子によって認められている。この綱領で第一位を占めなければならないのは、ツァーリがきわめて偽善的に約束した政治的自由を実際に完全に実現することである。言論、信教、集会、出版、結社、ストライキの自由を束縛しているあらゆる法律の廃止と、この自由を制限しているあらゆる制度の廃止は、即時、現実におこなわれ、また保障されて、実際におこなわれなければならない。この綱領のなかには、自由な武装した人民に依拠し、ロシアに新しい秩序を樹立するために全権力

と全実力とをもっているような、真に全人民的な憲法制定議会の召集がなければならない。この綱領のなかには人民の武装がなければならない。このような武装の必要は、あらゆる人によって自覚されている。残っていることは、すでに始められ、いたるところでなされている仕事を、最後まで遂行し、統一することである。臨時革命政府の綱領のなかには、さらに、ツァーリという怪物によって圧迫されている諸民族に、真の完全な自由をただちにあたえることがなければならない。自由なロシアは生まれた。プロレタリアートはその部署についている。彼らは、英雄的なポーランドがもう一度おしつぶされるのを許しはしないであろう。彼らはみずから戦闘に突入するであろう。しかもたんに平和的なストライキによるばかりでなく、武器を手にして、ロシアとポーランドの自由のために立ちあがるであろう。この綱領のなかには、すでに労働者によって「奪取されつつある」八時間労働日、その他資本主義的搾取を制限するために即刻必要な措置の確認がなければならない。最後に、この綱領のなかには、かならず、すべての土地を農民の手にうつすこと、すべての土地の没収についての農民のあらゆる革命的措置を支持すること（もちろん、小規模な土地用益の「均等性」という幻想を支持するのではなく）、いまではすでにひとりでに結成されはじめた革命的農民委員会をいたるところで創設すること、がふくまれていなければならない。

この綱領が猶予ならないものであること、実践的に急を要するものであることを、いま認めないものが、黒百人組[四三]と黒百人組の政府以外に、だれかあろうか？　ブルジョア自由主義者でさえ、口さきでは、それを認めることを辞さないではないか！　だが、われわれには革命的人民の力でそれを実際に実行に移すことが必要であり、そのために、プロレタリアートが臨時革命政府を宣言して、この力をできるだけ早く統一することが必要である。もちろん、このような政府の現実の支柱となることができるのは、武装蜂起だけである。だが、計画されている政府は、すでに成長し、成熟しつつあるこの蜂起の機関にほかならないではないか。蜂起が、すべての人の眼に明らかな、いわばだれにも感じることのできる規模に成長するまでは、革命政府の創設に、実際に着手することはできなかった。だが、いまでは、この蜂起を政治的に統合し、それを組織化し、それに明確な綱領をあたえ、すでにたくさんあるが、しかも、急激にその数をましている革命軍部隊をすべて、この新しい、真に自由な、真に人民的な政府の支柱と武器に転化させなければならない。闘争は避けることができず、蜂起は必然的であり、決戦はすでに非常に近づいている。正面か

ら挑戦し、解体してゆくツァーリズムにプロレタリアートの組織された権力を対置し、先進的労働者の手でつくられた臨時革命政府の名において全人民に宣言を発すべきときである。

われわれはいまではもう、革命的人民の内部からこの大事業を遂行することのできる人々、革命に私心をすてて献身する人々、そして重要なことは、わきたつ無限のエネルギーをもった人々が現われるであろうということをはっきり知っている。われわれはいまではもう、この事業を支持する革命軍の要素が存在していること、また新政府が、死に瀕した農奴制的、警察的ロシアに決戦を宣言したあかつきには、住民のあらゆる階級のなかの誠実なもの、生あるもの、自覚したものはすべて、ツァーリズムと最後的に絶縁するであろうということを、はっきり知っている。

革命政府のこの宣戦布告、この宣言のなかでは、次のように述べねばならないであろう。——市民諸君、どちらかを選びたまえ！　向うには、旧ロシア全体があり、搾取し圧迫し、人間を侮辱するいっさいの暗黒勢力がある。こちらには、すべての国事に平等な権利をもつ自由な市民の同盟がある。むこうには、搾取者、富者、警察の同盟がある。こちらには、すべての勤労者、人民の生きた全勢力、すべての誠実なインテリゲンツィアの同盟がある。むこうには、黒百人組があり、こちらには、自由と啓蒙と社会主義のためにたたかう組織労働者がある。

市民諸君、どちらかを選びたまえ！　これが、全人民によって早くから提出されていた、われわれの綱領である。これが、われわれの目標であり、その名においてわれわれは、黒百人組の政府にたいして宣戦を布告する。われわれは、われわれの考えだした新しい秩序を人民におしつけようとするものではけっしてなく、ただ、それなしにはロシアではもうこれ以上生きてゆけないと、すべての人々が一致して認めるものを実現する口火をきるにすぎない。われわれは、われわれの一歩一歩、われわれの決議の一つひとつにたいして、革命的人民の判断をもとめ、彼らから遊離することなく、勤労大衆自身のなかから生まれる自由な創意に、まったく完全に依拠する。われわれは、ありとあらゆる革命的党派を結集し、自由のために、人民の基本的な権利と要求を保障するわれわれの綱領のためにたたかう用意のある、すべての住民グループからえらばれた代表を、われわれの陣列にまねくであろう。地主と役人の軛にたいする共同闘争を最後までおこなうため、土地と自由をめざす闘争のために、われわれは、とくに、兵士の軍服をきた労働者の同志諸君と、わが農民の兄弟諸君に手をさしのべる。

市民諸君！　決定的闘争の準備をせよ。われわれは、黒百人組の政府がロシアを侮辱することを許さない。黒百人組的警察の全集団が、殺人と略奪と人民にたいする暴行のために、権力を維持しているあいだは、われわれは若干の官吏の更迭や、若干の警察官の罷免であざむかれはしない。自由主義的ブルジョアがこの黒百人組の政府に請願するほど、みずから卑下するなら卑下するがよい。同じツァーリの役人どもがやる同じツァーリの裁判でおどかそうとしても、黒百人組はなんとも思いはしない。われわれは、無知な人民を酔わせて、買収する黒百人組の英雄どもを逮捕するように、わが軍の各部隊に命令し、クロンシタットの警察署長のような人非人どもを、全人民の公開の革命裁判に付するであろう。

市民諸君！　黒百人組以外のものは、すべてツァーリ政府と絶縁した。革命政府のまわりにこそ結集し、すべての公租や税金の支払を中止し、自由な、人民の国民軍の組織と武装に、全力を集中せよ。真の自由は、革命的人民が黒百人組の政府の勢力にたいして勝利者となる度合いにおうじてのみロシアに保障されるであろう。内乱には、中立者はいないし、またありえない。無色透明な人々の党などというのは、臆病な偽善にすぎない。闘争を傍観するものは、黒百人組の横暴を支持するものである。革命の味方でないものは、革命の敵である。革命家でないものは、黒百人組である。

われわれは、人民蜂起の勢力の統合と準備をひきうける。偉大な一月九日(四三)の記念日までに、ロシアには、ツァーリの権力機関のあとかたも残らないようにしようではないか。国際プロレタリアートの春の祭日までには、自由なロシアと自由に召集された全人民的憲法制定議会とを見られるようにしようではないか！

労働者代表ソヴェトの臨時革命政府への発展は、私には以上のようであると思われる。私は、以上のような任務を、まず第一に、わが党の全組織に、すべての自覚した労働者に、ソヴェト自体に、またまもなくモスクワでひらかれることになっている労働者大会と農民同盟の大会とに、提起したいと思う。

一九〇五年一一月二─四（一五─一七）日に執筆
一九四〇年一一月五日、新聞『プラウダ』第三〇号にはじめて発表
全集、第五版、第一二巻、五九─七〇ページ所収
邦訳全集、第一〇巻、三─一二ページ所収

党の再組織について(一〇)

一

わが党の活動条件は根本的に変わりつつある。われわれは集会、結社、出版の自由を奪取した。もちろん、これらの権利は極度に不安定で、現在の自由を頼りにすることは、犯罪ではないとしても、分別のないことであろう。決定的な闘争はまだこれからであるから、この闘争の準備をすることを第一位におかなければならない。党の秘密機構は存続させねばならない。しかし、それと同時に、現在のややひろがった活動の自由を最も広範に利用することが絶対に必要である。秘密機構とならんで、つぎつぎに新しい、公然・半公然の党組織(と党に同調する組織)をつくることが絶対に必要である。この後者の活動なしには、われわれの活動を新たな条件に適応させることも、新しい任務を解決することも、不可能である……

組織を新しい基礎のうえにおくためには新しい党大会が必要である。規約によれば党大会は年一回ときめられ、一九〇六年五月にひらかれることになっているが、いまや大会をはやめにひらくことが必要である。われわれがこの機会をとらえなければ、労働者が組織にたいする要求を極度に痛感しているので、それがゆがんだ危険な形をとって現われ、「独立派」(一一)などといったものを強化させるに違いない。そういう意味で、われわれは機を失するであろう。大いそぎで新たな組織をつくらなければならない。新しいやり方を全党の討議にかける必要がある。「新しいコース」を大胆に、断固たる態度できめる必要がある。

本号に掲載される、わが党の中央委員会が署名した党にたいするアピール(一二)は、私が深く確信するところでは、この新しいコースをまったく正確に規定している。革命的社会民主主義の代表者であり、かつ「多数派」の味方であるわれわれは、党の民主化を徹底的に実行することは秘密活動の条件のもとでは不可能であったということと、こうした条件のもとでは「選挙原則」は空文句であるということとを一度ならず述べてきた。そして実生活はわれわれのことばを確認した。実際には、どんな本格的な民主化も、どん

なほんとうの選挙制度もおこなうことができなかったということは、一度ならず文献のなかで（アクセリロードの序文つきの「一労働者」の小冊子[三三]と、『イスクラ』[三四]と小冊子『一労働者の見た党の分裂』とにのった「多数のなかの一労働者」の手紙を見よ）、少数者のもとの味方によっても強調されてきた。しかし、条件が変われば、すなわち政治的自由へ移った場合には選挙原則に移ることが必要であることをわれわれボリシェヴィキはつねに認めてきた。その証拠が必要なら、ロシア社会民主労働党第三回大会[三五]の議事録がこのことをとくに納得いくように証明している。

そこで、任務は明らかである、すなわち、さしあたり秘密機構を存続させるとともに、新しい、公然たる機構を発展させることである。大会に適用してみると、この任務（その具体的な遂行は、もちろん、実践的な手腕と場所と時のいっさいの条件の知識とを必要とするが）は、規約にもとづいて第四回大会を招集すると同時に、ただちにいますぐ選挙原則の適用を始めるということになる。中央委員会はこの任務を解決した。すなわち、〔地方の〕委員は、形式的には有資格組織の代表者として、また実質的には党の継承性の代表者として、議決権をもって大会に参加する権利をもつ。中央委員会は、全党員か選らばれた、したがってまた、党に所属する労働者大衆から選ばれた代議員を自分の権限にもとづいて評議権をあたえて〔大会に〕招待した。中央委員会はさらに、中央委員会はただちにこの評議権を議決権に変えるよう大会に提案するであろうと声明した。諸委員会の有資格の代議員はこのことに同意するであろうか？

中央委員会は、その意見では彼らは無条件に賛成するであろうと声明している。私個人としては、このことを深く信じている。こうした事に同意しないわけにはいかない。社会民主主義的プロレタリアートの指導者の大多数がこれに同意しないとは、考えられない。われわれの確信するところでは、新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』が非常に綿密に記録している党活動家の声は、われわれの見解の正しさをまもなく証明するであろう。このような措置をめざす（評議権を議決権に変えることのために）闘争の生じることが予期されるとしても、その結末は疑う余地がない。

この問題を別の面から、すなわち形式的な観点からではなく、本質的な観点から一瞥してみたまえ。われわれが提案した計画の実現は、社会民主党にとって危険な事態を引きおこす恐れがあるだろうか？

社会民主主義者でないものが、大量に一挙に党にはいってくる点に、危険な点があると考えることもできよう。そうなれば、党は大衆に解消してしまうであろう。党は階級

の自覚した前進部隊ではなくなるであろうし、党は後尾の役割になりさがってしまうであろう。それは無条件に悲しむべき事態となるであろう。そしてこの危険は、もしわれわれにデマゴギー癖があるならば、またもし党性の諸原則（綱領、戦術上の原則、組織上の経験）がまったく欠けているか、それともそれが薄弱で動揺しているならば、たしかに、きわめて重要な意義をもつようになるかもしれない。しかし、まさにこの「もし……ならば」などなにもないというのが真実である。われわれボリシェヴィキのあいだには、デマゴギー癖がなかっただけではない、それどころか、われわれはつねに、きっぱりと、公然と、まっこうから、どんなに小さなデマゴギーの試みともたたかってきたし、入党者に階級意識を要求し、党の発展における継承性の巨大な意義を強調し、全党員が党組織の一つに属して規律に服し教育されるように教えてきた。われわれには、確定した綱領がある。この綱領は、すべての社会民主主義者によって正式に認められたもので、その根本的命題ではどんな核心にふれた批判もくわえられなかったものである（個々の条項と定式の批判は、あらゆる発刺たる党ではまったく正当で必要な事柄である）。われわれは、第二回大会でも、第三回大会でも、また社会民主主義的出版物の多年の活動によっても、首尾一貫して系統的に仕上げられてきた戦術的決議をもっている。われわれは、いくらかの組織上の経験も実際の組織ももっている。そして、この組織は教育的な役割を果たして、疑いもなく成果をあげているのであって、この成果はすぐにはわからないが、それを否定できるのは盲目か盲目にされた人だけであろう。

同志諸君、われわれはこの危険を誇張すまい。社会民主主党は名をなし、一傾向を創出し、社会民主主義的労働者の幹部をつくりだした。そして、英雄的なプロレタリアートが闘争の決意と、はっきり自覚した目的をめざし一致団結して根気づよくたたかう能力、純粋な社会民主主義的精神でたたかう能力とを、実際に証明している現在、わが党にはいりつつある労働者や、中央委員会の招きにおうじて明日にもわが党にはいってくる労働者が、九分九厘まで、社会民主主義者であるということを疑うのは、まったくおかしなことであろう。労働者階級は本能的、自然発生的に社会民主主義的であるが、社会民主主党の一〇年以上にわたる活動はこの自然発生性を意識性に転化するために、すでに実にすくなからぬことをしとげている。同志諸君！　ぞっとするような恐怖を自分の想像ででっちあげてはならない。あらゆる発刺とした、発展しつつある党には、つねに不安定と、動揺と、逡巡の要素があるものだということを忘れてはならない。しかし、これらの要素は、社会民主主義者

の堅忍不抜な、結束した中核の働きかけに服しているし、将来も服するであろう。

わが党はながいあいだ地下にあって沈滞していた。第三回大会の一代議員が正しく表現したように、わが党は、過去数年のあいだ、そこで窒息しかけていた。だが、いまや地下室はこわれかけている。大胆に前進せよ。新しい武器をとれ。それを新しい人々に分けあたえよ。自分の拠点を拡大せよ。すべての社会民主主義的労働者を呼びよせよ。彼らを、何百人、何千人と、党組織の隊列に加入させよ。党組織の代議員は多くのわが中央機関を活発にするがよい。彼らをつうじて若々しい革命ロシアの生新の気を流入させるがよい。今日まで革命は、マルクス主義の基本的な理論的命題と社会民主党の本質的なスローガンがすべて正しいことを立証してきた。革命はまた、われわれの社会民主主義的な活動の正しさを立証し、プロレタリアートの真の革命性にたいするわれわれの期待と信頼の正しさをも立証した。党の必要不可欠な改革にあたってはくだらないことを全部投げすてよう。ただちに、新しい道に立とう。それは、われわれからこれまでの秘密機構を奪いさりはしないであろう（社会民主主義的労働者がこの機構を承認し、確認することはたしかである。このことは、決定や決議が証明しうるよりも百倍も説得的に、生活と革命の進展とによって証明されている）。それは、ただ一つ真に革命的な、また最後まで革命的な階級のふところからでてくる新しく、若若しい勢力をわれわれにあたえるであろう。この階級は、ロシアのために自由をなかばたたかいとったが、将来完全な自由をたたかいとるであろうし、また自由をつうじてロシアを社会主義にみちびくであろう。

二

『ノーヴァヤ・ジーズニ』第九号に発表された、ロシア社会民主労働党第四回大会の招集についてのわが党中央委員会の決定は、党組織内で民主主義的原則を完全に実現する方向にむかって決定的な一歩をふみだしている。大会代議員（彼らは、はじめは評議権をもって出席するが、ついで、疑いもなく、議決権をもつようになる）の選挙は、一ヵ月以内におこなわなければならない。したがって、すべての党組織は、候補者の人物の問題や大会の任務の問題の討議にできるだけ早く着手しなければならない。約束した自由を奪い、革命的労働者、とくに彼らの指導者を攻撃しようとする死にかけた専制の新たな試みの可能性を、かならず考慮にいれなければならない。だから、代議員の本名を公表することは（特別な場合を除いては）時宜に適した

ものであるまい。黒百人組が権力をにぎっているかぎり、政治的奴隷制の時代がわれわれにつかいなれさせた変名をまだすてるべきではない。そして、これまた、これまでのように、「一斉検挙にそなえて」代議員候補を選出するがよかろう。しかし、われわれはこのような秘密活動上の予防策のすべてには立ちいって論じるまい。というのは、地方的活動条件を熟知している同志諸君は、この点で起こりうるいっさいの障害を容易に片づけるであろうからである。専制の諸条件のもとでの革命的活動の経験に富んだ同志諸君は、新しい「自由な」(いまのところまだ括弧づきで自由な)条件のもとで社会民主主義的活動を開始するすべての人々に自分の助言をあたえて援助しなければならない。そのさい、わが諸委員会のメンバーにとって多くの機才が必要になることは言うまでもない。これまでの形式的な特権はいまや不可避的に意義を失うので、たえず「はじめから」新たに事を始めねばならず、首尾一貫した社会民主主義的綱領、戦術、組織のきわめて重要なことを、党の新しい同志の広範な層に証明する必要がある。忘れてならないことは、これまでわれわれは、あまりにもしばしば、特定の社会層から出てきた革命家だけを相手にしてきたが、いまや、典型的な大衆の代表を相手にしなければならないであろうということである。この変化は、宣伝や扇動のやり方を変えること(いっそう平易にする必要、問題をとりあつかう手腕、社会主義の基本的な真理を最も簡単明瞭に、真に説得的な方法で説明する手腕)を要求するだけでなく、組織のやり方をも変えることを要求する。

この小論では、私は組織上の新しい任務の一つの側面に立ちいってみたい。中央委員会の決定は、すべての党組織から代議員を大会に招待しており、すべての社会民主主義的労働者に党組織にはいることを呼びかけている。この希望が実際に実現されるためには、労働者を「招待」するだけでは不十分であり、これまでのような型の組織の数をふやすだけでは不十分である。このためには、すべての同志がいっしょになって新しい組織形態を、自主的・創造的につくりあげることが必要である。ここではあらかじめきめられた規範をけっして示してはならない。というのは、この仕事はすべて新しいものだからである。ここでは、地方の条件の知識と、重要なことは、全党員の創意とが用いられなければならない。労働者党の新しい組織形態、より正しくは、その基本的な組織上の細胞の新しい形態は、旧サークルと比較すれば、絶対にいっそう広範なものでなければならない。さらに、おそらく、新しい細胞はあまり厳重な定形をもたない、いっそう「自由な」、「ルーズな」組織でなければならないであろう。結社の自由が完全に認めら

れ、住民の市民的諸権利が完全に保障されている場合には、われわれは、もちろん、いたるところで社会民主主義的な団体（労働組合だけでなく、政治団体、党に所属する団体）を創立すべきであろう。現在の条件のもとでは、いやしくもわれわれが自由にできるいっさいの方法と手段によってこの目標に近づくように努力しなければならない。

すべての党活動家や、社会民主党に共鳴しているすべての労働者の創意を、即刻、発揮させる必要がある。いたるところで、報告、座談会、集会、大衆集会を組織して、ロシア社会民主労働党第四回大会のことを知らせ、きわめて平易な理解しやすい形でこの大会の任務を説明し、大会を組織する新しい形態を指示し、すべての社会民主主義者に真にプロレタリア的な社会民主党を新しい原則にもとづいて創立することに参加するよう呼びかける必要がある。このような活動は、経験にもとづく多くの知識をもたらし、二、三週間のうちに（もし精力的に仕事を遂行するならば）労働者のなかから新しい社会民主主義的勢力を輩出させ、これまでよりはるかに広範な層のなかに、社会民主党にたいする、すなわちいまわれわれがすべての労働者の同志とともに、新しく再建することを決定した社会民主党にたいする関心をよみがえらせるであろう。団体、組織、党グループをつくる問題が、あらゆる集会で即時提起されるであろう。各団体、各組織、各グループは、自分のビューローまたは指導部または管理委員会を、一言でいえば、中央常設機関を、組織の業務をつかさどるために、地方の党機関と連絡するために、党文献をうけとって配布するために、党活動のための納付金を集めるために、集会や、講演や、報告を開催するために、最後に、党大会の代議員の選挙を準備するために、ただちに選出するであろう。党の諸委員会は、もちろん、このような組織のすべてにたいする援助について、またロシア社会民主労働党とはなにか、その歴史とその現在の任務はなにか、にかんする知識をあたえるための資料をこの組織に供給することについて配慮するであろう。

さらに、党員が経営する食堂や、喫茶店や、ビヤホールや、図書館や、読書室や、射的場*その他、等々の形で、社会民主主義的労働者組織の地方的な経済上の、いわば、拠点をつくることについても同様に配慮すべき時である。「専制的な」警察のほかに、「専制的な」雇主が、扇動者を解雇して、社会民主主義的労働者を迫害するであろうということを忘れてはならない。だから、工場主の専横からできるだけ独立した基地を建設することは、きわめて重要なことである。

* 私は適当なロシア語を知らないので、標的にむかって射撃

する場所――そこにはあらゆる武器の貯えがあって、希望者はだれでも安い料金をはらってやってきて、ピストルまたは小銃で標的にむかって射撃する――を「射的場」とよんでおく。ロシアでは集会と結社の自由が宣言されている。市民には射撃をまなぶためにも集合する権利がある。だれにたいしてもこのことが危険なはずはない。ヨーロッパのどの大都会でも諸君は万人に公開された射的場を見るであろう――地下室、ときには郊外、等々で。そして労働者が射撃をまなび、武器の取りあつかい方をまなぶことは、けっしてよけいなことではない。もちろん、われわれが本格的に、広範にこのことに着手することができるのは、結社の自由が保障され、こういう施設をあえて閉鎖しようとする警察の悪党を告訴することができるようになったときだけである。

一般的にいえば、われわれ社会民主主義者は、行動の自由が現在のように拡大したことを、さまざまに利用しなければならない。そして、この自由が保障されたものであればあるほど、われわれは「人民のなかへ！」というスローガンをますます精力的にかかげるであろう。いまや、労働者自身の創意は、われわれ、きのうまでの秘密活動家や「サークル員」が夢想することさえできなかったような規模で発揮されるであろう。いまや、社会主義の思想は、われわれがしばしば探知することもまったくできないような道をとってプロレタリアートの大衆に影響をおよぼしているし、これからもおよぼすであろう。このような条件におうじて、社会民主主義的インテリゲンツィア*をいっそう正しく配置することに配慮する必要があろう。それは、運動がすでに確固たる地位を占めて、もしこう言ってよければ、自分の力だけでやっていける場所で、インテリゲンツィアがいたずらに押しあいへしあいしないようにするためであり、また、活動がいっそう苦しく、条件がいっそう困難で、経験と知識に富んだ人々の必要がいっそう痛切で、光源が他よりも少なく、政治的生命が他よりも微弱にしか脈うっていない、「下層階級のなか」に彼らがはいってゆくようにするためである。いまやわれわれは、すべての住民――どんなにへんぴな地方の住民さえも――が参加するであろう選挙にそなえても、また、（このほうがもっと重要であるが）公然たる闘争にそなえても、「人民のなかへ」はいっていかなければならない。そしてそれは地方的ヴァンデー〔三〕の反動性を麻痺させるためであり、大中心地から出てくるであろうスローガンを全国に、プロレタリアートの全大衆のなかに確実にひろめるためである。

* 第三回党大会で私は、党の諸委員会では、インテリゲンツィア二人にたいして労働者約八人の割合にしたいという希望を述べた〔第八巻、四二ページ〕。この希望はなんと時代おくれになったことだろう。

いまでは、党の新しい組織では社会民主主義的インテリゲンツィア出の党員一人にたいして社会民主主義的労働者数百人の割合にすることを希望しなければならない。

もちろん、行きすぎはすべて有害である。仕事を十分にしっかりと、できるだけ「模範的」に組織するためには、われわれは、いまでもまだ、しばしば、あれこれの重要な中心地に最もすぐれた人材を集中しなければならないであろう。経験は、この点でどんな比率を守るべきであるかを示している。現在、われわれの任務は、新しい原則にもとづいた組織のために基準を考えだすことであるというよりむしろ、第四回大会で党の経験から得た資料を総括し、定式化するために、最も広範で大胆な活動を展開することである。

三

これまでの二節にわたる概要で、われわれは、党内の選挙原則の一般的意義と、新しい組織上の細胞と組織形態の必要性とについて述べてきた。つぎに、もう一つの、きわめて本質的な問題、すなわち党の統合の問題を考察しよう。

大多数の社会民主主義的労働者が党の分裂にきわめて不満で、統合を要求していることは、隠れもない事実である。分裂の結果、社会民主主義的労働者（またはすすんで社会民主主義者になろうとしているもの）が、社会民主党にたいしていくらか冷淡になったことは、隠れもない事実である。

党の「首脳部」が自分で統合することにたいして、労働者はほとんど期待をもたなくなっている。統合の必要は、今年の五月、ロシア社会民主労働党第三回大会によっても、メンシェヴィキの協議会によっても正式に認められた。それ以後半年経ったが、統合はほとんど進捗しなかった。労働者が焦躁をあらわしはじめたのは、驚くにあたらない。『イスクラ』と「多数派」が出版した小冊子（『一労働者の見た党の分裂』、中央委員会発行、ジュネーヴ、一九〇五年）とのなかで統合のことを書いた「一労働者」が、ついに、社会民主主義的インテリゲンツィアを「下から拳骨を突きあげて」おどしたのは、驚くにあたらない（全集、第九巻、一六一―一六七ページ、小冊子『一労働者のみた党の分裂』の序文、参照）。一部の社会民主主義者（メンシェヴィキ）には、当時、この威嚇が気にくわなかった。他の社会民主主義者（ボリシェヴィキ）は、この威嚇が正当で、根本的にはまったく公平であると考えた。

いまや自覚した社会民主主義的労働者がその意図（私は「威嚇」とは言わない。なぜなら、このことばは非難やデ

マゴギーのにおいがするが、われわれは、全力をあげてそのいずれをも避けなければならないからである）を実現できるし、また実現しなければならない時がきたと、私には思われる。事実、選挙原則を党組織内で口さきだけでではなく、実際に適用しうる時、この原則を美しいが空虚な文句としてではなく、党のむすびつきをほんとうに一新し拡大し強化する真に新しい原則として適用しうる時がきたか、いずれにせよ、その時が来ようとしているのである。中央委員会に代表される「多数派」は、選挙原則を即時適用し、採用するように、率直に呼びかけた。少数派もおなじ道をすすんでいる。そして社会民主主義的労働者は、すべての社会民主主義的組織・機関・会合・集会などの圧倒的多数をしめているのである。

つまり、統合することを説得する可能性だけでなく、また統合するという約束を得る可能性だけでなく、どの分派内でも組織された労働者の多数者の簡単な決定によって、実際に統合する可能性がいまやすでにあるのである。ここには、どんな「おしつけ」もないであろう。なぜなら、統一の必要は、原則的にはすべての人によって認められていて、労働者のしなければならないことは、原則的には解決されている問題を実践的に解決することだけだからである。

社会民主主義的労働運動内のインテリゲンツィアの機能とプロレタリア（労働者）の機能との関係は、次のような一般的定式によって、かなり正確に表現できるだろう。すなわち、インテリゲンツィアは問題を「原則的」にうまく解決し、図式をうまくえがき、実行する必要をうまく論じる……ところが労働者は灰色の理論を実行し、実現する。

そして、私がいま次のように言ったところで、少しもデマゴギーにおちいるわけではなく、労働運動における意識性の大きな役割を少しもひくめるわけではなく、マルクス主義理論、マルクス主義の原則の大きな意義をなにも弱めるわけではなかろう。――われわれは、大会でも、協議会でも党を統合するという「灰色の理論」をつくりあげた。労働者諸君！　われわれがこの灰色の理論を実現するのを援助してくれたまえ！　党組織に大挙してはいりたまえ。われわれの第四回大会とメンシェヴィキの第二回協議会とから、社会民主主義的労働者のすばらしい、壮大な単一の大会をつくりだしてくれたまえ。われわれとともに、合同の問題に実践的にとりくみたまえ。この問題では、例外として（これは、反対の原則を確認するような例外である！）一〇分の一を理論に、一〇分の九を実践にあたえるがよい。実際、このような希望は正当であり、歴史的には必然的で、心理的には理解しやすいことである。われわれは、あまりながいあいだ、亡命者の雰囲気のなかで、「抽象理論をも

てあそんだ」(時とすると無益に——過ちをかくす必要はない——)ので、いまやいくらか、ごく僅かでも、ほんのちょっぴりでも、「弓をべつなほうにまげ」、ごく僅かでももっと実践を前進させたほうがよかろう。分裂の原因と関連して、われわれが多量のインキと膨大な紙を費消した統合問題、この問題ではこうしたやり方が絶対に時宜をえている。とくにわれわれ亡命者は、実践にあこがれていた。それだけでなく、われわれは、全民主主義革命のきわめてみごとで完全な綱領をすでに書きあげている。この革命のためにも、さあ統合しようではないか!

『ノーヴァヤ・ジーズニ』第九、一三、一四号
一九〇五年一一月一〇、一五、一六日
署名——エヌ・レーニン
全集、第五版、第一二巻、八三—九三ページ所収
邦訳全集、第一〇巻、一二三—一二四ページ所収

党の組織と党の文学

十月革命後に[一五]ロシアに生じた社会民主主義的活動の新しい条件は、党の文学〔литература=文学・文献・著述・文書〕の問題を日程にのぼせた。非合法出版物と合法出版物の区別という、農奴制的、専制的ロシアの時代の悲しむべき遺産は消滅しはじめている。だが、まだ完全に死滅したわけではない。けっしてそうではない。わが首相〔ヴィッテ〕の偽善的な政府は、まだ横暴をきわめていて、そのため『労働者代表ソヴェト・イズヴェスチヤ』[一六]は「非合法」に印刷されているほどである。しかし政府に妨げる力がないものを「禁止」しようとする政府の愚かな試みは、政府の恥をさらす以外には、政府にたいする新しい精神的打撃以外には、なにものをもたらさない。

　非合法出版物と合法出版物の区別が存在していたときには、党出版物と党のものでない出版物の問題は、きわめて

簡単に、またきわめてごまかされた、ゆがんだ形で解決されていた。すべての非合法出版物は党出版物で、組織によって出版され、党の実践的活動家のグループとなんらかの形で結びついているグループによって運営されていた。すべての合法出版物は党出版物ではなく、——というのは党に所属することは禁止されていたから、——ただいずれかの党に「傾いて」いた。ゆがんだ同盟、不自然な「同居」、ごまかしの隠蔽が避けられなかったし、党の見解を表現しようとする人々のよぎない言いのこしと、このような見解にたっしていない者、本質的には党の人間でない者の短見や臆病とが入りまじっていた。

イソップのことば、文学的奴隷制、奴隷のことば、思想的農奴制ののろわれた時代！　プロレタリアートはルーシ〔ロシアの古名〕における生あるもの、生気あるものをすべて窒息させていたこの醜状を終わらせた。しかしプロレタリアートはいまのところ、ロシアのために自由をなかばたたかいとったにすぎない。

革命はまだ終わっていない。ツァーリズムは革命に勝利する力をもうもってはいないが、革命もツァーリズムに勝利する力をまだもっていない。そこでわれわれは、公然たる、誠実で率直な、首尾一貫した党派性と、地下的な、隠蔽された、「外交的」な、逃げをはった「合法性」とのこの不自然な結合が、いたるところに、またすべてについて現われている時期に際会している。この不自然な結合はわが新聞のうえにも現われている、——自由主義的ブルジョアの穏健な新聞の発行を禁止している社会民主党の圧制について、グチコーフ氏がどんなに皮肉を言おうとも(二七)、事実はやはり依然として事実であって、専制的・警察的ロシアはやはり依然としてロシア社会民主労働党の中央機関紙である『プロレタリー』(二八)に門戸を閉ざしているのである。

しかしともかくも、革命がなかば達成されているので、われわれのすべてはただちに新しい事態の調整にとりかからざるをえない。文学は、いまや「合法的」なものであっても、一〇分の九まで党派的なものとなりうる。文学は党の文学とならなければならない。ブルジョア的な風習にたいし、ブルジョア企業家的、小商人的出版物にたいし、ブルジョア文学上の出世主義と個人主義、「貴族的無政府主義」と利潤追求にたいして、——社会主義的プロレタリアートは党の文学の原則をおしだし、この原則を発展させ、できるだけ完全な形でこれを実現しなければならない。

では党の文学のこの原則はどこにあるのか？　それは社会主義的プロレタリアートにとって、文筆活動は個人もしくはグループの金儲けの手段であってはならないということにあるだけではない。それは総じてプロレタリアートの

共同の事業から独立した個人的な仕事であってはならない。無党派的文筆家をほうむれ！　超人文筆家をほうむれ！　文筆の仕事は全プロレタリアの事業の一部、全労働者階級の自覚した前衛全体によって運転される一つの単一な、偉大な社会民主主義的な機械装置の「歯車とねじ」にならなければならない。文筆の仕事は組織的、計画的な、統一された、社会民主主義的党活動の一構成部分とならなければならないのである。

「すべての比喩は不完全である」というドイツの格言がある。文学をねじに、生きた運動を機械装置にたとえる私の比喩も不完全である。おそらく、自由な思想闘争、批判の自由、文学的創造の自由、その他等々をいやしめ、生気を失わせ、「官僚化」するこのような比喩について泣き言をいうヒステリックなインテリゲンツィアさえ現われることであろう。[二〇]しかし実際には、このような泣き言はブルジョア・インテリゲンツィアの個人主義の表現にすぎないであろう。文筆の仕事が、なににもまして機械的平等化と、平均化と、少数者にたいする多数者の支配に従いにくいものであることは言うまでもない。この分野では私的創意と個人的嗜好に大きな自由が保障され、思考と想像力、形式と内容に大きな自由が保障されることも絶対に必要であることは言うまでもない。すべてこうしたことは争う余地のないことである。しかし、すべてこうしたことは、プロレタリアートの党の事業の文学的部分を、プロレタリアートの党の事業の他の部分と紋切型に同一視することはできないことを論証しているにすぎない。このことはけっして、文筆の仕事は当然かならず社会民主主義的党活動の他の部分と不可分に結びついた部分とならなければならないという、ブルジョアジーとブルジョア民主主義派には無縁で奇異に感じられる命題を否定するものではない。新聞は種々な党組織の機関紙とならなければならない。文筆家はかならず党組織にはいらなければならない。出版所と倉庫、書店と読書室、図書館と種々な書物販売、――すべてこうしたものは党のもの、党に責任をおったものとならなければならない。この活動全体を組織された社会主義的プロレタリアートが監視し、その全体を統制し、一つの例外もなく、この活動全体のなかに、プロレタリアートの生きた事業の生きた流れをみちびきいれ、こうしてなかばオブローモフ[二一]的な、なかば小商人的なロシアの古い原則――作家は書き、読者は読む――からすべての地盤を奪いとらなければならない。

われわれは、もちろん、アジア的検閲とヨーロッパ・ブルジョアジーによってけがされた文筆の仕事のこの改造が、ただちにおこなわれうるとは言うまい。なんらかの画一的

な制度を提唱したり、いくつかの決定による問題の解決を提唱したりすることはわれわれの思いもよらないことである。図式主義はこの分野では、どこよりも問題にならない。問題は、わが党全体が、全ロシアの自覚した社会民主主義的プロレタリアート全体が、この新しい任務を自覚し、はっきりとそれを提起し、いたるところでその解決にとりかかることにある。農奴制的検閲の捕われの身からのがれ出たわれわれは、ブルジョア的小商人的著作関係の捕われの身になりたくはないし、またなりはしないであろう。われわれは、警察から自由であるばかりでなく、また資本からの自由、出世主義からの自由という意味でも――いやそれだけでなく、さらにブルジョア的無政府主義的な個人主義からの自由という意味でも、自由な出版物をつくりだしたいと考えるし、またつくりだすであろう。

この最後のことばは、逆説のように、あるいは読者をからかっているように思われるであろう。なんだって！――と、おそらく、自由の熱烈な味方である、インテリゲンツィアのだれかは叫びだすであろう。なんだって！　君は文学的創造のような、デリケートな個人的な仕事を集団に従属させようとするのか！　君は労働者が多数決で科学や哲学や美学の問題を解決することを望んでいるのか！　君は絶対に個人的な思想的創造の絶対的自由を否定するのか！と。

――安心したまえ、諸君！　第一に、われわれは党の文学と、それを党の統制に服させることとを論じているのだ。各人は、すこしの拘束もなく、自分の好きなことをなんでも書いたり言ったりする自由をもっている。しかし、どの自由な結社（党をもふくめて）もまた、反党的な見解の宣伝に党の名を利用するような成員を追放する自由をもっている。言論と出版の自由は完全なものでなければならない。しかし、結社の自由もまた完全なものでなければならないではないか。私は、言論の自由の名において、かってなことを叫び、かってなうそをつき、かってなことを書く完全な権利を、君にあたえる義務がある。しかし君は、結社の自由の名において、これこれのことを言う人々と結社をつくったり、これを破棄したりする権利を私にあたえる義務がある。党は、自由意志による結社であって、もしもそれが反党的見解を宣伝する党員を一掃しないならば、必然的に、最初は思想的に、のちには物質的に崩壊するであろう。党的なものと反党的なものとの限界を決定するのに役だつものは、党の綱領であり、党の戦術的決議とその規約であり、最後に、国際社会民主主義の全経験の、プロレタリアートの自由意志による国際的結社の全経験である。プロレタリアートは、かならずしも首尾一貫していない、かなら

ずしも純マルクス主義的でない、かならずしも正しくない個々の分子や潮流を自分の党にたえず吸収したが、しかし、また自分の党の定期的な「清掃」をもたえずやってきた。ブルジョア的な「批判の自由」の擁護者諸君よ、わが党の内部でもそうするであろう、——いまわが党は急速に大衆的な党となりつつあり、いまわれわれは公然とした組織への急激な移行をおこないつつあり、いまわれわれのところには、不可避的に（マルクス主義的見地から見て）多くの首尾一貫しない人々、おそらくは若干のキリスト教徒さえ、おそらくは若干の神秘家さえはいってくるであろう。われわれは丈夫な胃袋をもっている。われわれは石のように堅固なマルクス主義者である。われわれはこれらの首尾一貫しない人々を消化するであろう。党内での思想の自由と批判の自由とは、党とよばれる自由な結社へ人々が団結する自由をわれわれに忘れさせるものではないのである。

第二に、ブルジョア個人主義者諸君よ、われわれは君たちに言わなければならない。絶対的自由についての君たちの言辞はたんなる偽善にすぎないと。金力のうえにたてられた社会に、勤労大衆が貧窮し、ひとにぎりの金持が寄生している社会に、真の、現実の「自由」はありえない。作家諸君、君たちは君たちのブルジョア出版屋から自由なのか？　君たちに好色文学や春画を要求し、「神聖な」舞台芸術の「おまけ」として売淫を要求する君たちのブルジョア的観客から自由だろうか？　そもそもこの絶対的自由は、ブルジョア的もしくは無政府主義的な空文句（というのは世界観としての無政府主義は裏がえしにしたブルジョア性だから）ではないか。社会で生活しながら社会から自由であることはできない。ブルジョア作家・画家・女優の自由は、財布への、買収への、食扶持への、仮装された（あるいは偽善的に仮装されている）従属にすぎないのである。

そこでわれわれ社会主義者は、この偽善を暴露し、この虚偽の看板をもぎとる。——しかし、それは、けっして非階級的な著作と芸術を得るためではない（それは社会主義的な無階級社会においてのみ可能となるであろう）。それは、偽善的に自由ではあるが、そのじつブルジョアジーと結びついている文学に、真に自由な、公然とプロレタリアートと結びついた文学を対置するためである。

それは自由な文学となるであろう。というのは利欲と出世ではなく、社会主義の思想と勤労者への共感が、つねに新しい勢力をその陣列に送りこむであろうから。それは自由な文学となるであろう。というのは、それは飽食した女主人公に、肥満のためになやんでいる倦怠した「上層の数万人」に奉仕するのではなくて、その国の華であり、その力であり、その未来である幾百万、幾千万の勤労者に奉仕

するであろうから。それは人類の革命的思想の最新の成果を社会主義的プロレタリアートの経験と生きた活動によってみのらせ、過去の経験（その原始的な空想的諸形態からの社会主義の発展を完成したものとしての科学的社会主義）と現在の経験（労働者の同志諸君の現在の闘争）とをたえず相互作用させる、自由な文学となるであろう。

仕事にとりかかれ、同志諸君！　われわれは社会民主主義的労働運動と密接・不可分に結びつきながら、広範で、多面的で、多様な文筆活動を組織するという、困難で新しい、しかし偉大で高貴な任務に当面している。すべての社会民主主義的な文学は党の文学とならなければならない。すべての新聞、雑誌、出版所等々は、ただちに再組織活動に、それらがなんらかの原則にもとづいていずれかの党組織に完全に所属するような状態の準備に、とりかからなければならない。そのときにのみ、「社会民主主義的」な文学は実際にそうしたものとなり、そのときにのみ、それは自分の義務を果たすことができるようになり、そのときにのみ、それはブルジョアジーへの隷属からまぬかれて、真に先進的な、最後まで革命的な階級の運動と融合することができるのである。

『ノーヴァヤ・ジーズニ』第一二号、一九〇五年一一月一三日

署名——エヌ・レーニン

全集、第五版、第一二巻、九九—一〇五ページ所収
邦訳全集、第一〇巻、三〇—三五ページ所収

社会主義と無政府主義

労働者代表ソヴェト執行委員会は、昨一一月二三日、自分たちの代表を執行委員会と労働者代表ソヴェトとに入れてもらいたいという無政府主義者の要請を拒否することに決定した。この決定の理由を執行委員会自身が次のように述べている。「(一) 国際的な全慣例では、社会主義者の大会や協議会は、無政府主義者の代表のはいることを認めていない。なぜなら無政府主義者は政治闘争を自分の理想を達成する手段と認めていないからである。(二) 政党は代表をおくりうるが、無政府主義者は政党ではない」と。

われわれは執行委員会の決定を、大きな、原則的な、実践的＝政治的な意義をもつ、きわめて正しい措置だと考える。もちろん、労働者代表ソヴェトを労働者の議会あるいはプロレタリアートの自治機関と見るべきであるなら、無政府主義者のはいることを拒否するのは誤りであろう。わが労働者のあいだの無政府主義者の影響がどんなに取るにたりない(幸いにも)としても、やはり彼らの側にたつ労働者は、疑いもなくいくらかはいる。無政府主義者が政党を構成しているか、組織あるいはグループを構成しているか、それとも志をともにするものの自由な同盟を構成しているかどうか、ということは形式的な問題であって、重大な原則的意義をもつものではない。最後に、無政府主義者が、政治闘争を否定しながら、政治闘争を指導している機関に入れてくれと自分で要請するとすれば、このような驚くべき矛盾は、もちろん、無政府主義者の世界観と戦術がまったく動揺していることを、またしても示すものである。だが、この動揺性を理由にして「議会」または「自治機関」から排除してはならないのは、言うまでもない。

執行委員会の決定はまったく正しく、この機関の任務、その性格と構成に少しも矛盾しないように、われわれには思われる。労働者代表ソヴェトは労働者の議会でも、プロレタリアの自治機関でもなく、総じて自治機関ではなく、一定の目的を達成するための闘争組織なのである。

この闘争組織には、一時的な、確定した形をもたない闘争協定の原則にもとづいて、ロシア社会民主労働党(プロレタリア社会主義の党)の代表、「社会革命」党(小ブルジョア社会主義の代表者あるいは革命的ブルジョア民主主

義派の最左翼）の代表、最後に多数の「無党派」労働者が所属している。けれども、この最後の人々は無党派分子一般ではなく、どの党派にも所属しない革命家だけである。なぜなら、彼らは完全に革命に共鳴し、この革命の勝利のために熱烈に、精力的に、献身的にたたかっているからである。だから、革命的農民の代表をも執行委員会に入れることは、まったく当然であろう。

本質上、労働者代表ソヴェトは、社会主義者と革命的民主主義者の、確定した形をもたない広範な闘争同盟である。そのさい、もちろん、「無党派的革命分子」は前者から後者にいたる幾多の過渡段階にわたっている。政治的ストライキの指導、その他圧倒的多数の住民によって認められかつ賛同された、緊要な民主主義的諸要求のための、より積極的な闘争形態にとって、このような同盟が必要なことは明瞭である。無政府主義者はそのような同盟内ではプラスにはならずに、マイナスとなるだろう。彼らは組織の解体をもたらすだけであろう。このことによって彼らは総攻撃の力をよわめるであろう。さらに彼らは、政治的改革の緊要性と重要性とについて「論争しかねない」。わが民主主義革命をいわば遂行している闘争同盟から無政府主義者を排除することは、この革命の観点からしても、この革命のためにも、まったく必要である。闘争同盟内には、この同盟の目的のためにたたかっているものにしか、はいる余地はない。だから、たとえば「カデット」[三七]あるいは「法治党」[三八]がそのペテルブルグの組織にそれぞれ数百人の労働者を集めたとしても、労働者代表ソヴェト執行委員会はまさかこの種の組織に自分の扉をひらきはしないであろう。

執行委員会は、その決定を説明するにあたって、国際社会主義者大会の慣例をあげている。われわれはこの声明を、すなわち、ペテルブルグ労働者代表ソヴェトの機関が全世界の社会民主党の思想的指導をこのように承認したことを熱烈に歓迎する。ロシア革命はすでに国際的な意義をもつようになった。ロシアにおける革命の敵は、自由なロシアに対抗してヴィルヘルム二世や、ヨーロッパのあらゆる非開化主義者や、暴圧者や、暴兵や、搾取者と、すでにぐるになっている。われわれもまた、わが革命が完全に勝利するためには、ロシアの革命的プロレタリアートと万国の社会主義的労働者との同盟が必要であることを忘れないであろう。

国際社会主義者大会が、無政府主義者の入場拒否についての決定を採択したのは、理由のないことではない。社会主義と無政府主義とのあいだには深淵とも言うべき隔絶がある。挑発を事とする秘密警察の手先や反動政府の御用新聞は、それが存在しないかのように見せかけようと試みて

いるが、むだなことだ。無政府主義者の世界観は、裏返しにしたブルジョア世界観である。彼らの個人主義的理論、彼らの個人主義的理想は、社会主義とは正反対である。彼らの見解は、おさえようのない勢いで労働の社会化へすすんでいるブルジョア体制の未来ではなく、この体制の現在を、それどころかその過去を表現している。すなわち、ばらばらな、単独の小生産者にたいする盲目的偶然の支配を表現しているのである。政治闘争の否定に帰着する彼らの戦術は、プロレタリアを分裂させ、実際にはあれこれのブルジョア政策の消極的な参加者に転化する。なぜなら政治からほんとうに遠ざかることは労働者には不可能で実現できないことだからである。

プロレタリアートの勢力を結束させ、プロレタリアートを組織し、労働者階級を政治的に訓練し、教育するという任務は、現在のロシア革命ではとくに緊急なものとして前面に現われている。黒百人組の政府が乱暴を働けば働くほど、無知な大衆のいやしい激情をあおろうとこの政府の手先である挑発者がやっきになればなるほど、生きながらくさっていく専制の擁護者たちが彼らの組織する略奪やポグロム〔大衆的暴行・略奪〕や暗殺によって、あるいは貧民を酔っぱらわせて、革命の信用を失墜させようとする試みに必死になって手を出せば出すほど、ますます組織の任務は重要となってくる。この任務はなによりもまず社会主義的プロレタリアートの党にかかってくる。だから、われわれはロシアの労働者にたいする無政府主義者の影響をいままでのように取るにたりないものにしておくために、思想闘争のあらゆる手段を講じるであろう。

一九〇五年一一月二四日（一二月七日）に執筆
一九〇五年一一月二五日、新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』第二一号に発表
署名——エヌ・レーニン
全集、第五版、第一二巻、一二九—一三二ページ所収
邦訳全集、第一〇巻、五七—六〇ページ所収

社会主義政党と無党派的革命運動

一

ロシアの革命運動は、たえず新しい住民層を急速にとらえながら、幾多の無党派的な〔どの既存の党派にも所属しない〕組織をつくりだしている。団結への欲求は、大衆が長いあいだ圧迫され迫害されていたので、それだけ激しい勢いでほとばしり出ている。組織が、いろいろな形で、しばしば確定した形もとらずに、たえまなく生まれている。しかもその性格は非常に独創的である。ここにはヨーロッパの諸組織に見られるようなきびしい枠はない。労働組合は政治的性格をおびている。政治闘争は経済闘争と融合していて——たとえば、ストライキの形で——、それが融合した形の一時的な組織と多少とも恒常的な組織とをつくりだしている。

この現象の意義はなにか？　これにたいして社会民主党はどういう態度をとるべきであろうか？

厳格な党派性は、高度に発展した階級闘争の随伴物であり、結果である。そして、逆に、公然たる広範な階級闘争のためには、厳格な党派性の発達が必要である。だから、自覚したプロレタリアートの党である社会民主党が、つねに無党派性とたたかっているのはまったく正当であり、原則的に一貫し、かたく結束した社会主義的労働党を創造するために、たゆむことなく活動しているのである。この活動は、資本主義の発展が全国民をますます深く諸階級に分裂させ、階級間の矛盾を激化させるにつれて、大衆のなかで成功をおさめている。

ロシアにおける現在の革命がこんなに多くの無党派的組織を生みだしたし、また生みだしつつあることは、まったく当然である。この革命は民主主義革命、すなわちその社会経済的内容においてブルジョア革命である。この革命は、専制的＝農奴制的体制をくつがえしてブルジョア体制をこの体制から解放し、それによってブルジョア社会のすべての階級の要求を実現するものであって、この意味で全人民的革命である。このことはもちろん、われわれの革命が階

級的なものでないということを意味しない。もちろん、そうではない。しかしわれわれの革命は、ブルジョア社会から見るとすでに命脈がつきたか、あるいはつきかけている、ブルジョア社会とは無縁の、そしてこの社会の発展を妨げている階級やカーストにたいして鋒先をむけている。ところが、国の経済生活全体がそのすべての基本的特徴においてすでにブルジョア的になり、住民の大部分がすでに実際にブルジョア的な生活条件のもとで暮らしているのであるなら、「反革命分子は、当然にあわれなほど少数であり、「人民」とくらべれば真に「ひとにぎり」にすぎない。だからブルジョア革命の階級性は、専制と農奴制とに反対するブルジョア社会のすべての階級の闘争の「全人民的」な、一見非階級的な性格のなかに不可避的に現われているのである。

ブルジョア革命期は、ロシアにおいても他の国々と同様に、資本主義社会の階級的諸矛盾が比較的発展していないという特色をもっている。なるほど、現在ロシアでは資本主義が、一七八九年のフランスはさておき、一八四八年のドイツにくらべてもいちじるしく高度に発展しているが、わが国では、「文化」とアジア的野蛮、ヨーロッパ主義とタタール主義、資本主義と農奴制度の矛盾によって、純資本主義的な諸矛盾がまだまだいちじるしくおおいかくされているということ、つまり、前面にでてくるのは、資本主義を発展させ、資本主義から封建制の残りかすを一掃し、プロレタリアートにとってもブルジョアジーにとっても生活条件と闘争条件を改善するであろうような諸要求であるということも疑う余地がない。

実際、現在ロシアの各工場、各事務所、各連隊、各警察隊、各教会管区、各学校、その他等々で無数につくられている要求や要望書や、doléances〔陳情書〕をよく観察するならば、その大部分が、こう言ってよければ「文化的」な要求であるということが、われわれには容易にわかるであろう。私の言う意味は、これは本来、ある階級に特有な要求ではなくて、基本的権利の要求であり、資本主義を破壊しないどころか、反対にそれをヨーロッパ主義の枠に入れ、野蛮、未開、収賄その他の農奴制の「ロシア的」残存物から資本主義を解放する要求である、ということである。実質的には、プロレタリアートの要求も、大多数の場合に、資本主義の枠内で完全に実現しうるような改革にとどまっている。ロシアのプロレタリアートがいますぐただちに要求しているものは、資本主義を掘りくずすことではなく、それをきよめ、その発展をはやめ、強化することなのである。

もちろん、資本主義社会におけるプロレタリアート独自

の地位の結果、労働者の社会主義への志向、労働者と社会主義政党との同盟は、運動の最初の段階から不可抗力的な勢いで現われでる。しかし本来の社会主義的な要求はまだ今後にひかえているのであって、日程にのぼっているのは、政治の面では労働者の民主主義的な要求であり、経済の面では資本主義の範囲内での経済的な要求である。プロレタリアートすら、いわば最大限綱領ではなくて最小限綱領の範囲内で、革命をおこなっているのである。農民、数的に圧倒的なこの巨大な住民大衆については、言うまでもない。その「最大限綱領」、その終極目標は、資本主義の範囲を越えるものではなく、資本主義は、全農民に、全人民に、すべての土地が移譲された場合にはいっそう広範に、またいっそうはなばなしく発展するであろう。農民革命は現在ではブルジョア革命である――このことばが、わが小市民的社会主義の感傷的な騎士の感傷的な耳にどんなに「耳ざわりに」ひびくとしてもそうなのである。

以上で大要を述べた、いま進行している革命の性格は、まったく自然に無党派的な諸組織を生みだす。そのうえ、全体としての運動は不可避的に表面的な無党派性の刻印、無党派性の外見をおびる。――もちろん、たんに外見だけではないが。「人間らしい」文化的な生活への欲求、団結への欲求、自分の品位、人間および市民としての自分の諸権利を守ろうという欲求はあらゆる人々をとらえ、すべての階級を統合し、あらゆる党派性をはるかにこえてふくれあがり、まだまだ党派性にまでたかまることのできない人人をも揺りうごかしている。彼らは、当面の欠くことのできない初歩的、基本的な権利と改革の緊要性にいわば目をうばわれて、さらにそれ以上のなにかを企図し、考慮することができなくなっている。いまおこなわれている闘争への心酔は必要かつ正当なものであって、それなしには闘争の成功は不可能であるが、人々は心酔のあまり、これらの当面の、初歩的、基本的な目標を理想化し、ばら色にえがき、ときにはそれに空想的な衣を着せさえしている。たんなる民主主義、平凡なブルジョア民主主義が社会主義と取りちがえられ、社会主義として「公式に」登録されている。ことごとくがまるで「無党派的」であるかのようだ。ことごとくがまるで一つの「解放」(事実、全ブルジョア社会を解放しつつあるわけだが)運動のなかにからみあっているかのようだ。とくに民主主義的闘争における社会主義的プロレタリアートの先進的役割のために、ことごとくが「社会主義」のかすかな、ほんのりした色合いをおびているかのようである。

無党派性の思想は、このような事情のもとでは、ある程度一時的な勝利をかちとらずにはいない。無党派思想は流

行のスローガンとならざるをえない。なぜなら、流行は生活のあとから頼りなくのろのろとついてくるものであるが、ほかならぬ無党派的な組織が政治の表面上に最も「普通の」現象として現われているからである。無党派的民主主義、無党派的ストライキ主義、無党派的革命主義がそれである。

つぎに問題になるのは、種々の階級の味方や代表者は、この無党派性の事実やこの無党派性の思想にたいしてどういう態度をとるかということである。この「とる」ということばは主観的な意味ではなく、客観的な意味である。すなわち、どういう態度をとるべきであるかという意味ではなくて、この事実にたいするどんな態度が種々の階級の利害や見地に依存して不可避的につくられていくかという意味である。

二

すでにわれわれが指摘したように、無党派性は、わが革命のブルジョア的性格の産物——あるいは、おそらく、その表現である。ブルジョアジーは無党派性に心をひかれずにはいられない。なぜなら、ブルジョア社会の自由をめざしてたたかう人々のあいだに諸政党がないということは、この最もブルジョア的な社会にたいする新しい闘争のないことを意味するからである。自由のブルジョア体制を理解していないものか、このブルジョア体制を神聖視するものか、ブルジョア体制にたいする闘争、この体制の「改善」をギリシア暦にカレンダス(三)がめぐってくる日まで延期するものか、である。また逆に、意識的にせよ、無意識的にせよ、ブルジョア秩序の側に立っているものは、無党派性の思想にひきつけられずにはいないのである。

階級分裂にもとづく社会では、敵対階級間の闘争は不可避的に、そのある発展段階では政治闘争となる。階級間の政治闘争の最も純粋で、完全で、はっきりした形の表現は政党間の闘争である。無党派性とは政党の闘争にたいして関心のないことである。しかし、この無関心は中立性や、闘争から身をひくこととは、同じではない。というのは、階級闘争においては中立者はありえないし、資本主義社会では生産物ないし労働力の交換への参加から「身をひくこと」はできないからである。ところが、交換は不可避的に経済闘争を生み、それにひきつづいて政治闘争をも生みだす。だから、闘争にたいする無関心は、実際には、闘争を避けること、闘争から身をひくこと、ないしは中立を守ることではけっしてないのである。無関心とは、強者、支配

者にたいする暗黙の支持である。十月革命のときに専制が瓦解するまでロシアで専制にたいして無関心であったものは、暗黙のうちに専制を支持していたのである。現代ヨーロッパでブルジョアジーの支配にたいして無関心であるものは、ブルジョアジーを暗黙のうちに支持するものである。自由をめざす闘争がブルジョア的性格をもつという思想に無関心な態度をとっているものは、この闘争におけるブルジョアジーの支配、生まれいでようとしている自由ロシアにおけるブルジョアジーの支配を支持するものである。政治的無頓着は政治的に満腹していることである。満腹した人は一片のパンにたいして「無頓着」、「無関心」な態度をとる。だが、つねに飢えている人は一片のパンの問題で「党派的」になるであろう。一片のパンにたいする「無頓着と無関心」は、人間がパンを必要としないことを意味するのではなく、人間がいつもパンを確保されており、人間がけっしてパンに欠乏しておらず、人間が満腹者の「党」にかたく同調したということを意味する。ブルジョア社会における無党派性とは、満腹者の党、支配者の党、搾取者の党に属していることを、偽善的に、秘められた形で、消極的に表現しているにすぎない。

無党派思想はブルジョア思想である。党派思想は社会主義思想である。この命題は、大体において、ブルジョア社会全体にあてはまる。もちろん、個々の部分的な問題や部分的な場合にこの一般的な真理を適用する能力をもたねばならない。しかし、ブルジョア社会が全体として農奴制と専制にたちむかっているようなときに、この真理を忘れることは、実際には、ブルジョア社会を社会主義的に批判することを完全に放棄することである。

ロシア革命は、まだその発展の初期にあるにもかかわらず、前記の一般的な考察を立証するためにすくなからぬ材料をすでに提供している。きびしい党派性を守りぬいてきたし、またいまも守りぬいているのは、自覚したプロレタリアートの党である社会民主党だけである。ブルジョアジーの見解の代表者であるわが自由主義者たちは、社会主義的党派性にたえることができないし、階級闘争に耳をかそうともしない。たとえば、外国でだされている『オスヴォボジデーニエ』(三)や、ロシア自由主義に隷属する無数の機関紙誌が言い、むしかえしてきたことを百度目に繰りかえしたローヂチェフ氏の最近の演説でも思いだしてみればよい。最後に、中間階級である小ブルジョアジーのイデオロギー(三三)は、『ナーシャ・ジーズニ』(三)、エル・デ(「急進民主派」)から「社会革命派」(六)にいたる、いろいろな色合いのロシア「急進主義者」の見解にはっきりと現われている。後者(「社会革命派」)は、自分たちが社会主義と民主主義とを混同

していることを農業問題で、具体的にいえば（資本の社会化なしの土地の）「社会化」というスローガンで、最も明瞭に言いあらわしている。彼らが、ブルジョア的急進主義には我慢できるが、社会民主主義的党派性の思想には我慢できないということも、周知のことである。

ロシアのあらゆる種類の自由主義者や急進主義者の綱領と戦術のなかに、いろいろな階級の利害がどう反映されているかという分析は、われわれの主題にははいらない。われわれはここではこの興味ある問題についでにふれてみただけなので、つぎに、無党派的な組織にたいするわが党の態度についての実践的・政治的結論にうつらなければならない。

社会主義者が無党派的な組織に参加することは許されるか。もし許されるとすれば、それはどんな条件で許されるのか。またこのような組織のなかではどんな戦術をとるべきであろうか。

第一問にたいして、無条件に、原則的に、ノーと答えることはできない。どんな場合にも、またどんな条件のもとでも社会主義者が無党派的な（すなわち、多少とも、意識的であれ無意識的であれブルジョア的な）組織に参加することは許されないと言うのは、誤りであろう。民主主義革命期に無党派的な組織に参加するのを拒否することは、ある場合には、民主主義革命に参加するのを拒否することと等しいであろう。しかし、社会主義者がこの「ある場合」を狭い枠内にとどめるべきであり、きびしく規定され、局限された諸条件のもとでのみ、このような参加が許されるということは疑いがない。というのは、無党派的な組織は、すでに述べたように、階級闘争が比較的未発達なことから生まれるのであるが、一方、厳格な党派性は、階級闘争を自覚した、明白な、明確な、原則的なものにする一条件だからである。

プロレタリアートの党の思想的、政治的自主性を守ることは、社会主義者のつねに変わらぬ絶対的な義務である。この義務を履行しないものは、その「社会主義的な」（口先では社会主義的な）確信が心の底からのものであっても、じっさいには、社会主義者ではなくなる。無党派的な組織に参加することは、社会主義者には例外としてしか許されない。そしてこの参加の目的そのものとその性格、条件などは、社会主義革命を意識的に指導できるように社会主義的プロレタリアートを養成し、組織するという基本的任務に完全に従属していなければならない。

事情によっては、われわれが無党派的組織に参加しなければならない場合もある。とくに民主主義革命期、とりわけプロレタリアートが卓越した役割を演ずる民主主義革命

期にはそうである。このような参加は、雑多な民主主義的な大衆に社会主義を宣伝するために、あるいは、反革命にたいして社会主義者と革命的民主主義者とが共同して闘争するために、必要なものとなりうる。このような参加は、第一の場合には、その見解を主張する手段となろう。第二の場合には、一定の革命的目標を達成するための闘争協定となるであろう。いずれの場合にも参加は一時的なものでしかない。いずれの場合にも参加は、労働党の自主性を完全に守る場合にのみ、また、無党派的な団体またはソヴェトに「代表委員として派遣される」党員と党グループにたいして全党がかならず統制し指導する場合にのみ、許されるのである。

わが党の活動が秘密であったときには、このような統制と指導をおこなうことは非常に困難なこと、ときにはほとんど克服できないほど困難なことであった。わが党の活動がますます公然となっている現在では、このような統制とは、党の「上層」にたいしてばかりでなく、党の「下層」にたいしても、党に所属する組織労働者の全員にたいしても、最も広範にかならずおこなうことができるし、またおこなわなければならない。無党派的な団体またはソヴェト内での社会民主主義者の行動についての報告、このような行動の条件と任務についての報告、このような行動にかんする各種党機関の決議は、かならず労働者党の実践にうつされなければならない。全党のこのような、現実的な参加、このようないっさいの行動の指導への参加によってのみ、実際に、真に社会主義的な活動を一般民主主義的な活動に対置することができるのである。

われわれは、無党派的な団体内でどんな戦術をとらなければならないか？　第一には、自主的な結びつきを確立し、われわれの社会主義綱領全体を宣伝するためにあらゆる可能性を利用することである。第二には、民主主義的変革を最も完全かつ決定的におこなうという観点からその時機の当面の政治的任務をさだめ、民主主義革命における政治的スローガンをあたえ、反動と取引する自由主義的民主主義派とは違って、たたかう革命的民主主義派が実現しなければならない改革の「綱領」をかかげることである。

きょうは労働者、あすは農民、あさっては兵士、等々がつくりだす無党派的革命組織にわが党の党員が参加することは、このように事を組織する場合にのみ、許されるものとなり、成果をあげるものとなりうるのである。このように事を組織する場合にのみ、われわれは、ブルジョア革命における労働者党の二重の任務、すなわち、民主主義的変革を最後まで遂行するという任務と、資本の支配の転覆をめざして容赦なくたたかうために、自由を必要とする社会

主義的プロレタリアートの幹部を拡大・強化するという任務とを遂行しうるであろう。

『ノーヴァヤ・ジーズニ』第二二、二七号
一九〇五年一一月二六日、一二月二日
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第一二巻、一三三―一四一ページ所収
邦訳全集、第一〇巻、六一―六九ページ所収

革命の諸段階、方向および見とおし(三)

(一)　労働運動はロシア社会民主労働党の指導のもとにプロレタリアートを一挙に奮起させ、自由主義的ブルジョアジーをめざめさせる。一八九五年――一九〇一／二年。

(二)　労働運動は公然たる政治闘争に移行し、自由主義的、急進的ブルジョアジーと小ブルジョアジーの政治的にめざめた層をこれに結合する。一九〇一／二年――一九〇五年。

(三)　労働運動は直接の革命に燃えあがる。その場合、自由主義的ブルジョアジーはすでに立憲民主党に結集し、ツァーリズムとの協定によって革命を中止させようと考えるが、ブルジョアジーと小ブルジョアジーの急進分子は、革命を継続させるためにプロレタリアートとの同盟にかたむく。一九〇五年（とくに年末）。

（四）　労働運動は、自由主義者の消極的な形勢観望にもかかわらず、農民の積極的支持をうけて民主主義革命に勝利する。プラス、急進的、共和主義的インテリゲンツィアとこれに対応する都市小ブルジョアジーの層。農民の蜂起は勝利し、地主の権力は粉砕される。

（『プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）』）

（五）　第三期には形勢観望的で、第四期には消極的であった自由主義的ブルジョアジーはまったく反革命的になり、プロレタリアートから革命の獲得物を奪いとるために自らを組織する。農民のあいだでは、その富農的部分全体と中農のかなりの部分もまた「賢くなり」、おちつきをとりもどし、プロレタリアートとプロレタリアートに共感をよせる貧農の手から権力をたたきおとすために反革命の側に移る。

（六）　第五期にできあがった諸関係を土台として、新しい危機と新しい闘争が成長し燃えあがるが、この場合、プロレタリアートは、すでに社会主義的変革のために、民主主義的獲得物を維持するために闘争する。万一、ヨーロッパの社会主義的プロレタリアートがロシアのプロレタリアートの援助にかけつけないならば、この闘争は、ロシアのプロレタリアートだけでは望みのないものになるであろうし、その敗北も、一八四九年―一八五〇年のドイツの革命政党の敗北、または一八七一年のフランスのプロレタリアートの敗北と同様に避けがたいであろう。

こうして、この段階では、自由主義的ブルジョアジーと富農（プラス中農の一部）が、反革命を組織する。ロシアのプロレタリアート、プラス、ヨーロッパのプロレタリアートが、革命を組織する。

このような条件のもとで、ロシアのプロレタリアートは、第二の勝利を得ることができる。事態は、もはや絶望的ではない。第二の勝利は、ヨーロッパにおける社会主義的変革となるであろう。

ヨーロッパの労働者は、「どういうふうに、これをやるか」を、われわれに見せてくれるであろうし、そうすれば、われわれは、彼らとともに社会主義的変革を遂行するであろう。

一九〇五年末または一九〇六年はじめに執筆
一九二六年『レーニンスキー・ズボールニク』
〔『レーニン資料集』〕第五巻にはじめて発表
全集、第五版、第一二巻、一五四―一五七ページ所収
邦訳全集、第一〇巻、七七―七八ページ所収

労働者党の農業綱領の改訂(一二)

労働者党の農業綱領を改訂する必要があることは、今日、だれもが認めている。「多数派」の最近の協議会（一九〇五年一二月）は、機の熟したこの問題を正式に提起したが、この問題はすでに統一大会(一三)の日程にものぼされている。

われわれは、ロシア社会民主主義の歴史上、農業問題がどういうように提起されてきたかをごく大づかみに述べ、ついで、今日社会民主主義者が提案している種々の綱領草案を概観し、最後に、われわれの擁護する草案を略述しようと思う。

一　農業問題にたいするロシア社会民主労働党の見解の歴史的発展の大要

ロシア社会民主主義は、それが出現した当初から、ロシアにおける農業問題の、とくに農民問題の非常に大きな重要性を認めて、自分の綱領上の構成のなかに、つねにこの問題の独自の分析をふくめてきた。

ナロードニキ(一四)と社会革命派(一五)はしばしばこれと反対の意見をひろめているが、そういう意見は、事実にたいするまったくの無知か、あるいは故意の歪曲にもとづいている。

「労働解放」(一六)団が一八八四年に発表した、ロシア社会民主主義者の最初の綱領草案のなかにはすでに、「土地関係の抜本的な改訂」と農村におけるあらゆる農奴制的関係の一掃という要求がかかげられている（国外で発行されていた古い社会民主主義文献がいま手もとにないので、われわれは記憶にたよって引用せざるをえないが、引用文の原文そのものではなく、大体の意味については保障する）。

ついでプレハーノフは、雑誌『ソツィアル－デモクラート(一七)』のなかでも、小冊子『全国的荒廃』、『ロシアの飢饉との闘争における社会主義者の任務』（一八九一－一八九二年）のなかでも、農民問題がロシアで非常に大きな重要性をもつことを、一度ならず、しかもきわめて断固たる表現で強調し、きたるべき民主主義的変革のさいには「黒い割替(一八)」も可能であること、社会民主主義者はこの見とおしをけっして恐れもしないし、避けもしないということさえ、

指摘した。「黒い割替」は社会主義的方策ではけっしてなく、資本主義の発展、国内市場の成長、農民の福祉の向上、共同体の分解、農村における階級的矛盾の発展、古い農奴制的＝債務奴隷制的ロシアのあらゆる痕跡の一掃をうながす巨大な刺激となるであろう。

「黒い割替」にたいするプレハーノフのこの指摘は、われわれにとって特別な歴史的重要性をもっている。この指摘は、社会民主主義者たちが今日もなおゆるぎなく保持している、ロシアにおける農業問題のほかならぬあの理論的提起を、彼らが一挙にあたえたということを、明瞭に示している。

次の三つの命題は、ロシアの社会民主主義者たちが、彼らの党の出現以来今日にいたるまで、つねに擁護してきたものである。第一。土地変革は、不可避的に、ロシアの民主主義的変革の一部をなすであろう。農村を農奴制的＝債務奴隷制的関係から解放することは、この変革の内容をなすであろう。第二。きたるべき土地変革は、その社会経済的意義からすれば、ブルジョア民主主義的変革であるだろう。それは、資本主義の発展と資本主義的階級矛盾の発展を弱めるものではなく、むしろそれを強めるであろう。第三。社会民主主義者は、この変革を断固として支持するあらゆる理由をもっている。そのさい、彼らはあれこれの当面の任務をさだめはするが、しかし自分の手をしばるようなことはしないし、また「黒い割替」を支持することすらいささかも拒否しない。

この三つの命題を知らないもの、ロシアの農業問題についての社会民主主義文献全体のなかにこれらの命題を読みとらなかったようなものは、あるいは問題を知らないか、あるいは問題の本質を避けようとする（社会革命派がいつもやるように）ものである。

農民問題についての社会民主党の見解の発展史に立ちかえって、われわれは、九〇年代末の文献のうちからさらに、『ロシア社会民主主義者の任務』（一八九七年）[二六]――そこでは、社会民主主義者は農民にたいして「冷淡な」態度をとっているという意見が決定的にくつがえされ、社会民主主義者の一般的見解が繰りかえされている――と、ついで新聞『イスクラ』[二七]をあげよう。その第三号は一九〇一年春（三月と四月）に、すなわちロシアにおける最初の農民蜂起[二八]の一年まえに発行されたが、この号には、『労働者党と農民』[二九]という主張がのっている。この論文は農民問題の重要性をもう一度強調し、とりわけその他の要求とともに切取地の返還という要求をもかかげている。

この論文は、ロシア社会民主労働党の農業綱領――『イスクラ』と『ザリャー』[三〇]の編集局の名で一九〇二年の夏に

発表され、わが党の第二回大会（一九〇三年八月）で正式の党綱領となったもの――の、最初の下書きと見ることができる。

この綱領では、専制とのあらゆる闘争は、農奴制にたいするブルジョア制度の闘争とみなされ、マルクス主義の原則的見地は、農業の部の基本的命題のなかにきわめてはっきりと記されている。すなわち、「農民を直接重圧している農奴制度の残存物の除去を目的とし、また農村における階級闘争の自由な発展のために、党は次のことを要求する」……

社会民主党の綱領の批判者たちは、ほとんどみな、この基本的命題を黙って避けている。彼らは象に気づかないのだ。(三〇)

第二回大会で採択された農業綱領の個々の条項は、議論の余地のない要求（身分制的貢租の廃止、小作料の引下げ、土地処分の自由）のほかに、さらに、土地買取賦金の返還の要求と、切取地を返還し農奴制的関係の残存物を除去するための農民委員会の設置の要求をふくんでいた。

最後の条項、すなわち切取地の条項は、社会民主主義者のあいだで最も多くの批判を呼びおこした。この条項にたいしては、（もし私の記憶ちがいでないなら）すべての地主の土地の没収を提案した社会民主主義的「ボリバ」(三一)団も批判していたし、同志イクスも批判していた（彼の批判は、私の回答(三二)といっしょに、一九〇三年の夏、第二回大会の直前に、ジュネーヴで特別の小冊子として発行され、大会の代議員たちはそれを手にもっていた）。同志イクスは切取地と買取賦金の返還とのかわりに、次のことを提案した。（一）教会領地、修道院領地および帝室領地を没収し、これを「民主主義国家の所有」にうつすこと、（二）「大土地所有者の受けとる地代に累進税を課し、この形態の収入が、人民の必要を満たすために民主主義国家の手にうつるようにすること」、（三）「私有地（大土地所有）の一部を、もし可能ならすべての土地を、自治的な大きな社会組織（ゼムストヴォ(三三)）の所有にうつすこと」。

私はこの綱領を批判して、これを「土地国有化の改悪された、矛盾した定式化」とよび、農民委員会は抑圧されている身分を立ちあがらせる戦闘的なスローガンとしての意義をもっていること、社会民主党は、たとえ没収された土地の「売却」でも、これをやらないとちかったりして、自分の手をしばってはならないこと、切取地の返還はけっして社会民主党の志向を制限するものではなくて、農村プロレタリアートと農民ブルジョアジーとが共通の任務をかかげる可能性を制限するだけであるということ、を強調した。私は次のように強調した。すなわち、「すべての土地を、

という要求が、国有化の要求か、あるいは、現今の経営上手な農民に土地を引き渡せという要求になるようなら、われわれは、あらゆる事情を考慮に入れたのち」（傍点は引用者のもの）「プロレタリアートの利益の見地からこの要求を評価するであろう。われわれは、たとえば、革命がわが国の経営上手な農民を政治生活にめざめさせるときに、彼らが民主主義的革命党として登場するか、それとも現体制党として登場するかどうかを、まえもって言うことはできないのである」（上記小冊子、三五—三六ページ[134]）。

これと同じ考え、すなわち、切取地[135]は農民運動の規模を制限するものでもなければ、また、農民運動がもっとさきにすすんでゆく場合に、それにたいするわれわれの支持を制限するものでもないという考えを、私は『貧農に訴える』（一九〇三年、第二回大会のまえに発行された）のなかでも展開した。そこでは、「切取地」は「柵」ではなくて「扉」だとよばれている[136]。そして、すべての土地を農民へ引き渡せという考えは、ここではけっして排斥されておらず、ある政治情勢のもとでなら歓迎されてさえいるのである。

黒い割替については、私は一九〇二年八月に（『ザリャー』第四号、一七六ページ）、農業綱領草案を擁護して次のように書いた。

「黒い割替という要求においては、小農民生産を普遍化し永久化しようという空想は反動的であるが、しかしこの要求のなかには（「農民」が社会主義的変革の担い手でありうるかのようにいう空想のほかに）革命的な側面もある。農民の蜂起によって農奴制度のいっさいの残存物を一掃しようという願望が、それである[137]」。

このように、一九〇二—一九〇三年の文献を参照すれば、この条項の起草者たちが切取地の要求を、農民運動の規模とこの運動にたいするわれわれの支持とを制限するという意味にはけっして理解していなかったことが、反論の余地なく証明される。だがそれにもかかわらず、事件の進行は、綱領のこの条項が不十分であることを示した。というのは、農民の運動は非常な速さで横にひろがり深くはいりこんでゆきつつあるからであり、また、われわれの綱領は広範な大衆のあいだに困惑を生みだしているが、労働者階級の党は広範な大衆を重視しなければならず、注釈だけを引合いに出すことはできないからである。注釈は、党にとって拘束的でない論拠によって、全党を拘束する綱領を説明するものなのである。

いまや農業綱領改訂の機は熟している。一九〇五年のはじめに、「多数派」の社会民主主義的新聞『フペリョード[138]』（一九〇五年一月から五月まで、ジュネーヴで毎週発行さ

れていた）のある号で、農業綱領改訂の草案が述べられた。この草案は、切取地の条項を削除し、その項を、「すべての地主所有地の没収をもふくむ、農民の要求を支持すること」[三七]でおきかえた。

しかし、ロシア社会民主労働党第三回大会（一九〇五年五月）およびそれと時をおなじくしてひらかれた「少数派」の「協議会」では、綱領そのものの改訂の問題は提起されなかった。議事は戦術上の決議の作成だけに限られた。この場合、すべての地主所有地の没収をもふくむ農民運動を支持するという点では、党の両派は一致した。

実を言うと、これらの決議がロシア社会民主労働党の農業綱領の改訂の問題をあらかじめ決定したのである。「多数派」の最近の協議会（一九〇五年一二月）では、切取地の条項と買取賦金の返還の条項を削除し、それらに代えて、すべての地主所有地の没収をもふくむ農民運動を支持するむねを指摘する、という希望を表明しようという私の提案が採択された。*

* この決議は、『ルーシ』[三八]、『ナーシャ・ジーズニ』[九]および『プラウダ』[三九]に掲載された。[四〇]

以上でわれわれは、農業問題についてのロシア社会民主労働党の見解の歴史的発展の大要を終わるとしよう。

二　農業綱領の問題について社会民主党の内部にある四つの潮流

現在われわれは、この問題について、さきに述べた「多数派」協議会の決議のほかに、さらに二つのできあがった農業綱領草案――同志マスロフと同志ロジコフのもの――と、未完成の、すなわちできあがった綱領草案の形をとっていない同志フィン、同志プレハーノフおよび同志カウツキーの意見と考察をもっている。

これらの著述家の見解を、簡単に述べよう。

同志マスロフは、同志イクスのものをいくらか模様がえした草案を提案している。すなわち、彼はイクスの草案から地代にたいする累進課税を削除し、そして、私有地をゼムストヴォの手にうつすという要求を訂正している。マスロフの訂正は次の点にある。第一に、彼は、イクスの「もし可能ならすべての土地をも」（すなわち、すべての土地をゼムストヴォの所有にうつすように）ということばを捨てた。第二に、マスロフは、イクスのあげた「ゼムストヴォ」を完全に捨てさって、「大きな社会組織――ゼムストヴォ」というかわりに、「大きな地方組織」と言っている。これについての全条項は、マスロフの場合には次のように

言っている。「私有地（大土地所有）を、大きな地方自治組織の所有にうつすこと。収用されるべき地所の最低面積は、地方の人民決議機関によってきめられる」。したがってマスロフは、イクスが条件づきで容認している完全な国有化を断固として拒否し、「公有化」、より正確にいえば「州有化」を要求しているわけである。国有化に反対するのに、マスロフは三つの論拠をあげている。（一）国有化は民族自決の侵害となるであろう。（二）農民、とりわけ自作農は、自分の土地を国有化することに同意しないであろう。（三）国有化は、階級的なブルジョア民主主義国家では避けえない官僚主義をつよめるであろう。

　地主の土地の分割（「分取り」）を、マスロフは、社会革命派のえせ社会主義的空想にすぎないものと批判し、この方策を「国有化」と比較して評価していない。

　ロジコフについていえば、彼は分割も国有化も望まず、切取地の条項を次のような条項によっておきかえることしか要求していない。すなわち「農民を経済的に隷属させる手段となっているすべての土地を、無償で農民に引き渡すこと」（論集『当面の問題』[一三一]、同志エヌ・ロジコフの論文、六ページ）。同志ロジコフは教会領地その他の土地の没収を要求してはいるが、「これらの土地を民主主義国家の所有にうつす」（同志マスロフはこれを望んでいるが）という指示はしていない。

　さらに同志フィンはその未完の論文（一九〇六年、『ミール・ボージー』[一三二]）のなかで、国有化を排斥し、見たところ、地主の土地を分割して農民の私的所有にしたい意向のようである。

　同志プレハーノフもまた、『ドネヴニーク』[一三三]第五号のなかでは、われわれの農業綱領にたいする種々の特定の変更の問題にはひとこともふれていない。彼は、マスロフを批判するさいに「柔軟な戦術」一般を擁護しているだけで、「国有化」を排斥（『ザリャー』の古い論拠を引合いにだして）している。彼は、どうやら、地主の土地を農民のあいだで分割したい意向のようである。

　最後に、K・カウツキーはそのすぐれた労作『ロシアにおける農業問題』のなかで、この問題にたいする社会民主主義的見解の一般的原則を述べるとともに、地主の土地を分割することに全面的な共感を表明し、また、どうやら一定の条件のもとでなら国有化をも容認しているようであるが、しかし、ロシア社会民主労働党の旧農業綱領についても、その改訂草案〔後出〕についても、総じてただのひとこともふれてはいない。

　ロシア社会民主労働党の農業綱領の問題についてわが党

内でたてられた意見をまとめてみると、これらの意見は次のような四つの基本的な型に分けられる。

（一）ロシア社会民主労働党の農業綱領は、国有化も地主の土地の没収も要求してはならないとするもの（現在の綱領を擁護する人、または、同志エヌ・ロジコフが提案しているような、小さな訂正をおこなうように主張している人が、これに属する）。

（二）ロシア社会民主労働党の農業綱領は、地主の土地の没収を要求しなければならないが、どんな形にせよ土地の国有化を要求すべきではないとするもの（どうやら同志フィンと、おそらくは同志プレハーノフも、これに属する。もっとも後者の意見ははっきりしない）。

（三）独特な制限された国有化とならんでの地主の土地の収用（イクス、マスロフ、グローマンその他の「ゼムストヴォ有化」や「州有化」）。

（四）地主の土地の没収と、一定の政治的条件のもとでの土地国有化（わが党の合同中央委員会によって任命された小委員会の多数派が提案している綱領。筆者が擁護しようとするこの綱領は、この小冊子の終りに掲載されている）。〔本書、二二五―二二六ページ〕

これらすべての意見を検討してみよう。

現在の綱領または同志ロジコフが提案しているような綱領の支持者たちは、次のような見解から出発している。すなわち、大所有地の没収は、大所有地を小さな所有地に分割することになるのであって、総じて社会民主主義的見地からは擁護できないという見解か、あるいは、没収ということは綱領のなかにはけっしてはいりえず、戦術的決議にしかはいりえないという見解である。

第一の見解から始めよう。彼らはわれわれにむかって次のように言う。大所有地はすすんだ資本主義型のものである。それを没収し、それを分割することは、反動的な方策であり、小経営への一歩後退である。社会民主主義者はこのような方策に賛成することはできない、と。

このような見解は、われわれには正しくないと思われる。われわれは、今日の農民運動の一般的な最終の結果を考慮すべきであって、それを個々の事例や細部問題にまぎらわせてはならない。全体としてロシアの今日の地主経営は、資本主義的経営方式によるよりも、むしろ農奴制的＝債務奴隷制的経営方式によって維持されている。このことを否定するものは、ロシアにおける今日の広範で奥ぶかい革命的な農民運動を説明することができないであろう。切取地を返せという要求をかかげたさいのわれわれの誤りは、農民のあいだの民主主義的運動、ほかならぬブルジョア民主主義的運動の、広さと深さを十分に評価していなかった点

にある。革命がわれわれに多くのことを教えたいま、なおこの誤りを固守することはばかげている。すべての地主所有地の没収は、資本主義の発展にとっては、資本主義的大経営を分割することからくるマイナスよりも、はるかに大きなプラスをあたえるであろう。分割は資本主義を廃絶しはしないし、それを後退させもしないで、むしろ資本主義の新しい発展の地盤をきよめ、一般的なものにし、ひろげ、強化するであろう。われわれがいつも言ってきたように、農民運動の規模を制限することは、けっして社会民主主義者のすべきことではないが、現在すべての地主所有地の没収という要求を拒否することは、明確になった社会運動の規模を公然と制限するものであろう。

だから、現在すべての地主所有地の没収という要求とたたかっている同志諸君は、八時間以下の労働日で働いているイギリスの炭坑労働者が、八時間労働日を全国的に立法化することに反対してたたかうのと、同じような誤りをおかしているわけである。

他の同志諸君は、「時代精神」に譲歩している。彼は次のように言う。綱領には、切取地〔の返還〕または債務奴隷化に役だつ土地の収用をかかげる。そして戦術的決議のなかに没収を出す。綱領と戦術とを混同してはならない、と。

これにたいしてわれわれは、綱領と戦術とのあいだに絶対的な境界線を引こうとする試みは、スコラ哲学とペダンティズムにみちびくだけだ、と答えよう。綱領は、他の諸階級にたいする労働者階級の一般的な、基本的な関係を規定するものである。戦術は、部分的で一時的な関係を規定するものである。これは、もちろん、正しい。だが、農村における農奴制度の残存物とのわれわれの闘争全体は、プロレタリアートの一般社会主義的な任務とくらべれば部分的で一時的な任務である、ということを忘れてはならない。もしシポフ好みの「立憲制度」がロシアで一〇―一五年ももちこたえるならば、これらの残存物は消滅するであろう。それは、住民に測りしれない苦痛をあたえたのちにであるが、しかしとにかく消滅し、ひとりでに死滅するであろう。そうなれば、多少とも強力な民主主義的農民運動はありえなくなるであろう。「農奴制度の残存物の除去を目的とした」どんな農業綱領も、擁護することはできなくなるであろう。つまり、綱領と戦術との違いは相対的なものにすぎないのである。しかも、いまでは以前よりもずっと公然と行動している大衆政党にとっては、綱領では部分的な、制限された、狭い要求をかかげ、戦術的決議で一般的な、広範な、すべてを包括する要求をかかげるということをしたら、その不利益はすこぶる大きい。ドゥバソフ＝シポフ的「憲法」が確立されるにしても、農民と労働者の蜂起が勝

利するにしても、いずれにせよ、わが党の農業綱領は、かなり早急にふたたび改訂されなければならないであろう。つまり、永久にもつ家を建てようと懸命になっても、それはできない相談である。

第二の型の見解へうつろう。地主の土地の没収、その分割――それはよろしい。だが、国有化はいけない、と彼らは言う。彼らは、分割を擁護するのにはカウツキーを引合いにだし、国有化に反対するのには、すべての社会民主主義者のかつての論拠（『ザリャー』、第四号を参照せよ）を繰りかえすのである。われわれは、地主の土地の分割が、今日、全体としては、経済的な意味でも政治的な意味でも、まったく進歩的な方策であるということについては、完全に、そして無条件に同意する。われわれはさらに、ブルジョア社会では小所有者の階級は、一定の条件のもとでは、「たとえそれが立憲国家であろうとも、警察的な階級国家に依存している小作人の階級よりは……民主主義のはるかに強固な支柱でありうる」（レーニン『イクスへの回答』二七ページ）[三四] ことについても同意する。

しかし、ロシアにおける民主主義革命の現在の時機にこういう理由だけにとどまること、すなわち一九〇二年の古い立場を固守するにとどまることは、本質的に変化した社会的＝階級的情勢と政治的情勢とを絶対に考慮しないことを意味するであろう、とわれわれは考える。『ザリャー』は一九〇二年八月に（第四冊、プレハーノフの論文、三六ページ）、わが国では『モスコフスキエ・ヴェードモスチ』[三五] が国有化を擁護していることを指摘するとともに、土地国有化の要求は、いつどこでも革命的だというわけではけっしてないという、議論の余地のない正しい考えを主張した。この考えは、もちろん、正しい。だが、プレハーノフのこの同じ論文では（三七ページ）、こう指摘されている。すなわち、「革命的な時代には」（傍点はプレハーノフのもの）、大土地所有者の収奪は、わが国では必要となることがありうるし、またある事情のもとでは、収奪の問題を提起しなければならないだろう、と。

疑いもなく、いまでは情勢は一九〇二年にくらべて本質的に変化している。革命は一九〇五年に高く盛りあがり、いまや新しい高揚への力を準備しつつある。『モスコフスキエ・ヴェードモスチ』が土地国有化を擁護する（いくらかでもまじめな意味で）ことなどは、問題となりえない。それどころか、土地私有の神聖さを守ることが、ニコライ二世の勅語でもグリングムート一味の泣き言でも、その主なねらいとなったのである。農民蜂起はすでに農奴制的ルーシをゆすぶった。そして、死にかけている専制のすべての希望は、いまではもっぱら、農民運動に死ぬほどびっく

りした地主階級との取引にかかっている。『モスコフスキエ・ヴェードモスチ』だけでなく、シポフ一派の機関紙『スローヴォ』[一四三]もまたヴィッテを論難し、クートレルの「社会主義的」な案——国有化ではなく、たんに一部の土地の強制買取を提案しただけの——を論難している。「農民同盟」にたいする政府の気ちがいじみた制裁と、動揺している農民にたいする気ちがいじみた「ドラゴナード」[一四四]は、農民運動の革命的＝民主主義的性格がすでに完全に明らかになったことを、このうえなく明白に示している。

この運動は、あらゆる奥ぶかい人民運動と同じように、農民の巨大な革命的情熱と革命的エネルギーをすでに呼びおこしたし、また依然として呼びおこしている。土地にたいする地主の所有、地主的土地所有にたいするたたかいのなかで、農民は必然的に、すべての土地私有一般の廃止を要求するまでになりつつあるし、またその先進的代表者にあっては、すでに要求するまでになっている。*

* 『一九〇五年八月一日と一一月六日の農民同盟各大会の決定集』、サンクト・ペテルブルグ、一九〇五年、六ページ、および『全ロシア農民同盟創立大会議事録』、サンクト・ペテルブルグ、一九〇五年、の随所を見よ。

土地の全人民的所有という思想が今日農民のあいだにきわめて広く発酵しつつあることは、いささかも疑う余地がない。さらに、農民がどんなに無知であろうと、彼らの願望がどんなに反動的＝空想的要素をもっていようと、それにもかかわらず、この思想が全体として革命的＝民主主義的性格をおびているということもまた、疑いない。*

* 同志プレハーノフは『ドネヴニーク』第五号で、王安石（土地の国有化をおこなって失敗した一一世紀の中国の改革者）の経験を繰りかえさないようにロシアに警告し、土地の国有化という農民の考えが、その起原からして反動的であることを論証しようと努めている。この論証のこじつけは一目でわかる。まったく qui prouve trop, ne prouve rien（あまりに多くを論証するものは、なにひとつ論証しない）である。もし二〇世紀のロシアを一一世紀の中国にたとえることができるとすれば、われわれもプレハーノフも、おそらく農民運動の革命的＝民主主義的性格についても、ロシアにおける資本主義についても、語りはしないであろう。土地の国有化という農民の思想の反動的な起原（または性格）についていえば、黒い割替の思想のなかにも、反動的起原のきわめて明白な特徴があるばかりでなく、現代におけるその思想の反動的性格のきわめて明白な特徴もあるのだ。反動的要素は、農民運動全体のなかにも、農民のイデオロギー全体のなかにもある。しかしそのことは、全体としてのこの運動の革命的＝民主主義的な一般的性格をすこしも否定するものではない。だからプレハーノフは、彼の命題（一定の政治的条件のもとで土地国有化の要求をもちだすことは、社会民主主義者にとって不可能であるという命題）を、なにものによって

も論証しなかったばかりでなく、むしろ、大げさにこじつけた論証によってことさらに弱めさえしたのである。

社会民主主義者は、この思想が反動的かつ小市民社会主義的に歪曲されないように、この思想を浄化しなければならない。――このことについては、議論の余地はない。しかし、もし社会民主主義者がこの要求の革命的＝民主主義的な側面を選別することができずに、この要求全体をすてさってしまうなら、それははなはだしい誤りをおかすことになるであろう。われわれは農民にむかって率直に、しかもきっぱりと、次のように言わなければならない。土地の国有化はブルジョア的方策であって、それは一定の政治的条件のもとでだけ有益であるにすぎない、と。しかしわれわれ社会主義者がこの方策一般を、農民大衆の面前で頭から拒否してしまうことは、近視眼的な政策であろう。しかも、たんに近視眼的な政策であるばかりでなく、マルクス主義を理論的にゆがめるものであろう。というのは、マルクス主義は、土地国有化はブルジョア社会でも可能であり、考えうるものであること、それは資本主義の発展をおさえるものでなく強めるものであること、それは農業関係の分野のブルジョア民主主義的改革の最大限であることを、あますところなく明確に規定しているからである。

ところで、現在われわれが農民のまえに、ほかならぬブルジョア民主主義的改革の最大限をかかげなければならないことを、だれか否定できるものがいるだろうか？　農民の農業上の要求の急進主義（土地私有の廃止）と、彼らの政治上の要求の急進主義（共和制、等々）との結びつきを、いまでもまだ見ないでいられるだろうか？

いや、民主主義的変革を究極まで遂行することが問題となっている現在、農業問題における社会民主主義者の立場は次のようなものでしかありえない。すなわち、土地の私的所有一般が存在するもとでは、地主的所有に反対して農民的所有を擁護することであり、そして一定の政治的条件のもとでは、土地の私的所有に反対して土地の国有化を擁護することである。

さてそこで、第三の型の見解、すなわちイクス、マスロフその他の「ゼムストヴォ有化」または「州有化」へうつろう。マスロフにたいしては、ここでは、私が一九〇三年にイクスに反対して述べたのと同じことを、一部分繰りかえさなければならない。彼は「土地国有化の要求の改悪された、矛盾した定式化」をあたえている（レーニン『イクスへの回答』四二ページ）〔第六巻、四六八ページ〕。同じ箇所で、私は次のように書いている。「土地の引渡しは（一般的に言って）小さな社会組織（現在または将来のゼムストヴォのような）の手にではなく、民主主義国家の手にな

されるのが望ましい」。

マスロフはなにを提案しているだろうか？ 彼は、あれこれの土地制度がプロレタリアートにとって有利である(比較的）ような、いろいろな政治的条件をまったく指摘することなしに、国有化プラス、ゼムストヴォ有化、プラス土地の私的所有、というごたまぜを提案している。実際に、マスロフはその草案の第三項で、教会領地その他の土地を「没収」してそれを「民主主義国家の所有にうつす」ことを要求している。これは純粋な形の国有化である。そこで問題が起こる。なぜブルジョア社会での国有化を無害にする政治的条件が留保されないのか？ なぜここで、国有化のかわりにゼムストヴォ有化が提案されないのか？ なぜ、没収した土地の売却を排除するような定式化がえらばれているのか？* これらすべての質問にたいしてマスロフは答えていない。

* レーニン『イクスへの回答』二七ページを参照せよ。「いつどんな条件のもとでも社会民主党は売却に反対するだろうと言ったら、それは誤りであろう」〔第六巻、四五三ページ〕。土地の私的所有をよくないものと推定して売却しないと誓うことは、非論理的でもあれば、不合理でもある。

教会領地、修道院領地および帝室領地の国有化を提案すると同時に、国有化一般に反対することによって、マスロフは自分で自分をぶっている。国有化に反対する彼の論拠は、一部は不完全で不正確であり、一部はまったく薄弱である。第一の論拠はこうである。国有化は民族自決を侵害する。ピーテル〔ペテルブルグ〕からザカフカーズの領域を処理することはできない、と。――これは論証ではなくて、まったくの考えちがいである。第一に、民族自決権はわれわれの綱領で認められている。したがって、ザカフカーズはピーテルからはなれて自決する「権利がある」。「ザカフカーズ」(三四)が同意しないかもしれないという理由で、マスロフは四尾鞭に反対しないのか！ 第二に、地方および州の広範な自治は、われわれの綱領で一般的に認められている。したがって、「ペテルブルグの官僚が山地人の土地を処理する」(マスロフ、二二ページ)などと言うのは、まったくこっけいである！ 第三に、ザカフカーズの土地の「ゼムストヴォ有化」についての法律は、いずれにせよ、ピーテルの憲法制定議会が発布しなければならないであろう。なぜなら、マスロフは、どんな辺境地方にも、まさか地主的土地所有を維持する自由をあたえたいとは思っていないだろうから！ つまり、マスロフの全論拠はついえることになる。

第二の論拠はこうである。「土地の国有化は、すべての土地を国家の手にうつすことを前提とするのだが、はたし

て農民が、とくに自作農が、自分の土地をだれかに自発的に引き渡すことに同意するだろうか？」（マスロフ、二〇ページ）。

第一に、マスロフはことばをもてあそび、概念を混乱させている。国有化は、土地の所有権の、すなわち地代を受けとる権利の引渡しを意味するが、けっして土地そのものの引渡しを意味しはしない。国有化は、すべての農民が土地を、だれの手にであろうと自分の意志に反して引き渡すことを、いささかも意味するものではない。このことを実例でマスロフに説明しよう。社会主義的変革は、土地の所有だけでなく、経営対象としての土地そのものを、社会全体の手にうつすことを意味する。しかしこのことは、社会主義者が小農民から彼らの土地を、彼らの意志に反して取りあげようと欲しているということを意味するだろうか？いや、道理をわきまえた社会主義者ならだれひとりとして、いままでそんなばかげたことを提案したものはないのである。

土地の私的所有を社会的所有によっておきかえることについて述べている社会主義的綱領のなかで、こんなことをとくにことわる必要があると考えるものが、だれかいるだろうか？　いや、社会民主主義者の党はどれ一つとして、そのようなことをわざわざことわりはしない。ましてわれわれには、国有化について根も葉もない恐怖を考えだす理由はないのである。国有化とは、地代を国家へ引き渡すことである。農民は、多くの場合、土地からなんの地代も受けとっていない。つまり、国有化のさいには、彼らはなにひとつ支払う必要がないばかりか、農民的民主主義国家（マスロフが彼のゼムストヴォ有化をうんぬんするさいに暗黙のうちに前提し、しかも彼が正確には規定していないもの）は、累進所得税を実施して、小経営者の支払を軽減するのである。国有化は土地の動産化を容易にするが、しかし、小農民から彼らの土地を彼らの意志に反して取り上げることをすこしも意味するものではない。

第二に、自作農の「自発的同意」という見地から国有化に反対する論証をするのなら、われわれはマスロフにたいして次のように反問しよう。所有者である百姓は、農民がそのなかで一勢力をなすはずの「民主主義国家」が、優良地を、すなわち地主や教会や帝室の土地を、賃貸しによってしか彼らにあたえないというようなことに、「自発的に同意するだろうか」？　それはつまり、劣等地、分与地はお前に所有させるが、優良地、地主の土地は賃借りせよ、ということではないか。黒パンはただでとれ、だが白パンには金をはらえ、である。農民はこれにけっして同意しないであろう。同志マスロフよ、二つに一つである。すなわち、

経済上の関係から私的所有が必要となり、しかもそのほうが有利であるか、――それならば、地主の土地の分割を、あるいは一般に没収を、論じるべきである。それとも、すべての土地の国有化が可能であり、有利であるか、――それならば、農民のためにかならず特別の例外を設けるべき必要はない。国有化を州有化と結合し、州有化を私的所有と結合することは、まったくの混乱である。民主主義革命が、どんなに完全に勝利した場合でも、このような方策はけっして実現されはしないだろうということは、保障してよい。

三 同志マスロフの最大の誤り

次に、前述のことから出てくるもので、もっとくわしく究明する必要のある、もう一つの考えに立ちいってみなければならない。われわれはたったいま、マスロフの綱領は実現不可能だということを保障してもよい、と述べた。一般的にいえば、綱領のある要求が、現在の情勢のもとでは、あるいはきわめて近い将来には実行されそうにもないという意味で、「実現不可能」だということは、これらの要求に反対する論拠とはみなしえない。K・カウツキーは、ポーランドの独立の問題でローザ・ルクセンブルグに反対した論文のなかで、このことをきわめてあざやかに指摘している。[*] ローザ・ルクセンブルグが、この独立は「実現不可能」だと言ったのにたいして、K・カウツキーは、次のように反駁した。問題は、前述の意味での「実現可能性」にあるのではなく、ある要求が、文明世界全体における社会の発展の一般的傾向に、あるいは一般的な経済的および政治的情勢に合致しているかどうか、ということにある。たとえば、人民によるあらゆる官吏の選挙というドイツ社会民主党の綱領の要求をとってみたまえ。カウツキーはこのように言ったのである。もちろん、この要求は、ドイツにおける今日の情勢という見地からみれば、「実現不可能」である。だがそれにもかかわらず、この要求は完全に正しくて必要な要求である。なぜなら、それは、徹底的な民主主義的変革――社会の発展全体がそれをめざしてすすんでおり、また社会民主党が、社会主義の条件として、社会主義の政治的上部構造の必要不可欠な構成要素として、かちとろうと努力している徹底的な民主主義的変革――の、切りはなしがたい構成部分だからである。

＊ この論文の抜粋は、『ザリャー』[(138)]第四号の農業綱領草案についての私の論文にあげておいた。

われわれがマスロフの綱領は実現不可能だと言うさい、民主主義革命がどんなに完全に勝利した場合でも、という

ことばに傍点をうったのは、このためである。われわれはけっして、マスロフの綱領が今日の政治的関係と政治的条件から見て実現不可能だと言っているのではない。いや、われわれが主張しているのは次のことである。すなわち、完全な、究極まで徹底した民主主義的変革がおこなわれた場合でも、すなわち、現在の政治的条件とはまったくかけはなれているような、そして根本的な土地改革に最も好都合であるような、まさにそういう政治的条件のもとでも、マスロフの綱領が実現不可能であるのは、それが、これらの条件から見ていわば過大であるからではなく、それが過小であるからなのである。言いかえれば、もし民主主義革命が完全に勝利するにいたらなければ、地主的土地所有の破壊も、帝室その他の土地の没収も、公有化等々も、なんら真剣に論じることはできない。反対にまた、民主主義革命が完全に勝利するにいたるならば、その変革は、一部の土地の公有化だけにとどまることはできない。地主的土地所有全体を一掃する変革（マスロフも、地主所有地の分割または没収に賛成しているすべての人も、ほかならぬこのような変革を予想しているのだが）――このような変革は、歴史上かつてなかった程度にたっする革命的なエネルギーと革命的展開力とを要求する。地主所有地を没収することなしに（マスロフはその綱領草案のなかで、「収用」について述べているだけで、没収については述べていない）、すべての土地の国有化という思想を「人民」のあいだにきわめて広範にひろめることなしに、また、民主主義の政治的に最もすすんだ諸形態を創出することなしに、このような変革の可能性を予想するのは、ばかげたことを予想することを意味する。社会生活のあらゆる側面は、たがいにかたく結びつき、結局のところ、生産関係に完全に従属している。地主的土地所有の廃絶という根本的方策は、国家形態の根本的な変化なしには（ところでこの変化は、現在の経済的改革のもとでは、民主主義の方向でのみ可能であるのだが）考えられないし、またきわめて多種多様な私的土地所有の廃絶を要求する「人民的」および農民的思想が、土地私有一般に反対して立ちあがることなしには、考えられない。言いかえれば、地主的土地所有の廃絶というような決定的な変革は、それ自体、不可避的に、社会的、経済的、政治的発展全体にたいして、前進へのきわめて強い刺激をあたえるものである。このような変革の問題を日程にのぼせる社会主義者は、かならず、その問題から出てくる新しい問題をも熟考し、この変革をたんにそれの過去の見地からだけでなく、それの将来の見地からも、考察しなければならない。

まさにこの面からして、同志マスロフの草案はとくに不

満足なものである。この草案は、第一に、土地革命を今日、いま、即刻燃えあがらせ、強め、おしひろげ、「組織化」すべきスローガンの定式化を誤っている。このようなスローガンでありうるものは、ただ、すべての地主所有地の没収、およびこの目的のための、人民に身ぢかで、強力な地方的革命権力の機関の唯一の合目的的な形態としての、まちがいない農民委員会の設置である。この草案は、第二に、次の理由からして正しくない。すなわち、それは、それなしには「公有化」がプロレタリアートと農民にとってかならずしも有益な方策でないばかりでなく、むしろ確実に有害な方策でさえある政治的条件を、正確に指示していない。つまり、それは「民主主義国家」についての正確で明瞭な概念規定をなにもあたえていないのである。この草案は、第三に、――そしてそれは、最も本質的であるが、きわめてまれにしか気づかれない欠陥の一つであるが――今日の土地変革をその将来の見地から見ず、この変革から直接に出てくる任務を指示しておらず、そして、この草案の基礎となっている経済的前提条件と政治的前提条件との対応を欠くという欠陥をもっている。

実際に、マスロフの草案を擁護できる最も有力な（第三の）論拠を、もっと注意ぶかく観察してみたまえ。この論拠は次のとおりである。国有化がブルジョア国家の権力を強めるのに反して、このような国家の自治体機関と一般に地方機関は、より民主主義的で、軍隊の費用も負担していないし、プロレタリアートの警察力による抑圧という任務を直接には遂行しない、その他等々。容易にわかることだが、この論拠が予想しているのは、完全には民主主義的でない国家、すなわち、ほかならぬ最も重要な点である中央権力が軍事的＝官僚主義的旧制度と最も密接な関係を維持しているような国家、地方機関が、第二義的で従属的なものであるので、中央機関よりは良くて、より民主主義的であるような国家である。すなわち、この論拠は、最後までは遂行されなかった民主主義的変革を予想しているのである。この論拠は、ゼムストヴォが中央機関よりも良いものであったアレクサンドル三世の時代のロシアと、「共和主義者のいない共和国」〔四〕の時代のフランス、すなわち、プロレタリアートが強大になったのにびっくりした反動的ブルジョアジーが、地方機関よりもはるかに悪く、より民主主義的でなく、軍人気質と官僚主義と警察政治の精神がより多くしみこんでいた中央機関をもった、反民主主義的な「君主主義的共和国」をつくりだした時代のフランスとの、なにか中間的なものを、暗黙のうちに予想しているのである。マスロフの草案は、本質的には、暗黙のうちに次のことを予想している。すなわち、われわれの政治的最小限綱

領の要求が完全には実現されないということ、人民の専制は確保されず、常備軍は廃止されず、官吏の選挙制は実施されない、等々ということ——言いかえれば、ヨーロッパの民主主義革命の大部分がそうであったように、われわれの民主主義革命もまた究極までは遂行されず、それらの民主主義革命と同じように、切りちぢめられ、ゆがめられ、「あともどりさせられる」ということである。マスロフの草案は、中途はんぱな、不徹底な、不完全な、あるいは、反動によって切りちぢめられ「無害にされた」民主主義的変革に、特別に適合させられているのである。*

* マスロフが引合いに出しているカウツキーは、その著書『農業問題』のなかで、国有化は、メクレンブルグの条件のもとではばかげていても、民主主義的なイギリスまたはオーストラリアでは別な意義をもつであろうと、とくにことわっている。

ほかならぬこの事情こそ、マスロフの草案を、まったく人為的な、機械的な、さきに述べた意味で実現不可能な、内的に矛盾した、ぐらついた、一面的なものにしているのである（というのは、民主主義的変革からの移行が、反民主主義的なブルジョア的反動のほうにむかってだけ考えられていて、社会主義をめざすプロレタリアートの激烈な闘争への移行は考えられていないからである）。

民主主義的変革が究極までは遂行されないだろうとか、われわれの政治的最小限綱領の根本的要求が実現されないだろうとか、暗黙のうちに予想することは、まったく許しがたいことである。こういうことは、けっして黙っておくべきではなく、まったく精密に指示すべきものである。もしマスロフが自分に忠実であろうと欲するなら、もし彼が自分の草案のなかにある、言いたりなさや内的虚偽のあらゆる要素を取りのぞこうと欲するなら、彼は次のように言わなければならないであろう。すなわち、わが国の、今日の変革から生まれてくる国家は、「たぶん」、あまり民主主義的でないであろうから、この国家の権力を、国有化によって強めるよりも、ゼムストヴォ有化によって制限するほうがよいだろう。というのは、ゼムストヴォのほうが、「おそらく」中央の国家機関よりは良く、またより民主的であるからである。これが、そしてこれだけが、マスロフの草案の暗黙の前提なのである。だから、彼がその草案のなかで「民主主義国家」という表現を、しかもなんのことわりもなく使用している（第三項）のは、このうえない虚偽を語り、自分自身とプロレタリアートと全人民を混迷におとしいれるものである。なぜなら、実際には、彼は自分の草案を、ほかならぬ非民主主義的な国家に、つまり、究極までは遂行されなかったか、あるいは反動によって「取り上

げられた」民主主義から生まれた反動的な国家に、「適合」させているからである。

はたしてそうだとすれば――それは疑いもなくそうなのだが――マスロフの草案がまったく人為的で「作為的」なものであることは、明らかとなる。実際に、もし地方権力よりも反動的な中央権力をもった国家、共和主義者のいないフランスの第三共和国のような国家を予想するとすれば、このような国家のもとで地主的土地所有を廃絶することが可能であるとか、あるいは、革命的強襲によって実現される地主的土地所有の廃絶をこの国家のもとでせめて維持することが可能であるとかいう考えを容認するのは、まったくこっけいなことになる。ヨーロッパとよばれる世界の一部では、そして二〇世紀とよばれるこの世紀には、このような国家はみな、階級闘争の客観的論理によって、不可避的に、地主的土地所有の保全から、あるいはそれが一部分すでに破壊されているならそれの復活から、始めるに相違ない。この種のあらゆるなかば民主主義的な、実際には反動的な国家の全意義、客観的な意義は、最小の重要性しかもたない特権だけを犠牲にすることによって、ブルジョア的〟地主的および官僚的な権力の根本の基柱を守りとおすということにあるのではないか。このような国家に、反動的な中央権力と比較的「民主主義的」な地方機関、すなわちゼムストヴォや、自治体政庁、等々が共在しているのは、ひとえに、もっぱら、これらの地方機関が、ブルジョア国家にとって無害で、「現存の社会秩序」とよばれるものの基礎を破壊する恐れのない、「洗面器のめっき」とか、給水とか、電車等々という施策に従事しているからではないか。給水とか照明とかいうゼムストヴォの活動を観察して得たものを、地主的土地所有の廃絶というゼムストヴォのありうべき「活動」のうえにおしひろげることは、子どもじみた素朴さと言うべきであろう。それはあたかも、フランスのどこか片田舎の、社会民主主義者ばかり出ている市議会が、私有の建物がぎっしり立ちならんでいる土地の私的所有を、フランス全土にわたって「公有化」しようとくろむのと同然であろう。問題はまさに、地主的土地所有を廃絶する方策が、給水や照明や衛生施設その他を改善する方策とは、性格の点ですこしばかり違うという点にある。問題はまさに、第一の「方策」が「現存の社会秩序」全体の根本の基礎に不敵にも「ふれ」、巨大な力でこの基礎をゆりうごかし、掘りくずし、ブルジョア制度全体にたいするプロレタリアートの、歴史上かつてなかった規模での強襲を容易にする点にある。しかり、ここでは、あらゆるブルジョア国家は、なによりもまず、またなによりも多く、ブルジョアジーの支配の基礎を保全することに配慮しなけ

ればならないであろう。ひとたびブルジョア的＝地主的国家の根本的利害にふれるとなれば、洗面器を自治色にめっきする権利や特権はみな一瞬のうちに廃棄され、公有化はことごとく即座に吹きとんでしまい、地方機関における民主主義のあらゆる影が「懲罰隊」によって駆除されてしまうであろう。無邪気な様子をして、反動的な中央権力のもとでの自治体の民主主義的自治を予想し、この「自治」を地主的土地所有の廃絶にひろげることは、明瞭な不条理の、あるいは際限のない政治的幼稚さの、比類ない見本を提供することを意味する。

四　われわれの農業綱領の課題

ロシア社会民主労働党の農業綱領の問題は、もしわれわれがこの綱領を、民主主義革命の時代に社会民主党がプロレタリアートと農民にあたえるべき簡単で明白な助言の形で述べようと試みるならば、いちじるしくはっきりするであろう。

第一の助言は、不可避的に、次のようなものであろう。——農民蜂起の完全な勝利をめざして全力を傾けよ。このような勝利なしには、地主からの「土地取上げ」についても、真に民主主義的な国家の樹立についても、まじめに語ることさえできない。ところで、農民に蜂起を呼びかけるスローガンはただ一つしかありえない。それは、すべての地主所有地の没収であり（買取りの問題をぼんやりさせている収用一般または収奪一般ではけっしてなく）、しかもかならず憲法制定議会以前に農民委員会によって没収することである。

その他のあらゆる助言（マスロフが持ちだしている「収用」のスローガン、および彼の公有化全体）は、問題の解決を蜂起によってではなく、地主との取引によって、反動的中央権力との取引によってはかろうとする呼びかけであり、また問題の解決を、革命的方法によってではなく、官僚主義的方法によってはかろうとする呼びかけである。なぜなら、現地でただちに地主を処断しなければならず、また全人民的憲法制定議会の承認を受ける権限をにぎらなければならない革命的農民委員会にくらべれば、最も民主主義的な州や組織やゼムストヴォ組織でも、官僚主義的でないわけにはいかないからである。

第二の助言は、不可避的に、次のようなものであろう。——政治制度の民主化を完全に遂行することなしには、すなわち、共和制がなく、実際に人民の専制を確保することなしには、農民蜂起の獲得物を維持することも、たとえ一歩でも前進することも、思いもよらない。どんな疑惑も、

どんなあいまいさも、どんな曲解もありえないようにするため、また、反動的中央権力のもとで地主的土地所有の廃絶が可能であるというようなたわごとを暗黙のうちに容認するようなことがありえないようにするために、われわれは、労働者と農民にあたえるわれわれのこの助言を、とくにはっきりと正確に定式化しなければならない。だからこそ、われわれの政治的助言を強力に押しだすにあたって、われわれは農民に次のように言わなければならない。土地を手に入れたあと、諸君はさらに前進しなければならない。そうしなければ、諸君は不可避的に地主と大ブルジョアジーによって撃破され、後方へ投げかえされるであろう。新たな政治的獲得物なしには、また、総じて土地の私的所有全体にたいして新しい、いっそう決定的な打撃をくわえることなしには、土地を手に入れ、これを保持することはできない。あらゆる社会生活におけると同じように、政治でも、前進しないでいることは後方へ投げかえされることを意味する。民主主義的変革ののちに強固になったブルジョアジー（民主主義的変革は、当然、ブルジョアジーを強固にする）が、労働者の獲得物をも、農民大衆の獲得物をも取り上げてしまうか、――それとも、プロレタリアートと農民大衆が自分の進路を切りひらくか、どちらかである。ところで後者の場合は、共和制と完全な人民専制である。つまりまた、共和制を獲得したという条件のもとでの、いっさいの土地の国有化である。そしてこれは、ブルジョア民主主義的変革の可能な最大限であり、またブルジョア民主主義の勝利から、社会主義のための真の闘争の始まりへの、自然で必要な一歩前進なのである。

第三の、最後の助言はこうである。――都市と農村のプロレタリアと半プロレタリアよ、独自にみずからを組織せよ。どんな経営主をも、たとえ小経営主、「勤労的」経営主でも、信頼するな。商品生産が存続しているもとでの小経営にまどわされるな。事態が農民蜂起の勝利に近づけば近づくほど、プロレタリアートに反対する方向への経営主たる農民の転換は近づき、独立のプロレタリア組織はますます必要となり、われわれはますます精力的に、ねばりづよく、断固として、大声で、完全な社会主義革命を呼びかけなければならない。われわれは農民運動を最後まで支持する。だがわれわれは、それが他の階級の運動であって、けっして社会主義的変革を遂行することができるしまた実際に遂行する階級の運動ではないことを、心にとどめておかなければならない。だからわれわれは、経営対象としての土地の分配という意味で土地をどうするかという問題はまったくあつかわない。この問題は、ブルジョア社会内で解決できるものであり、また経営主や小経営主だけが解決する

問題である。まったく、われわれの関心をひくのは（農民蜂起が勝利したのちには、ほとんどそれしか関心をひかないのだが）、農村プロレタリアートはなにをなすべきか、という問題である。土地用益の平等とか、それに類したいっさいのことを考えだす仕事は、小ブルジョアの思想的代表者たちにまかせておいて、われわれは現在この問題に取りくんでいるし、将来も主としてこれに取りくむであろう。われわれは新しい、ブルジョア民主主義的ロシアの根本問題であるこの問題にたいして、次のように答えるであろう。——農村プロレタリアートは、完全な社会主義的変革をめざす闘争のために、都市プロレタリアートとともにみずからを独自に組織しなければならない、と。

したがって、われわれの農業綱領は三つの基本的部分から成りたたなければならない。すなわち、第一に、地主的土地所有にたいする農民の革命的強襲というきわめて断固たる呼びかけを定式化すること、第二に、農民の獲得物をうちかため、民主主義の勝利から社会主義のためのプロレタリアートの直接の闘争へうつるために、運動が歩みうるし、また歩まなければならないよりいっそうの前進の道を正確に指示すること、第三に、農民蜂起の勝利が近づけば近づくほど、ますます切実にわれわれにせまってきて、ますます執拗に明確な提起を要求する、党の階級的、プロレタリア的任務を指示すること。

マスロフの綱領は、今日ロシア社会民主労働党が解決すべき基本的な諸任務をどれひとつ解決していない。この綱領は、いまただちに、すなわち、きわめて反民主主義的な国家の時代に、農民運動を勝利にみちびくようなスローガンをあたえていない。この綱領は、土地改革を完成し、うちかためるのに必要な政治的改革を正確に規定していない。それは、きわめて完全な徹底した民主主義の条件のもとで、土地改革の分野で必要な方策を指示していない。それは、すべてのブルジョア民主主義的改革にたいするわが党のプロレタリア的な立場を特徴づけていない。この綱領は、「第一歩」の条件をも、「第二歩」の任務をも規定せずに、すべてをいっしょくたにしている。すなわち、帝室領地を、ありもしない「民主主義国家」の手にうつすことからはじめて、中央権力が非民主主義的なものになるという危惧からして、地主の土地を民主主義的な自治体の手へ引き渡すというふうにつづけている！　この綱領は、現在、その実践的意義からは非革命的であり、そして、なかば反動的な中央権力とのまったく人為的でまったくありそうもない取引の予想のうえに立てられているものであって、それは、ロシアにおける民主主義的変革が可能と考えられるどのような発展過程をたどろうとも、労働者党に指針をあたえる

ことはできないのである。

総括しよう。民主主義的変革の条件のもとで唯一の正しい綱領は、次のようなものである。すなわち、地主の土地の没収と農民委員会の設置*とを、われわれはただちに要求し、そしてこの要求に、どんな制限的な保留条件もつけてはならない。このような要求は、どんな条件のもとでも、最悪の条件のもとでさえ、革命的であり、そして、プロレタリアートの立場からしても農民の立場からしても有利である。このような要求は、不可避的に、警察国家の崩壊と民主主義の強化をもたらさずにはおかない。

* イクスと同じように、マスロフも「われわれが身分の廃止を要求しながら、農民委員会すなわち身分的な委員会の設置を要求している点に、矛盾を見いだしている。だが実際には、そこにある矛盾は外見上のものにすぎない。身分を廃止するためには、抑圧されている下層身分の『執権（ディクタトゥーラ）』が必要であって、それは、プロレタリア階級をもふくむ階級一般を廃絶するためにはプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）が必要であるのと、まさに同じことである。われわれの農業綱領全体は、土地関係の分野における農奴制的・身分制的伝統の一掃を目標としているが、これを一掃するためには、もっぱら下層の身分に、農奴制度のこれらの残存物によって抑圧されている人に、呼びかけるほかないのである」(一五)(レーニン『イクスへの回答』二九ページ)。

しかし、没収だけにとどまってはならない。民主主義革命と農民蜂起の時代には、われわれは、どんな場合にも、絶対に土地の国有化を排斥することはできない。ただ、それがないと国有化がプロレタリアートと農民に害悪をおよぼすかもしれないような一定の政治制度を、まったく正確に指示することを、この要求の条件とすることが必要である。

このような綱領は完全で完璧であろう。それは、あらゆるブルジョア民主主義的変革のもとで総じて考えられるものの、無条件の最大限をあたえるであろう。それは、社会民主党の手をしばらないのであって、政治情勢の相違におうじて分割をも国有化をも容認するであろう。それはどんな場合にも、民主主義をめざす戦士としての農民とプロレタリアートとのあいだに反目をもちこみはしないであろう。*それはいまただちに、すなわち警察的＝専制的政治制度のもとで、無条件に革命的な、そしてこの制度を変革するようなスローガンを打ちだすだろうし、さらにまた、民主主義革命の完全な勝利という条件のもとでは、すなわち民主主義的変革の完成が新しい展望と新しい任務をあたえるという情勢のもとでは、それ以上の要求をもかかげるであろう。

* 労働者党が、農民の意志にかかわりなしに、農民の内部の独自の動きにかかわりなしに、なんらかの改革案を農民にお

しつけようと欲しているかのように見るすべての考えを取りのぞくために、綱領草案にたいして、異案Aを添える。このなかでは、国有化の直接の要求のかわりに、はじめに、土地の私的所有を廃止しようとする革命的農民の志向を党は支持すると述べてある。

・

民主主義的な農業変革全体でのわれわれの独自のプロレタリア的な立場を正確に示すことは、綱領では絶対に必要である。このような指示は戦術的決議のうちにあること、あるいは、それが綱領の一般的部分の繰りかえしであることに、とらわれるにはおよばない。

われわれの立場を明確にし、その立場を大衆にたいして明らかにするためには、主題を綱領的なものと戦術的なものとに分ける整然とした図式を犠牲にしてもさしつかえない。

農業問題小委員会（「農業問題小委員会」は、新しい農業綱領の草案を作成するために、ロシア社会民主労働党の合同中央委員会によって任命されたものである）の多数派によって起草されたそのような農業綱領草案を、われわれは次に提案する。

五　農業綱領草案

農民を直接重圧している農奴制度の残存物の除去を目的として、また農村における階級闘争の自由な発展のために、党は次のことを要求する。

一、教会領地、修道院領地、帝室領地、国有地、御料地、および地主の土地をすべて没収すること。

二、地主の権力および地主の特権のあらゆる痕跡をただちに根絶するため、また全人民的憲法制定議会によって新しい土地制度が制定されるまで没収地を事実上管理するために、農民委員会を設置すること。

三、人頭税負担身分としての農民に現在課せられているあらゆる貢租と義務負担を廃止すること。

四、農民が彼の土地を処分するのを拘束しているいっさいの法律を廃止すること。

五、法外に高い小作料を引き下げ、債務奴隷制的な契約の無効を宣言する権限を、選挙された人民裁判所にあたえること。

もしロシアにおける今日の革命の決定的な勝利が、人民の専制を完全に確保するなら、すなわち共和制と、完全に民主主義的な国家体制をつくりだすなら、党は、土地の私的所有を廃止し、すべての土地を全人民の共同所有にうつすことに努力するであろう。*

* 異案A、

……党は、土地の私的所有の廃止をめざす革命的農民の志向を支持し、すべての土地を国家の所有にうつすことに努力するであろう。

そのさいロシア社会民主労働党は、農村プロレタリアートを独自の階級として組織することにたゆみなく努めること、彼らの利害と農民ブルジョアジーの利害との和解できない対立を彼らに説明すること、商品生産が存続しているもとでけっして大衆の窮乏を絶滅できない小経営制度にまどわされないように彼らに警告すること、最後に、あらゆる窮乏とあらゆる搾取をなくす唯一の手段としての、完全な社会主義的変革の必要を示すことを、あらゆる場合に、民主主義的農業改革のあらゆる状況のもとで、自己の任務とするものである。

一九〇六年三月後半に執筆
一九〇六年四月はじめ、出版所「ナーシャ・ジーズニ」から単行本として発表
全集、第五版、第一二巻、二三九—二七〇ページ所収
邦訳全集、第一〇巻、一五〇—一七八ページ所収

国会の解散とプロレタリアートの任務(二三)

国会の解散(二三)は、労働者党のまえに、幾多のきわめて重要な問題を提起している。そのなかで、最も主要なものをあげよう。(一)わが革命の過程でこの政治的事件のもつ意義を一般的に評価すること。(二)こんごの闘争の内容とそのスローガンを規定すること。(三)こんごの闘争の形態を規定すること。(四)闘争の時機を選択すること、あるいは、もっと正確にいえば、この時機の正しい選択をたすけることができるような事情を考慮すること。

これらの問題について、簡単に述べてみよう。

一

国会の解散は、国会の「立憲的」外観と、一九〇六年第二・四半期のロシア政治の立憲的な——もしこう表現してもよければ——外観とに夢中にならないように警告してきた人々の見解をきわめて明瞭に、きわめてはっきりと確証した。わがカデット(とカデットびいき)が、国会をまえにして、国会について、また国会と関連して際限もなくしゃべった「大言壮語」は、いまや実生活によって完全にそのみじめさを暴露されている。

国会は厳密な憲法上の根拠によって解散された、という興味のある事実に注目せよ。けっして「追いちら」されたわけではない。けっして法律違反があったわけではない。それどころか、あらゆる「立憲君主制」の場合とおなじように、厳密に法律にしたがっておこなわれたのである。最高権力は「憲法に」もとづいて、議院を解散した。これこれの条項にもとづいて、この「議院」は解散され、おなじ勅令によって(よろこべ、法律万能論者諸君!)新しい選挙または新国会の召集期日が指定された。

ロシア憲法が幻想であること、わが祖国の議会制度が虚構であることを、社会民主党の左派は一九〇六年の前半期全体をつうじてねばりづよく指摘してきたが、まさにこのことがここに一挙に表面に現われたのである。そしていまや、「偏狭で狂信的な」「ボリシェヴィキ」ではなしに、きわめておとなしい合法主義的な自由主義者たちが、ロシア

憲法のこの特殊な性格を認めた。しかも自分たちの行動によってそれを認めたのである。カデットは、ヴィボルグへの大量の「国外脱出」で、法律に違反するアピール(一三)で国会の解散にこたえることによって、また、きわめて穏健な『レーチ』(一四)紙のもろもろの論説でこたえ、また現にこたえていることによって、認めたのである。ところで、この『レーチ』は、問題となっているのは実際には専制の復活であること、スヴォーリンが新しい国会まで生きのびられるかどうかおぼつかないと書いているのは、うっかり真実をもらしたものであることを、承認せざるをえないのである。カデットの強い期待は、みなたちまち「憲法」から革命に移ってしまったが、それも、ひとえに最高権力の厳密に立憲的な行為の結果なのである。ところがまだきのうまではカデットは、自分たちが「王朝の盾(たて)」であり、厳格な立憲制の支持者であることを国会で自慢していたのである。

　実生活の論理は、憲法教科書の論理よりも強い。革命は教える。

　カデットの勝利について社会民主党の「ボリシェヴィキ派」が書いたこと(エヌ・レーニンの小冊子『カデットの勝利と労働者党の任務』〔全集、第一〇巻、一八一―二六六ページ〕参照)は、みな、みごとに確証された。カデットの一面性と近視眼ぶりは、すべて明白になった。立憲的幻想――それは一つの案山子(かかし)であって、この案山子によって頑固なボリシェヴィキが見わけられたのであるが、――は、まさに幻想として、幽霊として、幻像として、万人のまえに現われたのである。

　国会は存在しない！と――『モスコフスキエ・ヴェードモスチ』(一六)と『グラジダニン』(一五)は、喜びのあまり夢中になって叫んでいる。憲法は存在しない！と――わが憲法の精通者、あのように巧みに憲法を引用し、その各条項をあのように玩味していたカデットは、しょげ返ってこう繰りかえしている。社会民主主義者は有頂天にもならなければ(われわれは国会からさえ、取れるものは取った)、落胆もしないであろう。人民は、自分の幻想の一つを失ったことで儲けものをした、と社会民主主義者は言うであろう。

　実際、ロシアの全人民は、カデット党をつうじて書物からではなしに、彼ら自身の創造する彼ら自身の革命からまなんでいる。われわれはかつて、人民は、カデットをつうじてブルジョア的解放の最初の幻想から脱しているが、トルドヴィキをつうじてブルジョア的解放の最後の幻想から脱するであろう、と述べた〔『カデット、トルドヴィキおよび労働者党』、全集、第一〇巻、四五八ページ〕。カデットは、旧権力を打倒することなしに、農奴制、専横、専断、アジア的野蛮、専制からの解放を夢みた。カデットのせま

い夢想はすでに破産してしまった。トルドヴィキは、商品経済を廃絶することなしに、大衆の貧困からの、人間による人間の搾取からの解放を夢みている。彼らもやはり破産するであろう――しかも、もしわが革命がわが革命的農民の完全な勝利にみちびくならば、遠くない将来に。

カデットの急速な興隆、選挙における彼らのめざましい勝利、カデット的国会における彼らの勝利、「愛する君主」（この君主は、彼に愛をうちあけたローヂチェフの面につばをひっかけたと言えよう）の一筆による彼らの急速な没落――これらすべては、重大な政治的意義をもつ事件であり、人民の革命的発展の諸段階をあらわしている。人民すなわち広範な住民大衆の大多数は、一九〇六年まではまだ自覚した革命性をもつほどに成長していなかった。専制は耐えがたいものであるという意識は、一般にゆきわたっていた。官僚政府が役に立たないものであるという意識も、人民代議機関が必要であるという意識も同様であった。しかし人民は、旧権力と権力をもつ人民代議機関とが和解しえないものだということを、まだ意識し感じとることができなかった。すでに明らかになっているように、人民には、そのための特別な経験、すなわちカデット的国会の経験が、なお必要だったのである。

カデット的国会は、その短い人生行路のあいだに、権力をもたない人民代議機関と権力をもつ人民代議機関とのあらゆる相違を人民にまのあたり示した。われわれのスローガンである憲法制定議会（すなわち完全な権力をもった人民代議機関）は、あくまで正しいものであったが、しかし実生活すなわち革命は、われわれが予想しえたよりももっと長期の、紛糾した道をとおって、このスローガンへみちびいたのである。ロシア大革命の主要な諸段階を一瞥したまえ。そうすれば、人民が経験にもとづいて、一段一段と憲法制定議会というスローガンへ近づいていったことがおわかりになろう。まず一九〇四年末の「信頼」の時代があった。自由主義者は有頂天になった。彼らは舞台の前面全部を占領した。あまりしっかりしていない社会民主主義者は当時の二つの主要な勢力は自由主義者と政府であるとすら言った。だが人民は「信頼」の念にあふれ、一月九日には「信頼して」冬宮に出かけていった。[20]「信頼」の時代は、第三の勢力、プロレタリアートを進出させ、専制政府にたいする人民の最大の不信の端初となった。「信頼」の時代は、「信頼」をうんぬんする政府のことばを信じることを人民が拒否することで終わった。

次の段階。ブルィギン国会が約束された。信頼が行為によって確証された。人民代表が召集された。有頂天になった自由主義者は、選挙への参加を呼びかけた。自由主義的

教授たちは、ブルジョアジーの「思想的」腰巾着にふさわしく、生徒にむかって、革命にたずさわらずに、勉強するように呼びかけた。あまりしっかりしていない社会民主主義者は、自由主義者の論拠に屈した。人民が舞台に登場した。プロレタリアートは、十月ストライキによってブルィギン国会を一掃し、自由を奪取し、詔書を、形式と内容において完全に立憲的な詔書をかちとった。人民は、自由の公約を手にいれるだけでは不十分であって、さらに自由を奪取する力をもたなければならないことを、経験にもとづいて確信するようになった。

さらに政府は一二月に自由を取り上げようとした。プロレタリアートは蜂起した。最初の蜂起は打ちやぶられた。しかしモスクワの街上での、武器を手にした頑強な決死の闘争は、国会の召集を避けえられないものにした。プロレタリアートのボイコットは成功しなかった。プロレタリアートは、ヴィッテ国会を廃棄するにたる力をもたないことがわかった。カデットがヴィッテ国会をみたした。人民代議機関は既成の事実となった。カデットは有頂天になった。彼らの歓呼の叫びは際限がなかった。プロレタリアートは懐疑的に形勢を観望していた。

国会は、仕事を始めた。人民は、自由のわずかな拡大を、カデットの一〇倍も利用した。カデット的国会は、その志気と決意の点で、たちまち人民よりおくれた。カデット的国会の時期(一九〇六年の五月と六月)は、カデットよりも左翼の諸政党が最大の成功をおさめた時期となった。すなわち、トルドヴィキは国会内でカデットを非難し、社会民主党と民衆会ではカデットの臆病なことを非難し、カデットを追いこし、人エス・エルの定期刊行物が増大し、革命的農民運動や軍隊内の動揺が激しくなり、十二月蜂起で疲れきったプロレタリアートが活気をとりもどした。カデット的立憲主義の時代は、非カデット的、非立憲主義的な、革命運動の時代であることがわかった。

この運動が、国会の解散をよぎなくした。経験は、カデットが、「泡」にすぎないことを確証した。カデットの力は、革命の力から派生したものである。ところで政府は、本質的には革命的な(形式からみると立憲的ではあるが)国会解散で革命にこたえた。

人民代議機関が完全な権力をもたず、旧権力によって召集され、それとならんで旧権力がまだ無きずであるかぎり、それは無価値であるということを、人民は経験にもとづいて、確信するようになった。もろもろの事件の客観的な進展は、すでに、法律や憲法のあれこれの表現の問題ではなしに、権力の問題、現実的な権力の問題を日程にのぼせた。どんな法律や選出された代表であろうと、権力をもってい

なければ無価値である。カデット的国会は、まさにこのことを人民に教えた。では、死者のために「永遠の追憶」をうたい、その教訓をよく活用しよう！

二

こうして、われわれは第二の問題に到達した。客観的な、歴史によって課せられた、きたるべき闘争の内容の問題、われわれがこの闘争にあたえなければならないスローガンの問題に。

あまりしっかりしていない社会民主主義者、メンシェヴィキは、ここでもたちまち動揺ぶりをさらけだしてしまった。彼らの最初のスローガンは、憲法制定議会の召集を目的とする国会再開のための闘争というのであった。ペテルブルグ委員会は抗議した。このスローガンのばかばかしさは、あまりにも明らかであった。それは日和見主義でさえなく、まったくナンセンスであった。中央委員会は一歩前進した。そのスローガンは、憲法制定議会を召集する目的で、国会を擁護するために政府とたたかえ、であった。このほうがもちろんよい。すでに、それは革命的方法によって憲法制定議会を召集するために、専制政府の打倒をめざしてたたかえ、というスローガンから遠くない。国会の解散は、疑いもなく、権力をもった人民代議機関をめざす全人民的闘争のきっかけとして役だつ。この意味では「国会を擁護するために」というスローガンは、かならずしも受けいれられないものではない。しかし、この意味では、このスローガンは、すでに国会解散をわれわれが闘争のきっかけとして、認めることのうちにふくまれている、という点が重要である。この意味での（すなわちいま述べた意味での）特別の解釈をぬきにしては、「国会を擁護するために」という定式は、依然として不明瞭であり、誤解を生みだし、ある程度まで死滅した古いもの、カデット的国会に復帰する恐れがある。一言でいえば、この定式は一連の正しくない、有害な、「逆行的」な思想を生みだすのである。この定式にふくまれた正しいものは、われわれの闘争決議の趣旨に、なぜ国会の解散はかなり重要なきっかけとみなされるかの説明に、そっくり、あますところなくふくまれているのである。

マルクス主義者は、直接に当面する闘争のスローガンを、既知の綱領の一般的スローガンから単純にかつ直接に引きだすことはできないということを、けっして忘れてはならない。直接に、すなわちいま当面している闘争、つまり一九〇六年の夏または秋の闘争のスローガンを決定するためには、われわれの綱領（末尾の、専制の打倒と憲法制定議

会、等々を見よ）を引用するだけでは不十分である。そうするためには、具体的な歴史的情勢を考慮し、革命の発展全体と、逐次的な進展全体を考究し、われわれの任務を、綱領の原則だけからみちびきだすのではなく、運動のそれ以前の歩みと段階からも、みちびきださなければならない。このような分析だけが、弁証法的唯物論者のぜひしなければならない、真に歴史的な分析となるであろう。

ほかならぬこのような分析が、客観的な政治情勢はいま、人民代議機関が存在するかどうかという問題ではなしに、この人民代議機関が権力をもったものか、どうかという問題を提起したことをわれわれに示している。

カデット的国会の没落の客観的な原因は、それが人民の要求を表明できなかったところにあるのではなく、それが権力のための闘争という革命的任務を遂行しえなかったところにある。カデット的国会は立憲的な機関だとうぬぼれたが、実際には革命的な機関であった（カデットはわれわれがこのように国会を革命の一段階または要具とみなしていることをののしったが、実生活はわれわれの見解を完全に確認した）。カデット的国会は内閣と闘争する機関だとうぬぼれたが、実際には、旧権力全体を打倒するための闘争の機関であった。実際にはそうなった。なぜなら、当面の経済状態がそれを要求したからである。ところが、この闘争のためには、カデット的国会のような機関は、「役に立たない」ことがわかったのである。

いまや、次のような考えがどんなに無知な百姓の意識のなかにもたたきこまれている。すなわち、人民に権力がないかぎり、国会は役に立たない、どんな国会もなんの役にも立たない、という考えがそれである。だが、どうやって権力をかちとるのか？ 旧権力を打倒し、新しい、人民的な、自由な、選挙による権力をうちたてることによってである。旧権力を打倒するか、それとも、農民とプロレタリアートが提起する広範な革命の任務は実現されえないと認めるか、どちらかである。

実生活そのものが問題をこう提起した。一九〇六年が問題をこう提起した。カデット的国会の解散が、問題をこう提起したのである。

われわれは、もちろん、革命がこの問題を一挙に解決するであろうとか、闘争は容易で簡単であり、勝利は完全に、無条件に保証されているなどと受けあうことはできない。だれも、闘争の始まるまえにこのようなことをけっして受けあいはしないであろう。スローガンは、簡単で容易な勝利を保証するものではない。スローガンは、あたえられた任務を実現するために達成すべき目標を指示するものである。以前には人民代議機関一般の創設（あるいは召集）が、

このような直接にあたえられた任務であった。いまや権力を人民代議機関に確保することがこのような任務である。ところでこのことは、旧権力を排除し、破壊し、打倒し、専制政府を打倒することを意味する。

もしこの任務が完全に解決されなければ、人民代議機関も完全に権力をもつものとはなりえないし――したがってまた、カデット的国会の運命がこの新しい人民代議機関をとらえないという十分な保証もありえないのである。

客観情勢がいま日程にのぼせているのは、人民代議機関のための闘争ではなくて、人民代議機関を追い散らす、つまり解散させることができないような諸条件、また、トレポフ一味がカデット的国会を一つの喜劇にしてしまったように人民代議機関を喜劇にしてしまうことができないような諸条件をつくりだすための闘争である。

三

きたるべき闘争がとると予想される形態は、一部は闘争の内容によって、一部は人民の革命的闘争と専制の反革命的闘争とのこれまでの諸形態によって規定される。

闘争の内容についていえば、すでにわれわれは、それが革命の二年を経た現在、旧権力を打倒することに集中されていることを示した。この目的を完全に実現することは、全人民の武装蜂起によってのみ可能である。

これまでの闘争形態についていえば、この点では、ロシアの大衆的、全人民的な運動の「最後のことば」は、ゼネラル・ストライキと蜂起である。一九〇五年の最後の四半期は、プロレタリアート、農民、軍隊の自覚した部分、いろいろなインテリゲンツィアの職業団体の民主主義的部分の意識と気分のなかに、消しようのない跡をのこさずにはおかなかった。だから、国会が解散されたのちに、闘争能力をもつ分子の最も広範な大衆の頭にうかんだ最初の考えが、ゼネラル・ストライキであったことは、まったく当然である。国会の解散にたいする回答は、かならず、全国的なストライキとなるにちがいないということは、だれも疑いさえしなかったように思われる。

このような意見が普遍的であったことは、一定の利益をもたらした。革命組織は、ほとんどいたるところで労働者が自然発生的で部分的な爆発へはしろうとするのを意識的系統的におさえてきた。これについては、ロシアのいろいろな地方から情報がはいっている。一〇月―一二月の経験は、疑いもなく、全般的に、同時に、行動をおこすことに、すべての人々の注意を、これまでよりはるかにいちじるしく集中することをたすけた。それればかりでなく、さらにも

う一つの、きわめて特徴的な事情を指摘しなければならない。すなわち、ペテルブルグからの報道によって判断すると、労働者は、たんに全般的に、同時に行動をおこさなければならないということを容易に、また急速に理解しただけではなく、さらに、戦闘的な、断固たる行動をかたく支持していたのである。国会解散に反対する示威ストライキ（一日あるいは三日間の）というまずい考え――ペテルブルグの一部のメンシェヴィキのあいだに生まれたこの考えは、労働者の、このうえなく断固たる反対に出あった。一度ならず重大な闘争をおこなったことのある人々の正しい階級的本能と経験は、いまは問題はもはやデモンストレーションでは全然ないと、すぐ彼らに教えた。労働者はこう言った。われわれはデモンストレーションはやらない。全般的行動の時機がやってきたときに、必死の断固たる闘争へのりだすであろう、と。あらゆる報道からみて、これがペテルブルグ労働者の共通の意見であった。彼らは、一九〇一年（広範な示威運動の始まった年）以来ロシアが経験してきたあらゆる事柄の後には、部分的な行動、とくにデモンストレーションはこっけいであること、政治的危機が激化しているので、ふたたび「はじめからやりなおす」ことはできないこと、一二月に満足げに「血を味わった」政府にとって平和なデモンストレーションは、かえってきわめて有利なものであることを理解していた。そういうデモンストレーションは、なんの利益ももたらさずにプロレタリアートを無力にし、警官や兵隊を、武器をもたない人々におそいかかることに習熟させ、それらの人々を逮捕し、射殺することをたすけるであろう。そういうデモンストレーションは、反政府運動を激化させることなしに国会を解散させたから、自分は革命に勝利したのだというストルィピンの高言にいくつかの確証をあたえるだけにとどまるであろう。いまではだれでも、この高言を空疎な高言とみており、闘争がなおこれからだということを感知している。それは闘争であると説明されるであろうし、このデモンストレーションを（望みのない）闘争にしてしまうであろう。そしてデモンストレーションを中止すれば、新たな敗北だと全世界に中傷されることであろう。

示威ストライキという考えは、かつて一八四九年にルドリュ－ロランがやったように議会主義を近視眼的に過大評価した、カデット党内のわがルドリュ－ロランらにしかふさわしくないものであった。プロレタリアートはただちにこの考えを投げすてた。しかもこの考えを投げすてることを、みごとにやってのけたのである。つねに革命的闘争に

面とむかっていた労働者は、敵の戦闘態勢や断固たる戦闘行動の必要を、一部のインテリゲンツィアよりも正しく評価したのである。

残念なことに、わが党内では、――社会民主党の右翼が現在党の国内的部分で優勢をしめていた結果――戦闘行動の問題はうちすてられている。ロシア社会民主党の統一大会はカデットの勝利に心をうばわれ、現情勢の革命的意義を評価できず、一〇月―一二月の経験からすべての結論をくだすという任務から逸脱してしまった。だがこの経験を利用する必要は、多くの議会主義礼賛者が考えていたよりもはるかに早く、はるかに鋭く、党のまえに現われた。重大な時機にわが党の中央諸機関がさらけだした呆然自失は、こうした事態の避けられない結果であった。

大衆的な政治的ストライキと武装蜂起との結合は、これまた情勢全体によってよぎなくされる。同時に、自主的な闘争手段としてのストライキの弱い面が、とくに明瞭に表面に現われる。政治的ストライキの成功のきわめて重要な条件は、それが突然におこなわれることと、政府に不意討ちをくわせることができることである、とだれもが確信していた。いまは、それは不可能である。政府は一二月に、ストライキとたたかうやり方をまなび、いまではこの闘争にたいして、非常にしっかりと態勢をととのえている。だれでも、ゼネラル・ストライキでは鉄道がきわめて重要なことを指摘している。鉄道がとまれば、ストライキはゼネラル・ストライキとなるあらゆる見込みがある。ところで、鉄道を完全にとめることに失敗すれば、ストライキがゼネラル・ストライキとならないことは、ほぼ確かである。だが、鉄道従業員にとってはストライキをおこすことはとくに困難である。というのは、懲罰隊列車が完全な準備態勢にあり、武装部隊が全線に、停車場に、ときには個々の列車にさえ、分散配置されているからである。このような条件のもとでは、ストライキは、武装兵力との直接の正面衝突を意味するかもしれない。――いやそれどころか、大多数の場合に、不可避的にこの衝突を意味するであろう。機関手、電信手、転轍手は、すぐさまディレンマに直面させられ、その場で射殺されるか（ゴルトヴィノ、リュベルツイその他ロシアの鉄道網の駅々が、すでに全人民のあいだで革命的名声を博しているのは、むりもない）、それとも仕事について、ストライキやぶりをするか、どちらかを選ばなければならなくなるであろう。

もちろんわれわれは、自由の事業への忠誠を行動で証明した無数の鉄道の労働者と従業員に、きわめて偉大な英雄的行動を期待する権利をもっている。もちろんわれわれは、鉄道のストライキの可能性とそれが成功する見込みを否定

するような考えはすこしもない。しかしわれわれは、任務のほんとうの困難を、ひたかくしにかくす権利はもっていない。このような困難を黙殺することは、最悪の政策であろう。ところで現実を直視するならば、頭を翼の下へかくさないならば、ストライキが不可避的に、しかも即座に、武装蜂起に発展するということが明らかになるであろう。鉄道ストライキは一つの蜂起である。このことは、一二月以後は論議の余地がない。だが、鉄道のストライキがなければ、鉄道と電信は停止しないであろうし、鉄道による書信の郵送は中断されないであろうし、したがって、大規模な郵便・電信ストライキも、不可能であろう。

蜂起にたいしてストライキが従属的な意義しかもたないということは、こうして、一九〇五年一二月以後に形成された一定の情勢から、いやおうなく不可避的に生じているのである。われわれの意志とはかかわりなく、またどんな「指令」にもかかわらず、この激化した革命的情勢はデモンストレーションをストライキに、抗議を闘争に、ストライキを蜂起に、転化させるであろう。もちろん、大衆的な武装闘争としての蜂起は、軍隊のどれかの部分が積極的に参加する場合に、はじめて燃えあがることができる。だから軍隊がストライキをおこして、人民に発砲することを拒否すれば疑いもなく、特定の場合にはまったく平和的なストライキに勝利をもたらすこともありうる。しかしそういう出来事が、特別にうまくいった蜂起の特殊な挿話にすぎないということ、こういう出来事を頻発させるためには、それにできるだけ近づくためには、蜂起のゆきとどいた準備、最初の決起行動のエネルギーと力、決死の勇敢な攻撃または大部隊の離反による軍隊の士気沮喪等々という手段しかないということは、おそらく証明する必要があるまい。

一言でいえば、国会が解散された現在の情勢のもとでは、積極的な闘争が直接に蜂起へみちびくということに、なんの疑いの余地もない。将来情勢が変わって、この結論を再検討しなければならなくなるかもしれないが、しかしいまは、まったく論議の余地がない。だから、蜂起を呼びかけずに、ストライキと蜂起とのきってもきれないつながりを説明しないで、全国的なストライキを呼びかけることは、犯罪と紙一重の、まったく軽率なやり方であろう。だから、扇動する場合には、両方の闘争形態の結びつきを説明し、労働者の爆発、農民の蜂起、軍隊の「暴動」という闘争の三つの流れが一つの大きな奔流に合流するのをたすけるような、諸条件を準備することに全力をそそぐ必要がある。すでに早くから、昨年の夏の「ポチョムキン」の有名な反乱[三]いらい、ほんとうに人民的な、すなわち大衆的な、陰謀とはおよそ似ても似つかない積極的な運動、すなわち専制

を打倒しようとする蜂起の、これら三つの形態が、まったくはっきりと認められた。全国的な蜂起の成否は、おそらく、蜂起のこの三つの流れの合流に最もかかっているであろう。国会の解散といったような闘争のきっかけが、この合流を大いにたすけるということは疑いない。というのは、農民の（したがって、主として農民からなるわが国の軍隊の）最もおくれた部分は、国会に大きな期待をかけてきたからである。

ここから生ずる結論は、次のとおりである。全人民の蜂起を呼びかける集中的扇動のきっかけとして、ほかならぬ国会解散を極力利用すること。政治的ストライキと蜂起との結びつきを説明すること。労働者、農民、水兵および兵士を統合して積極的な武装闘争に共同して進出させることに、すべての努力をかたむけること。

最後に、運動形態を述べるにあたっては、農民闘争についてもとくにふれなければならない。ここでは、ストライキと蜂起の結びつきはとくに明瞭である。蜂起の目的が、ここでは、たんにありとあらゆる地方権力を完全に破壊するか排除して、それを新しい人民権力でとりかえる（あらゆる蜂起の共通の目的は、都市、農村、軍隊等々どこでもおなじである）ことにあるだけでなく、さらに地主を追放し、地主の土地を奪取することでなければならないことも明らかである。全人民的憲法制定議会の決定が出るまえにも、農民は、疑いもなく、地主的土地所有を事実上廃絶しようとするにちがいない。こんなことについて、くどくどと言うにはあたらないであろう。なぜなら、だれも、きっと、地主をかたづけ、土地を奪取することのない農民蜂起を想像できないであろうからである。もちろん、この蜂起が意識的になり、組織的になればなるほど、建物や財産や家畜などの大量破壊の出来事はますます少なくなるであろう。軍事的見地からいえば、一定の軍事目的を達するためには、破壊行動——たとえば建物や、ときには財産をも焼きはらうこと——は、まったく正当な、ある場合にはどうしてもやらねばならない措置である。農民がいつもこういう手段に訴えるのを、ことさらになげくのは、ペダント（または人民を裏切るもの）だけである。しかし、ときとすると財産の大量破壊は運動の無組織性の結果にすぎず、敵の財産を絶滅するかわりにそれを奪取し自分の手に確保する能力のない結果にすぎないこと、あるいは、たたかうものがその敵を掃滅し、おしつぶす力がないので敵に復讐するという弱さの結果にすぎないことを、かくす必要はない。われわれは、もちろん、扇動をおこなう場合には、農民にむかって、一方では、敵の財産の破壊をもふくめて、敵と仮借なくたたかうことがまったく正当であり必要であ

ることを極力説明し、他方では、それよりもはるかに条理にかなった有利な結末、すなわち敵（地主と役人、とくに警察）を掃滅し、ありとあらゆる財産をすこしも傷つけずに（あるいはできるだけ傷つけずに）人民の所有に、もしくは農民の所有に移すという結末へみちびくことができるかどうかは、運動の組織性の程度にかかっていることを示さなければならない。

四

闘争形態の問題には、闘争のための組織の問題が、かたく結びついている。

この点でも一九〇五年一〇月—一二月の偉大な歴史的経験は、今日の革命運動に消しがたい跡をのこした。労働者代表ソヴェトと、それに類似の諸機関（農民委員会、鉄道委員会、兵士代表ソヴェトなど）は、絶大な、まったく当然の権威をかちえている。現在、総じてこのような組織に共鳴せず、とくに現情勢のもとでこういう組織の設置をすすめないような社会民主主義者、またはその他の党に属する革命家を見つけることは容易ではないであろう。

この点については、意見の相違あるいはすくなくとも多少とも重大な意見の相違は、ないように思われる。だから、本来からいえば、この問題に立ちいる必要はないのである。

だがこの問題には、とくに注意ぶかく検討しなければならない一つの面がある。なぜなら、それはしばしば無視されているからである。問題は、一〇月と一二月の偉大な時期の労働者代表ソヴェト（簡単にするために、このソヴェトをこの種のありとあらゆる組織の典型として述べておこう）の役割が、これらの機関に大きな魅力をあたえた結果、ときには人々がこれらの機関にたいしてほとんどフェティシズム〔呪物崇拝〕におちいっているという点にある。人人は、これらの機関をいつでも、どんな条件のもとでも、大衆的な革命運動にとって「必要で十分なもの」と想像している。このような機関をつくるための時機の選択にたいする、これらの機関の活動の成功に必要な現実的な条件はどういうものかという問題にたいする無批判的な態度は、ここからきているのである。

一〇月—一二月の経験は、この点についてきわめて教訓に富む指示をあたえた。労働者代表ソヴェトは大衆的な直接的闘争の機関である。それは、ストライキ闘争の機関として生まれた。それは、必要にせまられて、非常に急速に、政府にたいする全般的な革命的闘争の機関になった。それは、もろもろの事件が進展し、ストライキから蜂起へ移っていったために、おさえようのない勢いで蜂起の機関に転

化した。幾多の「ソヴェト」や「委員会」が、一二月にまさにこのような役割を果したたということは、まったく争う余地のない事実である。そしてもろもろの事件は、闘争の時期にこれらの機関がもつ力と意義とが、まったく蜂起の力と成功にかかっていることを、きわめて明瞭に、説得的に証明した。

これらの無党派的な大衆的機関を蜂起の必要に直面させ、それを蜂起の機関にしたのは、なにかの理論でもなければ、だれかの呼びかけでもなく、だれかが考えだした戦術でもなく、党の教義でもなく、まさに情勢の力であった。

現在でも、このような機関を設置することは、蜂起の機関をつくることを意味し、蜂起の機関の設置を呼びかけることは蜂起を呼びかけることを意味する。このことを忘れるか、このことを広範な人民大衆のまえでぼかすかするならば、それは、きわめて許しがたい近視眼であり、最悪の政策であろう。

もしそうだとすれば――それは疑いもなくそうなのだが――、蜂起を組織するためには「ソヴェト」やそれに類似の大衆的機関だけではまだ不十分であるという結論も、このことからして明らかである。ソヴェトその他の機関は、大衆を結束させるため、戦闘的な統合のため、政治的指導のための党のスローガン（または諸政党の協定によって提出されたスローガン）をつたえるために、また大衆の関心をたかめ、大衆を奮起させ、引きつけるために、必要である。しかし、それらは、直接に戦闘力を組織し、最も狭い意味での蜂起を組織するには、不十分である。

小さな実例を示そう。労働者代表ソヴェトは、しばしば労働者階級の議会とよばれてきた。だが、労働者は、だれひとりとして、自分の議会を警察の手に渡すためだけに、その議会を召集するのに同意するようなことはしないであろう。だれでも、ただちに力を組織する必要、自分の「議会」を擁護するために、武装労働者部隊という軍事組織を組織する必要を認めている。

「ソヴェト」はなにをもたらすか、ソヴェトはどういう機関であるかということを、政府が経験によって徹底的に納得している今日、政府が頭のてっぺんから爪先まで武装し、このような機関の創設をまって、敵におそいかかり、敵が正気にかえって、その活動を展開する時間をあたえないようにしようとしている今日、われわれは、自分の扇動活動のさいには、物事を冷静にみる必要をとくに説明しなければならないし、ソヴェトを擁護するために、どんなソヴェトも、大衆のどんな選出代表もそれなしには無力であるところの蜂起を実行するために、ソヴェトの組織とならんで、軍事組織が必要であることを説明しなければならな

い。

われわれが述べている、これらの「軍事組織」——こうした組織は、選出代表をつうじて表現してもかまわないとすれば——は、選出代表をつうじ表現してもかまわないとすれば——は、直接参加する大衆をつかみ、市街戦と内乱に直接参加する大衆をつかむことを目ざさなければならない。これらの組織は、非常に少人数の自由な結合を、すなわち十人組や五人組を、あるいは三人組すらをも、自分の細胞としてもたなければならない。すべての誠実な市民が自分を犠牲にして人民の抑圧者とたたかわなければならない戦闘が近づきつつあることを、最も力をこめて宣伝しなければならない。最大限の機動性と柔軟性とをもたなければならないこの組織内には、形式主義と事務の渋滞をできるだけ排除し、組織をできるだけ簡素化しなければならない。自由に戦闘的な「五人組」——同一の職業、同一の工場の人々、あるいは同志的関係や党的な結びつき、さては、たんなる居住関係（村がおなじこと、都会で一つアパートに住んでいること、あるいは一つのフラットに同居していること）によっておたがいに結びついている人々の自由な組織——をつくらなければならない。これらの組織は、政府にたいする蜂起という一つの直接の革命的任務によって結成されるもので、党派的なものも、無党派的なものもつくられなければならない。これらの組織は、かならず武器を手に入れるまえに、武器の問題にはかかわりなしに、最も広範囲につくられなければならない。

いかなる党組織も、大衆を「武装させる」ことはけっしてないであろう。反対に、大衆が機動性に富む小さな戦闘単位に組織されていれば、運動の時機には、武器を手に入れるうえで非常に役に立つであろう。

自由な戦闘組織、「ドルジーニキ」〔労働者義勇兵〕の同盟——もしモスクワの偉大な十二月事件をあのように名誉あるものとした名称をとってみれば——は爆発の時機にはすばらしい利益をもたらすであろう。射撃のできるドルジーナ〔労働者義勇隊〕は、巡査を武装解除し、巡察を不意におそって、武器を手に入れるであろう。射撃ができないか、または、武器を手に入れなかった人たちのドルジーナは、バリケードをきずき、偵察をおこない、連絡を組織し、敵を待伏せし、敵が占拠した建物に放火し、蜂起者の拠点となることができるような家屋を占領することをたすけるであろう——一言でいえば、死を決してたたかう決意をし、地の利を知り、住民と最も緊密に結びついている人々の自由な組織が、多種多様な無数の機能を果たすであろう。

それぞれの工場、それぞれの労働組合、それぞれの農村で、このような自由なドルジーナを組織せよという呼びか

けが鳴りわたるべきである。おたがいによく知りあっている人々は、あらかじめそういうドルジーナをつくりだすであろう。おたがいに知りあっていない人々は、このような組織を編成するという考えが広範にひろまり、闘争の前夜に、闘争の現場で、五人組や十人組を結成するであろう。

国会の解散が、つぎつぎに新しい諸層を刺激している現在、諸君は、最も組織されていない、その一般的な外貌からみて最も「黒百人組」的な都市庶民の平代表者の、きわめて革命的な反響や声明にしばしばぶつかるかもしれない。われわれは、彼らのすべてが、土地と自由をめざす闘争をまもなくおこそうとする先進的な労働者、農民の決意を知り、彼らのすべてが、戦士のドルジーナを準備する必要を知り、彼らのすべてが、蜂起の不可避性とその人民的な性格をふかく確信するように配慮しよう。そうすればわれわれは——これはけっして空想ではないが——それぞれの大都市に、あの一二月のモスクワの場合のように数百人のドルジーナではなく何千人ものドルジーナを組織することができるであろう。そうなれば、モスクワで人々が、同市のドルジーナの性格と構成が十分大衆的でなく、十分に人民に近づいていないことを指摘するさいに語ったように、どんな機関銃も、われわれに対抗することができないであろう。

要するに、いたるところで労働者代表ソヴェト、農民委員会およびそれに類似の諸機関を組織するとともに、それとならんで、各地でいっせいに蜂起をおこす必要のあること、そのためにただちに勢力を準備し、「ドルジーニキ」の大衆的な自由な部隊を組織する必要のあることを最も広く宣伝・扇動することが必要である。

⁂

付記。わが中央委員会のスローガンに新たな「転換」——「憲法制定議会を召集する機関としての国会を」というスローガン——があったことをわれわれが知ったときには、この章はすでに書かれていた。

したがって組織の問題には、臨時革命政府の組織の問題が追加されることになる。というのは、現実に憲法制定議会を召集する能力をもった機関とは、実質上、臨時革命政府であるから。臨時政府はなによりもまず蜂起の機関であるということだけは忘れてはならない——わがカデットびいきは忘れたがっているが。永眠した国会が、蜂起の機関となることを望んでいるというのか？　カデットが、蜂起の機関となることを望んでいるというのか？　どうぞ、どうぞ、紳士諸君！　われわれは闘争のさいには、ブルジョ

ア民主主義派のどの同盟者でも歓迎する。たとえ諸君の同盟が、われわれにとって、あたかもロシアにとってのフランスの同盟のようなものであっても（つまり財源であっても）――これは失礼――たとえそういう場合でも、われわれは非常にうれしい。しかし、もし蜂起にカデットが参加することが、たんなる空疎なメンシェヴィキ的な夢であるならば、われわれはこう言うだけである――メンシェヴィキの同志諸君、諸君はなんというつまらない小さな夢をいだいていることか。ただ諸君は、諸君の熱情に実をむすばせることができないカデットに「片恋」をささげて身をほろぼすことだけはやってはならない……

臨時政府の問題は、理論の面からはすでに何回も解明されている。臨時政府に社会民主党が参加してよいことは、証明ずみである。しかしここでは、一〇月―一二月事件によって、この問題が別の仕方で、実践的に提起されたことのほうが、興味をひく。労働者代表ソヴェト等々は、実際には臨時政府の萌芽ではなかったか。蜂起が勝利した場合には、権力は不可避的に、それらににぎられたことであろう。新しい権力の、これらの歴史的にあたえられた、萌芽的な機関を研究し、それらの機関の活動と成功の諸条件を研究することにこそ、重心を移すべきである。このことは、現情勢のもとでは、臨時革命政府について「一般的に」推測することよりも緊急で、興味ぶかいものである。

五

さてのこるところは、行動をおこす時機の問題を考察することだけである。カデット的国会にたいするこまやかな愛情は、右翼社会民主主義者のあいだに即時行動をおこせという要求を呼びおこした。この考えは、みごとに失敗した。労働者階級と都市住民一般の大衆の態度は、事態の重大性が意識され、または感じられていることを証明した。闘争は実際に期待されているが、もちろんそれは国会擁護のための闘争では全然なく、旧権力を打倒するための闘争である。行動がのびのびになっているのは、真に決定的な、決死の闘争のための準備をととのえ、行動の歩調をあわせようとする一般の気分や、希望の結果であった。

新しい闘争は、これまでの闘争とおなじように、気分がもりあがり、さけがたい爆発の一つがおきた結果として、自然発生的に、不意に燃えあがるかもしれない。おそらくその公算が最も大きいであろう。事態がこのように発展し、発展のそうしたコースが避けがたいと認められるならば、そのときは、われわれには行動をおこす時機の問題を決定

する必要はないし、われわれの任務は、右にあげたすべての方向で扇動と組織活動を一〇倍にすることに帰着するであろう。

だがおそらく、もろもろの事件は、われわれに指導者を要求し、行動をおこす日取りをきめることを要求するであろう。もしそういうことになれば、われわれは、全国的な行動、ストライキ、蜂起の日取りを夏の終りか秋のはじめ、すなわち八月のなかばか終りにきめることをすすめるであろう。都市での建築作業の時期や、夏の野良仕事の終わる時期を利用することが重要であろう。もし行動をおこす日取りについて、あらゆる有力な革命的な組織や団体がうまく協定に達するならば、きめられた日取りにこれを実行できないこともないであろう。ロシア全土にわたって同時に闘争を始めることは、大きなプラスとなるであろう。政府がストライキの期日を知っても、それはおそらく、破滅をもたらすほどの意義はもたないであろう。それは、不意打ちを必要とする陰謀でもなければ、軍事的攻撃でもないのだから。ロシア全土の軍隊は、もし闘争が避けられないという考えが何週間ものあいだ彼らを不安におとしいれ、彼らが戦闘態勢におかれ、多数の「無党派」革命家とならんでありとあらゆる組織がますます協力一致して扇動をおこなうならば、おそらく、最もひどく士気沮喪するであろう。社会民主党出身およびトルドヴィキ[一三五]出身の有力な国会議員も、一斉行動の成功をたすけることができるであろう。たとえば兵士の「暴動」とか、農民の見込みのない一揆といったような、個別的な、まったく無益な爆発も、もしも革命的ロシア全体がこの共同の大戦闘の避けがたいことを信じるならば、おそらく、抑制することができるであろう。

しかしくりかえして言うが、このことは、すべての有力な組織が完全に協調する場合にのみ、可能である。そうでない場合は、気分の自然成長的なもりあがりという古い道がのこるであろう。

六

簡単に結論を述べよう。

国会の解散は専制のほうへ完全に方向転換したことである。ロシア全土にわたって同時に行動をおこす可能性は、増大しつつある。あらゆる個別的な蜂起が一つに合流する公算はつよまりつつある。権力のための闘争としての政治的ストライキと蜂起が避けられないということは、かつてみられなかったほど広い住民層によって感じられている。

われわれのなすべきことは、全国的蜂起のために最も広

範な扇動を展開し、この蜂起の政治上および組織上の任務を説明するとともに、すべての人が蜂起の避けられないことを自覚し、総攻撃が可能なことをさとり、もはや「暴動」や「デモンストレーション」やたんなるストライキや破壊にのりださずに、権力のための闘争へ、政府打倒のための闘争へのりだすようにすべての努力をかたむけることである。

情勢全体はこの任務を遂行するのに有利である。プロレタリアートは闘争の先頭に立つ用意をもっている。革命的社会民主主義派は、全国的蜂起の第一線部隊としての労働者階級をたすけるという責任のある、困難な、しかし偉大な、光栄ある任務に当面している。

この蜂起は専制を打ちたおし、ほんとうに権力をもった人民代議機関、すなわち憲法制定議会をつくりだすであろう。

付記、この論文は、スヴェアボルグの反乱(一三)の始まるまえに書かれたものである。

一九〇六年七月に執筆
一九〇六年七月に単行の小冊子として「ノーヴァヤ・ヴォルナー」出版所から発行
全集、第五版、第一三巻、三〇五—三一七ページ所収
邦訳全集、第一一巻、一〇〇—一二〇ページ所収

モスクワ蜂起の教訓

『一九〇五年一二月のモスクワ』(モスクワ、一九〇六年)の出版は、このうえなく時宜を得たものである。十二月蜂起の経験を摂取することは、労働者党の緊要な任務である。残念なことに、この書物には、玉にきずとでもいうべき欠点がある。すなわち、不完全とはいえ、このうえなく興味ぶかい材料を扱いながら、信じられぬほどぞんざいで、信じられぬほど低俗な結論がだされているのである。その結論については、別に論じる〔『手を引け』、全集、第一一巻、一七九―一八三ページ〕ことにして、ここでは、目下焦眉の政治問題であるモスクワ蜂起の教訓をとりあげよう。

モスクワにおける一二月の運動の主要な形態は、平和的なストライキとデモンストレーションであった。労働者大衆の大多数が積極的に参加したのは、これらの闘争形態だけであった。だが、ほかならぬモスクワの一二月の行動がはっきりと示したのは、ゼネラル・ストライキが、独自の主要な闘争形態としては、すでに時代おくれになったこと、運動は押えようのない自然成長的な勢いでこの狭い枠をはみだして、より高度の闘争形態である蜂起を生みだしつつあったことであった。

すべての革命的政党、モスクワのすべての労働組合は、ストライキを宣言するにあたって、それが蜂起に転化するにちがいないことを意識し、また感じてさえいた。一二月六日には、「ストライキを武装蜂起に変えるよう努力する」ことが、労働者代表ソヴェトによって決定された。だが実際には、どの組織もみなその準備がととのわずに、義勇戦闘隊〔ドルジーナ〕連合会議[一五六]でさえ(しかも一二月九日に!)、蜂起をなにか遠い将来のこととして論じていたのであるから、市街戦は、疑いもなく、この会議の頭上をのりこえて、その参加なしに進行したのである。組織は運動の成長と展開にたちおくれたのである。

ストライキ[一五七]が蜂起に発展したのは、なによりも、一〇月以後に生まれた客観的諸条件にせまられたためであった。ゼネラル・ストライキによって政府の不意をつくことは、もはやできなかった。政府は、すでに軍事行動の準備をととのえた反革命を組織していたのである。一〇月以後のロ

シア革命全体の歩みも、また一二月にモスクワで事件がつぎつぎに起こったことも、マルクスの深遠な命題の一つ、――革命は、結束した強力な反革命をつくりだすことによって前進する。すなわち、敵にますます極端な防御手段に訴えさせ、そうすることによって革命はますます強力な攻撃手段をつくりだす、という命題を[三〇]驚くほどはっきりと裏書きした。

一二月七日と八日――平和的ストライキ、大衆の平和的デモンストレーション。八日の夜――アクヴァリウムの包囲。[三一]九日の昼――ストラストナヤ広場で竜騎兵[三二]が群衆をけちらす。夜――フィードレル学校の建物の破壊。意気はたかまった。街頭の未組織の群衆が、まったく自然発生的に、ためらいながらも、最初のバリケードをつくった。

一〇日――バリケードと街頭の群衆に向けて砲撃が開始された。バリケードの構築は、自信のあるものになり、もはや個々ばらばらなものではなく、真に集団的なものになっていった。全市民が街頭にでた。全市のおもだった中心地は、バリケードの網の目でおおわれた。数日にわたって軍隊を相手に義勇隊員〔ドルジーニキ〕の頑強なパルチザン闘争が展開された。この闘争は、軍隊を疲労させ、ドゥバーソフに増援隊を懇請させるにいたった。一二月一五日になってはじめて、政府軍の優勢は完全なものとなり、一七日には、セミョーノフ連隊が蜂起の最後の砦であるプレスニャを撃破した。

ストライキとデモンストレーションから、個々ばらばらなバリケードへ。個々のバリケードから、バリケードの大量構築と、軍隊との市街戦へ。プロレタリアの大衆闘争は、組織の頭上をのりこえて、ストライキから蜂起へ発展した。この点に、一九〇五年の十二月闘争によってなしとげられた、ロシア革命の最大の歴史的成果がある。この成果は、これまでのすべての成果とおなじように、きわめて大きな犠牲をはらってあがなわれたものである。運動は、政治的ゼネラル・ストライキから、より高度の段階に引き上げられた。運動は、反動派の抵抗をゆくところまでゆかせたが、そのためにまた、革命のほうにも攻撃手段の使用をゆくところまでゆかせるような瞬間を、大いに近づけることになった。反動派は、バリケードや家屋や街頭の群衆にたいする砲撃以上の挙にでることはできなかった。だが革命にはまだ、モスクワの義勇隊員以上にすすむ余地があった。それにはまだ大いにひろがりふかまる余地があった。そして革命は、一二月以来さらに前進したのである。革命的危機の基礎は、はかりしれないほどさらに広くなった。いまや、刃をいっそう鋭くとぎすまさなければならない。

プロレタリアートは、闘争の客観的条件が変化して、ス

トライキから蜂起へ移ることが必要になったことを、彼らの指導者よりもはやく感じとった。実践は、いつものとおり理論にさきだった。平和的なストライキやデモンストレーションは、たちまち労働者を満足させなくなり、労働者は「さあこの次は?」と質問して、より積極的な行動を要求した。バリケードをつくれという指令が各地区に届いたのは、非常におそく、そのときには、中心部ではすでにバリケードを築いていた。労働者は、大挙してこの仕事にとりかかったが、これにも満足せずに、「さあこの次は?」と質問した。——積極的な行動を要求したのである。われわれ社会民主主義的プロレタリアートの指導者は、一二月には、自分の連隊をあまり不合理に配置したために、その軍隊の大部分が戦闘に積極的に参加しなかった司令官に似ていた。労働者大衆は、積極的な大衆行動の指令をもとめたが、ついにそれを得ることができなかった。

こういうわけであるから、なにも時機尚早のストライキを始めることはなかったとか、「武器をとるべきではなかった」とかいう、日和見主義者がこぞってとびついた、あのプレハーノフの見解ほど、近視眼的なものはないのである。それどころか、もっと決然と、もっと精力的に、またもっと攻撃的に、武器をとるべきであった。平和的なストライキだけではどうにもならないということ、恐れを知らぬ、仮借ない武装闘争が必要だということを大衆に説明してやるべきであった。最後に、いまやわれわれは、政治的ストライキでは不十分なことを率直に公然と承認しなければならない。そして、武装蜂起の問題を「予備的段階」というようなことでごまかしたり、それに覆いをかけたりけっしてせずに、きわめて広範な大衆のあいだで、武装蜂起を扇動しなければならない。きたるべき行動の直接の任務として、死にものぐるいの、流血の全滅戦が必要だということを大衆に隠すのは、自分自身をも、人民をもあざむくことである。

以上が、一二月の諸事件の第一の教訓である。第二の教訓は、蜂起の性格、蜂起の遂行方法、軍隊が人民の側に移行する条件にかんするものである。わが党の右翼には、この移行についてきわめて一面的な見方が非常にひろまっている。彼らによれば、近代的軍隊とたたかうことはできない、軍隊が革命的になることが必要だ、というのである。もちろん、革命が大衆的なものになり、軍隊までもとらえるようにならないかぎり、本格的な闘争は問題にもならない。もちろん、軍隊内の活動は必要である。しかし、軍隊のこの移行を、ひとつには説得の、またひとつには自覚の結果として起こる、なにか簡単な、一挙にできることだというふうに考えてはならない。モスクワ蜂起は、こういう

見方が型にはまった、生気のないものであることをまざまざとわれわれに示した。実際には、真に人民的な運動のさいにはつねに不可避的に生じる軍隊の動揺は、革命闘争が激しくなるときに、実際に軍隊の獲得をめざす闘争へみちびくのである。モスクワ蜂起は、軍隊を獲得しようとする反動派と革命派とのまさに死にものぐるいの、このうえなく激しい闘争をわれわれに示している。ドゥバソフその人まで、一万五〇〇〇名のモスクワ守備隊のうちで、信頼できるのはわずかに五〇〇〇名であると声明した。政府は、多種多様な、まったく必死の手段で、動揺する兵士をひきとめようとした。説得したり、おだてたり、時計や金などを分けてやって買収したり、ヴォトカで酔わせたり、だましたり、おどしたり、兵営にとじこめたり、武器を取り上げたり、最も危険な人物であると推測される兵士を密告や暴力で彼らのなかから引き抜いたりした。われわれは、この点では政府におくれをとったことを、率直に、公然と認める勇気をもたなければならない。われわれには、動揺している軍隊を獲得するために、政府が着手してやりとげたのと同じような、積極的で、大胆で、計略にとんだ、攻撃的な闘争に、われわれのもっていた力を用いることができなかった。われわれは、軍隊にたいする思想「工作」をおこなってきたが、これからもさらにねばりづよくおこなってゆくであろう。しかし、蜂起の起こったときには、軍隊を獲得するための物理的な闘争もまた必要なことを忘れるならば、われわれはあわれむべきペダントだということになるだろう。

モスクワのプロレタリアートは、一二月には、軍隊にたいする思想「工作」のみごとな教訓をわれわれにあたえた——たとえば、一二月八日には、ストラストナヤ広場で、群衆がカザックをとりまき、彼らといりまじり、彼らと交歓し、彼らが退去するようにしむけた。あるいは、一〇日には、プレスニャで、一万人の群衆のなかで赤旗をかかげてすすんでいた二人の若い婦人労働者が、「殺すなら殺すがいい！ 生きているうちは、旗を渡すものか！」と叫んで、カザックに向かって突進していった。そこでカザック兵は、どぎまぎしてしまって、「カザック万歳！」という群衆の叫びをあとに駆けさったのであった。剛胆と英雄精神のこの模範を、プロレタリアートの胸のなかに永久に刻みこんでおかなければならない。

ところで、次のようにわれわれがドゥバソフよりもおくれていた例がある。一二月九日、兵士たちが、セルプホフスカヤ大通りをマルセイエーズを歌いながら、蜂起者に合流しようとしてすすんでいった。労働者は彼らのところへ代表を送った。マラホフは、あわてふためいて、自分で彼

らのところへ飛んでいった。労働者のほうはおくれ、マラホフはまにあった。マラホフは、熱弁をふるって、兵士たちを動揺させた。彼は、兵士たちを竜騎兵でとりかこみ、兵営へ連れもどして、そこへ閉じこめてしまった。マラホフはまにあったのに、われわれはまにあわなかった。しかもわれわれの呼びかけに応じて、二日のうちに、一五万人が決起し、これらの人は街路の巡察を組織することもできたし、またしなければならなかったのに、われわれはまにあわなかったのである。マラホフは兵士たちを竜騎兵でとりかこんだが、われわれはマラホフ一味を爆弾をもった闘士たちでとりかこまなかった。われわれは、そうすることもできたし、またしなければならなかったのだ。しかも、もうずっとまえから社会民主党の新聞（旧『イスクラ』）[二七]は、文武の高官を容赦なく絶滅することが、蜂起のさいのわれわれの義務であると指示していたのである。セルプホフスカヤ大通りで起こったことは、どうやら、だいたいにおいて、ネスヴィジ兵営の前でも、クルチツキー兵営の前でも繰りかえされ、またエカテリノスラフ連隊の兵士をプロレタリアートが「誘いだそう」と試みたときにも、アレクサンドロフの工兵隊に代表を送ったときにも、モスクワへの派遣の途にあったロストフ砲兵隊を帰営させようとしたときにも、さらにコロムナで工兵隊に武装を解かせようとしたときにも、その他の多くの場合にも、これと同じことが繰りかえされたようである。蜂起の始まったときに、われわれは、動揺している軍隊を獲得するための闘争で任務に耐えるだけの高さに達していなかったのである。

十二月は、日和見主義者らが忘れてしまっている、マルクスのいま一つの深遠な命題を明瞭に裏書きした。すなわち、蜂起は技術である、そしてこの技術の主要な原則は、死を恐れぬ大胆さと、ひるむことのない決意をもって攻勢をとることである、と彼は書いた[二八]。われわれは、この真理を十分会得していなかった。われわれは、この技術を、ぜがひでも攻勢をとるということの原則を、自分でも十分に学ばなかったし、大衆にも十分に教えなかった。われわれはいまや、われわれがなおざりにしていたことを、全精力をあげて埋め合わせなければならない。政治的スローガンにたいする態度をもとにして敵か味方かを分けるだけでは不十分である。さらに武装蜂起にたいする態度をもとにして分けることが必要である。武装蜂起に反対のもの、その準備をしないもの——そういうものは、容赦なく革命の味方のなかからほうりだして、革命の敵、裏切者、または臆病者のなかへほうりこまなければならない。なぜなら、諸事件のもつ力、闘争の条件に促されて、われわれがこの標識で敵と味方を区別しなければならなくなる日が、近づいて

いるからである。われわれが宣伝しなければならないのは、受動的な態度ではなく、軍隊が「移ってくる」のをたんに「待っている」ことではない。――われわれは、武器を手にして大胆に攻勢をとり攻撃する必要があるということ、そのさい指導者を全滅させ、動揺しつつある軍隊を獲得するために最も精力的にたたかう必要があるということを、声を大にして叫ばなければならないのだ。

モスクワがわれわれにあたえた第三の偉大な教訓は、戦術と蜂起のための勢力の組織にかんするものである。軍事上の戦術は、軍事技術の水準にかかっている。――この真理をかんでふくめるようにマルクス主義者に説明してくれたのは、エンゲルスである。(一四)今日の軍事技術は、一九世紀中葉のそれではない。砲兵に向かって密集して行動したり、ピストルでバリケードを守ったりするのは、ばかげたことであろう。そしてカウツキーが、モスクワ〔蜂起〕を経た今日ではエンゲルスの結論を再検討すべきときである、モスクワは「新しいバリケード戦術」を提起したと書いたのは、正しかった。(一五)その戦術とは、パルチザン戦争の戦術であった。この戦術の要求する組織は、機動的な、ごく少人数の小部隊である。すなわち十人組、三人組、ときには二人組でさえある。今日、われわれのあいだでは、五人組や三人組が話にのぼると、せせら笑う社会民主主義者に出会うこともめずらしくない。だが、このせせら笑いは、現代の軍事技術のもとでの市街戦から生まれる戦術と組織の新しい問題に目をふさぐくだらない方法でしかない。諸君、モスクワ蜂起の物語を熟読玩味したまえ。そうすれば「五人組」が「新しいバリケード戦術」の問題とどんな結びつきをもっているか、がおわかりになるであろう。

モスクワは、この戦術を提起したが、まだまだそれを発展させ、多少とも広範な、真に大衆的な規模で展開するにはいたらなかった。義勇隊員の数は少なく、労働者大衆は大胆に攻撃せよというスローガンをあたえられず、またこのスローガンを実行に移しもしなかった。パルチザン隊の性格はあまりにも一律で、その武器と闘争方法は不十分であり、群集指導の能力はほとんど熟していなかった。われわれは、モスクワの経験に学び、この経験を大衆のなかにひろめ、またこの経験をさらに発展させるのに大衆自身の創造力を呼びおこすことによって、以上の欠陥を埋めあわせなければならないし、また埋めあわせるであろう。そして一二月以後ほとんど絶えまなくロシアのいたるところでおこなわれているあのパルチザン戦争、大衆的テロルは、蜂起のさいの正しい戦術を大衆に教えることを疑いもなくたすけるであろう。社会民主党は、この大衆的テロルを承認し、それを自分の戦術にとりいれなければならない。た

だそのさい、このテロルを組織化し、統制し、労働運動と全般的な革命闘争の利益と条件に従属させ、このパルチザン戦争の「浮浪人的」歪曲を容赦なく排除し、切りすてなければならないことは、いうまでもない。パルチザン戦争のそういう「浮浪人的」歪曲は、モスクワの人たちが蜂起のときに、またラトヴィア人たちが有名なラトヴィア諸共和国事件(一六〇)のときに、じつにりっぱに、じつに容赦なく始末をつけたのである。

ごく最近、軍事技術は、さらに新しい前進をとげた。日露戦争は、手榴弾を出現させた。武器工場は自動小銃を市場におくりだした。この両方とも、すでにロシア革命のなかでみごとに使われはじめているが、その規模は、まだまだ不十分である。われわれは、技術の改良を利用し労働者部隊に爆弾を大量に用意することを教え、彼らやわれわれの戦闘隊が爆薬や導火線や自動小銃を貯えるのをたすけることができるし、またそうしなければならない。労働者大衆が都市の蜂起に参加するならば、敵を大衆的に攻撃するならば、国会や、スヴェアボルグ(一六一)とクロンシタット(一六二)の事件ののちますます大きく動揺している軍隊を獲得するために、断固として、たくみに闘争するならば、また共同の闘争に農村が確実に参加するならば――次の全国的な武装蜂起の勝利はわれわれのものである。

ロシア革命の偉大な数日の教訓を摂取しながら、われわれの活動をさらにひろく展開し、われわれの任務をさらに大胆に提起しよう。われわれの活動の基礎になっているのは、現在における諸階級の利害と全人民の発展の諸要求との正しい評価である。ツァーリ権力の転覆と革命政府による憲法制定議会の召集というスローガンのもとに、われわれは、プロレタリアートと農民と軍隊のますます大きな部分を結集しつつあるし、今後も結集してゆくだろう。いつでもそうであるが、大衆の意識のすすむことが、われわれの全活動の基礎であり、主要な内容である。だが、ロシアがいま際会しているような時機には、この一般的な、恒常的な、基本的な任務に、さらに特別な、特殊の任務がつけくわわることを忘れないようにしよう。ペダント〔衒学者〕や俗物にはなるまい。どんな条件のもとでも、いつも変わらないわれわれの日常の義務を無内容にも引合いにだして、当面のこの特別な任務、現在の闘争形態のこの特殊な任務を回避することはすまい。

偉大な大衆闘争が近づいていることを銘記せよ。それは、武装蜂起だ。それは、できるだけ同時に起こらなければならない。大衆は、自分たちが、流血の、死にものぐるいの武装闘争に向かってすすんでいることを、知らなければならない。死をものともしない意気ごみが大衆のあいだにひ

ろまらなければならない。それが勝利を保障するのだ。敵にたいする攻撃は、このうえもなく精力的におこなわれなければならない。防御ではなくて攻撃が、大衆のスローガンにならなければならない。敵を容赦なく全滅すること――これこそが彼らの任務だ。闘争を機動的に、柔軟性をもって組織し、軍隊の動揺分子を積極的な闘争に引きいれなければならない。自覚したプロレタリアートの党は、この偉大な闘争のなかで、自分の義務を果たさなければならない。

『プロレタリー』第二号、一九〇六年八月二九日
全集、第五版、第一三巻、三六九―三七七ページ所収
邦訳全集、第一一巻、一五九―一六七ページ所収

パルチザン戦争

パルチザン行動の問題は、わが党と労働者大衆の強い関心を呼んでいる。われわれは、すでに何度か、ことのついでにこの問題にふれておいた。そこでこんどは、まえに約束しておいたように、われわれの見解をいっそう完全に述べておこう。〔『最近の事件によせて』、全集、第一一巻、一五五ページを参照〕

一

最初から始めよう。すべてのマルクス主義者は、闘争形態の問題を考察するにあたって、どういう基本的要求を提出しなければならないか？　第一に、マルクス主義は、運動をなにか一つの特定の闘争形態にしばりつけない点で、すべての原始的な形態の社会主義とは違っている。マルク

ス主義は、多種多様な闘争形態を認めるものであるが、そのさい、それらの形態を「頭で考えだす」のではなく、運動の過程でおのずから発生する、革命的諸階級の闘争形態を普遍化し、組織化し、それに意識性をあたえるにすぎない。あらゆる抽象的な公式、あらゆる空論的な処方箋に無条件に反対するマルクス主義は、進行中の大衆闘争――運動の発展、大衆の自覚の成長、経済的および政治的危機の激化にともなって、たえず新しい、ますます多様な防御と攻撃の方法を生みだすところの――にたいして注意ぶかい態度をとることを要求する。だからマルクス主義は、どんな闘争形態にせよそれを拒否するなどと絶対に誓いはしない。マルクス主義は、ただある時機だけに実行可能で、そのときにだけおこなわれる闘争形態にとどまることはけっしてなく、そのときの社会事情の変化にともなってその時期の活動家の知らない、新しい闘争形態が不可避になることを認めるものである。この点でマルクス主義は、こういう表現をしてもかまわなければ、大衆的実践にまなぶのであって、書斎にすわった「体系屋」が頭で考えだした闘争形態を大衆に教えようなどという、思いあがった考えをもつものではけっしてない。たとえばカウツキーは、社会革命の諸形態を考察して、こう言った。きたるべき危機が、われわれのいま予見できない新しい闘争形態をわれわれにもたらすであろうということを、われわれは知っている、と。

第二に、マルクス主義は、闘争形態の問題を、かならず歴史的に考察することを要求する。具体的な歴史的情勢をよそにしてこの問題を提起するのは、弁証法的唯物論のイロハがわかっていないことを意味する。経済的進化の種々の時機には、政治、民族文化、生活様式、その他の条件が異なるにしたがって、いろいろな闘争形態が前面におしだされてきて、主要な闘争形態になり、それに関連して、第二次的、付随的な闘争形態のほうもまたしたがって形を変える。ある運動のある発展段階における具体的な情勢をこまかく考察せずに、特定の闘争手段の問題にイエスかノーかを答えようとするのは、マルクス主義の基盤をまったく捨てさることを意味する。

以上が、われわれの指針としなければならない、二つの基本的な理論的命題である。西ヨーロッパにおけるマルクス主義の歴史は、以上に述べたことを裏書きする無数の実例をわれわれにあたえてくれる。ヨーロッパの社会民主党は、現在では議会主義と労働組合運動を主要な闘争形態とみなしているが、過去においては蜂起を認めていたし、将来は事情の変化にともなって、[150]――ロシアのカデットや、ベズザグラフツィの自由主義的ブルジョアどもの意見とは

反対に――それを認めるだけの十分な心がまえをもっている。社会民主党は、一八七〇年代には、社会的な万能薬としての、ブルジョアジーを非政治的な方法で一挙に転覆する手段としての、ゼネラル・ストライキを否認した。――しかし、社会民主党は、ある条件のもとでは必要な闘争手段の一つとして、(とくに一九〇五年のロシアの経験のあとでは)大衆的な政治的ストライキを完全に認めている。社会民主党は、一九世紀の四〇年代にはバリケード市街戦を認めた。――だが一九世紀末には特定の理由にもとづいてそれを拒否した。――そしてまた、K・カウツキーのことばによると、新しいバリケード戦術を編みだしたというモスクワの経験のあとでは、後者の見解を再検討して、バリケード闘争の合目的性を認める心がまえが十分にあることを表明した。

二

以上マルクス主義の一般的命題を明らかにしておいて、これからロシア革命に移ろう。ロシア革命によって提起された闘争形態の歴史的発展を思いだしてみよう。はじめは労働者の経済的ストライキ(一八九六―一九〇〇年)、ついで労働者と学生の政治的デモンストレーション(一九〇一―一九〇二年)、農民一揆(一九〇二年)、いろいろの形でデモンストレーションと組み合わされた大衆的な政治的ストライキの開始(一九〇二年のロストフ、一九〇三年夏のストライキ、一九〇五年一月九日)、個々の地方ではバリケード闘争をともなった全国的な政治的ストライキ(一九〇五年一〇月)、大衆的バリケード闘争と武装蜂起(一九〇五年一二月)、平和的な議会闘争(一九〇六年四―六月)、軍隊の部分的反乱(一九〇五年六月―一九〇六年七月)、農民の部分的蜂起(一九〇五年秋―一九〇六年秋)。

以上が、闘争形態一般の見地から見た一九〇六年秋までの事態である。これにたいする専制側の「報復的な」闘争形態は、一九〇三年春のキシニョフ[(六六)]に始まって、一九〇六年秋のセドレッツ[(六七)]に終わる黒百人組のポグロムである。この全期間をつうじて、ユダヤ人、学生、革命家、自覚した労働者にたいする黒百人組のポグロムや暴行の組織は、たえず進歩し、完成されてゆき、買収された低俗な大衆の暴力に黒百人組的軍隊の暴力を組み合わせ、はては農村や都市で大砲を使用するまでになり、懲罰隊、懲罰列車と合体するにいたった、等々。

これが、基本的な背景である。この背景のまえに――疑いもなく部分的、第二義的、付随的なものとして――この論文の研究と評価とのテーマである現象が浮かびあがって

くる。その現象とはいったいなにか？　その形態はどんなものか？　その原因は？　発生の時期と普及の程度は？　革命の全過程のうちでそれのもつ意義は？　社会民主党によって組織され、指導される、労働者階級の闘争にたいするその関係は？　これらが、一般的な背景をえがいたのちに、われわれがいまやとりあげなければならない問題である。

われわれの関心をひいているこの現象というのは武装闘争である。それをおこなっているのは、個々の人間と少人数のグループである。彼らは、一部は革命的組織に所属しており、一部は（ロシアの若干の地方ではその大部分が）どんな革命的組織にも所属していない。武装闘争は、厳格に区別しなければならない二つの違った目的をもとめている。すなわち、この闘争は、第一には、個々の人間、軍隊や警察の長官や下役を殺すこと、第二には、政府や個人から資金を没収すること、を目標としている。没収した資金は、一部は党にゆき、一部は特別に武装と蜂起の準備にあてられ、一部はこの闘争をおこなう人々の生活にあてられる。多額の徴発（カフカーズでの徴発は二〇万ルーブリ余にのぼり、モスクワでの徴発は八七万五〇〇〇ルーブリであった）[三]は、優先的に、まさに革命的諸政党にいった。少額の徴発は、なによりも、またときにはその全額が、「徴発者」の生活費にあてられた。この闘争形態がひろく発展し普及したのは、疑いもなく、やっと一九〇六年になってから、すなわち十二月蜂起後のことであった。政治危機が激しくなって武装闘争の段階に達したこと、またとくに都市と農村で窮乏と飢餓と失業が激しくなったことがこの闘争を呼びおこした原因のうちで大きな役割を演じた。この闘争形態を、社会的闘争のすぐれた形態、それどころか唯一の形態とさえ解したのは、住民中の浮浪分子、ルンペン、無政府主義者のグループであった。専制のこれにたいする「報復的な」闘争形態とみるべきものは、戒厳令、新しい軍隊の動員、黒百人組のポグロム（セドレッツ）、戦時軍法会議である。

三

ここで考察している闘争にたいする普通の評価は、要するに次のようなことになる。それは、無政府主義、ブランキ主義[六]、旧式のテロルであり、大衆から切りはなされた個人の行動であって、労働者を堕落させ、労働者から広範な住民層を離反させ、運動を攪乱し、革命に害をあたえるものだというのである。このような評価を裏書きする例は、新聞に日々報道される事件のうちから、たやすくさがしだ

すことができる。

だが、これらの例は人を承服させるに足るであろうか？　この点をたしかめるために、この闘争形態が最も発展している地方――ラトヴィア地方――をとろう。新聞『ノーヴォエ・ヴレーミャ』[一三二]（九月九日号と一二日号）は、ラトヴィア社会民主党の活動について次のような苦情を述べている。ラトヴィア社会民主労働党（ロシア社会民主労働党の一部）は、その新聞[一三三]を、三万部定期的に発行している。告知欄には、誠実な人が各自義務として掃滅すべきスパイの名簿が発表される。警察に協力するものは「革命の敵」であると宣告され、死刑に処したうえ、その財産を没収すべきものとされている。社会民主党に渡す金は、かならず捺印のある領収書とひきかえに渡すように、住民に指示している。党の最近の報告には、年収四万八〇〇〇ルーブリの内訳として、リバウ支部からはいった武器の価格五、六〇〇ルーブリが記載されているが、これは徴発によって獲得したものである。――『ノーヴォエ・ヴレーミャ』は、むりからぬことであるが、この「革命的立法」、この「恐怖政府」にたいして、痛憤している。

　ラトヴィア社会民主党員のこの活動を、無政府主義、ブランキ主義、テロリズムとよぶことには、だれしも躊躇するであろう。だが、それはどういうわけか？　それは、ここでは、新しい闘争形態と、一二月に起こった、そしていまふたたび成熟しつつある蜂起との結びつきが、明瞭だからである。ロシア全国にあてはめた場合には、この結びつきはそれほど明瞭には認められないが、しかしその結びつきは存在している。「パルチザン」闘争がひろまったのはまさに一二月以後のことであって、それが経済的危機の激化だけではなく、政治的危機の激化とも結びついていることは、疑いをいれない。ロシアの旧来のテロリズムは、インテリゲンツィア陰謀家の仕事であった。ところが、いまパルチザン闘争をやっているのは、たいていは、労働者の戦闘隊員、あるいはたんなる失業労働者である。これをブランキ主義や無政府主義とみる考えは、杓子定規をあてはめる傾向をもった人間には、すぐに思いつきやすいことであるが、ラトヴィア地方であれほど明白になっている蜂起の情勢のもとでは、こういうきまり文句のレッテルが役に立たないことは、一見して明らかである。

　われわれのあいだでは蜂起の情勢と結びつけないでパルチザン戦争を分析することが普通のならわしになっているのだが、これがまったくまちがっていて、非科学的、非歴史的であることはラトヴィア人の例によってはっきりとわかる。この情勢に注意すること、蜂起の大きな幕と幕のあいだの中間期の特殊性を考えてみること、その場合どうい

う闘争形態が不可避的に生みだされるかを理解することが必要であって、カデットもノーヴォエ・ヴレーミャ派も一様につかっている、「無政府主義だ、略奪だ、浮浪人根性だ！」という、きまり文句でかたづけてはならないのである。

パルチザン行動はわれわれの活動を混乱におとしいれる、というものがいる。この議論を、一九〇五年一二月以後の情勢に、黒百人組のポグロムと戒厳令との時期に、適用してみよう。このような時期には、どちらがより多く運動を混乱させるだろうか、反撃しないことか、それとも組織的なパルチザン闘争か？　中央ロシアとロシアの西部辺境地方――ポーランド、ラトヴィア地方――とを比較してみたまえ。パルチザン闘争が西部辺境地方ではるかにひろく普及し、より高度に発展していることは、疑いない。また一般に革命運動、とくに社会民主主義運動が、西部辺境地方よりも中央ロシアでより多く混乱していることも、同様に疑いない。もちろん、このことからして、ポーランドとラトヴィアの社会民主主義運動がそれほど混乱していないのは、パルチザン戦争のおかげである、などと結論するつもりは毛頭ない。そこから出てくる結論は、ただ、一九〇六年のロシアの社会民主主義的労働運動の混乱状態の責任がパルチザン戦争にはない、ということにすぎない。

この点で、民族的条件の特殊性をあげて論拠とすることがめずらしくない。だがこの言い分は、流行の論証の薄弱さをとくにまざまざとさらけだすものである。もしも問題は民族的条件にあるというのであれば、それはつまり、無政府主義、ブランキ主義、テロリズム――すなわち全ロシア的な、そしてとくにロシア人的でさえある罪業――が問題なのではなくて、なにか別のことが問題だ、ということである。諸君！　このなにか別のことを具体的に分析してみたまえ！　そうすれば、民族的な圧迫または対立によってなにごとも説明されないことがおわかりになろう。なぜなら、こうした圧迫や対立はこれまでもつねに西部辺境地方に存在していたのであるが、パルチザン闘争は当面の歴史的時期がはじめて生みだしたものだからである。民族的な圧迫や対立があっても、パルチザン闘争のないところは多いし、パルチザン闘争は、ときには全然民族的圧迫がなくても発展している。問題を具体的に分析すれば、肝心なことは民族的圧迫ではなくて、蜂起の条件だということが明らかになるだろう。パルチザン闘争は、大衆運動がすでに実際に蜂起に到達したとき、しかも内乱における「大会戦」の多少とも長い中休みがおとずれるときに、不可避的となる闘争形態である。

運動を混乱させるのは、パルチザン行動ではなくて、パ

ルチザン行動を掌握することのできない党の弱さである。だからこそ、われわれロシア人のあいだでふつう耳にするパルチザン行動にたいする呪いのことばは、党を実際に混乱させる秘密の、いきあたりばったりの、非組織的なパルチザン行動と結びついているのである。どういう歴史的条件が、この闘争を呼びおこすかを理解する能力がないために、われわれはまた、この闘争の悪い側面を無害にすることもできないでいる。だがそれにもかかわらず、闘争はおこなわれている。それを呼びおこしているのは、強力な経済的および政治的原因である。われわれには、これらの原因を取りのぞいて、この闘争をなくするだけの力はない。パルチザン闘争にたいするわれわれの苦情は、蜂起の問題におけるわが党の弱さにたいする苦情なのである。

以上に混乱について述べたことは、堕落にもあてはまる。堕落させるのはパルチザン戦争ではなくて、パルチザン行動の非組織性、無秩序性、無党派性である。パルチザン行動に非難や呪いをなげつけたところで、それは、この疑いをさしはさむ余地のない堕落からすこしもわれわれを、すくいだしてはくれない。なぜなら、こうした非難や呪いでは、深刻な経済的および政治的原因によって呼びおこされる現象を阻止することは、絶対にできないからである。あるいはこういって反論する人があるかも知れない、——たとえわれわれには変則的な、堕落をもたらす現象を阻止する力がないにしても、それは、党が異常な、堕落をもたらすような闘争手段に移っていってよいという論拠にはならない、と。だが、こういう反論はすでに純然たる自由主義的＝ブルジョア的なものであって、マルクス主義的ではない。なぜなら、内乱またはその一形態としてのパルチザン戦争を、総じて異常な、堕落をもたらすものと考えることは、マルクス主義者にはできないことだからである。マルクス主義者は、社会平和の基盤ではなしに、階級闘争の基盤に立っている。鋭い経済的および政治的危機が生じたある時期には、階級闘争は、直接の内乱、すなわち人民の二つの部分の武装闘争に発展する。そういう時期には、マルクス主義者は、内乱の立場に立つ義務がある。およそ内乱にたいする道徳的非難はすべて、マルクス主義の見地からは、まったく許しがたいものである。

内乱の時期には、プロレタリアートの党の理想は戦闘する党である。これは絶対に争う余地がない。ある時機に内乱のある形態が合目的的でないことを、内乱の見地から論議し立証してもよいということを、われわれは十分に容認する。われわれは、軍事的合目的性の立場からする内乱の各種の形態にたいする批判を十分に認めるし、またこういう問題の決定権が、それぞれの地方の社会民主党の実践家

にあるということにも、無条件で同意する。だがわれわれは、無政府主義、ブランキ主義、テロリズムという、陳腐な、紋切型の文句をつかって内乱の諸条件の分析を回避しないこと、また、いつやらペ・ペ・エス〔ポーランド社会党〕(一三)のどこやらの組織が実行したパルチザン行動の愚かしいやり方をもちだして、パルチザン戦争一般に社会民主党が参加すること自体を問題にするおどかしに用いたりしないことを、マルクス主義の原則の名において無条件に要求する。

パルチザン戦争が運動を混乱させるという言いぶんにたいしては、批判的な態度をとらなければならない。あらゆる新しい闘争形態は、新しい危険と新しい犠牲とをともなうものであって、この新しい闘争形態の準備ができていない組織を「混乱させる」ことは避けられない。われわれの古い宣伝家サークルは扇動活動へ移行することによって混乱させられた。その後われわれの各委員会はデモンストレーションへの移行によって混乱させられた。どんな戦争のさいにも、軍事行動はすべて、戦闘員の隊列にある種の混乱をもちこむ。このことから、たたかうべきでないという結論を引きだしてはならない。このことから引きだされなければならない結論は、戦い方を習得しなければならないということである。それだけのことである。

われわれは無政府主義者ではない、盗賊ではない、強盗ではない、われわれはもっと高級だ、われわれはパルチザン戦争を排斥する、——こういうことを高慢に、ひとりよがりに述べたてる社会民主主義者をみるとき、私は、この連中は、自分の言っていることがわかっているのだろうか、と自問する。全国にわたって、黒百人組的政府と住民の武装衝突や小ぜりあいが起こっている。この現象は、革命発展の現段階では、絶対に避けることのできない現象である。住民は、自然発生的に、非組織的に——まさにそのためにしばしばまずい、よくない形態で——これまた武装衝突や武装攻撃によってこの現象に反応している。われわれの組織が弱く、準備がないために、われわれがある場所で、ある時機に、この自然発生的な闘争にたいする党の指導をあきらめる場合がありうることを、私は理解している。この問題は現地で実際に働いている活動家が解決しなければならないこと、また弱い、準備のない組織の建てなおしは容易な仕事でないことを私は理解している。だが、社会民主党の理論家や政論家が、この無準備を悲しむ感情を示さずに高慢なひとりよがりと、ごく若いころにまる暗記した、無政府主義だ、ブランキ主義だ、テロリズムだ、というきまり文句をうぬぼれのあまり夢中になって繰りかえしている様子を見るとき、私は、世界で最も革命的な学説がいや

しめられていることに腹だたしくなってくる。

パルチザン戦争は、自覚したプロレタリアートを、落ちぶれた、のんだくれの浮浪人に近づける、と言うものがいる。これは正しい。だが、これから出てくる結論は、プロレタリアートの党は、パルチザン戦争を唯一の闘争手段、または主要な闘争手段とみなすこととさえけっしてできないということ、この闘争手段は他のいろいろな闘争手段に従属していなければならず、もろもろの主要な闘争手段と釣合っていなければならず、大衆を啓発し組織する社会主義の影響力によって純化されていなければならないということ、これだけである。そしてこの最後にあげた条件がなければ、ブルジョア社会におけるあらゆる、それこそあらゆる闘争手段は、プロレタリアートを、その上または下にあるいろいろな非プロレタリア層に近づけることになり、また自然発生的な成りゆきにまかされて、ぼろぼろにすりきれ、変質し、けがされてしまう。自然発生的な成りゆきにまかされるなら、ストライキは消費者に対抗する労働者と雇い主の「Alliances」——協定に変質してしまう。議会は、ブルジョア政治屋の一味が、「人民の自由」、「自由主義」、「民主主義」、共和主義、反教権主義、社会主義、その他、あらゆる売れゆきのよい商品を、卸や小売であきなう娼家に変質してしまう。新聞は、だれの御用でもつとめるやり手婆、大衆を堕落させる道具、群集の低級な本能へ野卑にこびへつらう道具、等々に変質してしまう。社会民主党は、プロレタリアートを、そのやや上または下にいる諸層から万里の長城でへだてるような、そういう万能の闘争手段を知らない。社会民主党は、いろいろな手段を適用するが、ただつねにその適用に、厳格に規定された思想上および組織上の条件をつけておくのである。*

* ボリシェヴィキ派の社会民主党員は、パルチザン行動にたいして軽率で偏頗な態度をとっている、といってしばしば非難される。だから、パルチザン行動についての決議草案（『パルチーヌィエ・イズヴェスチヤ』〔『党報』〕第二号および大会についてのレーニンの報告）のなかで、パルチザン行動を弁護するボリシェヴィキの一部分が、それを承認する条件として、次の条件をもちだしたことを思いおこすことは、むだではない。すなわち、個人財産の「徴発」は全然許されなかった。官有財産の「徴発」は、奨励はされずにただ、党の統制のもとでおこない、またその資金を蜂起の必要にふりむけるという条件をつけて容認された。テロルの形態をとるパルチザン行動は、政府の暴圧者や積極的な黒百人組にたいしては奨励されたが、しかし、（一）広範な大衆の気分を考慮し、（二）その地方の労働運動の諸条件に留意し、（三）プロレタリアートの力が無益に浪費されないように心がける、ということを条件としてであった〔全集、第一〇巻、一三九ページ〕。統一大会で採択された決議がこの草案と実際に違うと

ころは、ただ一つ、官有財産の「徴発」が許されていないという点だけである。

四

ロシア革命における闘争形態は、ヨーロッパのブルジョア諸革命にくらべて、非常に多種多様なことを特徴としている。カウツキーが一九〇二年に、将来の革命は（おそらくはロシアを除いて、と彼はつけくわえた）政府との人民の闘争というよりは、むしろ国民の二つの部分のあいだの闘争になるだろう、と言ったのは、ある程度このことを予言したものである。ロシアでは、疑いもなく、この第二の闘争が、西欧のブルジョア革命の場合よりも広範に発展しているのが見うけられる。国民のなかにいるわが革命の敵は少数である。しかし彼らは、闘争の激化にともなってますますよく組織されつつあり、ブルジョアジーの反動的諸層から支持を得ている。だから、このような時期、全人民的な政治的ストライキの時期には、蜂起が、きわめて短い時間ときわめて小さい地域とに限られる個別的行動という古い形態をとって現われることができないのは、まったく当然であり、不可避的なことである。蜂起が、持続的な、全国をつつむ内乱、すなわち国民の二つの部分のあいだの武装闘争という、より高度の、より複雑な形態をとるのは、まったく当然であり、不可避的なことである。そういう戦争は、比較的長い期間にへだてられた一連の少数の大会戦と、この期間に起こる多くの小衝突としてしか考えられない。もしそうなら——そして疑いもなくそうなのだが——社会民主党は、これらの大会戦においても、またできるだけこれらの小衝突においても、最大限に大衆を指導できるような組織をつくることを、ぜひとも自分の任務としなければならない。社会民主党は、階級闘争が激化して内乱となった時期には、この内乱に参加するだけでなく、またそのなかで指導的役割を演じることを、自分の任務としなければならない。社会民主党は、党の諸組織が、敵の兵力に損失をこうむらせるただ一つの機会ものがさない交戦国の一方の側として実際に行動できるように、組織を訓練し、準備しなければならない。

これは——言うまでもなく——困難な任務である。この任務を一挙に解決することはできない。内乱の過程で全人民が闘争のなかで再訓練をうけ、学ぶように、われわれの組織もまた訓練されなければならないし、この任務を果たすために経験の示すところをもとにして建てなおされなければならない。

われわれは、実践活動家になにか頭ででっちあげた闘争

形態をおしつけようとか、あるいは、ロシアの内乱の全般的行程のうちでパルチザン戦争のあれこれの形態が果たす役割の問題を書斎のなかから解決しようとさえする、思いあがった考えはすこしももっていない。われわれは、あれこれのパルチザン行動の具体的な評価の仕方を、社会民主党内の傾向の問題と見なそうなどとは、全然考えていない。だがわれわれは、実生活によって提出される新しい闘争形態にたいして正しい理論的評価をくだすことをできるだけ助けること、——自覚した労働者が新しい困難な問題を正しく提起し、その解決に正しく近づくのを妨げている杓子定規や偏見と容赦なくたたかうことを、われわれの任務と考える。

『プロレタリー』第五号
一九〇六年九月三〇日
全集、第五版、第一四巻、一―一二ページ所収
邦訳全集、第一一巻、二〇六―二一七ページ所収

社会民主党と選挙協定[一五七]

第二国会の選挙運動の問題は、いま、労働者党の強い関心をひいている。そのさいとくに多くの注意がはらわれているのは、「ブロック」、すなわち、選挙にあたって社会民主党が他党と恒常的な選挙協定や一時的な選挙協定を結ぶことである。ブルジョア的なカデット系の新聞は——『レーチ』[一五四]も、『タヴァーリシチ』[一五一]も、『ノーヴィ・プーチ』[一五八]も、『オーコ』[一五九]その他も——社会民主党とカデットとの「ブロック」(選挙協定)の必要なことを労働者に納得させようと、いろいろと試みている。社会民主党の中でもメンシェヴィキの一部はこういうブロックに賛成し(『ナーシェ・デーロ』[一五七]と『タヴァーリシチ』のチェレヴァーニン)、他の一部は反対している(『タヴァーリシチ』のマルトフ)。ボリシェヴィキは、ブロックに反対していて、選挙運動の最高段階でだけ、有権者の第一次投票に示された革命的また

は反政府的な諸党の勢力におうじて議席を配分することについて部分的協定を結ぶことを容認しているにすぎない。
　ボリシェヴィキの見解の根拠を簡単に述べることにしよう。

一

　社会民主党は、議会主義（代議制議会への参加）を、プロレタリアートを啓発し教育して自主的な階級政党に組織する一手段、労働者の解放をめざす政治闘争の一手段と見ている。このマルクス主義的な見解は、社会民主主義を、一方ではブルジョア民主主義から、他方では無政府主義から、決定的に区別するものである。ブルジョア自由主義者とブルジョア急進主義者は、議会制度を、国事一般をおこなう「自然」で唯一の正常な、唯一の合法的な方法だと見て、階級闘争と現代議会制度の階級的性格とを否定する。ブルジョアジーは、議会制度がどのようにブルジョア的抑圧の武器であるかを労働者が見ないように、また議会制度の歴史的に制約された意義を労働者が認識しないようにと、全力をあげて、あらゆる方法で、またあらゆるきっかけをとらえて、労働者に目かくしをかぶせようとつとめている。無政府主義者も、議会制度の歴史的に規定された意義を評価することができずに、このような闘争手段を総じて拒否している。だからロシアの社会民主主義者は、無政府主義とも断固としてたたかうし、また、議会を基盤とする旧権力との取引によって革命をできるだけ早く終わらせようとするブルジョアジーの努力とも、断固としてたたかっているのである。社会民主主義者は、彼らの議会活動全体を、労働運動の全般的な利益と、現在のブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートの独自の任務とに、完全にまた無条件に、従属させている。
　こういうわけで、なによりもまず、社会民主党の国会カンパニアへの参加は、他党の参加とはまったく違った性格をもつということになる。われわれは、他党とは違って、このカンパニアに、独立の意義はなにも認めないし、それどころか、最高の意義も認めはしない。われわれは、他党とは違って、このカンパニアを階級闘争の利益に従属させる。またわれわれは、他党とは違って、このカンパニアのスローガンとして、議会改革のための議会主義を提起するのではなく、憲法制定議会のための革命闘争を、それも、近年の闘争形態の歴史的発展からでてくる最高の形態の闘争を提起する。*

＊ われわれは、ここではボイコット問題にはふれない。なぜなら、それはこの小冊子の主題にはいらないからである。た

だ、この問題を具体的な歴史的事情からはなれて評価してはならない、ということだけを注意しておこう。ブルィギン国会のボイコットは成功した。ヴィッテ国会のボイコットは、必要で、正しかった。革命的社会民主主義者は、最も断固たる、最も直接的な闘争の道にまっさきに立たなければならないし、迂回的な闘争方法はいちばん最後にとらなければならない。ストルィピン国会のボイコットは、以前の形では不可能であるし、また第一国会の経験のあとでは正しくないであろう。

二

選挙協定について以上に述べたことから、どういう結論がでてくるか？　まず第一に、われわれの主要な基本的な任務は、唯一の最後まで革命的な階級であり、ブルジョア民主主義革命を勝利へみちびくことのできる唯一の指導者であるプロレタリアートの階級意識と自主的な階級組織とを発展させることである、という結論である。だから、全選挙カンパニアと全国会カンパニアの階級的自主性は、われわれの最も重要な一般的任務である。その他の部分的な任務は、このことによって否定されるわけではないが、それらの任務はつねに一般的任務に従属し、それに適合しなければならない。われわれは、無条件にマルクス主義理論と国際社会民主主義運動の経験全体とによって確証されるこの一般的な前提から出発しなければならない。

ロシア革命におけるプロレタリアートの特別の任務はこの一般的な前提を一挙にくつがえしているように、おもわれるかもしれない。たしかに、大ブルジョアジーは、オクチャブリスト(二)をつうじてすでに革命を裏切っており、あるいは、（カデットをつうじて）憲法によって革命を停止させようという目標をたてた。革命の勝利は、プロレタリアートが農民大衆の最もすすんだ自覚した部分——その客観的地位からして、取引ではなく闘争に、革命を鈍らせることではなく革命を完成することにつきすすんでいく部分——によって支持される場合にはじめて可能である。そこで、すべての選挙の期間をつうじて社会民主党と民主主義的農民との協定がどうしても必要である、と結論する人があるかもしれない。

しかし、わが革命の完全な勝利がプロレタリアートと農民の革命的・民主主義的執権(ディクタツーラ)という形ではじめて可能だというまったく正しい前提からは、まだけっしてこういう結論をだすわけにはいかない。まだそのまえに、選挙の全期間をつうじて民主主義的農民とのブロックが、政党間の現在の関係（わが国では民主主義的農民は、いまではすでに一つの党でなく数個のさまざまな党によって代表されてい

る）という観点からしても、現在の選挙制度という観点からしても、可能であり有利であるということが証明されなければならない。さらにまだどれか一つの党とブロックを結ぶほうが、いろいろな民主主義的農民政党を批判し、民主主義的農民の一部の分子を他の分子に対置するうえでわが党が完全な自主性をもっているよりも、われわれとしては、真に革命的な農民の利益をよりよく表現し、よりよく守ることになる、ということが証明されなければならない。現在の革命ではプロレタリアートは革命的な農民に最も近い関係にあるという前提から、無条件に、民主主義的農民とともに、裏切的な大ブルジョア的「民主主義派」（カデット）に対抗する社会民主党の一般的政治「方針」[注]がでてくる。しかし、このことからただちに、エヌ・エス（人民社会党）あるいはエス・エルと選挙ブロックを結ぶべきだという結論がでてくるかどうかは、これらの党のあいだの差異や、これらの党とカデットとの差異を研究せずには、また多段階制の今日の選挙制度を研究せずには、まだ言うことができない。このことから直接にまた無条件にでてくるのは、われわれの選挙カンパニアでは、プロレタリアートをブルジョア民主主義派一般にたいして、単純に抽象的に対置するのにとどまることはけっしてできない、ということだけである。いや、それどころか、われわれは、わが革命の歴史の資料から引きだされた、自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーと革命的＝民主主義的ブルジョアジーとの正確な区別、もっと具体的にいえば、カデット、エヌ・エスとエス・エルとの相違にたいして、すべての注意をむけなければならない。われわれは、このような区別をすることによってはじめて、自分たちに最も近い「同盟者」を最も正しく決定することができるであろう。この場合、第一に、社会民主主義者は、ブルジョア民主主義のあらゆる同盟者を、敵を監視するように監視しなければならないということを、忘れてはならない。第二に、われわれは、エヌ・エスといったようなもの（たとえば）との共同のブロックによって自分の手をしばるか、それとも、決定的な瞬間には、無党派の「トルドヴィキ」を日和見主義者（エヌ・エス）と革命家（エス・エル）とに分裂させ、前者に後者を対立させる等々の可能性をつねにもつように、最も完全な自主性を保持するか、どちらがわれわれに有利であるかを、なお特別に究明しなければならない。

このように、わが革命がプロレタリア的・農民的性格のものだという理由だけでは、第二国会選挙のあれこれの段階であれこれの民主主義的農民政党と協定を結ぶことが必要だという結論をだすことは、まだできないのである。この理由は、およそ選挙のさいにプロレタリア的・階級的自

主性を制限するのにさえ、――この自主性を否定することは言うにおよばず――まだけっして十分でない。

三

われわれの任務の解決にもっと近づくためには、われわれは、第一に、第二国会の選挙にのぞむ諸政党の基本的な色分けに注目しなければならず、第二に、現在の選挙制度の特質を究明しなければならない。

諸政党のあいだでしばしば選挙協定が結ばれる。では、選挙に打って出るとみられる政党の主要な型には、どういうものがあるか？　黒百人組は、疑いもなく、第一国会の選挙のときよりも、もっと緊密に団結するであろう。オクチャブリストと「メオン」（平和革新党）[20]は、黒百人組に同調するか、カデットに同調するか、それとも（これがなによりもありそうなことだが）黒百人組とカデットのあいだを動揺するであろう。いずれにしても、オクチャブリストを「中央党」とみなすこと（エリ・マルトフが新しい小冊子『ロシアの諸政党』でやっているように）は、根本的な誤りである。わが革命の終末を終局的に決定することになる現実の闘争では、中央派は、カデットである。カデットは、自主的に選挙にのぞんでいる組織された党であり、しかも第一国会の選挙でおさめた成功に酔っている。しかし、この党の規律はしごく厳格なものでもなければ、その結束はしごく強固なものでもない。カデット左派は、ヘルシングフォルスでの敗北[21]に不満で、憤慨している。彼らの一部（最近ではモスクワのアレクシンスキー氏）は、エヌ・エスへ去っている。第一国会には、あらゆる土地私有を廃止するという三三人の草案にさえ署名したような「非常にめずらしい」カデットがいた（バダムシン、ズブチェンコ、ロジキン）。したがって、この「中央派」のごく小部分であるかもしれないが、これを割って左翼の方へとることは、望みのないことではない。カデットは、人民大衆のなかで自分たちが弱いことをよく感じている（最近、カデットの『タヴァーリシチ』自身が、このことを認めざるをえなかった[22]）ので、喜んで左翼とのブロックに応じるであろう。カデットの諸新聞が喜びにふるえて、社会民主党とカデットとのブロックの問題を討議するために、社会民主主義者のマルトフとチェレヴァーニンとに紙面をさいたのも、理由のないことではない。もちろんわれわれは、カデットが第一国会で彼らの公約を実行しなかったこと、トルドヴィキの妨害をしたこと、憲法をもてあそんだこと、その他等々、民主的選挙制度の四大要求（普通・平等・直接・秘密投票の選挙権）を黙殺したことや懲役的法律案を

提出したことにいたるまで、けっして忘れはしないし、選挙運動のときには、このことを大衆に説明するであろう。

つぎにくるのは「トルドヴィキ」である。この型の党、すなわち小ブルジョア的な、主として農民的な党は、無党派の「勤労グループ」（さいきん大会をひらいた）、エヌ・エスおよびエス・エル（ペ・ペ・エス――「ポーランド社会党」――その他は、多かれ少なかれエス・エルと一致する）に分解しつつある。いくらかでも首尾一貫した断固たる革命家で共和主義者であるのは、エス・エルだけである。エヌ・エスは、わがメンシェヴィキよりも悪い日和見主義者であり、厳密に言えば、なかばカデットである。無党派の「勤労グループ」は、右にあげた二つのどちらよりも農民大衆のなかに影響力があるかもしれないが、その民主主義がどの程度断固たるものであるか見きわめることはむずかしい。もっとも、彼らは疑いもなくカデットよりもはるかに左翼的であり、革命的民主主義に属しているようではあるが。

社会民主党は、内輪もめがあるにもかかわらず、あくまで規律をもって選挙にのぞむ唯一の党であり、まったく明確で厳密に階級的な基礎をもち、ロシアのあらゆる民族のすべての社会民主党を統一した、唯一の党である。

しかし、トルドヴィキ型の党がうえに述べたような構成になっているとすれば、トルドヴィキとの共同ブロックをどうやって結ぶのか？　無党派トルドヴィキの行動を保証するものはどこにあるのか？　党と無党派とのブロックがはたして可能だろうか？　アレクシンスキー氏らが、明日にでもエヌ・エスからカデットに復帰しないということが、どうしてわれわれにわかるだろうか？

明らかに、トルドヴィキとのほんとうの党を基礎にする協定は不可能である。明らかに、われわれは日和見主義者のエヌ・エスと革命家のエス・エルとの統合を援助することはけっしてできないのであって、むしろ、彼らを分裂させ対立させなければならない。明らかに、無党派の勤労グループが存在している場合には、無条件に革命的な精神で彼らに働きかける完全な自主性をもつほうが、自分の手をしばって、君主派と共和派との相違を塗りつぶす等々のことをするよりも、われわれにとってはすべての点で有利である。社会民主党には、その相違を塗りつぶすことは絶対に許されないのであるから、すでにこの理由だけからしても、諸政党の実在の色分けによれば無党派トルドヴィキとエヌ・エスとエス・エルとが統合されるかぎり、ブロックは絶対に拒否しなければならない。

これらの党派の統合は実際に可能であり、また統合され

るだろうか？　もちろん、その統合は可能である。なぜなら、小ブルジョア的な階級的基礎は一つだからである。第一国会では実際に統合されていたし、一〇月のときの新聞でも、国会期の新聞でも、学生のあいだでの投票でも統合されていた（si licet parva componere magnis――小さなものを大きなものと比較することが許されるなら）。実際、これは小さな徴候ではあるが、他の徴候と関連させてみると特徴的な徴候であって、「自治的」な学生の投票では、しばしば三つの〔候補者〕名簿がかちあった。すなわち、カデットの名簿と、トルドヴィキ、エヌ・エス、エス・エル、ペ・ペ・エスのブロックの名簿と、最後に社会民主党の名簿とがかちあったのである。

プロレタリアートの見地からすれば、政党の階級的色分けが明確なことが、なによりも重要であるが、無党派の（あるいは、エヌ・エスからエス・エルへと動揺している）トルドヴィキに自主的に働きかけるほうが、党と無党派との協定を結ぼうと試みることよりも、有利なことは明らかである。諸政党についての事実は、思わずも次のような結論を思いつかせる。すなわち、選挙の低い段階では、大衆にたいする扇動では、絶対に、どんな協定も結んではならない。高い段階では、議席を配分するときに、社会民主党とトルドヴィキとの部分的な協定によってカデットを粉砕し、社会民主党とエス・エルとの部分的な協定によってエヌ・エスを粉砕するように、あらゆる努力をすべきである、ということである。

われわれに、次のように、反論する人があるだろう。われわれに、次のように、反論する人があるだろう。――君たち、手におえない空想家のボリシェヴィキが、カデットを粉砕しようと夢みているあいだに、黒百人組が諸君をすべて粉砕してしまうだろう。なぜなら、諸君は票を割っていってしまうからだ！　社会民主主義者とトルドヴィキとカデットとがいっしょになれば、きっと黒百人組を全敗させてしまうだろうが、べつべつに行動するのでは、諸君は共同の敵にやすやすと勝利をあたえることになる。黒百人組には一〇〇票のうちの二六票、トルドヴィキとカデットには各二五票、社会民主主義者には二四票あるとしてみよう。もし社会民主主義者とトルドヴィキとカデットとのブロックがなければ、黒百人組が当選することになる、と。

この反論は、しばしば真にうけられるので、これを注意ぶかく検討しなければならない。ところで、これを検討するには、特定の、すなわち今日のロシア選挙制度を究明しなければならない。

四

わが国の国会選挙は、直接選挙ではなくて多段階選挙である。多段階選挙のもとでは、票割れが危険なのは、低い段階だけである。第一次の有権者が選挙に行くときだけは、われわれには、票がどう割れるかはわからない。大衆のまえでの扇動のときだけは、われわれは「当てずっぽうに」行動する。選挙人による選挙という高い段階のときには、決戦はすでに終わっているのであって、のこっていることは、自党の候補者数と自党の得票数を知っている諸政党の部分的協定によって、議席を配分することだけである。

選挙の低い段階というのは、都市の選挙人の選挙、農村の十戸長〔一〇戸につき一人の割合で選出され、自分たちのあいだから農民代表を選出する〕の選挙、労働者クーリア〔制限選挙における選挙人の等級〕の選挙代表の選挙である。

われわれは、都市では、各選挙単位（区、その他）で、多数の選挙人大衆のまえに現われる。票が割れる危険は、たしかにある。たしかに、都市では、黒百人組の選挙人が、もっぱら「左翼ブロック」がなかったおかげで、またもっぱら、たとえば、社会民主主義者がカデットから票の一部をうばったおかげで、ここかしこで当選することがあるかもしれない。たしか、モスクワではグチコフが約九〇〇票、カデットが約一、四〇〇票をえた。社会民主主義者にとっては、カデットから五〇一票うばえれば十分で、そうすればグチコフは勝利者となったであろう。だから、一般の公衆がこの単純なしくみを考慮し、票割れを恐れ、そのために反政府派のなかの最も穏健なものに投票することに傾くだろうということは、疑う余地がない。その結果、イギリスで「三角」選挙とよばれているものになる。そこでは、都市の下層民が自由主義者の得票をへらし、それによって保守派に勝利させることがないようにするために、社会主義者への投票を恐れるのである。

この危険をふせぐには、どういう手段がいったいあるだろうか？　ただ一つ、低い段階での協定だけである。すなわち、選挙人の共同名簿をつくることであって、この名簿のなかには、闘争以前に政党間の取りきめできめられた数の、各党の候補者が選びだされる。協定にくわわったすべての政党は、そのときには、有権者の全大衆に、この共同名簿だけに投票するよう呼びかけるのである。

このような方法を用いることにたいする賛否の論拠を検討してみよう。

賛成する論拠は、こうである。厳密に党的な扇動をして

かまわない。社会民主党は、大衆のまえで、カデットをいくらでも批判すればよい。ただ次のことをつけくわえるべきである。それでもやはりカデットは黒百人組よりもましだから、われわれは、共同名簿に同意したのだ、と。

反対する論拠は、こうである。共同名簿は、社会民主党の自主的な階級的政策全体にひどく矛盾するものであろう。カデットと社会民主党の共同名簿を大衆に推薦することによって、われわれは、不可避的に、階級的区別と政策的区別との明確さをまったく混乱させてしまう。われわれは、国会のささやかな議席を自由主義者にかせがせるために、われわれのカンパニアの原則的な、一般革命的意義を掘りくずしてしまう！　われわれは、議会制度を階級的政策に従属させるかわりに、階級的政策を議会制度に従属させてしまう。われわれは、自分の勢力を計算する可能性をなくしてしまう。われわれは、すべての選挙における永続的で恒久的なものを、すなわち、社会主義的プロレタリアートの自覚と結束との発展を失う。われわれは、一時的で、条件的で、正しくないものを、すなわち、オクチャブリストにたいするカデットの優越を手に入れる。

なんのために、われわれは、社会主義的教育という一貫した活動を危険にさらすのか？　黒百人組の候補者が勝利する危険があるという理由でか？　しかしロシアの都市全部が国会に出す議席は、五二四のうち三五にすぎない（ペテルブルグ――六、モスクワ――四、ワルシャワとタシケントは各二、他の二一都市は各一）。したがって都市は、それ自体では、国会の様相をいくらかでも本質的に変えることは、けっしてできないのである。そればかりでなく、票割れの算術的可能性を形式的に考慮するだけにとどまってはならない。こうした票割れが政治的に大いに予想されるものかどうかを検討しなければならない。そしてこのような検討が示すところでは、黒百人組は第一国会の選挙のときでもとるにたりない少数しか占めなかったのだし、まえに述べたような「グチコフ的な」例は例外なのである。『立憲民主党時報』[12]（一九〇六年四月一九日、第七号）の資料によれば、二八名の議員を国会におくった二〇の都市では、一七六一名の選挙人のうち一四六八名がカデット、三二名が進歩派、二五名が無所属であった。オクチャブリストは一二八名、商工党は三二名、右翼は七六名、すなわち、右翼は全部で二三六名で、一五％にみたなかった。一〇の都市では右翼の選挙人は一人も出ず、三つの都市では右翼から出た選挙人はそれぞれ一〇名以下であった（八〇名のうち）。このような事情のもとで、黒百人組を過大に恐れるあまり、自分たちの階級的な候補者をたてるための闘争を断念することは、賢明であろうか？　このような政

策は、原則上の動揺ということはさておき、狭く実践的な見地からみてさえ近視眼的だという罪をおかすことになりはしないだろうか。

では、カデットに対抗するための、トルドヴィキとのブロックはどうか？　とわれわれに反論する人もあるだろう。しかし、われわれは、トルドヴィキの党派関係の特殊性、このようなブロックを望ましくもないし、得策でもないものにする特殊性を、すでに指摘しておいた。労働者人口が最も密集している都市では、われわれは、よくよくその必要がないかぎり、完全に自主的な社会民主党候補をたてることを、けっして断念してはならない。ところで、そうしたよくよくの必要はない。カデットまたはトルドヴィキ（とくにエヌ・エス型の！）が、いくらか多くなったり少なくなったりすることは、重大な政治的意義をもつものではない。なぜなら、国会そのものが、たかだか副次的、第二義的な役割を果たすことしかできないからである。国会選挙の結果を決定するうえで政治的に決定的な意義をもつものは、農民であり、県選挙人集会であって、都市ではない。＊県選挙人集会では、われわれは、農村での低い選挙段階のときよりも、はるかによく、はるかに正しく、また厳格な原則性にいささかも違反することなしに、カデットに対抗してわれわれとトルドヴィキとの一般政治的な同盟を実現しなければならない。さて、ここで、農村での選挙のことにうつろう。

＊もちろん、小都市もまた、都市の大会をつうじて、県選挙集会の構成に影響をあたえる。カデットと進歩派はここでもやはり完全に優勢であった。たとえば、都市の大会の選挙人五七一名のうち、カデットと進歩派が四二四名で、右翼は一四七名であった（『立憲民主党時報』、一九〇六年、第五号、三月二八日）。もちろん、個々の都市によって、非常に大きな開きがある。こうした事態のもとでは、われわれは、票がたまたま割れるのを恐れずに、また自分たちを社会民主党でないどの党にも従属させることなしに、カデットと自主的に闘争することに、多分非常に多くの場合成功するであろう。労働者クーリアにおける低い選挙段階でのブロックのことなど、社会民主主義者のだれひとりとして、まじめに語ろうとするものはいないであろう。労働者大衆のあいだでは、社会民主主義者の完全な自主性がとくに必要である。

五

周知のように、大都市では、諸政党の政治的組織性が、そこここで、選挙段階の一つを一掃してしまった。法律によれば、選挙は二段階選挙であった。だが実際には、選挙は、ときには直接選挙になるか、ほとんど直接選挙になった。なぜなら有権者は、たたかっている各党の性格をはっ

きりと知っていたし、個々の場合には、ある党が国会におくるつもりでいる人物さえ知っていたからである。これとは逆に、農村では、段階がきわめて多く、選挙人がきわめてまばらに散在しており、各党の公然たる行動にたいする妨害がきわめて大きいので、第一国会の選挙は極度に「隠蔽された」形でおこなわれたし、第二国会の選挙もそうなるであろう。言いかえれば、ここでは、非常にしばしば、いや大多数の場合に、各党の扇動は、警察にたいする恐怖から、ことさらに人物については沈黙して、党一般について語ることになるだろう。急進的な農民と革命的な農民は（いや、農民ばかりではないが）、ことさらに無所属の名のかげにかくれるであろう。だが、十戸長の選挙では、人物を知っていること、その人を個人的に信頼していること、その人の社会民主主義的な演説に共鳴することが、ことを決定するであろう。地方の党組織を足場とする社会民主主義者は、ここでは、ごく少数となるであろう。しかし、地方の農村住民の共感をえる社会民主主義者の数は、わが党の下部細胞についての資料から想像されるよりも、くらべものにならないほど多くなるかもしれない。

　エヌ・エスのような小ブルジョア的なロマンティストは、わが国の制度のもとで公然と存在する社会主義政党を夢みているが、秘密の党がもつ一貫した、妥協を知らない戦闘精神、同時にまた、党員だけでなく他の多くのルートをもつうじて大衆に働きかけ、しかも〔警察に〕つかまえられることのない党組織が、党にたいする信頼と共感をどのように強めるか、彼らにはわからない。火のなかできたえあげられた、ほんとうに革命的な非合法の党――プレーヴェ氏らには慣れっこになっていて、ストルィピン氏らのどのように厳重な取締りにも困惑しない党――は、「青二才の幼稚さで」「厳密に立憲的な道」をとる他の合法政党よりも、内乱の時代には、大衆にいっそう広く働きかけることができるのである。

　党に所属している社会民主主義者も、党に所属していない社会民主主義者も、十戸長と選挙代表の選挙のときには、多くの段階で成功のチャンスをもつであろう。農村のこれらの選挙段階で成功をおさめるには、トルドヴィキとのブロックまたは共同名簿は、まったく重要でない。一方では、農村の選挙単位はあまりにも小さい。他方では、ほんとうの党員であるか、いくらかでも党員に近いようなトルドヴィキは、きわめてまれであろう。社会民主主義者の厳格な党派性、長年のあいだ非合法状態でもちこたえることができ、一〇―一五万にのぼるすべての民族に属する党員をもち、第一国会では最左翼のなかで党フラクションを結成した唯一の党――そういう党にたいする彼らの絶対服従、この党

派性こそは、決定的な闘争を恐れず、それを心から希望してはいるが、自分の力をかならずしも信頼していないので、率先して行動することを恐れ、公然と行動することを恐れている、すべての人の目には、巨大な推薦理由であり保証であると見えるのだ。厳密な、「非合法的な」党のこの有利な面を、われわれは、できるかぎり利用しなければならない。どういうものにせよ恒常的なブロックによってその党活動をすこしでも弱めるようなことは、われわれにはけっして有利ではない。おなじく党派的で、おなじく断固として、容赦なく革命的な、われわれの唯一の競争者になれるのは、この場合エス・エルだけであろう。しかし、農村の選挙の第一段階で彼らとブロックを結ぶことは、真の党派性の原則に立っては、例外としてしか可能ではないであろう。このことを納得するには、農村での選挙の事情を現実的に、具体的に考えれば十分である。* 無党派の革命的な農民が、意識して、ある一つの党だけに同調していないかぎり、われわれにとって望ましい意味で厳格な党派性を維持しながら彼らに働きかけるほうが、どの点からしてもわれわれに有利である。同盟や扇動の無党派性が、党に所属する社会民主主義者を拘束することはありえない。なぜなら、革命的農民は社会民主主義者を排除することをけっして欲しないし、とくに農民運動の支持についての統一大会の決議は、社会民主党員が無党派の革命的同盟に参加することを許可しているからである。このように、われわれは、自分たちの党派性を維持し、これを最後まで固守し、これからあらゆる多大な精神的および政治的利益を引きだしながら、それと同時に、無党派の革命的農民のあいだでの活動、無党派の革命的同盟、サークル、集会での活動、無党派の革命的結びつきによる活動、等々に、完全に適応することができる。われわれは、組織的には革命的農民のまったくとるにたりない部分しかとらえていないエス・エルと、われわれの厳格な党派性を制限し拘束するブロックを結ぶようなことはせずに、われわれの党派的立場をも、無党派の「トルドヴィキ」のなかでの活動のすべての利益をも、いっそう広く、いっそう自由に、利用するであろう。

　＊ 第一国会で、エス・エルが党派的行動をとることがまったくできなかったという事情、そうすることを欲しなかったというよりはむしろできなかったという事情は、もちろん偶然ではない。だから、国会のエス・エルは、大学のエス・エルとおなじように、無党派のトルドヴィキの影にかくれるか、彼らとブロックを結ぶほうが、有利であると思ったのである。

以上からでてくる結論は、つぎのとおりである。農村での選挙運動の低い段階では、すなわち、十戸長と選挙代表の選挙では（選挙代表の選挙は、たぶん、事実上、選挙の

第一段階とおなじことになるであろう）、どのような選挙協定も、われわれには必要でない。政治的にはっきりした立場をとっている、十戸長や選挙代表に立候補するのに適した人は、きわめてわずかしかいないので、農民の信頼と尊敬をえた（このような条件がなくては、真剣な立候補は全然考えられない）社会民主主義者の候補者には、ほとんど全員が、十戸長や選挙代表になる見込みが完全にあるのであって、他党との協定などはすこしも必要としない。

しかし、選挙代表の集会では、万事をあらかじめ決定した第一次の選挙戦の正確な結果に立脚することができる。ここで可能でもあり必要でもあることは……もちろんブロックでもなく、厳密な協定や恒常的な協定でもなくて、議席の配分についての部分的な協定である。この場合には、——国会議員を選挙するための選挙人の集会ではなおさら——、われわれは、トルドヴィキといっしょになってカデットを粉砕し、エス・エルといっしょになってエヌ・エスを粉砕するなどの活動をしなければならない。

六

このように、現行の選挙制度を検討すると、選挙の低い段階でのブロックは、都市ではとくに望ましくなく、また必要なものでもないということがわかる。農村では、低い段階での（すなわち、十戸長と選挙代表を選挙するときの）ブロックは、望ましくないし、まったく必要でない。決定的な政治的意義をもっているのは、選挙代表の郡集会と選挙人の県集会である。ここでは、すなわち高い段階では、部分的協定が必要であり、望ましくない党派性の違反をおかさなくてもそれが可能である。なぜなら、大衆のまえでの闘争は終わったので、この協定のために人民のまえで無党派性を直接または間接に擁護すること（あるいは許容すること）はすこしも必要でなく、プロレタリアートの厳密に階級的な自主的な政策がこの協定によってすこしでもぼやける恐れはないからである。*

* 国際社会民主主義運動の実践のなかでも、低い段階での協定と高い段階での協定を区別した経験があることは興味がある。フランスでは、上院議員の選挙は二段階選挙である。有権者は県選挙人を選挙し、この県選挙人が上院議員を選挙する。フランスの革命的な社会民主主義者、ゲード派[一〇四]は、低い段階では、どのような協定、どのような共同候補者名簿をもけっして容認しなかったが、高い段階での部分的協定、すなわち県選挙人集会で議席を割り当てるための部分的協定は容認した。日和見主義者、ジョレス派[一〇五]は、低い段階でも協定を結んだ。

こんどは、はじめに、形式的な、いってみれば算術的な

面から、高い段階でのこういう部分的な協定がどういうものになるかを検討しよう。

おおよその百分比、すなわち、選挙人（と選挙代表――以下の叙述ではこれもいれて考える）一〇〇名ごとの党派別の配分をとってみよう。選挙人の集会で勝つためには、その候補者が一〇〇票のうちの五一票以上をとらなければならない。このことから生まれる社会民主党の選挙人の戦術の一般原則は、次のとおりである。すなわち、社会民主党に最も近い選挙人、または支持するに最も値いするブルジョア民主主義派の選挙人といっしょになって、残りの選挙人をうちまかすために、したがって、一部は社会民主党の選挙人を当選させ、一部はブルジョア民主主義的選挙人のなかのすぐれたものを当選させるために、この数だけの選挙人を味方に引きいれるように、つとめなければならない。*

＊ 簡単にするために、われわれは、選挙人が純粋に党派別に、またもっぱら党派別に分かれていると仮定する。もちろん、実際には、無所属の選挙人が多くでるであろう。この場合の社会民主党の選挙人の任務は、すべての選挙人、とくにブルジョア民主主義派の選挙人の政治的様相をできるだけはっきりさせ、社会民主主義者と社会民主主義者に最も望ましいブルジョア候補者とを統合して「左翼多数派」を結成することである。各党の傾向を区別するための基本的な指標については、あとで述べる。

この原則を簡単な例で説明しよう。たとえば、一〇〇名の選挙人のうち四九名が黒百人組で、四〇名がカデット、一一名が社会民主主義者だとしよう。もちろん選挙人の数にしたがって国会の議席を比例配分することを基礎にして、国会議員の共同名簿を完全にとおすには、社会民主党とカデットとの部分的な協定が必要である（すなわち、この例では、県全体としてもっている国会の議席の五分の一、たとえば一〇名のうち二名を社会民主主義者がとり、五分の四、すなわち一〇名のうち八名をカデットがとることにな ろう）。もしカデットが四九名で、トルドヴィキが四〇名、社会民主主義者が一一名であれば、われわれは、カデットを粉砕して、自分たちには議席の五分の一を、トルドヴィキには五分の四を獲得するために、トルドヴィキとの協定を結ぶのにつとめなければならない。こういう場合には、われわれは、トルドヴィキの民主主義の徹底性と断固さとを点検する絶好の可能性をもつことになろう。すなわち、彼らがカデットに完全に背をむけて、労働者党の選挙人といっしょになってカデットを粉砕することに同意するか、それとも、あれこれのカデットを「救う」ことを欲し、もしかしたら社会民主党とではなくカデットとのブロックを欲するかを点検することができるであろう。そのときには、

われわれは、あれこれの小ブルジョアが、どの程度君主主義的ブルジョアジーに傾いているか、それとも革命的プロレタリアートに傾いているかを、全人民にその行為にもとづいて説明し指摘することができるであろうし、またそうしなければならないであろう。

あとの例では、トルドヴィキは、カデットとではなく社会民主党とブロックを結ぼうと胸算用する。なぜなら、社会民主党と結べば、彼らは議席総数の五分の四をとることになるが、カデットと結ぶと九分の四しかとれないからである。だから、逆の場合には、すなわち、カデットが一一名、トルドヴィキが四〇名、社会民主党が四九名の場合には、もっと興味があるであろう。このような場合には、胸算用は、トルドヴィキをカデットとのブロックにおしやるであろう。そうすれば「われわれ」は、国会でもっと多くの議席をとることになろう、と彼らは言うであろう。だが、民主主義とほんとうの勤労大衆の利益とに原則的に忠実であれば、たとえ国会の議席をいくらか犠牲にしても、社会民主党とのブロックが無条件に要求されるであろう。プロレタリアートの代表者は、こういう事例やこれに類した事例を、すべて注意ぶかく考慮に入れなければならないと同時に、選挙人にむかっても、全人民にむかっても、この選挙算術の原則的な意義を明らかにしなければならない（選挙代表の集会や選挙人の集会での協定の結果を公表して一般に知らせることが必要である）。

つぎに、この最後の例では、胸算用によっても、原則的な考慮によっても、社会民主主義者がトルドヴィキを割るようにしむける場合がある。もしトルドヴィキのなかに、完全に党に所属するエス・エルが二人いるとすれば、われわれは、彼らを味方にいれて、すべてのカデットと残りのすべてのあまり革命的でないトルドヴィキとを五一票で粉砕するために、全力をあげなければならない。もしトルドヴィキのうち、二名がエス・エルで、三八名がエヌ・エスであれば、われわれは、エス・エルが民主主義と勤労大衆の利益とに忠実であるかどうかを点検することができるであろう。われわれはこう言うであろう。——共和主義的民主主義者に賛成し、君主主義を容認するエヌ・エスに反対するだろうか。地主の土地の没収に賛成し、買取りを容認するエヌ・エスに反対するだろうか。全人民の武装を支持するものに賛成し、常備軍を容認するエヌ・エスに反対するだろうか。エス・エルが社会カデット*と社会民主主義者とのどちらをえらぶか見たいものだ、と。

* 『ソズナーテリナヤ・ロシア』(一六)は、エヌ・エスを「社会カデット」とよんだ。ついでに言えば、この論集の第一集と第二集は、われわれをほんとうに喜ばせた。チェルノフ、ヴァ

ザーモフその他の諸氏は、ペシェホーノフをもタグ――インをも、みごとにやっつけている。資本主義をこえて社会主義に発展する商品生産という理論の観点からタグ――インを論破している点は、とくによい。

こうしてわれわれは、この選挙算術の原則的・政治的な側面と意義とに到達した。ここでわれわれのなすべき義務は、議席の獲得に熱中することに反対して、社会主義的プロレタリアートの観点とわがブルジョア民主主義革命の完全な勝利の利益とを申し分なく頑強に、一貫して固守することである。わが社会民主党の選挙代表と選挙人は、われわれの社会主義的目標について、またプロレタリア政党としてのわれわれの厳密に階級的な立場について、けっしてどうあっても口をつぐんではならない。しかし、現在の革命の前衛としてのプロレタリアートの役割を証明するためには、「階級的」ということばを繰りかえすだけでは十分でない。また、プロレタリアートの先進的役割を証明するためには、われわれの社会主義学説とマルクス主義の一般理論を述べるだけでは十分でない。このためにはなお、現在の革命の焦眉の問題を解明するにあたって、労働者党の党員はだれよりも一貫して、だれよりも正しく、だれよりも断固として、まただれよりもたくみに、この革命の利益、革命の完全な勝利の利益を擁護するものだ、ということを、行為によって示すことができなければならない。これは、なまやさしい任務ではない。そして、この任務に備えることが、選挙運動に参加するあらゆる社会民主主義者の基本的で主要な義務である。

選挙代表の集会や選挙人の集会での諸党と諸党内の諸派との区別は（もちろん、あらゆる選挙運動の場合にそうであるが）、小さな問題ではあっても、実践的にみて無益な問題ではないであろう。ついでに言えば、この点では、実生活が、社会民主労働党をわきたたせている多くの論争問題を点検するであろう。この党の右翼は、『ナーシェ・デーロ』の極端な日和見主義者から『ソツィアル・デモクラート』（三三）の穏健な日和見主義者にいたるまで、あらゆる方法で、トルドヴィキとカデットとの相違をぬりつぶし、ゆがめているのであって、トルドヴィキがエヌ・エスとエス・エルと、またそのどちらかに傾いているものとに分かれているという、新しい、きわめて重要な現象には、どうやら気づいていないようである。もちろん、すでに第一国会とその解散の歴史は、カデットとトルドヴィキとを区別することを無条件に要求する証明書、トルドヴィキの民主主義がいっそう一貫していて断固としていることを証明する証明書をあたえた。第二国会への選挙運動は、いっそう明瞭に、いっそう正確に、いっそう完全に、いっそう広く、こ

のことを証明し明示するにちがいない。選挙運動そのものが、――われわれが実例で示そうとつとめたように――社会民主党に、あれこれのブルジョア民主主義政党を正しく区別することを、教えるであろう。またそれは、カデットをわが国のブルジョア民主主義派一般の主要な代表者であるとか、せめてその重要な代表者であるとかみなす、はなはだしく誤った意見を、事実上くつがえすか、あるいはもっと正確にいえば、わきへおしやってしまうであろう。

さらに次のことを注意しよう、すなわち、一般に選挙運動のときには、また高い段階で選挙協定を結ぶときには、社会民主主義者は、むずかしい用語や、外国語や、出来あいのきまり文句だが大衆にはまだわかりにくい、大衆にはなじみのないスローガンや規定や結論をきっぱりと捨てさって、簡単明瞭に、大衆にわかることばで語るすべを知らなければならない。空文句を言わずに、絶叫することなく、事実と数字を手にして、社会主義の問題と今日のロシア革命の問題を解説するすべを知らなければならない。

この場合には、この革命の二つの基本問題が、ひとりでに出てくるであろう。それは、自由の問題と土地の問題である。われわれは、全大衆をわきたたせているこれらの根本問題に、純社会主義的な宣伝――小所有者の見地とプロレタリアートの見地との差異をも、人民に影響をあたえようとしてたたかっている諸政党の区別をも、集中しなければならない。黒百人組は、オクチャブリストまでをふくめて、自由に反対であり、人民に土地を引き渡すことに反対である。彼らは、暴力と、買収と、欺瞞によって、革命を中止させようと望んでいる。自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーであるカデットもまた、いくつかの譲歩によって革命を中止させようとつとめている。自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーは、すべての自由も、すべての土地も、人民にあたえようと欲してはいない。彼らは、買取りによって、普通・直接・平等・秘密の役票にもとづかずに地方土地委員会を設置することによって、地主的土地所有を存続させようと望んでいる。トルドヴィキ――すなわち小ブルジョアジー、とくに農村の小ブルジョアジー――は、すべての土地とすべての自由を獲得しようと望んでいるが、この目標にむかって、あやふやに、自覚をもたず、確信をもたずに、すすんでいる。そして彼らは、農民にたいする自由主義的ブルジョアジーのヘゲモニーを正当化しているそれを理論にたかめている社会カデット（エヌ・エス）の日和見主義と、商品生産のもとで平等が可能であるかのように考える空想主義とのあいだを動揺している。社会民主党は、一貫してプロレタリアートの見地に立たなければならないし、エヌ・エス的な日和見主義と、現在の革命の真

に緊要な任務をおおいかくしている空想主義とを、農民の革命的な意識から一掃しなければならない。ところで労働者階級は、全人民とおなじように、革命が完全に勝利してはじめて、ほんとうに、急速に、勇敢に、自由に、また広範に、資本の圧迫から労働を解放するという、全文明人類の基本的任務の解決にとりかかることができるのである。

闘争手段の問題も、選挙運動のときと、各党のあいだで部分的な協力を結ぶときに、やはり注意ぶかくとりあつかわなければならない。われわれは、憲法制定議会とはなにか、カデットはなぜそれを恐れるのかということを、はっきりさせなければならない。われわれは、自由主義的ブルジョアであるカデットにこう質問する。――だれにも「第一回召集」の議員を「あつかった」とおなじように人民代表をあつかわせないために、彼らはどういう方策を主張し、またそれを自主的に実行するつもりなのか、と。われわれは、昨年の一〇月―一二月の闘争形態にたいするカデットの卑劣な裏切的態度を、カデットに思いおこさせ、できるだけ広い大衆に説明しなければならない。われわれは、ありとあらゆる候補者に質問する。――諸君は、諸君の国会活動全体を、国会外の闘争の利益に、土地と自由をめざす広範な人民運動の利益に、完全に従属させるつもりなのか、どうか、と。われわれは、革命を組織するために、すなわち、プロレタリアートを組織し、ブルジョア民主主義派の真に革命的な分子を組織するために、選挙運動を利用しなければならない。

以上が、選挙運動全体に、とくに他党と部分的な協定を結ぶ問題に、もちこむようにつとめなければならない、積極的な内容である。

七

総括しよう。

社会民主党の一般的な選挙戦術の出発点は、革命的プロレタリアートの階級政党の完全な自主性でなければならない。

この一般的な命題から逸脱することは、よくよく必要な場合と、特別に限られた事情のもとでしか、ありえない。

ロシアの選挙制度の特殊性と国民の圧倒的多数である農民のあいだの政治的グループの特殊性は、選挙運動の低い段階では、すなわち、大都市の選挙人と、農村の十戸長と、選挙代表を選挙するときには、この緊急な必要を呼びおこさない。大都市では、この必要がない。なぜなら、ここでの選挙では、けっして国会へ出る議員の数が重要なのではなくて、最も広範な、最も集中された、その地位全体から

して「最も社会民主主義的な」住民層のまえでの社会民主党の行動が重要なのだからである。

農村では、大衆は政治的におくれていて、はっきりした政治組織をもたず、住民は分散していて、人口は稀薄であることと、選挙の外的条件とが、無党派的な（および無党派的で革命的な）組織、同盟、サークル、集会、見解、志向をとくに発達させている。このような事情のもとでは低い段階でのブロックは、まったく必要でない。社会民主主義者の厳格な党派性は、あらゆる点からして、最も正しく、最も目的にかなっているのである。

したがって、プロレタリアートと革命的農民との同盟が必要だという一般的命題にもとづいて承認されることは、選挙制度の高い段階での、すなわち選挙代表の集会と選挙人の集会での部分的な協定（トルドヴィキといっしょになってカデットに対抗するといった協定）が必要であるということだけである。トルドヴィキの内部の政治的色分けの特質から見て、このような問題解決がよいのである。

社会民主主義者は、これらの部分的協定のさいつねに、ブルジョア民主主義的諸政党を、またそれらの党のあいだの諸派を、その民主主義の一貫性と断固さの程度によって厳重に区別しなければならない。

社会主義の学説と、現在の革命における社会民主党の自主的なスローガンとを、この革命の任務の点でも、これらの任務を実現する方法と手段の問題でも、解明することが選挙運動と部分的協定の思想的＝政治的内容となるであろう。

この小冊子は、『ソツィアル－デモクラート』の第五号が発行されるまえに書かれた。この号が出るまでは、わが党は、わが党の中央委員会が社会主義者には許されない、第一段階でのブルジョア政党との協定を、絶対に認可しないだろうと、期待する十分な根拠をもっていた。われわれは、どうしてもそう考えざるをえなかった。なぜなら、同志エリ・マルトフのような、非常に有力なメンシェヴィキが、第一段階であらゆる協定にきっぱりと反対したからである。しかも、『タヴァーリシチ』でばかりでなく、選挙運動の準備の問題について中央委員会から諸組織に配布された手紙（マルトフの）でも、反対したからであった。

ところがいまでは、中央委員会はチェレヴァーニンのほうへ転向したか、あるいはすくなくとも動揺していることが、判明した。『ソツィアル－デモクラート』第五号の主張は、第一段階でのブロックを容認し、しかも、まさにどのブルジョア政党とブロックを結ぶかを正確にことわりさ

えしていないのだ！　カデットとのブロックを擁護するためにカデットの新聞『タヴァーリシチ』に引っ越したプレハーノフのきょうの手紙（一〇月三一日）は、中央委員会がだれの影響をうけて動揺しているかを、すべての人に示している。プレハーノフは、いつものように、ご託宣の形で説教し、きわめてありふれた平凡事をおごそかに述べている。そして彼は、社会主義的プロレタリアートの階級的任務をまったく避けてとおっていて（彼に隠れ家をあたえたブルジョア新聞にたいする好意からにちがいないが）、具体的な資料や論拠にはふれようとさえしていない。

　中央委員会がマルトフから……チェレヴァーニンへ転落するには、このジュネーヴからの「呼びかけ」だけで十分なのであろうか？

　ブルジョア政党とのあらゆる協定を禁止している統一大会の決定は、大会でえらばれた中央委員会によって破棄されるのであろうか？

　社会民主主義者の協力一致した選挙運動は、重大な危険にさらされている。

　社会主義的労働者党は、党を崩解させプロレタリアートの階級的自主性を破壊する、第一段階でのブルジョア政党との協定によって脅かされている。

　すべての革命的な社会民主主義者はかたく団結し、日和見主義的な混乱と動揺に容赦ない闘争を宣言せよ！

一九〇六年一〇月末に執筆

一九〇六年一一月に「フペリョード」出版所で単行の小冊子として印刷

全集、第五版、第一四巻、七三—九六ページ所収

邦訳全集、第一一巻、二七六—二九九ページ所収

国会にだれをえらぶか？[一八七]

市民諸君！　サンクト―ペテルブルグの選挙で、どんな主要な党がたたかっているか、そして各党はなにを目標としているかを、全人民にはっきりと理解させせよう！

三つの主要な党はどんなものか？

黒百人組――ロシア国民同盟、君主派、法治党、一〇月一七日同盟、商工党、平和革新党。

カデット――「人民」自由党もしくは立憲「民主」（実際には自由主義的＝君主主義的）党、「民主」改革党、急進派等。

社会民主主義者。ロシア社会民主労働党――ロシアのすべての民族、ロシア人、ラトヴィア人、ポーランド人、ユダヤ人、小ロシア人、アルメニア人、グルジア人、タタール人などの自覚した労働者の党。

三つの主要な党はだれの利益を守っているか？

黒百人組は、いまのツァーリ政府 ―

カデットは、自由主義的ブルジョ ―

社会民主党は、すべての勤労被搾

を擁護し、地主、官僚、警察権力、戦時軍法会議、ポグロムに賛成している。

ア、自由主義的地主、商人、資本家の利益を擁護している。カデットはブルジョア的な弁護士、新聞記者、教授等々の党である。

取者の利益を守る労働者階級の党である。

三つの主要な党はなにを目標としているか？

黒百人組は、旧専制、人民の無権利、人民にたいする地主、官僚、警察の完全な支配を維持しようとつとめている。

カデットは、権力を自由主義的ブルジョアジーの手にうつそうとつとめている。警察権力と軍事権力を維持することによって、君主制は、労働者と農民を略奪する資本家の権利を保護しなければならない。

社会民主主義者は、全権力を人民の手にうつすこと、すなわち民主的共和制を目標にしている。社会主義をめざし、資本の抑圧からの労働の解放をめざしてたたかうために、社会民主主義者には完全な自由が必要である。

三つの主要な党はどんな自由を人民にあたえようと望んでいるか？

黒百人組は、人民になんの自由も、なんの権力もあたえない。全権力をツァーリ政府にあたえる。人民の権利といえば、税金を払い、金持のために働き、牢獄につながれることで

カデットは、第一に上院に、すなわち地主と資本家に従属し、第二に、君主制に、すなわち責任をおわない警察力と軍事力をもったツァーリに従属しなければならないような「人

社会民主主義者は、人民に完全な自由と全権力をあたえ、すべての官吏を選挙すること、兵営での苦役から兵士を解放し、自由な民兵制度をつくることを望んでいる。

ある。

民の自由」を望んでいる。権力の三分の一は人民へ、三分の一は資本家へ、三分の一はツァーリへ。

三つの主要な党は農民の土地要求をどうみているか？

黒百人組は、農奴主的地主の利益を守っている。農民にはすこしの土地もあたえない。金持だけは自由意志による協定で地主から土地を買ってよろしい。

カデットは、譲歩によって地主的土地所有を維持しようと望んでいる。彼らはすでにかつて一八六一年に農民を零落させたことのある買取りを農民に提案している。カデットは、普通・直接・平等・秘密投票によって選出された地方土地委員会が土地問題を解決することに同意しない。

社会民主主義者は、わが国の地主的土地所有を廃絶することを望んでいる。すべての土地はかならず買取金なしに、農民の手に渡されなければならない。普通・直接・平等・秘密投票によって選出された地方土地委員会が土地問題を解決しなければならない。

三つの主要な党のすべての闘争が成功する場合、この三つの党はなにをかちとることができるか？

黒百人組があらゆる手段をつかってたたかうことによって、かちうることは、人民がまったく零落し、全ロシアが戦時軍法会議とポグロムで

カデットが「平和的な」手段だけをつかってたたかうことによってかちうることは、ポグロム組織者の政府が、安価な譲歩によって大ブルジ

社会民主主義者は、蜂起をもふくむあらゆる手段をつかってたたかうことによって、自覚した農民と都市の貧民の援助をえて、完全な自由と

まったく荒れはててしまうことである。

ヨアジーと農村の金持を買収することであり、自由主義的なおしゃべりが、神格化された、責任をおわない、不可侵の立憲君主制についておべっかの言い方が足りないといって追いはらわれることである。

農民にすべての土地をあたえることができる。自由のもとで、そして全ヨーロッパの自覚した労働者の援助のもとで、ロシアの社会民主主義者は急速な足どりで社会主義にむかってすすむであろう。

市民諸君！　選挙ではロシア社会民主労働党の候補者に投票せよ！

社会民主党と勤労諸政党

市民諸君！　国会選挙に自覚をもって参加したいと思う人は、なによりもまず三つの主要な党の基本的な相違をはっきり理解しなければならない。黒百人組はツァーリ政府のポグロムと暴力を支持している。カデットは自由主義的な地主と資本家の利益を支持している。社会民主主義者は労働者階級、すべての勤労被搾取者の利益を支持している。

労働者階級と全勤労者の利益を意識的に守ろうと望む人は、どの党が最も徹底的に、断固として、この利益を擁護することができるかを知らなければならない。

どの党が労働者階級と全勤労者の利益を擁護しようとしているか？

労働者階級の党、すなわちプロレタリアートの階級闘争の見地にたつ	勤労諸政党、すなわち、小経営主の見地にたつ諸政党——

ロシア社会民主労働党。

一、社会革命党。

一、勤労（人民社会）党と無党派のトルドヴィキ。

これらの党は実際にはだれの利益を擁護しているか？

プロレタリアの利益。彼らの生活条件は、彼らからみずから経営主になるあらゆる希望をうばいさって、資本主義的社会体制のすべての基礎を完全に変更しようとする志向をもたせずにはおかない。

小経営主の利益。小経営主は資本の抑圧にたいしてはたたかうが、その生活条件そのものによって、彼らは出世して経営主になろうと志し、自分の小経営を強化し、商業と労働者の雇用とによって金を儲けようと努める。

資本にたいする労働の全世界的な大闘争で、これらの党はどれだけけしっかりしているか？

社会民主党は労働と資本とのどんな和解をも許すことはできない。社会民主党は、資本と容赦なく闘争するため、生産手段の私有を廃絶して社会主義社会を建設するために、賃金労働者を組織する。

勤労諸政党は、資本の支配をなくすことを夢みているが、小経営主という生活条件のために、彼らは、賃金労働者と共同で資本にたいしておこなう闘争と、全勤労者を、土地を均等に配分され、信用を保証されなどした小経営主にならせることによって、労働者と資本家とを和解させようとする志向とのあいだを不可避的に動揺する。

その終極目標が完全に実現されたとき、これらの党はなにをかちとることができるか？

プロレタリアートは政治権力を獲得し、資本主義的生産を社会的な大規模の社会主義的生産に転化する。

すべての土地は小経営主、小農のあいだに等分に分配されるが、その場合、彼らのあいだにはふたたび不可避的に闘争が起こり、富めるものと貧しいものの、労働者と資本家への分裂が起こるであろう。

今日の革命でこれらの党は、人民のためにどんな自由をかちとろうとつとめているか？

人民のための完全な自由と完全な権利、すなわち民主的共和制、官吏の選挙制、全人民の武装によって常備軍に代えること。

人民のための完全な自由と完全な権利、すなわち民主的共和制、官吏の選挙制、全人民の武装によって常備軍に代えること。

民主主義、すなわち人民の主権を、君主制、すなわちツァーリ、警察、官僚の権力と結びつけること。これは自由主義的な地主やカデットの場合とおなじように無意味な希望であり、おなじように裏切的な政策である。

これらの党は農民の土地要求にどんな態度をとっているか？

社会民主主義者は、すべての地主ー

社会革命党員は、すべての地主の一

トルドヴィキもすべての地主の土

の土地を、あらゆる買取金なしに農民に引き渡すことを要求している。

土地を、あらゆる買取金なしに農民に引き渡すことを要求している。

地を農民に引き渡すことを要求しているが、買取りを認めている。農民を零落させる買取りを認めることは、自由主義的な地主やカデットの場合とおなじように裏切的な政策である。

市民諸君！　選挙では、ロシア社会民主労働党の候補者に投票せよ！

一九〇六年一一月二三日に新聞『プロレタリー』第八号の付録の形で単独のリーフレットとして印刷
全集、第五版、第一四巻、一三二―一三八ページ所収
邦訳全集、第一一巻、三三二―三三九ページ所収

マルクスのクーゲルマンへの手紙のロシア語版序文

ここに、ドイツ社会民主党の週刊誌『ノイエ・ツァイト』〔一九〇二年〕に発表されたマルクスのクーゲルマンにあてた手紙を全部集めて単行の小冊子として刊行するのは、ロシアの大衆にマルクスとマルクス主義をいっそう親しく知らせるためである。当然予想されたことだが、マルクスの手紙では、非常に多くの紙面が彼の個人的な問題にさかれている。伝記作者には、それはきわめて貴重な資料である。しかし一般に広範な大衆、とくにロシアの労働者階級には、手紙のなかで理論的、政治的資料をふくむ箇所のほうが、かぎりなく重要である。ほかならぬわが国の現在の革命期には、労働運動と国際政治のすべての問題にマルクスが直接に反応するさまを示している資料をたちいって研究することは、とりわけ教訓に富んでいる。『ノイエ・ツァイト』の編集局が、「偉大な変革の条件のもとでその思想と意志とをかたちづくっていった人々の面影を知ることは、われわれの心を高める」と述べているのは、まったく正しい。一九〇七年のロシア社会主義者には、このような知識は二倍も必要である。なぜなら、そのような知識は、ロシアが体験するあらゆる革命で社会主義者のになう直接の任務について、多くのきわめて貴重な指示をあたえているからである。ロシアはいままさに「偉大な変革」を体験している。同様に非常にしばしば現在のロシア革命における一八六〇年代のマルクスの政策は、非常にしばしば現在のロシア革命における社会民主主義者の政策の直接の模範となるにちがいない。

そこでわれわれは、マルクスの手紙のうち理論上とくに重要な箇所をあえて簡単に指摘するにとどめて、プロレタリアートの代表者としての彼の革命的政策をややくわしく論じることにしたい。

マルクス主義をいっそう完全にまた深く会得するために非常に興味があるのは、一八六八年七月一一日付の手紙(四二一ページ以下)〔大月書店刊、国民文庫版『マルクスのクーゲルマンへの手紙』所収、以下同じ〕である。マルクスはここで、俗流経済学者にたいする論戦的批評のかたちで、いわゆる「労働」価値説についての自身の見解を、きわめて明瞭に述べている。マルクスの価値学説にたいする

反対論のうちでも、『資本論』の最も素養に乏しい読者のごく自然に思いつくような、したがってまた「教授ふうの」ブルジョア「科学」の月なみの代表者たちが最も熱心にとりあげているような、ほかならぬそういう反対論が、ここでマルクスによって、簡潔に、あっさりと、いちじるしく明瞭に分析されている。マルクスはここで、価値法則を解明するにあたって彼がどんな道をとったか、またどんな道をとらなければならないか、を示している。彼は、最もありきたりの反対論を例にとって、彼自身の方法を教えている。彼は、価値論のような純粋に（一見したところ）理論的で抽象的な問題と、「混乱（価値についての理解の混乱）を永久化する」ことを必要とする「支配階級の利益」との結びつきを、明らかにしている。マルクスを研究し『資本論』を読みはじめようとする人はだれでも、『資本論』の最も困難な、はじめの数章を学ぶのといっしょに、上記の手紙を読み、またなんども読みかえすことが望ましい。

手紙のうちで理論上とくに興味のある他の箇所は、いろいろな著作家にマルクスがくだした評価である。マルクスの評言は、生きいきと書かれ、熱情にみちていて、すべての大きな思想的潮流とそれらの分析とに熱烈な関心を示しているのであるが、この評言を読むと、天才的な思想家のことばを聞く思いがする。ディーツゲンについての、ついでにふれた評言のほかに、プルードン主義者についての評言も、読者の特別の注意に値する（一七ページ）。「輝かしい」ブルジョア的青年インテリゲンツィアは、社会的高揚期には「プロレタリアートのなかに」身を投じてきても、労働者階級の見地を身につけることができず、プロレタリア組織の「隊列のなかで」根気づよく真剣にはたらくことはできない。——こういう青年インテリゲンツィアが、二こと三ことで驚くほどあざやかに描きだされている。

それからデューリングについての評言がある（三五ページ）。これは、九年後にエンゲルスが（マルクスと共同して）書いた有名な書物『反デューリング論』の内容を、いわば予告するものである。この書物にはツェデルバウムのロシア語訳があるが、残念なことには省略があるばかりでなく、誤訳の多いまったくの悪訳である。同じ箇所にチューネンについての評言があるが、これはリカードの地代論にもふれている。マルクスは、すでにこの当時、すなわち一八六八年に、「リカードの誤り」を断固としてしりぞけていた。この誤りを、マルクスは、一八九四年に刊行された『資本論』第三巻のなかで最後的に論駁したのであるが、わが超ブルジョア的な、むしろ「黒百人組的」ともいうべきブルガコフ氏から、「正統派まがいの」マスロフにいた

るまでの修正主義者は、今日でもこの誤りを繰りかえしているのである。

ビュヒナーについての評言もまた興味ぶかいもので、彼の学説は俗流唯物論で、ランゲ（「教授ふうの」ブルジョア哲学が普通典拠にしているもの！）から書きうつした「皮相なおしゃべり」だという評価をふくんでいる（四八ページ）。

マルクスの革命的政策にうつろう。わがロシアでは社会民主主義者のあいだに、特殊な闘争形態とプロレタリアートの特殊な任務とをともなう革命期はほとんど変則ともいうべきもので、「憲法」と「最左翼の野党」とが常則であるかのようにみるのがマルクス主義だという、ある種の素町人的な解釈が、驚くほどひろまっている。ロシアにあるような深刻な革命的危機は、現在、世界のどの国にもないし、――また革命にこれほど懐疑的で、俗物的な態度をとるような「マルクス主義者」（マルクス主義をひくめ、卑俗化する）も、どの国にもいない。革命の内容がブルジョア的なものであるということから、ブルジョアジーが革命の推進力であり、この革命におけるプロレタリアートの任務は補助的で非独立的なものであり、プロレタリアートによる革命の指導は不可能であるという浅薄な結論が、わが国では引きだされているのだ！

マルクスはクーゲルマンあての手紙のなかで、なんときびしくこの浅薄なマルクス主義の解釈の面皮をひきはがしていることだろう！　ここに一八六六年四月六日付の手紙がある。当時マルクスは、彼の主著を完成したところであった。一八四八年のドイツ革命の評価を、彼はすでにこの手紙の一四年まえに最後的にあたえていた。(一〇五)　社会主義革命が近いという一八四八年における彼自身の社会主義的幻想を、彼は一八五〇年にみずから否認した。(一〇六)　そして一八六六年に、新しい政治的危機の成熟が認められはじめたばかりのとき、マルクスはこう書いている。

「わが素町人たちも」（これはドイツの自由主義的ブルジョアのことである）「ハプスブルグ家とホーエンツォレルン家を取りのぞく……革命が起こらないかぎり、結局は第二の三十年戦争(一〇七)……におちつくほかないことを、こんどこそさとるであろうか！」……（一三―一四ページ）

ここには、切迫しつつある革命（それは、マルクスが期待したように下からは起こらずに、上から起こった）がブルジョアジーと資本主義を取りのぞくだろうという幻想の影さえない。あるのは、その革命はプロイセンとオーストリアの君主制を取りのぞくにすぎないであろうという、このうえなく明白で明確な断言である。そして、このブルジョア革命にたいするなんという信念であろう！　社会主義

的な前進のためにブルジョア革命の果たす巨大な役割を理解しているプロレタリア闘士の、なんという革命的情熱であろう！

三年ののち、フランスのナポレオン帝国の崩壊の前夜にマルクスは、「きわめて興味ある」社会運動が起こっていることを確認して、「パリ人たちは、さしせまった新しい革命の仕事を準備するために、彼らの最近の革命的過去を本式に学びはじめている」と、まさに狂喜して語っている。そして、過去のこういう評価のうちに現われた諸階級の闘争を述べたのちに、マルクスは次のように結んでいる（五六ページ）。「このように、歴史の魔女の釜の全体が煮えたぎっているのだ。わが国」（ドイツ）「で、ここまですすむのはいつのことだろう！」

これこそ、ロシアのインテリ・マルクス主義者たち――懐疑精神のために衰弱し、学者ぶりのために鈍感になり、懺悔にふけりがちで、すぐ革命に倦みつかれ、革命を埋葬してそれを散文的な憲法におきかえる日を、祝日かなにかのように夢みている彼ら――が、マルクスから学ぶべき事柄である。彼らはこのプロレタリアの理論家かつ指導者から、革命にたいする信念を、労働者階級に彼らの直接の革命的任務を最後まで守りぬくように呼びかける能力を、また革命が一時失敗しても弱気な泣き言を許さない不屈の精神を、学びとるべきであろう。

マルクス主義の物知りたちは考える、――そんなことはみなくだらないお説教であり、ロマンチシズムであり、現実を知らない考えである！と。いや、諸君、これは革命的理論と革命的政策との結合である。それなしにはマルクス主義も、ブレンターノ主義、（一三〇）ストルーヴェ主義、（一三一）ゾンバルト主義（一三二）になってしまう。マルクスの学説は、階級闘争の理論と実践を、一つの不可分の全体に結合した。したがって、客観情勢を冷静に確認する理論をゆがめて、現存するものの弁護論にしてしまい、革命が一時衰退するたびに、できるだけはやくそれに順応しようとつとめ、できるだけはやく「革命的幻想」を投げすてて、「現実的な」日常の茶飯事にとりかかろうとつとめるような人は、マルクス主義者ではないのである。

マルクスは、最も平和的な、彼自身の表現によれば「牧歌的」にみえる――また（『ノイエ・ツァイト』の編集者のことばによれば）「みじめにも鈍感な」時代にも、革命の近いことを感知することができ、プロレタリアートを高めて彼ら自身の先進的、革命的な任務を自覚させることができた。マルクスを俗物的に単純化するわがロシアのインテリゲンツィアは、最も革命的な時代にも、プロレタリアートに受動性の政策、おとなしく「流れにしたがう」政策

を教え、時流にのった自由主義政党の最も動揺的な分子を小心翼々と支持することを教えているのだ！

コミューンにたいするマルクスの評価は、クーゲルマンにあてた手紙の圧巻である。そしてこの評価は、とりわけ右翼社会民主主義者のやり方に対比してみると、ロシアの教訓にとんだものとなる。一九〇五年一二月のあとで、臆病にも、「武器をとるべきではなかった」と叫んだプレハーノフは、自分をマルクスと比較するほどの謙虚さをもちあわせていた。マルクスもまた一八七〇年には革命にブレーキをかけた、と。

そのとおりだ。マルクスもまた革命にブレーキをかけた。だが、見たまえ、プレハーノフ自身がおこなったプレハーノフとマルクスとのこの比較には、どういう深淵が口をひらいていることか。

プレハーノフは、一九〇五年一一月に、すなわちロシア革命の最初の波が絶頂に達する一ヵ月まえに、プロレタリアートにきっぱりと警告しなかったばかりか、反対に、武器の使用を学び、武装することが必要である、とはっきりと語った。ところが、一ヵ月たって闘争が燃えあがると、プレハーノフは、その闘争の意義、事件の全行程におけるその役割、以前の闘争形態との関連を、すこしも分析しようとはせずに、急いで、悔いあらためたインテリゲンツィアになりすましたのである。「武器をとるべきではなかった」と。

マルクスは、一八七〇年九月に、すなわちコミューンの半年まえに、フランスの労働者にはっきりと警告した。蜂起は気ちがいざたであろう。——彼はインタナショナルの有名な宣言(一三)のなかでこう言った。彼は、一七九二年の精神での運動が可能であるように考える民族主義的幻想を、まえもって暴露した。彼は、あとからではなしに、数ヵ月もまえに、こう語ることができたのである。「武器をとってはならない」と。

そして、彼自身の九月の声明によれば絶望的だというこのことが、一八七一年三月に実行されはじめたときに、彼はどうふるまっただろうか？　マルクスは（プレハーノフが十二月事件についてやったように）たんに彼の敵に、すなわちコミューンを指導していたプルードン主義者やブランキ主義者たちに「一矢をむくいる」ために、この事件を利用したであろうか？　彼は女学校の担任女教師のように、私は言っておいたではないか、私は警告しておいたではないか、これこそ君たちのロマンチシズムの結果だ、君たちの革命的たわごとの結果だ、と小ごとを言いだしたであろうか？　プレハーノフが十二月の闘士にたいしてやったように、ひとりよがりの俗物の訓戒をコミューン戦士にあた

えたであろうか？「武器をとるべきではなかった」と。

いや、一八七一年四月一二日に、マルクスはクーゲルマンにあてて熱狂的な手紙を書きおくっている――われわれが、ロシアのすべての社会民主主義者、字の読めるロシアのすべての労働者の部屋の壁に、額にしてかけさせたいと思う手紙を。

一八七〇年九月に蜂起を気ちがいざたとよんだマルクスは、一八七一年四月〔一二日〕には、人民の大衆運動を目にして、世界史的な革命運動の一歩前進を示す大事件の参加者としての、最大の注意をこれにはらっている。

彼はこう言っている。これは、官僚的＝軍事的機関を破壊する試みであって、この機関を他のものの手に移そうとするだけのものではない、と。そして彼は、プルードン主義者とブランキ主義者とに指導されるパリの「英雄的」労働者を心底からたたえている。彼はこう書いている。「なんという屈伸性、なんという歴史的創意、なんという自己犠牲の能力が、これらのパリ人にはあることだろう！」(八八ページ)……「歴史は、これほどの偉大さのこれほどの実例を、かつて知らない！」

マルクスは、大衆の歴史的創意をなによりも高く評価している。おお、ロシアのわが社会民主主義者が、一九〇五年一〇月と一二月のロシアの労働者と農民の歴史的創意を評価するさいに、マルクスに学んでいたなら！

半年まえに失敗を予見していた深遠な思想家の、大衆の歴史的創意にたいする敬礼と、生命のない、魂のない、学者ぶったことば、「武器をとるべきではなかった」！これは雲泥の相違ではないか？

そしてマルクスは、大衆闘争の参加者として――彼は、ロンドンの亡命地にいながら、もちまえの熱意と熱情のすべてをあげて、この大衆闘争を体験したのだ――「天をもおそおうとする」「向うみずで勇敢な」パリ人の直接の方策の批判にとりかかっている。

おお、もしその当時に、一九〇六―一九〇七年のロシアで革命的ロマンチシズムを叱りとばしている、今日のわが「現実的な」賢人のマルクス主義者たちがいたなら、どんなにマルクスを嘲笑したことだろう！天をもおそおうとする「試み」に敬礼したりする唯物論者、経済学者、空想の敵のことを、この連中はどんなにあざけったことであろう！暴動主義的傾向とか、空想主義、等々とかについて、また天をもおそおうとする運動のこのような評価について、箱の中の男たち(三四)はみな、どれほど多くの涙をながし、おおように鼻で笑い、あるいは哀れみをたれたことであろう！

しかしマルクスは、革命闘争のより高い形態の技術を論

議することを恐れる、あのかますの賢明さをもちあわせてはいなかった。彼はまさに蜂起の技術的問題を論じている。防御か、それとも攻撃か？——彼は、まるで軍事行動がロンドン付近でおこなわれてでもいるかのように、こう言っている。そして彼は決定する、ぜひとも攻撃だ、「即刻ヴェルサイユへ進撃すべきであった……」と。

これは、一八七一年四月に、すなわち偉大な流血の五月の数週間まえに書かれたものである。……

天をもおそおうという「気ちがいざた」（一八七〇年九月）を開始した蜂起者は——「即刻ヴェルサイユへ進撃すべきであった」。

一九〇五年一二月には、かちとった自由を取り上げようとする最初の企てを力ずくで防ぐために、「武器をとるべきではなかった」……

まったく、プレハーノフが自分をマルクスと比較したのも、もっともなことである！

マルクスは、彼の技術的批判をつづけて言う。「第二の誤りは、中央委員会が」（すなわち軍事司令部——この点を注意せよ。ここで言っているのは国民軍の中央委員会のことなのだ）「その全権をあまりにもはやく放棄したことである」。

マルクスは、指導者には、時機尚早の蜂起をしないようにいましめることを心得ていた。しかし彼は、天をもおそおうとしているプロレタリアートにたいしては、実際的助言者としての態度、ブランキやプルードンの虚偽の理論や誤りにもかかわらず、運動全体をより高い段階に高めつつある大衆の闘争の参加者としての態度をとった。

彼はこう書いている。「ともあれ、今回のパリの蜂起は——たとえ旧社会の狼や豚やいやしむべき犬どもに屈伏しようとも——六月蜂起以来のわが党の最も輝かしい行為である」。

そしてマルクスは、コミューンのただ一つの誤りをプロレタリアートに隠しだてすることなく、この偉業に一つの著作[一〇一]をささげた。それは、今日にいたるまで「天」の攻略のための闘争の最良の手引となっており、自由主義的および急進的な「豚ども」には最も恐るべき恐怖のたねとなっている。

プレハーノフも十二月〔蜂起〕に一つの「著作」をささげたが、それは、カデットにとってほとんど福音書になっている。

まったく、プレハーノフが自分をマルクスに比較したのも、もっともである。

クーゲルマンはマルクスへの返書で、なにか疑惑を表明し、事態の絶望的なこと、ロマンチシズムに対立する現実

主義のことを指摘したらしい。すくなくとも彼は、コミューンを、この蜂起を、一八四九年六月一三日のパリの平和的デモンストレーションと比較したのである。

マルクスは、おりかえし（一八七一年四月一七日に）クーゲルマンを手きびしくたしなめている。

彼はこう書いている。「もし確実な勝算がある場合にだけたたかうとすれば、世界史を創造することは、もちろん、すこぶる便利になる」。

マルクスは、一八七〇年九月には蜂起を気ちがいざたとよんだ。しかし、大衆が蜂起したときには、マルクスは、彼らとともにすすむことを望み、彼らとともに闘争の過程で学ぶことを望んで、お役所ふうの訓戒をたれようとはしていない。あらかじめ勝敗を完全に正確に予測しようと試みることが、いかさまでなければ、手のつけようのない学者ぶりであることを、彼は理解している。労働者階級が英雄的に、自己犠牲的に、創意をもって世界史を創造することを、彼はなによりも高く評価している。マルクスは、勝敗をあらかじめ確実に予測する可能性をもたずに歴史を創造する人々の立場から、この歴史を考察したのであって、「たやすく予見できたのだ。……とるべきではなかったのだ……」とお説教する素町人的インテリゲンツィアの立場から考察しはしなかった。

マルクスはまた、たとえ絶望的な目的のためにでも大衆が必死の闘争をおこなうことが、この大衆のその後の訓練と、次の闘争への彼らの準備とのために必要であるような瞬間が、歴史上あることを、評価することができた。

マルクスから、未来を創造する能力ではなく、過去の評価だけを借りるために、いたずらにマルクスを引用することのお好きな現代のわがえせマルクス主義者たちには、このような問題の出し方はまったく理解できないことであり、それどころか原則的に無縁なことでさえある。プレハーノフが、一九〇五年一二月のあとで「ブレーキをかける」任務に着手したとき、彼はこのような問題の出し方を考えつきさえしなかったのだ。……

しかしマルクスは、一八七〇年九月には彼自身蜂起を気ちがいざたと認めたことをすこしも忘れずに、まさにこの問題を提起しているのである。

彼はこう書いている。「ヴェルサイユのブルジョア的賤民どもは、パリ人を、挑戦に応じるか、それともたたかわずに屈伏するか、二つに一つをえらばなければならない立場においた。このあとの場合に起こる労働者階級の士気の退廃は、どれだけの人数の『指導者』の死滅よりもはるかに大きな不幸となったであろう」。

以上で、マルクスがクーゲルマンにあてた手紙のなかで

教えている、プロレタリアートにふさわしい政策についての教訓の簡単な概観を終わることにしよう。
　ロシアの労働者階級は、彼らが「天をもおそう」能力をもっていることを、すでに一度証明したし、これからも何度となく証明するであろう。

一九〇七年二月に執筆
一九〇七年に小冊子『K・マルクス「L・クーゲルマンへの手紙」、エヌ・レーニン編および序』「ノーヴァヤ・ドゥーマ」出版所、サンクト・ペテルブルグ、に発表
全集、第五版、第一四巻、三七一―三七九ページ所収
邦訳全集、第一二巻、一〇二―一一一ページ所収

国会選挙とロシア社会民主党の戦術（一六）

国会選挙の結末はいろいろな階級とその力とを特徴づけている。
　ロシアの選挙権は、直接でない、不平等なものである。農民は、まず第一に十戸長を選出する。この十戸長は自分たちのあいだから農民代表を選出し、この代表は農民選挙人を選出し、最後に、この選挙人が他の身分の選挙人とともに国会議員を選出する。これに相応した選挙手続が地主、都市、労働者の各クーリア〔選挙等級〕のために存在しているが、これらのクーリアのそれぞれの選挙人数は上層階級、すなわち地主とブルジョアジーの利益になるように法律でさだめられている。おまけに、革命党はもとより、その他の反政府党も最も野蛮な、最も不法な警察的弾圧をくわえられている。つぎに出版と集会の自由はまったくなく、

横暴な逮捕と追放がおこなわれ、ロシアの大半では戦時軍法会議があり、それと関連して戒厳状態がみられる。

だが、このような事情のもとで、どうして新しい国会が第一国会よりもはるかに反政府的で革命的なものとなることができたのであろうか?

この質問に答えるためには、われわれは、ヨーロッパ・ロシア(ポーランド、カフカーズ、シベリアなどを除く)の全選挙人のほぼ一〇分の九をつかんでいる、カデットの機関紙『レーチ』の報道によって、第二国会の政党別構成に関連させて、選挙人を各党派に色分けした数字をまず第一に検討する必要がある。五つの主要な政治グループを取ってみよう。なぜなら選挙人の政治的色分けについての、これ以上くわしい情報はないからである。第一のグループを構成しているのは右翼である。これには、いわゆる「黒百人組」(君主党、ロシア国民同盟など)が属しているが、黒百人組は、純粋な形で完全な専制へ復帰することを主張し、革命家にたいして野ばなしの軍事的テロルを呼びかけ、国会議員ゲルツェンシテインの殺害のような暗殺を呼びかけ、「ポグロム」〔ユダヤ人その他にたいする大衆的迫害〕を演出するなどの行動に出ている。さらに、これにはいわゆる「オクチャブリスト」(ロシアでは大工業家の党がこうよばれる)が属しているが、同党は、一九〇五年一〇月一七日のツァーリの詔書の直後に反革命に加担し、いま極力政府を支持している。選挙のさいこの党はしばしば君主党とブロックを結んでいる。

第二のグループを構成しているのは無所属である。あとでわかることだが、とくに農民出身の多くの選挙人や議員は、自分の革命的信念を理由とする弾圧を避けるためにこの名まえでカムフラージュした。

第三のグループを形成しているのは自由主義者である。自由主義政党の先頭に立っているのは立憲民主党(いわゆる「カデット」党)あるいは「人民自由」党である。これはロシア革命における中央党であって、地主と農民の中間に立っている。ブルジョアジーは、この両階級を和解させようと試みている。自由主義的ブルジョアジーの党――カデット――にたいする評価は、ロシアの社会民主党内の二つの流派の意見の相違の最も重要な点である。

国会ではポーランドの「黒百人組」である「国民民主党」も、政治的信念からではなく、日和見主義の考えから、ロシアの自由主義者の側に立っているが、この党はポーランドでは密告や殺人をもふくめたあらゆる手段で革命的プロレタリアートと闘争している。

第四のグループを構成しているのは進歩派である。これは党名ではないが、しかし「無所属」とおなじようになに

も語らない符号であって、この符号のねらいは、なによりも警察の迫害にたいするカムフラージュとして役だつことである。

最後に、第五のグループを形成しているのは左翼である。これには社会民主党、エス・エル党、人民社会党（ほぼフランスの急進社会党に相応している）、まだまったく形をととのえていない農民民主主義派の組織である、いわゆる「トルドヴィキ」が属している。トルドヴィキ、人民社会党、エス・エルはその階級的性格からみると、小ブルジョア的農民的民主主義者である。ときには個々の革命的グループの選挙人たちは、選挙運動のときには、より確実に警察の迫害を避けるために、「左翼」という共通の名まえでカムフラージュしようと努めた。

＊　ドイツの新聞ではこの党はしばしば「労働グループ」とよばれているが、これはなんだか労働者階級との親縁関係を示している。本質的には、ロシアでは両者のあいだにはこのようなことばのうえの親縁関係さえもない。だから「トルドヴィキ」ということばを翻訳しないでそのままにしておき、このことばによって、それの小ブルジョア的な、すなわち農民的な民主主義を表示するほうがよいのである。

『レーチ』紙の数字〔次の二つの表〕を見れば、諸政党の社会的構成についてのわれわれの結論の正しいことがすぐわかる。

次の表からわかるように、大都市は特別のグループを構成している。すなわち、ペテルブルグは六名の議員、モスクワは四名、ワルシャワとタシケントは二名ずつ、その他の都市は一名ずつを選出し、合計一七都市が二七名の議員を選出する。その他の国会議員は個々の県の選挙人集会で合同した四つのクーリア全体によって選出される。しかし、そのほか、各県では農民選挙人が農民クーリアから一名の議員を選出する。こうして三つのグループの議員、つまり県の選挙集会、農民クーリア、大都市からの議員がでてくるのである。

進歩的あるいは左翼的ブロックの一ダースほどの選挙人は、ただ計算の便宜上個々の党グループに分けられているにすぎないが、大体において、これらの数字は、さしあたりロシアのいろいろな党の階級的構造を理解するのに最も完全で確実な材料を提供している。

労働者クーリアは、なによりもまず大都市ではもちろん、地方でさえ、ほとんど例外なしに〔選挙人として〕左翼を選出している。すなわち〔選挙人の〕九六・五%を〔左翼から〕選出している。労働者クーリアの左翼系選挙人一四〇名のうち、社会民主党員は八四名、正確な表示のない左翼（大部分やはり社会民主主義者）は五二名、エス・エルは四名である。こうしてロシアの社会民主党は、自由主義

Ⅰ 選挙人の数

党派	ヨーロッパ・ロシアの51県										大都市	
	地主		都市		農民		労働者		計			
	選挙人	%	選挙人	%	選挙人	%	選挙人	%	選挙人	%	選挙人	%
右翼	1,224	70.9	182	13.9	764	33.8	—	—	2,170	40.0	346	20.7
無所属	81	4.7	27	2.1	248	11.0	2	1.4	358	6.6	—	—
自由主義者	154	8.9	504	38.7	103	4.6	—	—	761	14.0	940	56.4
進歩派	185	10.7	280	21.5	561	24.9	3	2.1	1,029	18.9	55	3.3
左翼	82	4.8	311	23.8	582	25.7	140	96.5	1,115	20.5	327	19.6
計	1,726	100.0	1,304	100.0	2,258	100.0	145	100.0	5,433	100.0	1,668	100.0

者がこれを革命的インテリゲンツィアの党と見せかけたがっているにもかかわらず、正真正銘の労働者党である。ペテルブルグ——市と県——では労働者クーリアの選挙人二四名のうち二〇名の社会民主党員と四名のエス・エルが選出された。モスクワ——市と県——では社会民主党員だけ、すなわち三五名が選出された、等々。

農民クーリアでは驚くべき不釣合がすぐ目につく。農民選挙人のうち三三・八%は右翼に属している。ところが、〔第Ⅱ表に明らかなとおり〕農民クーリアのこの同じ選挙人によって選出された国会議員のうち右翼系はわずかに七・五%である。農民選挙人が政府の弾圧を避けるために、右翼と自称したにすぎないことが明らかである。ロシアの新聞は一〇〇以上のケースについてこの現象を確認したし、選挙統計はいまこのことを最後的に証明している。

農民クーリアは、選挙人がどう自称しているかをもとにして判断することはできない、それはただもっぱら彼らの代議士が何党に籍をおいているかによって判断できるのである。われわれには農民クーリアが労働者クーリアにつづいて最左翼グループを形成していることがわかる。農民はわずかに七・五%の右翼、六七・九五%の自由主義者よりも左翼的な人々〔進歩派と左翼〕を選出した！ ロシアの農民は大部分革命的気分をもっている——これが第二国会選挙の教訓である。これは非常に重要な事実である。なぜなら、それはロシア革命がまだけっしてその終末に達していないことを証明しているからである。農民の諸要求がみたされず、すくなくとも農民がしずまらないかぎり、革命

II　国会議員数

党派	ヨーロッパ・ロシアの51県						ポーランド		カフカーズ		シベリアと東方諸県		ロシア帝国合計	
	県選出		農民クーリア選出		大都市選出									
	議員	%	議員	%	議員	%	議員	%	議員	%	議員	%	議員	%
右翼	85	25.7	4	7.5	5	18.5	1	2.7	2	7.1	2	—	97	19.8
無所属	18	5.4	3	5.7	—	—	—	—	—	—	—	7.1	22	4.5
自由主義者	82	24.8	10	18.9	17	63.0	32	86.5	9	32.2	9	42.9	156	31.8
進歩派	20	6.0	10	18.9	—	—	3	8.1	2	7.1	2	—	35	7.1
左翼	126	38.1	26	49.0	5	18.5	1	2.7	15	53.6	15	50.0	180	36.8
計	331	100.0	53	100.0	27	100.0	37	100.0	28	100.0	14	100.0	490	100.0

はつづくにちがいない。しかし、もちろん、農民の革命的気分は社会民主主義とはなんの共通点もない。農民はブルジョア民主主義的革命家であって、けっして社会主義者ではない。農民がたたかうのは、全生産手段を社会の手に移すためではなく、農民が地主から土地を没収するためである。

農民のブルジョア民主主義的革命意識はトルドヴィキ、エス・エル、エヌ・エスという政党をつうじて典型的に表現されている。農民クーリア選出の国会議員五三名のうち二四名はこれら農民民主主義者に属する（左翼一〇名、トルドヴィキ一〇名、エス・エル四名）。さらに疑いもなく、農民選出の進歩派一〇名、無所属三名の大多数はトルドヴィキに属している。われわれは「疑いもなく」と言う。なぜなら、第一国会後にトルドヴィキは無慈悲に迫害されたので、農民は事実上は国会でトルドヴィキと提携して投票しているにもかかわらず、慎重な態度をとってトルドヴィキと自称していないからである。たとえば第一国会におけるトルドヴィキの最も重要な法案は「一〇四名の法案」という名で知られている土地法案であった（この法案の本質的内容は地主の土地を即時国有化し、将来は農民の分有地を国有化し、また土地を均等に用益することである）。この法案は農民生活の最も重要な問題の一つにおける農民大衆の政治思想のすぐれた産物である。この法案はただ七〇名の「トルドヴィキ」と、無所属と自称していたか、あるいは党籍についての質問には一般になんの回答もあたえなかった二五名の農民とによって署名されていた。

こうしてロシアにおける「勤労」グループは疑いもなく

農村の農民民主主義派の党である。これは革命的な党であるが、社会主義的な意味のそれではなく、ブルジョア民主主義的な意味のそれである。

都市クーリアでは大都市と小都市に区別をつける必要がある。小都市では個々の階級間の政治的矛盾はそれほどつよく現われておらず、（特別な労働者クーリアを形成する）プロレタリアートの大きな大衆が存在せず、ここでは右翼は弱い。大都市には無所属の選挙人はまったく存在せず、ここでは不明確な「進歩派」の数はまったくとるにたりない。そのかわりここでは右翼が強く、左翼が弱い。その理由は簡単である。大都市のプロレタリアートは特別の労働者クーリアを形成しているが、これはわれわれの選挙人表*にはいっていない。小ブルジョアジーはここでは小都市にくらべてはるかに少数である。大工業が優勢であるが、それは一部は右翼によって、一部は自由主義者によって代表されている。

* このためには資料がない。だから労働者クーリアからの選挙人の数字は表から削除してある。われわれは労働者選挙人三七名について正確な情報をもっているにすぎない。これらの選挙人は例外なく左翼に属している。ヨーロッパ・ロシアにおけるすべての労働者選挙人の総数は法律によれば二〇八名である。このうちわれわれは一四五名にかんしてはより正確な資料をもっているのだが、これはさきほどあげた大都市の労働者クーリアからの選挙人三七名とあわせて一八二名となる、すなわち労働者選挙人総数の一〇分の九を占める。

選挙人の構成についての数字は、自由主義諸党（したがって、主としてカデット党）の基礎となっているのが都市のブルジョアジー、なによりもまず、大工業ブルジョアジーであることを明白に証明している。プロレタリアートの自主性と力に恐怖を感じて、このブルジョアジーが右へ転向していることは、大都市と小都市を比較すればとくに明らかになる。小都市では都市クーリア（すなわち、ブルジョア・クーリア）は左翼分子にはるかにつよく食いこまれている。

この問題と密接な関係にあるのはロシア社会民主主義者の基本的な意見の相違である。一つの翼（いわゆる「メンシェヴィキ」）はカデットと自由主義者を進歩的な都市ブルジョアジーとみなし、それを遅れた農村小ブルジョアジー（トルドヴィキ）に対置している。ここからして、ブルジョアジーが革命の推進力と認められ、カデット支持の政策がとなえられることになる。もう一つの翼（いわゆる「ボリシェヴィキ」）は自由主義者を大工業の代表者とみなすが、この代表者はプロレタリアートを恐れるあまり、できるだけはやく革命に終止符を打とうとつとめ、反動との

妥協に応じている。この一翼はトルドヴィキを革命的小ブルジョア民主主義派とみなしている、そしてトルドヴィキは農民にとって最も重要な土地問題——大土地所有の没収——で急進的な立場にかたむいていると考えている。ここからボリシェヴィキの戦術がでてくる。彼らは裏切的な自由主義的ブルジョアジー、すなわち、カデットを支持することを排撃し、民主主義的小ブルジョアジーを自由主義者の影響から引きはなそうと努めている。彼らは農民と都市の小ブルジョアを自由主義者から引きはなし、前衛としてのプロレタリアートのあとについて革命闘争に進出させようと欲している。ロシア革命は、その社会的＝経済的内容からみるとブルジョア革命であるが、しかしその推進力は、自由主義的ブルジョアジーではなくて、プロレタリアートと民主主義的農民である。革命の勝利はプロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタトゥーラ）によってはじめて可能となる。

われわれが自由主義者と都市小ブルジョアジーとの同盟が強固なものかどうかを明確に理解したければ、大都市で各党派ブロックに投じられた票数の統計がとくにわれわれに興味がある。統計学者スミルノフの数字によれば二二の大都市では君主党の得票は一万七〇〇〇、オクチャブリストは三万四五〇〇、カデット七万四〇〇〇、左翼ブロック四万一〇〇〇である。*

＊「左翼ブロック」というのは社会民主党と小ブルジョア諸党（第一に「トルドヴィキ」だが、このことばをもっと広い意味に解釈し、エス・エルをこのグループの左翼とみる）の選挙ブロックのことである。このブロックは右翼をも自由主義者をも敵としている。

第二国会選挙のときに、社会民主党の両翼であるメンシェヴィキとボリシェヴィキのあいだに、カデットとブロックを結ぶべきか、それともカデットに反対してトルドヴィキとブロックを結ぶべきかという問題について激しい闘争が燃えあがった。モスクワではボリシェヴィキの支持者のほうが強い。ここでは左翼ブロックが結成され、メンシェヴィキもそれに加入した。ペテルブルグでもやはりボリシェヴィキは強かった。そしてここでもまた選挙のときに左翼ブロックが結成されたが、メンシェヴィキはそれに加入せず、組織から脱退してしまった。分裂が起こり、いまもなおつづいている。メンシェヴィキは黒百人組の危険の恐れがあることを口実にした。すなわち、彼らは左翼と自由主義者の票が割れて、黒百人組が選挙で勝つことを心配したのである。ボリシェヴィキは、この危険は自由主義者の作り話であって、自由主義者のただ一つのねらいは小ブルジョア民主主義派とプロレタリア民主主義派とをブルジョア自由主義派の翼のもとに引きいれることだと公言した。

数字は、左翼とカデットの総得票数がオクチャブリストと君主党との得票を二倍以上も上まわっていることを証明している。* 反政府派の票割れは、したがって、右翼の勝利の助けにはなりえなかったわけである。

* おなじスミルノフ氏の計算によれば、七万二〇〇〇名の有権者が選挙に現われ、四つでなくて二つ（あるいは三つ）の候補者名簿が争った一六都市では反政府派は五八・七％、右翼は二一％を獲得した。ここでもまた反政府派の得票は右翼の得票を二倍以上も上まわっている。ここでもまた黒百人組の危険は、自由主義者の欺瞞的なおどかしにすぎず、自由主義者は、実際には「左からの危険」（この表現はカデット機関紙『レーチ』から借りる）を恐れていたくせに右からの危険を騒ぎたてていたのである。

都市の有権者二〇万人以上をとらえているこれらの数字も、第二国会の全構成についての資料も、社会民主党とカデットのブロックのほんとうの政治的意味がけっして「黒百人組」の危険（この意見は、たとえそれがまったく誠実なものであったとしても、総じて誤りである）をのぞくことにあるのではなくて、労働者階級の自主的政策をなくし、労働者階級を自由主義者のヘゲモニーに従わせることにある点を証明している。

ロシア社会民主党の両翼のあいだの論争の本質は、自由主義者のヘゲモニーを認めるべきか、それともブルジョア革命における労働者階級のヘゲモニーをめざすべきかを決定することである。

カデットに対抗して社会民主党とトルドヴィキが最初の協定を結んだとき、左翼が二二の都市で、扇動が未曽有に困難であったにもかかわらず、四万一〇〇〇票を獲得したという事情、すなわち、オクチャブリストをしのぎ、自由主義者の票の半数以上をえたという事情は、都市の民主主義的小ブルジョアジーがカデットに追従しているのは、これらの層が革命に敵意をもっているためというよりもむしろ習慣と自由主義者の奸計のためだということをボリシェヴィキのために証明している。

さて最後のクーリアである地主クーリアにうつろう。ここではわれわれは右翼の優勢がはっきり現われていることを発見する。すなわち、選挙人の七〇・九％は右翼である。大土地所有者が革命をきらい、農民の土地闘争に影響されて反革命の側に転向することはまったく避けがたい。

もしいま県の選挙集会における選挙人グループの構成と、これらの集会で選出された議員の政治的色彩からみた国会の構成とを比較してみると、進歩派というのは多くは左翼がかくれみのにしている名まえにすぎないことに気づくであろう。選挙人のうちで二〇・五％が左翼で、一八・九％が進歩派である。議員のうち三八％は左翼に属しているし、

右翼は議員総数のわずか二五・七％をもっているにすぎないが、しかし選挙人総数から農民選挙人総数の四〇％であった。しかしもし選挙人総数から農民選挙人を控除すれば（すでに証明したように、選挙情報を偽造したロシア政府の手先だけが彼らを右翼とみなすことができた）、右翼的選挙人にくわわるものは2170−764＝1406、すなわち二五・八％となる。こうして、二つの結果は完全に一致する。自由主義的選挙人は、おそらく、一部は「無所属」の名にかくれ、一部は「進歩派」の名にかくれ、農民は「右翼」の名にさえかくれているだろう。

ロシアの非ロシア人的な部分である、ポーランドやカフカーズとの比較は、ロシアのブルジョア革命の真の推進力はブルジョアジーでないという新しい証拠をあたえる。ポーランドには革命的農民運動も、どんな都市ブルジョア反政府派もまったく存在せず、自由主義者はほとんどいない。革命的プロレタリアートに対抗しているのは大小ブルジョアジーの反動的ブロックである。だからそこでは国民民主党が勝ったのである。カフカーズでは革命的農民運動が非常に強く、そこでは自由主義者の力はほとんどロシアにおけると同様であるが、しかし左翼はここでは最も強力な党派である。国会における左翼のパーセント（五三・六％）はほぼ農民クーリア出の代議員のパーセント（四九％）と等しい。ただ労働者と革命的民主主義的農民だけがブルジョア革命を完成することができる。先進的な、高度に資本主義的に発達したポーランドにはロシア的な意味での土地問題が存在せず、地主の土地没収のための農民の革命闘争は全然存在しない。だからポーランドはプロレタリアートを度外視した革命はどんな強固な支点ももっていないのである。そこでは階級的諸矛盾は西ヨーロッパの型に近づきつつある。われわれはカフカーズではその逆の現象に出あう。

ここでさらに指摘しておくが、『レーチ』の算定によれば、左翼の一八〇名は、次のように各党のあいだに配分されている。すなわち左翼は六八名、人民社会党（トルドヴィキの右翼）は九名、エス・エルは二八名、社会民主主義者は四六名……事実上、社会民主主義者の数はいまではすでに六五名になっている。自由主義者は社会民主主義者の数をできるだけ過小評価しようと努めている。

階級的構成の点からみて、これらのグループを二つの層につづめることができる。民主主義的小ブルジョアジー（都市と、とくに農村の）に属するのは一三四名、プロレタリアートに属するのは四六名の議員となる。

大体において、ロシアではいろいろな党の階級的分化は非常にはっきりと現われていることがわかる。大土地所有

者は黒百人組、君主党、オクチャブリストに属している。大工業はオクチャブリストと自由主義者によって代表されている。経営のやり方からみると、ロシアの地主は、まだ半封建的方法で経営をおこない、農民の家畜と農具の助けをかりて仕事をおこなっている者（ここでは農民は地主に隷属させられている）と、現代の資本主義的経営形態をすでに導入している者とにわかれる。後者のあいだには自由主義者が少なくない。都市の小ブルジョアジーは自由主義者とトルドヴィキによって代表されている。農民小ブルジョアジーはトルドヴィキおよびとくにその左翼であるエス・エルによって代表されている。プロレタリアートは社会民主党をその代表者としている。ロシアは資本主義の発展があきらかに立ちおくれているのに、社会の階級的構成に一致した諸党派のグループ分けがこんなにくっきり現われているのは、ただ時代の嵐のような革命的気分のためであって、沈滞の時代あるいはいわゆる平和的前進の時代にくらべて、党派の形成がはるかに急速におこなわれ、階級的自覚が無限に急速にたかまり、はっきりしてきているからである。

署名――ア・リニッチ

一九〇七年三月二七日に『ノイエ・ツァイト』誌の一九〇六―一九〇七年、第一巻、第二六号に発表

全集、第五版、第一五巻、三七―四八ページ所収
邦訳全集、第一二巻、一九三―二〇三ページ所収

『J・F・ベッカー、J・ディーツゲン、F・エンゲルス、K・マルクスその他からF・A・ゾルゲその他への手紙』のロシア語版序文

ここにロシアの大衆に提供するマルクス、エンゲルス、ディーツゲン、ベッカー、その他前世紀の国際労働運動の指導者たちの書簡集は、わが国の先進的マルクス主義文献への、必要欠くべからざる補足となるものである。

社会主義の歴史にとり、またマルクスとエンゲルスの活動の全面的な解明にとって、これらの手紙のもつ重要性には、ここではくわしくは立ちいらないことにする。問題のこの側面は説明を必要としない。ただ、これらの手紙を理解するためには、インタナショナルの歴史（イェック著『インタナショナル』を見よ。「ズナーニエ」版のロシア語訳がある）や、ついでドイツとアメリカの労働運動（F・メーリング著『ドイツ社会民主党史』、およびモリス・ヒルキット著『アメリカ社会主義史』を見よ）等々についての基本的な著作を知る必要があることを指摘しておこう。

同様にわれわれは、この文通の内容の概観や、それの関係する種々の歴史的時期の評価を、ここであたえるよう試みるつもりはない。この仕事は、メーリングが彼の論文『ゾルゲ往復書簡』（『ノイエ・ツァイト』第二五巻、第一、第二号）のなかでみごとに果たしている。おそらくこの論文は、出版者の手で本訳書の付録につけられるか、あるいは単行のロシア語の出版物として発行されるであろう。[27]

戦闘的プロレタリアートが、ほとんど三〇年にわたる（一八六七―一八九五年）マルクスとエンゲルスの活動の内面に親しむことによって引きださなければならない教訓は、現在の革命時代のロシアの社会主義者にはとくに興味のあるものである。だから、わが国の社会民主主義的文献でも、ゾルゲあてのマルクスとエンゲルスの書簡を読者に知らせようとする最初の試みが、ロシア革命における社会民主党の戦術の「焦眉の」諸問題に関連してなされた（プレハーノフの『ソヴレメンナヤ・ジーズニ』[28]、メンシェヴィキの『オートクリキ』[29]）ことは、なにも不思議ではないのである。われわれが読者の注意をうながしたいと思うのも、この往復書簡のうちで、ロシアの労働者党の現在の

任務の立場から見てとくに重要な箇所の評価にたいしてである。

マルクスとエンゲルスがその手紙のなかで、最も頻繁に意見を述べたのは、イギリス、アメリカおよびドイツの労働運動の焦眉の問題についてであった。これは当然のことである。というのは、彼らは当時イギリスに在住していたドイツ人であり、アメリカにいる彼らの同志と文通していたからである。フランスの労働運動、とくにパリ・コミューンについては、マルクスは、ドイツの社会民主主義者クーゲルマンに書きおくった手紙のうちで、はるかに頻繁に、くわしく論じている。*

* 『K・マルクスのクーゲルマン博士への手紙』、エヌ・レーニンが監修し、序文をつけた訳書、サンクト・ペテルブルグ、一九〇七年刊を見よ。

マルクスとエンゲルスが、イギリス＝アメリカの労働運動とドイツの労働運動について論じたことを比較してみると、きわめて教えられるところが多い。一方ではドイツ、他方ではイギリスとアメリカが、資本主義発展の違った段階をあらわし、これらの国々の全政治生活にたいする、階級としてのブルジョアジーの違った支配形態をあらわしていることを考慮するなら、上記の比較は、とくに大きな重要性をもってくる。科学的見地からいえば、われわれがここに見るのは、唯物弁証法の模範であり、あれこれの政治的経済的諸条件の具体的特殊性におうじて、問題の違った点、違った側面を前面におしだし、強調する能力である。労働者党の実践的政策と戦術の見地からいえば、われわれがここに見るのは、『共産党宣言』の著者たちが、いろいろな国の国民的労働運動の種々の段階におうじて、戦闘的プロレタリアートの任務をどう規定したかの模範である。

マルクスとエンゲルスがイギリス＝アメリカの社会主義について、なによりも激しく批判しているのは、それが労働運動から遊離していることである。イギリスの「社会民主主義連盟」(100)(Social-Democratic Federation)とアメリカの社会主義者とにくだした彼らの多くの批評全体を赤い糸のように貫いているのは、これらの社会主義者がマルクス主義をドグマ〔独断的教義〕に、「硬直した(starre)オーソドックス〔正統学説〕」にしてしまっており、それを「信条と考えて、行動の指針とは考えず」、自分の周囲におこなわれている、理論的には幼稚でも生きいきとした大衆的な強力な労働運動に順応することができない、という非難である。エンゲルスは、一八八七年一月二七日付の手紙のなかで、次のように叫んでいる。「もしわれわれが、一八六四年から一八七三年までのあいだ、われわれの綱領を公然と採用したものとしか協力しないと言いはったとした

ら、今日われわれはどうなっていたことだろう？」(一〇一) そして、そのまえの手紙（一八八六年一二月二八日）では、アメリカの労働者階級にたいするヘンリー・ジョージの思想の影響の問題にふれて、彼は次のように書いている。

「現在のところでは、来年一一月に真実の（bona fide）労働者党に投じられる一〇〇万ないし二〇〇万の労働者の票は、理論的に完全な綱領に投じられる一〇万票より、かぎりなく大きな価値がある。」

これは非常に興味ぶかい箇所である。わが国には、「労働者大会」(一〇二) の思想、あるいはなにかラーリンの「広範な労働者党」式のものを擁護するために、これらの箇所を急いで利用した社会民主主義者があった。なぜいっそのこと「左翼ブロック」を擁護しないのか、それらのせっかちなエンゲルス「利用者たち」におたずねしよう。ここに引用した書簡は、アメリカの労働者が選挙でヘンリー・ジョージに投票した時代に書かれたものである。ヴィシネヴェツキー夫人——ロシア人と結婚したアメリカ人で、エンゲルスの諸著作の翻訳者——は、エンゲルスが彼女にあたえた返事から察せられるように、H・ジョージをこっぴどくやっつけてくれと、エンゲルスに願った。エンゲルスはこれにたいして書きおくっている（一八八六年一二月二八日）。そうするにはまだ時機が熟していない。というのは、労働者党が、完全に純粋でない綱領にもとづいてであっても、形成されはじめるなら、そうさせるほうがましだからである。後日、労働者は、自分でどこに問題があるかを理解するであろう、「自身の誤りから学ぶであろう」。だが、「労働者党の国民的確立——どのような綱領にもとづいてであろうと——を妨げることは、私は大きな誤りと考える」と。

しかし、もちろんエンゲルスは、社会主義の立場からみたH・ジョージの思想のまったくの愚かしさと反動性を、みごとに理解していて、たびたびこれを指摘している。ゾルゲ往復書簡のうちには、一八八一年六月二〇日付のK・マルクスのきわめて興味ぶかい手紙があるが、そこでは彼はH・ジョージを、急進的ブルジョアジーのイデオローグと評価している。「H・ジョージは理論的にまったくおくれている（total arrière）」とマルクスは書きおくっている。しかもF・エンゲルスは、大衆に「彼ら自身の誤りの結果」を予告するすべを心得ている人々さえいるならば、このまったく反動的な社会主義者と選挙で協力することを恐れなかったのである（エンゲルス、一八八六年一一月二九日付の手紙）。

当時のアメリカの労働者の組織である「労働騎士団」(一〇三)（Knights of Labor）について、エンゲルスは同じ手紙に次のように書いている。「労働騎士団の最も弱い」（文字ど

おりには、最もくさった faulste）「面は、その政治的中立であった」。……「すべて新たに運動にはいってくる国の重要な第一歩は、つねに労働者を独立の政党に結成することである。明確な労働者党でありさえすれば、その結成の仕方はどうでもよい」。

社会民主党から無党派の労働者大会等々へ跳躍することを弁護するような結論を、ここからなにひとつ引きだすことができないのは、明らかである。これに反して、マルクス主義を「教条」、「オーソドックス」、「セクト主義」等々におとしいれるというエンゲルスの非難をこうむりたくないものはだれでも、ときとしては急進的な「社会反動派」との共同の選挙運動を認める必要が起こるという結論を、ここから引きださなければならないのである。

しかし、もちろん、いっそう興味があるのは、このようなアメリカとロシアの相似点よりも（われわれは、論敵にこたえる必要から、それにふれなければならなかったが）、むしろイギリス＝アメリカの労働運動の基本的特徴について論じることである。その特徴とは次のようなものである。プロレタリアートがいくらかでも大きな、全国民的な民主主義的任務に当面していないこと、プロレタリアートが完全にブルジョアジーの政策に従属していること、ひとかたまりの、ひとにぎりの社会主義者がプロレタリアートからセクト的に遊離していること、選挙のさいに社会主義者が労働者大衆のあいだでごくわずかな成功さえおさめていないこと、等々。これらの基本的な条件を忘れて、「アメリカとロシアの相似点」から広範な結論を引きだそうとするものは、まったく表面的な見方しかしていないことをみずから暴露しているのである。

エンゲルスが、このような条件のもとでの労働者の経済的組織に非常な重点をおいているのは、ここで問題となっているのが最も確立した民主主義制度であり、それがプロレタリアートに純社会主義的な任務を提起しているからである。

エンゲルスが、たとえ悪い綱領をもつものであろうと独立した労働者党は重要であることを強調しているのは、ここで問題となっているのが、それまで労働者のどんな政治的独立性を暗示するようなものもなにひとつなかった国、労働者が政治においてどこよりもブルジョアジーのうしろにくっついてきたし、いまもくっついている国だからである。

こういう議論から引きだされた結論を、プロレタリアートが自由主義的ブルジョアよりもはやく独自の党をつくりだしていて、ブルジョア政治屋どもに投票する伝統などすこしももっていないような、また社会主義的任務ではなし

にブルジョア民主主義的任務が直接に日程にのぼっているような国〔ロシア〕または歴史的時機におしおよぼそうとすることは、マルクスの歴史的方法を愚弄するものである。

　イギリス＝アメリカの運動についてのエンゲルスの評言と、ドイツの運動についての評言とを対照してみれば、われわれの思想は読者にもっと明瞭になるであろう。

　ドイツの運動についての評言も、この往復書簡のうちに数多くあり、しかもそれはきわめて興味ぶかいものである。そして、これらの評言の全体を赤い糸のように貫いているものは、まったく別の事柄である。すなわち、労働者党の「右翼」にたいする警告、社会民主党内の日和見主義との仮借ない（ときには――一八七七―一八七九年のマルクスの場合のように――猛烈な）たたかい、これである。

　まずはじめに手紙を引用してこのことを確証し、次に、この現象の評価に立ちいることにしよう。

　まず第一に、ここで指摘しなければならないのは、ヘヒベルグ一派についてのK・マルクスの評言である。F・メーリングは、彼の論文『ゾルゲ往復書簡』のうちで、日和見主義者にたいするマルクスの攻撃や、後年のエンゲルスの攻撃を、やわらげようと努力している。しかもわれわれの意見では、いくらか度をこした努力をしている。とりわけヘヒベルグ一派にかんしては、マルクスがラサール派にくだした評価は正しくないという意見を固執している。しかし、くりかえして言うが、この場合われわれの興味をひくのは、ある特定の社会主義者にたいするマルクスの攻撃が正当か不当かの歴史的評価ではなくて、一般に社会主義の内部の特定の諸潮流にたいするマルクスの原則的評価なのである。

　マルクスは、ドイツの社会民主主義者のラサール派[一〇三]やデューリングとの妥協に不満を述べながら（一八七七年一〇月一九日付の手紙）、さらに、「社会主義に『より高い、観念論的』方向をあたえたがっている、つまり唯物論的基礎（このような基礎は、それをつかって仕事をしたければ、真剣な客観的研究を必要とする）を、正義、自由、平等、友愛（fraternité）という女神たちについての現代の神話におきかえたがっている半熟の学生や利口すぎる博士たち」（ドイツの「博士」〔ドクトル〕は、わが国の「博士候補」〔修士〕または「一級学士」に相当する学位である）[一〇四]「の全徒党との」妥協をも非難している。『ツークンフト』[一〇五]誌の発行者のヘヒベルグ博士は、この傾向の一代表者であって、党に『自分を売りこんだ』人である。――おそらくこれは『最もけだかい』意図から出たことだろうが、私は『意図』などは歯牙にもかけない。彼の『ツークンフト』の綱領ほどみじめなものは、またこれほど『控え目な要

求』をもったものは、めったにない」（手紙、第七〇号）。

ほとんど二年を経て書かれた別の手紙では（一八七九年九月一九日）、マルクスは、エンゲルスと彼がJ・モストをあとおししているという流言を反駁して、ゾルゲに、ドイツ社会民主党内の日和見主義者にたいする自分の態度をくわしく語っている。雑誌『ツークンフト』は、ヘヒベルグ、シュラム、エド・ベルンシュタインによって運営されていた。マルクスとエンゲルスは、このような出版物に協力することを拒絶した。そして、ほかならぬこのヘヒベルグの参加と彼の金銭上の援助とのもとに、新しい党機関紙を創刊する問題がもちあがったとき、マルクスとエンゲルスは、はじめは、この「博士と学生と講壇社会主義者[106]との寄せあつめ」の監督のために彼ら両人の指名した責任編集者ヒルシュを受けいれることを要求したが、のちには、ベーベル、リープクネヒトその他の社会民主党の指導者たちに直接に回状を送って、もしヘヒベルグ、シュラム、ベルンシュタインの傾向が変更されなければ、自分たちは「党と理論のこのような卑俗化」（Verluderung ――このドイツ語は最も激しい語調のことばである）と公然とたたかうであろう、と警告した。

これは、メーリングがその『ドイツ社会民主党史』のなかで「混乱の一年」（„Ein Jahr der Verwirrung"）としてえがいた、あのドイツ社会民主党の一時期であった。「社会主義者取締法」が発布されたのち、党は一挙に正しい道を見いだしたわけではなく、はじめは、モストの無政府主義やヘヒベルグ一派の日和見主義におちいった。この後者についてマルクスは書いている。「理論的にはゼロで、実践的には使いみちのないこの連中は、社会主義（それを彼らは大学の処方箋(せん)にしたがって調製したのだが）と、とくに社会民主党から牙をぬきとって労働者を教化すること、つまり、彼らの混乱した半可通の知識によって、彼らのいわゆる『教養の要素』を労働者につぎこむこと、なによりも党を素町人どもにお上品に見えるものにすることを望んでいるのだ。まさにあわれむべき反革命的おしゃべりどもだ」。

マルクスの「猛烈な」攻撃の結果、日和見主義者たちは退却して、……姿をくらました。一八七九年一一月一九日付の手紙でマルクスは、ヘヒベルグが編集委員会から遠ざけられ、党の有力な指導者、ベーベル、リープクネヒト、ブラッケその他がみな、彼の思想を拒否したことを報じている。社会民主党の機関紙『ゾツィアルデモクラート』[107]は、フォルマルの編集のもとに発行されはじめたが、フォルマルは、そのころ、党の革命的な一翼に属していた。さらに一年ののち（一八八〇年一一月五日）マルクスは、エ

ンゲルスと彼とがこの『ゾツィアルーデモクラート』の「みじめな」(miserable) 運営の仕方とたえずたたかってきたこと、しかもしばしばするどくたたかってきた (wobei's oft scharf hergeht) ことを語っている。リープクネヒトは一八八〇年にマルクスを訪問して、あらゆる点で「改善」をおこなうと約束した。

平和は回復され、戦いは表面に現われなかった。ヘヒベルグは去り〔一八八五年に死亡〕、ベルンシュタインは革命的社会民主主義者になった、……すくなくとも、一八九五年にエンゲルスが死ぬまでは。

一八八二年六月二〇日にエンゲルスはゾルゲに手紙を書き、すでに過去の事柄としてこの闘争のことを語っている。「ドイツでは全体として事はすばらしくはこんでいる。なるほど、党内の文筆家諸氏が、反動的な……転換をおしとおそうと試みたことはあったが、その試みはみごとに挫折してしまった。社会民主党の労働者がいたるところでこうむっている暴虐は、いたるところで彼らをつい三年まえの状態にくらべて、はるかに革命的にした。……この連中」(党内の文筆家)「は、なにを犠牲にしてでも、温順と柔和、迎合と卑下によって社会主義者取締法の廃止を乞いうけたがっているのだが、それというのも、この法律が彼らの文筆稼業をたちまちに干あがらせるからである。この法律が廃止されるやいなや、……分裂はおそらく公然のものとなり、フィーレック、ヘヒベルグのやからは、独立の右翼をかたちづくることになろう。そこではときどきは彼らと交渉することもできるだろうが、結局は、彼らは、徹底的な尻餅(しりもち)をつくだろう。われわれは、社会主義者取締法の発布された直後に、ヘヒベルグとシュラムが『年報』[一〇]のうちで、従来の党活動についての……まったく恥しらずな評価を発表し、党にたいしてもっと教養のある」(„jebildetes“——gebildetes ではなしに。エンゲルスはドイツの文筆家たちのベルリンふうのアクセントを風刺しているのである)、「品のよい、高尚な態度を要求したときに、すでにこのことを言明したのである」。

一八八二年になされたベルンシュタイン主義[一一]についての予言は、一八九八年とそれにつづく数年に、みごとに裏書きされた。

そして、このとき以来、ことにマルクスの死後には、エンゲルスは、——倦むことなく、と誇張なしに言うことができるが——ドイツの日和見主義者たちが曲げた「棒を曲げなおした」のである。

一八八四年末。航路助成金 (Dampfersubvention——メーリングの『社会民主党史』を見よ) に賛成投票したドイツ社会民主党の国会議員たちの「小ブルジョア的偏見」が

非難されている。[一〇九] エンゲルスは、この問題についてたくさんの文通をしなければならない、とゾルゲに知らせている（一八八四年一二月三一日付の手紙）。

一八八五年。「航路助成金」問題全体に評価をくだしながら、エンゲルスは、「あやうく分裂するところまでいった」と書いている（六月三日）。社会民主党議員たちの「素町人根性」は「とてつもない」ものであった。「ドイツのような国では、小ブルジョア社会主義的な分派は避けられない」とエンゲルスは言っている。

一八八七年。エンゲルスは、ゾルゲが、フィーレック（ヘヒベルグ型の社会民主主義者）のような人間を議員に選んだことで党は恥さらしをやった、と書いてよこしたのにたいして、返事を送っている。エンゲルスは言いわけして言う。どうにもしようがないのだ、労働者党はよい国会議員をつれてくるあてがどこにもないのだ、「右翼の紳士諸君は、自分らがまだ大目に見られているのは、ひとえに社会主義者取締法があるためで、党が運動の自由を回復するその日には、自分らはたちまち虚空へふっとんでしまうことを知っている」。それに、一般的にいって、「私は党がその議会の勇士たちにまさっているほうが──その反対の場合よりも望ましいと思う」（一八八七年三月三日）。エンゲルスはなげいて言う。リープクネヒトは調停主義者である、彼は意見の相違をつねにことばでごまかしてしまう、しかし、事が分裂まですすめば、決定的な瞬間には彼はわれわれに味方するであろう、と。

一八八九年。パリに二つの国際的な社会民主主義者大会[一一〇]がひらかれる。日和見主義者（フランスのポシビリスト[一一一]〔可能主義者〕を先頭とする）が革命的社会民主主義者と分裂したのである。エンゲルス（このとき彼は六八歳であった）は、青年のように戦闘のまんなかにおどりこむ。数通の手紙（一八八九年一月一二日から七月二〇日まで）が日和見主義者との闘争にあてられている。日和見主義者ばかりでなく、ドイツ人たち、リープクネヒト、ベーベルその他も、その調停主義のかどで叱責されている。

ポシビリストは政府に買収された、とエンゲルスは一八八九年一月一二日の手紙に書いている。そして彼は、イギリスの「社会民主主義連盟」（S.D.F.）の成員たちが、ポシビリストと同盟を結んだといって責めている。「このいまいましい大会のことであちこちに手紙を書いたり、走りまわったりしているので、ほかのことはなにをする時間ものこらない」（一八八九年五月一一日）。ポシビリストはせわしく立ちはたらいているのに、われわれのほうは居眠りしている、とエンゲルスは憤慨している。いまではアウアーとシッペルさえ、ポシビリストの大会に出席することを

要求しているしまつである。しかし、このことは「ついに」リープクネヒトの目をひらいた。エンゲルスは、ベルンシュタインといっしょに日和見主義者を攻撃するパンフレットをいくつも書く（これはベルンシュタインの署名になっているが、エンゲルスはそれを「われわれのパンフレット」とよんでいる）。「ポシビリストは、社会民主主義連盟を除けば、ヨーロッパ中にただ一つの社会主義団体ももっていない」（一八八九年六月八日）。「そこで彼らは、非社会主義的な労働組合〔トレード・ユニオン〕に逆もどりするのだ」。（わが国の、幅ひろい労働者党、労働者大会、等々の礼賛者たちのご参考までに！）「アメリカからは労働騎士団からひとりやってくるだけだ」。敵は、バクーニン主義者にたいする闘争のときと同じ連中である。「ただ無政府主義者の旗がポシビリストの旗にとりかえられたという違いがあるだけだ。つまり、小だしの譲歩と、とくに指導者たちのための報酬のよい地位（市議会、職業紹介所、等々）とひきかえに、原則をブルジョアジーに売り渡すのである」。ブルス（ポシビリストの指導者）とハインドマン（ポシビリストと連合した社会民主主義連盟の指導者）とは、「強権的マルクス主義」を攻撃し、「新しいインタナショナルの中核」をつくりたがっている。

「ドイツ人のおめでたさかげんは、君にはとても想像がつくまい。ベーベルにたいしてさえ、本来どういうことが問題になっているのかをわからせるのに、私は大骨をおらなければならなかった」（一八八九年六月八日）。そして、二つの大会がひらかれて、革命的社会民主主義者が数のうえでポシビリスト（組合主義者〔トレード・ユニオニスト〕、社会民主主義連盟、一部のオーストリア人、などと連合した）をしのいだとき、エンゲルスは狂喜している（一八八九年七月一七日）。リープクネヒトその他の調停主義的な計画と提案が失敗におわったことが、彼を喜ばせる（一八八九年七月二〇日）。「ところが、わがセンチメンタルな調停愛好者連が、そのあらゆる友情の誓いのお返しとして荒っぽく足げにされたのは、自業自得というものである」。「たしかにこれは、しばらくのあいだは彼らによい薬になるだろう」。

……マルクスとエンゲルスは〔論争にさいして〕「礼儀作法」をあまり重視しなかった、とメーリングが（『ゾルゲ往復書簡』で）言っているのは正しい。「彼らは、打撃をくわえるときに長く思案しなかったかわりに、自分でも打撃をうけるたびにすすり泣いたりはしなかった」。エンゲルスはかつて次のように書いたことがある。「もし諸君が、諸君のあてこすりの針の先が私の年へて甲羅のはえた厚い皮膚を貫くことができると思ったら、大まちがいだ」

と。そして、マルクスとエンゲルスは、自分たちが獲得したこの無感覚を、他人もまたもちあわせているものと予想したのだ、とメーリングは彼らについて書いている。

一八九三年。「フェビアン派」[三三]にたいする懲戒。これは、ベルンシュタイン主義者について判断をくだすために……おのずから思い出されるものである(ベルンシュタインが、イギリスで「フェビアン派」を手本として自分の日和見主義を「育てあげた」のには、それなりの理由があるのだ)。「ここロンドンのフェビアン派は、出世主義者の徒党である。彼らは、社会変革の不可避的なことを見ぬくだけの分別はもっているのだが、この大事業を粗野なプロレタリアートだけにまかせておくことがとうていできず、そこで、ご親切にも自分で先頭に立とうとしているのだ。革命にたいする恐怖が彼らの根本原理である。彼らはとびきりの(par excellence)〝インテリゲンツィア〟である。彼らの社会主義は自治体社会主義である。すくなくとも今のところは、国民ではなくて自治体が生産手段の所有者になるべきだ、と言うのだ。ついで、この彼らの社会主義は、ブルジョア自由主義の、極端な、しかし不可避的な帰結であると説明される。そしてここから、自由主義者を敵として徹底的にたたかうのではなく、彼らをつきうごかして、しまいには社会主義にまで前進させようという戦術、したがって自由主義者をまるめこみ、『自由主義に社会主義をにじみこませる』戦術、自由主義者に社会主義的候補者を対立させるのではなく、この候補者を自由主義者に売りこみ、むりやりに、またはごまかしによって彼らにおしつける戦術が、生まれてくる。その場合、じつは彼ら自身がごまかされ、だまされているのか、でなければ、彼らが社会主義にたいして嘘をついているのだということには、もちろん彼らは気がつかない。

フェビアン派は一生懸命になって、ありとあらゆるがらくたとならべて、りっぱな宣伝文書もいくつかつくった。そして、じじつ、これはイギリス人がこの方面で果たした仕事のうちで最良のものである。しかし、階級闘争をあいまいにするという彼ら独特の戦術の段になるやいなや、たちまちくさったものになってしまう。マルクスとわれわれ全体にたいする彼らの熱狂的な憎悪も、またここからきている。――階級闘争がその理由なのだ。

この連中はもちろん、ブルジョアの支持者をたくさんもっていて、したがって〝たくさんのカネ〟をもっている」[三四]。

……

社会民主党内のインテリゲンツィアの日和見主義についての古典的評価

一八九四年。農民問題。エンゲルスは、一八九四年一一月一〇日の手紙にこう書いている。「大陸では、成功をおさめるにつれて、さらに大きな成功をもとめる欲望が強まっていて、文字どおりの農民狩りが流行になろうとしている。まずはじめにフランス人が、ナント〔のフランス社会党大会〕でラファルグの口をつうじて、資本主義がわれわれのためにやってくれている小農の没落を、われわれ自身が直接に介入して促進することは、けっしてわれわれの使命ではない（これは私が彼らに書きおくってやったことである）と宣言するだけでなく、さらに、われわれは小農を、国庫や高利貸や大地主から直接に保護しなければならない、と明言している。だが、われわれはこれには同調できない。それは、第一に愚かなことだし、第二にできない相談だからである。ところが、こんどはフランクフルト〔のドイツ社会民主党大会〕にフォルマルがやってきて、農民一般を買収しようと望むのだ。しかも、彼が上部バイエルンで相手としている農民は、ライン地方の借金を背負った小農とは違って、作男や作女を搾取し、家畜や穀物を大量に販売する中農や、独立の大農なのだ。原則全体を放棄しないかぎり、このようなことはやれるものでない。」(三四)

一八九四年一二月四日。……「じつに、じつに日和見主義的になってしまって、いまではほとんどありきたりの人民党とえらぶところのないバイエルン人たち（つまり、指導者の大多数と新入党者の多数のもの）は、バイエルン州議会で予算案に一括して賛成投票し、またことにフォルマルにいたっては、農民のあいだで扇動を組織したが、それは、上部バイエルンの大農――二五ないし八〇エーカー（一〇ないし三二ヘクタール）の土地の持主で、したがって賃金労働者なしには全然やっていけない連中――をひっかけるのが目的で、彼らの作男たちを獲得するためではなかった」。……

以上で明らかなように、マルクスとエンゲルスは、一〇年以上にわたって系統的に、たゆむことなく、社会主義内の日和見主義とたたかい、社会民主党内のインテリゲンツィア的俗物根性と小ブルジョア根性とを追及したのである。これはきわめて重要な事実である。ドイツ社会民主党がプロレタリアートのマルクス主義的政策と戦術の模範とみなされていることは、広範な大衆が知っている。しかし、マルクス主義の創始者たちが、この党の「右翼」（エンゲルスの表現）にたいしてどんなに不断のたたかい

をおこなわなければならなかったか、彼らは知っていない。エンゲルスの死の直後にこのたたかいが明るみに出たのは、偶然ではない。これは、ドイツ社会民主党の数十年にわたる歴史的発展の避けられない結果なのである。

そして、いまわれわれの眼前には、エンゲルスの（またマルクスの）忠告、指示、訂正、威嚇、訓戒の二つの方針が、とくに明らかに浮かびあがってくる。イギリス＝アメリカの社会主義者には、ふたりは、労働運動と融合するように、彼らの組織から狭い、こりかたまったセクト精神を駆逐するように、このうえなく根気よく呼びかけた。ドイツの社会民主主義者には、彼らは、俗物根性に、「議会主義的白痴病」（一八七九年九月一九日付の手紙にあるマルクスの表現）に、小ブルジョア的・インテリゲンツィア的日和見主義におちいらないように、このうえなく根気よく教えた。

わが国の社会民主主義的おしゃべり屋どもが、第一の種類の忠告については口やかましくしゃべりたてながら、第二の種類の忠告については口をとざし、ふれずにすましたのは、特徴的ではないか？ マルクスとエンゲルスの手紙を評価するさいのこのような一面性は、われわれロシアの社会民主主義者のなんらかの……「一面性」を語る最良の指標ではないだろうか？

現在、国際労働運動が深刻な動揺の兆候を示しているとき、日和見主義、「議会主義的白痴病」、俗物的改良主義のゆきすぎが、革命的サンディカリズムという反対のゆきすぎを呼びおこしているとき、――イギリス＝アメリカの社会主義とドイツの社会主義とにたいしてマルクスとエンゲルスがくわえた「訂正」の一般方針は、格別の重要性をおびてくる。

社会民主主義的な労働者党がなく、議会に社会民主党の議員がなく、選挙にも、新聞等にも、どんな系統的な、一貫した社会主義的政治活動もない国々、――このような国国ではマルクスとエンゲルスは、社会主義者にたいして、ぜひとも狭いセクト主義を根絶し、労働運動に合体し、それによってプロレタリアートを政治的にふるいたたせるように教えた。なぜなら、イギリスでもアメリカでも、一九世紀の最後の三分の一には、プロレタリアートはほとんどなんの政治的独立性も発揮しなかったからである。この国国の政治的舞台は――そこにはブルジョア民主主義的な歴史的課題はほとんどまったくなかった――、勝ちほこり、自己満足したブルジョアジーによって完全に占められていた。そして、労働者をあざむき、堕落させ、買収する技術にかけては、世界でこのブルジョアジーにならぶものはないのである。

イギリス＝アメリカの労働運動によせたマルクスとエン

ゲルスのこれらの忠告がすぐそのままロシアの条件に適用できると考えることは、マルクス主義の方法を解明するため、特定の国々の労働運動の具体的な歴史的特質を研究するために、マルクス主義を利用するのではなくて、ちっぽけな、分派的な、インテリゲンツィア的な利益のために、それを利用することである。

これに反して、ブルジョア民主主義革命が依然として未完成で、「議会的形式でかざられた軍事的専制主義」（マルクスが彼の『ゴータ綱領批判』のなかで用いている表現）が支配してきたし、いまなお支配している国、プロレタリアートがすでにずっと以前から政治に引きいれられていて、社会民主主義的な政治活動を遂行している国――このような国では、マルクスとエンゲルスは、労働運動の任務と範囲を議会主義的に卑俗化すること、それを俗物的にひくめることを、なによりも恐れたのである。

ロシアにおけるブルジョア民主主義革命の時期には、マルクス主義のこの側面を強調し、前面におしだすことが、次の事情によっていよいよわれわれの義務となる。すなわち、わが国では、多数の、「りっぱで」、資金の豊富な自由主義的ブルジョアの新聞が、プロレタリアートに、隣国ドイツの労働運動の「模範的な」忠誠ぶり、議会主義的合法性、謙虚さ、穏健を、口々に吹聴しているのである。

ロシア革命のブルジョア的裏切者どものこの欲得ずくの嘘は、偶然が生みだしたものでもなければ、カデットの陣営に所属するある元大臣または未来の大臣の、個人的な腐敗が生みだしたものでもない。それは、ロシアの自由主義的地主と自由主義的ブルジョアの深い経済的利害から生まれたものである。そして、この嘘、この「大衆の愚昧化」(„Massenverdummung"――一八八六年一一月二九日付の手紙のなかのエンゲルスの表現）とたたかうにあたって、マルクスとエンゲルスの手紙は、すべてのロシアの社会主義者のかけがえのない武器となるにちがいない。

自由主義的ブルジョアどもの欲得ずくの嘘は、ドイツの社会民主主義者の模範的な「謙虚さ」を人民に示している。これらの社会民主主義者の指導者であるマルクス主義理論の創始者たちは、われわれにこう語っている。

「フランス人の革命的な演説と行動とのおかげで、フィーレック一派」（ドイツ社会民主党国会議員団内の日和見主義的社会民主主義者たち）「の泣き言はいよいよもって無気力に見えるようになった」（ここで問題になっているのは、フランス下院における労働者党の形成と、フランスの急進主義者をフランスのプロレタリアートから分裂させたドカーズヴィルのストライキ[三三]のことである）。「そこで社会主義者取締法についての最近の討論のときには、ベーベ

ルとリープクネヒトが演説しただけで、しかしふたりとも非常によくやった。この討論によってわれわれは、もう一度まともな人たちのまえに顔をだせるようになった。これまではみながそうできたわけではなかった。だいたい、ことにあんなに多くの俗物的要素が」(国会に)「選出されたあとでは(たしかにこれはやむをえないことではあるが)、ドイツ人の」(国際社会主義運動にたいする)「指導権にたいして多少競争者が現われるほうがよろしい。ドイツでは、平穏無事な時代にはすべてのものが俗物的になる。だから、フランス人の競争という刺激は、絶対に必要である」と(一八八六年四月二九日付の手紙)。

これこそ、主としてドイツ社会民主党の優勢な思想的影響をこうむっているロシア社会民主労働党が、なによりもしっかりと身につけなければならない教訓である。

この教訓は、一九世紀最大の偉人たちの文通のどこか個個の箇所がわれわれに説いているものではなく、プロレタリアートの国際的経験にたいする彼らの同志的な、率直な、外交辞令やちっぽけな打算を知らない批判の全精神と全内容とが説いているものである。

マルクスとエンゲルスのすべての手紙が、じっさい、どれほどこうした精神に貫かれているかは、次にかかげる――なるほどいくらか個人的ではあるが、そのかわりきわめて特徴的な――一節によって見ることができる。(三三)

一八八九年にイギリスで、訓練のない、未熟練の平労働者(ガス労働者、ドック労働者、等々)の若々しい、新鮮な運動、新しい革命的精神にみちた運動が始まった。エンゲルスはそれに狂喜している。マルクスの娘の「タッシー」〔エリナー〕が彼らのあいだで扇動をやったのだが、エンゲルスは彼女のこの役割を有頂点になって強調している。一八八九年一二月七日に、彼はロンドンからこう書きおくっている。「当地で最もいまわしいことは、労働者の血肉に深くしみこんだブルジョア的な『お上品ぶり』である。社会的には、無数の、文句なしにみなから承認されている諸段階――その段階の一つひとつがそれ自身の誇りをもつとともに、それぞれの『長上』や『目上の者』にたいして生まれながら尊敬の念をいだいているのだ――への社会の区分が、はなはだ古く、しっかりと根をはっているので、ブルジョアはいまでもかなりやすやすと餌(えさ)で人を釣っているのである。たとえば、ジョン・バーンズが、はたして自分の階級のあいだの人気よりも、マニング枢機卿やロンドン市長や一般にブルジョアどもに人気があることのほうを、ひそかに誇りに思っていないか、私にはなんともいえない。またチャンピオン――退役中尉――は、数年まえにはブルジョア分子、とりわけ保守的な分子をまるめこみ、

坊主の教会大会で社会主義の説教をやったりした。そして、私が彼らのなかでもいちばんりっぱな男と思っているトム・マンすら、ロンドン市長閣下と昼食をともにするのだなどと吹聴したがるしまつである。これにフランス人を対比してみれば、革命というものがどんな役に立つかが、ともかくにもわかるであろう」。

注釈は不要である。

いま一つ例をあげよう。一八九一年にはヨーロッパ戦争の危険があった。エンゲルスはこの問題についてベーベルと文通した。そしてロシアがドイツを攻撃する場合には、ドイツの社会主義者は、ロシア人とも、またロシア人のどんな同盟者とも、必死に戦わなければならないだろう、という点でふたりの意見が一致した。「もしドイツがおしつぶされるなら、われわれもまたおしつぶされるだろう。他方では戦いは、それが最も有利にはこんだ場合には、革命的手段によらないかぎりドイツが自己を維持できないくらい、激しいものとなり、したがっておそらくわれわれが政権について、一七九三年を演ぜざるをえなくなるだろう」(一八九一年一〇月二四日付の手紙)。

一九〇五年におけるロシアの労働者党の「ジャコバン的」見とおしが非社会民主主義的なものだ、などと全世界にむかって叫びたてた日和見主義者諸君のご参考までに！

エンゲルスは、社会民主主義者が臨時政府に参加しなければならない可能性を、率直にベーベルに指摘したのである。

社会民主労働党の任務についてこのような見解をもっていたのであるから、マルクスとエンゲルスが、ロシア革命とその偉大な世界的意義とにたいして希望にみちた信頼にあふれていたことは、まったく当然である。この往復書簡のうちには、ほとんど二〇年間にわたって、ロシアの革命にこの熱烈な期待をかけていたことが見られるのである。

次にかかげるのは、[三三]一八七七年九月二七日付のマルクスの手紙である。東方の危機がマルクスを狂喜させる。「ロシアはもう長いあいだ変革の門口に立っていた。そのためのあらゆる要素は成熟している。けなげなトルコ人は、彼らの……打ちこんだくさびによって、爆発を数年もはやめた。変革は、規則どおりに(secundum artem)憲法遊びで始まるだろう。それから、ひとさわぎもちあがるだろう(il y aura un beau tapage)。母なる自然がわれわれにとくにつれなくあたらないかぎり、われわれはまだ生きているうちにこの祝祭を見られるだろう！」(このときマルクスは五九歳であった)。

母なる自然は、マルクスに、「この祝祭」を見るまで生きていることを許さなかったし、しかも、おそらくは許すことができなかったのである。しかし、彼は「憲法遊び」

を予言した、そして彼のことばはまるで第一国会と第二国会についてきのう書いたものであるかのように見える。ところで、「憲法遊び」に注意するように人民に警告するところこそ、自由主義者と日和見主義者にあのように憎まれているボイコット戦術の「生きた魂」ではなかったか。……

次は一八八〇年一一月五日付のマルクスの手紙である。彼はロシアで『資本論』がおさめた成功を喜び、また当時生まれたばかりの「黒い割替」派に反対して「人民の意志」派に味方している。前者の見解にふくまれる無政府主義的な要素を、マルクスは正しくつかんでいる。そしてマルクスは、将来「黒い割替」派のナロードニキが社会民主主義者に進化するなどとは、当時は知らず、また知るよしもなく、その痛烈きわまる風刺のあらゆる力を傾けて、「黒い割替」派を攻撃している。

「この諸君は、あらゆる政治的=革命的行動に反対なのだ。ロシアは、命がけの飛躍で無政府主義的=共産主義的=無神論的千年至福界に飛躍すべきだというのだ！そのときまでは彼らは、退屈きわまる空論主義によってこの飛躍を準備するわけだが、この空論主義のいわゆる原理なるものは、故バクーニン以来そのへんにごろごろころがっているしろものである」。

これからしても、マルクスが、一九〇五年とそれ以後の時期とのロシアにとって社会民主党の「政治的=革命的行動」がもつ重要性をどう評価したであろうかを知ることができる。*

* ついでながら、もし私の記憶ちがいでないとすれば、一九〇〇——一九〇三年に、プレハーノフかヴェ・イ・ザスーリチかが、私に、『われわれの意見の相違』や、ロシアのきたるべき革命の性格を論じたエンゲルスのプレハーノフあての手紙がある、と語った。そのような手紙があったのか、いまも無事にあるのか、そしてもはやそれを発表すべき時期ではないのか、正確に知ることは興味あることであろう。

次は、一八八七年四月六日付のエンゲルスの手紙である。「これに反して、ロシアでは危機がせまっているように見える。最近のいくつかの暗殺事件は、屋台の根太をあらかたふみぬいてしまった……」。一八八七年四月九日付の手紙——これも同じことを述べている。……「軍隊は、不満をもち、陰謀を企てている将校でいっぱいである。」（当時エンゲルスは、「人民の意志」派の革命闘争に感銘をうけて、将校に望みをかけており、一八年ののちあのように輝かしく発揮されたロシアの兵士や水兵の革命性をまだ見ていなかった。……）「……私は、事態が今年いっぱいもちこたえるとは思わない。いったん、ロシアでおっぱじまれば（losgeht）、万歳だ！」

一八八七年四月二三日付の手紙。「ドイツでは（社会主

義者の）迫害につぐに迫害をもってしている。ビスマルクは、いまではたしかにあますところ数ヵ月の問題でしかない革命がロシアに勃発するとき、ドイツがすぐさまその手本にならう（《losgeschlagen werden》〔火ぶたを切る〕）かもしれない場合にそなえて、万事をととのえておきたがっているようである」。

その数ヵ月は、はなはだ、はなはだ長いものになった。疑いもなく、眉をひそめ、額にしわをよせて、エンゲルスの「革命主義」を激しく責めたてるか、それとも老亡命革命家の古いユートピアをおおように鼻でわらう俗物どもが、いることだろう。

そのとおり、マルクスとエンゲルスは、革命が近いと判断した点で、革命の勝利（たとえば、一八四八年のドイツの）に希望をかけた点で、ドイツ「共和国」の問ぢかさを信じた点で（「共和国のために死ぬことこそ」とエンゲルスは、一八四八―一八四九年のドイツ国憲法戦役の参加者としての自分の気分を回想して、当時について書いている）、多くの誤りをおかし、またしばしば誤りをおかした。彼らが一八七一年に「南フランスを蜂起させ」ようとし、「そのために」彼らが（ベッカーは、自分自身と親友たちとをさして「われわれ」と書いている。一八七一年七月二一日付の手紙、第一四）「およそ人力にできるだけの活動をやり、犠牲をはらい、危険をおかした……」とき、彼らは誤っていた。同じ手紙にはこう書かれている。「もし三月と四月にわれわれがもうすこし資金をもっていたなら、われわれは南フランス全体を決起させ、パリのコミューンを救っていたであろう」（二九ページ）と。しかし、全世界のプロレタリアートを、ちっぽけな、日常の、瑣末な任務の水準以上に高めようとし、また実際に高めた、革命的思想の巨人たちのこのような誤りは、革命的虚栄のむなしさや、革命的闘争の無益なことや、反革命的な「立憲的」妄想の魅力をうたい、叫び、呼びかけ、語っている官許自由主義の低俗な知恵よりも、千倍もけだかく、壮大で、歴史的に価値多く、真実である。……

ロシアの労働者階級はこの誤りにみちた革命的行動によって、自由を獲得し、ヨーロッパに前進の衝撃をあたえるであろう。――そして、俗人どもにはその革命的無活動で誤りをおかさないことを自慢させておくがよい。

一九〇七年四月六日

エヌ・レーニン

一九〇七年に本書簡集（サンクト・ペテルブルグ、ペ・ゲ・ダウゲ出版社刊）に発表
全集、第五版、第一五巻、二二九―二四九ページ所収
邦訳全集、第一二巻、三六一―三八一ページ所収

全国民的革命の問題について

ある意味では全国民的な革命だけが、勝利をおさめることができる。このことは、革命の勝利のためにはこの革命のかかげる要求をめざすたたかいで住民の大多数を統一する必要があるという意味では正しい。この大多数は、あるいはことごとく一つの階級から成りたつことがあり、あるいはまた、いくつかの同様な課題をもったいろいろの階級から成りたつことがある。現在のロシア革命についても、それが全国民的革命としてのみ勝利しうるということは、もちろん、正しい、――革命の勝利のためには住民の大多数が闘争に意識的に参加することが必要であるという意味では。

しかし「全国民的」革命というはやりことばの条件つきの正しさは、これだけに尽きている。この概念からは、上述の（少数の組織された支配者にたいして勝つことのできるのはただ大多数者だけである）という、もともとわかりきったことのほかには、それ以上なんの結論も出てこない。だから、この概念を一般公式として、紋切型として、戦術の基準として用いることは、根本からまちがっているし、深く反マルクス主義的である。「全国民的革命」という概念は、ある一定の、限られた共通の課題において一致する、いろいろの階級のいろいろの利益を正確に分析する必要があることを、マルクス主義者に指示するものでなければならない。どういう場合にもこの概念は、ある革命の過程における階級闘争の研究をぼかしたり、忘れさせるのに役だつようなものであってはならない。「全国民的革命」の概念をこういうふうにつかうことは、マルクス主義を完全に放棄することであり、小ブルジョア民主主義者あるいは小ブルジョア社会主義者の卑俗な空文句に逆もどりすることである。

わが右翼の社会民主主義者は、しばしばこの真理を忘れている。彼らはまた、革命の前進とともに革命における諸階級の相互関係が変化することを、もっとよく忘れる。革命が真に前進するということはすべて、より広範な大衆が運動にくわわることであり、――したがって階級的利益の自覚が増大することであり、――したがって、政治的、党派的な色分けがいっそう明確になることであり、さまざま

な政党の階級的特色がいっそう正確にえがきだされることであり、——したがって、一般的、抽象的な、その抽象性のために不明確で漠然とした、さまざまな階級の政治的、経済的要求が、具体的な、正確に規定されたさまざまな要求によってますますおきかえられてゆくことである。

たとえばロシアのブルジョア革命が、あらゆるブルジョア革命と同様に、「政治的自由」、「国民の利益」という一般的なスローガンのもとで始まることは避けられない。しかもこれらのスローガンの具体的意義は、闘争の過程ではじめて、ただこの「自由」を実現することに、たとえば「民主主義」というような空虚なことばを確定的な内容でみたすことに実践的に着手するのにつれてはじめて、大衆にとっても、もろもろの階級にとっても明らかになってゆくのである。ブルジョア革命のまえには、またその初期には、プロレタリアートも、農民と都市の小ブルジョア分子も、自由主義的ブルジョアと自由主義的地主も、だれもかれも民主主義の名において行動する。階級闘争の過程ではじめて、多少とも長期にわたった革命の歴史的発展のなかではじめて、この「民主主義」をさまざまな階級がそれぞれ違って理解していることが、明るみにでてくる。それだけにとどまらず、おなじ「民主主義」の名においてそれぞれ違った経済的、政治的方策を要求している、さまざまな階級の利害のあいだに深いへだたりがあることが明るみにでてくるのである。

闘争の過程ではじめて、革命の発展のなかではじめて、ある「民主主義的な」階級または階層が、他の階級ほど遠くにすすむことを欲しないこと、またはすすみえないことが、明らかになる。また「共通の」(共通らしく見える)課題を実現するということをもととしながらも、その実現の方法をめぐって、たとえば自由や民主政治のあれやこれやの程度、その広さ、徹底の度合いをめぐって、農民に土地をあたえるやり方などをめぐって、激しい衝突がくりひろげられることが、明らかになる。

これらすべての忘れられた真理を、われわれが思いださせなければならなかったのは、最近二つの新聞のあいだでおこなわれた論争を読者に説明するためであった。その一方の『ナロードナヤ・ガゼータ』(三二)は他の一方の『ナーシェ・エーホ』(三三)に反対して、こう書いている。

「『住民が諸政党に色分けされたこと——第二国会選挙の期間におけるこの最も重要な政治的教訓、この最も重要な革命の政治的達成——は、地主とブルジョアジーの広範な層が右へ転向したことを全国的に、事実のうえで、まざまざと示した』と『ナーシェ・エーホ』は書いている。まったく、そのとおりである。しかし、エス・エル、

トルドヴィキ、エヌ・エスの『左翼』議員が各地方からもってきた気分と委任状は、現在、カデットの『立憲的幻想』が少なからず『人民』にしみこんでいること、『人民』が国会の独自的活動に過度の期待をかけていること、人民が国会を『保持する』ことに過度の配慮をしていることを、これまた『全国民的な規模でまざまざと示した』のである。『ナーシェ・エーホ』の執筆家たちはこの重要なことに気がつかなかった。彼らは、人民がだれを国会に送ったかに注意したが、なんのために送ったかには注意しなかった。しかしそうなると、『ナーシェ・エーホ』が、プロレタリアートに『全国民的任務』を無視するように勧告していることは、ブルジョア『社会』からだけでなく、また小ブルジョア的『人民』からも自分自身を孤立させるようにプロレタリアートに勧告することになるということを、同紙は承認しないであろうか？」

これは、きわめて教訓に富んだ、意味ぶかい議論で、日和見主義の三つの大きな誤りをあばきだすものである。すなわち、第一には選挙の結果と議員の気分とを対置させていることである。これは、人民の気分を議員の気分によってすりかえること、より深い、広い、基本的なものをすてて、より小さな、狭い、派生的なものに訴えることを意味する。* 第二にプロレタリアートの確固たる一貫した政治方針と戦術の問題を、あれやこれやの「気分」を考量するという問題によってすりかえている。第三には、――これが最も重要な点であるが――「全国民的革命」という俗流民主主義的な物神の名において、「小ブルジョア的人民」から「孤立」するぞといっておどしつけている。

＊「委任状」についていえば、われわれはこの論拠をまったく否認する。だれが、革命的な、また日和見主義的な要望書と委任状をかぞえているだろうか？ 革命的な要望書をのせたために、どれだけ多くの新聞が閉鎖されたか、だれか知らないものがあろうか？

はじめの二つの誤りはこれをできるだけ簡単に論じておく。選挙は大衆に刺激をあたえ、彼らの一時的な気分だけではなく、その深い利害をも示したのである。階級的利害(選挙のさいの政党の色分けに現われた）をすてて、一時的な気分に訴えるなどということは、マルクス主義者に全然ふさわしくないことであった。議員の気分は沈滞しているかも知れないが、大衆の経済的利害は大衆的闘争を呼びおこすことができるのである。だから「気分」を考量することはなにかの行動や、措置や、呼びかけなどの時機を決定するためには必要であるかもしれないが、プロレタリア

ートの戦術を決定するために必要となることとは、けっしてありえない。これと違った考え方をすることは、一貫したプロレタリア戦術を無原則的な「気分」への依存によってすりかえることを意味する。だが、問題はいつも方針のことであって、けっして「時機」のことではなかった。現在プロレタリアートが立ちなおったか、それとも（『ナロードナヤ・ガゼータ』が考えるように）立ちなおってはいないかは、行動の「時機」を考量するためには重要であるが、労働者階級の行動の戦術的方針を決定するためには重要でないのである。

第三の誤り、最も深刻な、最も重要な誤りは、社会民主主義者があるいは（同じことであるが）プロレタリアートが小ブルジョア的人民から「孤立する」という恐怖である。これはもうまったく見当ちがいの恐怖である。

エス・エル、トルドヴィキおよびエヌ・エスが実際にカデットに媚びへつらっているかぎり、ゴローヴィンへの投票からはじまって、有名な墓場のような沈黙の戦術などにひきつづいて、こういうことはきわめてしばしばあるし、またあったのであるが、――そのかぎりで、社会民主主義者は小ブルジョア的人民から自分自身を孤立させる義務がある。なぜなら、次の二つに一つだからである。すなわち、あるいは、小ブルジョア人民の動揺は、一般に小ブルジョアの動揺しやすい本性を示し、革命の苦しい困難な発展を示すものではあるが、革命の終結、革命の力の枯渇を意味しない（われわれはこう考える）。この場合、社会民主主義的プロレタリアートは、小ブルジョア的人民のありとあらゆる動揺とぐらつきから自分自身を孤立させることによって、この人民を闘争へと教育し、彼らに闘争の準備をさせ、その意識、決意、堅固さ、等々を伸ばさせる。あるいはまた、小ブルジョア的人民の動揺は、現在のブルジョア革命の完全な終結を意味する（こういう見解は誤っているとわれわれは考える。そして社会民主主義者のうちだれも率直に公然とはこの見解を擁護したものはない、――もっとも社会民主主義者の最右翼は、疑いもなく、こういう見解に傾いているのだが）。この場合にもやはり社会民主主義的プロレタリアートは、労働者大衆の階級意識をつちかい、次の革命にさらにいっそう計画的に、しっかりと、断固として参加する準備を彼らにさせるために、小ブルジョアジーの動揺（あるいは裏切り）から自分自身を孤立させる義務がある。

カデット的幻想がしみこんだ、小ブルジョア的人民から自分自身を孤立させることは、社会民主主義的プロレタリアートにとって、どちらの場合にも、またどんな場合にも、無条件の義務である。プロレタリアートは、どんな場合に

も、真に革命的な階級の強固な、一貫した政策を、おこなうべきであって、一般に全国民的任務とか、全国民的革命とかなどという、どんな反動的な、あるいは小市民的な作り話にもまごついてはならないのである。

諸勢力といろいろな不利な事情とのある組合せのもとでは、おそらくブルジョアおよび小ブルジョア諸層の圧倒的多数が一時、奴隷根性や、卑屈や、あるいは臆病に感染するであろう。これこそ「全国民的」臆病にちがいない。そして社会民主主義的プロレタリアートは、労働運動全体の利益のために、この臆病から自分自身を孤立させるであろう。

『プロレタリー』第一号、一九〇七年五月二日
全集、第五版、第一五巻、二七六―二八〇ページ所収
邦訳全集、第一二巻、四一一―四一六ページ所収

ボイコットに反対する
(社会民主主義的政論家の覚え書から)(三一二)

つい最近ひらかれた教員大会(三一三)――この大会では大多数がエス・エル党(八)の有数な一代表の直接の参加のもとに、第三国会のボイコットについての決議を採択した。社会民主党員の教員は、このような問題は超党派の職域的政治団体のなかでなしに、党大会または党会議で決定することが必要であると考えて、ロシア社会民主労働党の代表とともに、投票を棄権した。

第三国会をボイコットする問題は、こうして、革命的戦術の当面の問題として舞台に登場しているのである。エス・エル党は、この大会で同党代表のした演説から判断すると、すでにこの問題を解決してしまっている。もっともこの党の正式決定も、エス・エルから出た文献も、われわれはまだもってはいないが。社会民主党の内部では、問題

が提起されて、討議されているところである。

ではエス・エルはどのような論拠によって自分の決定を擁護しているであろうか？　事の本質上、教員大会の決議は、第三国会(三三)がまったく役に立たないことや、六月三日のクーデターをおこなった政府の反動性と反革命性や、新しい選挙法の地主的性格や、等々について述べている。* 第三国会の極端な反動性から、ボイコットといった闘争手段またはスローガンの必要性と正当性とがまるでひとりでに出てくるかのように、論証が組みたてられている。このような議論が役に立たないことは、どの社会民主主義者の眼にも一目瞭然である。なぜなら、ここには、ボイコットを適用しうる歴史的条件の検討が、まったく欠けているからである。マルクス主義の地盤に立つ社会民主主義者がボイコットの結論を引きだすのは、あれこれの機関の反動性の程度からではなく、現在すでにロシア革命の経験も示しているように、ボイコットとよばれる独特な手段を適用しうるような、特殊な闘争条件が現に存在していることからである。わが革命の二年間にわたる経験を考慮せず、この経験を熟考してもみないで、ボイコットを論じようとする人、そういう人は、多くのことを忘れてしまい、なにひとつ学びとらなかったというほかはない。そこでわれわれも、ボイコット問題の検討を、まさにこの経験の分析を試みることから始めよう。

* この決議の本文はこうである。「(一) 第三国会召集の基礎となっている新選挙法は、勤労大衆が今日までもっており、またあのように高価な代償をはらって獲得した、選挙権のわずかな分けまえさえも、彼らから取り上げている。(二) この法律は、最も反動的、特権的な住民層の利益のために、人民の意志をとくにあからさまに、乱暴に偽造したものである。(三) 第三次召集の国会は、その選挙方法とその構成からいって、反動的クーデターの産物となるであろう。(四) 政府は、国会選挙に人民大衆が参加することを利用して、人民はクーデターを承認したという意義を、この参加にあたえようとしている。全ロシア教員・国民教育活動家協会第四回代表者大会は、以上の点を考慮して、次のように決定する。(一) 第三次召集の国会とその諸機関との、どんな折衝をも拒否する。(二) 組織としては、直接にも、間接にも選挙に参加しない。(三) 組織としては、この決議に表明されている、第三国会とその選挙とにたいする見解を普及させる」。

一

ボイコットを適用するうえでの、わが革命の最大の経験は、疑いもなく、ブルィギン国会(三六)のボイコットであった。それぱかりでなく、このボイコットは、最も完全な、最も直接的な成功の栄冠をえたのである。そこで、われわれの

第一の任務は、ブルィギン国会のボイコットの歴史的条件を検討することでなければならない。

この問題を考察するにあたっては、ただちに二つの事情が前面にでてくる。第一に、ブルィギン国会のボイコットは、わが革命が立憲君主主義的な道へ（一時的ではあるが）移ってゆくことに反対するたたかいであった。第二にこのボイコットは、最も広範な、全般的な、強力な、急速な革命的高揚という情勢のもとでおこなわれた。

第一の事情に立ちいってみよう。あらゆるボイコットは、既設の機関を地盤とする闘争ではなく、その機関の発生、あるいはもっと広い意味でいえば、それの実現に反対する闘争である。だから、プレハーノフその他多くのメンシェヴィキのように、代議機関を利用することはマルクス主義者に必要だという一般論でボイコットに反対した連中は、そうすることで、たんに笑うべき空論主義をさらけだしたにすぎない。このように論じることは、争う余地のない真理を反復することによって、論争問題の本質を避けることを意味していた。マルクス主義者が代議機関を利用しなければならないことは、争う余地がない。ではこのことから、マルクス主義者は、ある条件のもとで既設の機関を地盤とする闘争ではなく、それの実現に反対する闘争に味方することはできない、ということになるだろうか？　いや、ならない。というのは、この一般論は、このような機関の発生に反対して闘争する余地がない場合にしかあてはまらないからである。ボイコット問題の論争点はまさに、このような機関の発生そのものに反対して闘争する余地があるかどうかということである。プレハーノフ一派は、ボイコットに反対する彼らの論拠によって、問題の提起の仕方そのものにたいする無理解をさらけだしたのである。

さきへすすもう。あらゆるボイコットは既設の機関を地盤とする闘争ではなく、この機関の実現に反対する闘争であるが、ブルィギン国会のボイコットは、それ以外になお、立憲君主制型の機関の全体系の実現に反対する闘争であった。一九〇五年は、ゼネラル・ストライキ（一月九日[四]以後のストライキの波）と軍隊の反乱（「ポチョムキン」[五]）の形をとった直接の大衆闘争の可能性が現にあることを、まのあたり示した。したがって大衆の直接の革命闘争は、事実であった。他方では、運動を革命的な（きわめて直接的な、狭い意味での）道から立憲君主主義的な道へうつそうと試みた八月六日の法律もまた、事実であった。この二つの道、すなわち大衆の直接の革命闘争の道と、立憲君主主義的な道との闘争は、客観的に避けられないものであった。いわば、革命の当面の進展の道をえらぶことがさしせまっていたのである。この場合、この選択を決定したものは、もち

ろん、あれこれのグループの意志ではなく、革命的階級と反革命的階級との力関係であった。ところでこの力は、闘争のなかでしか測定し、試験することができなかった。ブルィギン国会をボイコットせよというスローガンは、立憲君主主義的な道に反対して直接の革命闘争の道のために闘争するスローガンにほかならなかった。立憲君主主義的な道のうえでも、もちろん、闘争は可能であったし、可能だっただけではなく、不可避的でもあった。立憲君主主義を地盤としても、革命をつづけ、革命の新しい高揚を準備することが可能であったし、立憲君主主義を地盤としても、革命的社会民主主義派が闘争することは可能であり、また必須であった――一九〇五年にアクセリロードとプレハーノフが、あのように熱心に、またあのように不適当なときに証明しようとしたこのわかりきった真理は、依然として真理である。しかし、その当時歴史的に提起された問題は、それではなかった。アクセリロードまたはプレハーノフは「的はずれ」な議論をしていたのである。ことばをかえていえば、彼らは、その解決が闘争する諸勢力に歴史的にゆだねられていた問題を、ドイツの社会民主主義的教科書の最新版から取ってきた問題におきかえたのである。近い将来の闘争のための道をえらぶ闘争は、歴史的に不可避的にさしせまっていた。旧権力はロシアにおける最初の代議機関を召集するであろうか、そしてそのようにしてある期間（あるいは非常に短期間、あるいは比較的長期間）、革命を立憲君主主義的な道へうつすであろうか？　それとも人民が直接の急襲によって旧権力を一掃し――最悪の場合でも、ぐらつかせ――、革命を立憲的な道へうつす可能性を旧権力にあたえず、大衆の直接の革命闘争の道を（これまた、長期間か、短期間か）保障するであろうか？　アクセリロードとプレハーノフがその当時気づかなかったこうした問題こそ、一九〇五年の秋、ロシアの革命的階級のまえに、歴史的に現われたものである。社会民主党が積極的ボイコットを宣伝したことは、この問題を提起する一形態であり、プロレタリアートの党がそれを意識的に提起する形態であり、闘争の道をえらぶための闘争のスローガンであった。

積極的ボイコットの宣伝者であるボリシェヴィキは、歴史によって客観的に提起された問題を正しく理解していた。一九〇五年の一〇月―一二月の闘争は、実際に、闘争の道をえらぶための闘争であった。この闘争は、勝ったり負けたりした。すなわち、まずはじめには、革命的人民が勝利をおさめ、革命をただちに立憲君主主義的な軌道へうつす可能性を旧権力からうばい、警察的＝自由主義的な型の代議機関のかわりに、純然たる革命的な型の代議機関、すな

わち労働者代表ソヴェト、等々をつくった。一〇月—一二月の時期は、大衆の最大限の自由、最大限の自主的活動の時期であり、立憲君主制的な機関や、法律や、約束が人民の強襲によって一掃されたことを地盤として、また、旧権力がすでに無力化されていながら、人民の新しい革命的権力（労働者・農民・兵士代表ソヴェトその他）が、旧権力に完全にとって代わるほどにはまだ有力でなかった「権力空白期」を地盤として、労働運動が最大限にひろく、急速に発展した時期である。ところが十二月闘争は、問題を違った方向で解決した。すなわち旧権力が勝利し、人民の急襲を撃退し、自分の陣地を維持したのである。しかしもちろん、この勝利を決定的な勝利とみなす根拠は、その当時はまだなかった。一九〇五年の十二月蜂起は、一九〇六年夏の一連のばらばらな、部分的な軍隊反乱やストライキという形で、つづいていた。ヴィッテ国会(三三)をボイコットせよというスローガンは、これらの反乱を集中し、全般的なものにするための闘争のスローガンであった。

こうして、ブルィギン国会ボイコットにかんするロシア革命の経験を考察することから生じる第一の結論は、次のとおりである。すなわち、このボイコットの客観的な背景は、発展の当面の道の形態をめぐる闘争という、歴史によって日程にのぼされた闘争であり、ロシアで最初の代議機関の召集が、旧権力の手でおこなわれるか、それとも新しい、下から起こった人民権力の手でおこなわれるかをめぐる闘争であり、直接に革命的な道か、それとも（一時的ではあれ）立憲君主主義的な道かをめぐる闘争であった。

しばしば文献のなかに現われてきたし、この論題の討議のさいにはたえず現われてきている問題、すなわちボイコットというスローガンの単純さ、明白さ、「一本調子」の問題、おなじくまた発展のまっすぐな道とジグザグな道の問題は、以上と関連がある。人民が旧権力を直接に打倒するか、最もうまくいかない場合でも、それを弱らせ、無力にし、新しい権力機関を直接に創出すること——すべてこういうことは、疑いもなく、最もまっすぐな、人民に最も有益な道ではあるが、しかしそのかわり、最大の精力をも必要とする道である。力が圧倒的にすぐれている場合には、直接の正面攻撃によってでも勝つことができる。力が足りない場合には、まわり道、形勢観望、ジグザグ、退却、等々も必要なことがありうる。立憲君主主義的な道は、もちろん、まだ革命をすこしも取りのぞくものではなく、革命の諸要素を、間接的な仕方でやはり準備し、発展させるものではあるが、しかしこの道は、いっそう長期にわたる、ジグザグなものである。

メンシェヴィキの文献全体、とくに一九〇五年（一〇月

まで）のそれを赤い糸のように貫いているものは、ボリシェヴィキが「一本調子」だという非難であり、歴史のあゆむジグザグな道を考慮にいれるべきだという、ボリシェヴィキにたいする訓戒である。メンシェヴィキ文献のこの特徴は、馬は燕麦を食い、ヴォルガはカスピ海にそそぐという議論、つまり論争の余地のないことを反復して、論争されている事柄の本質をくだらないものでみたす議論の見本でもある。歴史が普通ジグザグな道をすすむということ、そしてマルクス主義者は、歴史のきわめてこんがらがった、気まぐれなジグザグを考慮にいれる道を心得ていなければならないということ、これは争う余地がない。しかしこの争う余地のないこととの反復は、この歴史そのものが、あいたたかう勢力にたいして、まっすぐな道をえらぶか、それともジグザグな道をえらぶかという問題の解決をせまっているとき、マルクス主義者はどうあるべきかという問題には、なんの関係もない。こういう事態が生じている瞬間、または時期に、歴史は普通ジグザグの道をすすむものであるという議論でお茶をにごすことは、まさに、「箱の中の男」[32]となり、馬は燕麦を食うものであるという真理の思弁にふけることを意味する。だが革命というものは、多くは、あいたたかう社会情勢の衝突が、比較的長期間にわたって一国がまっすぐな発展の道をとるか、ジグザグな道をとるかをえらぶという問題を、比較的短い期間に解決するという、まさにそのような歴史上の時期である。ジグザグな道を考慮にいれる必要があるとしても、やはりマルクス主義者は、大衆の歴史の決定的な瞬間には、まっすぐな道の望ましいことを彼らに説明しなければならないし、まっすぐな道をえらぶための闘争で大衆をたすけ、そのような闘争のスローガンをあたえ、等々する能力をもたなければならない。まっすぐな道ではなくジグザグな道を決定した歴史的な決戦が終わったあとで、まっすぐな道のために最後までたたかった人々を冷笑することができるのは、度しがたい俗物と、まったく愚鈍なペダントだけであろう。それは、一八四八年のマルクスの革命的スローガンや革命的一本調子にたいするトライチケのようなドイツの官僚的＝警察的歴史家たちの冷笑に類するものであろう。

歴史のジグザグな道にたいするマルクス主義の態度は、本質上、妥協にたいするマルクス主義の態度に似かよっている。歴史のジグザグな転換はみなひとつの妥協である。すなわち、新しいものを完全に否定するにはもはや力が足りない古いものと、古いものを完全に打ちたおすにはまだ力がたりない新しいものとの妥協である。マルクス主義は、妥協をやらないとちかうものではない。マルクス主義は、妥協を利用することが必要だと考える。しかしこのことは、

マルクス主義が生きた、行動する歴史的勢力として、全精力を傾けて妥協に反対してたたかうことを、すこしもこばむものではないのである。この矛盾と見えるものを会得できないものは、マルクス主義のイロハを知らないものである。

エンゲルスはかつて、ほかならぬブランキ派コミューン亡命者の宣言にかんする論文*（一八七四年）のなかで、妥協にたいするマルクス主義の態度をきわめてはっきりと、簡単明瞭に表明した。ブランキ派コミューン亡命者はその宣言で、どんな妥協をも許さないと書いていた。エンゲルスはこの宣言を嘲笑した。彼は言った、諸事情がわれわれに運命づける妥協（あるいは諸事情がわれわれに強制する妥協――私は、テキストと引きあわせることができないので心覚えで引用せざるをえないことを、読者におわびしなければならない）を利用しないとちかうことが問題なのではない。問題は、プロレタリアートの真の革命的目標をはっきり自覚すること、ありとあらゆる事情、ジグザグ、妥協をつうじて、この目標を追求する能力をもつことである、と〔全集、第一八巻、五二六―五二七ページ〕。

大衆にアピールするスローガンとしてのボイコットの単純さ、率直さ、明白さは、ただこの見地からだけ評価することができる。このスローガンのこれらすべての性質は、それ自体良いのではなく、ただ、このスローガンの適用される客観的情勢のうちに、発展のまっすぐな道をえらぶか、それともジグザグな道をえらぶかをきめる闘争の条件が、現に在存するかぎりでのみ、良いのである。ブルィギン国会の時期にこのスローガンが労働者党の正しい、唯一の革命的スローガンであったのは、それがきわめて単純で率直で明白なスローガンであったからではなく、歴史的諸条件がその当時、立憲君主主義のジグザグな道に反対して単純でまっすぐな革命的な道のための闘争に参加する任務を労働者党に負わせたからである。

そこでこういうことが問題となる。当時これらの特殊な歴史的条件が存在していたことをはかる基準は、どこにあるのか？　単純で率直で明白なスローガンを、たんなる空文句にしないで、現実の闘争に合致した唯一のスローガンにした、客観的情勢上の特殊性の主要な標識はどこにあるのか？　いま、この問題へうつってみよう。

* この論文はドイツ語の論集《Internationales aus dem Volksstaat》〔『「フォルクスシュタート」からとった国際問題論集』〕のなかに収録されている。ロシア語訳、『「フォルクスシュタート」からとった論文集』、「ズナーニエ」社版。

二

すでに終わっている（すくなくとも、その直接の形では終わっている）闘争をふりかえってみるときには、もちろん、その時代のさまざまな、たがいに矛盾する標識や兆候の総決算をすることとほどやさしいものはない。闘争の結末は、すべてを一挙に解決し、あらゆる疑問をきわめて簡単に取りのぞく。しかしいまわれわれに必要なのは、闘争以前の情勢を検討する助けになりうるような、現象の標識を規定することとである。というのは、われわれは歴史的経験の教訓を、第三国会に適用したいからである。すでにさきに指摘したように、一九〇五年のボイコットを成功させた条件は、きわめて広範で、全般的な、強力な、そして急速な革命的高揚であった。いまは、第一に、闘争のとくに強力な高揚とボイコットは、どう結びついていたか、第二に、とくに強力な高揚の特徴と顕著な標識は、どんなものであったか、を考察しなければならない。

すでに述べたように、ボイコットはあたえられた機関を基盤とする闘争ではなく、この機関の発生に反対する闘争である。上からあたえられる機関はすべて、すでに存在している権力、すなわち旧権力からしか生じることができない。したがって、ボイコットは、旧権力の打倒に直接にむけられたような、あるいは最悪の場合には、すなわち打倒のための攻撃力がたりない場合には、旧権力を弱らせて、この機関の創出を確保できないようにし、それを実現できないようにするような、闘争手段である。したがって、ボイコットが成功するには、旧権力と直接にたたかい、旧権力にたいして蜂起し、幾多の場合に大衆が旧権力に服従しないこと（このような大衆の不服従は蜂起を準備する一条件である）が必要である。もちろん、ボイコットは、旧権力の承認をこばむことであるが、もちろん、それは口さきではなく行動のうえでこばむことである。それは、諸組織のたんなる叫喚やスローガンとして現われるものではなく、旧権力の法律を系統的に破壊し、法律に違反してはいるが事実上存在する新しい機関を系統的に創出する、等々の人民大衆の一定の運動となって現われる。このように、ボイコットと広範な革命的高揚との結びつきは、自明である。すなわちボイコットは、所与の機関の組織形態を否認するのではなしに、この機関の存在そのものを否認する、最も断固たる闘争手段なのである。ボイコットは、旧権力にたいする直接の宣戦布告であり、直接の攻撃である。広範な革命的高揚がなければ、また大衆の激情がいわば古い合法性の堰をきっていたるところあふれださなければ、ボイコットが成

功することなど、論外である。

＊　本文のどこでも問題となっているのは、積極的ボイコットである。すなわち、旧権力のもろもろの計画に参加することをたんにさしひかえることではなく、この権力を攻撃することとである。ブルィギン国会をボイコットした時期の社会民主党の文献に通じていない読者には、社会民主党がその当時積極的ボイコットを率直に語り、それを消極的ボイコットに断固として対置したこと、いな、それればかりか積極的ボイコットを断固として武装蜂起と結びつけていたことを知らせるべきである。

一九〇五年の秋の高揚の性格と標識の問題にうつってみると、その当時、革命の大衆的な間断ない攻撃がおこなわれて、系統的に敵におそい、かつ圧迫したことが容易にわかるであろう。弾圧も、運動を弱めるどころか、ひろげていった。一月九日事件のあとには、ストライキの波、ルージ〔ポーランド〕のバリケード戦、「ポチョムキン」の反乱がつづいた。旧権力がもうけた合法的な枠は、出版物の分野、組合の分野、学園で、いたるところで系統的に破壊された、しかも「革命家」だけではけっしてなく、一般住民によって破壊されたのである。なぜなら、旧権力は実際に弱められていたし、老いぼれた手から手綱を実際にはなそうとしていたからである。もりあがる力をとくにくっきりと、誤りなく（革命的諸組織の見地からみて）示した指標は、革命家のスローガンが反響なしに終わらなかったばかりでなく、むしろ実生活に直接に立ちおくれていたということである。一月九日事件も、その後の大衆的ストライキも、「ポチョムキン」も、すべてこれらの現象は、革命家の直接の呼びかけの先をこしていた。革命家の呼びかけにたいして、大衆がこれを消極的にむかえたり、黙殺したり、または呼びかけられた闘争を拒否したりしたようなことは、一九〇五年にはひとつもなかった。このような情勢のもとでのボイコットは、嵐をはらむ大気におのずからつけくわわるものであった。このスローガンはその当時、なにものをも「考えだそう」とはしていなかった。それは、前進に前進をつづけ、直接攻撃への方向をとりつつある情勢の高揚を正確に、また忠実に定式化したにすぎない。反対に、「考えだそうとする人」の地位にあったものはわがメンシェヴィキである。彼らは、革命的高揚から身を避けながら、八月六日の詔書または法律というツァーリの空約束に夢中になり、立憲君主主義的な軌道へ転換するという公約を真にうけたのである。メンシェヴィキ（とパルヴス）はその当時、自分の戦術をきわめて広範で、強力な、そして急速な革命的高揚という事実のうえに打ちたてずに、立憲君主主義に転換するというツァーリの公約のうえに打ちたてていたのである！　このような戦術が、笑止千万な、あ

われむべき日和見主義となってしまったことは驚くにたりない。メンシェヴィキのすべてのボイコット論のなかでは、いま、ブルィギン国会のボイコットの分析、すなわち革命におけるボイコットの最大の経験の分析が用心ぶかく放棄されているのは驚くにたりない。しかし、革命戦術におけるメンシェヴィキの、このおそらく最大の誤りを承認するだけでは不十分である。革命的高揚を現実的なものにし、立憲君主主義への転換を警察の空約束にした客観的情勢にたいする無理解が、この誤りの根源であったことを理解する必要がある。メンシェヴィキが正しくなかったのは、彼らが主観的な革命的気分をぬきにして問題をとりあつかったからではなく、これらのえせ革命家たちの考えが客観的な革命的情勢に立ちおくれていたからである。メンシェヴィキの誤りのこの二つの原因は、とかく混同しやすいが、しかしマルクス主義者が、これを混同することはゆるされない。

三

ボイコットとロシア革命のある時期の特殊な歴史的諸条件との結びつきは、もう一つの側面からも考察しなければならない。一九〇五年の秋と一九〇六年の春の社会民主党のボイコット・キャンペーンの政治的内容はどんなものであったか？　このキャンペーンの内容は、もちろん、ボイコットということばを繰りかえすことでもなければ、選挙に参加しないように呼びかけることでもなかった。この内容は、専制の提案するジグザグなまわり道を無視する直接攻撃への呼びかけにつきるものでもなかった。それ以外に、いやこのような題目と同列にではなく、むしろボイコット扇動全体の中心には、立憲的幻想との闘争が立っていたのである。この闘争こそ、まことに、ボイコットの精髄であった。ボイコット論者の演説と彼らの扇動全体を思いおこしてみたまえ。ボイコット論者の最も重要な決議を一瞥してみたまえ。そうすれば諸君はこの命題が正しいことを納得するであろう。

メンシェヴィキには、かつてボイコットのこの側面を理解する可能性がなかった。彼らは、立憲主義の誕生期に立憲的幻想とたたかうことは、ばかげたことであり、無意味であり、「無政府主義」であるといつも思っていたのである。メンシェヴィキの文献(三七)のことはしばらく措くとしても、ストックホルム大会での演説のなかでも、とくに——記憶にのこっているところでは——プレハーノフの演説のなかでも、メンシェヴィキのこの見解は、はっきりと現われている(三八)。

一見したところ、この問題におけるメンシェヴィキの立場は、自分の隣人に馬は燕麦を食うものであると満足気に教訓をたれる人の立場と同様に、争う余地のないもののように実際に思えるかもしれない。立憲主義の誕生期に立憲的幻想との闘争を宣言するとは……はたしてこれは無政府主義でないのか？　これははたしてばかげたことではないのか？

　このような議論のなかで、たんなる常識をもっともらしく盾にとって問題を卑俗化することは、ロシア革命の特殊な時期にふれずにおき、ブルィギン国会のボイコットのことを忘れ、わが革命のとおってきた道の具体的な諸段階をすりかえて、過去から未来にわたるわが革命全体を立憲主義を生む革命として、一般的に示すことにもとづいているのである。これは、プレハーノフのように、弁証法的唯物論の方法を最大の感激をもって語っていた人々が、この方法をふみにじっている見本である。

　実際に、わがブルジョア革命は、全体としては、あらゆるブルジョア革命と同様に、結局は立憲制度を打ちたてる過程であって、それ以上のなにものでもない。これは真理である。これは、あれこれのブルジョア民主主義的な綱領、理論、戦術、等々のえせ社会主義的な見せかけを暴露するのに有益な真理である。しかし諸君は、労働者党はブルジョア革命の時代には、どのような立憲主義へ国をみちびいていかなければならないかという問題や、労働者党は革命の一定の時期には、一定の（すなわち共和制的）立憲主義をめざして、まさにどうたたかわなければならないかという問題において、この真理から利益をえることができるであろうか？　否、である。馬は燕麦を食うものであるという信念だけでは、適当な馬をえらんだり、馬に乗る能力をもつには不十分なように、アクセリロードとプレハーノフの御愛好の真理は、これらの問題についてあまり諸君を啓発することはないであろう。

　一九〇五年と一九〇六年はじめとに、ボリシェヴィキは言った。――立憲的幻想との闘争は、当面のスローガンとならなければならない。なぜなら、最も近い将来に勝利をおさめるのは、直接の革命闘争と完全な民主主義にもとづく代議機関――革命によって直接につくりだされる――というまっすぐな道か、それとも君主主義的憲法と「国会」型の警察的＝「立憲的」（括弧づきの！）機関というジグザグなまわり道か、という問題の解決を、客観情勢は、まさにいま、あいたたかう社会勢力に求めているからである、と。

　ほんとうに客観情勢がこの問題を提起したのか、それともボリシェヴィキが理論的ないたずらでそれを「考えだした」のか？　この質問にたいしては、いまではもうロシア

革命の歴史がこたえている。

一九〇五年の十月闘争こそ、革命が立憲君主主義的な軌道に転換するのに反対する闘争であった。一〇月―一二月の時期こそ、ドゥバソフやストルィピンの憲法のえせ立憲主義とは違って、プロレタリア的な、真に民主主義的な、広範な、大胆な、自由な、人民の意志をほんとうに言いあらわした立憲主義を実現する時期であった。ほんとうに民主主義的な（すなわち、旧権力とそれに結びついたいっさいの醜悪なものを完全に一掃した地盤のうえに存在する）立憲主義のために革命的に闘争するには、警察的＝君主主義的憲法で人民を誘惑することと、最も断固たる態度でたたかう必要があった。まさにこの簡単な事柄を、社会民主党内のボイコット反対論者たちは、どうしても理解できなかったのである。

いまやわれわれの眼のまえには、ロシア革命の発展上の二つの時期が、まったくはっきりと現われてくる。高揚期（一九〇五年）と衰退期（一九〇六―一九〇七年）がそれである。人民の自主活動や、住民のすべての階級の自由な、広範な諸組織が最大限にさかえ、最大限の出版の自由があり、人民が旧権力を、その諸機関と命令とを最大限に無視し、しかも、官僚主義的に承認されて、正式の法規や条例のなかに表現されている立憲主義がなにもないときに、すべてこういうことがなされた時期。それについで、ドゥバソフとストルィピンの徒が編纂し、ドゥバソフとストルィピンの徒が承認し、ドゥバソフとストルィピンの徒が擁護する「憲法」――ああ、なんという憲法だろう――が存在しているにもかかわらず、人民の自主活動、組織性、自由な出版、等々の展開が最も悪く、それがたえず衰退してゆく時期。

あとをふりかえってみて、いっさいがこのようにりっぱに、単純に、はっきりとわかっているいまでは、立憲君主主義的な軌道への情勢の転換に反対したプロレタリアートの革命闘争の正当性と必要性、立憲的幻想にたいする闘争の正当性と必要性をあえて否定しようとするペダントは、おそらく、一人もいないであろう。

いまでは、多少とも物の道理のわかった歴史家で、一九〇五年から一九〇七年秋までのロシア革命の歩みを、まさにこの二つの時期に、つまり「反憲法」（もしこういう表現が許されるなら）運動の高揚期と「立憲的」衰退期、人民が警察的（君主主義的）立憲主義なしに自由を獲得し実現した時期と、君主主義的「憲法」によって人民の自由が抑圧され、おしつぶされた時期とに、分けないような人は、おそらく一人もいないであろう。

いまや立憲的幻想の時期、第一国会と第二国会〔三〕の時期は、

われわれのまえにすっかり明らかになっている。そして立憲的幻想に反対した革命的社会民主主義者の当時の闘争の意義を理解することは、いまではもう困難ではない。しかし当時、一九〇五年と一九〇六年はじめには、ブルジョア陣営の自由主義者も、プロレタリア陣営のメンシェヴィキも、このことを理解していなかったのである。

ところで第一国会と第二国会の時期は、あらゆる意味で、またあらゆる点で立憲的幻想の時期であった。「どんな法律も、国会の承認を経なければ効力を発生しない」というおごそかな公約は、この時期にはやぶられなかった。したがって、憲法は紙のうえでは存在し、ロシアのカデット(三)のあらゆる奴隷根性をたえず感動させていたのである。ドゥバソフもストルィピンもこの時期には、ロシア憲法を旧専制に和合させ、順応させようとして、それを実地に試験し、応用し、ためしてみた。両者はこの時代の最も有力な人物と思われていた。ドゥバソフ氏とストルィピン氏はあらゆる手段で、「幻想」を現実に変えようと骨おった。だが、幻想は幻想であることがわかった。革命的社会民主主義派のスローガンの正しさは、歴史によって完全に立証された。しかし、「憲法」を実現しようと試みたのは、ドゥバソフやストルィピンの徒だけではない。憲法をほめたたえ、(第一国会でのローヂチェフ氏のように)下僕のように骨をおり、君主は責任を負うものではなく、君主をポグロムの責任者とみなすのは不遜なことだということを証明したのは、カデット的奴隷だけではない。いや、広範な人民大衆もまた、社会民主党の警告にもかかわらず、疑いもなく、この時期のあいだは多かれすくなかれ、まだ「憲法」を信頼し、国会を信頼していたのである。

ロシア革命の立憲的幻想期は、西ヨーロッパの多くの国民が往々ブルジョア民族主義や、反ユダヤ主義や排外主義などの物神に心酔しているように、全国民がブルジョア的物神に心酔していた時期であった、と言える。そして社会民主党だけがブルジョアの瞞着にかけられなかったし、この党だけが立憲的幻想の時代に、つねに、立憲的幻想とのたたかいの旗をたかくかかげていたことは、社会民主党の功績なのである。

さて、なぜボイコットは立憲的幻想とたたかう独特の手段になったのであろうか、という疑問がいま起こっている。ボイコットのうちには、一目見ただけですべてのマルクス主義者をいきなり本能的に反発させるような一つの特徴がある。選挙のボイコットは、議会主義をしりぞけることであり、それにはなにか消極的な拒否、棄権、回避と見な

いわけにはいかないようなものがある。ドイツ人だけを手本にしてまなんできたパルヴスが、一九〇五年の秋に、積極的ボイコットといっても、ボイコットはボイコットなのだから、なんとしてもまずいことだということを証明しようとして、激すれば激するほど失敗したとき、彼は、そうした見方をしていたのである……革命からなにひとつまなばず、ますます自由主義者に堕しつつあるマルトフは、いまになっても、こうした見方をしている。彼は、『タヴァーリシチ』(三)紙上に彼の最近の論文によって、革命的社会民主主義者にふさわしい仕方で問題を提起する能力さえもっていないことを証明している。

しかしボイコットが、マルクス主義者のいわば最も虫の好かないこの特徴をもっていることは、このような闘争手段を生んだ時代の特殊性で、完全に説明がつくのである。君主主義的第一国会、つまりブルィギン国会は人民を革命からそらせる義務を負っていた餌であった。この餌は、立憲主義の衣をまとった案山子(かかし)であった。だれもかれもが罠にひっかかろうとしていた。あるものは貪欲な階級的利害から、あるものは考えのたりなさから、ブルィギン国会の案山子に、ついでヴィッテ国会の案山子に、とびつこうとしていた。だれもが夢中になり、だれもが心から信頼していた。選挙に参加することは、普通の市民的義務の日常的な単純な遂行ではなかった。それは、君主主義的憲法の除幕式をおこなうことであった。それは、直接の革命的な道から、立憲君主主義的な道に転換することであった。

社会民主党はこのような時期には、全力をあげて、あらゆる示威力を発揮して、抗議と警告の旗をひるがえさなければならなかった。ところでこのことこそ、参加を拒否すること、自分も行かずに人民を呼びかえすこと、旧権力のつくった機関を基盤として働くのではなく、旧権力にたいして攻撃の叫びをなげかけることを意味したのである。全国民が心酔していたので、プロレタリアートの党である社会民主党は、この物神に抗議して、それを暴露する見解を、おなじように全国民に「表明」しなければならなくなり、この物神崇拝を体現していた諸機関の実現と全力をあげてたたかわなければならなかったのである。「立憲」君主制というブルジョア的＝警察的物神に全国民が心酔していたので、プロレタリアートの党である社会民主党は、

まさにこの点に、直接的な成功をおさめたブルィギン国会のボイコットだけでなく、見たところ失敗に終わったヴィッテ国会のボイコットも、完全に歴史的に正しかった理由がある。なぜそれが外見上の失敗にすぎなかったか、なぜ社会民主党は、わが革命の立憲君主主義的転換にたいする抗議を最後まで守りぬかなければならなかったかは、いまでは明らかである。この転換は、実際には袋小路への転

換であった。君主主義的憲法の幻想は、旧権力がこの「憲法」の廃止を準備するための序幕または看板であり、この準備のための装飾であり、眼をくらますものであった……

社会民主党は、「憲法」によって自由をおさえつけることにたいする自分たちの抗議を最後まで守りぬかなければならない、とわれわれは言った。この「最後まで」というのはどういう意味か？　それは、社会民主党が反対していたたかってきた機関が、社会民主党にさからって事実となるまで、つまり不可避的に（一定の期間の）革命の衰退、革命の敗北を意味する、ロシア革命の立憲君主主義的転換が、社会民主党にさからって事実となるまで、という意味である。立憲的幻想期は、妥協の試みであった。われわれはこの妥協と全力をあげてたたかったし、またたたかわなければならなかった。だが、われわれは、情勢がわれわれの意志に反して、またわれわれの努力にもかかわらず、われわれの闘争の敗北という犠牲によって、われわれに妥協をおしつけてきた以上、第二国会にはいらなければならなかったし、妥協を考慮しなければならなかった。どれだけのあいだ、考慮すべきかは、もちろん別問題である。

では、すべてこうしたことから、第三国会のボイコットについて、どういう結論がでてくるだろうか？　ひょっとすると、立憲的幻想期のはじめに必要だったボイコットが、この時期の終りにも必要だという結論であろうか？　それは、「類推社会学」の精神で「知恵遊び」をやることではあろうが、まじめな結論ではない。ロシア革命の初期に、ボイコットがもっていたような内容は、いまではもうボイコットのうちには、ありえない。立憲的幻想に注意するように人民に警告することも、革命が立憲君主主義の袋小路へ転換することに反対してたたかうことも、いまではできない。ボイコットのうちには、以前の精髄はありえない。たとえボイコットがおこなわれるにしても、それは、いずれにせよ別な意義をもつであろうし、それにはいずれにせよ別な政治的内容がもられるであろう。

それればかりではない。われわれが考察してきた、ボイコットの歴史的独自性は、第三国会のボイコットに反対する一つの考えをあたえている。立憲主義への転換の開始期には、全国民の注意が、不可避的に国会へ集中していた。われわれは、注意がこのように袋小路の方向へ集中されたことや人々の心酔と、ボイコットをもってたたかったし、またたたかわなければならなかったが、このような心酔は無知、知能の未発達、弱さ、または貪欲な反革命性の結果であった。いまでは、一般に国会に、または第三国会に全国民が夢中になるどころか、一般にいくらかでも広範に夢中になることとさえ、問題にもなりえないのである。この面か

らいって、ボイコットは必要ではない。

四

このように、ボイコットを適用しうる諸条件は、疑いもなく、そのときの客観情勢のうちにもとめるべきである。この見地から、一九〇七年の秋と一九〇五年の秋とを比較してみれば、いまただちにボイコットを宣言する根拠はないという結論に達せざるをえない。革命的なまっすぐな道と立憲君主主義的な「ジグザグ」との相互関係の観点からも、大衆の高揚の観点からも、立憲的幻想との闘争という特殊な任務の観点からも、現在の情勢は、二年まえのそれとはきわめて、はっきりと異なっている。

その当時、歴史の立憲君主主義的転換は警察の空約束以上のものではなかった。いまでは、この転換は事実となっている。この事実を端的に認めようとしないのは、笑止にも真実を恐れることであろう。だが、この事実を承認したからといって、ロシア革命は終わってしまったと認めるのは誤りであろう。そうではない。こういう結論をだす論拠は、まだない。マルクス主義者は、客観的情勢がそれを命ずる場合には、発展の革命的なまっすぐな道のためにたたかう義務があるが、しかしそれは、くりかえして言うが、すでに事実上きまったジグザグな転換を考慮にいれてはならないという意味ではない。この面からみれば、ロシア革命の歩みは、もうすっかりきまっている。革命のはじめには、短期間ではあるが、異常に広範な、めざましくも急激な高揚の線が見うけられた。ついで、一九〇五年の十二月蜂起からはじまって、非常に緩慢ではあるが、しかしたえまない衰退の線が、われわれのまえに現われた。まずはじめに、大衆の直接的な革命闘争期、ついで立憲君主主義への転換期がきたのである。

これは、あとの転換が最後の転換であるという意味であろうか？　革命は終わって、「憲法」期が始まったという意味であろうか？　新しい高揚を期待する理由も、それを準備する理由もないという意味であろうか？　われわれの綱領の共和主義的性格を投げすてる必要があるという意味であろうか？

けっしてそんなことはない。そのような結論を引きだすことができるのは、手あたりしだいの論拠で、奴隷根性とへつらいとを弁明しようとするわがカデットのような、自由主義的俗物だけである。そうではない。それはただ、われわれの綱領の全部とわれわれの革命的見解のすべてを擁護するにあたっては、われわれは直接の呼びかけを、そのときの客観的情勢に合致させなければならないことを意味

するにすぎない。革命が避けられないことを説き、あらゆる点で系統的に、たえず可燃物を蓄積し、この目的からわが革命の最良の時代の革命的伝統を大事に守り、そだてあげ、この伝統から自由主義的寄生虫どもを一掃すると同時に、われわれは、日常的な立憲君主主義的転換のうえで、日常的に活動することをこばむものではない。ただそれだけのことである。われわれは、新しい広範な高揚を準備しなければならないが、しかし、ボイコットのスローガンに、向うみずにつきまとう根拠はなにもないのである。

すでに述べたように、ボイコットはロシアでは一定の時期には積極的ボイコットとしてのみある意味をもつことができる。それは選挙に参加することから消極的に遠ざかることではなくて、直接攻撃という任務のために、選挙を無視することなのである。この意味でのボイコットは、不可避的に、最も精力的な、断固たる攻撃への呼びかけに等しい。現在、広範で全般的な高揚――それなしにはこのような呼びかけは意味がない――が現にあるであろうか？　もちろん、ないのである。

一般に「呼びかけ」についていえば、この点では、いまの情勢と一九〇五年秋の違いは、とくにはっきりとしている。あの当時は、すでに指摘したように、まる一年間、呼びかけにたいして大衆が沈黙をまもっているようなことはなかった。大衆的攻勢のエネルギーは、諸組織の呼びかけに先んじていた。いま、われわれは、革命の休止期にあり、いくら呼びかけても、大衆のあいだで反響を呼びおこさなかった。ヴィッテ国会を一掃せよという呼びかけ（一九〇六年のはじめ）、第一国会の解散（一九〇六年夏）後の蜂起への呼びかけ、第二国会の解散と一九〇七年六月三日のクーデターにこたえてたたかえという呼びかけがそうであった。これらの最近の文書について出されたわが中央委員会のリーフレット(三三)をとってみたまえ。そうすれば諸君は、このリーフレットのなかでは、各地の条件からみて可能な形（デモンストレーション、ストライキ、絶対主義の軍隊との公然たる闘争など）でたたかうようにという直接の呼びかけがあるのを見いだすはずであろう。それはことばによる呼びかけであった。キエフや黒海艦隊における一九〇七年六月の軍隊の反乱は、行動による呼びかけであった。どちらの呼びかけも、大衆的反響をなにも呼びおこさなかった。革命にたいする反動攻勢の最も明白な、直接の現われ――二つの国会の解散とクーデター――が、そのときに高揚を呼びおこさなかったとすれば、ボイコットの宣言という形でただちに呼びかけを繰りかえす根拠は、いったいどこにあるだろうか？　いまの場合ボイコットの「宣言」が空っぽな絶叫となる恐れがある、というのが客観的情勢である

ことは明らかではないか？　闘争がすすみ、ひろがり、成長し、四方八方からせまってくるとき、そのときこそ「宣言」は正当で必要なものであり、そのときこそ鬨の声をあげることは、革命的プロレタリアートの義務である。しかし、この闘争を考えだすことも、鬨の声だけでそれを呼びおこすことも、できるものではない。われわれがもっと直接的なきっかけによって試験した一連の戦闘的呼びかけが無効なことがわかったときは、われわれは当然、戦闘的呼びかけの実現される諸条件がなければその意味をもたないスローガンを「宣言」するためには、なにか重大な根拠をさがしもとめなければならない。

社会民主主義的プロレタリアートに、ボイコットのスローガンの正しいことを説得しようと望む人は、かつて大きな光栄ある革命的役割を果たしたことばの、たんなるひびきに陶酔してしまってはならない。このようなスローガンを適用しうる客観的諸条件をふかく考え、このスローガンをかかげることはすでに、広範な、全般的な、力づよい急速な革命的高揚の諸条件が現存することを間接に前提としていることを理解しなければならない。しかし、現在、革命が一時休止している時期に、このような条件を間接に前提とすることはけっしてできない。このことを率直に、明瞭に理解し、自分自身にも、全労働者階級にもそれをはっきりさせなければならない。そうでなければ、ほんとうの意義を理解しないで、あるいは率直に腹蔵なく、ありのままに言う勇気をもたずに、大言壮語する人間の立場におちいるおそれがある。

五

ボイコットは、ロシア革命の最も多事多端な、最も英雄的な一時期の最良の革命的伝統の一つになっている。前述したように、一般にこの伝統を大事に守り、そだてあげ、自由主義的（および日和見主義的）な寄生者どもをそれから一掃することは、われわれの任務の一つである。この任務の内容を正しく規定し、起こりやすい曲解や誤解を取りのぞくために、いくらか立ちいってこの任務を検討することが必要である。

マルクス主義が、他のすべての社会主義理論から区別される点は、客観的な事態と客観的な進化過程とを分析する場合の完全な科学的冷静さと、大衆の——そしてまた、もちろん、あれこれの階級との結びつきをさぐりだし実現する能力をもつ個々の人物、グループ、組織、党の——革命的精力、革命的創造力、革命的創意の意義の最も断固たる承認とを、みごとに結合していることである。人類の発展

における革命的時期を高く評価することは、マルクスの歴史的見解の総体から生まれている。それによれば、いわゆる平和な発展の時期に徐々に蓄積された多くの矛盾が解決されるのは、まさにこのような時期なのである。社会生活の形態をさだめるうえに種々の階級が演じる直接の役割が最も強く現われ、また政治的「上部構造」の基礎がつくりだされるのはまさにこのような時期であり、そののちこの「上部構造」は一新された生産関係を基礎として長いあいだ存続する。そしてマルクスは、自由主義的ブルジョアジーの理論家とは違って、まさにこのような時期を、「正常の」道からの逸脱とか、「社会的疾患」の現われとか、ゆきすぎと誤謬の悲しむべき結果だとか考えずに、人間社会の歴史上最も生きいきとした、最も重要な、肝要な、決定的な瞬間であると考えたのである。マルクスとエンゲルス自身の活動においても、一八四八―一八四九年の大衆的な革命闘争に参加した時期が中心的なポイントとして目だっている。彼らがいろいろな国の労働運動や民主主義の運命を規定するにあたって出発点としているのは、この点である。彼らが、いろいろな階級の内的本性とその傾向とを、最もあざやかで純粋な形で規定するために、つねに立ちかえっているのは、この点である。彼らが、後年の、より小さな政治的組織、政治的団体、政治的任務、政治的紛争を評価しているのは、つねに当時の革命期の見地からである。ゾンバルトのような自由主義の思想的指導者が、マルクスの活動と文筆上の労作とのこの特徴を心の底から憎悪して、それを「亡命者の怨恨」のせいにしているのは、理由のないことではない。マルクスとエンゲルスの革命的世界観全体の不可分の構成部分であるものを、個人的な怨恨や、亡命生活の個人的な苦難のせいにしてしまうことは、警察的＝ブルジョア的な大学ふうの学問の南京虫どもに、なんと似つかわしいことではないか！

マルクスは、その手紙の一つで、たしかクーゲルマンへの手紙であったと思うが、ことのついでに、きわめて特徴的な、そしていま論じている問題の見地からみてとくに興味のある意見を述べている。彼は、ドイツでは反動派が、一八四八年の革命期の記憶と伝統を人民の意識からほとんど一掃することに成功した、と述べている。[三]ここには、一国の革命的伝統にかんする反動派の任務とプロレタリアート党の任務とが、あざやかに対比されている。反動派の任務は、これらの伝統を一掃して、革命を「狂気の沙汰」――ドイツ語の「das tolle Jahr」（「狂気の年」――これは、ドイツの警察的＝ブルジョア的歴史家たち、いな、さらにひろく、ドイツの教授ふう＝大学ふうの修史が、一八四八年をさすのにつかっている表現である）にたいするストル

ーヴェの訳語――としてえがくことである。革命期があのように豊富に、そして多種多様に生みだした闘争形態、組織形態、思想、スローガンを、国民にしいて忘れさせることーーこれが反動派の任務である。ちょうどイギリスの俗物根性の愚かな賛美者であるウェッブ夫妻が、イギリスの労働運動の革命的時期であるチャーティズムを、たんなる児戯、「若気の誤り」、まじめに問題にするにあたらない稚気、偶然の、変則的な逸脱であるかのように言いあらわそうとつとめているように、ドイツのブルジョア歴史家はドイツの一八四八年を鼻であしらっている。いまだに最も狂暴な憎悪を呼びおこしていることで、人類にたいするその影響の持続力と強さとをいまもって立証している、あのフランス革命にたいする反動派の態度もこれとおなじである。それとおなじように、わが反革命の勇士たち、とくにストルーヴェ、ミリュコフ、キゼヴェッテルとその同類のような、昨日の「民主主義者」出身の連中は、きそってロシア革命の革命的伝統を卑劣にも侮蔑している。旧権力の自由主義的奴僕どもを感歎させているあの一片の自由が、プロレタリアートの直接の大衆闘争によってたたかいとられてからまだ二年とたたないのに、はやくもわが言論界には、自由主義的（!!）と自称する潮流、カデットの出版物のなかでつちかわれ、わが国の革命、革命的闘争方法、革命的スローガン、革命的伝統を、なにか低級な、初歩的な、幼稚な、盲目的な、狂気じみた、等々のもの、……それどころか、犯罪的なものでさえあるように、えがきあらわすことに、没頭している、膨大な潮流が生みだされている。……ミリュコフからカムィシャンスキーまでは、il n'y a qu'un pas（ほんの一歩でしかない）！ これに反して、人民を、まず労働者・農民代表ソヴェトから追いだして、ドゥバソフ＝ストルィピン的国会に追いこみ、そしていまやこれをオクチャブリスト的国会に追いこもうとしている反動派の成功が、ロシアの自由主義の勇士たちには、「ロシアにおける立憲的意識の成長過程」と思われているのである。

わが革命を最も注意ぶかく、全面的に研究すること、その闘争形態、組織形態、等々の知識を大衆のあいだにひろめること、人民のあいだの革命的伝統をつよめること、ただひとえに革命闘争によってのみ、いくらかでも重大な、またいくらかでも恒久的な改善をかちとることができるという確信を大衆にうえつけること、「立憲的」へつらいと裏切りとモルチャリン根性の毒気で社会の雰囲気をけがしているひとりよがりの自由主義者たちのまったくの卑劣さをうまずたゆまず暴露すること、これらの義務は、疑いもなく、ロシアの社会民主主義者の肩にかかっている。自由

のための闘争の歴史では、十月ストライキや十二月蜂起の一日は、責任を負わない君主や立憲君主制についてのカデットの下僕的な国会演説の数ヵ月の百倍も多くの意義をもっていたし、またいまももっている。われわれは、生命にみち、内容に富み、その意義と結果の点で偉大なこれらの日々について、「立憲的」窒息とバラライキン＝モルチャリン的大成功との数ヵ月(三三)――わが党派的自由主義的出版物と超党派的「民主主義的」(おやおや！)出版物とは、ストルィピンとその従者たる検閲官や憲兵の好意的黙認をうけて、この大成功をひどく熱心にふれあるいているのだが――の知識よりも、はるかにくわしく、精細な、根本的な知識を人民にあたえるために、尽力しなければならない。われわれ以外には、だれもこうした尽力をするものはないであろう。

最良の革命的伝統を維持し、また現在の無味乾燥な、日常生活のわびしいどろ沼を、大胆な、公然たる、断固たる闘争の火花によって活気づけようとする革命家たちのほかならぬこの尊敬すべき念願によって、多くの人の心にボイコットへの共鳴が呼びおこされていることは、疑いない。しかし、まさに革命的伝統にたいする注意ぶかい態度が尊いものであるからこそ、われわれは、ある特定の歴史的時期の一スローガンを適用することによって、その時期の本質的諸条件の復活を助けることができるかのような見解に断固として抗議しなければならないのである。革命の伝統を保持すること、不断の宣伝・扇動のために、また旧社会にたいする直接の攻撃的闘争の諸条件を大衆に知らせるために、この伝統を利用する能力を養うことと、ある一つのスローガンを生みだし、それに成功を保証した諸条件の総体から切りはなしてそれを繰りかえし、根本的に違った諸条件にそれを適用することとは、全然べつの事柄である。

革命的伝統をあのように高く評価し、この伝統にたいする背教者的な、あるいは俗物的な態度を容赦なく責めたマルクスその人は、それと同時に、革命家に、ものを考える能力、あるスローガンをそのまま繰りかえす能力ではなく、古い闘争方法の適用条件を分析する能力を養うように要求した。フランスにおける一七九二年の「国民的」伝統は、おそらくは永久に、ある種の革命的闘争方法の模範としてのこるであろう。しかしこのことは、マルクスが、一八七〇年に、インタナショナルの有名な『呼びかけ』のなかで、この伝統を、違った時代の諸条件に誤ってうつしうえないように、フランスのプロレタリアートに警告することを妨げなかった。(三四)

われわれの場合も同様である。ボイコットを適用する条件を、われわれは研究しなければならない。ボイコットが

革命的高揚の時機にはまったく正当な、ときとすると欠くことのできない方法であるという思想（マルクスの名を濫用するペダントがなんと言おうと）を、われわれは大衆のあいだに植えつけなければならない。しかし、ボイコットを宣言する基本的条件であるこのような高揚が、現に存在しているかどうか、――この問題は、別個にこれを提起して、事実の真剣な分析にもとづいて解決することができなければならない。われわれの力でできるかぎり、このような高揚の開始を準備すること、そして適当な瞬間にはボイコットを拒否しないことは、われわれの義務である。しかし、ボイコットのスローガンを、あらゆる悪い――あるいはきわめて悪い――代議機関に、一般的に適用できると考えることは、絶対に誤りであろう。

あの「自由の日々」にボイコットを擁護し証明するために用いられた論拠をとってみれば、それらの論拠を今日の条件にそのまま適用できないことは、たちまち明らかになるであろう。

一九〇五年と一九〇六年のはじめにボイコットを主張したさい、われわれはこう言った、選挙への参加は、士気をひくめ、敵に陣地を引き渡し、革命的人民をまどわし、ツァーリズムと反革命的ブルジョアジーとの協定を容易にする、等々、と。これらの論拠の根本的な前提、かならずしも言明されていたわけではないが、しかし当時はつねに自明なこととして了解されていた前提は、どういうものであったか？　その前提は、あらゆる「立憲的」水路以外のところに、直接のはけ口をもとめ、またそれを見いだしていた、大衆の豊かな革命的精力である。その前提は、反動にたいする革命のたえまない攻勢である。そして、敵が総攻撃を弱めるためにわざと提供した陣地を占領し、守ることによって、この攻勢を弱めるのは、犯罪的であった。試みに、この根本的な前提の諸条件をぬきにして、これらの論拠を繰りかえしてみたまえ。そうすれば諸君は、自分のかなでる「音楽」全体の調子はずれ、基調の狂いを、たちどころに感じるであろう。

第二国会と第三国会とを区別することでボイコットを正当化しようとすることも、同様に見こみのない試みであろう。カデット（第二国会で人民を最後的に黒百人組の手に売り渡したところの）とオクチャブリスト（二七）との相違を、重大な、根本的なものと考えること、六月三日のクーデターによって引きさかれた悪名たかい「憲法」に、いくらかでも現実的な意義を認めること、こうしたことは、総じて、革命的社会民主主義の精神よりも、はるかに俗流民主主義の精神に合致している。われわれは、第一国会と第二国会の「憲法」は幻影にすぎない、カデットのおしゃべりは国

会のオクチャブリスト的本質を隠蔽するかけひきにすぎない、国会はプロレタリアートと農民の要求を満足させるにはまったく役に立たない手段である、とつねに言い、そう主張し、そう繰りかえしてきた。われわれにとっては、一九〇七年六月三日は、一九〇五年一二月の敗北の当然の、不可避的な結果である。われわれはいちども「国会」憲法の魅力に「心をうばわれた」ことはなかったから、いま塗りかえられ、ローヂチェフの空文句でかざられた反動から、むきだしの、公然たる、粗暴な反動へうつったからといって、べつに幻滅を感じるわけではない。おそらく、後者でさえ、あらゆる下卑た自由主義的ばかものどもや、彼らにまどわされた住民層を正気にかえらせるのに、はるかによい手段なのである。……

国会についてのメンシェヴィキのストックホルム決議と、ボリシェヴィキのロンドン決議とを、比較してみたまえ。[三三] 前者が、大げさな、美辞麗句を濫用した、国会の意義についての大言壮語にみちみちた、国会活動は偉大であるという意識でふくれあがったものであることが、おわかりになろう。後者は、簡単な、無味乾燥な、冷静な、ひかえめなものである。第一の決議は、社会民主主義と立憲主義との婚礼についての小市民的祭典の精神にみちみちている（「国民の内部から現われた新しい権力」、その他これとおなじお役所式虚偽の精神で書かれた文句）。後者は、ほぼ次のように言いかえることができる。いまいましい反革命がわれわれをこのいまいましい家畜小屋に追いこんだからには、われわれは、泣き言もならべず、大言壮語もせずに、この家畜小屋のなかでも革命のために活動するであろう、と。

メンシェヴィキは、まだ直接の革命闘争の時期に国会をボイコットから擁護することによって、言ってみれば、国会はなにかしら革命の道具になるだろうと、人民にやたらに約束したのである。そして、彼らはこの約束で、もののみごとに失敗した。これに反して、われわれボリシェヴィキが、もしなにかを約束したとすれば、それはただ、この国会は反革命の生みの子であった、いくらかでもほんとうによいものをそれに期待することはできない、という断言だけであった。われわれの見地は、これまでにみごとに確証されているし、こんごの諸事件によってもなお確証されるであろう、と保証できる。一〇月―一二月の戦略を新しい資料にもとづいて「訂正し」、繰りかえすことなしには、ルーシ〔ロシア〕に自由はやってこないであろう。

だから、第三国会は第二国会のように利用することはできない、それに参加する必要があることを大衆に明らかにすることができない、と私に言うものがあれば、私は次の

ように答えたい。もし「利用」ということを、革命の道具等々といった、なにかメンシェヴィキ的な誇大なものと理解するなら、そのときにはもちろんそれを利用することはできない。しかし、はじめの二つの国会も実際にはオクチャブリスト的国会への階段にすぎなかったではないか。それにもかかわらずわれわれは、単純で、ひかえめな目的(宣伝と扇動、出来事の批判と大衆にたいする解明)のためにそれらの国会を利用したし、またどんなに醜悪な代議機関でも、つねにこの目的のために利用することができるであろう。* 国会の演説は、どのような「革命」も呼びおこしはしないだろうし、また国会に関連した宣伝は、他のものと違った特別の性質をもっているわけではけっしてない。しかし、社会民主党がこの両者から得る利益は、ほかの印刷された演説や、他の集会でおこなわれる演説から得る利益よりも、時には多いことがあっても、少ないことはないであろう。

* 一九〇五年の『プロレタリー』[二〇](ジュネーヴ発行)にのったブルィギン国会のボイコットについての論文(『ブルィギン国会のボイコットと蜂起』)を参照せよ(本書一四二—一四九ページ)。そこには、われわれは総じて国会を利用しないと誓うものではないが、いまはわれわれの当面する別の任務、すなわち直接の革命的な道のために闘争する任務を解決する、と指摘してある。おなじくまた一九〇六年の『プロレタリー』(ロシア国内発行)第一号の論文『ボイコットについて』をも参照せよ(全集、第一一巻、一二八—一三六ページ)。そこでは、国会活動から得られる利益がひかえめなものであると強調されている。

われわれがオクチャブリスト的国会に参加することについても、おなじように単純なやり方で大衆に説明しなければならない。一九〇五年一二月に敗北し、またこの敗北を「訂正しよう」とした一九〇六—一九〇七年の数次の試みが失敗した結果、反動は不可避的にわれわれをますます悪いえせ立憲機関に追いこんだし、またこんごもたえずそうするであろう。われわれは、旧権力が存続しているかぎり、またこの権力が根こそぎされないかぎり、どんな良いものも期待できないとつねに繰りかえして語りながら、いつ、どこでも、われわれの信念を固持し、われわれの見解を主張するであろう。われわれは新しい高揚の条件を準備しよう。だが、この高揚がはじまるまでは、またそれをはじまらせるためには、高揚の条件のもとではじめて意味をもつようなスローガンを出したりせずに、いっそう根気よく活動することが必要である。

ボイコットは、プロレタリアートと革命的ブルジョア民主主義派の一部を、自由主義派ならびに反動派に対立させる戦術方針であると考えることもまた、正しくないである

う。ボイコットは、戦術方針ではなくて、ある特殊の条件のもとで有効な、特殊の闘争手段である。ボリシェヴィズムを「ボイコット主義」と混同することは、それを「ボエヴィズム」(三七)と混同するのと同じくらいまちがっている。メンシェヴィキとボリシェヴィキの戦術方針の相違は、一九〇五年の春に、ロンドンのボリシェヴィキ第三回大会とジュネーヴのメンシェヴィキ協議会のときに、すでに完全に明らかになって、原則的に相違する決議の形をとった。その当時は、ボイコットも「ボエヴィズム」も問題にはならなかったし、また問題になるはずもなかった。第二国会の選挙のときにはわれわれはボイコット論者ではなかったが、この選挙のさいにも、また第二国会の内部でも、われわれの戦術方針がメンシェヴィキのそれと、最も決定的に相違していたことは、だれにも知られていることである。われわれの戦術方針は、どの闘争方法、どの闘争手段についても、またどの闘争分野でも、たがいに相違してはいるが、なにか特殊な、ある方針に特有な闘争方法をつくりだすものではけっしてないのである。そして、もし第三国会のボイコットが、第一国会または第二国会にたいする革命的期待が破綻したということで、また「合法的な」、「強力な」、「恒久的な」、「真実の」憲法が破綻したということで正当化されるか、あるいはそれが実際にこうした破綻によって呼びおこされたものであるなら、それこそ最悪の種類のメンシェヴィズムであろう。……

六

　われわれは、ボイコットに賛成する最も有力な、ただ一つマルクス主義的な論拠を考察することを最後にまわした。積極的ボイコットは広範な革命的高揚がなければ意味がない。それはそうとしておこう。だが、広範な高揚は、広範でない高揚から発展するものである。ある程度の高揚の兆候は現に存在している。われわれはボイコットのスローガンを、かかげなければならない。というのは、このスローガンは、いま始まりつつある高揚を発展させ、おしひろげてゆくからである。

　これが、私の見るところでは、社会民主党員のあいだのボイコット賛成の傾向を多かれすくなかれ明白なかたちで決定している基本的な論拠である。そしてこの場合直接のプロレタリア的活動に最も接近している同志たちは、一定の型にしたがって「立て」られた議論からではなく、彼らが労働者大衆との接触からうけた印象の一定の総和から、出発しているのである。

　今日まで社会民主党の二つの分派のあいだに意見の相違

がなかったし、またなかったと思われる数すくない問題の一つは、わが革命の発展の長期にわたる休止の原因の問題である。「プロレタリアートは立ちなおらなかった」というのが、この原因である。そして実際に、十月＝十二月闘争は、ほとんど全部、プロレタリアートだけが負わなければならなかった。ただひとりプロレタリアートだけが、全国民のために、系統的に、組織的に、間断なく、たたかったのである。プロレタリア人口の比率が最も低い（ヨーロッパの尺度から見て）国で、プロレタリアートがこのような闘争のためにとうてい信じられないほど消耗しなければならなかったのは、驚くにあたらない。そればかりか、反動政府とブルジョア的反動派の連合勢力は、十二月事件後に、ほかならぬプロレタリアートにおそいかかり、しかもそれいらい、たえまなくおそいかかっているのである。警察の追及と処刑は一年半にわたってプロレタリアートを退廃させ、官営工場の「懲罰的」な閉鎖に始まり労働者にたいする資本家の陰謀にいたる系統的なロックアウトは、かつてなかったほど労働者大衆を窮迫させた。ところがいまでは、大衆のあいだには気分の盛りあがりの兆候や、プロレタリアートが力を蓄積した兆候がみられる、と社会民主党の一部の活動家は言っている。このかならずしもはっきりしない、またかならずしも捕えがたい印象は疑いもなく事業の活況が若干の工業部門で確認されるというもっと有力な論拠で補足されている。労働者にたいする需要が増大すれば、不可避的に、ストライキ運動はさかんになるにちがいない。労働者は、弾圧とロックアウトの時代にこうむった、莫大な損失のたとえ一部分でもとりかえそうと試みるにちがいない、というのである。最後に、第三の、最も有力な論拠は、疑問の余地のある、一般に予期されているストライキ運動をあげることではなくて、すでに労働者組織がとりきめている、最大の一ストライキをあげることである。一万人の繊維労働者の代表者たちは、すでに一九〇七年のはじめに自分の状態を討議し、この工業部門の労働組合の強化対策をさだめている。第二回目にはすでに二万人の労働者の代表者があつまり、一九〇七年七月に繊維労働者のゼネラル・ストライキを宣言することを決定した。この運動は、直接に約四〇万の労働者をまきこむことができる。この運動はモスクワ州、すなわちロシアにおける労働運動の最大の中心地であり、最大の商工業中心地であるところから発足しようとしている。ほかならぬモスクワでは、しかもひとりモスクワでは、大衆的な労働運動は、決定的な政治的意義をもった広範な人民運動の性格を最も急速におびるかもしれない。ところで繊維労働者は、労働者大衆全体のうちで、報酬が最も悪く、最もおくれた、これ

までの運動には最も僅かしか参加していない、また農民と最もかたく結びついている要素である。このような労働者が創意を発揮していることは、運動が以前とは比較にならないほど広範なプロレタリアートの層をまきこむであろうという証明にすることができる。ストライキ運動と大衆のあいだの革命的高揚との結びつきは、ロシア革命史上すでに何回も実証されているのである。

社会民主党の直接の義務は、ほかならぬこの運動に大きな注意と特別の努力を集中することである。まさにこの分野での活動は、オクチャブリスト的国会の選挙にくらべて、無条件に重要な意義をもつにちがいない。このストライキ運動を専制にたいする広範な総攻撃に転化させることが必要だという確信を、大衆のなかへ根づよくうえつけなければならない。ボイコットのスローガンこそ、注意を国会から直接の大衆闘争へふりむけることを意味するものである。ボイコットのスローガンこそ、新しい運動に革命的な政治的内容をもりこむことを意味するものである。

だいたい以上が、一部の社会民主主義者に第三国会をボイコットする必要を確信させている考え方である。これは、疑いもなくマルクス主義的なボイコット賛成論であって、特殊な歴史的諸条件の関連からむりやりに引きはなされたスローガンのたんなる繰りかえしとは違うのである。

しかし、この立論がどんなに有力であろうと、やはりそれは、私の意見では、われわれにいますぐボイコットのスローガンを採択させるにはまだ不十分である。この立論は、わが革命があたえた教訓に思いをいたすロシアの社会民主主義者には、総じて疑う余地のあるはずがないこと、すなわち、われわれはボイコットをやらないと誓うことはできないということ、適当な時機にはこのスローガンをすすんでかかげなければならないということ、われわれがボイコット問題を提起する仕方は、回避すべきか、回避すべきでないか*というふうな、自由主義的な、俗物的に愚かな、そして、あらゆる革命的内容を骨ぬきにした、問題提起とはなんの共通点もないということを強調しているのである。

* かつては社会民主党の出版物の寄稿者であり、いまでは自由主義新聞の寄稿者であるエリ・マルトフがしている自由主義的な議論の見本を『タヴァーリシチ』紙上で見よ。

社会民主党内のボイコット支持者が、労働者の気分の変化や、工業の活況や、繊維労働者の七月ストライキについて述べていることをすべて、証明ずみの、現実に完全に一致しているものと受けとることにしよう。これらすべてのことから、どういうことが出てくるであろうか？　われわれの眼のまえにあるのは、革命的意義をもったいくらかの部分的な高揚の始まりである。* われわれは、それを支持し

発展させ、それをまず一般的な革命的高揚に転化させ、ついで攻撃型の運動に転化させるために、あらゆる努力を傾ける義務があるであろうか？　無条件にある。これについては、社会民主主義者（『タヴァーリシチ』に協力しているものを除けば）のあいだに二つの意見はありえない。しかしボイコットのスローガンが、現在、この部分的高揚のはじめに、部分的高揚が全般的高揚に最後的に移行しないまえに、運動を発展させるために必要であろうか？　このスローガンは、現在の運動の発展を速めることができるであろうか？　それは別の問題である。そして私の意見では、この問題には否定的な答えをあたえなければならないであろう。

＊ 繊維労働者のストライキは、労働組合運動を革命運動から分離させる新しい型の運動だという意見がある。しかしわれわれは、こういう見解を黙殺する。なぜなら、第一に、複雑な現象のすべての兆候を悲観的に解釈することは、かならずしも「しっかり鞍にのって」いない多くの社会民主主義者をしばしばまよわせた、総じて危険なやり方だからである。第二に、もし繊維労働者のストライキのうちに、指摘されたような特徴があるならば、われわれ社会民主主義者は、疑いもなく、こうした特徴と最も精力的にたたかわなければならないからである。われわれの闘争が成功した場合には、問題は、したがって、まさにわれわれが提起しているようになるであろう。

　部分的な高揚を全般的な高揚へ発展させることは、第三国会とは関係なしに、直接の論拠とスローガンによってできるし、またしなければならない。十二月〔蜂起〕以後のもろもろの事件の進展全体は、君主主義的憲法の役割や、直接闘争の必要にたいする社会民主党の見解を一から一〇まで裏書きしている。われわれはこう言うであろう、——市民諸君！　もし諸君が、ロシアにおける民主主義の大業が、一九〇五年の一二月以後、カデットの諸君が民主主義運動のヘゲモニーをにぎっていた時期にたどったように、たゆみなく、ますます急速に下り坂になってゆくことを望まないのなら、もし諸君がそれを望まないのなら、始まりかけている労働運動の高揚を支持したまえ、直接の大衆闘争を支持したまえ。直接の大衆闘争がなければ、ルーシにおける自由の保証はないし、またありえないのである、と。

　こういう型の扇動は、疑いもなく、まったく首尾一貫した、革命的社会民主主義的な扇動であろう。これに、ぜひとも次のようにつけたさなければならないだろうか？　市民諸君、第三国会を信頼するな、われわれの抗議の証明として第三国会をボイコットしているわれわれ社会民主主義者を見てくれたまえ！と。

　現在の諸条件からみると、このようなつけたしは、必要

ではないばかりでなく、奇妙にすら聞え、ほとんど嘲弄のようにも聞える。そうでなくてさえ、だれも第三国会を信頼しているものはいないのである。すなわち、どんなものであれ、立憲的な機関でさえあればよいからルーシでつくろうという最初の試みである第一国会には、疑いもなく、人々が広範に心酔したが、民主主義運動をそだてることのできる住民層のあいだでは、第三国会という立憲的機関にたいするそのような心酔はないし、またあるはずもないのである。

一九〇五年と一九〇六年はじめには、広範な住民層の注意の中心になっていたものは、それがたとえ君主主義的憲法にもとづいているとしても、最初の代議機関であった。それは事実である。社会民主主義者は、それに反対してたたかい、最も明白に、これにたいする示威をしなければならなかった。

いまでは、そうではない。現在の特徴となっているのは、最初の「議会」にたいする心酔ではなく、国会を信頼することではなく、高揚を信じないことである。

こういう諸条件のもとで、ボイコットのスローガンを早まってもちだすと、運動を強めることにはすこしもならず、この運動のほんとうの邪魔ものを麻痺させることにもならないであろう。それればかりではない。そうすることによって、われわれの扇動の力を弱める恐れさえあるであろう。というのは、ボイコットは、すでに明確になった高揚にともなうスローガンであるのに、いま困ったことには、広範な人民層は高揚を信ぜずに高揚の力を見ていないからである。

まずはじめに、この高揚の力が実際に証明されるように配慮すべきである。そうすれば、この力を間接に表現するスローガンをかかげるひまは、いつでもあるだろう。だがそれにしてもまだ、問題がある。攻撃的な革命運動にとって、第三国会から……注意をそらす特別のスローガンが必要であろうか？　おそらく、その必要はないであろう。経験をつんでいない、まだ議会を見たことのない群集を実際に心酔させる力のある、なにか重要なものを黙殺するためには、黙殺する必要のあるものを、おそらく、ボイコットすべきであろう。しかし、今日の民主主義的な、あるいはなかば民主主義的な群集を全然心酔させる力のない機関を黙殺するためには、ボイコットをぜがひでも宣言するにあたらない。いまや問題の眼目は、ボイコットにあるのではなく、部分的な高揚を全般的な高揚へ、労働組合運動を革命運動へ、ロックアウトにたいする防衛を反動にたいする攻撃へ転化させるために、ただちに直接に努力することにある。

七

要約しよう。ボイコットのスローガンは、特殊な歴史的時期によって生みだされたものである。一九〇五年と一九〇六年のはじめには、客観的な事態は、あいたたかう社会勢力に、当面の道を選択する問題を提起し、その解決をせまっていた。すなわち、直接革命的な道をえらぶか、それとも立憲君主主義的転換をえらぶか、である。この場合、ボイコットの扇動の内容は、主として立憲的幻想との闘争にあった。ボイコットが成功する条件は、広範な、全般的な、急速な、そして強力な革命的高揚であった。

こうしたすべての点で、一九〇七年の秋の事態は、けっしてこのようなスローガンを必要としていないし、またそれを正当なものにしていない。

われわれは、日常の選挙準備活動をつづけながら、また最も反動的な代議機関にさえ参加することをあらかじめこばんだりせずに、一二月の敗北と、それにつづく自由の衰退、憲法にたいする侮辱との結びつきを人民に説明することに、われわれの宣伝・扇動全体をむけなければならない。われわれは、直接の大衆闘争なしには、このような侮辱は不可避的につづくし、またつよまるだろうという固い確信を、大衆に植えつけなければならない。

われわれは、ボイコットのスローガンが真剣に必要なものとなるかもしれない高揚の瞬間にも、このスローガンを適用しないと誓ったりはせずに、いまは全力をそそいで、労働運動のあらゆる高揚を、われわれの直接の働きかけによって、反動全体にたいする、この反動の基柱にたいする、全般的な、広範な、革命的な攻撃運動に転化するために努力しなければならない。

一九〇七年六月二六日（七月九日）に執筆
一九〇七年、小冊子『第三国会のボイコットについて』、モスクワ、に発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第一六巻、一―三六ページ所収
邦訳全集、第一三巻、三一―三七ページ所収

事項注

(一)『ロシアのプロレタリアートに訴える』は、日露戦争が始まってから一週間後に書かれ、単独のビラとして印刷されるとともに、ロシア各都市の党委員会に、即時増刷りして普及させるようにという指示をつけて送付された。クルプスカヤの当時の手紙によれば、ビラは、トムスク、モスクワ、オデッサ、ペテルブルグ、サマラ、サラトフ、ニージニーノヴゴロド、エカテリノスラフの各都市に送付され、キエフの学生によっても増刷りされた。さらに、一九〇四年三月五(一八)日付『イスクラ』第六一号にも転載された。日本では幸徳・堺の編集する『平民新聞』(一九〇四年五月一五日付)にほとんど全文、片山潜の主宰する雑誌『社会主義』(同年六月三日付)に全文訳載された。これは、現在までに確認されたかぎりで、レーニンが執筆した文章の日本における最初の翻訳である。二

(二)　日清戦争後の三国(ロシア、フランス、ドイツ)干渉をさす。三

(三)　ゼムストヴォ――一八六四年にロシアの中央諸県に設けられた地方自治体。ゼムストヴォの設置は、クリミア戦争の敗北後の社会的憤激と革命的攻撃の圧力によってツァーリズムがよぎなくされたブルジョア的改革の一つ。わずかな譲歩によって穏健な自由主義者を買収することを目的とするものであったが、事実上貴族に支配されていた。執行機関はゼムストヴォ参事会で、その議長は郡または県の貴族会長。知事と内務大臣の監督下におかれ、その権限は、産業、保健、教育、郵便、道路、土木、消防などの純地方的な問題に限られた。知事と内務大臣はゼムストヴォのいかなる決定も無効にすることができた。――一三、六一、一四三、一五四、二〇五

(四)　ニコライ二世の勅令――一九〇四年一二月一二(二五)日の元老院にたいする勅令のこと。ツァーリみずからが改革をおこなうことを述べたもの。同時に「政府通達」を出し、ゼムストヴォや都市機関が出すぎた行動をしないように警告した。一三

(五)　スヴャトポルク-ミルスキーの許可――一九〇四年に内務大臣スヴャトポルク-ミルスキーが、ゼムストヴォ議会の召集を許可し、検閲をいくらか緩和し、流刑中の自由主義的政治家を釈放した事実をさす。一四

(六)　プレーヴェの暗殺――一九〇四年七月一五(二八)日、社会革命党戦闘組織の判決により同党員サゾーノフが一九一二年以来の内務大臣兼憲兵司令官ヴェ・カ・フォン・プレーヴェを暗殺した。原因はプレーヴェのもとで頂点に達した弾圧政策にたいする不満にあった。このときレーニンは個人的テロルをいましめて「資本主義社会の大衆運動は階級的労働運動としてのみ可能である」ことを指摘した。一四

(七)　オスヴォボジデーニエ派――隔週刊雑誌『オスヴォボジデーニエ』(『解放』)を中心に結集した君主主義的ブルジョア自由主義者の一派。この雑誌は一九〇二―一九〇五年のあいだ、ペ・ベ・ストルーヴェの編集で国外で発行されていた。この一派は一九〇四年一月に「解放同盟」を結成、のちにロシアにおける主要なブルジョア政党――カデット党――の中核となった。一五、三三、六〇、一四三、一九六

(八)　社会革命党(派)(エス・エル)――一九〇一年末にさまざまなナロードニキ・グループの合同によって成立した、農民を基盤とする小ブルジョア政党。機関紙誌は『レヴォリュツィオンナヤ・

ロシア』(『革命ロシア』)と『ヴェーストニク・ルースコイ・レヴォリューツィー』(『ロシア革命通報』)。その見解はナロードニキ主義と修正主義との折衷であった。第一次革命の時期には、最も重要な闘争戦術として政治的テロルを広範に適用し、この目的で狭い「戦闘組織」を創設した。この時期に分裂して、右派はカデットに近い合法政党「勤労人民社会党」(エヌ・エス)をつくり、左派は半無政府主義的な「マクシマリスト」同盟をつくった。ストルィピン反動期には思想的、組織的に壊滅し、第一次世界大戦にさいしては社会排外主義の立場に立った。

二月革命後、メンシェヴィキ、カデットとともに臨時政府の主要な支柱となり、その指導者ケレンスキー、アウクセンチエフ、チェルノフは入閣した。十月革命後、左派は独立して、一時ボリシェヴィキと提携したが、一九一八年七月六日の武装反乱を契機として反ソヴェト闘争の道へすすんだ。エス・エルは外国干渉・内戦期には反革命陰謀にくわわり、ソヴェト国家と共産党の指導者にたいするテロルに狂奔した。内戦終結後もエス・エルは国の内外でソヴェト国家にたいする敵対行動をつづけた。一五、一〇五、一六〇、一九八、二〇三、三三八

(九) 『ナーシャ・ジーズニ』(『われわれの生活』)——一九〇四年一一月六(一九)日から一九〇六年七月一一(二四)日まで断続的にペテルブルグで発行された、カデット左派に近い自由主義的日刊新聞。一六、一六〇、一九八、二〇七

(一〇) 「秘密の」ゼムストヴォ大会——一九〇四年一一月六—九日にペテルブルグでひらかれたゼムストヴォ参事会の代表やその他のゼムストヴォ議員の大会のこと。この大会の直前に、ツァーリ政府は大会を一年延期するように命じた。しかし自由主義者に媚態を示していた内務大臣スヴャトポルク—ミルスキーは、ゼムストヴォ議員が「個人の住居でお茶をのみながら」話しあうことを黙認した。それでレーニンはこれを皮肉って「秘密の」と言ったのである。一七

(一一) ロストフのデモンストレーション——有名なロストフのストライキは一九〇二年一一月二(一五)日に始まった。ストライキはまもなく政治的デモに成長し、ほぼ三万人がこれに参加するにいたった。ストライキは一一月二五日(一二月八日)までつづいた。このストライキは、イスクラ派のドン委員会が指導した。『新しい事件と古い問題』(全集、第六巻、二七九—二八五ページ)参照。

レーニンがここで一連の南部のデモンストレーションと言っているのは、一九〇三年の南ロシアにおける政治的大衆ストライキとデモンストレーションのことで、これはザカフカーズ(バクー、チフリス、バトゥーム、チアトゥラ、ザカフカーズ鉄道)と、ウクライナの大都会(オデッサ、キエフ、エカテリノスラフ、ニコラーエフその他)をまきこんだ。これらのストライキ参加者は二〇万人をこえ、ロシア社会民主労働党の各地方委員会の指導のもとにたたかわれた。一九

(一二) 過程としての組織の「理論」——組織を自然発生的な過程と見、全国的な中央集権化された組織の必要を認めず、「自然発生的に形づくられる組織形態のまえにひざまずく」「経済主義者」の「理論」。『なにをなすべきか』(本選集、第二巻、九一—一八五ページ参照。一九、二一四

(一三) 『フペリョード』(『前進』)——ボリシェヴィキの非合法週刊新聞。一九〇四年一二月二二日(一九〇五年一月四日)から一九〇五年五月五(一八)日までジュネーヴで発行され、全部で一八号

出た。発行部数七千ないし一万部。この新聞の組織者、指導者はレーニン。編集局員としては、ヴェ・ヴェ・ヴォロフスキー、エム・エス・オリミンスキー、ア・ヴェ・ルナチャルスキーがいた。

『フペリョード』は、メンシェヴィキが第二回党大会後欺瞞的な方法で党の中央諸機関（中央機関紙、党評議会、中央委員会）を乗っ取った激しい党内闘争のなかで発行され、メンシェヴィキの日和見主義および組織破壊活動と妥協なくたたかい、地方党組織を結集して、第三回党大会を準備し、第一次ロシア革命が提起する諸問題を解明し、正しい戦術を立てるうえで、すぐれた役割を果たした。

『フペリョード』には、六〇以上にのぼるレーニンの論文や記事が発表された。いくつかの号――たとえば、一九〇五年一月九（二二）日の事件にあてられている第四号と第五号――は、ほとんどまったくレーニンひとりによって編集された。

『フペリョード』はロシア国内の多くの党組織と恒常的な結びつきをもっていた。『フペリョード』にのったレーニンの論文は、しばしばボリシェヴィキの地方機関紙に転載され、また単行のリーフレットや小冊子としても出版された。

第三回党大会（一九〇五年四―五月）の決定にもとづいて『フペリョード』は廃刊され、それに代わる党中央機関紙として『プロレタリー』が創刊された。二〇、四八、一五〇、二〇六

（四）ナロードニキ――一八六〇―七〇年代に出現したロシア革命運動の一派（語源――ナロード＝人民）。ゲルツェンによって基礎づけられ、チェルヌィシェフスキーらによって発展させられた。専制の打倒と地主の土地の農民への移譲をめざし、農民を革命の基本勢力と考え、ロシアでは資本主義を通らずに農民共同体を基盤として社会主義を実現できるとする空想的農民社会主義の立場に立っていた。ナロードニキ主義は当時における農奴制の広範な残存と資本主義の未発達を反映していた。農民を立ち上がらせるためにナロードニキは「ヴ・ナロード」（人民の中へ）の標語のもとに農村におもむいたが、そこで支持を得られなかった。しかし、初期のナロードニキは農民のために民主主義を要求し、ツァーリズムと真剣にたたかう革命的民主主義者であった。後期（一八八〇―九〇年代）のナロードニキはツァーリズムへの宥和政策をとり、富農の利益を代弁し、マルクス主義と頑強にたたかった。レーニンは『「人民の友」とはなにか』（一八九四年）（本選集、第一巻所収）でナロードニキを全面的に批判した。

一八六一年に創設されたナロードニキの組織「土地と自由」団は一八六四年に解散し、一八七六年にペテルブルグにつくられた「革命的ナロードニキ北部グループ」は一八七八年に「土地と自由」団と改称した。一八七九年の大会後、「人民の意志」派と「黒い割替」派とに分裂した。三、一六〇、二〇三

（五）「人民の意志」派――一八七九年八月、ナロードニキの革命団体「土地と自由」団が分裂して生まれた秘密政治結社。専制の打倒を直接の目標とし、普通選挙にもとづく「人民議会」の召集、民主的自由の宣言、農民への土地の移譲、労働者への工場の移譲等を綱領としてかかげた。だが、大衆路線を見いだすことができず、支配階級の個々人にたいするテロルを主要な闘争手段とし、一八八一年三月一日には皇帝アレクサンドル二世を暗殺したが、その後一八八七年にアレクサンドル三世の暗殺に失敗し（これにはレーニンの兄アレクサンドルが参加し、処刑された）、ツァーリ政府によって組織を破壊され、指導者は処刑された。その後ナロードニキの大多数はツァーリズムとの革命的闘争を放棄し、ツァーリ専制との和

解、協定を説教しはじめた。ナロードニキ主義のこれらの亜流——一八八〇年代と九〇年代の自由主義的ナロードニキ——は、富農の利益の代弁者となった。レーニンは「人民の意志」派の誤った空想主義的綱領を批判しながらも、ツァーリズムにたいするそのけだかい闘争を高く評価した（『ロシア社会民主主義者の抗議』（全集、第四巻、一八〇——一九四ページ）参照。三、三三

（一六） 合法マルクス主義——一九世紀の九〇年代に、ロシアで労働運動が高揚し、マルクス主義が普及しはじめると、一部のブルジョア・インテリゲンツィアはマルクス主義の衣をまといながらブルジョアジーに奉仕する議論をとなえはじめた。彼らはナロードニキ主義を批判し、ロシアの資本主義的発展の道を認めるとともに、資本主義の崩壊の不可避性を否認した。彼らは、マルクスの学説から最も主要なものを、すなわち、プロレタリア革命の学説、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の学説をすてて、マルクス主義をゆがめて宣伝した。彼らは、合法的な、すなわちツァーリ政府によって許された新聞や雑誌に自分たちの見解を発表したので、「合法」マルクス主義といわれた。三、五〇

（一七） ベルンシュタイン的日和見主義（または修正主義）——国際社会民主主義における反マルクス主義の一潮流で、マルクスの革命的学説をブルジョア自由主義の精神で「修正」しようとするもの。一九世紀末にドイツの社会民主主義者エドゥアルト・ベルンシュタインによってまとまった体系として主唱されたので、この名がある。ロシアでは、「合法マルクス主義者」、「経済主義者」、ブンド派、メンシェヴィキがベルンシュタイン主義の支持者であった。三、一〇三、一六〇、三三三

（一八） 『ラボーチャヤ・ムィスリ』（『労働者の思想』）——「経済主義者」の機関紙。一八九七年一〇月から一九〇二年一二月までペテルブルグ、ベルリン、ワルシャワなどで発行され、全部で一六号出た。カ・エム・タフタリョーフその他が編集にあたった。国際日和見主義のロシア的変種としての『ラボーチャヤ・ムィスリ』の見解の批判を、レーニンは新聞『イスクラ』に発表した諸論文や『ロシア社会民主党内の後退的傾向』（全集、第四巻、二七一——三〇六ページ）、『なにをなすべきか？』のなかでおこなっている。三、一〇三

（一九） 『イスクラ』（『火花』）——レーニンが創設した最初の全国的なマルクス主義的非合法新聞。第一号は一九〇〇年一二月一一日（二四日）ライプチヒで発行。つづく諸号はミュンヘンで、一九〇二年四月以後はロンドンで、一九〇三年の春以後はジュネーヴで発行。編集局はレーニン、プレハーノフ、マルトフ、アクセリロード、ポトレソフ、ザスーリチの六名。レーニンは事実上編集長であった。ロシアの多くの都市に「イスクラ」派に属するグループや委員会が組織された。『イスクラ』によって準備されたロシア社会民主労働党第二回大会（一九〇三年七——八月）がひらかれるときには、その地方組織の大多数が「イスクラ」派に属していた。第二回党大会は党建設に果たした『イスクラ』の功績を評価し、これを党の中央機関紙と宣言した。

第二回党大会ではレーニン、プレハーノフ、マルトフの三名から成る編集局が確認されたが、マルトフが拒否したので、第四六——五一号はレーニンとプレハーノフの編集で発行。その後プレハーノフがメンシェヴィキズムに移り、旧編集局員の全員復帰を要求したので、一九〇三年一〇月一九日（一一月一日）レーニンが編集局から脱退し、第五二号はプレハーノフ一人で編集された。同年一一月一三（二六）日、プレハーノフは独断で以前のメンシェヴィキ的メンバ

ーを編集局に補充した。こうして『イスクラ』は第五二号以後、メンシェヴィキの機関紙になった。レーニンが編集していた『イスクラ』を旧『イスクラ』、第五二号以後を新『イスクラ』という。新『イスクラ』は一九〇五年一〇月まで発行された。レーニンをかしらとするボリシェヴィキは新聞『フペリョード』を発行して、第三回党大会の招集のためにたたかった。三、三〇三、三究

(二〇) **スタロヴェルの決議**――ロシア社会民主労働党第二回大会で採択された、自由主義にたいする態度についてのスタロヴェル(ア・エヌ・ポトレソフ)の決議のこと。

第二回党大会では、この決議のほかにプレハーノフ、レーニンの決議も出され、この両者は同数の賛成票をえたので、二つとも決議として採択されたとみなされた。スタロヴェルの決議は、第三回党大会で廃棄された。三、六八

(二一) **新『イスクラ』編集局の有名な計画**――一九〇四年一一月にメンシェヴィキ的新『イスクラ』編集局が出した『党の諸組織にあたえる手紙』をさす。二四

(二二) **第三要素**――ゼムストヴォに医師、技術者、統計家、農学者、教師その他としてつとめていた人々のことで、彼らは、政府官庁にも、選挙によるゼムストヴォ機関にも属せず、ゼムストヴォ内で「第三要素」を形成していた。二五

(二三) **『ザリャー』(『あかつき』)**――マルクス主義的な学術=政治雑誌。一九〇一―一九〇二年のあいだ、シュトゥットガルトで『イスクラ』編集局によって発行された。『ザリャー』には、レーニンの次の論文が掲載された。――『折りにふれての覚え書』、『ゼムストヴォの迫害者たちと自由主義のハンニバルたち』、『農業問題と「マルクス批判家」』の最初の四章(『農業問題における「批判家」諸氏』)、『国内評論』、『ロシア社会民主党の農業綱領』。『ザリャー』は全部で四号、三冊発行された。三五、三六、三〇四

(二四) **オヴィディウス的変態**――古代ローマの詩人オヴィディウス(紀元前四三―後一七)の未完の作品集『変態』をさす。神力による変態についてのギリシア、ローマの神話を集めたもの。神、英雄、時代にたいする態度は風刺と皮肉に満ちており、のち八年間流刑に処せられた。二九

(二五) **『観念論の諸問題』**――一九〇二年に発行されたエス・エヌ・ブルガコフ、イエ・エヌ・トルベツコイその他の哲学論文集。二九

(二六) **『ノーヴイ・プーチ』(『新しい道』)**――一九〇三―一九〇四年にペテルブルグで発行された、退廃的傾向の「宗教と哲学の集い」の月刊機関誌。象徴主義者、求神主義者のメレジコフスキー、ギッピウスらが参加した。二九、二六三

(二七) **著書『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』**は、一九〇五年六―七月、ロシア社会民主労働党第三回大会と、同時にひらかれたメンシェヴィキの協議会とが終わったのちにジュネーヴで執筆され出版された。標題をつけるさい、レーニンは『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術(ロシア社会民主労働党第三回大会の決議と離脱した社会民主党員の協議会の決議とにかんする意見と覚え書)』と書いている。ロシアでは党中央委員会とモスクワ委員会とによって再刷され、発行部数は一万部に達した。

『二つの戦術』は、ペテルブルグ、モスクワ、ペルミ、カザン、チフリス、バクーその他の都市で非合法的に広められ、地下の党サークルや労働者サークルは本書を研究した。ツァーリの保安部のおこなった逮捕や家宅捜索のさいに、本書はロシアの各地で発見された。

ツァーリ政府は本書の押収、破棄命令を出したが、成功しなかった。本書は、一九〇七年一一月のなかばにペテルブルグで出版された論集『一二年間』の第一巻に収録された。三

(二八)『プロレタリー』——ボリシェヴィキの非合法週刊新聞。第三回党大会の決定によって創刊された中央機関紙。一九〇五年四月二七日（五月一〇日）、党中央委員会総会の決定によって責任編集者にはレーニンが指名された。ジュネーヴで一九〇五年五月一四(二七)日から一一月一二(二五)日まで発行された。全部で二六号。『プロレタリー』は旧『イスクラ』の方針を引きつぎ、ボリシェヴィキの新聞『フペリョード』との完全な継承性を維持した。レーニンは約九〇の論文と記事を書いた。

『プロレタリー』は、メンシェヴィキその他の日和見主義者、修正主義者と容赦なくたたかい、第三回党大会の諸決定を宣伝し、ボリシェヴィキの組織的・思想的団結をかためるうえに大きな役割を果たした。また一九〇五年の諸事件をあらゆる面から解明して、勤労者大衆を革命の勝利をめざすたたかいにふるいたたせた。同紙は地方の社会民主党組織に大きな影響をおよぼした。レーニンの論文のあるものは同紙から地方のボリシェヴィキ新聞に転載され、またはリーフレットとして広められた。一九〇五年一一月のはじめ、レーニンがロシアに出発してからまもなく、同紙は停刊になった。三、一八六、三五一

(二九) 過程としての蜂起——蜂起は革命の過程で自然発生的に起こるもので、蜂起の組織的、技術的準備は必要ないとするメンシェヴィキの見解。過程としての戦術、過程としての組織と同じ思想的根源に立つもの。蜂起問題における大衆追随主義。三

(三〇) 戦艦「ポチョムキン」(「ポチョムキン－タヴリチェスキー公」)号の反乱は、一九〇五年六月一四(二七)日に始まった。反乱をおこした水兵は、当時ゼネストの起こっていたオデッサに艦を回航した。しかし、オデッサのボリシェヴィキはあいつぐ逮捕で弱体化し、統一がとれていなかったし、メンシェヴィキは武装蜂起に反対していたので、反乱水兵は有効な支援を得られなかった。ツァーリ政府は、軍艦数隻を討伐に派遣したが、乗組員は仲間に発砲することを拒否した。『ポチョムキン』号は、一一日間海上をさまよったあげく、食糧と石炭がなくなり、ルーマニア当局に降伏せざるをえなかった。水兵の大多数は国外に残った。帰国したものは逮捕されて裁判に付された。こうして反乱は不成功に終わったが、軍隊での最初の革命的大衆行動として、専制にたいするたたかいの発展に大きな足跡を残した。三、三六、三〇

(三一) 社会革命党（エス・エル）の綱領は、一九〇五年一二月二九日から一九〇六年一月六日までフィンランドでひらかれた第一回大会で採択された。三

(三二) アキモフ主義——「経済主義」と同じ意味。メンシェヴィキの最右翼、「経済主義」の代表者ヴェ・ペ・アキモフの名による。三

(三三) ロシア社会民主労働党第三回大会は、一九〇五年四月一二—二七日（四月二五日—五月一〇日）に、ロンドンでひらかれた。大会はボリシェヴィキによって準備され、レーニンの指導のもとにおこなわれた。メンシェヴィキは大会に出席するのを拒否して、同時にジュネーヴで別個に独自の協議会をひらいた。したがって、この大会は最初のボリシェヴィキだけの大会であった。

大会には三八名の代議員が出席、二四名は議決権を、一四名は評議権をもっていた。

大会は、ロシアで展開中の革命の根本問題を検討し、プロレタリアートとその党の任務をさだめた。大会で審議された問題は、組織委員会の報告、武装蜂起、変革前夜の政府の政策にたいする態度、臨時革命政府、農民運動にたいする態度、党組織内の労働者と知識人との関係、党規約、党から脱落した部分にたいする態度、非ロシア民族の社会民主主義組織にたいする態度、自由主義者にたいする態度、エス・エルとの実践的協定、宣伝と扇動、中央委員会と地方委員会代表との報告その他であった。

大会で審議されたすべての基本問題についてレーニンは決議案を書き、ほとんどすべての問題について報告または演説をおこなった。大会は、ブルジョア民主主義革命における党の戦略計画と戦術方針をさだめた。すなわち、プロレタリアートはこの革命の指導者でなければならず、農民と同盟し、ブルジョアジーを孤立させて、革命を勝利へみちびくために、ツァーリ専制を廃止して、民主共和制をうちたて、農奴制のあらゆる遺物を一掃するためにたたかわなければならないとした。そして、党の重要かつ緊急な任務として、武装蜂起を組織する任務をかかげた。大会はこう指摘した。人民の武装蜂起が勝利すれば、臨時革命政府がつくられるにちがいない、この政府は反革命派の反抗を鎮圧し、党の最小限綱領を実行し、社会主義革命に移ってゆく条件を準備するにちがいない、と。

大会は党規約を再検討し、レーニンの定式にしたがって党員資格についての第一条を採択した。また中央機関の並立（中央委員会と中央機関紙）を廃止して、単一の指導機関である中央委員会をつくった、また中央委員会の権限と地方委員会にたいするその関係とを正確に規定した。

大会は、メンシェヴィキの行動、組織問題・戦術問題についての彼らの日和見主義を非難した。第二回党大会後『イスクラ』がメンシェヴィキの手に落ちて、日和見主義的方針をとっているので、第三回大会は、新しい中央機関紙『プロレタリー』を創刊することを中央委員会に委任した。第三回党大会は大きな歴史的意義をもっていた。三三、一七

（二四）　メンシェヴィキの『イスクラ』のこと。『イスクラ』は一九〇五年一一月の第五二号からはメンシェヴィキのものとなった。これは、それまでの旧『イスクラ』にたいして新『イスクラ』とよばれている。詳細は注一九参照。三四、一七

（二五）　党の離脱部分の協議会——第三回党大会と同時にジュネーヴでひらかれたメンシェヴィキの会議。参加者が少なく、九地方委員会の代表しか集まらなかったので、党活動家協議会と称した。

メンシェヴィキが革命の展開をはかる任務を提起しなかったことは、協議会の諸決定に現われている。すなわち、プロレタリアートのヘゲモニーと労農同盟の政策を否定し、ブルジョア民主主義革命の指導者は自由主義的ブルジョアジーであるべきだし、革命の勝利後には彼らが権力をにぎるべきだと考えた。協議会は、ブルジョアジーをおびえさせるからという理由で武装蜂起の準備に反対し、臨時革命政府に社会民主党代表が参加することに反対し、地主の土地を取り上げる革命的農民委員会の組織に反対して、土地問題の解決を憲法制定議会にまかせるべきだとした。協議会がつくった「組織規約」は、党を第二回党大会できまった党規約の線から組織上の分散性とサークル主義にひきもどすものであった。ジュネーヴ協議会は、メンシェヴィキが労働者階級にたいするブルジョアジーの影響力のお先棒になったことを立証した。三三

（二六）　ブルィギン委員会——一九〇五年二月一八日（三月三日）

のツァーリの勅令により国会の召集を準備する法律をつくるために内務大臣ア・ゲ・ブルィギンを議長として設立された特別委員会。大地主、反動的貴族の代表で構成された。この委員会がつくった国会設置法および国会選挙規則によれば、国会はツァーリの諮問機関にすぎず、しかも地主と大ブルジョアの代表者に絶対的優先権をあたえ、労働者は完全に選挙から除外され、農民も三段階選挙方式によってごくわずかしか代表を送れないようになっていた。四一二の議席のうち農民にあたえられたのは五一にすぎなかった。メンシェヴィキはこれを歓迎し、自由主義的ブルジョアジーとの協力を説いたが、ボリシェヴィキはブルィギン国会のボイコットを宣言し、武装蜂起と臨時革命政府の組織を主張した。

ブルィギン国会の選挙はついにおこなわれず、政府はその召集に失敗した。革命の高揚と一〇月の政治ストライキはブルィギン国会を一掃してしまった。ツァーリ政府は専制を救うために譲歩を余儀なくされ、一九〇五年一月一七日（三〇日）の詔書で、言論・集会・結社の自由、人身の不可侵を宣言し、立法機能をもった国会の開設を約束した。三四、六九、一四二、三三九

（三七） **立憲民主党**（カデット）——一九〇五年一〇月にオスヴォボジデーニエ派（解放同盟）を中核として創設された自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの主要な政党。民主主義をよそおい、「人民自由党」（副党名）とも自称して勤労大衆をあざむき、立憲君主制の形でツァーリズムを温存しようとした。第一次大戦期にはツァーリ政府の侵略的対外政策を支持し、二月革命にさいしては君主制の救済に努力し、ブルジョア的臨時政府では主導的地位を占めて、反人民的政策をおこない、十月革命後は反ソヴェト・反革命活動に参加し、外国干渉軍に協力、内戦終結後は国外に亡命して、反ソ活動をつづけた。その著名な幹部はミリュコフ、ムロムツェフ、マクラコフ、シンガリョフ、ストルーヴェ、ローヂチェフなど。三四、一四三、一九二、三四〇

（三八） **ミルラン主義**——ブルジョア政府に社会主義者が閣僚として入閣することを支持する主義。一八九九年フランスの社会主義者ミルランが最初にブルジョア政府に入閣したのでこの名がある。入閣主義とも言う。四一

（三九） **パリ・コミューン**——史上最初のプロレタリア独裁政府。一八七一年三月一八日から五月二八日まで七二日間、パリに存在した。広義にはプロレタリア独裁の最初の経験となった革命そのものをさす。四三

（四〇） **一月九日**（「血の日曜日」）——一九〇五年一月九日、僧ガポンが創設した「ペテルブルグ市ロシア工場労働者の集い」によって組織されたペテルブルグ労働者（一四万人以上）の冬宮への平和な請願デモにたいしてツァーリ政府の命令で軍隊が発砲し、冬宮前広場で死者一千人、負傷者二千人以上を出した事件。労働者集会における請願の審議にさいしてボリシェヴィキは、プロレタリアートは革命的闘争によってのみ自分の権利を獲得できることを説明し、請願に社会民主主義的要求を盛りこんだ。しかし、労働者のツァーリへの信頼が強かったので、請願デモをやめさせることができなかった。この事件はツァーリへの信頼を打ちくだき、全国に専制打倒の抗議ストライキをまきおこし（一月中のストライキ参加者四四万人）、一九〇五年革命の発端となった。四三、一三四、一七五、三三九、三三〇

（四一） **フランクフルト議会**——一八四八年革命にさいし、同年五月フランクフルト－アム－マインでひらかれたドイツの憲法制定国民議会。しかし、多数を占める自由主義的ブルジョアジーの臆病と

動揺、小ブルジョア的左翼の不決断と不徹底のために、議会は国の最高権力をその手におさめることを恐れ、一八四八―一八四九年のドイツ革命の基本問題で断固たる立場をとることができなかった。議会は、一八四九年六月、ヴュルテンベルク政府の軍隊によって解散させられた。四四

（四二）『新ライン新聞』――マルクスの編集で、一八四八年六月一日から一八四九年五月一九日までライン州の首都ケルンで発行された日刊新聞。『民主主義の機関紙』という副題をつけられ、封建的君主主義、ブルジョア自由主義と鋭くたたかったが、政府の圧迫、とくにマルクスのプロイセンからの追放によって停刊を余儀なくされた。四四

（四三）『ツィアルーデモクラート』（『社会民主主義者』）――一九〇五年四月七（二〇）日から一一月一三（二六）日まで、六号だけチフリスで発行されたメンシェヴィキのグルジア語新聞。『ゼムスキー・ソボールとわれわれの戦術』（同紙第一号）という論文は、同紙の指導者である、カフカーズのメンシェヴィキの指導者エヌ・ジョルダニアの書いたもの。四六、二七

（四四）ゼムスキー・ソボール――字義は「全国会議」で、一六―一七世紀に国政上の重要問題を解決するためツァーリが召集した一種の身分代表制国民議会で、専制君主に従属していた。一九世紀に自由主義者が人民代表議会の要求をあらわすスローガンとして、このことばをつかった。四六

（四五）「シポフ」的憲法――ゼムストヴォ運動の指導者、穏健自由主義者のデ・エヌ・シポフが作成した国家組織草案。革命の展開を制限すると同時に、ツァーリ政府からゼムストヴォへの若干の譲歩をかちとろうとして、シポフはツァーリの諮問に答える代議機関を創設しようと提唱した。こうした取引によって人民をあざむき、君主制を温存すると同時に、若干の政治的権利を獲得しようとしたのである。四七

（四六）黒百人組（チェルノソーテンツィ）――一九〇五年につくられた極反動的暴力団体――ロシア国民同盟、天使長ミハイル同盟をさす。大地主、大商人の指導のもとにルンペン・プロレタリア、小商人、手工業者出身者を集め、官憲の支持を受けて解放運動の弾圧、ユダヤ人迫害、革命家の暗殺などの暴力行為に従事した。そこから一般に極右翼が「黒百人組」とよばれるようになった。四七、一七三

（四七）『ルースカヤ・スタリナ』（『ロシアの往時』）――一八七〇年から一九一八年までペテルブルグで刊行された月刊歴史雑誌。政治家や文化人の回想記、日記、手記、手紙その他の記録類の発表に多くの誌面をさいた。五三

（四八）「黒い割替」――上からの地主的土地改革にたいして、下からの農民自身による土地改革――すべての土地の民主的再分配――を要求する一八七〇―八〇年代のロシア農民運動のスローガン。五七、一五六、二〇三

（四九）『ルースキエ・ヴェードモスチ』（『ロシア報知』）――一八六三年以来モスクワ大学の自由主義的教授やゼムストヴォ議員によってモスクワで刊行された新聞。穏健な自由主義的知識人の見解を代表。一八八〇―九〇年代には民主主義的作家（コロレンコ、サルトィコフ－シチェドリン、ウスペンスキーら）が執筆。一九〇五年からはカデット右派の機関紙。一九一八年、他の反革命新聞とともにソヴェト政府によって禁止された。六〇

（五〇）『スィン・オテーチェストヴァ』（『祖国の息子』）――自由主義的日刊新聞。一八五六年から一九〇〇年までペテルブルグで刊

行され、一九〇四年一一月に復刊。オスヴォボジデーニェ派や各種のナロードニキが寄稿。一九〇五年一一月一五（二八）日に社会革命党の機関紙になり、同年一二月二（一五）日に禁止された。六〇

（五一）『ナーシ・ドニー』（『現代』）――自由主義的日刊新聞。一九〇四年一二月一八（三一）日から一九〇五年二月五（一八）日までペテルブルグで発行されていた。一九〇五年一二月七（二〇）日に復刊されたが、二号しか出なかった。六〇

（五二）マルクス＝エンゲルス『共産党宣言』全集、第四巻、五〇八ページを参照。六〇

（五三）「箱のなかの男」――チェーホフの同名の短編小説の人物。あらゆる新しいものを恐れて、人々の生活から離れている硬直した人物。天気の日にも雨靴をはき傘をもって出てゆく、こっけいなまでに用心ぶかく、権力にたいして小心な中学教師。六一、二九四、三三

（五四）ジャコバン党（山岳党）――一八世紀末のフランス・ブルジョア革命で絶対主義と封建制度の廃止を強硬に主張した当時の最も革命的な一派。レーニンはロシア社会民主党内の革命的社会民主主義者を「プロレタリア的ジャコバン党」とよんだ。六七、一一

（五五）ジロンド党――一八世紀末のフランス・ブルジョア革命で革命と反革命とのあいだを動揺し、君主制との取引の道をすすんだ一派。レーニンはロシア社会民主党内の日和見主義的潮流を「社会主義的ジロンド党」とよんだ。六七

（五六）一九〇五年六月六（一九）日、ニコライ二世がゼムストヴォ議員の代表団を引見したことをさす。この代表団は、一九〇五年五月二四―二五日（六月六―七日）にモスクワで、貴族会長も参加して、ゼムストヴォ参事会と市議会との代表がひらいた会議で選出された。人民にかくれてツァーリと取引するブルジョアジーの裏切り的役割の評価を、レーニンは論文『ブルジョアジーの裏切りの第一歩』（全集、第八巻、五二五―五三八ページ）のなかでくだしている。六七

（五七）バシバズーク――元来はトルコ軍の不正規兵をさす。略奪と残忍で有名。そこから暴兵の意味に使われる。ここではツァーリの引見にさいして自分の白手袋をペトルンケヴィチに渡した近衛大佐プーチャチンのこと。六七

（五八）一般投票、協定、党出版物の党からの分離――新イスクラ派（メンシェヴィキ）の協議会では、決定が代議員の会議で決められないで、あとで関係諸組織の「一般投票」で決まることになっていた。協議会で採択した「組織規約」によると指導集団（中央部）と地方委員会の関係は選挙で決めないで「協定」で決めることとなっており、党出版物（機関紙その他）と組織の関係は規約で決められていなかった。六八

（五九）議会主義的クレチン病――レーニンがよくつかっているが、これは、エンゲルスの次のような叙述からきている。「議会主義的クレチン病という不治の病……この病は、それにかかった不幸な患者たちを、次のようなおごそかな確信でみたす。すなわち、全世界、その歴史と未来は、彼らをその議員とするという光栄をになった、ほかならぬその代議機関の多数決によって左右され、決定されるという確信である」（『ドイツにおける革命と反革命』、全集、第八巻、八四ページ）。

レーニンは、議会制度が万能で、議会活動はどんな事情のもとでも政治闘争の唯一の、主要な形態であると考えていた日和見主義者をこうよんでいる。クレチン病とはアルプス山地に見られる白痴症。七三

（六〇）　一八九五年一〇月六—一二日にブレスラウでひらかれたドイツ社会民主党大会で農業綱領草案を討議したときに生じた意見の相違をさす。この草案には重大な誤りがふくまれていた。とりわけ、プロレタリア党を「全人民の党」に変えようとする傾向が現われていた。ベーベルとリープクネヒトがこれを支持したが、カウツキー、ツェトキンらが鋭く批判し、結局この草案は否決された。七五

（六一）　『ラボーチェエ・デーロ』（『労働者の事業』）——「在外ロシア社会民主主義者同盟」の機関誌。一八九九年四月から一九〇二年二月までジュネーヴで発行された。くわしくは本選集、第二巻、注五を参照。七九

（六二）　ナデジヂン（イェ・オ・ゼレンスキーの仮名）が小冊子『革命の前夜。理論と戦術のナロードニキ的概観』（一九〇一年）で、レーニンの『イスクラ』の計画に反対したこと。この反対をレーニンは、すでに一九〇二年に『なにをなすべきか？』のなかで批判した。七九

（六三）　『フランクフルト新聞』（『フランクフルター・ツァイトゥング』）——ドイツの大証券業者の日刊機関紙。一八五六年から一九四三年までフランクフルト・アム・マインで刊行。一九四九年『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング』と改称して復刊、西ドイツ独占資本家のスピーカーの役割を果たしている。八二

（六四）　わが国の民話の有名な主人公——ロシア民話『イワンの馬鹿』の主人公イワンをさす。母から、人には愛想よくしなければいけない、たとえば穀物を取り入れている百姓には「いくら運んでも運びきれないように」と言ってやりなさいと教えられたイワンは、葬式の棺をかついでいる人夫にも同じことを言う。「馬鹿の一つおぼえ」の例として用いられる。八五

（六五）　ジョレス主義——この場合、ミルラン主義（注三八）または入閣主義に同じ。社会主義者のブルジョア政府への参加を支持する考え方。八六

（六六）　『フペリョード』が求めていたように——ボリシェヴィキ新聞『フペリョード』第一三、一四号にレーニンがのせた論文『社会民主党と臨時革命政府』と『プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁』をさす。二つとも、全集、第八巻におさめてある。八七

（六七）　一八七四年の『宣言』——ロンドンに亡命していたパリ・コミューンのメンバーのブランキ主義者グループが一八七四年に発表した綱領。コミューンを神聖化し、誤りないものと宣言した。エンゲルス『ブランキ派コミューン亡命者の綱領』（全集、第一八巻、五二一—五二八ページ）を参照。八八

（六八）　ブランキ主義者——フランスの革命家、空想的共産主義の代表者ルイ・オギュスト・ブランキに指導されたフランス社会主義運動の一潮流の支持者。彼らは、「賃金労働からの人類の解放をプロレタリアートの階級闘争に期待せず、少数の知識人の陰謀に期待した」（レーニン）。そして、蜂起の勝利に必要な具体的情勢を考慮せず、大衆との結びつきを軽視した。八八、一六〇、二三五

（六九）　エルフルト綱領——一八九一年一〇月にエルフルトの大会で採択されたドイツ社会民主党の綱領。この綱領は一八七五年のゴータ綱領にくらべると一歩前進していた。すなわち、資本主義生産様式が没落し、それに社会主義生産様式がとって代わるのは避けられない、というマルクス主義の学説を基礎とし、労働者階級は政治闘争をやらなければならないと強調し、この闘争の指導者としての党の役割を指摘していた、等々。しかし、エルフルト綱領も、日和

見主義にたいする重大な譲歩をふくんでいた。エンゲルスはエルフルト綱領草案を全面的に批判した。(『一八九一年の社会民主党綱領草案の批判』(二巻選集、第一七巻、三七五―三九五ページ)を参照。それは事実上、第二インタナショナル全体の日和見主義の批判であった。なぜなら、エルフルト綱領は第二インタナショナルの党にとっては、一種の模範だったからである。ところが、ドイツ社会民主党の指導部は、党員大衆にエンゲルスの批判を隠し、綱領成文の作成にさいして彼の最も重要な評言を無視した。レーニンの考えによると、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)についてロをつぐんでいたことが、エルフルト綱領の主要な欠陥、日和見主義にたいする臆病な譲歩であった。九四

(七〇) この備考は、『二つの戦術』執筆中に別紙に書かれたもの。それにはレーニンが「第一〇章に挿入すること」と書いてあった。しかし、この備考は『二つの戦術』の初版にも、一九〇七年の論集『一二年間』にも挿入されなかった。一九二六年に『レーニンスキー・ズボールニク』第五巻にはじめて発表された。九四

(七一) 新聞『プロレタリー』第三号には、レーニンの論文『臨時革命政府について』(第二論文)が発表された。そのなかでレーニンは、エンゲルスの論文『バクーニン主義者の活動。一八七三年夏のスペインの蜂起についての覚え書』(全集、第一八巻、四六七―四八四ページ)を引用している。エンゲルスの論文のなかではバクーニン主義者の決議が批判されている。一〇〇

(七二) 『クレード』(『信条』)――一八九九年に「経済主義者」が出した文書。詳細は本選集、第二巻、注三九を参照。一〇三

(七三) マルクスが『ヘーゲル法哲学批判』のなかで述べたことば(全集、第一巻、四二二ページを参照)。一〇三

(七四) 『ユマニテ』(『人道』)――一九〇四年、J・ジョレスがフランス社会党の機関紙として創刊した日刊新聞。同紙は一九〇五年のロシア革命の開始を歓迎した。第一次世界大戦中は同紙は同党の極右翼の手にあって、排外主義の立場をとった。

トゥールでフランス社会党が分裂してフランス共産党が結成された一九二〇年一二月以後は、フランス共産党の中央機関紙となった。

第二次世界大戦のはじめの一九三九年八月、同紙は発行を禁止され、非合法状態に移った。ヒトラー軍のフランス占領中は非合法で刊行され、フランス解放闘争に大きな役割を演じた。

戦後同紙は、民族独立の強化、労働者階級の統一行動、平和、民主、社会進歩のためにたゆみなくたたかっている。一〇五

(七五) 第一インタナショナルの創立者で、最も活動的な一員の一人であり、フランス支部の指導者であったルイ・ヴァルラン(一八一〇―一八七一年)がパリ・コミューン政府に参加したことをさす。一一三

(七六) 協議会の採択した「組織規約」――一九〇五年メンシェヴィキの協議会が採択したもの。これにたいするレーニンの批判は、『後退の第三歩』(全集、第八巻、五五三―五六三ページ)と、『小冊子「一労働者のみた党の分裂」への序文』(全集、第一〇巻、一六一―一六七ページ)を参照。一一四

(七七) ボナパルト主義(ボナパルティズム)――フランスの二人の皇帝、ナポレオン・ボナパルト(一七六九―一八二一)とルイ・ボナパルト(一八〇八―一八七三)の名から出たことば。資本家の党と労働者の党との激しい闘争を利用して、超党派をよそおい、ロ約束とわずかな施しもので労働者をあざむきながら、実際には資本家に奉仕する軍事的専制政治、ブルジョア独裁の反動的な形態。ド

イツのビスマルク、ロシアのケレンスキーなどにもボナパルティズムの要素が見られる。一二四

(七八)「沼地」派――一八世紀末のフランス革命当時、ジャコバン党（山岳党）とジロンド党との外にあって、本能的に保守的でありながら、確固たる信念をもたず、両派のあいだを右往左往していた分子は「沼地党」または「平原党」を結成していた。彼らはまた「沼のカエル」ともよばれていた。これになぞらえて、同様の分子をレーニンは「沼地」派とよんだ。（『なにをなすべきか？』、本選集、第二巻、一五ページを参照）一三一

(七九)**ヒルシュ＝ドゥンカー的労働組合**――一八六八年にドイツの自由主義的ブルジョア、M・ヒルシュとF・ドゥンカーが創設した改良主義的労働組合。彼らは階級利害の「調和」を説き、労働者の解放はブルジョア国家の立法によって資本主義社会の枠内で実現できる、資本家も労働者とともに労働組合に入れてさしつかえない、ストライキ闘争は目的にかなっていない、労働組合の主要任務は労働者と企業家のあいだの調停と相互扶助資金の蓄積にあるとした。一九三三年五月まで存続したこの組合は、要するにストライキ破りの組織であって、ブルジョアジーと政府の支援にもかかわらずドイツの労働運動でとるにたる勢力とはなりえなかった。この組合の日和見主義的活動家は一九三三年にファシストの「労働戦線」に加入した。一三三

(八〇)『ラスヴェート』（『黎明』）――自由主義的合法日刊新聞。一九〇五年三月一（一四）日から同年一一月二九日（一二月一二日）までペテルブルグで刊行された。一三三

(八一)エンゲルスの論文『バクーニン主義者の活動。一八七三年夏のスペインの蜂起についての覚え書』は、レーニンの監修でロシア語に翻訳され、一九〇五年にロシア社会民主労働党中央委員会から単行の小冊子として出版され、ついで一九〇六年にペテルブルグで再版された。

一八五〇年三月付の『共産主義者同盟への中央委員会の呼びかけ』は、一九〇六年にペテルブルグの「モーロト」社から出たカール・マルクスの小冊子『ケルン共産党裁判の真相』の付録としてロシア語で発表された（全集、第七巻、二四九―二五九ページ）。一三五

(八二)このあと五つの段落（「ことばの濫用は……」からこの節の終りまで）は初版でも、『一二年間』でも落とされていた。一九四〇年四月二二日付『プラウダ』第一一二号にはじめて発表された。一三九

(八三)『モスコフスキエ・ヴェードモスチ』（『モスクワ報知』）新聞――一七五六年いらいモスクワ大学によって（はじめは小型リーフレットの形で）刊行されたロシア最古の新聞の一つ。地主や僧侶の最も反動的な見解を代表する君主主義的国家主義者と黒百人組の主要な機関紙。十月革命まで出ていた。一四〇、二二一、二二八

(八四)メーリングからの引用は『カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス、フェルディナント・ラサール遺稿集、フランツ・メーリング編』第三巻、シュトゥットガルト、一九〇二年、五三ページにのったメーリングの「まえがき」の一節。一四三

(八五)この引用文の出所はじつはエンゲルスの論文『フランクフルト議会』。そのことはソ連共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所におけるロシア語版マルクス＝エンゲルス全集、第二版、第五巻の編集作業中に確認された。一四五

(八六)「民主主義的ブルジョアジー」のドイツ語原文は二つあとの段落でレーニン自身が注記しているように「民主主義的市民」

(demokratische Bürgerschaft) である。一三五

(八七)　さきの引用文の筆者はじつはマルクスではなくてエンゲルスである。(論文『革命についてのベルリンの討論』、全集、第五巻、所収) 一三六

(八八)　ケルン労働者協会の機関紙――はじめ『ケルン労働者協会新聞』と題して、『自由、友愛、労働』の副題をつけ、一八四八年四月から一〇月まで、そのうち七月までは共産主義者同盟員のゴットシャルク、ついでモルの編集で出ていた。全部で四〇号出た。紙面ではケルン労働者協会その他ケルン州の労働団体の活動が明らかにされた。一一月二六日からは副題を本題に変え、再刊され、中断したときもあったが、一八四九年六月二四日まで三二号発行された。一三六

(八九)　『マルクス＝エンゲルス全集』、第六巻、『声明』(四二一ページ)、『一八四九年四月一六日付、労働者協会総会の決議』(五六八ページ)、『一八四九年四月一七日の委員会会議』(五六八―五六九ページ)、『労働者協会大会の招集についての通知』(五七二―五七三ページ) を参照。一三九

(九〇)　共産主義者同盟――プロレタリアートの最初の国際的共産主義組織。一八四七年六月はじめから一八五二年一一月一七日まで存続した。共産主義者同盟は、一八三〇年代のなかごろ労働者や手工業者が組織し、ヨーロッパ諸国で非合法に活動していた「義人同盟」を基盤としてつくられた。一八四七年のはじめごろ、義人同盟の活動家はマルクスとエンゲルスの見解の正しさを信ずるようになり、彼らにたいし、同盟に加入して組織の改革に参加し、また同盟の綱領をつくってほしい、と申しいれた。マルクスとエンゲルスは承諾をあたえた。

一八四七年六月はじめ、ロンドンで義人同盟の大会がひらかれた。この大会は、共産主義者同盟の第一回大会として歴史に残っている。大会は、マルクスとエンゲルスの革命理論の諸原則を行動の基礎にすえた。大会にはエンゲルスが参加した。エンゲルスがその作成に積極的に参加した新しい規約は、共産主義運動の最終目標をはっきりと規定し、それまで同盟に陰謀団体の性格をあたえていた条項を削除し、同盟の組織は民主主義の原則にしたがうものとした。この規約が最終的に承認されたのは、一八四七年一一月二九日から一二月八日までロンドンでひらかれた共産主義者同盟の第二回大会においてであった。第二回大会にはマルクスとエンゲルスが参加した。この大会はマルクスとエンゲルスに宣言の作成を委託した。できあがった宣言は、一八四八年二月に発表された。『共産党宣言』の名でひろく知られているのがそれである。一八四八―四九年のフランスとドイツにおけるブルジョア民主主義革命のさいには、共産主義者同盟の多くの活動家が労働者階級の闘争に参加した。ケルン共産党裁判ののちまもなく、一八五二年一一月一七日、同盟はマルクスの提議にしたがって解散を宣言した。

共産主義者同盟は、プロレタリア革命家の学校として、またプロレタリア党のめばえ、国際労働者協会(第一インタナショナル)のさきがけとして、大きな歴史的役割を果たした。一四〇

(九一)　エンゲルス『共産主義者同盟の歴史によせて』(マルクス著『ケルン共産党裁判の真相』第三版の序文として書かれたもの) からの引用(全集、第八巻、五七五―五七六ページ)。一四〇

(九二)　新聞『タヴァーリシチ』第三八一号、一九〇七年九月二六日(一〇月九日)付に発表されたプレハーノフの論文『それが可能か?』をさす。

『タヴァーリシチ』——日刊のブルジョア新聞、一九〇六年三月一五（二八）日から一九〇七年一二月三〇日（一九〇八年一月一二日）までペテルブルグで出ていた。正式にはどの党の機関紙でもなかったが、事実上はカデット左派の機関紙であった。新聞にはエス・エヌ・プロコポーヴィチ、イエ・デ・クスコヴァが協力した。メンシェヴィキも寄稿している。一四一、一六二、二四一

（九三）　フレスタコーフぶり——フレスタコーフはゴーゴリの有名な戯曲『検察官』の主人公。大ぼら吹きのペテン師、うぬぼれやの軽薄才子。一四一

（九四）「職業別政治団体連盟」（「団体連盟」）——ロシアにおける自由主義的ブルジョア知識人の政治組織。一九〇五年五月に創立。一四の職業別政治団体（弁護士、教授、著述家、事務員、鉄道職員等々の）を統合し、かなり多くの小ブルジョア勤労インテリゲンツィアを組織。カデットが圧倒的影響力をもっていた。ボリシェヴィキはこれに加入せず、会員の民主主義的部分のあいだで活動。一九〇五年七月、連盟の第三回大会は多数決でブルィギン国会のボイコットを決議したが、各団体内の意見の対立の結果、まもなくそれを撤回して国会選挙への参加に同意した。また連盟の民主主義的部分は一九〇五年の一〇月ストライキに参加したが、一〇月一七日の詔書発布後、指導部はスト打切りに努力した。一九〇六年末解散。一四三、一七三

（九五）　マニーロフかたぎ——マニーロフはゴーゴリの作品『死せる魂』に出てくる地主。いくじのない空想家で、無能なおしゃべり屋の典型。「マニーロフかたぎ」という表現もそこから出ている。一四八

（九六）　農民にかんする特別決議の草案——レーニンはそれを、一九〇五年三月に発表した論文『プロレタリアートと農民』の最後に、全文引用している。全集、第八巻、二三一—二三二ページを参照。一五〇

（九七）『プロレタリー』第一〇号の記事——一九〇五年八月二日（七月二〇日）付の同紙にのった、調停派的立場をとっていた党サラトフ委員会の決議のこと。『プロレタリー』は、レーニンが執筆した編集局「あとがき」をつけてこの決議を発表した。一五〇

（九八）　全ロシア農民同盟——モスクワ県の農民の提唱によって一九〇五年八月に成立し、短期間のうちに広範な農民大衆を組織した。政治的自由と憲法制定議会の即時召集を要求し、第一国会をボイコットする戦術を支持。土地私有の廃止、買取金なしでの、修道院領地、教会領地、帝室領地、御料地、国有地の農民への引渡しを要求。エス・エルと自由主義者の影響下にあった同盟は、政策上中途はんぱな態度と動揺を示し、地主的土地所有の一掃を要求しながら、地主にたいする部分的補償を認めた。活動の第一歩から、警察の弾圧をこうむり、一九〇七年はじめに崩壊した。一五三

（九九）　クスターリ——市場めあての家内生産に従事している手工業的小生産者のこと。クスターリは、西ヨーロッパの古い手工業者と同様、まだ農業から分化しきっていない。一五三

（一〇〇）　切取地——一八六一年の農民改革（いわゆる農奴解放）のさいに農民から切り取られた土地。このとき、農民に買い取らせた法定の分与地以上の土地は農民から取り上げられて、地主に割り当てられた。これらの土地は大部分農民がいままで用益していたものなので、農民はこれらを「切り取られた土地」あるいは「切取地」とよんだ。原則として、最良の土地が農民から切り取られた。農民は多くの場合、債務奴隷的な条件で「切取地」を地主から借りなけ

ればならなかった。一五四、二〇八

（一〇一） **農民司政長**——農村地方の一郡を数地区に分けて、その各地区の司法・行政権力を一身に掌握した官吏。地元の貴族のうちから任命された。農民司政長制度は一八八九年に従来の治安判事制度に代わるものとして設けられたが、これは一八六一年の農民改革に対応する一連の地主的反動政策の頂点をなすものであって、事実上、農民にたいする地主の無制限の権力を復活したものであった。一五四

（一〇二） **『フペリョード』所載の諸論文**——これらはすべてレーニンが書いた論文——『プロレタリアートと農民』、『われわれの農業綱領について』、『自由主義者の農業綱領』（すべて全集、第八巻所収）——である。一五五

（一〇三） 原稿にはこのあとに、「農民運動は農民蜂起の始まりである」という一句がある。一五九

（一〇四） 論文**『小ブルジョア社会主義とプロレタリア社会主義』**を準備するにあたって、レーニンはエス・エルの機関紙『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』（『革命ロシア』）一九〇五年九月一五日付第七五号から社説『正統マルクス主義者と農民問題』の抜粋をつくり、この論文のプランを作成した。そのプランは全集第五版第一二巻の付録「準備資料」の部（四〇九―四一〇ページ）に収録されている。論文『小ブルジョア社会主義とプロレタリア社会主義』は、ボリシェヴィキの新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』（『新生活』）一九〇五年一一月一〇（二三）日付第九号に転載された。一五九

（一〇五） **プルードン主義**——反科学的な、マルクス主義に敵対的な小ブルジョア社会主義の一潮流。そのイデオローグ、フランスの無政府主義者プルードンの名にちなんで、こうよばれている。小ブルジョア的立場から資本主義的大私有を批判するとともに「人民」銀行によって小私有を永久に保障することを夢み、階級闘争、プロレタリア革命、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）に否定的態度をとった。労資協調主義の宣伝に広く利用された。一六〇、二九〇

（一〇六） **小ロシアの農民蜂起**——一九〇二年三月末―四月はじめにおけるウクライナのポルタワ県とハリコフ県の農民運動をさす。一九〇一年の凶作で農民の困窮がいっそうひどくなったために発生したもので、土地の新たな分配を要求し、地主屋敷を襲撃して備蓄の食糧や飼料を奪取した。政府は軍隊を出して無慈悲に弾圧し、多くの農民が殺害または投獄され、多くの村では村民一人のこらず笞打ちの罰を受けた。（レーニン、『貧農に訴える』、本選集、第一巻、三四〇―三四一ページを参照）一六〇

（一〇七） **『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』**（『革命ロシア』）——エス・エルの非合法新聞。一九〇〇年の終りから一九〇五年いっぱい発行されていた。一九〇二年一月以後一九〇五年一二月まではエス・エル党の公式の中央機関紙としてジュネーヴで発行された。一六一

（一〇八） 論文**『われわれの任務と労働者代表ソヴェト』**（編集局への手紙）——亡命先からロシアに帰る途中、一九〇五年一〇月―一一月はじめに、レーニンはストックホルムにいて待機していた。この論文は、そのときストックホルムで、新聞『ノーヴァヤ・ガゼータ』に発表する予定で書かれたが、掲載されなかった。この論文の手稿はやっと一九四〇年秋に発見された。この論文は、ソヴェトを蜂起の機関、新しい革命権力の萌芽と評価した最初のものである。一六七

（一〇九） **『ノーヴァヤ・ジーズニ』**（『新生活』）——最初の合法的

ボリシェヴィキ新聞。一九〇五年一〇月二七日（一一月九日）から一二月三（一六）日まで、ペテルブルグで毎日発行された。一一月のはじめにレーニンが亡命地からペテルブルグに帰ってから、この新聞はレーニンの直接の指導のもとに発行されるようになった。『ノーヴァヤ・ジーズニ』は、事実上、ロシア社会民主労働党の中央機関紙であった。最も密接な寄稿者は、ヴェ・ヴェ・ヴォロフスキー、エム・エス・オリミンスキー、ア・ヴェ・ルナチャルスキー、その他であった。ア・エム・ゴーリキーもこれに積極的に参加し、新聞に物質上の援助をもあたえた。

一一月一〇（二三）日付の第九号にレーニンの論文、『党の再組織について』が発表された。これを最初として、それにつづいてさらに、一〇以上の彼の論文が掲載された。毎日の発行部数は八万部に達した。

『ノーヴァヤ・ジーズニ』は数々の弾圧をうけた。二七号のうち一五号が押収され、破棄された。一二月二（一五）日に第二七号が発行されたのち、政府によって閉鎖された。最後の第二八号は非合法に発行された。一六八

（二〇）論文『党の再組織について』――レーニンがロシアに帰ってまもなく書かれた。新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』にのったレーニンの論文の最初のもの。この論文は、一九〇五年一二月のタンメルフォルスの協議会で採択された決議『党の再組織について』の基礎となった。一七六

（二一）「独立派」――モスクワの秘密警察長官ズバートフが組織した御用組合（スパイ＝挑発者組織）型のいわゆる「独立社会労働党」のこと。ツァーリ政府の指令により、秘密警察の協力のもとに、一九〇五年秋にペテルブルグで創立。労働者を革命闘争からそらせることを目的とし、社会民主党との闘争を任務としていた。労働者大衆のあいだで成功をおさめることができず、一九〇八年のはじめに消滅した。一七六

（二二）党にたいするアピール――『全党組織と全社会民主主義的労働者に訴える』というアピールのことで、『ロシア社会民主労働党第四回大会の招集によせて』という表題で単行のリーフレットとして出版され、また、一九〇五年一一月一〇（二三）日付『ノーヴァヤ・ジーズニ』第九号にも掲載された。一七六

（二三）「一労働者」の小冊子――一労働者著『われわれの組織における労働者とインテリゲンツィア』のこと。この小冊子については、レーニンの論文『うぐいすはおしゃべりでは養えない』（全集、第八巻、四二―四九ページ）を参照。一七七

（二四）ヴァンデー――フランスの一地方の名。一八世紀末のフランス大革命の時代に、この地方には、革命的な国民公会に反対する遅れた反動的な農民の反革命的蜂起が起こった。この蜂起は宗教的スローガンのもとにおこなわれ、反革命的な聖職者や地主によって指導されていた。一八三

（二五）十月革命――一九〇五年一〇月の政治ゼネストのこと。この結果、一九〇五年一〇月一七日にツァーリの「詔書」が発布され、人民に市民的自由が「下付」された。ボリシェヴィキは出版の自由を利用して新聞を合法的に発行した。一九〇五年末、一二月の武装蜂起の弾圧後、専制は労働者団体と労働者の出版物にたいする攻撃にうつった。一八五

（二六）『労働者代表ソヴェト・イズヴェスチヤ（通報）』――ペテルブルグ労働者代表ソヴェトの公式機関紙、一九〇五年一〇月一七（三〇）日から、一二月一四（二七）日まで発行。『イズヴェスチ

ャ』は、ソヴェトの活動についての情報を伝えるもので、常設の編集局をもたず、いろいろなブルジョア新聞の印刷所で印刷され、検閲を通さずに発行されていた。一六五

(一七) グチコフ氏の皮肉――ペテルブルグ労働者代表ソヴェトは一〇月一九日検閲当局を無視し検閲をうけずに発行される新聞だけが発行されうること、新聞の編集局か出版の自由を宣言し実行してはじめて印刷労働者は就業すること、それまではストライキをすること、この決定に違反する新聞は没収され破棄されることを決定した。そして労働者たちは、実際にもオクチャブリストのグチコフの声明の発行を拒否した。グチコフは、これについて、一一月のゼムストヴォ大会で苦情を言い、旧政体が裏返しされてつづいている、これでは外国で出版するか、非合法の印刷所を設立するよりしかたがないと皮肉を言った。一六六

(一八) ヒステリックなインテリゲンツィア――レーニンがここで予想したとおり、当時のシンボリストの文芸評論雑誌『ヴェスィ』(『はかり』)で、詩人ブリューソフがこのレーニンの論文を批評している。(同誌一九〇五年第一一号)

ブリューソフはなぜレーニンが「公然とプロレタリアートと結びつけられた」文学が「真実に自由な」ものであると言ったかを理解することができなかった。彼によれば「この二つの文学は、ともに自由ではない。一つは隠然とブルジョアジーに結びつき、他は公然とプロレタリアートと結びついている。後者が優越していることは、その隷属の公然たる承認である。より大きな自由にあるのではない」。ブルジョア芸術家の従属についても彼は言っている――「おそらくレーニン君は、彼が自由主義的な雑誌の編集局で出会うような作家――職人の典型によって判断しているのであろう。しかし彼はこれらとならんで、一つの流派が、作家――芸術家の新しい、他のゼネレーションが成長したのを知らなければならない。……これらの作家にとっては……レーニン君よ、疑うような――ブルジョア社会の構成は、諸君にとってと劣らず憂うべきである。……彼らはブルジョア社会においてすら芸術の『絶対的』自由を要求しているのだ。」「君と君の仲間とが、現在の『不正』や、『醜悪』な組織に反対していくあいだ、われわれは君たちとともにある。しかし諸君が信念の自由に手をふれるやいなや、われわれはただちに君たちの旗をすてるであろう。『社会民主主義のコーラン』は、『専制のコーラン』と同様に、われわれには縁のないものだ……」(蔵原惟人評論集、第一巻、二四三―二四四ページ参照)。

しかしブリューソフは、のちに十月革命が始まってからソヴェト政権を支持するようになった。一六七

(一九) オブローモフ的――一九世紀ロシアの作家ゴンチャロフの小説『オブローモフ』の主人公からでたことばで、批評家ドブロリューボフが『オブローモフかたぎとはなにか』で批評してから、怠惰、無為、不決断、無活動、緩慢を示す代名詞になっている。レーニンが好んでつかった文学的形象の一つ。一六七

(二〇) 「法治党」――大商工業ブルジョアジー、地主および上層官僚の反動政党で、一九〇五年秋に結成された。この党は無条件にツァーリズムを擁護し、第一国会の解散を歓迎した。第二国会の選挙のときには黒百人組の「真正ロシア人同盟」とブロックを結んだ。一九〇七年に崩壊した。一九二

(二一) カレンダス――古代ローマ人が各月の第一日をさした特別の名称。日本で言えば、「ついたち」というようなもの。ギリシア人はこういう名称をもたなかった。そこで「ギリシア暦にカレン

ダスがめぐってくる日まで延期する」ということは、けっして実行しないこと、事業を台なしにすることを意味する。一九七

（一三二） **急進民主派**（エル・デ）――一九〇五年一一月に設立された小ブルジョア組織。カデットとメンシェヴィキとの中間的立場を占め、民主共和制を要求しながら、議会にたいして責任を負う内閣をつくるという条件で立憲君主制とも妥協していた。農業問題では官有地、皇室領地、教会領地の無償没収、私有地の最小限有償没収を主張した。一九〇六年はじめ解散。一九八

（一三三） **『革命の諸段階、方向および見とおし』**――この標題はソ連共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所がつけたもの。二〇一

（一三四） 小冊子**『労働者党の農業綱領の改訂』**――この小冊子は、ロシア社会民主労働党の第四回（統一）大会に提出されたボリシェヴィキの草案の根拠を明らかにするために書かれた。この小冊子は、レーニンがのちに統一党大会でおこなった農業問題についての報告のなかで述べた基本的思想をふくんでいる。二〇三

（一三五） **統一大会**――一九〇六年にストックホルムでひらかれたロシア社会民主労働党第四回（統一）大会のこと。詳細は注二二七を参照。二〇三

（一三六） **「労働解放」団**――一八八三年にスイスのジュネーヴで創設された最初のロシア人のマルクス主義的グループ。同団の創設者はゲ・ヴェ・プレハーノフで、ほかにペ・ペ・アクセリロード、エリ・ゲ・デイチ、ヴェ・イ・ザスーリチ、ヴェ・エヌ・イグナートフらが参加した。同団はマルクス＝エンゲルス『共産党宣言』、マルクス『賃労働と資本』、エンゲルス『空想から科学への社会主義の発展』その他をロシア語に翻訳し、国外で印刷し、秘密にロシア国内にひろめて、ナロードニキに大きな打撃をあたえた。しかし、ナロードニキ的見解の残存、農民の革命性の過小評価、自由主義的ブルジョアジーの役割の過大評価などの重大な誤りもあり、これがプレハーノフらの後年のメンシェヴィキ的見解の素因となった。労働運動との実践的結びつきはなかったが、ロシア労働者階級の革命的自覚の確立に大きな役割を果たし、一八八九年の第二インタナショナル第一回大会（パリ）以来そのすべての大会でロシアの社会民主主義派を代表した。「労働解放」団は一九〇三年のロシア社会民主労働党第二回大会でみずから解消した。二〇三

（一三七） **『ソツィアル－デモクラート』**――「労働解放」団が出した不定期刊の文学・政治論集。一八八八年に一巻出ただけで終わった。二〇三

（一三八） **『ロシア社会民主主義者の任務』**（一八九七年）――レーニンが流刑先で執筆した論文で、一八九八年にジュネーヴで「労働解放」団によって出版され、一九〇二年に第二版、一九〇五年に第三版が出た。また一九〇七年に出版された論集『一二年間』にもおさめられている。本選集、第一巻、一四七―一六七ページに収録。二〇四

（一三九） **ロシアにおける最初の農民蜂起**――一九〇二年、ポルタヴァ、ハリコフ、ヴォローネジその他の諸県に起こった農民蜂起のこと。このときの蜂起は、従来の農民一揆とは違って、革命的労働運動に影響された最初の革命的農民蜂起であった。二〇四

（一四〇） **『労働者党と農民』**――レーニンの執筆した論文。全集、第四巻、四六〇―四六九ページ所収。二〇四

（一四一） **象に気がつかない**――クルィロフの『寓話』のなかの『見学好きなお人』から。ある人が博物館に行っていろいろなものを見てきたと自慢しているので、山のような象を見たでしょうと聞

いたら、「実は象には気がつかなかった」と答えた、という話。肝心なことを見おとしていることにたいする皮肉。二〇五

（二三二）「ボリバ」団――一九〇〇年夏に、デ・ベ・リャザーノフ、ユ・エム・ステクロフ、エ・エリ・グレヴィチがパリで結成した、日和見主義的な在外文筆家の小グループ。一九〇一年五月から「ボリバ」（「闘争」）という名称を名のった。ロシア社会民主労働党に加盟していたが、第二回党大会の決議によって解散させられた。

レーニンがここで言っているのは、一九〇三年に同団が出版した農業綱領草案のこと。この草案のなかでは、地主の土地の収奪の要求がかかげられていた。二〇五

（二三三）私の回答――一九〇三年六月にレーニンが執筆した『われわれの綱領草案にたいする批判への回答』（全集、第六巻、四五二―四六八ページ）のこと。二〇五

（二三四）『われわれの綱領草案にたいする批判への回答』、全集、第六巻、四六一ページ。二〇六

（二三五）この部分は次のとおり。「債務奴隷制を制限するため、切取地を取り返すために農民委員会をつくれという（われわれの）要求は（これからさきへ行ってはならないという）柵ではない。それは扉である。もっとさきのほうへ進むためには……まずはじめにこの扉を通りぬけなければならない。」本選集、第一巻、三三六ページを参照。二〇六

（二三六）『ロシア社会民主党の農業綱領』、本選集、第一巻、二七三ページ。二〇六

（二三七）この農業綱領改訂の草案とはレーニンが執筆した『プロレタリアートと農民』のことである。全集、第八巻、二三一ページを参照。二〇七

（二三八）『ルーシ』（ロシアの古名）――自由主義的ブルジョアジーの新聞。一九〇三年から一九一〇年まで『二〇世紀』『モルヴァ』『ノーヴァヤ・ルーシ』『オーコ』などと名称を変えながら断続的にペテルブルグで発行された。二〇七

（二三九）『プラウダ』（『真理』）――芸術、文学および社会生活にかんする社会民主主義的な月刊雑誌。一九〇四―一九〇六年にモスクワで出ていた。おもにメンシェヴィキが参加していた。二〇七

（二四〇）『タンメルフォルスにおける「多数派」協議会の農業問題についての決議』、全集、第一〇巻、七五ページを参照。タンメルフォルスの「多数派」協議会は定例の党大会に代わるものとして一九〇五年一二月一二―一七（二五―三〇）日に二六のボリシェヴィキ組織の参加を得てひらかれ、レーニンの提案にもとづいて農業問題と党の再組織についての決議を採択し、党の統一問題や国会にたいする態度の問題を審議した。二〇七

（二四一）論集『当面の問題』――一九〇六年のはじめ、モスクワで発行された。この論集は、ロシア社会民主労働党モスクワ委員会に所属する文筆家＝講師グループによって編集され、主としてボリシェヴィキの立場を反映していた。発行後まもなく没収された。二〇八

（二四二）『ミール・ボージー』（『神の世界』）――自由主義的傾向の文学および通俗科学の月刊雑誌で、一八九二年から一九〇六年までペテルブルグで発行されていた。一八九八年にはレーニンの論文がのったこともあるが、第一次ロシア革命のときにはメンシェヴィキが寄稿していた。この雑誌は、一九〇六年以降は『ソヴレメンヌィ・ミール』（『現代世界』）という名称にあらためられて、一九一八年まで発行されていた。二〇八

（二四三）『ドネヴニーク・ソツィアル－デモクラータ』（『社会民主

主義者の日記』）――プレハーノフが発行していた不定期刊の雑誌。長い間隔をおいて、一九〇五年三月から一九一二年四月までジュネーヴで発行されていた。全部で一六号出た。また一九一六年に復刊されたが、一号で終わった。

一九〇五―一九〇六年に出た最初の八号で、プレハーノフは右翼日和見主義的見解を展開し、社会民主主義と自由主義ブルジョアジーとのブロックを擁護し、労農同盟を否定し、一二月の武装蜂起を非難した。二〇八

（一四四）　レーニン『イクスへの回答』――『われわれの綱領草案にたいする批判への回答』、全集、第六巻、四五三ページを参照。二一二

（一四五）　『スローヴォ』――一九〇三―一九〇九年にペテルブルグで刊行されていた日刊のブルジョア新聞。はじめ右派地主の機関紙、一九〇五年一一月からはオクチャブリスト党の機関紙。一九〇六年七月から一時停刊されたが、一二月に「平和革新」党の機関紙として再刊された。二二三

（一四六）　「ドラゴナード」（竜騎兵）――新教徒を迫害するために、フランスのルイ一四世が彼らの居住地域に駐屯させた部隊の名称。転じて、武力的迫害の意に用いられる。二二三

（一四七）　四尾鞭――普通・平等・直接・秘密の選挙権という四つの要求をふくむ、民主主義的選挙制度の略したよび名。二二四

（一四八）　農業綱領草案についての私の論文――一九〇二年にレーニンが執筆した『ロシア社会民主党の農業綱領』のこと。本選集、第一巻、二五八―二五九ページを参照。二二六

（一四九）　共和主義者のいない共和国――ナポレオン三世が一八七〇年のプロイセンとの戦争の失敗で失脚したのち、一八七一年二月にボルドーに国民議会が召集されたが、ここでは王党のほうが優勢であった。しかし王党派内部の意見の不一致が調整されなかったため、ついに共和制がしかれることになった。二二八

（一五〇）　『われわれの綱領草案にたいする批判への回答』、全集、第六巻、四五四―四五五ページを参照。二三四

（一五一）　小冊子『国会の解散とプロレタリアートの任務』――スヴェアボルグの反乱が始まるまえに書かれたが、モスクワで公刊されたのは反乱のあとであった。小冊子は一九〇六年八月一二（二五）日にモスクワで差し押えられ、著者と出版者は告発された。だが、小冊子は、モスクワとペテルブルグだけでなく、地方にもひろめられた。出版物取締総局へのポドリスク県知事の報告によれば、同県内の書店では「公然と武装蜂起を呼びかけるような、きわめて革命的な小冊子が売られており」、その一例としてこの小冊子をあげている。二三七

（一五二）　第一国会の解散にかんするツァーリの勅令は一九〇六年七月八（二一）日に署名され、翌日公布された。この勅令には同時に次の新しい国会の召集日も一九〇七年二月二〇日（三月五日）と指示してあった。二三七

（一五三）　法律に違反するアピール――「ヴィボルグ・アピール」という名で知られている、『国民代表から国民へ』と題する第一国会議員の呼びかけのこと。第一国会の解散後、カデットを主とする約二〇〇名の議員がヴィボルグにあつまって、一九〇六年七月九―一〇（二二―二三）日の会議でアピールを採択した。アピールの原案はカデット、トルドヴィキ、メンシェヴィキから成る小委員会によって起草された。このアピールは人民に、政府にたいして「消極的抵抗」を示すこと――ツァーリが新しい国会選挙の期日を指定す

るまでは、公租を払わず、徴兵に応じないこと、国会の承認なしに締結された公債を認めないこと——を呼びかけた。カデットはこのような「消極的抵抗」の方法によって大衆的革命運動の流れを平穏な川床へみちびきいれようと期待したのである。一九〇六年九月に、カデット党の大会はすでに公然と「消極的抵抗」の適用を「実際上実行不能」と認め、アピールを撤回した。三三八

(一五四)『レーチ』(『言論』)——カデット党の日刊中央機関紙。一九〇六年二月からペテルブルグで発行され、十月革命直後、一九一七年一〇月二六日(一一月八日)にペテルブルグ・ソヴェトと軍事委員会によって禁止された。三三八、三六一

(一五五)『グラジダニン』(『市民』)——一八七二年から一九一四年までペテルブルグで発行されていた反動新聞。一八八〇年代以来、極右の君主主義派の機関紙であった。この新聞はメシチェルスキー公爵によって編集され、主としてツァーリ政府の補助金によって維持されていた。発行部数はわずかであったが、官僚層に影響力をもっていた。三三八

(一五六)トルドヴィキ(トルドヴァヤ・グルッパ)(勤労者党)——ナロードニキの流れをくむ農民や知識人から成るロシア国会内の小ブルジョア民主主義者のグループ。一九〇六年四月、第一国会の農民出身議員からトルドヴィキ議員団が結成された。すべての身分的、民族的制限の撤廃、ゼムストヴォと都市自治体の民主化、普通選挙権を要求。ナロードニキの土地均等用益の原則から出発して、国有地等を没収して土地の全国民共同フォンドをつくることを農業綱領とした。国会では、トルドヴィキは小主人としての農民の階級的本性からカデットと社会民主党とのあいだを動揺したが、それでも農民大衆を代表していたので、ボリシェヴィキはツァーリ専制とカデットにたいする共通の闘争のために国会内でトルドヴィキと個々の問題にかんする協定をむすぶという戦術をとった。一九一七年にトルドヴィキは「人民社会党」と合同して、ブルジョア的臨時政府を積極的に支持し、十月革命後はブルジョア反革命の側に立った。三四三

(一五七)スヴェアボルグ要塞での反乱——反乱は一九〇六年七月一七(三〇)日の夜から翌日の朝にかけて自然発生的に、だが大部分はエス・エルの挑発によって時機尚早に起こった。スヴェアボルグ(ヘルシングフォルスの近く)の情勢と武装蜂起の可能性について情報を受けた党ペテルブルグ委員会は、代表団を緊急に派遣する決定を採択した。行動を延期させること、それができなければ、蜂起の指導に積極的に参加することが決定された。決定の原文はレーニンが書いた(全集、第一一巻、一二一ページ)。自然発生的行動を抑止できないことがわかったので、ロシア社会民主労働党軍事組織のメンバー——陸軍少尉ア・エメリヤノフとイエ・コハンスキーが蜂起を指導した。

一〇砲兵中隊のうち七中隊が蜂起に参加し、専制を打倒せよ、人民に自由を、農民に土地をあたえよというスローガンをかかげた。フィンランドの労働者階級はこれを応援し、七月一八日にはヘルシングフォルス(ヘルシンキ)で、のちには他の場所でゼネストが始まった。反乱は三日間つづいたが、準備不足が失敗をもたらした。七月二〇日(八月二日)に軍艦が要塞を砲撃したのち、反乱は鎮圧された。四三人が処刑された。三四四、三五一

(一五八)義勇戦闘隊(「ドルジーナ」)連合会議——一九〇五年一〇月末モスクワで、「黒百人組」との実際の闘争のためにつくられたが、十二月蜂起のときにも存続していた。そのなかにはロシア社会民主労働党モスクワ委員会、モスクワ社会民主主義者グループ、エス・

エル党モスクワ委員会などの諸党派の義勇隊、また「地区自由隊」、「大学隊」、「印刷所隊」、「カフカーズ隊」などの名称の義勇隊の代表がはいっていた。エス・エル、メンシェヴィキからなる会議の多数派は会議の活動を攪乱した。十二月武装蜂起のときには同会議は革命的事件のあとについてゆくだけで、蜂起の作戦総司令部の役割を果たすことができなかった。二五五

(一五九) ロシア社会民主労働党モスクワ委員会の決定にもとづいて開始された政治的ゼネラル・ストライキをさす。一〇月七(二〇)日、モスクワ＝カザン鉄道にストライキが起こった。このストライキは、たちまち全産業中心地にひろがり、全国的ストライキとなった。ストライキ参加者の数は二〇〇万をこえた。一〇月のストライキは、専制の打倒、ブルィギン国会の積極的ボイコット、憲法制定議会の召集、民主的共和制の樹立、というスローガンをかかげておこなわれた。革命運動の成長に肝をつぶしたツァーリ政府は、あわてていくらかの譲歩にふみきった。一〇月一七日、ツァーリは詔書を発布して、「市民の自由」と「立法」議会を約束した。

ボリシェヴィキは、ツァーリの詔書がごまかしであることを暴露し、闘争をつづけるよう人民に呼びかけた。メンシェヴィキとエス・エルは、詔書を歓迎し、ストライキをやめるよう労働者に呼びかけた。ツァーリ政府はブルジョアジーの支持を得、メンシェヴィキとエス・エルの裏切り行為を利用して、攻撃に移った。ポグロム(大量虐殺)と弾圧が全国に荒れくるった。

この情勢を考慮して、ロシア社会民主労働党モスクワ全市協議会は、一〇月二二日(一一月四日)、ゼネラル・ストライキの中止を決定した。十月の政治的ゼネストは、労働運動の力量と威力を示し、農村と陸海軍における革命的闘争の展開をうながした。十月ストライキはプロレタリアートを十二月の武装蜂起にみちびいた。二五五

(一六〇) 全集、第七巻、九ページ、『一八四八―一八五〇年のフランスにおける階級闘争』を参照。二五六

(一六一) 一九〇五年一二月八(二一)日の晩、兵士と警官が「アクヴァリウム」公園(サドヴォ凱旋門広場の)を包囲した。そのとき園内の劇場では大集会がひらかれていた。集会をまもった労働者義勇隊のおかげで流血を避けることができた。武器をもっていた者は塀を破って身を隠すことができたが、残りの参加者で門を通って出た者は、尋問され、殴打され、多くの者が逮捕された。二五六

(一六二) フィードレル学校(チースチエ・プルードィにある)の建物は党の集会がいつもひらかれていた場所であったが、一九〇五年一二月九(二二)日の晩ここで集会がひらかれていたときに、兵隊に包囲された。参会者の多くは義勇隊員だったが、降伏を拒否してバリケードを築いたので、軍隊は建物を大砲と機関銃で射撃した。三〇名以上が死傷し、一二〇名が逮捕された。二五六

(一六三) エンゲルスの労作『ドイツにおける革命と反革命』(全集、第八巻、三―一〇三ページ)をさしている。これは、一八五一―一八五二年につづき論文として『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』にマルクスの署名で発表された。マルクスは、はじめ自分でこの労作を書くつもりだったが、経済学の研究にいそがしかったので、執筆をエンゲルスにまかせた。執筆中エンゲルスはつねにマルクスと相談し、送稿するまえにもマルクスに目を通してもらった。一九一三年にマルクスとエンゲルスの往復書簡が発表されてはじめて、この労作がエンゲルスの執筆したものであることが明らかになった。二五九、二六一

(一六四) エンゲルスが再三――とくに『反デューリング論』(全集、

第二〇巻、一—三三五ページ）のなかで——述べている命題。三五〇

（二六五）労作『ロシア革命とプロレタリアートの任務』（全集、第一〇巻、一二一—一三三ページ）のなかで、レーニンはこれについてもっとくわしく述べている。三五〇

（二六六）**ラトヴィア諸共和国事件**——一九〇五年一二月にラトヴィアの諸都市は蜂起した労働者、農業労働者、農民の武装隊によって占領された。ツァーリの軍隊にたいするパルチザン戦が始まった。一九〇六年一月、ラトヴィアの蜂起は鎮圧された。三五一

（二六七）クロンシタット要塞の水兵と兵士の蜂起はスヴェアボルグ蜂起の情報が伝えられた一九〇六年七月一九日（八月一日）に起こった。同地のボリシェヴィキはかねてから武装蜂起を準備していたが、スヴェアボルグで蜂起が自然発生したので、準備不十分のまま蜂起せざるをえなくなった。ボリシェヴィキは先頭に立ってこれに組織性をあたえるよう極力努力した。合図におうじて地雷中隊の工兵や第一、第二艦隊の水兵がほとんど同時に決起し、武装労働者の一部もこれにくわわった。しかし、スパイから蜂起の時機にかんする情報を得ていた政府はあらかじめ戦闘準備をととのえていた。エス・エルの攪乱的な行動も蜂起の成功を妨げた。七月二〇日（八月二日）の朝までに蜂起は鎮圧されてしまった。政府は蜂起者を無慈悲に処罰した。逮捕された者二五〇〇人あまり、処刑された者三六人。三五一

（二六八）**ベズザグラフツィ**（無標題派）——一九〇五—一九〇七年革命の退潮が始まった時期に結成されたロシアのブルジョア知識人の半カデット的、半メンシェヴィキ的グループ（エス・エヌ・プロコポーヴィチ、イェ・デ・クスコーヴァなど）。一九〇六年一—五月にペテルブルグで発行されていた政治週刊誌『ベズ・ザグラーヴィヤ』（『無標題』）にちなんでこの名称がつけられた。のちにカデット左派の新聞『タヴァーリシチ』（『同志』）の周囲に結集した。ベズザグラフツィは、形式的無党派の名にかくれながら、ブルジョア自由主義と日和見主義の思想を宣伝し、ロシアおよび国際社会民主主義派の修正主義者を支持し、プロレタリアートの独自の政策に反対した。レーニンは「ベズザグラフツィ」を、メンシェヴィキ的カデットまたはカデット的メンシェヴィキとよんだ。三五三

（二六九）**キシニョフのポグロム**（大衆的虐殺、略奪、暴行）——一九〇三年四月に内務大臣ヴェ・カ・プレーヴェによって組織された。帝政ロシアで最も多くの血を流したユダヤ人ポグロムの一つ。数百人が死傷し、数千戸の家が破壊され略奪された。三五四

（二七〇）セドレッツのユダヤ人にたいするポグロムは一九〇六年八月末に組織された。ポグロムのあいだ、同市は銃砲の射撃を受け、数百人の死傷者が出た。三五四

（二七一）**カフカーズの徴発**は、一九〇六年四月一三（二六）日未明、チフリス県ドゥシェト市でおこなわれた。同市駐屯連隊の兵士の服装をした六人の武装した男が衛兵のふりをしてこの地方の公金庫にはいりこみ、三一万五千ルーブリを奪った。

モスクワの徴発は、一九〇六年三月七（二〇）日、商業相互信用協会の銀行でエス・エルによっておこなわれた。約二〇名の武装グループが銀行の警備員の武装を解除して、八七万五千ルーブリを徴発した。三五五

（二七二）**『ノーヴォエ・ヴレーミャ』**（『新時代』）——一八六八年から一九一七年一〇月までペテルブルグで発行されていた日刊新聞。はじめは穏健自由主義的であったが、一八七六年から反動的な貴族および官僚層の機関紙になった。ツァーリ政府に買収されて、革命

運動にたいする攻撃に従事した。一九〇五年以降は黒百人組の機関紙の一つになった。二月革命後、臨時政府の反革命政策を支持して、ボリシェヴィキを攻撃。一九一七年一〇月二六日（一一月八日）ペトログラード・ソヴェト軍事革命委員会によって禁止。二五六

（一七三）　ラトヴィア社会民主労働党の中央機関紙『ツィーニャ』（『闘争』）をさす。一九〇四年三月創刊。断続しながら一九〇九年八月までリガで非合法に出され、その後外国（ブリュッセル）で発行された。その第一〇〇号の記念に、レーニンは特別の論文（全集、第一六巻、二七八—二八二ページ）を書き、この新聞の革命的業績を高く評価した。その後ずっと発行をつづけ、ラトヴィアにソヴェト権力が確立された一九四〇年六月以来、ラトヴィア共産党中央委員会とラトヴィア・ソヴェト社会主義共和国最高会議の機関紙になっている。二五六

（一七四）　ペ・ペ・エス（ポーランド社会党）——一八九二年に創立された改良主義的・民族主義的政党。専制と資本主義に反対するロシア労働者との共同闘争からポーランド労働者を引き離そうと努力した。一九〇六年に分裂、左派は一九一八年にポーランド共産党の結成に参加し、ひきつづきペ・ペ・エスを名のった右派は第一次大戦後独立の回復とともに一時政権をにぎったが、一九二六年のファシスト・クーデターで野党となった。第二次大戦中にふたたび分裂。反動的部分（「自由・平等・独立」党）はロンドン亡命「政府」に参加し、左翼的部分（ポーランド社会主義者労働党）は反ヒトラー抵抗運動に参加、一九四四年解放とともにふたたびペ・ペ・エスと名のり、人民民主主義的ポーランドの建設に参加。一九四八年一二月ポーランド労働党（一九四二年創立）と合同してポーランド統一労働者党を結成した。二五九

（一七五）　小冊子『社会民主党と選挙協定』は、一九〇六年一一月にペテルブルグで「フペリョード」出版所から発行された。五年後の一九一二年に、出版事業委員会はこの小冊子を差し押え、法院はその差押えを確認した。残っていた小冊子は、一九一二年一月三〇日（二月一二日）にペテルブルグ特別市長官管区の印刷所で廃棄された。二六三

（一七六）　『オーコ』（『眼』）——カデット的傾向の自由主義的ブルジョア新聞（日刊）。以前にかわるがわる出されていた『ルーシ』『モルヴァ』『ドヴァツァトイ・ヴェク』（『二〇世紀』）に代わるものとして、一九〇六年八月から一〇月までペテルブルグで発行された。二六三

（一七七）　『ナーシェ・デーロ』（『われわれの事業』）——メンシェヴィキの週刊誌。一九〇六年九月から一一月までモスクワで全部一〇号出された。エヌ・ヴァレンチノフ（エヌ・ヴェ・ヴォリスキー）、ペ・ペ・マスロフ、エヌ・チェレヴァーニン（エフ・ア・リプキン）らが参加。第二国会選挙でカデットとの協定を擁護し、「労働者大会」の思想を宣伝。一九〇七年一—二月、これに代わって『デーロ・ジーズニ』が発行された。二六三

（一七八）　オクチャブリスト——一九〇五年一〇月一七日にツァーリの詔書が発布されたのちに結成された政党「一〇月一七日同盟」。大ブルジョアジーと資本主義的経営をおこなう地主の利益を代表。指導者——グチコフ、ロジャンコ。ツァーリ政府の内外政策を全面的に支持した。二六四、三四九

（一七九）　エヌ・エス——一九〇六年にエス・エル（社会革命党）右派から分立した小ブルジョア的な勤労人民社会党。カデットとのブロックを主張。「共和制の主張もすべての土地の要求も綱領から

取り下げたから、カデットといくらも違わない」(レーニン)。指導者――ペシェホーノフ、アンネンスキー、ミャコーチン。二月革命後トルドヴィキと合同し、臨時政府を支持。十月革命後反革命的陰謀に参加。外国干渉と内戦の時期に消滅。二六五

(一八〇)「メオン」(「平和革新」党)――大ブルジョアジーと地主の立憲君主主義的政党。一九〇六年、第一国会の解散後に結成。オクチャブリストの「左派」とカデットの右派を統合。指導者――ゲイデン、リヴォフ、リャブシンスキー、スタホーヴィチ、トルベツコイ、シポフら。綱領はオクチャブリストに近く、商工業ブルジョアジーと資本主義的経営をおこなう地主の利益を擁護。第三国会で「民主改革」党と合同、「進歩派」フラクションをつくった。二六六

(一八一) ヘルシングフォルスでの敗北――一九〇六年九月(一〇月)ヘルシングフォルスでひらかれたカデット党第四回大会で「消極的抵抗」(ヴィボルグ・アピール)を党の当面の任務と認めるようにとの左派の主張が破れて、これを拒否する中央委員会の決議案が大多数で可決されたことをさす。二六六

(一八二)『タヴァーリシチ』一九〇六年九月二八日(一〇月一一日)付第七三号に掲載されたヴェ・ゴルベフの論文『カデット党の任務に寄せて』をさす。「カデット党には将軍はたくさんいるが、兵士と教官が少ない」と書いてあった。二六六

(一八三)『立憲民主党時報』――正しくは『人民自由党時報』。カデット党の週刊機関誌、一九〇六年二月二二日(三月七日)から一九〇八年二月三(一六)日までペテルブルグで断続的に出ていた。一九一七年の二月革命後に再刊されたが、十月革命後まもなく禁止された。二七〇

(一八四) ゲード派――ジュール・ゲードとポール・ラファルグに指導されたフランス社会主義運動の革命的マルクス主義的潮流。一八八二年フランス労働党の分裂後、旧名称を踏襲して独立。マルクスがその理論的部分を書いた一八八〇年の党綱領を堅持して、プロレタリアートの独自の革命的政策を固守。だが、一九〇五年改良主義的フランス社会党と合同。第一次大戦中社会排外主義に移行した。二七四

(一八五) ジョレス派――フランス社会主義運動の右翼的・改良主義的潮流、A・ミルランとともに「独立社会主義者」グループを創設したジャン・ジョレスの一派。「批判の自由」を口実にマルクス主義の基本的命題の修正を主張し、労資協調を提唱。一九〇二年、フランス社会党を結成、改良主義的立場に立った。二七四

(一八六)『ソズナーテリナヤ・ロシア』(『自覚せるロシア』)――エス・エルの論集。ヴェ・エム・チェルノフの編集で一九〇六年の秋にペテルブルグで合法的に出版された。四集発行された。第三集以後、「現代のテーマにかんする論集」という副題がつけられた。二七六

(一八七) リーフレット『国会にだれをえらぶか?』――第二国会の選挙のまえに書かれた。レーニンは論文『政府による国会の偽造と社会民主主義者の任務』のなかで、このリーフレットのことを、国会選挙に参加している「主要な三政党についてのポスター」とよんでいる(全集、第一一巻、四〇〇ページ参照)。このリーフレットは、はじめ新聞『プロレタリー』第八号の付録として同紙編集局によってヴィボルグで印刷された。ペテルブルグでは一九〇六年に三つの版が出た。そのうち二つは一部省略されており、一つの版だけ完全な形で出ている。また、ハリコフ、コストロマ、イヴァノヴォ・ヴォズネセンスクの各委員会とオビ・グループ、ラトヴィア地

方社会民主党中央委員会とラトヴィア社会民主党中央委員会も、一部省略した形でこれを出版した。二八二

（一八八）　マルクス自身の社会主義的幻想の否認――マルクス＝エンゲルス『第三国際評論、五月から一〇月まで』（全集、第七巻、四三一―四七三ページ）参照。二九一

（一八九）　三十年戦争――ドイツを舞台として一六一八―一六四八年の三〇年間ヨーロッパ諸国をまきこんだ大戦争。いわゆる宗教戦争の一つだが、結局は諸王朝間の対立抗争に帰着した。二九一

（一九〇）　ブレンターノ主義――「プロレタリアートの非革命的〝階級〟闘争を認める自由主義的ブルジョアジーの学説」（レーニン）。工場立法と労働組合によって資本主義の枠内で労働問題を解決できると主張する。ドイツのブルジョア経済学者L・ブレンターノの名による。二九二

（一九一）　ストルーヴェ主義――マルクスの学説から革命的内容を捨てさった「合法マルクス主義」と同じ。その代表者、ロシアのブルジョア経済学者、カデット党の指導者ペ・ヴェ・ストルーヴェの名による。二九二

（一九二）　ゾンバルト主義――ドイツの俗流ブルジョア経済学者ウェルナー・ゾンバルト（一八六三―一九四一）の名による自由主義的ブルジョアジーの一潮流。ゾンバルトは「マルクスの用語を使い、マルクスの個々の主張を引用し、マルクス主義をよそおいながら、マルクス主義をブレンターノ主義にすりかえた」（レーニン）。二九二

（一九三）　インタナショナルの有名な宣言――『フランス＝プロイセン戦争についての国際労働者協会総務委員会の第二の呼びかけ』（全集、第一七巻、二五二―二六一ページ）をさす。二九三

（一九四）　かますの賢明さ――シチェドリンの『童話』にでてくる『賢明なかます』という一編から。臆病な自由主義を皮肉ったもので、ひたすら身の安全をはかって、穴からでることができずに年をとってしまったかますのことがえがかれている。二九五

（一九五）　コミューンの偉業にささげた一つの著作――マルクス『フランスにおける内乱』（全集、第一七巻、二九三―三四四ページ）をさす。二九五

（一九六）　論文『国会選挙とロシア社会民主党の戦術』は、ドイツ語で、一九〇七年三月二七日（新暦）付の雑誌『ノイエ・ツァイト』第二六号に発表された。ついでグルジア語に翻訳され、一九〇七年四月七日と八日付のボリシェヴィキ新聞『ドロー』（『時代』）第二四および第二五号に転載された。

『ノイエ・ツァイト』（『新時代』）はドイツ社会民主党の理論雑誌。一八八三年から一九二三年までシュトゥットガルトで発行。編集者は一九一七年一〇月までカール・カウツキー、それ以後はハインリヒ・クノーであった。二九七

（一九七）　メーリングの論文『ゾルゲ往復書簡』はこの訳書にはふくめられなかった。三〇七

（一九八）　『ソヴレメンナヤ・ジーズニ』（『現代生活』）――メンシェヴィキの雑誌。一九〇六年四月から一九〇七年三月までモスクワで発行。プレハーノフ、マルトフらが寄稿した。三〇七

（一九九）　『オートクリキ』（『反響』）――メンシェヴィキの論文集。一九〇六―一九〇七年に、ペテルブルグで三号出た。マルトフ、ダン、コリツォフらが参加。三〇七

（二〇〇）　イギリスの社会民主主義連盟――一八八四年に創立。改良主義者（ハインドマンら）や無政府主義者とならんでマルクス主義支持者（H・クウェルチ、T・マン、E・エーヴリング、エレオ

ノラ・マルクスら）もこれに参加。一九〇七年社会民主党と改称。一九一一年独立労働党左派とともにブリテン社会党を組織。一九二〇年その大部分の党員がイギリス共産党の創立に参加。三〇八

（三〇一）レーニンがここで引用しているのは、一八八六年一一月二九日付のF・A・ゾルゲにあてたエンゲルスの手紙である。（マルクス＝エンゲルス書簡選集、一九五三年、三九六ページ、参照）三〇九

（三〇二）「労働者大会」——メンシェヴィキのペ・ベ・アクセリロードが一九〇五年に提唱した解党主義的構想。さまざまな労働者組織の代表の大会を招集し、そこで社会民主主義者もエス・エルも無政府主義者も加入できる「広範な労働者党」を設立しようとした。第五回党大会（一九〇七年）はこれを無条件に有害なものとして非難した。三〇九

（三〇三）「労働騎士団」——一八六九年にアメリカ、フィラデルフィアで裁縫師スティーヴンスによって創立された労働者組織で、主として不熟練労働者を結合していた。一八七四年に労働者以外の者にも入団を許されたが、その数は四分の一以下に制限され、弁護士、銀行家、酒類の製造・販売者、職業的投機師、株式仲買人は入団を禁止された。一八八一年まで秘密結社だった。団員数は一八八四年には七万人、一八八六年には七〇万人に達した。目的は労働者の教育と、彼ら自身の連帯によるその利益の擁護にあった。政治闘争を否認し、階級間の協調を説教し、資本主義のすべての悪からの唯一の救済手段は協同組合であると考えていた。一八九〇年代の終りに大衆への影響力を失って解体した。指導者の裏切り政策にもかかわらず、「労働騎士団」はとくにその存立の初期にはアメリカ労働運動で積極的役割を果たした。三〇九

（三〇四）ラサール派——ドイツの小ブルジョア的社会主義者F・ラサールの支持者。一八六三年にブルジョア進歩派に対抗してライプチヒで創立された全ドイツ労働者協会（初代会長ラサール）の会員。普通選挙権の獲得と国家の融資を受ける労働者生産組合の創設を綱領とし、ビスマルク政策（絶対君主制、プロイセン中心主義）を支持。マルクス、エンゲルスはドイツ労働運動内の日和見主義的潮流としてこれを何度も鋭く批判した。三一一

（三〇五）『ツークンフト』（『未来』）——ドイツ社会民主党員の一グループによって一八七七年一〇月から一八七八年一一月までベルリンで発行された社会改良主義的傾向の雑誌。発行者K・ヘヒベルグ。K・シュラムとE・ベルンシュタインが協力した。三一一

（三〇六）講壇社会主義者——大学の講壇から社会主義のよそおいのもとにブルジョア自由主義的改良主義を弁護し、ブルジョア国家の超階級性を主張した一八七〇—八〇年代のブルジョア経済学者たち。その代表者はアドルフ・ワグナー、グスタフ・シュモラー、ロレンツ・ブレンターノ、ヴェルナー・ゾンバルトなど。ロシアでは『合法マルクス主義者』がこの一派の見解を宣伝した。三一三

（三〇七）『ゾツィアル・デモクラート』——ドイツ社会民主党中央機関紙。一八七九年九月から一八八八年九月までチューリヒで、一八九〇年までロンドンで発行された。一八七九年から一八八〇年まではフォルマル、一八八一年一月からは当時エンゲルスの強い影響下にあったベルンシュタインが編集した。個々の誤りにもかかわらず、革命的戦術を堅持した。三一二

（三〇八）『社会科学・社会政策年報』——一八七九—一八八一年に、K・ヘヒベルグによってチューリヒで発行された社会改良主義的傾向の雑誌。全部で三冊出た。三一三

（二〇九）「航路助成金」問題での意見の相違――一八八四年末ドイツのビスマルク首相は植民地政策推進のために東アジア、オーストラリア、アフリカへの航路開設助成金の承認を議会に要求。この問題をめぐって社会民主党議員団内に鋭い意見の対立が生じた。右派はこれを支持したが、その提案（東アジア、オーストラリア航路に賛成、その他については新船をドイツで建造することを条件として同意）が否決されたので、結局社会民主党国会議員団が全体として助成金に反対投票した。エンゲルスは右派の日和見主義的立場を非難した。三二四

（二一〇）二つの国際社会民主主義者大会――一八八九年七月一四―二〇日パリでひらかれた第二インタナショナル第一回創立大会と、同じ時に同じパリでひらかれたフランスのポシビリストとイギリス社会民主主義連盟の大会をさす。三二四

（二一一）ポシビリスト（可能主義者）（P・ブルス、B・マロンら）――一八八二年にフランス労働党から脱落した小ブルジョア的・改良主義的部分。労働者階級の行動を、資本主義のもとで「可能な」（「ポッシブル」な）枠内にとどめようとしたので、この名がある。一九〇二年には、フランス社会党に対立して、他の改良主義的グループといっしょに、日和見主義的なフランス社会党をつくった。二つの社会党は一九〇五年に合同した。三二四

（二一二）フェビアン派――一八八四年にイギリスでブルジョア・インテリゲンツィアの一群によって創立された改良主義的・日和見主義的な「フェビアン協会」にたてこもる一派（ウェッブ夫妻、バーナード・ショー、ラムゼイ・マクドナルドら）。プロレタリアートを階級闘争からそらし、こまごました改良の道によって平和的に資本主義から社会主義へ移行することを説教している。フェビアン協会は一九〇〇年にイギリス労働党に合流した。三二六

（二一三）F・A・ゾルゲにあてたエンゲルスの一八九三年一月一八日付の手紙。三二六

（二一四）ラファルグとフォルマルにたいする批判については、なおエンゲルス『フランスとドイツの農民問題』（一八九四年）参照（大月書店刊、マルクス・エンゲルス選集、第八巻所収）。三二七

（二一五）ドカーズヴィルのストライキ――一八八六年一月に、フランスのドカーズヴィルで自然発生的に起こった二千人の炭坑夫のストライキ。苛酷な労働条件と搾取の強化に反対して起こったこのストライキは五ヵ月つづいたが、結局軍隊によって弾圧された。急進派をふくむブルジョア代議士たちは、ストライキ参加者にたいする弾圧措置を支持した。その結果、労働者代議士は急進派から分離して、独立の労働者議員団をべつにつくった。三二九

（二一六）この序文の次の節（「一八八九年にイギリスで……」）以下終りまでは一九〇七年四月八日付ボリシェヴィキ合法新聞『ナーシェ・エーホ』（『われらのこだま』、一九〇七年三―四月ペテルブルグで発行）第一三号に発表されたが、その記事は右の引用のまえに次の語句から始まっていた。

「まもなくマルクス、エンゲルスとアメリカにいたその僚友ゾルゲとの書簡集がペ・ダウゲ出版社から発行される。

この書物は非常に興味ぶかいものなので、ここに本書のロシア語版への序文の一部――待望のロシア革命にたいするマルクス、エンゲルスの態度にふれている部分を転載しよう。まずフランス革命の意義と起こりうべきドイツ革命についてのエンゲルスの二つの特徴的な批評から始めよう。」三三〇

（二一七）東方の危機――一八七七―一八七八年のロシア＝トルコ

戦争をさす。三二

(二八) ロシアにおける『資本論』の成功――ロシアの個々のすぐれた社会思想家がマルクスの著作をはじめて知ったのはまだ一八四〇年代のことであった。一八七二年にゲ・ア・ロパーチンとエヌ・エフ・ダニエリソンの訳で『資本論』の最初のロシア語版が刊行された。これはまた『資本論』の最初の外国語訳でもあった。『資本論』の出版に関連して、ロシアでは合法雑誌でも非合法出版物でも、有名な評論家や学者のあいだでも革命的青年のサークルでもさかんに論争がおこなわれた。三三

(二九) 「黒い割替」派――初期のナロードニキの革命団体「土地と自由」派が分裂して生まれたもの(他方は「人民の意志」派を結成した)。

「黒い割替」派は、だいたいにおいて「土地と自由」派の政綱を踏襲し、政治闘争の必要を否定し、主として農民のあいだで社会主義の宣伝をする必要を説いた。詳細は本選集、第二巻、事項注一一四参照。三三

(三〇) エンゲルスの手紙――プレハーノフの『われわれの意見の相違』ときたるべきロシア革命の性格についてエンゲルスが書いた手紙は一八八五年四月二三日付のヴェ・イ・ザスーリチあてのものであった。この手紙は一九二五年にはじめて、ソ連で論集『「労働解放」団』第三号に発表された。

(三一) 『ナロードナヤ・ガゼータ』(『人民新聞』)――一九〇七年四月にペテルブルグで発行されたメンシェヴィキの新聞。三五

(三二) 『ナーシエ・エーホ』(『われらのこだま』)――一九〇七年三―四月にペテルブルグで発行されたボリシェヴィキの合法新聞。三五

(三三) 論文『ボイコットに反対する』は一九〇七年七月末に、小冊子『第三国会のボイコットについて』に発表された。この小冊子はペテルブルグにあった非合法の社会民主党印刷所で印刷されたが、表紙には「モスクワ、一九〇七年。ゴリゾントフ印刷所、トヴエーリ街四〇」と、虚構の出版所名が書かれていた。この小冊子は一九〇七年九月に没収された。三六

(三四) 全ロシア教員協会第四回代表者大会――一九〇七年六月一九―二四日(七月二―七日)にフィンランドでひらかれた。大会には、約二千名の教員を代表する九一名の代議員が出席した。そのうち五〇名はエス・エル、二三名は社会民主党員、一八名は無党派。社会民主党員とエス・エルとのあいだに緊迫した思想闘争がおこなわれた。三八

(三五) 一九〇七年六月三(一六)日のクーデター――第二国会の選挙で左翼が進出したのに恐れをなしたストルィピン政府は、社会民主党が軍事組織をつくり、武装蜂起を準備しているという口実をでっちあげ、この日第二国会を解散し、六五名の社会民主党議員を逮捕してシベリアに追放した。同時に、政府は選挙法の改悪をおこなった。新しい選挙法は、地主と商工業ブルジョアジーの代表選出権をずっと強化し、ただでさえ少なかった労働者と農民の代表の数をさらに削減した。この選挙法は、アジア・ロシアの住民の大多数から選挙権をうばい、ポーランドとカフカーズの住民の代表選出権を半分にへらした。この選挙法にもとづいてえらばれて一九〇七年九月に召集された第三国会は、その構成からすれば、黒百人組=カデット的なものであった。この日からストルィピン反動期が始まった。三九

(三六) ヴィッテ国会――一九〇六年四月二七日(五月一〇日)

に召集された第一国会のこと。総理大臣エス・ユ・ヴィッテの作成した国会条令にもとづいているので、この名がある。ボリシェヴィキは第一国会選挙のボイコットを宣言し、それによって国会の権威を落とし、国会にたいする国民の信頼を弱めたが、選挙をやめさせることはできなかった。選挙法は反民主主義的なものであったが、それにもかかわらず、ツァーリは完全に従順な国会をつくることに成功しなかった。四七八名の議員が選出されたが、その内訳はカデット——一七九、民族自治主義者——六三、オクチャブリスト——一六、無党派——一〇五、トルドヴィキ——九七、社会民主党員——一八であった。多数をしめたカデットは、土地改革をふくむいろいろの改革の公約によって農民の信頼をえようとした。

この国会は、一九〇六年六月八（二一）日に、ツァーリ政府によって解散された。三三

（三七）**ストックホルム大会**——ロシア社会民主労働党第四回（統一）大会。一九〇六年四月一〇—二五日（四月二三日—五月八日）にスウェーデンのストックホルムでひらかれた。

大会には、党の五七の地方組織を代表する議決権をもった一一二名の代議員と、評議権をもった二二名の代議員が出席した。そのほかに、非ロシア民族の社会民主主義政党の代表がくわわった。

大会の主要な問題は、土地問題、現情勢とプロレタリアートの階級的任務の評価の問題、国会にたいする態度の問題、組織問題であった。すべての問題について、ボリシェヴィキとメンシェヴィキのあいだに激しい闘争がおこなわれた。レーニンは、土地問題、現情勢、国会にたいする戦術、武装蜂起、その他の問題について、報告や演説をした。

この大会ではメンシェヴィキが優勢であったため、大会の決議にはメンシェヴィキ的な性格をおびたものがあった。いくつかの問題で、メンシェヴィキの決議が通過した（土地問題、国会にたいする態度について、その他）。大会は、党員の資格にかんする規約第一条について、レーニンの定式を採択した。大会は、民族的社会民主主義組織、すなわち、ポーランド・リトワニア社会民主党、ラトヴィア社会民主労働党を、ロシア社会民主労働党に加入させ、またブンドの加入を決定した。

大会でえらばれた中央委員会は、ボリシェヴィキ三名、メンシェヴィキ七名からなっていた。中央機関紙編集局はメンシェヴィキが独占した。

大会の活動の分析は、レーニンの小冊子『ロシア社会民主労働党統一大会についての報告』（全集、第一〇巻、三〇三—三七一ページ）参照。三三七

（三八）レーニンの『統一大会についての報告』の関係箇所（全集、第一〇巻、三三八—三三九ページ）参照。三三七

（三九）**第二国会**は一九〇七年二月二〇日（三月五日）に召集された。議員の色分けは次のとおり。君主主義者とオクチャブリスト——五四、カデットとそれに近い者——九九、少数民族代表——七六、無党派——五〇、カザック・グループ——一七、エヌ・エス（人民社会党）——一六、エス・エル——三七、トルドヴィキ——一〇四、社会民主党——六五、計五一八名。

右翼諸政党は専制政府を無条件支持、カデットは専制との取引に没頭して、その反革命性を完全にさらけだした。社会民主党議員団のなかではメンシェヴィキが多数を占めて、カデットとのブロックを主張し、立憲制にたいする人民の幻想の維持につとめた。レーニンは党の大多数と議員団とのあいだの見解の不一致を指摘し、議員

団の日和見主義的誤りを鋭く批判した。ボリシェヴィキは、ツァーリズムと反革命的ブルジョアジーの裏切り的役割とを暴露し、革命的党綱領を宣言し宣伝するために、自由主義者の影響から農民を解放し、国会内に労働者代表と農民代表との革命的ブロックをつくるために、国会の演壇を利用した。

第二国会の中心的な問題は第一国会と同様に土地問題であった。そのほか、国家予算、困窮者、失業者の救済問題、特赦問題などが審議された。第二国会の議員構成は第一国会よりもずっと左寄りであったが、すでに革命の波が退潮しつつあったので、革命の側に反撃の力がないと見てとったツァーリ政府は、武装蜂起が準備されているという口実をでっちあげて、一九〇七年六月三日に第二国会を解散し、社会民主党議員の全員を逮捕した。三二九

(二三〇) 中央委員会のリーフレット——六月三日のクーデターに関連して出された『党組織への手紙』第一号のこと。ロシア社会民主労働党の中央委員会は、この手紙でこう書いている。「プロレタリアートとその利益の代表者である革命的社会民主党は政府のこの暴力行為を返答なしに抗議なしに放っておくことはできない。社会民主党は革命の継続と発展を放棄しない。」だが、即時行動をおこすことを宣言しないで、党組織にむかって、「発生している大衆運動を最後まで支持して発展させること、そして広範な大衆の積極的な断固とした支持を期待できるところでは、ただちに運動のイニシアチヴをとり同時にそのことを中央委員会に通知すること」を呼びかけるにとどまった。三二四

(二三一) 一八六九年三月三日付のマルクスの手紙のこと。(大月書店刊、国民文庫版『クーゲルマンへの手紙』一〇五ページ参照) 三二六

(二三二) チャーティズム——一八三七年から五八年までイギリスで展開された歴史上最初の広範な、真に大衆的な、政治的に明確なプロレタリア革命運動。チャーティズムという名称は、この運動が労働者階級による政治権力の獲得の手段として掲げた人民憲章(ピープルズ・チャーター)に由来する。三二七

(二三三) モルチャリン根性——モルチャリンは、グリボエドフの戯曲『知恵の悲しみ』中の人物で、無原則的な出世主義者の典型としてえがかれている。三二七

(二三四) バラライキン＝モルチャリン的大成功——バラライキンは、サルトィコフ－シチェドリンの作品『現代の牧歌』のなかの人物。自由主義的ほら吹きで、冒険主義者で、嘘つき。モルチャリンと合わせて俗物の成功をさす。三二八

(二三五) インタナショナルの呼びかけ——マルクス『フランス＝プロイセン戦争についての国際労働者協会総評議会の第二の呼びかけ』をさす。(全集、第一七巻、二五九—二六〇ページ、参照) 三二八

(二三六) 国会についての二つの決議——メンシェヴィキの提案にもとづいて採択されたロシア社会民主労働党第四回(統一)大会(一九〇六年四—五月、ストックホルム)の決議と、ボリシェヴィキの提案にもとづいて採択された第五回党大会(一九〇七年五—六月、ロンドン)の決議をさす。三三〇

(二三七) ボエヴィズム——革命的戦闘隊員を意味するロシア語「ボエヴィク」からつくられたことば。ボエヴィクは、革命的闘争にさいして武装行動の戦術をとり、政治囚の脱獄を助け、革命の必要にあてるために国有資金を徴発し、スパイや挑発者を殺害した、等々。一九〇五—一九〇七年革命のあいだ、ボリシェヴィキは独自の戦闘隊をもっていた。三三二

人名注

（括弧内でゴシック体になっているものは本名を示す）

アウアー、イグナーツ（一八四六—一九〇七）——ドイツの社会民主主義者、馬具職人出身。一八七四年アイゼナッハ派書記、翌年ラサール派と合同後、ドイツ社会労働党（のちに社会民主党）書記。一八七七—七八年『ベルリーナー・フライエ・プレッセ』紙を編集。前後四回国会議員に選出。党内闘争の深化につれて改良主義へ移行、ドイツ社会民主党の日和見主義的一翼の指導者のひとりになった。

アキモフ（**マフノヴェツ**）、**ヴェ・ペ**（一八七五—一九二一）——一八九〇年代の中ごろから革命運動に参加。「在外ロシア社会民主主義者同盟」の右翼的指導者、ベルンシュタイン主義を弁護。メンシェヴィキの最右翼に属す。「経済主義」をアキモフ主義とも言う。のち、協同組合活動に従事し、政治からまったく遠ざかった。

アクセリロード、ペ・ペ（一八五〇—一九二八）——メンシェヴィキの指導者。はじめナロードニキ、「土地と自由」団の分裂にさいして「黒い割替」派に属し、「労働解放」団の創設に参加。『イスクラ』『ザリャー』編集局員。第二回党大会後積極的メンシェヴィキ。一九〇五年プロレタリアート党に対抗する労働者大会の招集を主張、労資協調思想を擁護。反動期には解党派。一九一二年反党的「八月ブロック」に参加。第一次大戦中は中央派。二月革命後ペトログラード・ソヴェト執行委員、ブルジョア臨時政府を支持。十月革命にたいしては敵対的態度をとり、亡命して、ソヴェト・ロシアにたいする武力干渉を提唱。

アルニム‐ズッコウ、ハインリヒ・アレクサンダー（一七九八—一八六一）——プロイセンの外交官、男爵。一八四八年三—六月カンプハウゼン内閣の外相。プロイセン君主制のもとにおけるドイツの国民的統一を主張。

アレクサンドル三世（**ロマノフ**）（一八四五—一八九四）——ロシア皇帝（在位一八八一—一八九四）。

アレクシンスキー、イ・ペ（一八七二年生）——モスクワ大学外科医学講座の教授。ゼムストヴォ活動家、ウラヂーミル県選出第一国会議員。カデット、のちに人民社会党（エヌ・エス）に移った。

イエック、グスタフ（一八六六—一九〇七）——ドイツのジャーナリスト、社会民主党員。一九〇一年以来ドイツ社会民主党左派の機関紙『ライプチガー・フォルクスツァイトゥング』を編集、雑誌『ノイエ・ツァイト』に寄稿。著書『インタナショナル』は何度もロシア語に翻訳された。

イクス →マスロフ、ペ・ペ

ヴァヂーモフ、ヴェ（**ポドヴィッキー、ヴェ・ヴェ**）（一八八一—年ごろ生）——エス・エル右派。一九〇六年にエス・エルの論集『ソズナーテリナヤ・ロシア』に寄稿。十月革命後、ソヴェト権力の積極的な敵となった。

ヴィシネヴェツキー夫人 →ケリー＝ヴィシネヴェツキー、フローレンス

ヴィッテ、エス・ユ（一八四九—一九一五）——帝政ロシアの政治家。蔵相として財政改革（金本位制の採用、保護関税の強化、ウォトカの専売制）や鉄道敷設などによって資本主義の発展を促進した。日露戦争のさいの講和全権。一九〇五年に首相となり、いくらかの譲歩と国会の召集によって革命の終結をはかった。第一国会は

彼の名をつけて「ヴィッテ国会」とよばれた。

ヴェ・ヴェ――一八八〇―九〇年代の自由主義的ナロードニキのイデオローグのひとり、ヴェ・ペ・ヴォロンツォフのペンネーム。

エンゲルス、フリードリヒ（一八二〇―一八九五）

カウツキー、カール（一八五四―一九三八）――第二インタナショナルとドイツ社会民主党の指導者のひとり。はじめマルクス主義者であったが、のちに裏切者となる。日和見主義の最も危険で最も有害な変種――中央主義（カウツキー主義）のイデオローグ。ドイツ社会民主党の理論雑誌『ノイエ・ツァイト』の編集者。

一八七四年から社会主義運動に参加。当時の見解はラサール主義、新マルサス主義、無政府主義の混合であった。一八八一年にマルクス、エンゲルスと知り、その影響下にマルクス主義に移る。八〇―九〇年代に書いた一連の著作は誤りもあったが、マルクス主義の宣伝に役だった。のちに中央主義の思想を説き、公然たる日和見主義者を党内にとどめておくよう主張した。第一次大戦にさいしては社会排外主義の立場にたち、国際主義についての空文句でそれを隠蔽した。超帝国主義論を書いたが、その反動的本質はレーニンによって暴露された。十月革命後、プロレタリア革命とプロレタリア執権（ディクタトゥーラ）に公然と反対し、ソヴェト権力に敵対した。

カーニッツ、アウグスト（一七八三―一八五二）――プロイセンの将軍、反動的な貴族と官僚の代表者、一八四八年五―六月、カンプハウゼン内閣の陸相。

カブルコーフ、エヌ・ア（一八四九―一九一九）――経済学者、統計学者、モスクワ大学教授。農民の階級分化をふせぐものとして土地共同体を擁護、階級平和を説いた。十月革命後ソヴェト政府の中央統計局職員、教育活動に従事。

カムィシャンスキー、ペ・カ――ペテルブルグ裁判所検事。第二国会社会民主党議員団事件の公訴人。一九一〇年ヴャトカ県知事。

カンプハウゼン、ルドルフ（一八〇三―一八九〇）――プロイセンの政治家、ライン地方の自由主義的ブルジョアジーの指導者。一八四八年三月の革命後成立したプロイセン最初のブルジョア内閣の首相（同年三―六月）。カンプハウゼン内閣の裏切り政策は、反動派に短期間に勢力を強化する可能性をあたえ、同内閣はたちまち瓦解した。一八四九年以後、プロイセン第一議会、エルフルト議会、のちに国会議員。一八六〇年代に政界から引退。

キゼヴェッテル、ア・ア（一八六六―一九三三）――ロシアの自由主義的歴史学者、評論家。一九〇〇―一一年モスクワ大学講師。創立以来の「解放同盟」員、のちにカデット党の指導者のひとり。第二国会議員。雑誌『ルースカヤ・ムィスリ』（『ロシア思想』）編集委員。その論文で一九〇五年革命の意義を歪曲。十月革命後ソヴェト政権と積極的に闘争し、一九二二年国外に追放され、白色亡命者の出版物に参加した。

ギールケ――シュテッティン市法律顧問、自由主義者、一八四八年プロイセン国民議会議員（中央左派）。同年三―九月、プロイセンの農相。

クーゲルマン、ルードヴィヒ（一八三〇―一九〇二）――ドイツ社会民主党員、マルクスの友人、第一インタナショナル会員。ドイツの一八四八―四九年革命に参加。インタナショナルのローザンヌ大会（一八六七年）とハーグ大会（一八七二年）の代議員。マルクス『資本論』の出版と普及に協力。一八六四年から一八七四年までマルクスと文通し、ドイツの情勢をマルクスに知らせた。

グチコーフ、ア・イ（一八六二―一九三六）――大資本家、オク

チャプリスト党の創立者で指導者。二月革命後、第一次臨時政府の陸海軍相。コルニーロフ反乱の組織に参加。十月革命後はソヴェト権力とたたかい、のち亡命。

クートレル、エヌ・エヌ（一八五九―一九二四）――カデット党の有力な活動家、ツァーリ政府の大蔵省給与局長、のちに農業・土地管理大臣。農民のあいだに専制の支柱をつくろうとする農業綱領案の起草者のひとり。十月革命後ソヴェト政府の財務人民委員部で働き、一九二二年以後ソ連ゴスバンク（国立銀行）理事。

クヌニャンツ、ベ・エム（ラーヂン、ベ）（一八七八―一九一一）――ボリシェヴィキ、職業革命家。一八九七年ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」で革命活動を開始。一九〇一年バクーに追放され、バクーおよびカフカーズ党委員会を指導。一九〇五年ボリシェヴィキから最初のペテルブルグ労働者代表ソヴェト執行委員会に参加。反動期には戦術問題で少し動揺を示した。一九一〇年捕えられ、翌年バクーで獄死。

クリチェフスキー、ベ・エヌ（一八六六―一九一九）――社会民主主義者、評論家、「経済主義」のリーダーのひとり。亡命後『ラボーチェエ・デーロ』の編集者、ベルンシュタイン主義を宣伝。第二回党大会後、運動から離れた。

グリングムート、ヴェ・ア（一八五一―一九〇七）――反動的評論家。一八九七―一九〇七年、君主主義的新聞『モスコフスキエ・ヴェードモスチ』編集者。一九〇五―〇七年革命期には黒百人組的「ロシア国民同盟」の組織者・指導者のひとり。

グレデスクール、エヌ・ア（一八六四生）――法学者、教授、評論家。一九〇五年当時カデット党中央委員。第一国会議員、同副議長。「ヴィボルグ・アピール」（第一国会解散後、同議員有志が人民に消極的抵抗を訴えたもの）に署名し、逮捕投獄された。出獄後、自由主義的新聞に執筆。一九一六年カデットから離党。十月革命後、ソヴェト政権を支持、レニングラードの諸大学の教授となる。

グローマン、ヴェ・ゲ（一八七四年生）――メンシェヴィキ。第四回党大会に提出された農業綱領案の一つを起草。『ナーシェ・デーロ』誌の編集に参加。反動期には解党派。二月革命の当初からペトログラードの食糧業務を指導。十月革命後、ソヴェト機関の経済・行政業務に従事。一九三一年、反革命活動のかどで有罪を宣告された。

ケリー＝ヴィシネヴェツキー、フローレンス（一八五九―一九三二）――アメリカの社会主義者（ロシア人と結婚）。エンゲルスの著書『イギリスにおける労働者階級の状態』を英訳。のちに改良主義的立場に移った。

ゲルツエンシュテイン、エム・ヤ（一八五九―一九〇六）――経済学者、モスクワ農業大学教授、カデット党のリーダー、同党の農業問題理論家、第一国会議員。同国会解散後、フィンランドで黒百人組に暗殺された。

コリツォフ、デ（ギンズブルグ、ベ・ア）（一八六三―一九二〇）――メンシェヴィキ。一九〇五―〇七年革命当時はペテルブルグの労働組合運動に参加。反動期には解党派。第一次大戦期には社会排外主義者。二月革命後、ペトログラード・ソヴェト労働委員。十月革命に敵対的な態度をとっていたが、のちペトログラードで協同組合運動に従事。

ゴローヴィン、エフ・ア（一八六七年生）――一八九八―一九〇八年モスクワ県ゼムストヴォ参事会員および同議長、カデット党の組織者のひとり、モスクワ市選出第二、第三国会議員（第二国会で

はメンシェヴィキの支持を得て議長)。大鉄道利権企業に参加。一九一〇年国会議員辞任。一九一七年三月ブルジョア(第一次)臨時政府の宮内省コミサール(政府委員)。十月革命後火災保険業務に従事。

シッペル、マックス(一八五九—一九二八)——ドイツの社会民主主義者、修正主義者。一八八七—九〇年新聞『ベルリナー・フォルクストリビューネ』を編集。一八九七年からドイツ日和見主義者の雑誌『社会主義月刊』に参加。一八九〇—一九〇五年国会議員となり、ドイツ帝国主義を擁護。第一次大戦中極端な社会排外主義者。晩年(一九二三—二八年)はドレスデン工業大学教授。反ソ的立場にたった。

シポフ、ドミトリー・ニコラエヴィチ(一八五一—一九二〇)——大地主、ゼムストヴォ運動の活動家、穏健自由主義者。ツァーリの諮問に答える代議機関をふくむ国家組織草案を作成。一九〇五年オクチャブリスト党の指導者、のちに「平和革新党」に入党。一九一一年政治活動から引退。十月革命後、白衛派の指導者。

シャッパー、カール(一八二〇ごろ—一八七〇)——義人同盟の指導者、のち共産主義者同盟中央委員。一八四八—四九年ケルンを中心に活動。一八五〇年共産主義者同盟の分裂にさいしマルクスに反対したが、のち誤りを認めた。一八六五年第一インタナショナル総評議会のメンバー。

シュヴェーリン、マクシミリアン(一八〇四—一八七二)——プロイセンの政治家、反動的な貴族と官僚の代表者、一八四八年三—六月、カンプハウゼン内閣の文化・教育・医療相。フランクフルト国民議会議員、その最右翼。一八五九—六二年内相。晩年には大ブルジョアジーの利益を代表する国民自由党に所属。

シュラム、カール・アウグスト——ドイツの経済学者、自由主義者として政治活動を始め、一八七〇年のはじめにドイツ社会民主党に入党。一八七九—九二年ベルンシュタイン、ヘヒベルグとともに『社会科学・社会政策年報』を出し、党の革命的戦術を非難し、ブルジョアジーとの同盟を呼びかけた。

ジョージ、ヘンリー(一八三九—一八九七)——アメリカの経済学者、評論家。ブルジョア国家による土地国有化を主張。労資対立を否定し、資本家の利潤を自然の法則とみなした。

ジョレス、ジャン(一八五九—一九一四)——フランス社会党の創立者、その右翼の指導者。改良主義的見解をもち、ブルジョア政府へのミルランの入閣を支持。しばしば国会議員に当選。新聞『ユマニテ』を創刊。ドレフュス事件で反動派とたたかい、軍国主義と戦争に反対する勇敢な闘士であったが、第一次大戦の直前、一九一四年七月三一日熱狂的な排外主義者に暗殺された。

スヴォーリン、ア・エス(一八三四—一九一〇)——はじめ自由主義者、のちに反動的貴族・官僚の機関紙、反ユダヤ主義的『ノーヴォエ・ヴレーミャ』(『新時代』、一八六八—一九一七)の編集者。

スタロヴェル →ポトレソフ、ア・エヌ

ステプニャク(エス・エム・クラフチンスキー)(一八五二—一八九五)——革命的ナロードニキ。「土地と自由」団で活動。一八七八年八月ペテルブルグで憲兵隊長メゼンツェフを暗殺して逃亡。ロンドンで「ロシア自由出版基金」を組織。

ストルィピン、ペ・ア(一八六二—一九一一)——帝政ロシアの政治家、大地主。一九〇六—一一年首相および内相。政治的反動と革命運動のきびしい弾圧の時代(一九〇七—一〇年)は彼の名と結びついている(「ストルィピン反動」)。富農経営創設のために農地

改革を実施したが失敗。キエフでエス・エル党員のボグロフに暗殺された。

ストルーヴェ、ペ・ベ（一八七〇―一九四〇）――一八九〇年代には「合法マルクス主義者」、カデット党創立とともにその中央委員、反動期には黒百人組的民族主義者、ロシア帝国主義の思想的代弁者、十月革命後はソヴェト権力の狂暴な敵。

ズブチェンコ、ゲ・エリ（一八五九年生）――農民、郷〔ヴォーロスチ〕長、カデット、キエフ県選出第一国会議員。トルドヴィキが第一国会に上程したいわゆる「三三人案」に署名した。

ゾルゲ、フリードリヒ・アドルフ（一八二八―一九〇六）――ドイツの社会主義者、マルクス、エンゲルスの僚友。一八四八―四九年革命に参加。革命後スイスおよびアメリカに亡命。第一インタナショナル・アメリカ支部を組織。一八七二―七四年第一インタナショナル総評議会書記。（ソ連のために情報活動をおこなったかどで一九四四年に日本で処刑されたリヒアルト・ゾルゲは彼の孫にあたる）

タグ――イン（トロイツキー、ア・ゲ）――統計学者。一九〇五年エス・エル左派「マクシマリスト」に所属。十月革命後、一時ロシア共産党（ボ）の党員となったが、一九二一年離党、政治活動から遠ざかって、ソヴェト機関で統計学者として働いた。

タッシー　→マルクス-エーヴリング、エリナー〔エレオノーラ〕

ダニエリソン、エヌ・エフ（ニコライ――オン）（一八四四―一九一八）――ロシアの経済学者、評論家、一八八〇―九〇年代の自由主義的ナロードニキのイデオローグのひとり。ゲ・ア・ロパーチンが始めたマルクス『資本論』の最初のロシア語訳を完成。それに関連してマルクス、エンゲルスと文通もしたが、マルクス主義の本質をついに理解せず、のちにこれに反対した。その著書『改革後のわが国の社会経済概要』（一八九三年）はヴォロンツォフ（ヴェ・ヴェ）の著作とともに自由主義的ナロードニキ主義の理論的基礎となった。

チェルノフ、ヴェ・エム（一八七六―一九五二）――エス・エルの指導者、理論家のひとり。一九〇二―〇五年エス・エル中央機関紙『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』の編集者。マルクス主義理論は農業に適用できないことを立証しようと試みた。二月革命後臨時政府の農相として地主の土地を奪取した農民を弾圧。十月革命後、反ソ活動をおこない、一九二〇年国外亡命後もつづけた。

チェレヴァーニン、エヌ（リプキン、エフ・ア）（一八六八―一九三八）――メンシェヴィキの指導者、極端な解党主義者。第四回、第五回党大会に参加。解党にかんする一六人のメンシェヴィキの『公開状』（一九一〇年）の起草者のひとり。一九一二年八月の反党協議会（八月ブロック）後メンシェヴィキ本部員。第一次大戦中社会排外主義者。一九一七年メンシェヴィキ中央委員、『ラボーチャヤ・ガゼータ』編集員。十月革命に敵対的態度をとった。

チューネン、ヨハン・ハインリヒ（一七八三―一八五〇）――ドイツのブルジョア的農業経済学者、大地主。主として地代論を研究。労資間の敵対的矛盾を否認して、階級平和を提唱。主著――『孤立国』（一八二六年）。

ツェデルバウム、ユ・オ　→マルトフ、エリ

ティエール、ルイ・アドルフ（一七九七―一八七七）――フランスの反動政治家、歴史家、弁護士。一八三〇年六月革命後しばしば大臣および首相。一八四八年には反革命的「秩序党」のリーダー。一八七一年二月首相となり、パリ・コミューンを残忍に弾圧。

ディーツゲン、ヨーゼフ（一八二八―一八八八）――ドイツの皮革工、すぐれた社会民主主義者、哲学者。独学で弁証法的唯物論に到達。一八四八年のドイツ革命に参加したが、その敗北後欧米へ亡命。一八六四―六八年ペテルブルグの皮革工場で働きながら著書『人間の頭脳の働きの本質』や『資本論』第一巻の紹介を書いた。六九年帰国しマルクスと知り、党活動に積極的に参加。八四年ふたたび渡米、アメリカ社会労働党機関紙『ソーシャリスト』を編集、一連の哲学書を著述した。

デューリング、オイゲン（一八三三―一九二一）――ドイツの哲学者、経済学者、小ブルジョア思想家。その哲学的見解は実証論、形而上学的唯物論、観念論の折衷的混合。その反動的空想的「社会」経済体系はプロイセンの半農奴制的経済形態を理想化した。彼の見解は、ドイツ社会民主党の一部にも支持者を見いだしたが、エンゲルスの『反デューリング論』によって徹底的に粉砕された。

ドゥバーソフ、エフ・ヴェ（一八四五―一九一二）――待従武官長、海軍大将。一九〇五年チェルニゴフ、ポルタワ、クールスク諸県の農民運動の弾圧を指導。同年一一月からモスクワ総督。一二月のモスクワ武装蜂起の弾圧を指導。一九〇六年から参議院議員、一九〇七年から国防会議の一員。

トゥラティ、フィリッポ（一八五七―一九三二）――イタリアの改良主義者。一八九二年イタリア社会党の創立に参加、その右派の指導者。労資協調政策をとり、第一次大戦中は「中央派」、戦後は反コミンテルンの立場にたった。一九二六年フランスへ亡命。

ドゥンカー、F――ドイツの自由主義的ブルジョア。一八六八年にM・ヒルシュとともに改良主義的労働組合を創設した。

トライチケ、ハインリヒ（一八三四―一八九六）――ドイツの歴史学者。反動的プロイセン主義、排外主義、人種主義のイデオローグ。雑誌『プロイセン年鑑』を編集。国会議員としてビスマルクの内外政策を支持し、社会主義者取締法を歓迎。主著――『一九世紀ドイツ史』全五巻。レーニンは彼を「警察官僚的歴史学者」とよんだ。

トルベツコーイ、セルゲイ・ニコラエヴィチ（一八六二―一九〇五）――公爵、観念論哲学者、自由主義者。穏健な憲法でツアーリズムを強化しようとした。一九〇五年ゼムストヴォ代表団の一員としてツァーリのまえで綱領的演説をおこなった。同年、モスクワ大学総長に選ばれたが、学内における学生の公然たる革命的行動を恐れて、大学の一時閉鎖に同意した。

トレポフ、デ・エフ（一八五五―一九〇六）――一八九六―一九〇五年モスクワ警視総監、一九〇五年一月一一日からペテルブルグ総督、のちに内務次官。労働者を堕落させるズバートフのたくらみに協力。「全ロシアから最も憎悪されたツァーリズムの従僕のひとり」（レーニン）。一九〇五年一〇月、革命運動の弾圧のために「空包射撃をやるな、実弾を惜しむな」と命令した。

トロツキー（ブロンシテイン）、エリ・デ（一八七九―一九四〇）――第二回党大会後メンシェヴィキ。一九〇五年革命にさいしパルヴスの「永続革命」論を支持。反動期には解党派。一九一二年反党的八月ブロックを組織。第一次大戦中は「中央派」。二月革命後、「メジュライオンツイ」グループに加入。第六回党大会で同グループとともにボリシェヴィキ党に加入。十月革命後、外務人民委員、陸海軍人民委員、革命軍事会議議長の要職についたが、ブレスト講和（一九一八年）、労働組合論争（一九二〇―二一年）、社会主義建設の基本方針（一九二三年）等の諸問題でレーニンと党中央部に反

対、その後も反党的反国家的分派活動をつづけ、一九二七年党から除名、一九二九年国外追放。外国で反ソ活動をつづけていたが、一九四〇年メキシコで暗殺された。ソ連共産党はトロツキズムを党内の小ブルジョア的偏向としてきびしく批判した。

ニコライ二世（ロマノフ）（一八六八—一九一八）——ロシア最後の皇帝（在位一八九四—一九一七）。一九一八年七月、反乱したチェコスロバキア軍団の占領の脅威のもとにエカテリンブルグ（現在のスヴェルドロフスク）でウラル州ソヴェトの決定により銃殺された。

ニコライ—オン　↓ダニエリソン、エヌ・エフ

ノヴゴロドツェフ、ペ・イ（一八六六—一九二四）——観念論哲学者、カデット。一八九六—一九一三年、モスクワ大学で法哲学史を講義。第一国会議員。十月革命後、外国へ亡命。

ハインドマン、ヘンリー・メアズ（一八四二—一九二一）——イギリスの社会主義者、ジャーナリスト。マルクスの影響下に社会主義宣伝を始め、一八八一年民主主義連盟（のちの社会民主主義連盟）を創立。フランスのポシビリストとともに一八八九年のパリ国際労働者大会の指導権をにぎろうとして失敗。一九〇〇—一〇年国際社会主義ビューローの一員。一九一六年、帝国主義戦争に有利な宣伝をおこなってイギリス社会党から除名。十月革命を敵視し、反ソ干渉を支持した。

バクーニン、ミハイル・アレクサンドロヴィチ（一八一四—一八七六）——無政府主義の思想的代表者。ロシアの貴族の家に生まれたが、一八四〇年以来外国に居住し、専制と農奴制を鋭く批判、貴族の称号を剝奪された。四八年のプラハ蜂起、四九年のドレスデン蜂起に参加して逮捕され、ロシアへ送還。獄中でツァーリに懺悔の手紙を書き、転向を誓った。五七年シベリアへ流刑。六一年国外へ逃亡。六三—六四年のポーランド解放運動に協力。六八年以来第一インタナショナルに参加。その内部に無政府主義者の秘密結社を組織、総務委員会を乗っ取ろうとし、マルクスの主張により七二年除名。

バクーニンの理論はプルードン主義と共産主義の混合で、生産手段の共有を個人の「絶対的自由」と結合し、国家の廃止を主張。プロレタリアートの世界史的役割を否認し、ルンペン・プロレタリアートと小ブルジョアの利益を表現。レーニンの定義によれば、バクーニン主義は「みずからの救済に絶望した小ブルジョア」の世界観であった。

ハーコート、ウィリアム（一八二七—一九〇四）——イギリス自由党員、弁護士、下院議員、検事次長。グラッドストン内閣の内相、蔵相を歴任。グラッドストンのあとを受けて自由党党首。

バダムシン、ゲ・エス（一八六五年生）——カデット左派、カザン県選出第一、第二国会議員。トルドヴィキが第一国会に上程したいわゆる「三三人案」に署名した。

パルヴス（ゲリファンド）、ア・エリ、（一八六九—一九二四）——メンシェヴィキ。亡命中ドイツ社会民主党左派に所属。一九〇五年革命のころ、ロシアにおいてメンシェヴィキの新聞『ナチャーロ』に協力。ブルィギン国会への参加を主張。カデットとの小さな取引を要求。反マルクス主義的「永続革命論」をとなえたが、これはのちにトロツキーによって反レーニン主義闘争の武器として利用された。反動期には党から去り、第一次大戦中は社会排外主義者、ドイツ帝国主義の手先となり、同時に大がかりな投機をやり、軍需注文で儲けた。一九一五年以後雑誌『グロッケ』（『鐘』）を出した。レ

ーニンによれば、これは「ドイツにおける裏切りと下僕根性」の機関誌だった。

バーンズ、ジョン・エリオット（一八五八―一九四三）――イギリスの政治家、もと有名な労働運動家、機械工出身。一八八〇年代には労働組合を指導し、一八八九年のロンドン沖仲仕ストライキに参加。のちに労働者階級を裏切り、一八九二年国会議員、一九〇五―一四年地方自治大臣、一九一四年商業大臣となったが、同年八月辞職し、その後は積極的な政治的役割を演じなかった。

ハンゼマン、ダーヴィト・ユストゥス（一七九〇―一八六四）――ドイツの大資本家、ライン地方の自由主義的ブルジョアジーのリーダー。一八四八年プロイセン国民議会議員。同年三―九月、カンプハウゼン内閣とアウエルスヴァルト内閣の蔵相。ことに後者では指導的役割を演じ、この内閣は「ハンゼマン内閣」とさえよばれた。反動派との妥協政策を遂行。のちに政界を去り、ベルリン割引銀行を創立。

ビスマルク、オットー・エドゥアルト・レオポルト（一八一五―一八九八）――ドイツ帝国初代宰相（一八七一―一八九〇）。鉄血宰相とよばれ、ドイツの統一を実現し、ユンカー（地主貴族）と大ブルジョアジーの同盟を確保。社会主義者取締法を制定。それでも労働運動を圧殺しえないので、社会立法の約束で労働者をあざむこうとしたが、成功しなかった。

ビュヒナー、ルードヴィヒ（一八二四―一八九九）――ドイツのブルジョア哲学者、医師。俗流唯物論の主要な代表者、改良主義者。自然科学を世界観の基礎と考えたが、弁証法を無視し、自然と社会にたいする機械論的見解を復活させた。主著――『力と質料』（一八五五年）。

ヒルキット、モリス（一八六九―一九三三）――アメリカ社会党の創立者、弁護士。はじめマルクス主義に同調していたが、のちに改良主義、日和見主義に転落。リガに生まれ、一八八六年アメリカに亡命。第二インタナショナルの活動に参加。社会主義の歴史について一連の改良主義的な著作をあらわした。

ヒルシュ、M――ドイツの自由主義的ブルジョア。一八六八年にF・ドゥンカーとともに改良主義的労働組合を創設した。

フィーレック、ルイ（一八五一―一九二一）――ドイツの社会民主主義者、日和見主義者、デューリングの後継者。一八八四―八六年国会議員。一八九六年アメリカへ亡命。労働運動から遠ざかる。第一次大戦中カイゼル・ドイツを支持し、親独的論文を米紙に発表した。

フィン-エノタエフスキー、ア・ユ（一八七二―一九四三）――経済学者、評論家。一九〇三―一四年ボリシェヴィキに属す。一九〇六年、第四回党大会に提出する農業綱領起草委員会に参加、土地の国有化に反対して、没収した地主の土地は私有財産として農民に分配することを主張。第一次大戦中、排外主義者。経済問題にかんする一連の著作でマルクス主義を歪曲。一九三一年、メンシェヴィキ反革命組織の事件で有罪を宣告された。

フォイエルバッハ、ルードヴィヒ・アンドレアス（一八〇四―一八七二）――ドイツのすぐれた哲学者。はじめヘーゲル左派の観念論者、のち唯物論に移り、鋭い宗教批判をおこなったが、人間を感性的存在としてのみとらえ、認識と社会発展における実践の役割をつかみえなかった。晩年社会主義に関心をよせ、『資本論』を読み、一八七〇年ドイツ社会民主党に入党した。

フォルマル、ゲオルク・ハインリヒ（一八五〇―一九二二）――

ドイツ社会民主党の日和見主義的一翼の指導者のひとり。はじめ革命的であったが、のちに保守的になり、社会主義者取締法の廃止(一八九一年)後、党活動を改良のための闘争に限定し、政府と協定することを提唱、「国家社会主義」思想を主張した。しばしば国会議員に当選。第一次大戦中、社会排外主義の立場にたつ。

フョードロフ、エム・ペ(一八四五年生)――商工業ブルジョアジーの代表者のひとり、ゼムストヴォ運動の著名な活動家、カデット。ペテルブルグ市議会議員、第二国会議員。一九〇五―〇七年革命に対抗する自由主義ブルジョアジーのツァーリズムとの取引で顕著な役割を演じた。

ブラッケ、ヴィルヘルム(一八四二―一八八〇)――ドイツの社会主義者、ドイツ社会民主党の創立者のひとり。党出版物の主要な出版者、普及者。マルクス、エンゲルスに近い立場にあった。

ブラン、ルイ(一八一一―一八八二)――フランスの小ブルジョア社会主義者、歴史家。資本主義のもとでの階級対立の非和解性を否認し、プロレタリア革命に反対し、労資協調の立場にたち、それによってブルジョア反動の強化を助けた。フランスの一八四八年二月革命のさい、臨時政府に入閣、労働問題政府委員会の議長をつとめた。六月蜂起の弾圧後、イギリスに亡命、一八七〇年帰国。翌年国民議会議員に選ばれたが、パリ・コミューンには参加せず、反動政府の側に立った。

ブランキ、ルイ・オギュスト(一八〇五―一八八一)――フランスの革命家、ユートピア共産主義の代表者。一八三〇―七〇年代のあいだパリの多くの蜂起や革命に参加し、一連の秘密結社を指導し、通算三六年間入獄していた。革命家の小グループの陰謀による権力奪取と賃労働からの解放をめざし、階級闘争を否定し、大衆組織が革命的闘争に果たす決定的役割を理解しなかった。

ブルィギン、ア・ゲ(一八五一―一九一九)――帝政ロシアの政治家、大地主。予審判事のちに数県の知事。一九〇〇―〇四年モスクワ副総督としてズバトフの政治警察活動を助成。一九〇五年一―一〇月内相。ツァーリの特命をうけて全国にたかまる革命の気運を弱めるために諮問議会召集の法律草案を起草したが、革命に一掃されて、成功しなかった。一九〇五年一月一七日の詔勅発布後、辞職。

ブルガコフ、エス・エヌ(一八七一―一九四四)――ロシアのブルジョア経済学者、神秘主義哲学者。はじめ「合法マルクス主義者」としてマルクスの農業理論の修正を試み、一九〇五年革命後、カデット。十月革命後、司祭となったが、一九二二年反革命活動のかどで国外追放に処せられた。

ブルース、ポール・ルイ・マリ(一八四四―一九一二)――フランスの社会主義者、社会改良主義のイデオローグ。パリ・コミューン(一八七一年)に参加したが、その崩壊後スペインのちにスイスに亡命。亡命中バクーニンと知り、無政府主義に共鳴。八〇年代はじめに帰仏、労働党に入党し、マルクス主義と激しくたたかい、ポシビリストの指導者となる。パリ市議会議員。九〇年代以降フランス労働運動でなんの役割も演じなくなった。

プルードン、ピエール・ジョセフ(一八〇九―一八六五)――フランスの小ブルジョア社会主義者、無政府主義の理論的創始者のひとり。もと植字工。小生産者の私的所有を保障するユートピアを夢み、労働者階級の革命的進出に反対し、一八五一年一二月のボナパルト主義的変革を支持した。マルクスは『哲学の貧困』でプルードンをきびしく批判した。

プレハーノフ、ゲ・ヴェ（一八五六―一九一八）――ロシアにおけるマルクス主義の最初の宣伝家、レーニン以前の主要な理論家。はじめレーニンと協力していたが、第二回党大会後メンシェヴィキに加担。反動期には党支持派、第一次世界大戦期には社会排外主義者。十月革命に反対した。くわしくは第一巻人名注参照。

ブレンターノ、ルヨ（一八四四―一九三一）――ドイツのブルジョア経済学者、一八九六年いらいミュンヘン大学の経済学教授、講壇社会主義者。労働者階級の団結の自由を認め、それを介してその経済的地位を資本主義の枠内で改善させることが社会政策の基本的課題だと考えた。

プロコポーヴィチ、エス・エヌ（一八七一―一九五五）――経済学者。一八九〇年末には「経済主義」の極右的代表者、のち「解放同盟」の活動家、一九〇六年にはカデット党中央委員。半カデット的、半メンシェヴィキ的雑誌『ベズ・ザグラーヴィヤ』（『無標題』）の編集・発行人。二月革命後、臨時政府の商工相および食糧相。十月革命後、反ソ活動のかどで国外追放。

ペシェホーノフ、ア・ヴェ（一八六七―一九三三）――評論家、一九〇三―〇五年「解放同盟」に参加、一九〇六年以後エヌ・エスの指導者。二月革命後臨時政府の食糧相。十月革命後ソヴェト権力に敵対。一九二二年国外へ亡命。

ベッカー、ヨハン・フィリップ（一八〇九―一八八六）――ドイツおよび国際労働運動の活動家、マルクス、エンゲルスの僚友、もとブラシ製造労働者。一八四八―四九年革命に参加、バーデン・プファルツ蜂起の国民軍を指揮。第一インタナショナルの創設（一八六四年）に参加。雑誌『フォールボーテ』を編集。無政府主義者との闘争の初期に理論的未熟と動揺を示したが、インタナショナル内でマルクスの路線を擁護した。

ペトルンケヴィチ、イ・イ（一八四四―一九二八）――地主、ゼムストヴォ活動家、カデット。一九〇四年に「解放同盟」議長。一九〇四―〇五年のゼムストヴォ大会に参加。カデット党創立者、同中央委員会議長。第一国会議員。十月革命後、亡命。

ヘヒベルグ、カール（一八五三―一八八五）――ドイツの右翼社会民主主義者、ジャーナリスト、大商人の子。党に財政的援助をあたえ、雑誌『ツークンフト』（『未来』）その他を発行。社会主義者取締法制定後シュラムおよびベルンシュタインとともに論文『ドイツ社会主義運動の回顧的概論』を書いて、党の革命的戦術を非難し、「労働者階級は自分の手でみずからを解放することはできない」として、ブルジョアジーとの同盟を呼びかけた。

ベーベル、アウグスト（一八四〇―一九一三）――ドイツおよび国際労働運動の著名な活動家。第一インタナショナル会員、ドイツ社会民主労働党（アイゼナッハ派）の創立者。ベルンシュタイン主義とたたかったが、後年いくつかの中央主義的誤りをおかした。

ベルヂャーエフ、エヌ・ア（一八七四―一九四八）――反動的観念論哲学者、神秘主義者。はじめ「合法マルクス主義」に同調し、新カント主義の立場からマルクス学説の修正を試み、一九〇五年カデットに入党、反動期には求神主義の代表者のひとり。十月革命後、封建主義と中世紀的スコラ哲学を擁護し、一九二二年、反革命活動のかどで国外追放に処せられ、神秘哲学の説教をつづけた。

ベルンシュタイン、エドゥアルト（一八五〇―一九三二）――ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの極端に日和見主義的な一翼の指導者、修正主義と改良主義の理論家。一八九六―九八年『ノイエ・ツァイト』誌に『社会主義の諸問題』と題する論文を連

載し、革命的マルクス主義の哲学的・経済学的・政治的基礎の修正を試み、階級闘争理論、資本主義の必然的崩壊、社会主義革命、プロレタリア執権の学説を否定した。

ポトレソフ、ア・エヌ（スタロヴェル）（一八六九―一九三四）―メンシェヴィキの指導者。『イスクラ』『ザリャー』の編集に参加。反動期には解党派。第一次世界大戦期には社会排外主義者。二月革命後、悪質なボリシェヴィキ攻撃をおこなう。十月革命後、国外へ亡命。

ボルン、シュテファン（ブッターミルヒ、ジーモン）（一八二四―一八九八）―ドイツの植字工。エンゲルスと知り合い、共産主義者同盟に加入。一八四八年革命に参加。「労働者親睦会」を創立、右翼日和見主義的立場をとった。一八四九年の革命後、スイスに亡命、教授となる。

マスロフ、ペ・ペ（一八六七―一九四六）―経済学者、社会民主主義者。第二回党大会後メンシェヴィキ。土地公有化を提唱。反動期には解党派。第一次大戦中には社会排外主義者。十月革命後政治から離れ、教育と学術研究に専念。一九二九年以後ソ連科学アカデミー正会員。

マニング、ヘンリー・エドワード（一八〇八―一八九二）―イギリス・カトリック教会の枢機卿（一八七五年以来）。法王の現世における権力の熱心な擁護者として有名。しばしば労働争議の調停者の役割を演じた。

マヌィロフ、ア・ア（一八六一―一九二九）―経済学者、カデット党員、『ルースキエ・ヴェードモスチ』編集局員、モスクワ大学総長、参議院議員。二月革命後、臨時政府の文相。十月革命後、亡命、のち帰国して諸大学の教職につく。

マラホフ、エヌ・エヌ（一八二七年生）―ツァーリの将軍。一八四九年ハンガリー革命の弾圧に参加。一八七七―七八年露土戦争に従軍。一九〇三―〇五年モスクワ軍管区副司令官、一九〇五年二月―一九〇六年一月同司令官。モスクワの十二月蜂起を弾圧した直接の責任者。一九〇六年以後、陸軍省に勤務。

マルクス、カール（一八一八―一八八三）

マルクス－エーヴリング、エリナー〔エレオノーラ〕（愛称タッシー）（一八五五―一八九八）―イギリスおよび国際労働運動の活動家、マルクスの末娘（四女）。イギリスの自然科学者、社会主義者エドワード・エーヴリングの妻。イギリスの社会民主主義連盟（一八八四年）と独立労働党（一八九三年）の創立者のひとり。マルクスの死後エンゲルスの指導を受け、未熟練労働者の大衆運動に参加し、一八八九年のロンドン沖仲仕ストライキを組織。

マルトィノフ、ア（ピーケル、ア・エス）（一八六五―一九三五）―はじめ「人民の意志」派、のちに社会民主主義者、「経済主義」の理論家。第二回党大会後メンシェヴィキ、第一次大戦中国際派（マルトフ派）。十月革命後ロシア共産党に入党、コミンテルンで活動した。

マルトフ、エリ（ツェデルバウム、ユ・オ）（一八七三―一九二三）―はじめペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」や『イスクラ』でレーニンと協力。第二回党大会後、メンシェヴィキの指導者、その主要な理論家。反動期には解党派。第一次大戦中は「中央派」。二月革命後、国際派メンシェヴィキを指導。十月革命後、ソヴェト権力に反対し、ドイツに亡命。

マン、トム（一八五六―一九四一）―イギリスの著名な労働運動家、金属工出身。一八八五年イギリス社会民主主義連盟に加入。

一八八九年ロンドン沖仲仕ストライキを指導。一八九三年独立労働党の創立に参加、同党書記長となる。一九〇一—〇八年、オーストラリアとニュージーランドで労働運動を指導。サンジカリズムに共鳴。第一次大戦中国際主義的立場にたつ。十月革命後イギリス労働者の反ソ干渉反対運動の組織者のひとり。イギリス共産党の創立（一九二〇年）以来の党員。一九二七年以後同党中央委員。国際労働運動の統一のためにたたかい、プロフィンテルンとコミンテルンの活動に参加。

ミリュコフ、ペ・エヌ（一八五九—一九四三）——カデット、ロシアの帝国主義ブルジョアジーのイデオローグ。一九〇二年から雑誌『オスヴォボジデーニエ』（『解放』）に協力。一九〇五年一〇月、カデット党創立者のひとり、同党中央委員会議長、中央機関紙『レーチ』編集者。第三、第四国会議員。二月革命後第一次臨時政府外相。同年八月コルニーロフ反乱に参画。十月革命後外国の武力干渉を組織。一九二一年以来新聞『ポスレードニエ・ノーヴォスチ』をパリで発行。

ミルラン、アレクサンドル（一八五九—一九四三）——フランスの政治家、反動的ブルジョア政府に入閣した最初の社会主義者。一九〇四年フランス社会党から除名され、独立社会党を創立。一九二〇—二四年フランス大統領。

メーリング、フランツ（一八四六—一九一九）——ドイツ社会民主党左派の指導者、理論家、歴史家、政治・文芸評論家、党理論機関誌『ノイエ・ツァイト』編集局員。マルクス、エンゲルス、ラサールの遺稿集を出版。『マルクス伝』『ドイツ社会民主党史』等を著述。その著作にはマルクス主義から逸脱した点もあったが、第二インタナショナル内の日和見主義、修正主義、カウツキー主義と積極的にたたかい、国際主義を擁護。スパルタクス団を指導し、ドイツ共産党の創立に尽力した。

モスト、ヨハン・ヨーゼフ（一八四六—一九〇六）——ドイツの社会民主主義者、のちに無政府主義者、製本工出身。一八七四—七八年国会議員。理論的にはデューリングを支持し、政治的には「行動による宣伝」という無政府主義的な考えを主張、個人的テロルを呼びかけ、一八八〇年に党から除名された。社会主義者取締法制定（一八七八年）後はじめロンドンに、のちに米国に亡命し、無政府主義新聞『フライハイト』（『自由』）を発行した。

モル、ヨーゼフ（一八一二—一八四九）——ケルンの時計工、義人同盟、共産主義者同盟のメンバー。一八四八—四九年ケルンを中心に活動。一八四九年バーデン＝プファルツの蜂起に参加して戦死。

ラサール、フェルディナンド（一八二五—一八六四）——ドイツの小ブルジョア社会主義者。一八六三年に全ドイツ労働者協会を創設、大衆的労働運動の基礎をすえたが、ビスマルクと結んで労働運動を絶対君主制支持の方向へ向けようとした。

ラーヂン、ベ　→クヌニャンツ、ベ・エム

ラファルグ、ポール（一八四二—一九一一）——国際労働運動のすぐれた活動家、フランス労働党の創立者のひとり、才能豊かな評論家、フランスにおける科学的共産主義の最初の継承者のひとり、マルクス、エンゲルスの親友、マルクスの次女ローラの夫。一八六六年から労働運動に参加。第一インタナショナルの会員となり、マルクスと身近に知り合い、マルクス主義者となる。パリ・コミューンにたいする南仏諸州の援助を組織。一八八〇年ゲードとともに労働党綱領を書く。第二インタナショナル内の日和見主義とたたかい、ロシアの最初のマルクス主義組織「労働解放」団の創立を祝い、の

ちボリシェヴィキに共鳴。マルクス主義とカント主義との〝総合〟をめざすベルンシュタイン主義を批判し、改良主義、修正主義とたたかったが、農民問題、民族問題、社会主義革命の課題の問題で誤りがあった。老齢になり革命運動に役だたなくなったと考えて、妻とともに自殺した。

ラーリン、ユ（ルーリエ、エム・ア）（一八八二—一九三二）——一九〇一年から革命運動に参加。メンシェヴィキに属し、土地公有化を主張。一九〇五年には「労働者大会」の構想を支持。反動期には露骨な解党主義者。一九一二年反党的八月ブロックの組織に参加。二月革命後、国際派メンシェヴィキを指導。一九一七年八月ボリシェヴィキに入党。十月革命後、メンシェヴィキ、エス・エルとの連立政府の組織を主張。のちに経済活動に移り、一九二〇—二一年最高輸送委員会副議長、ゴスプラン幹部会員。

ランゲ、フリードリヒ・アルベルト（一八二八—一八七五）——ドイツの新カント派哲学者、チューリヒ大学とマールブルク大学の教授。主著『唯物論史』（一八六六年）で「カントに帰れ」と主張。社会ダーウィン主義の立場にたち、人間社会に生物学の法則を適用し、マルサス人口論を支持した。

リカードド、デーヴィド（一七七二—一八二三）——イギリスのすぐれた経済学者。その著『経済学および課税の原理』（一八一七年）、『農業保護論』（一八二二年）等で古典派ブルジョア経済学を完成し、とくに労働価値説をはじめて体系的に発展させ、自由競争の原則を主張し、資本主義生産の発展を阻害するあらゆる制限の撤廃を要求した。マルクスは、『資本論』、『剰余価値学説史』等でリカードの理論的見解を批判した。

リープクネヒト、ヴィルヘルム（一八二六—一九〇〇）——ドイツおよび国際労働運動の著名な活動家、ドイツ社会民主党の創立者で指導者。第二インタナショナルの組織者。カールの父。一八四八年革命に参加したのちロンドンに亡命、そこでマルクス、エンゲルスと知り、その影響で社会主義者となる。一八七五年から死にいたるまで党中央委員、党機関紙『フォルヴェルツ』編集長。マルクス、エンゲルスは彼を高く評価したが、同時に日和見主義分子にたいする彼の調停主義的立場を批判した。

ルクセンブルク、ローザ（一八七一—一九一九）——国際労働運動のすぐれた活動家、第二インタナショナル左派の指導者のひとり、ポーランド社会民主主義運動の創始者のひとり。民族主義的偏向とたたかう。一八九七年以来ドイツの運動に参加し、ベルンシュタイン主義、ミルラン主義とたたかう。ワルシャワで第一次ロシア革命に参加。ロシア社会民主労働党第五回大会に出席し、ボリシェヴィキを支持。第一次大戦の当初から国際主義的立場にたち、スパルタクス団を創立。ユニウスの筆名で小冊子『社会民主主義の危機』を著述。ドイツの十一月革命後、ドイツ共産党創立大会を指導。一九一九年一月、シャイデマン政府に逮捕され、殺害された。レーニンは彼女を高く評価するとともに彼女の一連の誤り（党の役割、帝国主義、民族・植民地問題、農民問題、永続革命などについて）を批判した。

ルドリュ-ロラン、アレクサンドル・オギュスト（一八〇七—一八七四）——フランスの共和主義的小ブルジョア民主主義者、弁護士、新聞『レフォルム』編集者。一八四八年革命期には臨時政府内相、憲法制定議会と立法議会でモンターニュ派を指導。パリ労働者の六月蜂起の弾圧に参加。一八四九年から一八七〇年までイギリスに亡命。パリ・コミューンに敵対した。

ルナン、エルネスト（一八二三―一八八九）――フランスの観念論哲学者、宗教史家、多くのキリスト教史論、評伝を著述。

レオ一三世（一八一〇―一九〇三）――ローマ法王（在位一八七八―一九〇三）。ビスマルクの「文化闘争」を終わらせ、教会の「近代化」を企図。「社会労働問題にかんする回勅」を出し、労働運動との闘争を強め、カトリック政党の育成に努力。

ロジキン、エス・ヴェ（一八六八年生）――ゼムストヴォの医師、カデット左派、ヴャトカ県選出第一国会議員。トルドヴィキが第一国会に上程したいわゆる「三三人案」に署名した。

ロジコフ、エヌ・ア（一八六八―一九二七）――歴史学者、評論家。一時ボリシェヴィキに属したが、反動期には解党派の思想的指導者のひとり。二月革命後ブルジョア臨時政府の郵便・電信次官。十月革命に敵対し、ソヴェト政権と闘争。一九二二年メンシェヴィキと絶縁し、ソヴェト機関で学術・教育・行政業務に従事。ロシア史について一連の著作がある。

ローヂチェフ、エフ・イ（一八五六生）――地主、ゼムストヴォ活動家、法律家、カデット党中央委員。一九〇四―〇五年のゼムストヴォ大会に参加。全四期をつうじて国会議員。二月革命後、臨時政府のフィンランド問題担当コミサール（政府委員）。十月革命後、亡命。

レーニン10巻選集　（3）

1971年1月25日第1刷発行
1981年1月23日第13刷発行

定価1200円

訳　者© 日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

発行者　平　智　享

発行所　株式会社　大月書店　印刷　三晃印刷
製本　関山製本

〒113 東京都文京区本郷2-11-9 電話（813）4651 振替東京 3-16387